現代日本文學全集



尾崎紅葉集

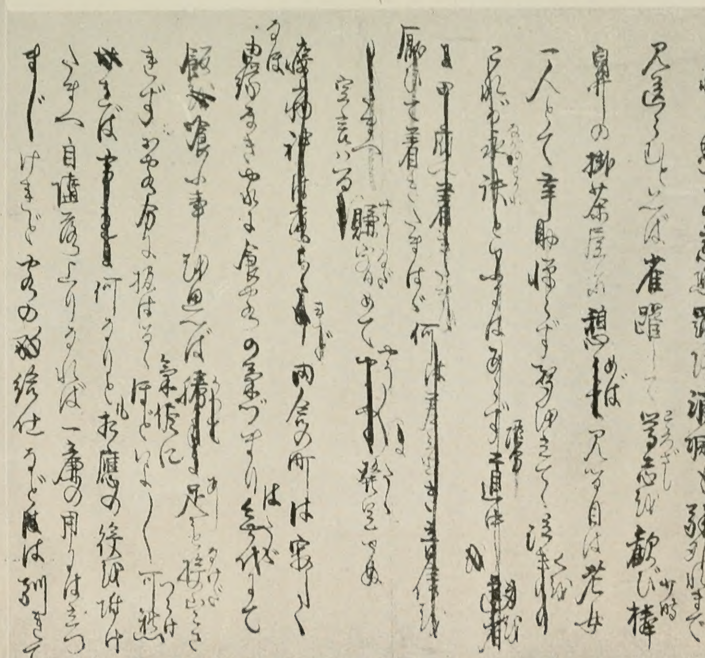
杉浦非水裝幀

尾崎紅葉集

改造社版

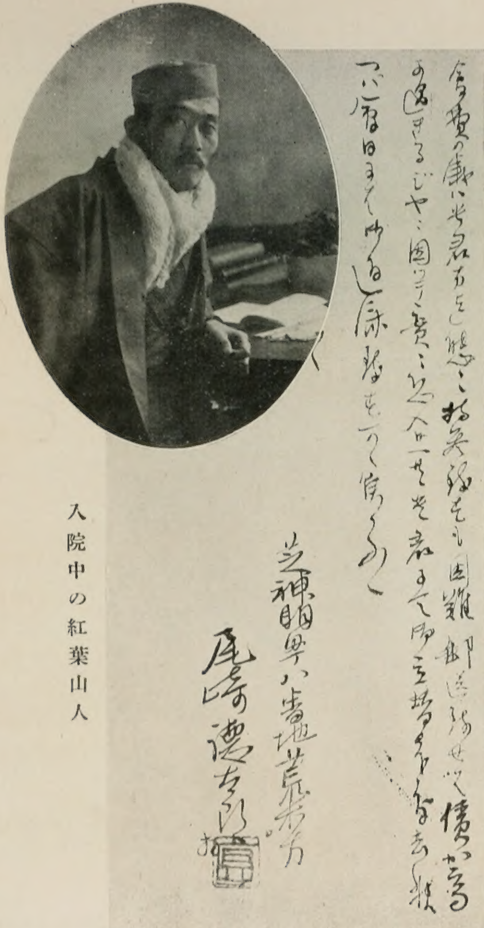


壮時の紅葉山人



（下）原稿筆跡（丸岡九華氏藏）

（左）書翰筆跡（丸岡九華氏に宛てたるもの、十六歳時の筆にかゝる）



入院中の紅葉山人

「尾崎紅葉集」目次

尾崎紅葉小傳

尾崎紅葉山人、名は德太郎、慶應三年十二月十六日、東京芝片門前に生れた。父は谷齋といひ、秀れた彫刻師であつた。早く母に別れ、幼より祖父の手によつて育てられ、小學を卒へて、三田英學塾に學んだが、其の頃既に性聰慧文才に長じて居た。明治十六年(十七歲)神田一ツ橋の大學豫備門に進み、明治二十年(二十一歲)帝國大學の法科に入つたが、僅か一年にして文科に移り、同じく一年にして、明治二十二年退學して了つた。

是より先、大學豫備門にあつた時、石橋思案、丸岡九華氏と相知り、共に「文友會」を興した。其の頃山人は三緣山に因んで緣山と號し、漢詩などをも作つて居た。

明治十八年二月に至り、山田美妙・石橋思案・丸岡九華氏等と共に「硯友社」を九段中坂の中途に創設し、文學の大旆を飜した。聲に應じて、川上眉山・巖谷小波・江見水蔭・廣津柳浪氏などが、加盟して來た。同年五月、機關雜誌「我樂多文庫」を創刊した。此の以前、加盟者中に巡覽せしめたものは、紅葉・美妙兩子の筆寫に係る半紙半葉を十數葉綴ぢた、小册

で、小説の處女作と見らるべきは、同誌第九號に掲げた「諺紫怒氣鉢巻」であつた。「我樂多文庫」の初號より、山人は雅俗折衷體を創造して、「風流京人形」を連載し、次第に文名が揚つた。

明治二十二年（二十三歳）一月、故理學士吉岡哲太郎氏の經營した吉岡書籍店から發行した「新著百種」の第一編として「二人比丘尼色懺悔」を公にした。是ぞ山人が最初の單行本で、開巻第一頁序文よりして、其の文章は、日本文壇に、全く山人が獨創した名文名作にして、世に一躍文壇の覇を稱するに至つたのである。

明治二十二年十二月、高田早苗氏の紹介で、讀賣新聞社に入社した。爾來「伽羅枕」「夏痩」より續いて、「多情多恨」「金色夜叉」に到る、多く同新聞に執筆したものである。且つ、本書所載の「二人女房」は雜誌「都の花」に連載した、山人がはじめて其の苦心に成る言文一致體の試錬であつて、此の口語體の語尾に（である）を用ゐて一世に範を示したのは、また山人の創意である。

明治二十四年（二十五歳）十月、樺島菊子と婚を結ぶ。

山人は創作の傍、師となり、父となり、親分となつて、門弟を養つた。門葉實に二十餘名、泉鏡花、小栗風葉、柳川春葉、徳田秋聲の四子の如き紅葉門下の四天王とさへ言はれたのである。

明治三十二年（三十三歳）頃より年壯なるに健康漸く勝れず、同三十四年（三十五歳）頃には、激く胃腸を惱み、當時讀賣新聞に連載中の「金色夜叉」も、休載の續く日が多くなつた。翌三十五年夏、遂に讀賣新聞社を辭し、十月二六新報に入つたが、健康ふたゝび舊の如くならず、同三十六年二月、大學病院で入澤博士により、あゝ、遂に胃癌の診斷を受けた。三月退院して、療養に努めたが、七月に入り病勢漸く進み、十月三十日夜十一時……年を享くる僅に三十七。

十二月二日青山の墓地に葬る。彩文院紅葉日崇居士。會葬する者二千人に及ぶ。辭世の句は「死なば秋露のひぬ間ぞ面白き」である。

夫人菊子との間に、二男三女がある。長男弓之助氏は生後僅に四五日にして夭し、「乳すてに出れば朧の月夜かな」夫人と、哀惜の句、人を泣かしむるものがある。二男夏彦氏家を繼ぎ（今年二十六歳）現に帝國大學の文科美術史科に在り。長女藤枝子は、大正十三年十一月三十一歳にて逝く。二女彌生子は海軍造兵少佐杉山金作氏に嫁ぎ、一男三女、三女三千代子は、海軍主計少佐横尾石夫氏に嫁ぎ、同じく一男三女を擧ぐ。家門の彌榮えに榮え行くのは、これまた山人が生前積徳のいたすところである。

○

紅葉

春

ほの〲と鶴を夢みて明の春
春の日の巡禮蝶に似たるかな
曉の鶯替へて來た袂かな

夏

青嵐尾上の鐘を繞りけり
人訪へば梅干して居る内儀哉
蚊帳の月美人の膝を閑却す

秋

星既に秋の眼を開きけり
二三里の妹許行くや露の中
芋蟲の雨を聽き居る葉裏哉

冬

年木樵る黄金の斧の切味よ
常綺羅や鯛味噌や市に小柴垣
誰が見てや木葉挾みし山家集

多情多恨（前編）

一

鷲見柳之助は其妻を亡つてはや二七日になる。去る者は日に疎しであるが、彼は此十四日をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては今朝のやうに、唯の今のやうにも思ふ。餘り思ひ窮めては、未だ生きてゐるやうにも想つてゐる。なるほど病の爲に果無くはなつた、氷のやうに冷えて、美しい目も固く瞑いだ、棺へも斂めたれば、葬送も出した、谷中の土に埋めて白木の位牌になつて了つて、現在此に在るからは、假でもなければ、夢でもなく、確に死ぬだに極つてゐる。如何にも其軀は葬られて、其形は滅したに疑ひは無いが、彼の胸の内には、その可愛い可愛い妻の樣子は歴然と生きてゐるのである。

柳之助は多く人を好かぬ、代には又多く人に好かれぬ性で、男では朋友の葉山誠哉、女では妻の類子、此二人の外には世界に柳之助の好いたものは無い。彼は多くの人を好く代に、唯此二人を好いたのであるから。その情の篤いことは夥しいもので、實に見苦しいほど其妻には惚れてゐた。

一も妻、二も妻、三も四も五も類で無くては柳之助の夜は明けなかつた、彼の同僚は（妻が）先生と仇名を付けたほどで、妻は彼の命であつたものを、彼は今その妻に死なれたのである。

然までに可愛がられた、大事がられた彼の妻は、決して然までに夫を思はなかつた。謂はゞ通一遍であつたけれども、柳之助は少しも不足に思はぬのみか、それが女子の性と信じてゐたのである。

例の同僚は嗤つた、鷲見は全力を擧げて其妻に惚れてゐるのだと。其通り、（全力を擧げて）とは嘲弄でない、適評であつた。適評ではない、事實であつた。

彼は今其妻に死別れた。則ち彼は第二の生命を奪れたのである。一日生家へ行つて見えなくても、直に顏色を惡くして鬱ぐほどの愛著は、一週間經てど、十日經てど、乃至は一月、一箇年、十年が百年經たうとも、到底二度とは其妻を見られぬに極つた失望を忍ぶには餘る。さては是非も前後も、分別も用捨も何も無く、一圖の悲歎に沈むで、泣くと悔むの外は殆ど世をも人をも身をも忘れた。我是ない子供のやうに、（お前は何故死んだ、死ぬことはならん。死ぬといふ法は無い。）と、死顏の枕を取つては、棺の前に坐つては、葬禮を摘つては、位牌を眺めては、寫眞を取出しては、聲こそ立てぬが、心の中では悶え〳〵て絶叫した。

悔むで復らぬ事、悲むで復らぬ事ぐらゐは、柳之助も知つてゐる。復らぬ事を復さう爲に泣き悔みもするのではないが、或點まで泣き且悔むだらば、隨分復る事との信仰を以て、泣きも悔みもするのではあるまいか、と想はるゝほど柳之助は取亂したのである。

その狂哀も漸く失めて、今は眞摯に其死を悲む涙が催して來る。諦められぬ、諦められぬ、諦められぬが、定命と諦めねばならぬ——諦めて見た。諦めては見たものゝ、一旦生死の手を分つたからは、類は二度と再び此世には歸らぬ人、これから長い〳〵一生涯も逢はれぬ、となつて見ると、その心細さ味氣無さは居ても起つても堪へられぬ。此二三日

は亦生効の無い者になつて、唯二件の事を思窮めてばかりゐる。
　一つは、可愛い可愛い妻の生前の事。二つには、此先何を楽に生きてゐやうと云ふ事、此の二件が渦になつて、間断無しに柳之助の胸の内を回轉してゐる。甚麼に考へたところが此先の楽は無い、ばかりか、現在今日生きてゐる空も無いのである、と云つて、豈死なれもせぬ、と云つて、憖ひ生殘つて物を思ふも辛い。思ふまいとしても、忘れやうとしても、寐れば夢を見る、起きてゐれば、唯其事が紛々と胸に集る。
「呀、酒でも飲まう！」
　と柳之助は慣れたさうに目を瞑つて首を掉つたが、直に置火燵から身を伸して、床の間の喚鈴を鳴したまゝ、内向に手枕をして了ふ。徐に階子を踏むで、物柔さうな四十恰好の婢が昇つて來て、
「御用でございますか。」
　と座敷の紙門を啓けると、柳之助は俛いたまゝで、
「酒を一つ買つて來てくれ。」
　その力無げに仆れてゐる體を老婢は怪むで、
「どうぞ爲さいましたか。」
　と體を差入れる。
「可いから早く買つて來て。」　と彼はなほ顔を擧げぬ。
「はい、はい。麥酒ならお内にございますが、やつぱり御酒の方が宜うございますか。」
「麥酒でも管はん、早く持つて來てくれ。」
　老婢は慌忙しく下りて行く。その跫音と倶に一陣の風は颼と梢を鳴して吹靡くる時雨に北窓の障子は氣立ましい音をして倏忽瀼々濡になるのを、柳之助は纔に首を擧げて見たが、又俯いて了ふ。
　空は一面に微暗くなつて、雨は一時劇しく降出す。襟許から蕭々と惡寒くなるのに、火燵の火さへ消えかゝるので、横になつてもゐられず、物臭さうに起上つて、急に暗くなつた家の内を、何と云ふ事は無しに惘然眴してゐる。爾時老婢は蝋色の圓盆に、鉢に鷄子を三つ容れて、醤油注に小皿、小蓋物に箸箱、コップ等を載せて、片手には櫻田麥酒の栓を拔いたのを挈げて入つて來る。
「お火燵にお火はございますか。何だか又寒くなつて參りました。」
「あゝ、火を少し貰はうか。」
　と其處に置いた盆を引寄せて、コップを把ると、恐多さうに老婢が酌をするのを、何と思つたか一寸見て柳之助は直に横を向く。それを見付けると、老婢は忽ち點々と涙を零した。柳之助は又其を見るとコップを持つたまゝ俯いて、滴々と涙を落す。老婢は壜を下に置くと、袂から鼻紙を出して頻に泣き始めた。
　柳之助はコップを半分ばかりを一息に嚼了けて、
「元、寂しいな。」　と故と元氣好く言懸ければ、
「御尤でございます。」　と元は益泣く。
　此挨拶では不足らしく、
「あゝ、寂しいよ、寂しくて可かん。」
　と重ねて訴へたが、急來る涙を防がう爲に、傾れる酒を又一息に呷と飲むで、
「もう一盃。」
　此酌に就いて彼は考へたのである。お茶一つ上るのでも、奧様の御手からでなくば御承知の無かつた旦那様が、元のお酌で上るのみか、注げと有仰る。噫何と御傷しい。何ならば（嫗さん）を呼べと有仰るのであるけれど、その奧様は御在なさらない。お寂しいとは御尤だ、と老の泪にいとゞ脆かつたが、やがて忙しく目を拭いて、洟を去むで、もう泣くまいと覺悟し

たやうに紙を袂に入れて了つて、

「それに今日は姻家の奥様も御歸になつたものですから、急に台所の事お寂しうございます。」

と盆の物を按排して、鷄子を割つて其へ出しながら、

「何も御肴がございませんので。本當に御精進なのでございますけれど、姻家の奥様が其には及ばないと有仰つて、此間から旦那様だけには御魚や肉を差上げて居りますのですから、お鷄子も宜うございませう。」

「あゝ、それぢや何か、姻家の家母様やお前は精進なのか。」

「はい。」　と老婢は又少し萎れる。

「然うか。」　と頭を搔いて、

「些とも氣が着かなんだ。」

「いゝえ、旦那様はお宜うございます。」

「いや、俺も其ぢや精進にしやう。」

「然うでございますか。それはまあ何方かと申せば、御精進の方が。」

「佛の爲だな。」

「然やうでございますとも。」

と其所嬉さに老婢は又涙を誘はれる。

「噫、もう佛に成つて了つた！」

堪りかねて柳之助は水でも飲むやうに一盃の麥酒を盡して、ほうと息を吐く。老婢は起つて火を持つて來て見ると、柳之助は目を閉ぢて、壁に靠れて、少しは醉つたやうな、多くは物を思ふやうな態で、瞢然としてゐる。

元は火鉢の始末をして、盆などを片寄せて、起たうとすると、主は彿と目を開いて、

「何時かな。」

その倚つてゐる壁に時計の掛けてあるのを老婢は見て、

「四時七分前でございます。」

「これから一寸墓詣に行つて來やうかな。」

と柳之助は障子の硝子越に外面を眺める。元は有繁に驚いた。如何な事でも一日に二度も墓詣をするものがあらうか。今日は一七日であるから、朝の内に谷中まで詣つて來たばかりである。それも近い所では無し、まして雨は降る、日は暮れる、これから如何なさらうといふのか、と其氣色をば候つたが、随分出掛もしさうな様子。

柳之助の身になつたらば、懷しい〳〵遺骸の眠つてゐる所は、目に見えぬ魂魄の彷留る屋根の下よりは、追慕の渇を醫するに疑無い。彼の墓詣をせうと云ふのは、生きてゐる人を尋ねると同じ意で、戀しさに堪へかねたればこそである。

然う考へたらば、別に不思議は無い。老婢も然うとは考へたのであるが、極めて不思議に思つた、或は變に思つた、些と氣が如何かしたのではあるまいかと思つた、然う思ふと、何と無く可恐いやうな、心細いやうな、途方に暮れたが、左も右も留めるより外に法は無いと思案して、

「もう今日はお遲うございますから、明朝になさいまし。」

「遲くても可いさ。」

「それでも、今朝もう一度御詣をなすつたのぢやございませんか。親度に一時に幾度も行らつしやらなくつても、日に一度づゝで繁々の方が却つて佛様は御喜びでございますよ。」

「然うかな。」　と柳之助は稍折れる。

「これから御詣をなさいます代に、御佛前へいらしつて、御線香を多度お供げ遊ばしましな。」

子供が言聞かされたやうに、柳之助は悄々と頷いた。墓詣は思止つた様子に、老婢は胸を安むじて、

「私も御同向を致しますから、いらつしやいまし。」

日暮に薄る空模様は雨の爲にいとゞ暗くなつ

て、製造場の汽笛が曇つた聲で泣くやうに聞える。彼は曳入れられるやうに寂寥を感じて、噫、今夜も此寒い、陰氣な二階に燈火と相對で居なければならぬか。居られるものではないと思ふと、柳之助は我知れず衝と起つた。

起つた所で何處へ行くのである？　此が自分の住居であれば、何處へ行つたとて、（類さん）は居ない。我家であれば、依然此に居るのだ、と座敷中を詢したが、如何しても居る氣が無い。起つて見ると、もう坐る氣も出ぬ。

例ならばランプを持つて昇つて來る時分だ。晩飯の支度をするので、元と呼ぶ聲が聞える時分だ。ランプを持つて來ぬ、元と呼ぶ聲もせぬ、吁寂しい、寂しい。と柳之助は堪へかねて、二間の座敷を往來してゐたが、其でも堪へかねて、竟に階子を下りた。

「元、元！」

と呼びながら玄關の方へ出る。老婢は臺所から駈けて來ると、

「傘を出してくれ。」

と言つたばかりで、焦躁しながら考へ事をしてゐる眼色。元は前垂で濡手を拭き〳〵、

「何方へ行らつしやいます。」

と其擧動を見てゐる。

「一寸其處まで。」　と極めて胡亂に答へる。

「御出掛でございますか。唯今お線香を供げると有仰いましたのに、急に如何爲すつたのでございます。」

恨めしさうに元に視られて、少し面目無かつたか、

「やつぱり一寸行つて來る。どうも氣が濟まんから。」

「御墓詣でございますか。」

柳之助は唯頷いて座敷の内を例の運動してゐる、心では此墓參を異變なものと思ひながら、氣が濟まぬゆゑに行つても見たいのを、如何したものであらうと分別しかねてゐるらしく。

老婢は彌々氣味惡く思つて、之は飽くまでも出しては好くないと、氣に障らぬやうに種々と留めた。留められて見ると、有繫に其に理があるので、振捥つてまでも出やうとは爲ぬけれども、又滿足して思止ることも出來ぬので、益烈しく座敷中を往きつ還りつしてゐる。

二

此時格子の外に人力車が駐つたので、柳之助は慌てゝ玄關に駈出ると、美しい蠟塗の車は軛を支いて、氣凛と雨具に身を固めた車夫が背面になつて、前桐油を外してゐる。

車の音を聞いた時に、柳之助は不圖類さんが生家から歸つて來たのかと想つた。そこで駈出したのであるが、車を見ると、然で無いのを覺つた。見覺えのある此車は友人の葉山誠哉。あゝ、葉山が來てくれた、と嬉しいやうな、頼もしいやうな、それにも胸が逼つて又涙が出る。

「おや、葉山樣が入らつしやいました。好い所へまあ。」

と老婢は頻に喜ぶ。

葉山は霜降の厚羅紗の外套を着て、全然と頭巾を被つて、小豆色の爪革を掛けた新しい足駄で、細骨の蛇の目を擎げながら、

「あゝ酷い降だ。」　と急いで格子の内に入る。

「此御天氣に好くまあ。」

と老婢は急遽起ちかゝつて外套を脫がせる。

柳之助は惝然した顏の、氣の無い聲で、

「さあ上りたまへ。」

客と主は連立つて二階へ通る。迹には老婢が車夫に向つて頻に愛想を言ふのが聞えた。

葉山は座敷へ入ると直に、

「おや、麥酒かい、酒落てゐるぢやないか。豪氣だね、火燵は。」

と衝と入つて、
「あゝ寒い、寒い。」と肩を搖る。
性來の無愛相が、憂に心を奪はれてゐるのであるから、柳之助の樣子と云ふものは、無い！　可厭な奴が來たと謂はぬばかりである。けれども心の中はなか〳〵嬉しいので、
「此方へ來たまへな。」
と壁際の自分の席を指すと、
「何有、此で可い、其代一盃戴かうか。今日は御見舞に來たのだ、然う〳〵、持つて來たものがあつた。」
葉山は手を鳴して、
「車の中の包を。」と老婢に命じた。
元はやがて定紋付の萌黃絹の袱紗包と、重筥らしい包とを持つて來て、葉山の前に差置いて起たうとするのを、
「一寸待つて下さい。」と袱紗の包を解いて、
「之を御佛前へ。」
西洋林檎を一籠と蒸菓子が一折、鳩居堂の線香を一箱添へて、蒔繪の盆に載せたまゝ其へ出す。
「おやまあ、御見事な、まあ。」
と元は急に手も出さずに眺めてゐたが、
「旦那樣、御覽遊ばしまし。」
と其方へ差向ければ、柳之助は頷いたばかり。物馴れた老婢は主人に成代つて百方禮を述べて、
「どれ、御覽に入れて參りませう。」
と起ちかければ、
「それから未だお重だ。これは御菜です。何か旨い物を持つて來やうと思つたけれど、此際の事だから遠慮をして、椎茸、干瓢の類さ。尤も代物は精進だけれど、少しは味に如何樣がしてあるかも知れませんよ。」
と笑ひながら包ごと元の方に推遣る。
「それは、まあ何から何まで、難有う存じます。お蔭樣で私も大助りでございます。旦那樣、又お重を戴きました。」
「それは難有う。」
と柳之助はやう〳〵禮を言ふ。
葉山は手焙を引寄せて、葉卷の細卷を吃しながら、柳之助の又思出してか、俯いてゐるのをじろり〳〵と視て、何と慰めたものであらうと思案をしてゐると、柳之助は左の袂から手巾を一握出した。而して隅の方へ投遣ると、其が三つになつて轉がる。今度は右から又二つ引張出した。それをも投出して了つて、袖で目を擦る。
葉山は驚いて見てゐたが、
「何だ、あの手巾は？」
「どうも涙が出て困る。」
「那は悉皆濡れてゐるのかい、なるほど瞼が腫太くなつて、太く目が赤いと思つた。さあ之を貸さう。」と綾絹の白の手巾を火燵の上に出せば、芬と香水が匂ふ。
「好い香がするね、妻が能く言つたつけ、君が來ると好い香がするつて。」
「否味だと言つたのだらう。」
「君も知つとるけれど、妻は決して惡口を言はんかつたよ。特に君に對しちや、何だ、非常に信用して居つたから。」
生前でさへ妻の事を說く柳之助である、まして今日では、其噂を始めたら底止はあるまい。其は可いが、餘り思はせて泣かせるのは健康の爲に好くない、故に慰藉に來たのと思へば、葉山は故と話頭を轉じて、
「時に。」と言出した。
柳之助の胸の內は、はや妻の事に就いて萬感が滿ちてゐるので、何から話出して可いやら、それにのみ氣を奪られて、他の言は、耳にも入らぬ。
「實に恁云ふ時に妻が居つたら御馳走をするの

だけれど、居らん、妻は居らん。」
と好い香のする手巾を把つて、柳之助はさしぐむ涙を拭ふ。
「然しね。」　と葉山は又言出すと、
「然し、居らんやうな心地はせんよ、死んだとは思はれんよ。」
「それは尤だ。然し……。」
「何故死んだかと思ふと、妻は實際僕を愛して居らんかつたかと思ふよ。」
「那麼無理な事があるものか。」
「あゝ、それは無理かも知れぬ、無理だらう、無理だつた、全く無理だつた。」
彼は最愛の妻の氣に障つた事を不圖言つて、その不機嫌を見て、遽に詫成すやうに、詫でもするやうに、頻に斷つた、固より無理などを言ふ意ではなかつた、思餘つて不知口走つたのであるが、無理と定められて見れば、無理であると心着いたので。すると、（類さん）の艴然とした面影が胸に浮むだのである。最愛の妻の面影は始終眼前には漂てゐるが、それが忽ち不興の眼色をして怨めしさうに見たのである。
柳之助は濟まぬと思つた、無理である、と頻に詫びた。けれども心は落着かぬ、即ち幻の面影は其色を和かぬのである。耐りかねて柳之助は、
「妻はね、妻は……。」
と言出したが、さて何と言つたものやら、有繋に窮つたのである。
「妻は君も能く言つたけれど、非常に客を喜んでね、僕とは違つて愛想が好かつた。」
とは言つたが、是では未だ其不興を釋くには足らぬと思つた。然し早速に言ふべき事が出なかつたので、姑く考へてゐたが、何を思出したか又涙ぐむで了ふ。
「時に、君は學校の方は如何した？」
と葉山は持扱つてゐた（時に）をやう〳〵用立てる。
「學校？　學校なんぞは管はん、もう否だ。」
苦い顔をして柳之助は頭を掉る。
鷲見柳之助は大學の地質學専科を卒業して、今は東京物理學院の教授を勉めてゐるのであるが、勤勉であり、懇切であり、而も十分に實力のある所から、學院の氣受も生徒の信用も極めて好い、慾には試驗の點が少し辛いと云ふ噂の外に、此人に對する非難の聲は全く無い。學院では實に難有い大事の人になつてゐるのである。
「管はぬたつて、然うは行かないぢやないか、自分の職業ぢやないか。餘り長く退いてゐたら、學校の方で差支へるだらう。」
「差支へても管はん。」
「那麼自棄を言つちや困るね。もう少し休むだら出る方が可いよ、獨で引籠つて居るよりは却つて氣が霽れるから。」
「唉もう何を爲るのも否だ、何も出來は爲んよ。實際僕は生きとる樂が無いのだ。生きて居らうとは思はんよ。」
葉山は手酌の麥酒を一口飮むで、
「困つたもんだ。」
と櫓の上へどつさりと靠れる。
「僕は實に寂しくて可かん。君、それは實に寂しいものだよ。それに這麼雨の降る日などは、如何しやうかと思ふやうだ。何處へ行つても家中線香の氣がして、其が實に耐らんね。恁云ふ心地で一月も居つたら僕は屹と病氣をする、病氣をしても看病する者は無し、慰めてくれる者は無し、一日だつて僕は寐てゐられやせん。設然うなつたら如何せうかと思ふと、實に心細い。今でさへ這麼心地なのだから、あゝ否だ、否だ！」
惣毛竪つたやうに柳之助は身顫ひをする。
「那麼事迄考へた日には際限が無い。どうも今

更爲方も無い、何も天命と思切る外は無いのだ。」
「僕は到底思切れんよ。」
「思切れんと云つたつて……。」
「だつて、思切れんぢやないか、僕の身になつて見給へな。君は殘酷だ。」
「殘酷は違いね、君が何程思切れないと云つた所で、お孃さん樣が生返るぢやなからう。」
「おや思切つたら生返るか。」
と柳之助は急立つた氣色。
「又那麼無理を言ふよ。君の心は十分察してゐるわね。けれども哀むで傷らずだよ。君は細君の爲に體を毀しても苦しくないのだね。」
返答に窮へてゐる間に葉山はコップの酒を飲盡して、更に一盃を注がうとすると、半分よりは無い。
「麥酒はもう無いかい。」
「無けりや買はう。」
と喚鈴を鳴して元に閉けば、愛許もあると、又一本口を拔いて來る。
「まあ一盃飲むで、もう那麼話は止さうよ。」
と葉山は一つ差した。
「僕の[illegible]より此話[illegible]可いのだから、もつと爲てくれ給へ。」
「可けないよ、[illegible]へ[illegible]嘆いてゐる所へ持つて來て、又其話をしたら愈泣かせるのだ。不吉な話は止さう。」
「不吉とは? 君……。」
柳之助は口へ持つて行つたコップを控へて、屹となる。
「いや、惡かつた。私は今日は君が獨で寂しからうと思つて、見舞に來たのだ。然し一々言ふ事が君の感情を害すやうで、誠に濟まない。御迷惑だらうから私は是で御暇をする。」
身繕をして、葉山は起たうとする、其袖を柳之助は緊と捉へた。
「あゝ、惡かつた、僕が惡かつた。言過ぎたよ、免してくれ給へ。實際不吉に違無いのだ。」
苦に柳之助は詫びる。
「それぢや然云ふ話は止すかい。」
と未だ立膝をして羽織の紐を正してゐる。
「止す、止す。」
と片手に葉山の袂を捉へながら、慌てゝコップを空けて、
「さあ一盃、一盃飲むでくれたまへ。」と突付ける。
此子供らしい所が葉山の柳之助に惚れてゐる所で。彼が他の思はくをも管はず、直に(妻が)と言ふのも、不吉と言はれて、今腹を立つたのも、皆此子供らしさからである。
「那麼話は止すと云ふなら。」
と恩がましくコップを受けて葉山は又火燵に入る。
「まあ居てくれたまへ。君に往かれて了ふと僕は孤獨だ。」
盃を差して置きながら、酌をするのは忘れて、蒲團に膝を擦付けて柳之助は又鬱ぎ出す。
遊び相手になつてゐたら、漸々思出させるばかりと、葉山は不如戯弄して了ふ氣で、
「おい御酌は?」
「や、忘れた。」
と慌忙しく罎を取つて注ぐと、たらりと一雫ほど。兩個は思はず顏を見合せる。
「何だな、罎が違つてゐるよ。」
柳之助は濟したもので罎を替へて酌をする。
滾々と出る酒を見ながら葉山は少しく氣を帶びて、
「有る酒ならば恁うして出る、ねえ能く見つ」
と泡を吹く酒と柳之助の顏とを等分に見較べる。妙な事を言ふと思つて柳之助はおのれの手許を見い〳〵、葉山の顏を眺める。
「ねえ、無い酒は出ない、君は酒の無い罎で、酌をすることは出來ないと云ふ事を知つてゐるか

やないか。」
「それが……？」
と柳之助は怪訝な顔をする。
「それがさ、無い事も亡い人も同じ事だらう。だから、餘り然う快々思はないが可いと云ふのさ。」と一口附けて、
「肴をくれたまへな、その鷄子を。君が手づから割つてくれるのさ。」
一つ取つて皿の縁へ抵てやらうとして、柳之助は一寸控へた。
「何を考へてゐるのだ。」
「僕は今日から精進なんだからな。」
「君は精進でも、私が戴くのだから可からう。然し精進は解つたが、今日からとは解せないね、今日からとは如何いふ理だ。」
「もう可いよ、可いよ。」
と一思に勢然と皿の縁へ打着ける。
「然うだ、然うだ。下地を注けて、あつ、那麼に注けて……如何するのだ。さあ〱此方へ貸した。鷄子をもう一個……辛さうだから埋めるのさ。それから盆を、後が寂しだ。」
葉山は之を橋の上で好いやうに鹽梅するのを、漫然と視てゐたが、
「君は好いな、一寸那麼事も上手にやる。僕は全く出來んのだ。悉皆妻にしてもらつとつたのだ。その妻がもう居らんのだ。吁、困つたなあ。」
口頭に出したのは纔に如此耳であるが、胸の中には千萬無量の思が紛亂したので、彼は蒲團に額を推着け、擦着けて悶えた。
葉山は餘りの樣子に手を着けかねて、姑く默つて視てゐると、柳之助は急に顔を擧得なかつた。いつまでも視てゐれば、いつまでも擧げぬので、
「其話は止すと云つたぢやないか。」
それでも柳之助は仍顔を擧げぬ。
「さあ、もう好加減にしないかよ。」
と肩先を輕く揺けば、やう〱擧げた顔は、洗つたやうに涙に浸されてゐる。
「如何かならんかな。僕はもう耐らん、不愉快で。這麼不愉快な事は無い。如何しても慰められん不愉快だ。僕は今迄は甚麼不愉快な事があつても、妻の爲に慰められたのだ。僕は其妻を亡つて了つた。今朝墓詣をしたのだ。實に君、夢だね、赤土の土饅頭に一本の墓標が立つとるばかりで、雨が寂しく降つとるのだ。君、之を見てくれたまへ。」
例の絹の手巾で半面を掩へながら、柳之助は本箱の上にある雲州燒の小さな瓢形の一輪挿を指す。葉山は見た。染垂れた山茶花の半開が一輪横向になつて挿してある。
「君、是だよ。」
と柳之助は火燵から這出て、横向になつてゐるのを正面に正さうとしたが、枝が曲つてゐるので、如何しても外方へ振つて了ふ。花入の方でやう〱鹽梅をして此方を向かせて、
「この山茶花だよ、好いだらう。」
何が好いのだか、葉山には少しも解らぬ。
「君、好いだらう、好いと言つてやつてくれ給へ。」
「又思出したのかい。」
困り果てた所爲事無しに葉山は麥酒を飲む。
「妻は一體賑かなのが好きだつたに、寂しい森の中で雨に降られて、唯一人埋まつとるぢやないか。僕は實に胸が一杯になつて如何することも出來んかつた。而すると、姻家の母がね、此花を見付けて僕に教へたのだ。垣の隅を見ると、此花が唯一朶咲いとるのだね、君、其木に唯一朶なのだよ。母が言ふには、是は類の魂だ。類の思が遺つて花になつて咲いたのだ。類の大好の長襦袢には山茶花の模樣が着いとつたから、是は類の魂に違無い、と言つて泣くのだ。僕

も見ると、丁度此方を向いて此花が咲いとるのだ。變な事を言ふやうだけれど、其時は此花が實際類の顏に見えたよ。風が來て動くのだ、獨お藥を飲むのは否だと言つてね、首を掉つたやうだつた。僕は其時は妻が復活つたのかと想つた。考へて見れば妻は僕等の脚の下に埋まつとるのだ、是は山茶花なのだ。妻の母は紙を出して、泣きながら此花を拭いとるのだ。何を爲るのかと聞いたら、君、親子だね……。」

柳之助は咽返つて語が續かぬ。葉山は茫然酒を飲むでゐる。

「母親の言ふには、雨が灑つて冷たさうだから少し拭いてやる、と君、自分の濡れるのも知らずに熱心に拭いてやつとるぢやないか。而して此花を全然鼻紙で裹むで了つた。那麼事をするものだから僕は猶悲しい、這麼所に獨で置くのは可哀さうだから、內へ持つて行かうと言ふと、それぢや一緒に連れて行つてくれつてね、折つて僕に渡したのだ。君、此花だよ。あゝ、君の方を向いとるよ。」

柳之助は壁に頭を撫當てゝ泣出した。餘り愚痴とは思ひながら、淺々哀に搔口說かれて、葉山も誘はれ氣味の稍胸逼る。

「もう言はないが可い、いつまで言つたつて所爲が無い。」

と鼻聲になつて額を撫廻す。

「言はしてくれたまへ。言はずに思つとるのはなほ不愉快だ。言つとれば多少氣が霽れるから。」

「それぢや此方が窮るよ。」

「君は窮つたつて、僕が窮つとるほど窮りはすまい。」

と柳之助は涙を拂つて問懸ける。

「然うどうも理窟を言はれちや困るね。」

「然し、君は僕が這麼に思つとるのに、少しも僕を可哀だと思つてくれんのだ。君は平氣でをるのだ。妻は君を兄のやうに思つとつたのに、君は妻が亡くなつても、悲しいとも何とも思つてくれんのだ。君は然云ふ不實な人物とは思はんだつた。類の爲に眞實泣くものは、類の母親と僕と二人限だ。君は類の死んだのを悲しいと思つてくれんかね、僕は悲しい、這麼悲しいことは覺えない。」

柳之助は潸々と泣く。其體は如何にも可哀であるが、葉山は寧ろ首を傾けた。ちと逆上てゐるのではあるまいかと考へると、誘はれた涙は遏つて、葉山は憮然としたのである。

「それぢや如何すれば可いのさ。もう其話は止すと言つたから、私は歸るのを又居たのだ。然すりや又其話を始めて、畢句の果は私を攻擊するのだ。惡いことは言はない、然う思做めてばかり居ては體が耐らないから、努めて氣の紛れるやうに工夫をしたまへ。第一內にばかり引込むでゐるのが好くない、些と出掛けたまへ。」

「それが既に不實だ。死んだものは爲方が無いから、忘れて了へ、思ふなと云ふのは、殘酷ぢやないか、僕は死んだから思ふのだ。思つたから如何なる、泣いたから如何なるか、那麼卑劣な、目的などは有つとる理のものぢやない。君は僕より年長だし、經驗にも富むどるし、世間にも通じとるから、僕の考へてゐる所は或は僻してをるだらう、君の社會的の目から見たら全然子供だらう。君の言ふ所は世間の行ふ所なのだらう。君は世間を以て僕を責めるのだ。僕は世間を知らん。けれども幸ひに僕の心には世間と云ふものに曇せられん一片の誠がある。其誠がある爲に僕は忘れられんのだ。からして忘れられんのは、決して愧づべき事ではないと思ふ。」

「誰も愧づべき事だとも何とも言ひはしないよ。」

「言はんけれど君は愧づる方だらう。」

「えゝ、もう、何方でも宜しきやうに願ひませう。」

と言つた限で、其後は柳之助が何と言はうが、見向もせずに、ぐびり〳〵と獨飲むでゐる。柳之助ははゝと思つて、

「君、腹を立つたのか。」

葉山は坦然として、

「あゝ腹を立つたよ。」

「僕は言過ぎたかね。」

「あゝ言過ぎたよ。」

「免してくれ給へ、ねえ。」

彼は無雜作に例の子供のやうに過を悔ゆる。

「宜い、君は僕を不實だと言ひました。」

「だから言過ぎたと言つて謝るのだ、免してくれ給へ。」

「君は成程細君は可愛いけれど、朋友などの事は何とも思はないのだね。宜い、解つた。」

「那麼事があるものか、那麼事は無い。」

「それなら朋友の言ふ事も用ゐたが可いぢやないか。」

「無論用ゐるさ。」

「用ゐるね。屹度用ゐるね。」

餘り念を推れるので、如何なる事かと柳之助は覺束なく思ひながら、

「用ゐる。用ゐる。」

と言ひは言つたが、さて何を言はれるか、と氣遣はしげに葉山の顏を視てゐる。

「外の事でもないがね、内にばかり引込むでゐるのは好くないから、本當にちと出掛けたまへ。」

「何處へ？」

「まづ學校へ行くのは一番好いが……。」

「未だ頭が亂れとるから、それは可かんよ。」

「それでは、僕の家へ來たまへ、遊びに來るのだ。御馳走するよ。出掛けた方が氣が霽れて甚麼に好いか知れやしない。氣も進まなからうけれど、まあ瞞されたと思つて來て見給へよ。屹と來るかい、宜いかい、來るね。」

柳之助は熟と思案してゐる。

「如何したのさ。別に考へるほどの事は無からうぢやないか。内に引込むでゐるよりは氣が霽れるよ。明日は休日で、私も一日内に居るから、朝から來たまへ。何を那麼に考へてゐるのだらう。」

太く考へてゐるのが葉山には解らなかつた。

尤も何事にも直に考へるのが此人の癖ではあるが、己を信ずる唯一人の葉山の云ふ事は、常に自分の了簡よりも信ずるほどであるから、葉山が右といへば右、左といへば左、つい應と言はぬことは無いのである。今日に限つて、何故か考へるにも當らぬ事を太く考へる。なるほど葉山には解らなかつた。

けれども、是は仔細も無い事で、例の細君の死を悲む餘、何を爲るのも氣が無いので、外へも出たくはないのであらう、と恁う判じたから、猶更勸めて、否應無しに引出さうと考へたのである。

利發の葉山も是ばかりは踏違へてゐた。なるほど柳之助は何を爲るのも憂いのである。外へ出る氣も無いのである。然し、彼はその最愛の妻を亡つた、女に於ける唯一人の所好を無くしたのであれば、此上は其心を慰むるには、男に於ける唯一人の所好を恃まねばならぬ、その葉山が深切に云ふ事をば、如何にしても背かう道理が無い。葉山が強ひて言ふならば、隨分學校へも出るのである。掃憂とならば葉山と連立つて何處へでも行くのである。

然し、葉山の家へばかりは、柳之助の思案する理がある。それは自分と地下の類との他に知るものは無い。さすがの葉山も之を知らぬ。知らぬのではない、知らせぬのである。知らせぬのではない、知らせることが出來ぬのである。

知られては一大事なのである。
　我家へ来いと切に勧めらるゝのは、恰も此頃一大事と衝突したので、何事にも直に考へる柳之助は、此際人、考へねばならぬのである。と云ふのは、柳之助は葉山の内脊が大の嫌で、彼は固より多数の人を虫が好かぬその中でも、最も好いてゐる人の妻を最も好かぬのである。其好かぬと云ふに就ては、何等の原因も理由も無い、其処が所謂虫が好かぬので、自分の兄とも頼む人の内脊、其を好かぬではならぬ、と柳之助は常に考へる。それで、先方から己を疎みでもするのかと云へば、気も無い、葉山同様に實を盡してくれる。其人をば何故に自分は嫌ふのか、と柳之助は始終心に訊ねて見るが、一向理窟は無い。
　葉山の内脊と云ふのは、美人ではないが、目鼻立の揃つた、色白の身材の纖細とした、閑雅な、奥様らしい様子の人物、若し其短所を挙げたらば、少し寂しくて、無人相で、何を為るにも極めて不熱心のやうに見える。然かと云つて萬更義務でしてゐるとも見えぬが、進むで為てゐるとは猶のこと見えぬ。萬事が機械的で、韵致といふものが無い。恰も其容貌の整つてゐながら何の趣も無いのと、能く一致してゐる。

　那云ふ女と能く添つて居られたものだ、と柳之助は常に思ふ。別して、(むづかしや)の葉山が能く、彼で満足をしてゐると、其も亦一件の不審にしてゐる。
　凡そ女子と云ふものは、柔に温であるべきものである、と彼は信じてゐる。(類さん)は十分に柔に温であつた。然るに葉山のお種様は鑽石細工のやうに、硬くて冷たい。自分の最も好いてゐる者と正反對であるだけに、虫が好かぬのであるか、と柳之助は考へもした。
　葉山には所謂焦れてゐるほどであるから、毎日でも逢ひたいのである。お種様を見なければならぬのが否さに、控へに控へて、三度行く所も一度にしてゐる。それでも一週に二度は缺かさず尋ねて行く。其通り随分足が近いから、気の着く葉山でも此内秘ばかりは知らずにゐる。
　妻には限らず兩個の居る所に他が来ると、気先を折られたやうな調子で、柳之助は必ず悄るので、自分と(類さん)との外には打解けたことの無い男であるから、自分の外は内脊にも気を置くものと葉山は考へて、可成妻をも近けぬやうにしてゐる。
　折々お種様が少し親くしかけると悄る。嫌であるから悄るのであるが、葉山は然うとは知らぬから、此男の癖で、我妻も此人には他人であると諦めて、格別咎めもせぬのであるが、焉んぞ知らむ、多くの他人よりも此お種様を彼は一倍好かぬのである。
　常ならば柳之助も言はるゝまゝに出掛けるのである。今は此悲哀歎息の心を拒けて、虫の好かぬ人の所へ行かうとは思はなかつた。けれども葉山は常より熱心に誘ふ。因で柳之助は思案に暮れたのである。
　段々責められて見ると、如何あつても否むべき理が無いので、進まぬながらも柳之助は承知をした。其を機に葉山は起たうとする、柳之助は如何しても還さぬ。切つて還ると言へば、泣出しさうな顔をして寂しがる、其をば捨てゝ還るも気の毒さに、出た火燵へ又入る。又有間して又還ると言へば又引留める。葉山は逆はずに二度まで引留められた。三度四度と大概三十分毎に還らうとすれば、斟酌無しに柳之助は左右放さうとせぬ。到頭九時になる。此分では十時が十一時になつても放すまいと察たので、葉山は酒がもつと欲いと言出した。柳之助は早速註文通り日本酒を取寄せて出すと、葉山は飲むでは差し、飲むでは差し、無性に差した。

「僕は然うは飲めんよ、迷惑するよ、到底君の敵手は出來んのだから……。」
と後には柳之助も猪口を取らぬ樣にすると、
「敵手が無くちや旨くないね。君も獨は寂しいと云つて、僕を引留めたらう。寂しいのは、君ばかりぢやない、獨酌も寂しい。君が敵手をしてくれなければもう御暇だ。」
葉山は直に起ちかけるので、然うは飲めぬながら、遁られるのが否さに、受ける。知らず識らず醉が廻れば、體が怠くなつて、柳之は其處に横仆になると、忽ち積日の疲勞が發して、前後不覺の高鼾で、ぐつすりと寐入つて了ふ。
葉山も麥酒の下地に二合木蒲も入れたから、大分酩酊の狀で、柳之助の寐入るのを呼びもせずに見てゐたが、竟に鼾を搔始めたのを聞いて面白さうに笑つた。
「やあ、到頭盛潰して遣つた。あゝ、能く寐た。寐るが好い。恁云ふ時は十分に寐て腦を休めるが何よりだ。」
葉山は火燵蒲團を剝いで、柳之助に被けて、
「俺ぢや不足だらう。醉の假寐に何か被けて遣ると云ふのは、朋友の所作ぢやない、俺の爲る事ぢやないが、俺が爲なけりや外に爲るものは無い、噫、鷲見。」

いや、成程痩せた！　頰が減けて、目も窪むだ。思へば可哀さうなものだ。くの字狀になつて手枕をして、座敷の隅に轉つてゐる工合は、如何しても獨身者だ。細君が亡なつたら何と無く急に不潔なつたよ。可哀さうに、憂身を窶してゐる。」
這麼事を考へながら、葉山は悄然と火燵櫓に倚懸つてゐた。時雨は蕭々と、黑い風の隙洩るにつれて、身顫の出るほど寂寥は外から遁つて來る。其中で老婢が沈むだ〳〵聲して方便品を讀む。
「元は感心に回向をしてゐる。あゝ哀だ。旦那殿は高鼾で寐てござる。實に老少不定だなあ！　恁う酒などが出てゐると、細君が居ないとは想はれない。俺でさへ然う思ふのだから、鷲見が寂しがるのも無理は無いか。
細君巧くもないのに料理自慢だつけ。俺の顏さへ見りや、飯を食つて行け、飯を食つて行けが病だつた。一度御世辭に茄子の鴫燒を賞めたら、それから每歲茄子が出ると、鴫燒の御招待だつけ。旦那殿が跐踰御使者に立つて、今日は君種々御馳走が出來るよ、も罪が無くて可笑かつた。もう來年から彼鴫燒も食へないと思ふと、好い心地はしないものだ。いや未だ有つた、細君得意の早吸物――魚煎餅に湯汁昆布と云ふので、每々窘らせたよ。當面今晩あたりは、何もございませんでと云ふので、例の金の網の青漆の椀が出る所だ。あゝ又かと思ふやうだつたが、其人が居なくなつて見れば、不味い物も懷しい。果然、いや、果然、氣が着かなかつたが、今日は俺の(所好な)猪口が出てゐない。貴方は奇つてゐらつしやるからと云つて、變に歪むだ、踏潰したやうな、赤樂の氣障さ加減の耐らない猪口を出してくれたつけ、是は貴方のだと云つて弄謔半分に始終出した、彼奴が出てゐない。何だか勝手が違ふと思つた。一寸した事が既に恁うだ、鷲見の寂しがるのは無理も無い。俺でさへ憶出すと好い心持はしない。」
葉山はほたりと膝に淚を零した。
「懇意にしたものゝ居なくなるのは心細いものだ。俺も來ちや內のやうに我儘を言つたつけ。昨日まで赤い手絡を掛けて大きな圓髷に結つて嬉しがつてゐた人は、もう佛樣になつて了つたのかい。」
彼は目を連瞬いて、洟を啜つた。
「どれ線香でも供げて、御暇としやうか。」
葉山は枕頭に近くあつたラムプを遠く離して、

「あゝ、能く寐てゐる。此窶れた顏を見ると、不便でならない。今に日が經したら、又泣くのだ。おや、もう歸るよ、明日待つてゐるよ。」

立起らうとすれば、本箱の上の山茶花に目が着く、葉山は悚然として寒くなつた。燈影の微昏い所に赤い花の此方を向いた狀は、心ありげに首を延して覗いてゐるやうに見ゆる。葉山は突立つたまゝ其花を昵と視てゐたが、白縮緬の衿卷の端を引出して、簇と目を拭いて、其花入を柳之助の枕頭に直して、

「膝枕だ、膝枕だ。それぢや、然やうなら。」

と言つたが、不思議にも其は彼が常にお類に挨拶をする調子であつた。

三の一

夜來の空は殊更朗に、澄徹るばかりで、習習との風も無ければ、暖さも暖い。肘掛窓の障子越に一面の日影を背負つて、葉山は今朝飯が濟むだと云ふ體で、小楊枝を用ひながら新聞を讀むでゐる。傍には昔噺の赤本やら、鐵葉の喇叭やら、首の無い木馬やら、糝粉細工の凧が轉げて、ビスケットの食餘が放散來して、はや男の子が一遊したと見ゆる光景。

徐に襖を啓けて入つて來るものがあるので葉山は俯いたまゝ、

「おい面白い事があるぜ。難有い、難有い。」

と獨り悅に入つて膝を拊くと、

「何だな。」

と欬嗽聲をして、寄つて來て覗く所を、顏を擧げれば、細君と思ひきや、大違の親人。

「おや、御父樣！」　と少しく狼狽る。

「何が那麼に難有い事があるえ。」

と親人は益新聞を覗き込む。

「何有、難有いと思つたら、何でもなかつたのでした。」

「然か、大層おもしろさうだつたから。」

と其なりにして、親人は何を取りに來たのか持つて行くものを持つて、出て行く。迹に葉山は吃々笑ひながら、

「昨夜は愁歎で、今朝は御茶番だ。今度御父樣！　と言ふと、嚊左衞門が顯れるのだらう。」

「何を笑つて御在なさる。」

と果してお種が入つて來る。

「それ御覽じろ。」

「何でございます。」　と眞面目で長火鉢の前に坐る。

是が柳之助の蟲の好かぬと云ふ人で。年紀は二十五六、髮毛の縢れて濃い、頸の長い、細面の、色白の、人形的の優しげな顏をしてゐる。秩父銘撰の薹無い羽織を着て、下は光澤絲らしい。今髮結を返したと云ふ、潤澤と水の垂れさうな圓髷の首を据ゑて、火鉢の火をば見に來たのであるが、獨り笑つてゐるのが訝しさに、目も放さず夫の樣子を視てゐる。

葉山は新聞を投出して、

「種々なものだ、離緣するとつて騷ぐ奴もあれば、鷲見のやうに可愛くて禁らないのもあるし、又乃公のやうに方々で〈やいの〳〵〉言はれて困るのもあるしよ。茶を一つ淹れてくれ。」

お種は又行らぬことをと云ふ顏をして、茶盆を取出す。葉山は因で拍子拔がして、

「好い天氣になつた。」　と障子の日影を見る。

「夜霽ですよ。」　と急須を取る。

「存じてをります。」　と一番鯨弄す。

それでもう細君の方から後は出ぬのである。葉山は自分の肚の中で其後を續けて、獨で可笑がつてゐる。お種は精々と支度をして、やうやう湯を注す段になつた。

「御父樣の湯呑は？」　と夫が心着けると、

「今し方髭を剃りに。」

「朝ぱらからお艶飾だな。」

お種は例のもう後に出ずに、済して茶を注ぐ。葉山は寝轉びながら其湯呑を受取つて、熟と考へてゐる體であつたが、

「然し、可哀さうな事をしたよ。」

と情なさうに太息を吐く。

「何がです？」とお種は有繋に訊ねる。

「お鏡さんよ。鷲見が可哀さうだ。目も當てられない。」と益々昨夜を思出す。

「鷲見さんぢや然でせう。珍しい實のある方ですねえ。」

「お鏡樣の事を言出しちや泣くのだらう、氣でも違はなけりや可いと思ふやうさ。那も戀しいものかな。」

「それが本當の夫婦の情合なのでせう。」

此語を聞くと齊しく葉山は慓然と首を擧げた。

「而すると假の夫婦の情合と云ふのがあると見えるな。」

「まあ、有りませう。」

「まあ、有る？」と葉山は細君の顏を見て、

「乃公なんぞは何方だ。本當の口か、(まあ)の口かな。」

這麼詭辯を吐くのは、細君は煩くてならぬのである。何故に己の夫は堂々たる男子であり一家の主人であり、保の父でありながら、憖云ふ愚にも付かぬ事を言つて喜むでゐるのか、と其が始終氣に濟まぬ。

男子はおのれの父親のやうに、飽くまで眞面目に、何十年にも足を一つ投出した事は無く、可恐い顏をして、威嚴を保つべき者と信じてゐる。既に父親が然である。歿くなつた兄も然であつた、來る客も知る人も皆其通であつた。傍へ寄りでもしたら睨まれはせぬかと想はるゝやうなのが男子、と心に極めてゐたのである。

然るに己の夫は這麼であるのを、常は可慨しく思つてはゐるものゝ、口に出して意見がましい事は出來なかつた。能はざるにあらず爲ざるなりで、自分は母親の父親に對して神に仕へるやうに恭順であるのを見てゐた。人の妻たるものは恁くあれよ、と兩親の語聞かせる所は、恰も母親の行に符合してゐた。其をお種は飽くまで手本にしてゐるから、夫は夫たらずとも、妻は妻たる本分を守らねばならぬ、と了簡してゐるので。然かと云つて、微塵も夫を嫌つてゐるのではない。寧ろ自分の方が夐に惚勝つてゐるので、唯此詭辯と眞面目でないの二件は、牛肉は所好であるが膏肉は所惡であると云ふぐらゐの所である。故にお種は務めて此膏肉を避けてゐる。避ける爲に自分は益々眞面目になるので、餘り眞面目ゆゑ、夫は些と揉むでやらうで、彌氣輕にする。因で相去ることは益々遠くなる。

又出たと思ふと、細君は始の内は好加減に遇つてゐて、それでも止まぬ時には默つて了ふ。すると葉山も張合が無さに、遂には店を仕舞ふと云ふので、毎も落着する。

もはや奧の手の無挨拶を始めても可いのであるが、如何にも聞きたいのは柳之助の事、彼の平生細君を大事にするのは親しく見聞する所であつた。その人がその人を喪つたのであるから、甚麼に哀悼をしてゐるであらうとは、女の身にしては最も聞きたい所。

「それよりは、鷲見樣は甚麼樣子でした。本當に那麼に泣いて御在でしたか。」

「まあ今に來るから見な、可哀さうに瘦殺けて了つた。」

「お瘦せなすつて？」とお種は眉を顰める。

「生きてゐる效が無いなんぞと言つてるのだ。あゝでも窮つて了ふ。」

「生き　ゐる效が無い？」と彌眉を顰める。

お種は例に無く進むで種々の事を訊ねるので葉山も諄々昨夜の樣子を話して聞かせた。

有繋に親友の哀な物語をするのであるから、洒落も贅辯も餘り出なかつた。或條に涙をさへ帶びて語つたから、お種も身に浸みて聽いたのである。一々聞いて見れば、なるほど氣でも違はねば可いが、と氣遣はしいほどである。けれども其は話で、例の夫の話であつて、實際然したる事ではあるまいと疑つた。疑つたではない、實際那麽事があるものではないと思つたから、

「あなた又妄でせう。」

と唐突に抵つて見ると、不意〻撃たれて葉山は唯目を瞬つた。

「眞面目の話に妄なんぞを有仰るものぢやございませんよ。」

「何が妄の事があるものか。」

個つた程に葉山も眞顏になる。それでもお種は未だ疑が釋ぬか、考へてゐる。

「鷲見はお前不斷から那麽に妻が〳〵と大騷を遣つてゐたのぢやないか。その妻が死んだのだもの、今の話ぐらゐな事は當然さ。お前が死んだつて、乃公なんぞは一滴だつて涙は零しはしない。其處へ行つちや自慢ぢやないが、堅いもんよ。」

洒落とは思ひながら、洒落にしても憎かつたか、お種は不愉な色をして屹と夫を見ると、

「その代心で泣いてやる。」

と直に言つて除けて、獨り面白さうに笑ふ。

「泣かない方が本當です。」とお種は極めて熱心に言ふ。

「然うか。」と葉山は些と案外であつた。

「泣くなんて……。」と益〻熱心に細君は呟く。

是は變だ、と葉山は容喙さずにゐると、

「本當に那麽樣子なのですか。」

心あり氣にお種は念を推した。

「(本當)の好な人だな、本當なら如何するのだ。」

細君は俯いて熟と考へる。

「本當なら考へるのか。」

思案の額を擧げながら、

「那麽事があるものでせうか。」

と力を入れて訊ねる。

「現在有るぢやないか。」

と言はれて見れば、如何にも現在有るのだが、と云はぬばかりにお種は考へ込むでゐたが、

「餘りのやうですねえ。」と言出した。

恁云ふ事は希しいので、此細君が話に身を入れると云ふのは、例が少いのであるのに、今日ばかりは極めて熱心であるのを、葉山は如何にも希有に思つた。何と思つてゐるのか、一番試して見やうと云ふ氣で、漸次水を向ける。

「餘りと云ふのは？ 鷲見が細君を戀しがり過ぎると云ふのか。」

「まあ、然でございます。」

「可いぢやないか、結構な事ぢやないか。(女房に惚れて家内安全)といふ言がある。」

例の口吻は又贅辯を始めると見て、

「いゝえ、其事ぢやありません。お類さんのお物故なすつたのを、餘り大騷をなさり過ぎるやうぢやございませんか、私は然う思ひます。男子と云ふものは那麽に女々しいものぢやありますまい。」

「女々しいと云へば女々しいけれど、情合が深いのぢやないか。お類さんの身になつたら甚麽に嬉しいか知れやしない。」

「嬉くはありません、否な事です。」

と横を向いて、鐵瓶の蓋の埃を吹く。

「これは可笑いね、お前が否だつて、お類さんは如何だか解るものか。」

細君は此方を向いて、

「お類さんも始終然言つて御在でしたよ。」

「何と言つてゐた。」と葉山は起直る。

言はなければ可かつた、と心を叱つてゞもゐるやうに、細君は愼重なつて火鉢の縁を拭いてゐる。答がないので、葉山は又訊ねたが、猶且答は無い。

「お前なんぞは寄ると亭主の讒訴だらう。」

布巾を投げてお種は屹となる。

「那麼事を、あなた。」

「然だよ。お類さんなんぞも大方、内のは煩いとか、那麼にやい〳〵言はれるのも迷惑だとか、傍にばかり居られるので鬱々するとか、……。」

「那麼事を、あなた。」

「好きな事を言つてゐたのだらう。だから女は罪が深いと云ふのだ。男があれほどに思ふのは大抵の事ぢやありはしないよ。七人の子を成すとも女に心を許すなさ。直に増長る奴だから始末に可けない。白い歯は見せられません。」

「それは女ばかりが惡いのぢやありません。」

「それぢや男が可愛がるのが惡いのか。」

「其も可うございます。可うございますけれど程度があります。男は何處までも男らしく。失禮な事を言ふやうですが、鷲見さんのやうぢや……。」

後は有繋に言ふを憚つたのである。

葉山は冷笑をして、

「お前は昔氣質だから那麼事を言つてゐるのだ。此頃は夫婦の情合の深いのと、綾羅紗の合羽が流行るのだから爲方が無いよ。」

「昔氣質ですから、私は流行物は嫌ひ。」

「では致方が無い。實は一昨日綾羅紗の變で好いのを見たから、那で合羽を拵へてやらうと思つたが、然らかい、お嫌かい、あゝ殘念な……」

餘り空々しさにお種は苦笑をしたばかりで、更に對手にならぬ。葉山はごろりと轉側をして天井を仰ぎながら、

「情合が深ければ、深いで増長るし、薄情なら恨むだらうし、浮氣だつたら燒くだらう、亭主となるのも難しいものよ。」

言終つて悵然たりしが、後は欠伸となる。

お種は所謂しんねりむつつりであるから、何日にも御含むことは無い、かはりに、飽倦むだ樣子の見えることも絕えて無い。端然と坐つて煙草は嫌ひ、茶は噬まずで、唯閑雅に芝居の御臺所のやうに構へてゐる。言の寡い性であるから、思ふ事は半分も言へぬ、まして之は他の陰言であれば、飽くまで愼むでゐるのであるが、心の中では、鷲見の女々しさを反復々々非難して、見下げ果てた人物だと迄に愛想を盡してゐる。

自分が葉山ならば、叱咤けてやるのにと思つた。又其平生から考へたら叱咤けさうなものを、何故叱りもせぬのであらう。一緒になつては可哀だ、不便だと言ふのは、例の夫にも似合はぬ事と思つた。男子たるものが、如何に悲しいと云つて、十日も十五日も經つのに、今でも歿なつたやうに、それも獨隱れてゞも泣くことか、他を捉へて復らぬ事を繰返して泣立てるとは、それでも男子か意氣地の無い事だ、恥を知らないと謂ふものだ、とお種は徹頭徹尾不承知である。其に亞いでは、夫も同じ意なのが如何にしても分らなかつた。

内の人は不斷お類さんの事と云ふと譽過つてゐた。自分に對して假意かも知れぬが、左も右も何の彼のと譽めてゐた。お類樣も亦會ふと、自分に向つて、羨ましさうな口吻で内の人を賞揚してゐた。それでお類樣の歿くなつたのを内の人も他人のやうに思はぬであらう、鷲見樣が戀しがつて泣くのを、それほどに言はぬのは、身贔屓があるからであらう、と氣を廻して見た。多くの細君は肚に無くても、座興に一寸口頭で妬くことがある。お種は這麼仂な事を曾て口に出さぬ。ではあるまいかと、唯自分で想ふだけの事であつた。

此（想ふだけ）の容を葉山は默つて見てゐたが、少し寂しくなつたので、

「太く考へ込むでゐるぢやないか。」

挨拶の毎も緩漫としてゐるお種は、言を練つてゞも出すやらに、口を開かうとする時、婢がばた〳〵と駈けて來て、餘り機むで、丁と一つ紙門に抵つて、それに懲りたか、惡く徐に啓けると、旦那に譴責を戴いて、はっと思ふと、駈付けて來たほどの用事を忘れて、額を發搔にして、やう〳〵「あの……。」と言出す途端に、「葉山、葉山。」と二階で聲がする。

「あの鷲見さんが御出になりました。」

と面目を失つた婢は倉皇に逃げて行く。

「あゝ、鷲見が來たか。でも能く來たな。」

三の二

鷲見は二間ある二階の奥の主の居間に、蠟塗の菓子火鉢の火の無いのゝ前に、脛潰れたやうに壁に靠れて、窄袴の衣兜に兩手を入れて、毎見ても讀めぬ千當萬藥假名の額を、別に讀まうでもなく惘然として見てゐると、葉山は昇つて來て、

「何うしたい、昨夜は。好く眠られたらう。」

「大きに失敬した。」

と氣の重い顔をして、猶且潰れたまゝの住居である。黑綾のモオニングに藍氣鼠の綾の窄袴、紺遍縷の外套の下と釣合はぬほど新しいのを着て、埃だらけの黑の帽子を稍後低に冠つたまゝ。

「何だ、學校へ出る裝束ぢやないか。」

「あゝ今朝墓詣に行つて來た。」

「その歸路かね。」

柳之助は頷く、葉山は背後の茶棚から夕顔の烏府を出して、火鉢の灰を平してゐると、婢が臺十能に火を持つて來る。柳之助は外套の衣兜からピンヘッドを取出したが、まづ例の中の繪を引抽いて、自分で一寸見て、

「君、之を見たまへ。」

「何だい？ 是が如何したのだ。」

「まあ能く見てくれたまへ。」と押付に手渡す。

賴まれた通り葉山は手に取つて能く見たが、別條は無い！ 其繪はヒンドスタンの婦女が餅のやうな物を入れた盂を抱へて、其一枚を片手に捧げてゐる立姿である。

「能く見て、如何するのさ。」

「解らんかな、能く見たまへな。」

と其繪を覗込むで、後は葉山の顔を眺める。

未だ解らぬか、葉山は繪探でも見るやうに、右さま左さま視てゐるのを、柳之助は堪へかねて、

「肖とるぢやないか。」

「誰に？」

「解らんかな、妻にさ、死んだ妻にさ。」

と引手繰つて、眤と見る。

「肖てゐるものか。」

と慣れた事とて葉山は呆れもせず、

「氣の迷だよ。」と言つて聞かせる。

柳之助は頻に首を掉つて、

「いや、肖とるよ。肖とるとも。あゝ肖とる。餘程肖とるぢやないか。」

眤と視てゐながら次第に其繪の中へ曳込まれさうな樣子。

「何が肖てゐるものか。日本人とヒンドスタニイほど差ふよ。」

「肖てをらぬ？ 善し」と言ふと、上衣の內衣兜に手を差入れた。何を出すかと思へば、紙に包むだ角な物を、披けば中は細君の寫眞！ 島田のは見合の時の、束髮と銀杏返と圓髷とので都合四枚。

「見たまへ、肖とるから。」

と其處に並べたのである。

之には葉山も少し驚かされた。何を言ふにも此爲躰であるから、悖はぬが可からうと、故

と眞近に繪と比較べて、
「然云へば肖てゐる。一所にして置きたまへ。」
と寫眞と與に紙に包むで、
「肖てゐる。肖てゐる。」
と匆々に還せば、それなり仕舞ふかと思ふと、
「肖とるね、不思議だ。」
と又披いて有間見較べてゐたが、
「此莨は墓詣に行く途で買つたのだ。」
「然かい」。と葉山は氣の無い挨拶をする。
「然すると之が入つてをつたのだ。僕ははつと思つたね、路上で出會つたやうな心地がして。
それから其莨屋へ、五錢の白銅を出して、剩錢は與れて來た。
　それから歸途さ、池の端の仲町を來ると、前面から婚禮の荷が來るのだね。那は皆青い風呂敷を被けるだらう。」
「風呂敷ぢやない、油單と云ふのだ。」
「然し、僕の所ぢや風呂敷に用つとるよ。」
　葉山は思はず笑出した。
「そりや襤褸布でも西洋紙になるさ。」
「然か、油單と云ふものかね。那には紋が付いとるだらう、その紋が、妻の紋さ。」
「細君の紋は何だつけね。」
「それ、圓に枇杷の葉が三枚、妻が能く着とつた鼠色の羽織に。」
「枇杷の葉は異しいね。紋には葉も色々あるが枇杷と云ふのは無い。まあ何でも可い、細君と同じ紋か。」
「其時は實に僕は悚然としたよ。今憶出してもあゝ寒くなる。」
　柳之助は身顫して、徐に俯いた。葉山は其氣色を見て、
「もう這樣話は止さうよ。陰氣で可けない、陰氣で。」
　柳之助は猶凝然と俯いてゐる。
「これさ、又始めたよ、鷲見、何だな。」
　火鉢に張つてゐる臂を葉山は二三度撼せば、漸く顏を擧げたが、はや兩眼の涙に溢るゝばかり。
「困つた人だねえ。」
　と葉山はその肩を丁と打つて、
「おゝ僕の手巾を未だ用つてゐるのかい。否だぜ、否だぜ。」
　と話頭を轉しにかゝる。鷲見は其手巾で涙を拭いて、
「少し貸して置いてくれたまへ。僕は手巾が無いのだ。汚れたのは幾多もあるけれど、綺麗にして置いてくれるものは無いのだから。」
　何を言つても、其方へ話を引付けて了ふので、葉山は弱り果てゝゐる。
「餘り懷しかつたから、僕は引返して其後に追いて行つたさ。淺草の方へ行くのだらう、停車場の側を通つて、鐵道馬車の線路の通を何處まででも眞直に行つたよ。あゝ氣の毒な、あの人も今に死ぬだらう。彼荷物は何日までも遺つて、其主は直に在なくなつて了ふのだ。考へて見ると、人の命と云ふものは、實に儚い。昨日まで話をして、笑つたり、惱つたりしてゐたものが、今日は忽ち在なくなる。儚いね。吁、儚い！　昨日まで睦じくしてゐたものが、もう土になつて了ふのだ。土になつて了ふのだからね、考へて見給へ、假のやうだ！　妻などを有つものぢやないね、係累を增すのは一つの悲を增すのだ、僕も妻を有たなかつたら這麼思をせずに濟むのだ。向者のなども僕のやうな悲のあることを知らんで、結婚をするのだらう。氣の毒な！　彼も今に死ぬのさ。」
　葉山は思はず八の字を寄せて、
「可哀さうな這樣不祥を付けるものぢやないよ。これからお目出度いと云ふのに。」
「目出度い事は無い、僕が好い例ぢやないか。」

折から次の間に人音のするのを、柳之助は心も着かず、

「實際然だから仕方が無い。人生朝露の如しだよ、僕だつて斯して君と話をしとるけれど、これで何時死ぬか知れやせんものね。」

と言ふ時紙門が啓く。不圖見向けば、婢とばかり思ひしに、內君であるから、慌てた。

彼は此時も机の横に靠れて、片手を火に翳し片手を窄袴の衣兜に入れて、窮屈に立膝をしてゐたのであるから、お種が顯れると與に閾越に手を支へて、辭儀をするのが唐突であつた。不意を吃ひながらも、呼吸を合せなければならぬので、柳之助は周章狼狽して、膝を正すやら、机の角に背を打付けるやら、兩手を支くやら、頭を低げるやら、其邊を犇かして、辛くも挨拶をした。お種は何處までも沈着いて。

「然ぞお寂くてゐらつしやいませう。」

と兩手を膝に端然と其處に坐る。

「はあ」　と柳之助も割膝に跽つて、屹と相對ふ。

「先日一寸上りました節は、種々御混雜の中で染々御目にも掛りませんで、甚だ失禮を致しました。」

とお種が辭儀をすれば、柳之助も同じやうに頭を低げて、

「はあ。」

「昨晩は又遲くまで御厄介になりまして。」

「はあ。」

「何が御厄介になるものか。」

と葉山は兩箇の照魔に容喙す。

「今日は好く入らつしやいました。」

「はあ。」

酷く柳之助の迷惑してゐるのを、葉山は見るに見かねて、

「あゝ、もう這樣固くるしい挨拶は可止さ。今日は御馳走をする約束なのだから、何か旨い物をね。」

と細君の顏を見ると、心得て頷く。柳之助を見ると、下を向いて、窮屈さうに、手持無沙汰さうに、意見でも聽いてゐるやうな、氣の毒な恰好をして跽つてゐる。

「おい、這樣に改まつて居なくても可いぢやないか。膝を崩さないかい、大事な窄袴が傷むよ。」

「鷲見樣、どうぞお樂に。」

「はあ。」

「遠慮をする事は無いぢやないか。よう、胡坐を掻き給へ。女房の可恐のは、月の末と、內を空けた朝ばかりさ。」

「貴方、どうぞお樂に在しつて下さいまし。」

「はあ。」

と上眼でお種を見て、猶且跽つてゐる。

「それぢやお客樣は私が引承けるから、お前樣は御馳走の方の周旋を、此は宜しい、御隨意に御引取なさい。」

細君は一禮して起つて了ふ。柳之助は跡を見送つて、吻と一息吐いたと云ふ體で、主の方に向直ると、吃未了の莨を把つて、一口燻らして、矍々と葉山の顏を視てゐる。

「何を悄然してゐるのだ。」

「君の所には細君が居る。」

「何を行らない事を……。」

と言罷して急に笑ひながら、

「彼も何せ今に死ぬのさ！」

柳之助は忽ち座敷を回して、

「君の家は明くて可いな。」

「這麼結構な御住居を褒めるのに、明くて可いとばかりは何事だらう。」

「だつて、明いぢやないか。明いから陽氣だ。僕の所は妻の居つた時分は明かつたけれど、此頃は非常に暗くなつたよ。始終薄暗くてね。」

「お種樣がお天道樣ぢやあるまいし、那樣理窟

も無いけれど、陰氣になつたらう。陰氣になつた所へ君が鬱ぎ込むでゐるから、いよ〳〵濕勝なのさ。」

「然だ、全く然だ。」

と柳之助は太く思當つたやうに合點する。

「それだから、僕は此頃は内に居るのが否だよ。内が否になつて了つた。偖やつて餘所に來とるね、然すると他と話をしとる間も、始終内へ歸るといふ樂があつたのだけれど、もう那樣氣は無いな。寧ろ内を忘れて了つとる。些も歸りたくないよ。」

「まあ御寛縱なさいまし。」

と葉山が笑へば、柳之助は太息を吐いて、

「還るに家無しだ？　滿らんなあ。」

どつかりと火鉢の角へ頰杖を支くと、直に火箸を把つて、灰を平し〳〵、結晶の圖を書散してゐる。お種は又昇つて來て、緣高に菓子を容れたのを、其處に置きながら夫に見せて、

「何か買はせませうか。」

「何だい、有りますものは。粗粉落雁に翁飴、松風が少々、拾聚ものだな。鷲見には這麼物は可けない、餅菓子が可からう。」

「餅菓子は否だ。」と火箸を捨てゝ身を起す。

「それぢや羊羹！　然う、那は丸噛に限ると云ふ僕の所好だつけ。羊羹を二棹切らずに持つて來な。」

「否だ、否だ。もう那は行りませんよ。」

お種の手前少く極の惡い狀で、柳之助は連に頭を掉る。

お種は、是がお類樣を戀しがつて、女々しくも二七日過ぎた今日までも諦めかねて泣く人か、と其樣子をば見て見ぬ風で、なか〳〵注目してゐる。

果然羸れてゐる、色も蒼白めてゐる。延過ぎた髮は亂れて、髭鬚深い顏は汚れ來てゝ、宛然病後の貌。能く視ると、內背に脂が着いて、外套の襟は雲脂を被つて、耳の根から薄墨を塗つたやうな襟垢、もう蝨が生いてゐるのか、とお種は氣の毒になつて、傍を向いて了ふ。

「おや羊羹でもないのか。」

「うむ、何も要らんよ。」

「それぢや是で辛抱するかい。」

と在合ふ菓子を見せれば、

「それも要らんよ。」

と氣の重さうに机に倚掛つて、又頰杖を支く。

「太く振られたね。」

と葉山は松風を撮むで、吃齧きながら、

「おや菓子は可いから、御馳走の支度だ。」

其を聞くとお種は起つて、出際に又一目柳之助を見に行く。迹は對座で、茶を出すと、柳之助は火鉢の彼方に在る菓子を覗いて、

「僕に一箇與れたまへ。」

「おや！」

「一箇！」

「何だ、食べるのかい。」

「食べたくなつた。」

と翁飴を口に入れて、不味さうに咀嚼始める。

三の三

春日のやうに煦々と暖いのに、火鉢は在る、日照は好し、頭痛がするので、葉山は西窓の障子を啓けた。

澄徹る空は藍でも滴れさうに、何處に一點の雲も無い、唯巍然と富士の白妙は四邊を拂つて其裾には、此名山の細工屑を捨てたやうに、鹿子斑の山が起伏と續く。何處とも無く長閑な人聲がして、此處彼處に鳥が囀る。折々動く風は日影の熱を冷すほどに輕々と面に當る。

「好い景色だ！」

と柳之助は瞬もせず富士の雪に見惚れて、

脊を伸しながら、

「富士は名山だね。好い景色だ。」

「譽めてばかり居ずと、お茶代でも置いたら如何だ。」

「始終恁して富士を見とつたら好いだらうな。」

「終極には風を引くわね。」

「好い！ 君の家は好いな、僕の家は可かん。恁云ふ所に居たい。」

「居たければ、如何だい、當分來てゐては。」

「此にか！」と柳之助は目を瞪る。

富士の雪は好い、座敷は綺麗で、陽氣で好いが、唯一つ好くないのは、細君が居る！ その蟲の好かぬお種さんと同じ家に居られやうか、と柳之助は其で目を瞪つたのである。とは知らぬから、葉山は定めて二つ返事の意で、

「然うさ。」と輕く頷く。

今更否とも言はれず、何と挨拶をしたものかと柳之助は窮つて忸怩してゐる。

「單身で燻つてゐるよりは可いよ。見たければ毎日富士を見てゐるさ。當分來てゐたら如何だ。それが可いぢやないか。」

柳之助は益々窮る。

「汝を對手に所帶を持つてゐた所が、一向冴えない話だ。然かと云つて、今の所ぢや、今後何爲やうと云ふ計畫も未だ無からうけれど、急に後……。」

と言未了て、少し塞つたのは、後を娶ふ事情にもゆくまい、と言はむとしたのであるが、其話をしたらば又氣を惡くせうかと、

「急に後が寂しからうから賑なことは私の家だ。賑な方が紛れて可いよ。君の家は暗いと言ふのも、畢竟老者を敵手に、上と下とで一人法師だからさ。まあ洒落に一月でも二月でも來て見たら如何だね。」

實意で說かれるほど柳之助は困却を極めるのである。此場に臨むで無下に斷りもならぬ、然て何と言つて遁げたものであらうか、と度を失つたが、一言でも早く、斷るものなら斷つて了はねば、義理に逼つて出入のならぬ境になると考へたから、茫に急込むで、

「そりや可いけれど、面倒臭いから。」

と不間なことを言出す。

「何爲、面倒臭いと云ふのは此方の挨拶だ。君の方に面倒はありはしない。」

之には柳之助の無會釋も返す辭が無い。多少か間の惡さうな顏をして、

「そりや然うだ。然うだけれど、他の家は矢張窮窟だから。」

「餘り窮窟だと云ふ柄でも無い癖に。」

理の解らな過るのを傍痛さうに葉山は苦笑をする。柳之助の心の中は隨分切ない。

「君一人限だと可いけれどな。」

「私が一人限なら、早速奢見樣と夫婦になるよ。」

「實に然うだね。君が女だと可いのだ。」

洒落でも何でも無く、柳之助は眞面目で言つたのである。葉山は手を拍つて、反身になつて笑ふ。

「此奴が雌だつた日には御荷物だ。床の中から指圖をして、亭主に飯を炊かせる玉さ。夕涼よくぞ男に生れたるで、自他の仕合なのだらうよ。」

百方と說いたが、生返事ばかりで、柳之助は決然諾とは言はなかつた。彼此する間に約束の御馳走が列ぶので、葉山も好加減に其話を切擧げて、

「熱い所を一盃。」と氣を變へる。

有繫御馳走をと云ふだけに、三種も肴核が附いて、中には料理屋から取寄せた物もあつて、未だ後から細君の手料理も出るとは、嬉しかつたが、內君が銚子を控へて侍つてゐるには、柳之

助の迷惑は謂ふに謂はれぬ。居なくなつてくれれば可いに、と其ばかりを念じてゐたけれども出てゐる方は愛相に出てゐるのであるから、身動もすることではない。餘り言はれるので、前のやうに危坐こそせぬが、胡坐を搔いても、軀を硬くしてゐるので、肩は凝つて來る、氣切なくはある、酒も肴も餘所になつて、唯此人が早く起つてくれゝば、其が何よりの饗應に考へてゐた。銚子の替目には起つであらうから、其迄と、柳之助は目を瞑つて辛抱する覺悟で居ると、平生から調子の冴えぬのが益冴えなくなつて、酒を飲むでゐるのだか、金を借りに來たのだか、判らぬやうに悄返つてゐるので、葉山は全然面白くない。

「又異に鎖つて了つたぢやないか。」

と言はれても、柳之助は怫然として返事もせずに、鉢の物を撈つてゐる。素氣の無い、變な人物と云ふ態で、お種も横から恁と視てゐる。

柳之助は姑く忸怩ついてゐたが、矢庭に盃を空けて、決する所ある如く、

「一盃あげます。」とお種に差した。

お種は驚いて、急に手が出なかつた。餘り唐突で、葉山にも此盃は何だか些とも解らなかつたが、柳之助の所爲るのを見ながら笑ひかけて、

「此人は誠に變人でね、どうも所惡が多くて可けないのだ。」

お種は盃を受けたまゝで、

「ぢや其御肴なんぞは……。」

「えゝ、食物の談ぢやない、人間が嫌なのだ。」

柳之助は聞辛い顔をして控へてゐる。細君はなほ此應答には窮つた體で、其人の方を見ぬやうにして、僞っ事無しに聞いてゐると、

「甚麼好い女でも、甚麼金持が來ても、取合ない人なのだ。難有い事には私は大相好かれてゐるのさ。お前なんぞは不可方なのだよ。」

是はお種も柳之助も御互に氣の毒で、兩弱に弱つたが、有繋に柳之助は默つてもゐかねて、

「那麼事があるものか、妄です、妄です。」

とお種に向つて慌忙しげに辯る。葉山は圖に乘つて、

「然し、恁やつて兄弟のやうにしてゐるものが細君に隔てるやうでは面白くない。」

「隔てやせんよ、僕は。」

と柳之助は愽々してゐる。

「だから、以後は手前同樣御懇意に願ふやうに……。」

柳之助は困じ果てゝ、ぼり／＼頭を搔くと、紛々雲脂の飛ぶのが、日向で能く見える。お種は其を見附けて、可笑いにも笑はれず、横向に俯いて口を掩へてゐる。

三の四

「其を清く頂戴して、御返盃するが可いね。何を探すのだ。盃洗？　盃洗などは水臭い、それで宜しい。肺病さへ無けりや遠慮には及ばない。」

と夫に急付かれて、

「それでは失禮ですが……難有うございました。」

と返盃すれば、柳之助は肩を聳して、

「はあ。」と受ける。葉山が注ぐ、お種が手を鳴す、婢が銚子を持つて來る。柳之助は失望して、いよ／＼此内君が動かぬと極つたならば、此方から退くより外は無いから、何とか詭へて、早く還らう、と覺悟を爲變へた。旋て後の肴核を取りに行くとて、お種は起つたので、やれ嬉しや、と縛の繩でも解かれた想で、

「僕はどうも窮屈で可かん。困る、僕は困る。」

と柳之助は泣付くやうに言つた。

「何が困るのだ。」

「困るなあ。」と顔ばかり顰めて、言兼ねてゐる。

「何がさ。」

「細君が居つちや困る！」

と一生懸命に思切つて。

「それほど困るなら引退げるけれど、然う君のやうに、人さへ見りや毛嫌をするのも困るぢやないか。何故那様に可厭なのだらう？」

「何故と云つて理由は無いけれど、僕の性質なのだから。」

「性質だつたつて。蛇や蛙ぢやなし、同じ人間を、然う否がるとは何云ふものだらう。他の者とは違つて、私の家内だ、私の家内だけは切て格別の御詮議に預りたいね、然でないと、種々不都合な事があるものね。ちと所好になる修行を爲てくれたまへ。然う君のやうに一國でも通らないよ。君は不吃不好だから困る、まあ吃つて見てさ、それで可けなかつたら、遠慮無く吐出してもらはうぢやないか。何も内のお婦を女房に持つてくれと言ふのぢやなし、高が親交つてもらへば可いのだ。可厭にした所が、苦い丸藥を嚥むやうなものさ。そのくらゐの辛抱の出來ないことはあるまい。」

恁して喋々と責付けられるのも辛いが、今にお種が昇つて來はせぬかと、柳之助は氣が氣でない、窄袴の衣兜に手を入れたり、手巾を摑むだり、盃を把つたり、卷莨の箱を潰したりして、急立つ心を萎してゐる。

「然し、如何あつても可厭だと云ふなら、爲方が無い。」

「可厭ぢやない、決して可厭でない！」

「可厭でなければ、御酌ぐらゐに出てゐたつて可さゝうなものぢやないか。」

「けれども實際僕は窮屈でな。」

「その窮屈が解らないよ。」

此時階子を踏む音がする。柳之助は悚然として、又硬くなる。

「細君の前で今の事を言つちや困るよ。」

と忙しく囁いて、手の遣端が無さに、空の盃を取つたが、口へは持つて行かれず、置所も無し、持餘して葉山へ差す。

お種は手料理の茶椀蒸を能代塗の通盆に載せて、入つて來て、其處に坐るか坐らぬかに、葉山は吃々笑ひながら。

「おい嚏は出なかつたか。」

柳之助は小くなつて膳の上を突々廻してゐたが、之を聞くと齊しく颼然と起上る。葉山は益々可笑がる。お種は中間に介まつて、何が何だか解らず。

「如何なすつたのです。」

と訊ねると、葉山は未だ笑ひながら、

「譴つたのよ。」

「何を御譴ひなすつて？」

「何有、お前が出てゐると窮屈で困ると言ふから、何是那様に嫌ふのだ、と怨言を言つて弱らしてゐる所へ、お前が來たのだ。鷲見は何でもお前を引退げてもらひたいのだ、所が、乃公が毎のやうに今日は引退げない、其處へお前が來たらう。さあ極が惡かつたのだ、而して、乃公が又目の前で氣の毒な事を爆然と言ふだらうと思つて、耐らなくなつて逃出したのだ。」

「あゝ然でしたか。それぢや私は下へ行つてゐませう。私が居ると窮屈ですつて？」

「窮屈ださうだ。」と葉山は笑ふ。

「ぢや下へ參りますから……。」

「下へ行つたら鷲見を寄來してくれ。」

「何處へ御出なすつたのです？」

「いづれ御下屋敷だらう。」

お種は下りて茶の間へ入つた。姑く待てど、何處からも出て來ぬ。二階で手が鳴るから、早速行くと、葉山は氣の拔けた顏をして、

「如何した、如何した。」
「未で出ていらっしゃらないのですよ。」
「長いね。」
「お長うございます。」
「長い！　廊下から呼むで見な。」
又下りてお種は廊下から、
「鷲見さん、鷲見さん。」
一向返事がない。お種は考へて、玄關へ行つて見ると、靴が無い！　急足に二階へ昇つて、
「貴方、御歸去なすつたやうですよ。」
「何歸る奴があるものか。其處に帽子があるだらう。」
果然帽子は在る。
「煙管が在るし、手巾が在る、尤も是は乃公のだけれど。それに彼は茶椀蒸が所好だから、歸りはしない。」
「それでも、貴方、靴が在りませんもの。」
「靴が無い！　靴だから歩いて行つた、と云ふ洒落でもなからう。」
座を起つて葉山も捜索に下りたが、家の内には何處にも居らぬと極つたので、
「それぢや歸つたかな。兜を委いて遁げるとは卑怯な奴だ。臺所の者に聞いて見な。」
お種は婢に訊ねたが、一向知らぬと言ふ。餘り出意表なので葉山も呆氣に奪られて、椽側に突立つてゐる。
「貴方、お歸去なすつたのですか。」
「どうも然だらう。姿が見えなくて靴が無いのだから、まづ確だ。」
「變な方ですね。」
「餘程變さ。」
恁る所に、裏口から保といふ男の子を負つて豐々腴々した十七ばかりの傅が、後手に買物の包を挈げて、小聲で童謠を唱ひながら入つて來るのを、お種は誰かと臺所に出て見ると、
「あの唯今鷲見さんに其處でお目に懸りました。」
「おや、然かい。」
「內へ行つたら宜しくと有仰いました。」
「まあ、然かい。」
之を聞付けて葉山も出て來る。
「何だ、宜しくと言つた？　宜しくも無いものだ。」
傅は捷くも鷲見に就いて事有りげと見て、一廉忠義の氣で、
「あの、お帽子も冠らずに蹌踉行らつしやいました。」

四の一

お類に死なれてからの所帶は、火の無い火鉢のやうに、柳之助には堪へられぬ侘しいものになつた。おのれの家に居るよりは、外に居る方が、氣が霽々として、幾分か浮世の頼あるやうに覺える。好い朝日和に墓詣をした往復と、葉山の二階座敷で酒を飲むだのとで、其は經驗したに就けて、外は何處も明くて陽氣なのに、內は陰氣で暗いと云ふ事を悟つたのである。
閉籠つて居るよりは、出るが勝だ、と考へた矢先へ、學校から人が來て、出勤を促されたので、出て見やうと云ふ氣になつて、明日からでも、と受けて還したのは、葉山の座敷を逃出した翌日の午後である。
其日になつて見ると、鼻の頭が挽るやうな凩が颼々吹いて、衣類を着更るのも可厭な、洋服は格別寒い日和であるので、忽ち氣が挫けて、九時頃まで火燵に入つて、遅々と竦むでゐたのである。
毎ならば、お類が早速昇つて來て、「さあ、貴方」と慣れたさうな聲をして、窄袴を持つて傍から逐立てるやうに爲るのだと考へると、「さあ、貴方」と云ふ聲が遽に耳に附いて、蓐に就

く前に珍しく、所帯であつた圓髷に結つて、却つて可愛らしく若復つた笑顔が、隱顯と目に見える。

那麼顔であつた。這麼風をしたと憶出すほど憶出す事が多くなつて、懐戀は胸一杯になる。幾許懐しくても、もう逢はれぬ、逢はれぬほど彌懐しい。實に此懐慕は柳之助の身にも世にも換へられぬのである。彼は月給を當の其月暮で、十圓の餘裕も無い、が、若金力で自由になるものならば、如何なる艱難をしてなりとも、それだけの金額を積むで、再びお類を此世に活したいと念ふ。吁、死は君王の貴きにさへ諂はぬ！　定業は終に移すべからず。人の死んだのは紙のめら〳〵と焚えて了つたのと同じ事で吁といふ間にもう回復がならぬ。お類は赤土に埋まつて、愍してゐる間に漸々朽つてゆくのであると思へば、情無さも情無し、氣も亂れるばかりに失望が劇くなる。

這麼可厭な、寒い日に學校へ出て、五時間も勤めて、それで何になるのだ。類さんが生きてではなし、何を目的に働くのだ！

「吁、滿らん、滿らん！」

と嘆息が拔けて、そのまゝ委靡と仆れて了ふ。

仆れて仰向になつて、大きな目を開いて、考へるのは、お類の事ばかり。旋ては悲くなつて、胸が逼つて、涙が流れて、拭かずにゐれば氣味惡く冷々と頰を傳はる、拭けば後から〳〵出る。氣が閉ぢて、謂ふに謂はれぬ苦惱を覺えるので、其の淩に無理酒を引被つて、睡る。睡飽きれば、座敷を運動して、其も直に飽きれば、緣に出て、空を眺めて、太息を吐く。是が柳之助の日課であつて、其次日も、又次の日も、此爲體で過したのである。

酒の無理と、火燵を離れぬのと、寝てばかりゐるのとで、胃と腦とを害して、追懷の悲哀の外に柳之助は一種の氣鬱を發して、益〻おもしろく無い心地になつて、病衰けた顔をして怏々としてゐるので、老婢は一方ならず心配した。何とか氣の引立つやうに、と始終念ひながら、其間に主從の隔と云ふものがあるので、左右に思ふやうに行かね。せめて自分が娘でゞもあるなら、那も恁も言ひたい、爲せたい事はあるが、傭人の身であつて見れば、立入り過ぎた事もならず、鬱勃思ふばかりで、從來染々話などを爲たこともないのに、急に傍へ行つて心易く世話をするのも異なもの、と差控へ勝にしてゐる。柳之助も話などを爲るのは疎しさうに、顔を合せれば、

「寂しいなあ、元•」

とは能く言ふが、其外には何も言はぬ。他を見ると、沈思の邪魔になると云ふやうな様子をして、如何にも取付端が無いから、元が用が有つて二階に昇つても、其が濟みさへすれば直に下りて了ふ。後は上に一人、下に一人、折々がたりみしりと云ふ音が二階で爲れば、下では偶に咳嗽をする聲の外に、人氣は無くて、外には毎日元氣好く風が吹く。

儚い〳〵と悶えながらも、過せば過される日で、明れば三七日の朝、柳之助は餘所行のモオニングコオトを着て、太い籐のステッキを提げて、蹤蹌と菩提詣に出た。

道の氷は硝子を踏毀したやうに、兩側の屋根の霜は的皪と輝いて、習との風の行るでも無いに、寒氣は意地惡く骨身に浸みて、眩い日光も纔に色ばかりで、些の熱も無いが、霽々した霜日和に町は自から景氣付いて、蕎麥屋の門に干してある杉箸の山も、藥舖の軒に並ぶ金看板の炫燿も、現金掛直なしの日除を洩れる友禪メリンスの掛切も、何と無く榮々しく氣を有つてゐる。

目は種々の物を見ると、耳は雜多の音を聞

かされるのとで、うか／＼と思が紛らされるのに、新しい空氣に裹まれ、華かな日光を浴びて、賑しい往來の中を行くので、柳之助も我を忘れて歩行が果取る。

此町通を二町ほど來ると、唯有る角に一軒の花屋がある。店の外に葬禮の贈花が四對立派に仕上つて、内には四人掛で殘る一對を精精と拵へてゐる。

お類は花を活けたので、此店が買付であつたから、柳之助は今日の手向の花も此で買つて行かうと爲たのであるが、之を見ると有繋に不快を感じて、入るも可厭になつて、五六歩行過ぎたのである。此先の横町には未だ一軒大きなのが在るが、此が好いと云つて、類さんは贔屓であつたから、此で買つた方が佛は喜ぶであらう、と思飜して、竟に直と入る。狹い土間に四人も仕事をしてゐるのであるから、足も容れられぬ。閾の上に靴の頭を蹈懸けて、

「おい、花を與れんか。」

と内を一目詢したが、竝むである花溜には屑のやうな物ばかりで、何も無い。主は椿の枝をぱちりと剪むで、

「今日は如何も御氣毒樣で。」

と此方も向かず仕事に掛つてゐる。

「花は無いのか。」

「へい、今日は……。」　と益々取合はぬ。

「其處に在るぢやないか。」

柳之助は土間に轉してある莚の南天をステッキで指せば、

「是は御註文で。」

「少し賣つてくれ。」

「どうも然は參りません。此先の横町に花屋がございますから。」

「我家ぢや始終お前の所で買つとるのだよ。」

「へい、どうも毎度難有うございます。」

「其南天を二枝と、水仙を少許賣つてくれ。」

「是はお上げ申す譯には參りません、此花に用ふのですから。」

煩いと云ふ氣色で、主は拵へてゐる花の陰へ廻つて顏を見せぬやうにして了ふ。

「賣れんのか。」　と柳之助も怫然とする。

「へい。」とばかりで、後はちやきり／＼と鋏の音ばかり。丁稚や手傳は連に柳之助の顏を見て惡く默つてゐる。

柳之助は主の隱してゐる顏を捜出しては睨付けて、姑く動きもせねば物も言はずに店の内を詢して、又主を睨付けて、ふいと此を出ると忽ち惡口でも言つたらしい語が聞えた。

柳之助は益々憤懣して、跛るやうに足疾に急いで、横町の花屋へ行くと、其處は倍も店が大き／＼て、世辭が好／＼て、代物も山のやうにある。思ふまゝの南天と、水仙と、椿もあつたから椿も買つて、寒菊もあつたから寒菊も買つて、それで胸の霽れた前の口惜紛れに吽と買つて、片手に餘るほど有るのに、南天の實が惡く搖々して、急ぐと落ちさうで、歩き難いこと夥しい。平生腕車を好かぬ健脚の柳之助も、二三町行くと大きに持扱つて、已むを得ず、乘らうと決した。

車夫は寄つて來て、谷中までの直を言ふと、無論不當であつたから、柳之助は其三分の二に直切れば、もう三錢遣つてくれ、と六七間も跟いて來るのを、其で乘らうか、乘るまいか、と生返事をしながら遇つてゐる側へ、一臺の腕車が駈けて來て、叱飛ばすやうに聲を懸けた。

見ると、若夫婦の合乘。仕入の外套を着て、遊獵帽を横冠にして、濁黒い顏に眉と髭の歴々と濃い、眼光のぎよろりとした男が、大圓髷に結つて、水色縮緬の羽織の衣紋が抽けて、半分肩を出して、眞白に揣く塗つた、赭面の橙膚理の毒々しく太つた細君に幅をされて、危さうに推付けられながら、其肩頭へ手を廻してゐるの

が、働つてゐるとよりは、取着いてゐると見える恰好で、細君は惡澄に澄してゐるのに、夫は獨欣々として話をしかけてゐるのである。

慌てゝ避ける機に、柳之助は手に持つ南天の枝頭を否と云ふほど其車の輻に擦られて、はっと思ふ間に、最も大きい二朶は引斷られて轍の迹に滾つた。車は委細管はず一間ばかり行過ぎる。

「おい、待て！」と柳之助は覺えず呼止めた。

車夫は歩を緩めて首を捻向けると、車の上の二人も一樣に顏を揃へて見返る。其三つの面を柳之助は一つに睨むで、

「失敬ぢやないか。」

「何が失敬だい。」

と車夫は憎々しく言返して、なほも對手になる氣か、足を住めたのである。

柳之助は一時赫と急立つたが、車夫風情と爭ふとは、我ながら餘に仂ない、と思飜して口を噤むだが、道に落ちてゐる南天の朶を見れば、有繋に口惜くも情無くもある。

「間拔めい！」

と言捨てゝ車夫は大急に横町へ曲つて了つた迹に、無念を怺へて柳之助は茫然立つてゐたが、蹴て落された二朶を拾つて、外套の衣兜に入れた。直を付けた車夫は此時又勸めるのを、

「要らん。」と言つたのが、其氣でも無かつたが極めて慳貪に、前の車夫を極付けるやうな調子であつたので、

「要らなきや止せ！」と同じ調子で車夫も言返した。

柳之助はステッキを揮回して、大跨に此を立退いたが、途々考へれば考へるほど、折角の花を穢物にされたのが、無念で〳〵堪へられぬのである。

車夫風情と爭ふのは如何にも仂ない。仂ないには違無いが、尋常の花ではたい、佛に供へる花を這麼にして措きながら、一言の謝罪を爲ぬのみか、間拔と言つた！　彼頬桁を此ステッキで撲つて〳〵撲曲げてくれなかつたのが遺憾だ、と今になつて見ると、爭はなかつたのも殘念で。車夫の無禮に亞いでは乘つてゐた奴等の無禮！　彼等から一言の挨拶は有つても可然である。

第一、彼夫婦は如何であらう、醜態極る！　類樣が見たら何と言ふだらう。我家の裏に居る巡査が、何處へ行くのか、折々艶飾して夫婦連で出るのを、類さんは見ては、始終可厭だ、可厭だと言つて居たが、其樣子は今の奴等に能く似とる。

人も有らうに那麼奴等の車に、類樣に供へる花を臺無しに爲れては、實に恥辱だ。我が忍んでも、類樣の性質として、那樣汚れた物は見向もせん——那樣物は又持つて行かれもせん、と拾つた二朶を地に投付けて、持つてゐる束の中から南天の枝は引拔いて棄てゝ了ふと、遊むでゐた三人の女の兒が我勝に駈寄つて、

「小父さん、これ要らないの？」

と聲を懸けるのは、祖母樣の稍で乳兒を背負つた年長のお莫盆。其間に惑姑の把柄に赤い切を懸けた六歳約のは、枝付のを搶いで、

「やあ、南天だい、南天だい。」

と獵先に駈けて行く、他の二人も喜ばしさうに殘らず拾つて行くのを、柳之助は我を忘れて見てゐた。

又後から車が飛して來る。今度は聲を懸けなかつたけれども、柳之助の方から氣着けて、顏を振向けると、前の車は、藤鼠の頭巾を冠つた所は高島田らしい、金縁の眼鏡を懸けて、白茶地に淺い荒形のシオールを着た娘を載せて、後の車は、圓髷に結つた、四十五六の氣凛とした、口喧しさうな、尋號の、紺光に光つた、其母親と見える。鼠ぼい毛糸の機械織のシオー

ルを絡つて、車も稍古りたのに乘つてゐる。

「おや！」　と後の車から聲を懸けて、止れと命しながら五六間曳れて行くのを、

「やあ！」　と柳之助も帽を取つて、足早に追ひかける。

藤鼠の頭巾は遙に行延びたのを、後の車夫がおい／＼呼むだので、漸く止つて、今引返さうとする時、柳之助は後の車の側に立つて挨拶を始めた。

「好い所でお目に掛りました。」　と車から言へば、

「何地へ？」　と柳之助は訊ねる。

「お宅へね、上らうと思ひまして。」

「あゝ、然でしたか。」

「お島も御墓詣がしたいと言ひますから、連れまして。」

「はあ、其は。それぢやもう墓詣はなさいましたか。」

「いゝえ、御一緒にと思ひましてね、家から直に參りましたよ。」

前の車も引返して來ると、お島は頭巾を取つてゐる。色の白い、髮の薄い、目鼻立の發揮として賑かな、姉のお類よりは容色勝との噂であるが、小軀で痩過ぎた所は何と無く霜枯てゐる。

シオールを後へ取ると、小豆色の縮緬の羽織に御召縮緬の變裏の二枚襲、空色の紅入友禪の襟を懸けて、海老茶に瓦盡の絲錦の丸帶、玉入の纖い指環を穿めて、髮の飾は、本甲蒔繪の政子形の櫛に、モオル細工の前挿、後は金被の透彫の玉に松葉形の鼈甲脚、金被の管根掛をして、結立ではあるが、鬢の薄い所爲か、髷の坐が惡くて、どうやら島田を假りて載せたやうに見える。笑顔をすると、齒の黑いのが一寸見えて、片靨が入つて、透徹るやうな聲で、物言の人懷しげな、孰かと云へば差含まぬ質であるが、途中の不意の所爲か、物も言はずに、重くるしく會釋をしたばかり。柳之助も同じく默然で、極を惡さうに挨拶をした。

「これから墓詣に行かうと思つたのですけれども、歸りませう。」

「おや、なるほど大相にお花を。」

「まだ南天の好いのがあつたです。」

と口惜しさうに言つたが、其を如何したとも母は訊ねなかつた。

「それぢや折角御出掛のところを何ですけれどお墓詣は明日でも御一緒に。」

「はあ、今日は止します。止した方が可いです。私は後から參りますから、貴方は御先へ行つて下さい。」

「貴方お車は？」　と母親は訊ねる。

「私は車は所惡ですから。」

「それぢや、失禮ですがお先へ參ります。その御花は持つて參りませう。」

「あゝ、然ですか。」　と母親へ渡さうとすると、

「あの、私が持つて參りませう。」

とお島が車を寄せるので、柳之助は其方へ渡すと、例の笑顔をして受取る。二臺の車は再び軛を正して逆散に走出す、迹から柳之助は片手を窄袴の衣兜に入れて、ステッキを敵手に蹠蹱と歩いて行く。

四の二

此日來老婢も鬱々して、病人の枕頭にでも附いてゐるやうに、心配やら陰氣やらで精を疲らしてゐる折から、思懸けぬ今日の來客には、雲霧も一時に霽れて御日樣を拜むやうな心地がして、華美な縮緬の文色に薄暗い座敷も急に明くなつて、聞いてさへ元氣付く、母親の冴々とした高調子、元は何か無しに飛立つばかり嬉しくて、物も手に付かず、ちやほやと待しながら、座敷を出たり入つたりする毎に、

「好くまあ入らつしやいました。」と幾度言つたか知れぬ。

お島母子は八疊の間の殆ど中央に四邊を拂つて端然と置物のやうに並むで、手爐は出たが、茶の出ぬ内は、極が付かぬと云ふ趣でゐる。

「お前さん單身で然ぞお困りでせう。私もね、旦那が那云ふ樣子だつたから、如何して御在かと思つて、其ばかりが氣になつて、一寸來たいと思つてゐると、此間から内の家爺が風を引いて、久しく寐たものですからね、手放されなくて。」

と母親は莨を吃ひながら、隣の茶の間の隅に茶碗の音をさせてゐる老婢に話しかける。

「おや、其は如何も。それでも、もう全然御快しうゐらつしやいますか。」

と其邊を啓散して何か搜してゐると、お島が入つて來て、

「つまらない物ですが。」と袂中の折を出す。

「おや、まあ如何も！」と押戴いて、

「[illegible]御土産を、どうも難有う存じます。」

軈て茶を拵へて持つて出ると、

「子の無い所を、もうお管ひなさるな、お客樣がおいでないのだから勝手に何しますから。」

「いゝえ、もうお管ひ申す所ぢや ございません。奧樣が御亡故遊ばしてから、眞にお宅は全で闇でございます。私は此通り老耄れて役には立ちませず、旦那樣には毎日鬱いでばかりゐらつしやる、もう〳〵、貴方、陰氣で陰氣で、ちと御保養でも遊ばしませんと、御病氣が出ませうでございますよ。」

「困つたものですね。學校の方へは毎日……」

「……？」

「いゝえ、此間學校からお人でございましたけれど、其後未だ一度も御出掛が無いのでございますよ。而して唯毎日鬱ぎ通して在つしやるのでございますから。」

「困つたものですね。」

と考へながら吸殻を叩く〳〵と、莨入の筒に挿むだのを、お島が見付けて始末をするも知らずに、母親は無と考へてゐたが、

「私が都合が出來ると、些と來てゐて世話をして上げたいのだけれど、内も無人でね……。」

「然やうでございませうとも。」

話の途切れる折から、門の外に靴音がする。

「おや、お歸りだ。」

と母親は居住を正す、老婢は起つ、後からお島も出迎へに起つたが、格子の啓く音と與に逃込むで來て、口を掩へて吃々笑ふ。

「何だねえ！」

と母親が可恐い色をする時、玄關で男の聲、

「あゝ、別に御變も有りませんか。」

之を聞くと母親は呆氣に奪られた。お島は小さい聲で、

「戸籍調よ。」

「おや然かい。」

五の一

柳之助も歸つて來て見ると、元が一人で孑然としてゐる平生よりは、内に歸つたらしい心地がする。

彼が此姑家の母親に對する感情は、固より多少の遠慮や隔の無いではないが、自分の可愛がつた類樣を可愛がつて、間接に自分までも始終世話になるので、左も右も餘所々々しくは思はれぬ。今後の所帶の始末に就いても、半分は葉山の意見、半分は此人の了簡も聞かねばならぬ位には考へてゐる。

其は單に感情の上から、柳之助が然うまでに考へたのであるが、事實は最一層然らなければならぬ理になつてゐるので、例へば、家政上經驗の無いお類の手には餘る事が間々あつた。そ

の都度母親を呼立てゝ、力を藉りる事もあれば、相談を懸ける事もあり、陰ながら其保護を受けてゐたのである。獨り何時でも呑氣な柳之助は、米の直も知らなければ、膳の魚の名を聞くでも無く、月々お類に扶持を宛行つて、日々に其又宛行扶持を受けて、所帶向の事は一向御坊樣であつたから、お類も御坊樣は敵手にせずに、母親ばかりを頼にして、萬般賄つてゐたのであるが、那樣事も柳之助は悉しく知らずにゐたのである。

　内證に恁云ふ關係があつたのであるから、鷲見に歸いだ娘なれば、既に歴とした一家の主婦である、赤い切掛けた島田の内とは違ふものを、母親は猶且内に居る娘が親類へ泊にでも行つたやうな氣で、昔に變らぬ愛情を有つてゐた爲に、折々お島から怨言を云はれて苦笑をした事さへある。

　故に其關係から謂はうなら、鷲見は桃瀨（お類の生家の姓）の別家と云ふ狀で、會計上の關係こそ無かつたが、其他の一切は、春は延餅の厚さから、夏は浴衣の見立、夜寒に風をお引かせ申すな、炭の廉いのがあるから買つて置いてあげた迄、事とあれば、「阿母さん、阿母さん！」であつた。憚も無く、煩く面倒を見させられるので、子は可愛い、母親はいつまでもお類を子供のやうに思つて、其子供に世話される柳之助は、子では無いが、他人では無い、則ち婿といふ一種の可愛い所のある、有繫に便に思はるゝ人、其人は、無邪氣一方の、お坊樣が成人して髭の生えたばかりのであるのが、却つて恁云ふ地位に居ては最愛がられて、「小才な浮露のよりは、藝さへあれば男は彼の方が可いのさ。」と母親は常に言つて、漆は剝げるが生地は剝げぬ、といつも柳之助の同じなのを、第一の取柄にしてゐる。

　實意で訴へれば必ず實意で受けてくれる、信に人の親らしい、と以て柳之助は此母親を信じてゐた所へ、お類の病中の世話から、續いてその亡後の始末まで、身一つに引受けて、而も自分と同じやうに悲むで、同じやうに泣いたのを見てからは、いとゞ頼しく思ふ人の今日來たのは、何にも換難く心嬉しいのである。

　嬉しくは思ひながら、口頭に出しては言得ぬのも、母親一人ならば未だしもなれど、お島と云ふ例の他人が傍に居るので、氣屈さうに、柳之助は嚴々してゐる。母親は前から話の内も浸々柳之助の顏を視てゐたが、

「何處ぞ御不快のですか。」と竟に訊ねた。

　私も然う思つてゐたと言ひさうな顏で、脇正面からお島も眤と目を着けてゐる。

「いゝや、別に……。」

「然うですか、大變お痩せなすつたよ。」

　氣遣しさうな目をして母親は益眺める。

「お痩せなすつてねえ。」とお島まで言出した。

「毎日どうも不愉快で……可けません！」

　と言ふのを待構へてゐたやうに、母親は、

「その所爲ですよ。」と一も二も無く言へば、果然言中てられた風情で、柳之助は返す言も無い。

「而して内にばかり御在なさるのは可うございませんよ。未だ御出勤をなさらないさうですけれど、外へ出ると氣が紛れて、却つて好いものですから、お可厭でもね、無理に御出勤はなさいましよ。又餘り長く休むで御在では不可のでせう。」

「何有、それは病氣屆をして置いたですから。」

「だつて、病氣でもないのに病氣屆をして遊むで居ては、酷いぢやありませんか。」

　お島は一寸笑ふ。

「皆行るですよ。」と言ひながら眞面目の柳之助が可笑いとて、お島は又一寸笑ふ。母親も

生眞面目、
「他は他ですわね。身體の爲にも宜うございますから、奮發して出て御覧なさいまし。」
「それは出やうとは思ふです……。」
「思ふばかりぢや可けませんね。」
外に所在も無いので、お島は又笑ふ。
「思ふですけれど、朝になつて、行からうとすると可厭になつて……。」
「それぢや何にも成りませんね。」
「如何か爲やうは有りませんかな、毎日寂しくて、寂しくて、實に居ても起つても居られんですがね。」
「元とも其話をして居たのですがね、それは今迄居たものが急に居なくなつたのですから、然うでせうとも。」
「實際然うです。」　と行き懸の顏を柳之助は屹と振擧げる。
「私が内の方が手が放されると、當分の内でも來て居て上げたいのですけれど、何分にも……。」
「それは好いですな……其處に居て下さい。可いでせう、好いですがね。」
[illegible]になつて[illegible]を覺えず、爲に母親は[illegible]いほどいろ〳〵手數を掛けられながら、心中に思案をしてゐる。

「お内の方は如何かなるでせう。」　と母親はお島と見合ふ。
「如何もねえ。」
「然うねえ。」　とお島も瞬すばかり。
「何とか考へませうけれど……。」
暫く姿の見えなかつた元が突然出て來て、
「さあ御掃除が出來ましたから、何卒御二階へ。」
柳之助は先づ案内に起つ。母親とお島は續いて縁に出ると、柳之助のコオトの襟が歪みなりに折れてゐるのを、お島が見付けて、
「あの、襟が。」
と心着けると、一寸正したのが、猶可笑しく歪むだので、お島は寄つて、整然と正して、次に肩の雲脂をば持つてゐる絹の手巾で二つ三つ拂へば、媚かしい香が鼻の頭へぱつと立つ、柳之助は忽ち思出して、階子を踏むさへ氣の無さゝうに、づしりばたり、づしりばたり。
「何しろ、恁して家を有つて御在なのに、世話をしてあげる人が無くては、信に不都合ですねえ。」
と其ばかりを母親は切に苦にする。
「不都合ですとも！　然し、唯不都合だけなら我慢は出來るけれども、寂しくて、寂しくて、内に居られんですな。始終顏の事ばかり胸に浮むで、考へれば考へるほど氣が[illegible]に來て、奈何したら可からうと思ふです。今日なども恁やつて貴方が來て居られると、何と無く顏が今に昇つて來るやうな心地がするですね。――死んだとは想はれんです。」
故と他を見てゐる母親の目には零れさうに涙が一杯になつてゐる。柳之助は怺情無く前から滴々と落してゐるので。お島は未だ然ほどでもないが、他の泣くのを見てもゐられず、愁然と俯いて、どうやら身に浸みる氣色。
「病中は非常に貴方が世話をして下すつた。私の心配も非常でした。吁、然し死んで了つたです！　死んでくれては實に困るです。私は這麼困つた事は無いです。種々未だ用が有るのですのに……もう一遍逢ひたいですな。」
と破れたやうに柳之助は泣出す。
「もう〳〵其話は止しませう。貴方も諦めて下さい、よう、過ぎた事は爲方がありませんから。何でも氣を引立てゝ、身體が大切ですよ。つまらない事を考へて病ひでもすると可けません。」
まだ〳〵泣きたいのを怺へて、母親は涙を拂つて見せる。
「顏の事を考へてゐながらも、今日のやうに貴方がたが居られゝば、未だ幾分か心強いです。」

唯一人で考へ出す時は、實に其は耐らんですね。」

「ですから單獨は可けません。」

又母親は單獨で置かぬ工夫を案じてゐる。

「貴方に當分泊つて居つてもらふ譯には行かんですか。」

「それが、ね……。」

「然うすると非常に好都合ですけれど。」

「それでは、ね……。」

とやう〳〵母親が言出すと、柳之助は勢好く話の方に顏を向ける。

「如何にか都合をして何しますから、明日はまあ御墓詣をして、明後日から學校の方へ御出なさいますか。」

「出ませう！」　と柳之助は一層勢付く。

「お出なさる？　なら左も右も都合をして、……。」

「來とつて下さるか。」

「え〻、可うございます。」

「これは難有い！」

まづは愁の眉も展びて、菓子が出る、旋て午餉の膳が出る。是から日の暮れるまで唯坐つてゐるのも退屈、幸ひ天氣は快し、珍しく然ほどは風も起たぬから、明朝と云はず、今から墓詣をしては、と急に話が着いて、一時といふ頃三臺の車を聯ねて、谷中へ走らせたのである。

上野邊の一寸した所で晩の支度をして、點燈頃に歸つて來たが、其夜は久しぶりで二階の灯も下の灯も曠かに、臺所も靜に犇き、闇の木戸の開閉も聞えて、それが一時鎭ると、物の響は幽しい琴の音となつて、絲の調が絶えれば話聲がして、話聲が歇めば〳〵爪音が姑く續いて、十時前まで閑かに歡樂を盡す氣勢がした。

五の二

翌日柳之助は遂に出勤したのである、すると直に母親は、釜に湯を沸すやうに元に吩咐けて、二階へ昇ると、お島は新聞を用意して、是から冬籠をする氣で、火燵に火を入れてゐる。

「可けませんよ、それ所ぢやない、さあ〳〵用が有るのだ。」

と突如に急立てられて、迅雷耳を掩ふに遑あらず、お島は火箸を持つたま〻、

「何？」　と長く引張つて、其間瞬も爲ず母親の顏を視る。

「掃除をするのだよ。」　と母親の急くほど、

「何處の？」　とお島は猶落着く、落着く譯ではない、餘程吃驚したのである。

「大掃除をして、此二階を綺麗にするのだから。」

「此二階の掃除？」

何だかお島には全然理が釋らぬ。

「何故、阿母さん。」　と依然急かずに訊ねると、母親は益落着きかねて、

「何故でも可いから、早く支度をおしな。」

お島は悔しさうに折角入れた火を埋けて、憤れたさうに立起つて、怨めしさうに母親を見たのである。掃除を爲ろなら爲もせうが、始の約束だ、お墓詣に來たので、お客に來たので、泊に來たので、何の爲に好い着類を着て、髮を結つて、御土産を持つて來たのであらう。如何考へても、他の家の掃除をしに來たのではない！親の言ふ事ではあるが、お島は不服であつた、が不服とは言得ぬから、

「この寒いのにねえ。」　とばかりで、母親が傍で精々と身支度するのを棒立になつて拜見してゐる。母親はぐいと一つ下紮を紮めて、

「さあ、よう、寒いことがあるものかね、阿母さんさへ恁云ふ勢だ。」

「好い勢ね。おゝ、寒い！」　と袖を重ねて身を竦める。

「早くお爲なね。」　と少し睨まれて、漸く友禪縮緬と黑繻子の晝夜帶を解始めると母親が、

「寢衣を持つて來て、その上へお端折り。」

故と彼方を向いてお島は返事も爲ずに、出來るだけ其だけ遲々してゐる。其間に母親は支度をして了つて、忙しげに下りて行くと、迹はお島の獨舞臺。最初の所作は、其處に解いて置いてある帶揚を故々取つて、放付けて見る。それから、くる／＼と帶を解いて、又放付けて見たが、是は根から御倚合なかつたのである。

「此寒いのに、他の家へ來て掃除なんぞを爲なくても可いのに！」

「お島や、お島！」　と階子の口から母親が喚ぶ。

「何？」

「下へ來てお手傳へ。」

「餘り措いたら叱られやう、」と有繋に其も可恐に、お島は帶と帶揚を抱へて、旋て下りる。

程無く三人繫つて押寄せたりと云ふ勢で昇つて來たが、いづれも効々しい襷懸の手拭冠、帶に掃除、バケツトに雜巾、座敷箒等の得物を面々用意して、先づ雨戸を開めて、座敷中の道具を順繰に縁へ運出して、然れほどの掃除を始めたのである。

四邊に出てゐるお類の筐のやうなものは悉く取片付けて、從來老婢の手の屆かなかつた不潔をば刮去るやうに綺麗にして、天井裏も拂へば、疊も拭く、散かして在つた道具を秩序好く据直して、障子の硝子を磨いて次に火鉢の灰も篩つて、午まで係つて三人とも委靡して、お島は在合ふ椅子に靠れて茫々いつてゐれば、母親は平坦と坐つて息繼の煙草を吃しながら、相對して少時は語も無かつたが、一杯に射入る日影に座敷は輝くやうで、豁然と隅々も際立つて、列ぶものは列むで、納る物は納つたので、廣々としたのを、

「ねえ、お島、見違へるやうになつたぢやないか。」

と樂しさうに母親は眗す。

「此座敷こそ仕合だけれど、お客は災難だわ。」

午後には下も略と掃除をして、一通片付いた所へ、柳之助は精々と歸つて來て、何も知らずに内に入ると、間違へて他の家へ飛込むだか、と疑はれるほど綺麗になつてゐるので、

「誰か今日來るのか。」　と偶然元に訊ねる、と訊ねられた方が却つて希有な顏をして、

「何でございます。」

「客でもあるのか、大相綺麗になつたぢやないか。」

之を聞くと元は思はず笑つたのである。

「面白い事を有仰います！　貴方が旦那様でゐらつしやりながら、旦那様の御存じの無い御客様が有るものでございますか。」

「然だなあ。」　と又茶の間を覗いて、

「やあ、綺麗になつた、如何したのだ？」

「まあ、一寸御二階へいらつしつて御覽じまし。」

と獨り喜むでゐる老婢に逐揚げられて、柳之助は煙に捲かれながら昇つて見れば、實に二階の綺麗になつたことは、住荒した我家の俤は無くて、別けて驚かれたのは、始終陰々として一種の氣の曇つてゐたのが、廓然と晴れて、隅隅まで眩いほど明くなつたのである。而して不思議なのは、二人の居らぬのである。撞乎と座敷の中央に坐つて、四邊を珍しさうに眗してゐると、元が昇つて來る。

「お客様は如何した？」

「今し方御風呂へ御出になりました。」

「綺麗になつたな！　如何したのだ。」

元は始めて大掃除の始末を明して、御客様の骨折の嘸ならぬ趣を陳べる。柳之助は至極滿足して、然れば此母親に當分居てもらつたな

らば、幾許慰められるであらう、と益懐しくなるに就けて、昨日あたりから、必ずしも忘れるではないが、幾分か紛れるかして、此日頃緊りと胸に充ちてゐた愁も次第に蒸發して、其量を減じて行くやうに覺ゆるのである。

もう歸るか、もう歸るか、と待つ間を獨兀然としてゐると、一旦蒸發したものが忽ち集合して、又胸が苦しく塞がる。

這麼に家を綺麗にした所をお類さんに見せて、喜ぶ所を見たい。此家には限らぬ、甚麼物が有つても、甚麼事を爲ても、自分一人が喜ぶだけでは、一向張合は無い。類さんに喜むでもらふのが自分の一種の喜である。愁い事がある。類さんが傍から慰めてくれる！ 樂な事がある、類さんが一所に喜むでくれる！ であるから何を爲る効もあつたのだ。今では其張合を失つて了つた。吁、寂しい、心細い！ 渺々たる大洋に唯獨泛むでゐるやうなものだ。世間には人が多いけれど、其は浪のやうなもので、決して頼にはならぬ。頼になる人は死んで了つたのだ。

情無い。情無い！ 生きてゐたらばと思ふと身も世もあられぬほど戀しくなつて、コオトの内衣兜から急に紙包の寫眞を出して、ずらりと四枚疊の上に並べて、片手を支いて、熟と眺めてゐたが、軈て束髮の一枚を取擧げて、生けるが如く接吻をすると、涙がほったりと寫眞の横顔を濡した。手早く手巾を出して、窃と拭いて、次は島田のを取つて、視てゐる最中、二人の歸つた物音に、慌てゝ搔集めて、紙に引裹むで、衣兜に入れて、手巾を忘れて立起る。直に二人は昇つて來て、柳之助の顔を見ると、泣いた目は未だ濡れてゐる。母親は何とも言はぬがお島は頻に見る。拭かうにも手巾は無し、頻に瞬をしながら、鼻聲で掃除の禮を述べる。

獨で居れば憶出すが、母親の前では例の紛れて、此日も然ほどは味氣無いでもなく暮して、夜となる。夕飯には母親の注意で一銚子付けて、食後には茶を點れて、一時お島の琴の調があつて、元も呼ばれて、左も右も人數であるからそれだけ賑に十時頃まで雑談をして、三人は二階に寝る。元の方便品は殊勝ながら、都合に因りて母親が陰に差止めたのである。

朝になると、寒いのに母親が効々しく先に立つて、お島を敵手に食事から、衣類から、時間の注意までして、出勤せねばならぬやうに仕向けるので、柳之助は義理にも出掛ける。

お類に成代つて氣を着けるのが母親で、動くのがお島で、此二人が寄つて、お類の居た時のやうに柳之助の世話を爲るのであるが、その行屆く點から謂はゞ、世慣れぬお類が、人形に衣類を着せるやうな世帶の持方とは違つて、一家の爲にも、一身の爲にも、彼此柳之助に取つては、幾倍の利益はあるのである。

母親の善く爲てくれる事も、お島の善く働いてくれる事も、柳之助は有繋に解らぬではなかつた。或事に就ては用意と謂ひ、懇切と謂ひ、母たる人は母だけに、高が類樣などは企及も無い。葉山が曾て(年寄も世帶道具の一つなり)と云ふことを言つて、自分の經濟の不取締を責めた事も今更思中る、ではあるが、爰に一件其等には換へられぬ大缺點があつて、謂ふに謂はれぬ不足を感じる。それは懇切に於て、用意に於て、秋毫中分は無いやうなもの、又全く無いでもないと云ふのは、總ての仕事が機械的で？ ある。其實決して那樣事實ではないのであるが左右柳之助には然う感じられる、此機械的――其大缺點が柳之助の最も胸に徹へて、益類さんの忘れられぬ所以である。

母親を始として、お島も元も寄つて來つて、下にも置かぬやうにして待す。お類は殆ど放出

して置いて、現在給仕に付いてゐながら、自分の氣儘に手を擧げてゐる時には「おい、代！」と言ふのを、「貴方、手があるぢやありませんか。」と見向きもせぬ。それほどならば始から老婢を付けて置いたが可さゝうなものを、其は柳之助が不承知で、言はれて見れば如何にも手があるのであるから、其手を役つて杓子を持てば「あれ、然ら下から掘つちや可けないわ。」と小突れる。

非機械的も亦甚だ宜いが、柳之助の身に取つては、是が至極滿足なので、或者の深切よりは或者の邪慳が好いと云ふ其片意地を慰めるには、千萬の或者の深切も、到底如何とも爲ることは得はぬので。

然し、其が深切であつて見れば、柳之助も喜ばぬではない。唯他の或者の邪慳に比べては、不足に思ふ所もあるが、決して其をば深切の到らぬ故とは思へぬ。母親をも懐しいものに思ふ、が其實に僅に不足があるので、彼の心は安じない、獨で居れば憶出す、憶出せば耐らぬほど戀しくなる。如何したら此の不足が無くなるか、と云ふ事に就いては、柳之助は全く考へなかつた、類さんさへ歸つたならば、と始終思ふ外には、而して類さんの外には此不足を充すものは斷じて無いと信ずるほど、追慕の念は彌已まぬのである。

獨り母親が其を考へたのである。葉山も陰に心掛けてはゐるが、母親の方が差迫つて考へてゐる。其事に就いてか、外に用事があつてか、此日柳之助が出ると間も無く、母親はお島を遺して單身で出掛けた。それを送つて、二人は奥へ入りながら、

「お嬢様、お一人でお寂しうございませう。」

「姉様が居ると好いのですけれど。」

「然やうでございますとも。折角御泊にお在あそばしても、奥様が在らつしやいませんではお樂がございませんねえ。今日は半休でございますから、直に旦那様も御歸來になります。」

「兄様ぢや困るわ。」

「御姉様の代に御世話をなすつて上げて下さいまし。何を致しましても私では御意に入らないのでございますから。」

「私も困るわ。」

五の三

柳之助は歸つて來る、食事を濟す、悠然と二階へ上る。續いて元は勝手へ退つて片付物をする。半時間ばかり經つて、其處を仕舞ふと、茶の間に出て來て、まづ火鉢に取付く。二階は閑寂としてゐる。

大相靜だ。お二人とも睨合で、然ぞ窮つて御在なのだらう、と元は勤篤に見舞に行つて見れば、柳之助が惘然と火鉢に靠れて、傍の机に厚い西洋本の畫の入つたのが披いてあるばかりで、お島の影も見えぬ。

「おや、旦那様、お嬢様は？」

「知らんよ。」　と柳之助は澄してゐる。

「おや、おや、御二階ぢやないのでございますか。」

「然だ。阿母さんは何時頃歸つて來られるのだ。」

「私は一向存じませんで、それはお嬢様が。おや、まあ何地へ行らつしやいましたらう。」

と元は倉皇と下りて、

「お嬢様！」　と呼むで見ると、小座敷の内で返事をする。

「あれ、まあ此方に在らしつたのでございますか、私はお二階だとばかり存じましたのに。」

と襖を開ければ、窓の際の日向で新聞を見てゐるのである。

「貴方お二階へ行らしつてゐて下さいましよ。」

「何して在らつしやるの？」　と振向く拍

子に燦然と眼鏡が厳しく光る。
噫、島田に眼鏡！　折角のお孃様も臺無しになる、と允は熟思ふ。彼の解つた阿母様が如何間違つて這麼眞似を爲せるのであらう、と最一つ熟思ひながら、
「又何だか鬱いでゐらつしやいますから。」
「然ですか。」　とお島は起上つて、一寸身繕をしてから出て行く。二階の障子を啓けると、
「兄様！」　と聲を懸けたが、柳之助は其を聞くと、甚麽ものであつたか、異に胸が騒ぐやうな心地がした。
彼の（兄様！）と呼ぶのは今に始めたのではない、お類の存生中折々遊びに來た時分からの（兄様！）で、又改めては一昨夜からの（兄様！）である。けれども柳之助の耳には、今日の（兄様！）は例のとは違つて、別の意味でもあるやうに聞えたのである。
その所爲か、入つて來たのを見向いたばかりで、柳之助は返事が不圖出なかつた。例よりは羞しさうに入つて來て、火鉢を一寸離れて、投出されたと云つた風に坐つて、
「遊びに参りましたよ。」
總ての様子が何となく變つてゐるので、柳之助も調子が合はなくて、
「あゝ、然ですか。」　と變に稜のある應答をして、憚つたいやうにしてゐるので、お島は間が抜けて、少しばかり怯悒ついたが、
「お茶でも點れませうか。」
と火鉢の傍へ躪寄れば、柳之助は迷惑さうに靠れてゐた身を退けて、
「はあ。」　と机の方へ向直る。
見ると、火は大方白くなつてゐるので、お島は炭を繼ぎ始めたが、餘り顔と顔との近いのが極いやうで、柳之助は益逃身になる。お島は割に臆した様子も無く、小取廻に其邊の始末をして、湯の沸くのを待つてゐる。机に向いて、書見を爲るのでもないのに、柳之助は何を一言言ふでもなければ、此方を向かうでもない。實はお島も話が無いので、鐵瓶の胴を摩りながら、
「晩方には阿母様は歸ります。」
「あゝ、然ですか。」　と一寸此方を向いたかと思ふと、直に彼方を向いて了ふ。
「御歸になつたら、能く氣を着けてあげろ、と然う申して参りましたけれど、私には何だか一向氣が着きませんから……。」
と例の片靨でお島は微笑む。
「いや、別に用も無いですから。」
「御用が有りましたら、御遠慮無く。」
「可いです。」
話は又此で斷れて了つたが、湯は未だ沸きさうにもせぬので、お島は氣にして炭を直してゐると、
「茶は私が點れるですから、島さんは下へ行つても可いです。」
「あら、何せ用は無いのですから、私が致しますよ。兄様は御勉強なさるなら、爲すつて下さいまし。今直に沸きます。」
それでもとは推して言はれぬので、柳之助は已むを得ず書見を始めたが、氣が侵して讀むではゐられぬ、如何かしてお島を逐拂はう、と其ばかりを考へる。
お島の方では逐拂はれる人とは夢にも知らぬから、一廉引承けた氣で勤めてゐるのであるが、自分も亦多少面白づくで、彼此世話をして見たい氣味の無きにしもあらざる態で、内に居て阿爺様の腰を按つて睡氣催すのとは、同じ面倒を見るのでも、大分氣持が違ふ。
若し柳之助が尋常であつて、此くらゐに口數を寡く、此くらゐに冷遇をした事なら、お島は艴然として起つに違無い、けれども、柳之助の素氣無いことは、豫て心得てゐる。其口數の

尠いのも　其冷遇なのも今日に限つた事ではないと、十分に存込むでゐるから、怎云ふ人物だと層惜をして、格別氣にも懸けぬのに、想はざりき！　柳之助は難有迷惑で、如何か早く始末を付けたい、と實は勃々してゐるので。

「あゝチン〳〵いつて來ましたよ。」

とお島は鐵瓶に觸つて見る。

何か言はれる度に柳之助は冷汗が出るかと思ふほど可厭で可厭でならぬ、其を怺へる爲に兩手で頭を支へて、見たくもない本を睨と視てゐる。その様子をお島は見付けて、窃と覗けば、眉を皺めて、息を屛めてゞもゐるやうに見えるので、

「兄様、如何か爲すつて？」　と人懐こい調子で訊ねる。

その（兄様！）が骨身に浸みて、柳之助は耐へられぬほど可厭であつた。物を言つてくれなければ可いに、と遂々思ふのに、連に何か言ふ。其上に（兄様！）は我慢がしかねる。

「いゝや。別に……。」　と言ひながら、起つより早く倏々と座敷を出て、下りは下りたが、行所も無いから、庭へ出る、嚴しく寒い。寒いけれど出たものであるから、足の向くまゝに、地尻の杉垣と物置の蔀とで矩形に劃られた物干場の方へ廻つて見ると、隈笹の所斑に生えた日陰に、長い霜柱の齒々と立つてゐるのが癪に障つて、三足ばかり踏付けて、颼と來る風に吹捲られながら、緣側に還つて來れば、お島が丁と其處に待つてゐる。

「本當に如何なすつて？」

柳之助は進退谷つて、

「寒いですよ、二階へお出なさい。」

「貴方も入らつしやいな。」

逾弱つたが、免るゝ路も無い。

「行くです。」

「さあ。」

此困厄に就けても柳之助は母親の歸來が待たれた。お島は又、母親が傍で、睨まれるのは餘り香しくない。實は何でも遣つてのけたい氣が勝つてゐるので、それには煙たいものゝ無い方が勝手である。

從來度々、お島は遊びにも來たが。柳之助と對坐は今日が初發なので、姉が居なければ母親が居て、毎も自分の出る幕は無かつたから。萬事控目に控目にとしてゐたのである。

元來母親の教育の方針は、何處までも女子は温和に品好く、と云ふのであるから、娘に向つての小言は、其躾ばかりであつた。姉のお類も隨分世話を焼かせたが、母親の望む所迄は行かぬ間に、柳之助に緣付いたかと思ふと直に今度の始末となつた。お島は又姉より一倍世話を焼かせる、則ち母親の教育の方針には、姉より多く其性質が悖つてゐるのであるが、母親はそれでもお類を躾けた時のやうに、焦燥と氣骨を折らぬので、目も離されぬやうにしてゐながら、こつそりと遠退いては眺めてゐる氣味がある。畢竟それは、お島が何でも遣つて退けやうと云ふ氣だけに如才無い所があつて、其點に於ては、我子ながらと思ふほど出來すのが、母親は何より嬉しくて、何程の事を爲得るか、それが見たさに不知綱を弛める事もあるのである。

姉のお類も決して遲鈍の方では無かつた。なるほど躾ける目から見たら、足はぬ所も數有つたらうけれど、母親が案じたほどの意氣地無さは無かつたのである。然し、その十八で爲た所作をばお島は十五で爲て見せた。賢い代には間違ふと往々と出過ぎる。其を出過ぎぬやうに。而して賢い所は何處までも賢いやうに、と母親は始終笞を執つてゐるのであるが、何かに就けて此才氣が穂に露はれるから、自から温和に品好くといふ母親の註文には合ひかねた。けれども親の慾は、能く氣が着いて、拔目の

無いが上に、温和に品好くといふのであるから、お島の身にしては極めての難題である。右の通賢いから、母親の前では憖ひ働振をして譏られうよりは、樂な温和の方が勝と極めてゐたから、それで丁度好い加減に如才無くて、十に七までは母親の氣に稱つてゐた。因で親の前のお島と人中へ出てのお島とは、大分調子が變るのである。

柳之助は始めて其調子に出會つたので、唯呆れるばかり。細君の類さんさへ、然までは爲てくれなかつた事を、この人は立入つて爲てくれさうなので、何と無く氣味惡く思はれる。お島の方では又、變人とは聞いてゐたが、浸々傍にゐるのは今日が初度であるが、なるほど變人に感心して、彼の姉樣が能く此人に辛抱が出來たと縁と云ふもの丶不思議と驚くばかり。

柳之助は如何ともお島を逐拂ひかねて、爲う事無しの一寸遁に、其最嫌ひのもの丶一つである浴になりと行て來うと思立つた。借したものを督責るやうにして勸めたが、毎も薄黑い襟をして、傍へ寄ると芬と膩臭いのには類さんも弱らせられた、やう／＼諫めて一週間に一度と出した、其さへ傍から突々かれなければ容易に出て行かぬ人が、今日は自分から浴にとは變だと元は思つた。

其日の夕方に母親は歸つて來たのである。柳之助は盲龜に浮木の歡喜であつたが、例の素氣無いことであるから、然ほど顏色にも言語にも顯はれぬ、唯火鉢の前面に坐らせて、何を斯と話を爲やうでもないが、内心は切に嬉いので。此難有い怨靈は仍其處に姿を顯してゐても、護符のある爲に、寄らうにも寄られず、立竦になつて怨めしげに見てゐる、それでも有繫に氣丈夫であるやうな想。その護符の母親が還つて來ると與に、怨靈のお島の樣子は脱然と變つて、是ならば傍に居られても未だ／＼辛抱の出來るほど、遽に温雅になつて、殆ど別人のやうに端然としてゐる。如何にも端然としてゐるは可いが、母親が居ると居ないとでは、是程違ふかと思へば、何の故に母親が居れば温和にしてゐて、居なくなると忽ち馴々しくするのであるか、柳之助は甚麼事にもお島の了簡が解めぬのである。實に柳之助の怪む如く、お島は急に温和になつて、母親の傍が離れられぬやうに内端にしてゐる。それをば柳之助は不思議さうに、且は氣味が好さゝうに、折々見遣つては母親の話を聽いてゐた。

其内に母親は少し改つて、

「それからねえ……。」と言出したが、餘り言ひたくはない事らしい樣子で、

「お茶を一つおくれな。」と故とお島の方を向いて、何と言つたものであらう、とそのまゝ考へる躰であつたが、旋て此方を向くと、

「内へ歸つて、今日話をして見たのですよ。」

何の話やら一寸解らなかつたので、柳之助は胡亂に、

「はあ。」と先づ應へると、

「あの話、私が當分此方に來てゐる話ね……。」

それでよく解つて、

「はあ、はあ、はあ。」

「話をしました所が、殿君の言ひますには、未だ如何も加減が爽快しないのに、私が居なくては信に不都合だ。何ならば斯しては如何だ、お島はどうせ遊んで居るのだから、私の代に當分お島を置いて、お世話を爲てあげたが可からう、つてねえ。」

衝跳したのは柳之助、お島は別條も無く聞いてゐる。

「私と違つてお島ならば、若いもの丶事であるししますから、お爨婢代りにもなるし……。」

と言つた時は、有繫にお島の目は（情無い事

を言つて下さる）御母樣の顏を斜に見たのである。

「貴方の方でもお使ひなさるのに氣が置けなくて、却つて可からう、つてね。それは間に合ふことは、私よりはお島の方が餘程間に合ひますのさ。阿父君も今晩あたりは又些と氣分が惡いので、私に行かれては困るとお言ひなさるのを、直に歸つて來る約で出たのですから、其話旁今夜は行つて、明日早く歸つて參りますと云つて、無理に出て來ましたの。ですから、お島をね、私の代に遣いて參りますから、何分お賴み申しますよ。」

呆れて柳之助は何とも言ひかねた。此人を傍に附けて置かれるよりは、獨で寂しい方が遙に勝。設へば山道を行くのに、杖も欲いが、其が無いならば無いでも、無いからとて荷物を持たせられるのは迷惑。柳之助は殆と挨拶に窮つたのである。此儘にして置けば荷物を持たせられるし、折角好意で言つてくれるものを、無下に斥るのも氣の毒なり、如何したら可からう、と頻に考へてゐる側で、母親はお島に向つて、明日からの心得を諄々と說いてゐる。

六の一

折角の好意ではあるが、折角にも好意にも換へられぬので、柳之助は思切つて其折角を斥つたのである。斥りは斥つたが、隨分斥り難いのを、重くるしい口ではいとゞ語が足りなかつたので、母親は此人がお島を所惡とは知らぬから、斥る理が解らなくて、唯例の變人から否むのであらうけれど、此人の爲から云はゞ、如何しても自分かお島か附いてゐるに越したことは無いと信じたから、設むば少々可厭がつても、是非附人は置いて行くと、藥を飲ませる了簡である。其も決して母親の一存ではない。お類が歿くなつてからの柳之助の樣子は、一部始終元から聞いてゐる。どうでも家内を些と賑にせねば、益鬱して了つて、彼分では病氣にもなりかねぬ、斯である、那であると、自分が見てゐて心配でならぬ邊を話して、それには是非ともお孃樣を當分お貸し下さい、と懇々も陰で元から賴むのである。自分の所見も然である處へ、元からも然言はれたので、母親は柳之助の遲々した謝絕は沸湯へ水を滴すやうなものであつた。一言云へば二言に返されて、柳之助は母親から浸々說得されて、終には言句も出なくなつて、話は其に極つて了ふ。

柳之助は頗る不平であつた。けれども常に不平のやうな顏をしてゐる人の事であるから、格別目には立たなかつたが、此時ばかりは母親も憎かつた、元は怪しからず生意氣であつた、お島は固より可厭な奴！

然し子供でもないものを、無遠慮に要らぬ世話を燒いて喜ぶやうな母親でもない。但お類に敎へられたことがある。「彼人は那云ふ人物だから、此方で善いと思つたら儘々然う爲て了はなければ可けない。」實際お類は此主義で一家を支配してゐたのである。母親も始終其を見てゐて、又與つて力を盡した事も尠からぬので、今度の件に就いても其主義を執つて、（此方で善いと思つた）から、（儘々然う爲て了つた）ので、敢て柳之助の拒否を侮つて阿母樣ぶるのでもなければ、變人を好い事にして掻亂したいのでもない。

其翌日柳之助の出發を待つて、母親は自宅へ引取つた、お島は早速木綿裏の衣服に着替へて、袂から友禪の襷さへ出る始末。それを見ると、

「如何な事でも、貴方、那樣物を。」と元は笑つた。

「いゝえ、働きますよ。もう今日からはお客樣ぢやなくつて。」

御手傳といふ資格で、二階掛と爲つたのである。

彼は金縁の眼鏡を掛けて、薄色縮緬の羽織を着て、お孃樣として見たよりは、働きぶりの世話に變した娘形の方が、遙に樣子が好く見えるので、同じ同胞でも、亡くなられた奧樣は召物の裾を曳いて、人の働くのを懷手して立つて見てゐらつしやるのが御好であつたし、又其が好く御似合なすつたが、と元は何方かと云へば、如才ないお島の方に惚れたのである、若し是で眼鏡さへ無かつたら、と顏を見る度氣にしてはゐたが。左にも右にもお島は能く行屆いて柳之助の世話をした。總ての仕向が姉よりは深切で、而してなか／＼實意もある。好く爲れるだけ柳之助は煩惱くて、三日四日と經つほど益々悚へかねる。傍に居られたら、勿論の事、聲か聞えてさへ心地が快くないのに、否といふほど附絡はれるので、內には居禁らなくなつて、一日學校から歸ると直に飛出して、(類さんの所)へ行つた。

空は雪氣に曇つて、野廣い墓場に人兒一人見えぬ。高い木と赤土と、無數の墓石と凋れた花と、鳥の音と自分ばかり、其間をば悲い風が絕えず吹いてゐる。此に來ると胸が忽ち張裂けるやうになる。忘れてゐた事も盡く憶出されて、我ながら怪しいまでに涙が出る。柳之助は隣の墓の臺石に腰を掛けて、森としてゐる四邊の閑寂を、もしや地の下に聲など爲はせぬかと待つやうに聽澄しては泣いてゐた。吹募る日暮の風に落葉は雨の如く降被るを、頭から一杯に浴びても、仍動かずに復らぬ事を思窮めて、折々名殘惜しげに、傾く日影を見返つては、起つにも起たれぬ氣色であつたが、今まで見えた其處の高い碑さへ模糊となるまでに暮れて來たので、

「もう行からうか。」とやう／＼起上る。

落葉の中の二坪ばかり、是が類さんの居間か。雨曬の樸の五寸角、是が類さんの今の姿か。無常は世の習とは云ひながら、見れば見るほど考へれば考へるほど、情無いやら、慘しいやらで、如何にも見捨てゝは歸りかねたのである。いつまで居た所で際が無い、歸ると決して、その墓標に寄つて淒々と別を告げた。鷲見類子の墓、其字は葉山が書いたのである。

一あゝ葉山！ には幾日會はんのだらう。爾來未だ會はんのだ。此方から行かんければ何も尋ねて來るのだけれど、慍つとるのか知らん。さも無ければ、這麼に久しく來ん事は無い。或は慍つとるかも知れん、是は行かんけりや惡いな。」

葉山の所へ行けばお種と云ふものが控へてゐる。內へ歸れば、お島と云ふものが待つてゐる。柳之助は行くべき所に心を樂ませる方はない、而して行かねばならぬ所は何處も心を苦める所。從來然云ふ場合には內へ歸つて慰められた類さんの、今居る所は、折角來ても慰められぬ墓場である。墓場でも可い、窖の中でも可い、已むなくば、慰められぬでも可い。せめて顏なりとも見られるならば、其一時間の爲に柳之助は百人のお島とお種の中に十日の辛抱をするでもあらうに、その最も慰めらるべきものに、最も悲まさるゝが上に、苦めらるゝのである。

柳之助は進まぬ足を曳いて谷中を出た。さてそこで、葉山の所へも餘り行きたくはなし、內へは猶更歸りたくはなし、師走の寒空に黑闇を彷徨いて、心の慰む由も無いから、早く暖い內へ入らねばならぬ。進まぬ足も寒に急がれて、彼は眞一文字に湯島の切通を上つたが、凡そ一時間の後には葉山の玄關に埃塗れの靴を脫いでゐた。

六の二

「あゝ、丁度好かつた。今君の家へ寄つて歸つて來た所だ。久しく見えなかつたぢやないか、帽子以來だ。」

と葉山は可懷がる。然言はれるほど面目無くて、柳之助は纔に苦笑をする。

「けれども君も些も來てくれんぢやないか。」

「彼翌々日急に名古屋の方へ出張して、昨夜歸つて來たばかりさ。」

「あゝ、然うか、居なかつたのか。」

「留守見舞ぐらゐには來てくれさうなものだ、と實は此方から恨むでゐたのだよ。」

「少しも知らんだつたものだから。」

「元に聞いたが、此頃は毎日學校へも出るさうだね。」

「あゝ、爲方が無いから出る。」

「何が爲方が無い奴があるものか、結構さ。其外に未だ變つたことがあるだらう。」

柳之助は首を傾げて、

「何も無いな。」

「否、有る理だ、能く考へて見給へ。」

推圖通り柳之助は改めて首を傾げて能く考へたが、

「何か知らん、どうも無いがな。」

「君の家に美しい人が居るぢやないか。」

之を聞くと柳之助は苦い、苦い顔をして、

「うむ彼か！」　と言つた限。

「獨で承知してゐたつて、私には解らない。彼は何處の人？」

「彼は何でもない。」

「何でもないとは妙ぢやないか。何かだらう。」

「類の妹さ。」

「それ見給へな、お類さんの妹なら君にも義理の妹だ、それを何でもないとは怪しからん事だ。」

柳之助は是非に及ばず、

「それは然うさ。」

「あゝ、それぢや泊懸にお手傳に來てゐると云ふやうな事實かね。」

「然うさ。」

「始めて見たが、姉様には些も仔てゐないね。」

「仔るものか！」　と吐出すやうに言ふ。

「大層愛相の好い、氣が利いてゐさうだね。」

「如何だか僕は知らん。」

「何といふ名だい。」

「島。」

「お島さんか、婀娜な名だ。」

「君は女子さへ見りや誰でも賞める。」

「那樣に有仰らなくても可い、好いのを好いと言ふ分には差支はあるまいぢやないか。」

「ぢや彼は好いのかい。」

「まあ、一寸好いね。」

「僕は嫌ひだ。」

柳之助は此嫌ひなお島を何とか處置したい爲に、葉山の智慧を借りやうかの所存もあつたのであるのに。（好いね）と聞いては甚だ頼もしくなかつたが、問はるゝまゝに、泊懸に來て居る來歷を一遍話して聞かせると、

「なるほど。それでは聞いて見るほど君は先方の好意を無にしてゐる理だ。第一お島さんが可哀さうぢやないか。」

柳之助は不快な色をして、

「君は直にお島の事を言ふ。」

「言ふ理ぢやないが、深切に世話を爲に來てさ、嫌はれてさ、結局が逐還されは、隨分氣の毒な話ぢやないか。」

「氣の毒でも何でも嫌ひなものは爲方が無い。如何かして還して了ひたいと思ふのだけれど、還つてくれとも言へんしねえ、可厭で耐らんのに、傍に附いとつて頼みも爲ん事を爲て、實に愼惜くてね、僕は這麼弱つた事は無い。如何か

君、嫗に還す方はあるまいかね、僕はもう彼が長く泊つとるやうなら、内には居らん意だ。」
と柳之助は思込むで言ふ。
「何を行らない事を云ふのだ。内には居ないと云つたつて、誰の家なのだ。」
「僕の家さ。」
「自分の家を駈出すのかい、不見識極るねえ。」
と葉山は顔を顰める。
「それだから、何とか方はあるまいかと聞くのに、君はお島に惚れとるもんだから……。」
―おい〳〵大概にしてくれ給へ、惚れてるとは餘りだよ。」
「けれども好いと言つたぢやないか。」
―好いと惚れたとは別さ。君はお島さんは嫁ひだらうけれど、憎いと云ふほどでは無からう、其と同じ事さ。」
―まあ其は如何でも可いとして。如何か還したいのだがね。」
「其程可厭なものならば還すが可いけれど、私の考でも、當分居てもらつて萬事の世話を頼むだ方が可からうと思ふ。有繋は阿母様の經營で、私も同意だがね。」
柳之助は鼓舌をして、
「不要だー」　と顔を背ける。

―那様に又可厭なものなら嫁から斷れば可いのに。」
「今になつて那様事を言つたつて所爲が無い。」
「それは此方で言ふことだ。」
葉山も母親と同意といひ、且お島を好いと云ふ人であるからは、智慧を借りたいにも、到底出來ない相談と思つたから、もう言出すまいと爲たが、是から還れば、又お島を見なければならぬ、と思ふと悚然とする。是ばかりは如何でも怺へることは出來ぬのであるから、其に就いて智慧を借りるには、此葉山より外に人は無いと考へて、
「何と云つても僕は可厭なのだから、助けると思つて工夫してくれ給へ、ねえ僕は賴むのだ。」
―君が然う言ふなら然う爲るも可いけれど、考へて見たまへ、誠に理窟の合はない話ぢやないか。」
葉山の辭は漸く鋭い調子を帶びて來る。
―ねえ、他が折角深切に世話をしてくれるのを嫁ひだからと云つて斷る？　人情として出來ないことだ。幾許嫁ひだと云つても、少しは其深切に絆されさうなものだがね、君のやうな變人は全く多度無いよ。」
時に因ると、葉山は其平生と打つて變つて、

極めて率直に、極めて懇誠に、飽くまで痛切に言はねば止まぬ。其時には自から冒す可らざる氣力があつて、必ず人を動かすのである。柳之助は面目無げに熟と俯いた。
―君の目にも能く世話を爲てくれると見えるのだらう。見える？　然うだらうとも。それで君は嬉しいとも何とも思はないかい――如何だね。默つて居る所を見ると、嬉しくはないと見える、是は怪しからん！　して見ると、君がお類さんの事を思つて頻に零す涙、あれは空涙だね――あれは僞だね！―
―何故？―　と柳之助の尖聲を應けて、
―何故？　僞に違無い！」　と葉山も劣らず意氣込む。
―何故？―　と柳之助の目は彌輝く。
「それぢや、他の深切も嬉しいと思はなければならない理だ。」
「思ふ！　僕は思ふとも。然しお島は僕は嫁ひなのだから爲方が無いぢやないか。君は無理な事を言ふよ。僕が類を愛して居るならば、お島も愛さんければならんと謂ふけれど……。」
―誰が那様言を云ふものか。」　と手酷く極付けられて、
―然うかい。」　と柳之助は凹むで了ふ。

「私の言ふのは、細君に其程情があるならば、他にも相當の情が無ければならない、ねえ。忠臣は孝子の門に出づさ。一體君は妄に人を嫌ふけれど、嫌ひにも二様あるよ。第一が不吃嫌ひさ。所謂蟲の好かないと云ふ奴だね。第二は理由が有つて嫌ふのだ、恨が有るとか、説が合はないとか、善人が惡人を嫌ふとか。同じ嫌ひでも是は可いが、君のは第一の方で、性質の惡いのだよ。それも性分なら是非も無いけれど、其が爲に他の深切まで無にすると云ふに至つては不都合だね。切めて深切にされたらば、今まで嫌ひだつたものも、好きと云ふ迄には行かずとも、嫌ひでないくらゐには成つてもらひたいものだね、如何しても然う行かないかい。」

「僕は恁云ふ人間なのだから。」

「さあ、然云ふ人間だから困ると云ふのだ。」

と葉山は稍焦り勞れた體で、息を繼ぎながら少時柳之助の様子を瞻めてゐたが、

「それともお島さんに内に居られては、大いに迷惑するやうな事情でもあるのかい。」

此は如何なる意味であるのか、柳之助には解りかねたのである。

「迷惑するのは、可厭なのだからさ。」

「可厭なのは？」

「嫌ひだからさ。」

「嫌ひなのは？」

「嫌ひなのは‥‥可厭だから‥‥。」

「それぢや逆戻だ。お島さんが君の世話を善く爲ると云つて、一體甚麼塩梅に世話を爲るのだね。餘り世話を爲過ぎるので、それが可厭で還して了ひたいのかい。」

「其も有るさ。」

「はゝあ。」と葉山は口を開いたまゝ考へてゐる。其（はゝあ）が餘りに不審しげな（はゝあ）であつたので、柳之助は險難な目をして、其（はゝあ）の後に來るべき言を私に待構へてゐる。

「それぢや様子が變なのだね。」

「別に變な事は無い。」

「無い？　君が迷惑がるのは、お島さんが何か大いに女房氣取で世話を爲るからぢやないのかい。」

「女房氣取？　然うさな、然云つても可いかな。」と頻に胸の中で解釋してゐる。葉山は矢庭に、

「然うだ！」と膝を拍つて、

「確乎したまへ。」

「何が？」

「君は惚れられてゐるんだよ。」

「馬鹿な！」と柳之助は可恐い目をする。

「馬鹿なことがあるものか。女房氣取で君の世話を爲ると云ふのだらう、それが惚れてゐるからさ。」

「惚れてなんぞ居やせんよ。」と鬱陶しさうに横を向く。

「惚れられてゐるか、ゐないか、其を感じない奴があるものか。」

「だから惚れてゐやせんと云ふのに。」

「惚れてゐないものが、何で女房氣取に世話をする？　其が何よりの證據ぢやないか。」

「證據でも何でも、僕は可厭なのだ、嫌ひなのだから、如何かしてくれ給へ。」

「然う聞くと益不便だね、可いぢやないか、最少し一所に居て遣つたつて。」

「可かん可かん！」と膝を搖つて柳之助は其耐ふべからざるを示した。

葉山は柳之助が（女房氣取）と言ふ語を拒まぬ所から、切當お島は惚れてゐるものと早合點をしたのである。如何にもお島が殆ど（女房氣取）に世話をするのは事實に違無いが、その（女房氣取）は決して柳之助の女房氣取ではなくて、女房の女房氣取で、お島の（女房氣取）の心の内には一點も柳之助に對する戀は無

い、畢竟は彼の能く氣の着くのと、世話好とが過ぎる爲に、女房的に傾いたまでの事である。柳之助も固よりお島が惚れてゐやうとは、假にも思はなかつた。然し言はれて見れば、成程その世話の行届き方が（女房氣取）とでも謂ふべきであるから、（然云つても可いかなあ）と獨語ちたので、（女房氣取）なる語は世上の慣用に於て決して非戀ではない、三句は去らねばならぬ。さては葉山が一句で捨てなかつたのを早合點と云ふのは寧ろ酷であらう。男の方では好かぬのに、女が片思で、執念く附絡ふと云ふ有る例の、それは義理にも人情にも換へられず可厭なものさうな、今柳之助のお島に於けるのは即ち其型である、と葉山は恁う考へたから、それでは柳之助の可厭がるのも萬更無理ではなからう、と彼は變人を責める念も融けて、片思の人も不便ではあるが、男の性に合はぬのも、それまでの緣で致方が無い、氣の毒ながら手に掛けずばなるまいかと竟に覺悟をした。覺悟はしたやうなものゝ、葉山も當面其手段には窮つて、姑くは唯「然さね〳〵。」と言ふより外は無かつた。種々と工夫を凝したが、何も柳之助あたりが思付きさうな鼻元思案ばかりで、賴まれたほどの智慧は何う振つても出ぬので、終局には匕を投げて、

「これは窮つた！」と太息を吐く。

「君が窮つちや窮るよ。」と柳之助は氣が氣でない。

「何しろ先方の感情を害しては拙しと云ふのだが、根が感情を害する事件なのだからね――尤も其處が難しい所だから、他の智慧を借りるのだらうけれど――此智慧は一寸無いよ。」

と又熟と考へ込まれるほど柳之助は遣出して、

「甚麼のでも可いよ、僕には全で方案は無いのだから。」

「道具でも貸しは爲まいし、善いのだの、惡いのだのと、別の箱に入れてあるのでもないやね。何しろお島さんだけなら如何とも始末が付くが、阿母樣と云ふものが控へてゐるからね、これが餘程面倒さ。左右親と云ふ奴は何かに就けて邪魔にされる、昔から割の合はない役だよ。」

と苦しい中で猶且贅辯を言ふ。

「僕は君、母親は所好なのだよ、少しも邪魔にしては居りはせんよ。」

と極眞面目で言へば、葉山は呆れもしないと云ふ顏で、

「漫然洒落も言へない！ 今のは洒落だよ。折角洒落を言つても、傍から註らなければならないやうぢや、洒落の効が無くなるわね。」

柳之助は目が覺めたやうな容で、

「あゝ、洒落か。」

「あゝ、洒落かぢやないよ。」

憤たくもあり、可笑くもあり、横肚が奇痒たくなつて葉山は笑ふ。

「何處が洒落なのだ？」

柳之助は飽くまで眞面目でゐる。

「洒落に番地があるものか。」と今度は自分の洒落に感動して、葉山は大いに笑ふ。何故とも解らぬが、（洒落）に（番地）と云ふ配合が可笑いので、柳之助も一緒に笑ふ。葉山は又直に他を向いて、少時考へてゐたが、

「どうも今急には出ないから、今夜寢ながらゆつくり趣向して置から。」

「ぢや明日かい。」

「明日又學校の歸途に來るさ。」

「間違無いだらうな。」

「如何か考へて置くよ。」

「然うかい。」と柳之助は茫然してゐる。

「何を又鬱いでゐるのだ、一盃飲まう。」

「僕は何だ…飯の方が好い。」

聞取れなかつたか、葉山は聞正す、

「何が好いつて？」

「飯の方が。」

「飯？！　まだ喰らないのかい。そんなら早く言へば可いのに、要らない我慢をしたものだ、ちや腹が空いたらう。」

「隨分空いた。家に歸りや有るけれど……。」

と極の惡いやら、氣の毒やらで口籠る。

「飯の無い家があるものか。」

葉山は早速手を拍たうとすれば、柳之助は慌てゝ止める。止めた所で急に言出しかねて頭を掻く。

「如何したのだね。」

思切つて柳之助は、

「給仕が付いちや困るな。誰も出て來んやうにしてくれたまへ。」

「お易い御用だ。宜しい〳〵。」　と葉山は手を鳴らす。

七の一

柳之助は翌日又葉山を尋ねて遂に一策を授かつて、歸ると直に机に向つて何やら書出した。お島は傍に見て居れば手紙。何の手紙で、何處への手紙であるか、それを問ふ必要も無ければ、見る必要も無し、又聞くべきでもなければ、柳之助が覗かせも爲ぬのであるから、お島は唯手紙を書いてゐると云ふだけを認めたのである。旋て筆を擱いて、こそ〳〵と卷收めて、狀袋に入れて、上書をした。何と書いたのか其もお島は見えなかつた。すると柳之助は其を持つて座を起つので、

「あら、兄様、お手紙なら私が持つて參りますよ。」　とお島も遲れじと起てば、

「何、可いです。」　と振拂ふやうにして柳之助は座敷を出る。

手紙を出すに違無い。然ならば毎も他に出させるのを、秘すやうな氣勢は合點が行かぬ。然思へば、書いてゐる中も自分の方ばかり氣にしてゐたが、何の手紙で、何處へ遣るのだらうと爰に始めてお島は、（どうも變だ。）と直に後を追つて二階を下りたが、はや柳之助は見えなくて、表の格子の啓く音がする。元は居る。

「兄様は？」

「今お出掛になりましたよ。」

「何方へ？」

「郵便局とかへ行くと有仰つて。」

「あゝ然う。」　とお島も拍子抜がして、二階へ引返した。

彼は自分の邪推を悟つたのである。郵便局へ行かねばならぬ手紙とあつて見れば、元に投函させる理には行かぬ、自身に持つて行くのは是は當然。其をば變に思つたのは此方が早計つたのである。

手紙を書いてゐるのを、他に見られるのは誰しも不好たもの、強ち秘すではないが、見せたくはないもの、と益自分の非を悔いてゐると、表の格子の啓く音がする。おや！　と思ふ内に階子を昇つて來る音がする。又おや！　と思ふ所へ柳之助が入つて來る。

郵便局へ行つたと云ふのではないか。郵便局までは二町未滿もあるのではないか。駈けて行つたにしても、未だ行着かぬほどの時間に、歸つて來るとは是は異しい！

「何方へ行らしつたの？」　とお島は耐りかねて訊ねると、

「郵便を出しに。」

函なれば八九間先の角に在る。時間は其處へ行つたほどであるから、お島は其と察して、餘は聞かずに、

「郵便を出しにいらつしやるなら、元が參りますのに。」

柳之助は默つて机の前に坐つて了ふ。

「何故今日に限つて獨で……。」　とお島は靶

然として、益劇しく流眄に掛けたが、柳之助は背面になつてゐたから、其は石に矢を射るやうなものである。然しお島は(立つ矢もあるものを)と云はぬばかりに姑く見遣つてゐた。今日にも限らぬ、實に此頃は往々と然でない爲方が見える。自分に言ひさうな用をば元に言ふやうな事がある。それも恁云ふ氣の人物であるからと段々勘辨もして見たが、何やら然ばかりでもないらしい所もあるやうに想はれて、氣揣くないでも無かつた折から、此一條と二度まで挨拶を爲ぬ無愛相とが、酷くお島の心地を惡くしたのである。因で彼は自ら屑くして矢庭に二階を下りて了つた。其音を聞きながら柳之助は可恐いものを見るやうに振向いて、

「あ、慍つた！」

慍つたお島は其晩は遂に二度と机の傍に來なかつた。氣の毒な事をしたとは柳之助も思ひながら、又懊惱なくて可いとも考へる。然う考へる中にも、氣の毒なと云ふ念は絶えず往來して、餘り好い心地ではなかつたが、明る朝になると、お島ははや機嫌を直して、毎に變ることも無い。恁なつて見ると、昨夜の氣の毒は忽ち忘られて、寧そ又慍らして遣けたくなる。可厭で〳〵ならぬお島に三食ともに給仕をされるのが、毎日の苦痛で、渇いて飲まうとする水から焔が起つやうな想で、お島の顏を見ると、柳之助は半分の食慾を減じざるを得ぬ。家内なるものゝ快樂が十とすれば、寡くとも其四は膳の上に無ければならぬ。外で錢を費はうでもない柳之助は況て人一倍家内で慰められてゐた。類さんの給仕でなければ、決して箸を把らなかつたものが、是では彌滿足の出來やう理が無い。彼は其樂を享くべき時に最も深く苦まされるのであるから、彼のお島に對する不快の念は一食毎に增長すると云つても、敢て差支は無い。柳之助は近頃自分の窶れて、色澤の惡いのを見て、是は畢竟お島の爲に消化力を碍げられて、十分に飯が食はれぬからではあるまいかと疑つてゐる。けれども此朝は平生よりも食が進むだ、葉山に授けられた策も今日中には行れて、明日から光風霽月の天地に呼吸するのであると云ふ希望の爲に勵まされて、例刻に柳之助は出勤した。お島は食事をして二階の掃除をして、浴に行つて歸つて、身仕舞をして、丁度了つた處へ車の音がして、客來の様子であるから出て見れば、思も寄らぬ母親が來たのである。

傍に居られては煩たい母親でも、少し遠つて居て顏を見れば、飛立つほどに可懷い。早速二階へ案內して、

「よく來てねえ。」とお島は珍しさうに摩付いて坐る。母親は然ほど嬉くもなさゝうに、

「あゝ。」と鈍い返事をして、お島の白粉の薄過るのを何か言ひたさうに見て、

「鷲見さんは御出勤かい。」

「あゝ毎日御勉強よ。でも阿母様能く出られてねえ、內も忙しいでせう。」

「あゝ。」

「何か用なの？」

「あゝ。」と母親は何やら屈托してゐる。その氣色でお島は屈托をしてゐるのは其用であらうと曉つた。若しや自分に關つた事ではあるまいかと思へば、善かれ惡かれ氣になつて、

「何の用なの？」

「お前の事でさ。」と母親は罪ある如くお島を見る。

「私の？」と胸は悸々、

「何？」と目を瞪る。

實は此方に來る一週間ほど前に薄々縁談があつた、それをお島は小耳に挾むでゐたから、多分は其が遲つたのではあるまいかと想つた。其外には自分の事で母親が飛んで來るほどの用事

はない理、それほどにして叱られるやうな咎のある覺は無し、十が九までは縁談と合點したのであるが、其にしては母親の樣子が些と異しいので、然して見れば縁談でもあるまいし、何とも推測は着かぬけれど、（お前の事）とあるからは自分の事。さあ何であらうか、と切ない固唾を嚥むでゐると、母親は又お島を見向いて、前簪の顚倒になつてゐるのを一寸正して、

「今朝此から手紙が來てね……。」

「兄樣から？」　とお島は覺えず顏を突出す。

「あゝ。」

「然う？」　とお島は昨夜の事が思合される。彼の樣子と謂ひ、母親の氣振と謂ひ、何に爲ろ吉い耳ではあるまいと思へば、心弱くも胸は騷ぐ。

「而して兄樣から何と言つてあげて？」

「お前に還つてもらつて、私に來て居て欲いつて。」

お島は自分の耳を疑つた。

「何ですつて？」

其顏色を見ると、母親も二度言ふには忍びなかつたか、默つてゐれば、

「私に還れと云ふの？　えゝ、還りませうとも！　昨夜書いて居たのは那樣手紙……然う、それで阿母樣今日來たの？　然う。」

何氣ない躰を見せやうとするほど、お島の怺へかねる胸の内は猶顯れる。頰の邊は燃ゆるやうに赤くなつて、

「何云ふ理でせう。」　と聲の調子さへ變つて來る。

「何も那樣に惱らなくても可いぢやないか、異な子だねえ。」　と母親は笑を作つて、

「畢竟お前では若いから何と無く氣が置けて窮屈だから、それで年寄の私の方が可いといふのさ。」

「然う手紙に書いてあつたの？」

「書いてはありはしないけれど。」

「それぢや如何だか判りはしない。阿母樣其處に手紙を持つてゐて？」

「置いて來たよ。」

「何と書いてありました。」

「お前では馴染が薄いから何も遠慮があつて、用が賴み難い——まあ謂へば、お客が來てゐるやうで氣屈でならないから、私と代つてもらひたいと云ふのさ。」

「何日私がお客のやうに爲てゐたらう。」

「然うは書いちやないけれど。」

お島は少時考へてゐたが、忽ち手巾を抛却けて、

「それぢや私は嫌はれたのね！」　と口には言ふものゝ母親も決して快い心地は爲ぬのである。

お島は顏の熱氣で翳る目を襦袢の袖で二つ三つ淬つて、後は眼鏡を拭き〳〵、

「然うに違無いのよ。」

或は然うに違無いと思ふのか、母親も姑く續く語は無くて居たが、旋て氣を變へた氣色で、

「何かい、不斷那樣やうな樣子が見えてゐたかい。」

「私が嫌はれてた樣子？」　とお島は悔しさうに故と言ふ。

「又那樣事を。嫌ふと云ふ事情ぢやないけれど、氣屈で迷惑さうな樣子でもさ。」

「えゝ、それは始終那樣樣子。」

どうせ嫌はれたからにはと云ふ氣で、お島は捨鉢な挨拶をする。

「お前はどうせ嫌はれた〳〵とお言ひだけれど、何ぞ嫌はれるやうな事でもお爲なのかい。」

是こそ母親の最も聽かむと欲する所で、始めお島を見て不興であつたのも、正に之ばかりを懸念したからである。と云ふのが母親の胸

中には別に深意のあるゆゑで、それは柳之助もお島も、恐くは阿父様さへ餘り深くは知らずに唯母親一個で會得むでゐる一件の事がある。柳之助がお島を嫌ふと云ふ事は、實に其件とは根本的關係があるのであるから、それで母親は然も無い手紙の一條も怪しからず苦になるので。

「私は別に嫌はれるやうな事をした覺も無ければ、お氣に入らうとも爲やしない。だから私は歸るわ、兄様に嫌はれたって些も困らなくってよ。」

思へば思ふほどお島は胸に据ゑかねて、

「私は這麼悔しい事は無いわ！」と言ふより蚤く手巾を顔に掩てゝ飲泣を始める。

「何だね、お前は。」と言つては見たものゝ、嫌はれたとしたならば、然ぞ娘氣には悔しからう、泣きたからうと、母親も不便の心の起らぬではない。まして可愛い我子の事である、なるほど惡い所は惡いと言はれてさへ、親の情では快い氣持はせぬものを、嫌はれたと云ふ事情ではなからうけれど、自分と代つてくれは餘り嬉しくなかつた。自分は還されても娘は來て居てくれの方が、親の身にしては好ましい。

お島に泣かれる迄は、然までに深く母親は考へなかつた、唯一個で會得でゐる件にばかり屈託して、何ぞお島が我儘な事でもして、柳之助に疎まれたのではないか、と寧ろお島に對する不興であつたが、さて此場に莅むで見ると、我子は我子で、依様可愛い。然し柳之助がお島を嫌ふと云ふ事は、手紙の表にも無ければ、お島に聞いた所でも、別に係と云ふほどの事は無い。その無愛想な性分で、變人なのも今更始つた譯ではないから、何かに就けて打解けぬと云つて、其をば直に嫌はれた證據に取ることは出來ぬ。彼此考合せて見るに、嫌はれたと確に言斷るほどの目處は無い。因で母親も一時は疑つたやうなものゝ、全く例の偏屈から出た事と思直して、お島を慰めたが、本人は容易に得心は出來なかつた。假令嫌はれたでないに爲よ、喜ばれたのではない。又嫌はれたならば嫌はれたで一向管はぬ、柳之助などに好かれなくても困らないとは思ふが、是までに氣を着けて世話もし、働きもしたものを、何が不足で中途から還されのるか、其がお島は悔しくて〳〵ならぬ。自分は從來何處へ出ても、必ず氣が着くと云はれた、如才無いとて持てた、顔さへ出せば、お島さんが來た！と他から嬉しがられぬ事は無かつた。それほどの自分とお島は私に信じてゐる。此度泊に來てゐるのも、何も自分の醉興ではない、種々母親にも頼まれたし、柳之助が寂しがつてゐる樣子を聞いて見れば、あゝ氣の毒なといふ心から、故々世話を爲にも來たのである。其世話を爲るに就いても、姉様への回向と思ひ、兄様が可哀さうとも思ふから、有らむ限の力を盡した意なので。設是程の事を他で爲たならば、甚麼に喜ればるであらうと思ふのに、中途から還されるとは何事であらう。それほど自分は足はぬものであらうか、不束なものであらうかと、お島は這麼恥辱を搔かされた事は無いやうに、返す〲も唯其が悔しいのである。

固より母親の知つた事ではない、母親に向つて怨を抒べる筋は無い、又餘り言過ぎると叱られるに極つてゐるから、もう母親には言ふまいけれども、言はねば濟まぬ胸の內、言ふ人には屹と言はなければと、やう〲涙を拂つて、柳之助の歸來を晩しと待つた。母親は又外に苦勞があるので、是も浮かぬ顔をして、互に身に沁みぬ話をしてゐた。

七の二

三時少し轉ると柳之助は歸つて來た樣子。元と話す聲が聞ゑるので、母親は指圖をしてお島

を出迎に起たせると、起ちは起つたが、階子を下りると殆ど柳之助と擦違に、すうと紊れて小座敷へ入つて了つたが、其姿を見れば（悔しい）が忽ち上衝げて、扉を閉てると與に、お島は潸々と涙を零した、その又胸の内は沸返るやう。

阿母樣さへ居なければ、追駈けて行つて言ふだけの事を言つて遣るのだ。而して理屈が違つてゐたらば、兄樣も何も有るものか、謝罪せて遣る——端然と手を支いて御辭儀をさして、立派に謝罪せなければ承知しない。劈頭、どうせ貴方の御細君ぢやありませんから、姉樣のやうな理には參りません、と然う言つて遣らなければならない。然すれば彼人の事だから、必然忸怩して碌に口も利けはしない。啻々した聲をして、決して那樣理ぢやないとか何とか曖昧なことを言つて、狼狽するに違無い。然う爲れば猶言つて遣る、どうせお氣に入らないのですから、早速歸ります、長々どうもお世話樣になりました、然ぞ御迷惑でございましたらう。お氣に入らないものを、私の方でも切て置いて下さいましとはお頼み申しません、自分の家がありますから、自分の家へ歸ります。家への土産に、又私の後學の爲にもなることですから、何處がお氣に召さないのですか、其を聞かして下さいましと、管ふ事は無い、思入れ諷話を言つて遣る。管ふ事があるものか、甚麼事があらうとも、二度と再び此家へ來るものか、死んだつて、殺されたつて來るものか。決して決してもう〳〵來ることではないから、何でも管はず言ふだけの事を言ふ。而して、今迄貴方の爲には是々懇々働いてあげましたが、貴方は其が判りますかと、少し酷いけれど言つて遣る。それくらゐの事を言はなくて償ふものぢやない。第一私の爲た事に何處に不足があるのでございますよう!! 何處にでも不足があるなら、言つて御覽なさいまし。自分では不足の無い意でございますが、貴方のやうな萬事にお氣の着く、行屆いた方の目から御覽なすつたら、私のやうな不束者の爲る事は、然ぞお氣に召さないだらけでございませうから、何卒御遠慮無く有仰つて下さいまし。

宛然敵の柳之助が目の前に居る氣になつて、言ふだけの事を言つて去る其場の光景の想像が終には事實であるやうに思做されて、

「えゝ、悔しい!」　とお島は我知らず片膝を疊に擊きつけて、手巾を咬裂いて、身悶をして、悔し涙を零す。

えゝ、もう言つて遣りたい、言つて遣りたい、けれども、阿母さんが居るから、那樣事は言へない。彼人單身なら乾度言つて遣る、然したら仂ない女だと思つて吃驚するだらう。那樣人に吃驚されたつて管ふものか、思入れ吃驚さして、可恐い女だと思はせて遣る方が可いとも。何ぼ女だつて這麼に恥を搔かされて、默つて引込むでゐるやうな、那樣意氣地の無い事があるものか。是非、是非! 言はなければ承知しない、如何かして言つて遣らう。

考へれば考へるほど、お島は激して、衝と起つたが、

「あゝ、阿母樣が居る!」　と青菜に沸湯を沃けたやうになつて、ぱつたりと又坐る。坐れば考へられる、考へれば我慢の爲きれぬほど悔しい。到頭一枚の手巾を燒鐵のやうに裂いて了ふ。

七の三

此間二階では絶えず話聲がしてゐた。何を言ふとも聞取れぬけれど、折々柳之助の聲が能く聞える。其度にお島は憤悶する。

樣子は知れぬが、如何にも母親とは打解けてゐるらしい。愛人だと云ふからは、誰にも無愛

何うかと思へば、母親とは那麼に親しく話をする癖に、自分には如何であらう！　寄らず觸らぬやうにして始終遁げてゐる。變人であるから誰にも那麼かと思へば、母親には然うでない。斷然自分は嫌はれたに極つてゐる。那麼人物に嫌はれたかと思へば、我ながら餘り情無い〳〵とは謂ふもの〻又能く考へて見れば、腹も立たない。那麼理の解らぬ人物に嫌はれたからとて、其が如何したのだ！　可厭で幸ひ、好かれては迷惑。いつそ此儘無言で歸らうか、とお島は思つて見る。同時に又考へたのは、どうも阿母樣の語氣では、私が這麼恥を掻かされても、那樣に悔しいとは思つてくれないらしい。而して何方かと云へば、少々誤つても私を置いてもらひたいやうな樣子。先から何を話してゐるのか知れぬけれど、もしや彼人を宥めて、那云ふ不束なものでも我慢をして、最少し置いて遣つてくれなど〻、囑みでもしてゐるのではなからうか。噫、可厭な事、可厭な事！　誰が？　自分は幾ら其氣でも、阿母樣が何と話をしてゐるのか知れない。那樣事でもあつたら恥の上塗、私は未だそれほど耄碌はしない。甚麼話をしてゐるのだか、聞きに行かなければならない。もし那樣話であつたら、是から直に歸つて了はう。

斯う覺悟してお島は小座敷を出た。徐に階子を踰つて、次の間の障子を啓けるまでは、密々と聞えた聲が、俄に何か掩被せたやうにぱつたり歇むで、故とらしく煙管を擊く音がする。其は母親である。阿母樣まで他を袖にして、ええ、水臭い、とお島は益 腹が立つ。

區分の紙門を啓けかけると、撲着るやうに顏を見合せた母親は、

「少し今お話があるのだから、お前さんは下へ行つておいで。」

お島は胸が塞つて言が出ぬ、此悔しさは退くにも退かれず、其儘熟と立つてゐると、

「よう、少し下へ。」　と言ふ母親の目は更に多くの言を含むで、お島の眉間を射る如く見る。

母の言には背かれぬ、が柳之助の姿を見て一言も云はずにのめ〳〵と往かれうか、又水臭い母親に向つて多少の恨の無い理にはゆかぬ。

彼此默つて爰は引込みかねた。

散々怨を言ひたい柳之助は空々しく彼方を向いてゐる、賴に思ふ母親には逐立てられる、而して自分は四五寸紙門を啓けたばかりで、入ることもならず、然も間拔に立たされてゐる。その極の惡さと悔しさは何とも彼とも謂はれぬ。此胸を快くする爲には、如何なる目に遭はうとも決して苦しくないとまでに思つた。お島は上衝げる涙を咬むで、

「私は是から歸りますから！」　と言ふが否や紙門を磕と閉てる。

「何の事です！」　と母親の聲のする頃には、階子を亂次に駈下る響がして、その中で何を落したのか、鏘然鏗然！　――お島は眼鏡を破して了つたのである。物音の氣立しさに驚いて老婢は臺所から濡手を拭き〳〵駈着ける。其途で破れた眼鏡を拾つたが、之に就けても尋常事ではあるまいと思ひながら小座敷の扉を啓ければ、這は抑、お島は泣伏してゐる。元はおろおろ聲で、

「まあ、お孃さん如何なさいました。」

嬉しくも問はれるほどお島はいとゞ悲しい。今までは忍音に泣いてゐたのが、堰きかねて衝と聲が出る。

「如何爲すつたのでございます。まあ、お眼鏡まで這麼に爲すつて。」

眼鏡と涙とは其實何等の關係も無いのである。然し元は何ぞ關係の有るやうに思つた。三度聞返さるゝまで、涙を禁めかねたのであるが、やう〳〵歔欷ながら、

「私は悔しいわ。」　と辛くも言つて、後は

又暫く泣入る。段々勦られて、竟に其（悔しい）事情を話せば、元は他人でありながら母親のやうに辛くはなくて、

「それはまあ飛でもない事を！」　と今更主人の變人に呆れ返つた。有繋に年の劫は、其と口へ出して主人の沒分曉を喚散すやうな事は爲ぬ、なるほど飽くまでも主人の曲つてゐる事、お島の腹を立てるのは理の筋を言つたのである。然し彼は主人に成代つて重々其心得違を詫びて、お島の心を和げやうと努めた。而して、今往かれては自分一人で何程困るか知れぬから此年寄を助けると思つて、最少しの所胸を撫つて辛抱をしてくれるやうにと、お島が來てから家の爲になつた次第を陳べて、

「御存の通り旦那は那云ふ一國者でゐらつしやるけれど、お肚にはもう少しの毒も無い、宛然子供のやうな方なのですから、何卒まあ惡からず、決してお氣にはお留めなさらないやうに。」

と元には幾度も頭を低げて詫るやら、宥めるやら、言に情を盡した。お島も今は氣の毒になつて、元の手前に泣くに泣かれず、涙は拂つて見せたが、柳之助に對する（悔しい）の念は、之が爲に一厘でも減じたのではない。寧ろ、他人の元さへ頓魔に思ふものを、其世話をされた當人が難有いとも思はぬのみか、こつそり母親へ手紙を出して、躰好く逐拂はうとは何事であらうと、なほ〳〵其處置が然でない、其了簡が憎い、と執念は益深くなる。

この元が柳之助の母親であつて、此樣に手甲摩つて詫びたにしても、お島は決して恨を忘れやうとは思はぬ。彼が奉公人であるからは猶の事、那まで言つてくれる志は嬉しい、無に爲たくはないけれども、誤られる筋が違ふからには、勘辨の爲やうも無ければ、又勘辨を爲べきでもない。元の謝罪は元の謝罪、柳之助への恨は柳之助への恨、とお島は其二件の胸の納所を別にして、元の前は躰好く作へて左も右も濟した。

程無く夕飯の膳立が始まる。お島はもう〳〵頓魔家の用は火箸一本持つまいと覺悟はしたなれど、年寄の元を一人動かすのも勦しゝ、先の種々言つてくれた深切も忘れられぬ、彼との馴染も今日が別と思へば義理からも情合からも手傳はずには在られなくなつて、此家の爲に働くのではない、元の手傳をして遣るのと極めて、お島は小座敷を出たのである。旋て座敷に膳が並べば、元は二階へ知らせに行く、續いて二人の徐々と下りて來るのを合圖に、お島は飄然と其處を出て、又小座敷へ入つて了つた。――お島は出て來ぬ。柳之助も母親も席に着いた、――未だ出て來ぬ。二人は箸を取つた、――因で元は迎に行つたが、姑くすると、悄々還つて來て、

「お嬢さんは御飯は召上らないと有仰います。」

八の一

翌日の午前お島母子は二挺の車を揃へて柳之助の門を出たが、それぎり母親も還つて來ず、鷲見の家内は再び其寂しい主人と老婢の二人になつて了つた。柳之助は引續いて出勤を怠らず、朝々例のステッキを挈げて蹣跚と出て行つては、蹣跚と歸つて來る。生徒の受は不相變善い。授業に於ては決してお島を取扱ふやうに不深切なものではないのである。彼を（妻が）先生と呼ぶ同僚も、其（妻が）を失つた後の柳之助を見て、別に變つた樣子も無いのを酷く怪むだ、休憩の間も人とは話を爲せぬやうにして、何時も窓の側に立つて、兩手を背後にして外を眺めてゐる、折には書を見てもゐれば、煙草も吃ふ。それらは皆舊の通で、唯一つ變つたのは、（妻が）と言ふ言を口に爲ぬやうになつたのであ

る。或人は之を或人に不審した、すると、乙の或人は笑つて、
「當然ぢやないか、無は指す事は出來ない。」
「然でないよ。」と甲の或人の曰く、
「無の現在は無ぢやけれど、過去よ、過去を言出さんのが餘程不思議ぢやないか。」
誰も誰も此質問に對して確答を與へる者は無かつた。（妻が）先生とまで仇名を取つたほどの柳之助が、弗と其（妻が）何であつたとも、假令であつたらばとも言はなくなつた。
外に異常の點を覺めたなら、顏色が憔悴して、何となく氣力が衰へたが、始終惘然と窓の外ばかり眺めてゐるやうな風であつたから、彼等の目には、平生も彼の顏色は憔悴して、氣力は衰耗して見えたので、今更際立も爲ぬのか、舊の仇名をそのまゝに彼は（妻が）先生と呼れてゐる。或人は此名の今は妥當でないことを説いて、プロフェッサア、キンドウ（窓）と改めるが可からうと言出したが、行はれずに了つた。
學校に出ては此有樣、家に歸つては全く二階に閉籠つて、寢てゐるのか起きてゐるのか知れぬほど閒寂にしてゐる。せめて食事の時には、元が頻に話を爲るやうに仕向ければ、懊惱がつて、他の言は能くも聞かずに、思出しては、
「元、寂しいなあ！」とばかり。言はれる元の身も隨分淋しい、お島に歸られて落膽してゐるさへあるに、主を見ればいとゞ氣が滅入る。
四十九日も過ぎた此頃でも、未だ〳〵悲歎は少しも薄がぬ樣子で、折々目を泣腫してゐるのを見る。其當座のやうに取亂してこそゐないが、思窮めてばかりゐる證は、始終憺然としてゐる。此分では如何なるであらう、病氣でも出なければ可いが、と元は其も亦苦勞になる。何程傍から氣を揉むだ所で、別に爲む方も無い、自分も配耦を喪して、經驗がある、まして稼人の夫に先立たれたのであるから、其悲歎は可愛い奧樣に別れたやうなものではない、それでも日子の經つに就けて、終には何か恁か忘れられるもの。半年も一年も然う〳〵思窮めてゐられるものではないから今に、と思直しても、氣の滅入ることは猶且滅入る。
柳之助は近頃邊に甚しく思頽れて、閒さへあれば太息を吐いてゐやうと云ふので。有繫に學校に出てゐる閒は、氣の浮かぬながらも左に右にか紛らされてゐるが、內へ歸るとなると、其途から漸次鬱出して、門を入ると倶に胸は曇つて、座敷へ入る、二階へ昇る、机の前に坐ると、今まで辛くも紛らしてゐた思が一時に紛と寄せて來て、埒も無くお類の事を考へさせる。其が爲に柳之助は悲み、悔み、歎き、慕ひ、恨み、儚み、而して遂には泣かされる。漸く其涙を抑へたかと思へば、又追懸けて泣かされるまでの順序を反覆される。愁環端無で、如此く同じ事を反覆し反覆しても、涙は飽くことを知らず毎も新しく催される。但之を幾度と無く反覆す心は遂に勞れて、其苦に堪へかねると、忽ち机の傍を起つて、例の室の內を頻に運動する。
其最も能く愁環の廻るのは夕暮である。四邊は次第に暗くなるにつれて、凄寥は逼つて來る。哀は頻に誘はれる、其時こそ胸も張裂けるばかりに切思めて、在るべき心地も爲ぬやうに覺える。或夕暮待に耐りかねて、戸外へ飛出して、近邊を行逼つて見たのであるが、氷を擦したやうな寒い寒い風の中でも、家の內よりは其思を紛らす便は有つたか、翌日からは黃昏になれば必ず戸外へ出なければ恠はぬやうになつて、其時刻には六七町も歩いて歸つて來るのが、毎日の習慣となつた。恁して歸つて來ると、恐るべき夕暮は過ぎて燈が點いてゐる、

夜になつてからは一時机に向つて勉強を爲る。柳之助は聞ゆる勉強家である。悲の爲に久しく其勉強を廢してゐたのが、學校へ出るやうになつてから氣を取直して又始めたのも、究竟は己の好む所で憂を忘れやうと云ふ氣。彼は世間の狹い身であるから、平生他よりは机の上に多く友を求めて、心を慰むる所は其專門學の研究である。

宵の内は暫く無理にも其で紛らされるが、到底長く思出さずにはゐられぬ、一二時間の後には必ず不覺心になる。其時は又夕暮に惱まされるやうなものではない、常に彼が學理の研究にも、晝間よりは夜中こそなか〳〵深く思を凝し得るやうに、生憎其事も亦鋭く考へられる。彼が最愛の妻に就いて考へるのは、失望に就いて考へるも同じことで、深く考へるのは則ち深く失望するのであつた。人は渴くと理不盡に水を欲がる、柳之助の戀しさも其の理不盡で、殆と身も世も爲に忘られるまで悶えても苦むでも、做放されず苛れるに堪へかねては、寧ろ快く死なうかと、常と迷の出ることさへある。

或夕暮から遂に甚しく凄寥に惱まされたやうに、又或夜から遂に此失望の苦痛を劇しく感じた。固よりその凄寥も今に始つたのではない、切なる悲を覺えた日から引續いて、日毎に夜毎に其が爲に苦められてゐるのではあるが、此頃になつて遽に一層甚しく感じられるのである。夕暮の凄寥は左も右も例の散歩で漸く凌いで、夜の更に此悶々に澆ぐに一合の酒を以てして、醉を藉りて無理に睡る、——睡つて纔に忘れるのである。恁して酒の力で忘れるのが夜毎の例である如く、彼は一時から二時までの間に必ず目を覺すが癖となつた。覺めると與に戀しさの念は再發する、謂ふに謂はれず佗しくなる、忽ち全身の血は氷りつゝ、或所へ曳入れられるやうに覺える、耐りかねて寒さも何も忘れて寢床から跳起きる、而して劇しく室の内を運動する。其間も絶えず胸の内では悶え〳〵てゐるので、此時彼の眼は全く乾いて、懼の有る如く瞪きながら、或ものに逐はれるやうに慌忙しく往きつ復りつして、我と我胸を抱竦めて、焚ゆる如き呼吸で喘いでゐる。稍一時間も此體で、漸く疲れて寢床に倒れると、それから朝までは一息に寐る。是が夜毎なので、柳之助は苦しさも苦しゝ、不思議にも思つて、後には病ではあるまいかと考へた。

夕方の微昏くなる時の其の身に沁みて凄寥！　夜になつて憶出す時の其の味氣無さ！　酒が醒めて眞夜中に目を開く時の其の佗しさ！　尋常ではない、と自分も熟思つて、（何故近頃急に這麼になつたのであらう？　此有樣で一個月も續いたら、病氣にならずには措かぬ。或は既に病氣なのかも知れぬ、一種の精神病かも知れぬ。幸に病氣でないにしても、普通の病氣よりも夐に苦しい。或病人が發熱するやうに、時を限つて始る所は、如何しても一種の病のやうだ。噫、精神病にでもなつたのか！）と柳之助は遂に疑を抱いたのである。

畢竟恁云ふ事になるのも餘り類さんの事を思ふからだ。類さんの事ばかりは然し忘れられん。忘れられんけれど、毎日毎晩のやうに苦しい想をして、それで類さんが復つてくれるなら可いが、唯苦むばかりで何の効も無いのだ。此後彌那が劇しくなれば、必ず體を傷める、體を傷めれば彌那痛苦を益さんければならぬ。自分が此上病氣になつた日には、其心細さは如何であらう。看護をしてもらふ類さんは居らぬ、傍から慰めてくれる類さんは居らぬ、此二階に唯獨瘦衰へて臥て居る？　咄、思出しても悚然とする。病氣にはなるまい、病氣

になつては困るから、今後は類さんの事を忘れるやうに努めやう、類さんの事さへ忘るれば病氣にはならぬ。何とかして忘れやう、今日から斷然忘れやう、と固く心に誓つた其夕暮も、昨日に同く凄寥くて、其夜も同く味氣無くて、其夜中も同く目が覺めたので、翌日は其に懲りて、一層固く心に誓つたのである。誓つても誓つても仍且毎夜毎に苦められることは變らぬので、柳之助も有繫に我ながら可恐いやうな氣がして、

（如何したのだらう。我は如何しても如何かしてゐる。固よりそれは類さんの事は忘れられん。自分では忘れやう、忘れやうと爲るけれど、猶且始終考へてゐる。その通り戀しいことは戀しいけれど、十分もう諦めては居るのだ。是程諦めてをるのに、如何いふものだらう、係らん！　して見ると病氣かなあ、醫者に係らうかなあ。）

彼も今は殆と其辛さに堪へかねて、此上は人手を藉りて苦患を脱けるより外は無いと思つて、一体恋云ふ事が有るものであらうか、其を先づ質ねやうと、葉山に會つて仔細を話したのである。

一々聞いて見ると、葉山も心穏でない。

「それは成程病氣と云つても可からう、まあまあ病氣だね。然し薬を飲むだから直に復ると云ふ理には行かない、腹の痛いのや、便通の無いのとは大分違ふから。何しろ孑然獨で居るのが、其が大禁なのだよ、病は其處に在るのだ。學校へ出てゐる間は那麼事は無からう！　然だらうとも。君は思込が深いから、獨で居るとお類さんの事ばかり考へてゐるのだらう。それほど戀しい人だ、その人が居なくなつたのだから、世の中が面白くないのも無理ぢやない、それは察しる。萬々察してゐるが、その戀しいを棄却にしなけりや迚も可けないね。成程忘れやうとしてゐる？　それは可い。如何しても忘れられ……ない？　それが可けないぢやないか。

然う言ふと又慍られるかも知れないけれど、忘れる方は幾多もあるのだ。然し君は強ひて忘れやうと爲ないのだから困る。甚麼にしても忘れやうと思へば……あゝ有る段ぢやない、大有さ。唯内に打坐つてゐて、忘れたい、忘れたいと言つてゐたつて、それは不可だよ。君は其種だらう。笑つてゐる所を見ると手の筋だね。それぢや可けません、依様木に緣つて魚を求めるのだ。因だから、此間のお島さんの件なぞは好かつたのだけれど、君が變屈だから困るよ。其後音信は無しかい。阿母樣も内々慍つてゐるのだらう。此頃然やつて苦しまされるのも、一はお島さんの怨念だあね。で、阿母樣は君の今後の事に就いて何と言つてゐるい。別に何とも言はない？　因でだ。君の意見は如何いふの？　あの所帶はあのまゝ長く持つてゐやうと云ふのかね。別に考はない？　最一つ因でだ、女片の無い所帶と云ふ奴は不都合なものだ、何、元が居る？　元なんどは女片の部ぢやありません！　那は棒切か、襤褸切さ。もつと好い女片さ。

細君と云ふものが無ければ、所帶を持つ必要はまあ無いのだ、然うだらう。それでは如何だい、彼所帶を疊む氣は無しかい。而して如何する？　まさか廻國に出るのぢやないよ、一先所帶を疊むで、小綺麗に下宿でもして、暢氣に勉強を爲たら如何。

「然しね、又慍られるかも知れないけれど、」

と一服付けながら柳之助の氣色を見れば、

「何を、僕は何も慍りはせんよ。君の忠告に對して僕は慍る方は無い。」

「巧く言つてるよ。」　と葉山は煙管を落して笑ふ。

「善、屹と慍らないね、請合つたね？　實は外

でもないが、君だつて長い間には何れ細君を迎ふのだらう。まあ聞き給へ、唯話だから。何、迎はない？　一生迎はない？　それなら猶の事、所帶を持つてゐるには當らない理だ。直に細君が來ると云ふのなら、折角持つた所帶を疊むで了ふ事は無いけれど、君の今の樣子では、なか／＼急には迎ひさうもないから、それなら……。」

「急にも遲くも僕はもう一生妻を有たんと言ふのに。」

と柳之助は忽ち機嫌を損じる。

「うむ、是は惡かつた。一生有たない！　然うだ。然うだが、是は話だからまあ聞き給へ。話有つにした所で然な事ぢやない。あれさ、話だと言ふのに、可いかい、斷つて置く／＼、話だよ。然な事ぢやないと、爲するとだ、君は彼家に獨法師で居る間は、必ずお鏡さんの事を思出さずにはゐられないよ。如何して、如何して忘れらるるものか。忘れなくつても管はないのさ、始終思つてゐるのも可いやね、唯其だけの事で濟みさへすれば。いや、所が濟まない！　終だらうが、現在病氣にもならうとしてる始末ぢやないか。ねえ、體を傷して了はなけりやならない。然して見れば、不實なことを言ふやうだけれど、是は如何あつても全然忘れなければなるまい。其處だて、忘れやうと云ふには獨で居るのは極惡い、——紛れると云ふ事があるまい、何でも紛らさなければ可けないのだ。幾らお鏡さんの事だから好いと云つたつて、忘れられずに快々してゐるのは隨分辛からう。苦しい？　然だらうとも。體に障るよ。今の分で打遣らかして措いて一月も續いて見給へ、立派な發狂になつて了ふ。今更所帶を疊むで下宿をすると云ふのも變なものだから、毎日も言つた通り、まあ／＼當分私の家へ來てゐたら如何だい。下宿から見れば遙に上等さ。座敷料は頂かず、炭錢は御附にして、それで湯が立つて、洗濯もしてあげてさ、第一食物が好いよ。少々滯つたつて可厭な顔を爲るぢやなしさ。高いから減けろと言へば無料までには減けやうと想ふ。何と如何だらう！　觀音樣が店を出したつて恁うは行くものか。實の有つたものだらうが、これで惚れなきや先方が無理です。」

柳之助は少く所思があるので、即答しかねて熟と考へてゐると、

「強ひて勸める譯ぢやないが、君の病氣に對するドクトル葉山の處方はまづ此外には無いてね。左も右も獨で孑然内に引籠むで居るのは何より毒だよ。」

太息交りに柳之助は、

「實際然うだね、僕も然う思つとる。」

「それぢや別に那樣に考へることは無いぢやないか。折角持つた所帶だから、疊むで了ふのも面白くないと云ふのかい。」

「何有、那樣所帶なぞ！　君の言ふ通りだ、妻が居なけりや無用なものだ。妻が居なくなつてからはね、自分の家も自分の家のやうな心地は爲やせんもの。唯飯を食つて活きて居るだけなら、別に所帶を持つとる必要は無いさ。」

「然う思ふなら疊むが可いのさ。」

「然うだね。」

彼は葉山の忠告を容れて、我家とは思はれぬ所帶は疊むで了つて、身輕になつて勉強爲やう氣にはなつたのである。然し、深切に再三言つてくれる同居の件に就いては、左か右か言を濁して、全で諾否は言はずに別れて了つた。

八の二

一日二日は頻に其事ばかりを考へてゐたが、さて分別は容易に着かぬ。葉山へ同居はしたいが、お種と云ふものがゐる、是が必ず第二のお島となつて、自分を苦めるに違無い。又獨で孑

然と内に居るのは、正しく病氣の根であるのみならず、可厭なことは日毎夜毎に不相變苦められる。もう十日と此家に辛抱は出來ぬ。葉山の所へ行かぬまでも、此所帶は疊むで了ひたい、了はなければならぬ。さて而して何處へ行かう? 相當の下宿を探すか、葉山へ同居をするか。何方かであるが、それも考へれば何にも一得一失はあつて、又自分の所帶に越した事は無い點もある。因で擦つたり揉むだりして、幾度も考直し〳〵した末、如何あつても所帶は仕舞つて、轉居をして、氣を變へるのが何よりであると決した。

斷然其氣になつて見ると、何處と目標は無いが、或所へ轉居したと假定めて、其處の生活が極めて愉快で、面白く勉强が出來て、お類の事も忘れられて、世話をしてくれる者が無くても更に不自由ではなくて、日曜毎に谷中へ墓詣をして、それが何よりの樂事で、獨身はなかなか暢氣で、學問には適當であるなどの善い事ばかりが、手に取るやうに胸に浮ぶ。勿論其は空想である、空想にしても隨分愉快を感じる。之が實際であつたらば、其麼に愉快であらうと思ふほど、益此家が厭はしくなつて、

「轉居、轉居、轉居に限る!」　と是非の考慮も無く、はや明日から家内を片附けやう、と氣ばかり立つて、何處へ轉居するのやら、其邊は未だ一向雲を摑むやうでありながら、此家を出れば、眺望のある、閑靜な、日向の好い小綺麗な、二間ほどの二階が借りてあつて、掃除も整然と出來て、何時でも御入來を待つばかりの仕掛になつてゐるやうに想はれる。盛に其空想に驅られてゐる爲に、殆ど類さんの事を思ふのも忘れて了つて、夕暮も氣になるほどは淒寥を感じず、夜になつても引續いて忘れ通してゐた。催眠劑として每夜買せる一合の酒も、例に因つて机の側に備へてありながら、其には手も觸れずに、柳之助は寢床へ入つて了つたのである。

明朝になつて目が覺めると、斬られた夢の假であつたやうなものではない、吻と安堵の息を吐いて、

「おゝ! 昨夜は無事であつた。」　と心の動悸の姑くは止まぬほど、彼は近頃に此程の歡喜は絕えて覺えなかつた。陷穽の底からやう〳〵這出て、始めて蒼々した廣野を見たやうの想で、枕を擧げて四邊を眴してゐたが、岸破と床を起きて、

「轉居だ、轉居だ!」　と大聲に呟けば、折から階子下を通る元は何と聞違へたか、

「はい。」　と直に昇つて來て、

「御用でございますか。」

「呼びはせんよ。」

「おや〳〵然やうで。」

さて轉居を爲るに就いては、第一に厄介になるのが荷物である。一所帶抱へては下宿も出來なければ、同居も出來ぬ。まづ此始末から着けねばならぬ、類さんの持つて來たものは一式之を生家へ返して、所帶道具は長年好く勤めた元へ與れやう。然して了へば自分の持物は本箱に机、夜具にお類、目欲いところは那様もので それで大分身輕になる。所帶を疊むと云へば、と處置をするより外は無い、と自分は思ふが、甚麼ものであらうか、と彼は再び之を葉山に詢ると、

「臺灣へでも之くやうだね。」　と直に例の洒落であつたが、

「それぢや如何するかね。」　と意見を聞けば、

「可い、大出來だ。お類さんの物を全然返すのは、これは至極好い立案だ。然し、先方でも然やうでございますかと應それとは受けまいぜ。それよりは、當分預つて置いてくれと云ふので……簞笥が一棹に葛籠に長持だね、其外夜具に、

然うだ細々した道具類か、手も無く、釣臺三荷だけ返す理なのだ。那様に舁ぎ込まれちや一寸困るね、倉庫でも無ければ。然すると預つてくれも異しなものだし、依樣君の事だから、いつそ端的に、此方に在つても不用なものだから、お島さんへ形見にと云ふやうなことで、屆けたが可いだらう。」

「あのお島へ遣るのは可厭だ。君は妙にお島が好きだよ。」

心から恨めしさうに柳之助は言ふので、葉山は怺へかねて噴出す。

「何ほ好きだつて、他の形見類で義理を爲る奴があるものか。お島さんへと言へば、それで丁と阿母樣も阿爺樣も喜ぶのだと云ふことさ。其は可いがね、所帶を疊むと云ふ日には、姻家へも相談を爲なければなるまい。爲れば止められるね、何故でも止められるよ、止められます！

それに一昨日私も漫然話はしたけれど、未だ百個日經たないのだね。百個日も經たないのに家を仕舞ふのは餘り世間躰が善くない。はあ、來月の十一日か？　もう然なるかね。それは君を知つてゐれば、百個日も一週忌もありはしない、今度所帶を疊むのも、其人の事が忘れられないから起つた事なのだけれど、那が所謂世間躰だ、姻家の人たちの手前もあるわね。當今家を仕舞ふのは些と書生流過ぎる。因で恁したら如何。最少しの所家はあのまゝにして措くのだ、而して私の家へ遊びに來るさ――夕方から泊に來ると云ふやうな事にするのだ。甚だ億劫な話だけれど、外に爲やうも無いでね。主が一人に奉公人一人と云ふ家内で、主が毎晩泊に出かけるのも、條理の合はない譯で、實は隨分拙い智慧だけれど。是が姻家の方へ一所になると云ふのなら、それで又可いさ、仔細は無い。何しろ百個日經たないと云ふのが氣になるね。」

葉山も之には大きに窮つて、我ながら拙い智慧より外には出ぬのである。柳之助も氣を挫かれて、言はれて見れば一々理がある。百個日も經たぬ内に住居を移すさへ、成程如何はしく思はれるのに、其人と始めて持つた所帶を崩すのは、情に於て忍びざるのが當然であらう。姻家の方でも感情を害するに違無い、類さんも然ぞや怨に思ふであらう。切めては百個日の法事を此で爲て、それからの事に、と又了簡を變へはしたが、それと與に彼の失望は太甚しい。

九

一日でも早く退きたい家に、未だ此先凡そ六週間も居なければならぬと思へば、如何して暮されるであらう、と柳之助は途方に晦れたが、思返されぬ所を是非も無いと思返して、左も右も百個日過ぎるまで待つ！　とした所で、轉居は爲る、就いては其用意を爲ねばならぬ。今から六週間といふ日があれば、寧ろ十分に用意を爲るとせう。明日にも引越すやうに騷いで見たが、實は何の用意も無いので。此暇に徐々と支度を爲るも可からう、と所爲事無しに氣を取直して、轉居の前に於ける始末と、後に於ける處置とに就いて、彼は百方考へたのである。

下宿に爲うか、葉山へ同居を爲うかの二事、是こそ第一着の問題でありながら、未だに決定してないのは迂濶であると、先之から極める事にして、考へたが、考へたが、依然分別は着き切らぬ。十の八までは葉山に同居がしたいのであるが、唯お種と云ふものが可厭さに、好ましからぬ下宿と秤に懸けてゐるので、此は既に幾度も考へては、毎も分別が着かず仕舞で、其時になつたらば如何にかなるだらうで、抛却してあるので、實は今日に至るまで未だ行先は定らぬのである、それは定らぬが、轉居をするだけは確としてゐる。因で、彼は遽に定めかねる

分別は後にして容易に手の着けられる始末からと思付いて、一日元の針仕事をしてゐる所へ出掛けて、

「お前急に一つ裁縫をしてくれんか。」

見苦しく取散した所へ恐多いと云ふ風で老婢は慌てゝ座側を片附けながら、

「甚麼お仕事でございます。」

「夜具だ。」

「お夜具？　縫直すのでございますか。」

「いや、新しく縫ふのだ。」

老婢は(へえ)とばかりで、異しな事をと思つた。

「縮緬の夜衣と云ふのはあるかなあ。」

いよ〱異しいと思ひながら、

「へい、御座います。」

「紋付は異しいかなあ。」

「へえ？」　と元は彼の問よりも未だ異しい顔をして、縮緬の紋付か、夜衣の紋付か、其意が解りかねてゐる。

「紋の付いた夜衣だ。」

「如何な事でも……。」　と元は笑出した。此に葉山が居たならば、然ぞや呼吸の續くまで洒落のめした事であらう。柳之助は眉さへ動さず、

「然うかなあ。」　と老婢の笑止むを待つて、

「夜衣だから、紋が付いとつても誰も見やせんから freely はんぢやないか。」

老婢は又可笑がる。

「私は又わざ〱御紋付の夜衣をお拵へなさるのかと存じたのでございますよ。」

「それは可笑いさ。」　と柳之助も始めて少しばかり笑つて、

「俺の言ふのは、夜衣の紋付よ。お前は紋付の夜衣だと思つたのか。」

夜衣の紋付に紋付の夜衣、何方でも同じ事でありさうなものを、と老婢は又其が可笑くて健か笑ふ。

「那樣に可笑いか。」

「旦那樣は本當に面白いことを有仰います、而してまあ何をお拵へになるのでございます。」

「紋付で夜衣を拵へるのだ。」

「へえ？」　と老婢は又解らなくなる。

「尋常の衣服で夜衣は出來るのかな。」

「何と有仰います。」

「一反あれば夜衣は出來るか。」

「然やうでございますよ。」

「然すると、尋常の衣服を解して、それで夜衣は出來るのだな。」

「然やうでございますよ。」

「それぢや拵へてくれ。」

「へえ。」　と元には未だ全然と會得めぬ。

「蒲團は如何だ。蒲團も出來るかな。」

「やつぱり御服でゞございますか。」

「然うだ、やつぱり衣服で拵へるのだ。」

「而して其は旦那樣が御召になるのでございますか。」

「然う俺が着るのだ。」

元は憮然として、さあ大變！　旦那樣は到頭お氣が觸れたさうなと、然う思へば此五六日別けて色澤の惡い柳之助の顏を、其と無く打目戍つては、眼色に氣を着けたが、變つた所も無いらしい。幸ひに未だ然ほど劇しくはないが、些少は確に違つてゐると見て取つた。

彼が二十年も前深川に所帶を持つてゐた頃、隣の長屋に髮結が住むでゐて、それの夫は蔦の者であつたが、是が不圖發狂した。その病の初發は、或日外から歸つて來ると、唐突に妙なことを言つて、氣味が惡いから一寸來てくれと呼れたので、直に行つて見ると、手拭を挈げて藥罐の中を覗き散して、もう少しだ〱と言つてゐる、容體に恁うと變つた所は無いが、唯眼色が可恐くなつて瞿々してゐた。狂人は何でも眼色で知れると云ふことを、其時人に敎へら

れたのである。

紋服を解いて夜衣を拵へる！　藥罐を覗いて、もう少しと、餘り相違は無いと思ふほど、柳之助の顏を視る元の目は多少か常ならぬ色を顯して來る。

「何を俺の顏を那樣に視るのだ。夜衣は出來るとして蒲團は如何だ。」

「で旦那樣が其を召すのでございますか。」と老婢も顫へる。柳之助は一向無頓着に、

「然うだと言ふのに。」

「わざ／＼御紋服を裝殘になさいませんでも、旦那樣のが那麼して歴然とお在なさるぢやございませんか。それから未だ奥樣のもお綺麗になつて御座いますよ。那樣に貴方御夜具なんぞは澤山ございましたつて爲方がございませんよ。」

柳之助は耳喧しいと云ふ體で、

「可いよ。別に要るのだ。いづれお前にも話を爲るけれど、少し事情があるのだからまあ拵へてくれ。」

「へえ、それは拵へは致しますが、如何遊ばすので。」

「如何しても可いぢやないか。」と少しく聲が暴くなつたので、

「へえ。」と老婢は默つて了ふ。

此問答の末柳之助は佛間の小座敷へ老婢を連れて、押入の簞笥からお類が大事の縮緬の紋服を出させたが、其は亡人が祝言に用ゐた、鳩羽鼠の裙模樣で、質な更紗縮緬の二枚下着が附いてゐる。其更紗の質なのも、裙模樣でないのも、長く着られるやうにと、母親の心を籠めたのであるものを、未だ／＼裙模樣も着られる齡で、其主は亡き數に入つたと思へば、形見こそ今は仇なれで、元は不覺に鼻を塞らせる。花橘の其ではないが、簞笥を啓けると芬然と起つ麝香の香に、柳之助は胸迫つて、少時は主從とも言は無かつた。

「もう一枚、能く着とつた縞の衣服があるだらう、那を見せてくれ。」

と柳之助は簞笥の傍を離れて、座敷の内を歩き始める。

「あの絲織のでございますか。」

「絲織だか何だか知らんが、ぴか／＼光るのさ。」

細い矢絣崩の、（おさすり）に着た絲織の小袖を出して見せると、其だと言ふ。さて縮緬の紋服は夜衣にして、絲織を蒲團に爲る、出來るだけ早く仕立てるやうに、と重ねて誂へたが、爲を思つて然くまで元は不承知であつた。なるほど主の命であるからは、而して主の物であるからは、煮て食はうと、炙いて食はうと、おのれの横出る所でないとは知つてゐるが、當初に疑つた如く、此所作は如何しても正氣ではないと思ふから、如何に奉公人でも齡の手前唯諾とばかり言つてはゐられぬ。まして娵家の母親などに對しても、這麼無法な事を爲しては合はす顏も無いわけと、口を緘めて此思立を止めたのである。然し彼は既に止める時迚も止るまいとは覺悟した。何故となれば、恁云ふ無法を思立つほどに氣が狂つて居るからは、理非を聞分ける耳は得持つまいと思つて。が、左も右も止めるだけは止めて見て、聞分けたらば幸ひ、聽かぬやうならば、陽は畏まつて置いて、此始末を娵家の方へ知らせやう、と胸を定めてさて止めて見たのである。

案の定言へば言ふほど氣色を損じて、

「お前が拵へるのが可厭なら頼まん、仕立屋へ遣る、俺が持つて行く。」

と例に無く息卷く工合、元は斷然其の正氣でない事を確めたのである。因で、然やうならば私が致しますから、と御意次第になつて、件の二枚を風呂敷に包むで、其を抱へて茶の間へ退ると、なほ跟いて來て、直に取掛れと逼る。

元も之には弱つて、種々に言繕へたが、柳之助は傍に坐つて什でも動かぬ氣色。又此で遅々してゐたら、引摸つて飛出しさうに見えるので、爲むかた無さに澁々膝の上に紋服を披げて、鋏を持ちは持つたが、燃立つやうな紅絹の色と、好もしい染の香氣とに、目も眩れ、心も消ゆるばかり、（勿躰ないで胸も張裂けるやう。餘り切無さの一寸遁に、元は鋏を委いて、用ありさうに又紋服を把玩引廻して、襟を見たり、裾を見たり、力の有らむ限怩怩してゐると、其氣も知らず柳之助は、

「好い夜衣が出來るだらう。」

其尾に附いて元は再び懇々と掻口說いた、恁した立派な紋服をば夜衣などに爲て了ふことの暴殄と、姻家の親御樣に對しても辨疏の無さに、如何も鋏の刄が當てられぬゑ、之ばかりは思止るやうにと。

誠は面に顯れて、命乞でもするやうに、如何に老婆心とは謂ひながら、餘りの事々しさに柳之助も驚かされた。實に元は此を先途と面を犯して諌めたのである。爲に彼の心も動いて、なるほど年寄の身にもなつたら、傍に附いてゐて恁云ふ無法な事を爲せるには忍びぬであらう其とても畢竟は此方の爲を思ふから。左も右も事情を話さぬのが惡かつた、藪から棒に註文したゆゑに、如何するのかと吃驚したのであらう、とやう〳〵心着いたので、百個日の後は此所帶を疊む事から、荷物は姻家へ還す一條、彼への形見頒まで具に聞かせると、元の驚愕は益々太甚しい。それでこそ紋服の一枚くらゐは引裂くのさへ無理は無いと思つた。事情を聞くほど、如何かしてゐるのではあるまいかの疑團は彌々解けぬ。

なか〳〵紋服を暴殄にするくらゐな事ではない、もつと〳〵大きく氣が觸れてゐるらしい。其大きさは到底傭婆風情の手も口も出せる所ではない、いづれ姻家の親御樣も何とか言はれるであらうし、葉山樣も其曉には又何とか爲さるであらうからと、まづ〳〵手拭を擎げて藥鑵を覗くやうな取留らぬ所作の無いのを、元は其身の厄免にして、左か右か柳之助の言ふことが會得めたのである。然う思つて見れば、始から深川の隣のキ印のやうに眼色が變つてゐたでもなし、變な調子も無かつたし、世間で謂ふ發狂とは違ふ、女に溺つて譯もなく家藏を潰したり、慾に牽されて見す〳〵大損を爲る例と同じやうな、一時の迷とでも云ふのである、と其は其で釋然解つたとして、さて此を仕舞つて其から如何爲るのやら、有繫に其も聞きたい。

「それで、何でございますか、一先此をお引拂ひ遊ばして、暫く御勉強を爲さいまして、又何頃御家をお持ち遊ばすので？」

「それは今から解らん。」

「いづれお持ち遊ばすのでございませう。」

「もう面倒臭いから持つまいかとも思つとる。」

「それでも貴方、又奥樣が御出になりましたら然うは……。」

と言ふのを柳之助は引手繰つて、

「奥樣なんぞ來るものか！　俺は死んだ奥樣の外に奥樣は有りません。」

元も或物を引手繰られた心地で、柳之助の顏をば探すやうに眗して、

「では、もう奥樣はお有ちになりませんので？」

「有つものか、一生有たんのよ。」

「一生お有ちになりませんので？」

「もし俺が先に死んで、奥さんが殘つて居つたら、元、猶且奥さんは一生寡で居るよ。然云ふ約束だもの、俺も一生獨で居るのだ。それだから一生忘れん爲に是で夜具を拵へて置くのぢやないか。」

彼の語氣は漸く沈むで、後は氣の腐つた太息をして、

「つまらんよなあ、世の中は。」と綿織の小袖を引寄せて、それを丸めて枕に仆れる。

元も其胸中を察して見れば、お可憐と思はぬではないが、男の口からは餘な言分で、樣子を知らぬ耳には、同然手拭を挐げて藥罐を覗くやうに見ゆるであらう。何處までも情の深いのには違無いが、深過るのも變なものと考へた。

「それは然うでもございませうけれど、女子は女子、殿方は殿方で別でございます。一生お獨では、それこそ御不自由で、迚も續くものではございません。昔から女子は操を立通しますが、殿方の然うまゐりませんのは、女子の寡居で不自由なのは左か右かなりますけれど、殿方では其辛抱が出來ないのでございます。ですから、殿方は奥樣を二人有たうが、三人有たうが、誰も何とも申しは致しません。女子の方は爲れば辛抱の出來るものを、又外の男を有つては濟まない義でございますから、操を立てるが道としてあるのは、其處なのでございませう。」

之を聞くと柳之助は遽に起回つて、

「やあ、元はなか〳〵學者だね。こりや感心した、感心したよ。」

「あれ、可厭でございますね。」

「然う言ふ、世間では然う言ふのだ。然し、男だつて女だつて人間に差は無からう。男に不自由しては困る、女は不自由しても困らんと云ふ理窟は無いぢやないか、誰の不自由も同じ事だ。

世間の人はね、能く話をする時自分の細君の事を（嚊）などゝ言ふよ、ね、然う言ふ人が能く有る。それがお前、紳士とも謂はれる人がだよ。俺には如何いふ理だか那が解らんね。何ぼ自分の妻だからと言つて、（嚊）とは失敬ぢやないか。何で那樣に輕蔑するのだらう。俺に他が（嚊）などゝ言ふのを聞くと、（畜生）と言つとるやうに思はれて、不愉快で耐らんね。（畜生）と言ふのも同じぢやないか、那樣に輕蔑しとる細君なら、有たんが可いのだ。其等の人は一體如何云ふ料簡で妻を有つとるのだらう。妻と云ふものを下女か何かのやうに考へとるのだ、それだから其細君が類さんのやうに歿なりでもすると、下女が出て行つたやうに直に代を迎ふ。而して其を當然のやうに考へとる、世間一般に那樣方が有るものか！俺は然うぢやない、俺は細君は朋友だと思つとるのだ、深切な朋友だと。實際然うぢやないか。」

直には後を續けぬので、元は間を合せて、

「然やうでございますとも。」

「然うだらう、然うさ、無論然うさ、二人と無い朋友だ。朋友が死んだと云つて、直に代が出來るかい、出來やせんだらう。下女なら幾多も代がある、其だつて、是は好いと思つた下女の代は滅多にあるものか。猶更細君ぢやないか、其代が容易に……所か全く有りはせんよ。」

「それでは有りましたらばお迎ひ遊ばしませう。」

柳之助は嚴に頭を掉る。

「有つても迎はん！又有る理は無い！！」

「それは御座いませんか存じませんが、若や御座いましても、お迎ひ遊ばしませんので？」

「うむ、迎はん！決して迎はんよ。それは不自由な事も知つとる、男は女と違つて、操を守らんでも可い事も知つとるさ、然し俺は他の者を奥さんに有つ氣は無いのだ。類さんの事は如何しても忘れられんもの、忘れられん間に有つことは出來ん。然だらう。然し俺は一生忘れられんから、一生有たんと極めたのだ。

既往の事を考へて見ると、類さんには非常に世話になつたのに、其人が死んで了ふと直に忘れるなどゝ云ふ、那樣薄情な事があるものか。死んでも死なゝくつても、世話になつたのは世話になつた

のだし、可愛いのは依然可愛いのだ、死んで了つたから如何でも可いと云ふ氣になるやうでは本當の夫婦の情ではない。だから、俺は類さんは死んでも猶且生きとる時のやうに思つとる、一日だつて類さんの事を思はん日は無いよ。類さんが生きとる內俺が他の女を可愛がつたら、類さんは甚麼に慍るだらう。慍る慍らんは措いて、類さんは俺一人の事を思つとるのに、俺の方では他の者を可愛がると云つては實に濟まん義だ。那樣事が人情として出來るものではないさ。可いかい、生きとる內でさへ那樣事が出來んものを、死んで了つて居らんからと云つて出來るかい、死んだらば猶更氣の毒で出來んぢやないか。旣に死ぬと云ふ事が可哀さうなのだ、親や夫やね、又那したい、恁したいと思ふ事を遺して、未だ二十二や約で死ぬ！　這麼可哀さうな事があるものか。何爲に世の中に生れて來たのだ。唯悲しい思を爲に來たやうなものぢやないか。其だけでもう十分可哀さうなのだ。」

ほつたりと涙を零して、

「其上に俺が又他の者を嫁に迎つて、今まで類さんと暮して居つたやうに面白さうに一所に居つたら、類さんの心地は甚麼だらう！　屍に鞭つと云ふ語がある、死んだものを打つのだ、酷い事の譬に能く言ふ。幾許怨が有つても、死んだものを敵手にするのは卑怯だ。死んで了へば怨は消える、ねえ、怨が有つてさへ、死ねば線香の一本ぐらゐは上げて遣るべきだ。まして睦じくした夫婦ぢやないか、那樣氣の毒な事が出來るものか。如何なる不自由にも換へられんから、俺は一生獨身で暮す。死んだ上に夫は他に奪られる！　這麼可哀さうな事があるものか。死んだのは如何も爲方が無いから、せめて俺だけは他の者と夫婦にはならん、是が類さんへの寸志だ。類さんの死んだのに較べれば、俺が不自由するくらゐは何でもない。類さんも死んだから、俺も不自由する！」

元に話をしてゐながら、思迫る餘に半は獨語になつて、覺えず悲を漏すのである。元は挨拶に窮つて、

「御尤でございますとも。」

餘りと思ひながらも、理極めて哀さに、その意に悖ふことは折から言出されもせず、縮緬の紋服を槊殄にするぐらゐに止立を爲すも氣毒になつた、彼の鋏は惜氣もなく竟に小袖の襟の絲を弗と斷る。

十

お種はふと目を覺した。枕頭のラムプの光は幻のやうに、添寢の保は餘念も無い顏をして小い鼾を立てゝゐる。何氣無く隣の寢床を見れば安火を入れた夜着は人の膝を立てたやうな形をしてゐるが、枕ばかりで夫の姿は無い。はつと思つたが、居ない理、未だ歸らぬのであつた、晩い歸來であるが、それとも未だ時が早いのか、と起回つて枕時計を見れば二時十分過。

二時過ぎたのに歸來の無いのは、今夜はもう歸らぬのであらうか。會社の方達と小飲に行くと夜の更けぬ事はないが、理事の百瀨樣が御一所では、又大勢藝者などを呼散して、擧句は何處かへ……に違無い。交際も可し、間には御外宿も可いけれど、此頃は近所に能く火事があるし、又方々へ偸兒が入つて物騒だと云ふのに、恁云ふ時は可成早く歸るやうにして下されば可いのに、猶且醉ふと面白くなつて、後では何も百瀨が所好だから敵はないなどゝ、好いことばかり言つて、御自分もお嫌ひではないのだから爲やうが無い。

外では風が凄じく吹捲る。

あゝ可厭だ、厲い風だ。

臺所の方でびしり〳〵と柱などの干割れる

音がする、何だか氣味の惡いと思ふ矢先に、ばたりと紙門に打當る物音。お種は慄然として息を凝したが、傳婢が轉側を打つたのらしい。

今は全く目も覺めて了つて、火事でも無ければ可いがなど〻、案じ過して耿々してゐると、風の隙を潜つて遙に鉦太鼓が聞える。庭の軒端を簌々と風が何かに觸るのであらうけれど、人などが忍むで屋根へ昇るやうにも意はれる。地蟲の鳴くやうにラムプはぢい〱、時計は軋々、或は遠くに、或は近くに、何とも付かぬ鼾が絶間無く耳に入つて、眠らうとしても落着かれぬ鼻頭へ、床の梅が香が芬々と來る。

眠られぬに就けても夫の歸來が待たれる。二時は過ぎたが、三時頃に歸つたことも無いではない。お歸來が有るか知らぬ、有れば可いが、頼に思はる〻車の音さへ聞えぬ、巡査も巡らぬ、誰も通らぬ、寂然に二三羽の月夜鴉が啼立てる。

忌はしさに目を瞑つて凝然として居ると、忽ち戸外に跫音がしたのである。もしやとお種は[illegible]積つた夜着の襟を背けて、聽耳を欹てれば、其音は駒下駄で、はた〱と表門に近く樣子、さてはお歸來か、と胸を躍らせて、能く聽けば、夫の跫音ではない、夫の跫音でもないものが、益々近いて、遂に門口と覺しき邊ではたと停つたので、お種は脊筋を水で撫でられるやうに慄然として震へる。

停つたま〻で、待てども〱動かぬ。

胸は早鐘を撞くやうに騒ぐのを、熟と怺へて益々耳を澄してゐれば、やう〱動いて、其跫音は後戻をした、かと思へば又立返つて門口の邊に停る。放火か、賊か、二つの内！　とお種は耐りかねて起きて見やうとしたが、其も可恐し、何か篤るまで打遣つても措かれず、如何したら可からう、と首を擧げて四邊を眴すと、夫の枕頭に煙草盆がある、煙管がある、是屈竟と引寄せて、氣立ましく唾壺を連打にして、

「えへ、えへん、おほん。」

後に又一つ撃いて、外の樣子を聞澄せば、何處から嗅付けて來たのか、はや二三頭の犬が必死と吠立てる。其聲に傭が目を覺して泣出すのを、叱しながら氣を配つてゐると、最も善く吠える犬は、一聲高く叫むで、健か打据ゑられた音、お種は寝られんようも震聲で、断然奥の阿爺を起さうと覺悟した。もう呼ばうか、さあ起たうか、と躊躇してゐる間に、外の曲者は聲を揚けた。

「葉山、葉山！」

是はと思ふ間も無く、徐に門の戸を丁々、犬は猶達に吠付くのを、逐ひながら又丁々。

「おい、葉山、此を啓けてくれんか。」

まづは怪い者でもなかつたか、とお種は吻と息を吐いたが、さて誰の聲やら記憶が有るやうでも、急には心當が付かぬ。左も右も寝間を出て、出窓の戸を一枚啓けると、外は眞晝のやうな月で、眩さに顔も向けられぬ。颯と吹込む風は折角の寢温を餘さず搔攫つて、殆ど絶えも入りさうな寒さ。格子の間から斜に覗けば、踏蹈つて唸る犬、退歩しつ〻吠ゆる犬、係り吠えて勞れたらしい犬、見えるのは犬ばかりで、人の姿は隱れて、但其影法師が長く地に曳いて門前に横つてゐる。

「何方でございます。」と聲を懸ければ、其影は動いて、

「あ〻、鷲見です。」

記憶のある聲と思つたお種は、と聞いて今は少も疑はぬ。

「おや、大相お遲く。」と言ひさま閂然と戸を開てる。

犬は未だ懾かずに吠切る。柳之助は例のステツキを揮つて又一つ吃はせると、見事に外されて、發矢と大地を搏たされる、戞然と落して、

「あ、痛……っ。」と手を振るやら、噓くやらしてゐると、門の戸が啓いて、
「如何なさいました。」とお種が顔を出す。
「今犬を撲失つて、手を撲つたです。」
匆々にステッキを拾つて、門を入りながら、
「遲く出て如何も御厄介です。」と閉鎖をするお種の
「如何いたしまして。」
横顔をば、身近に置いてあるランプの光が一杯に照してゐるのを、柳之助は側に突立つて、暗い所から眺めてゐたが、平生の無愛想！　その無愛想が艴然としてゐるやう。その艴然としてゐるのに劣らず柳之助も苦い顏をしてゐた。
閉鎖をして了ふと、お種はランプを把つて前に玄關を上りながら、
「此方へ入らつしやいまし。」までが、一向入らつしやいではなくて、逐出すやうに聞える。
其後に跟いて、柳之助は座敷へ通れば、火鉢の角に燈を置いて、お種は直に次の間の閨へ入つたので、外套を着たまゝ寒さらに立つてゐたが、此時氣が着いて見ると、鐵瓶が架けてあつて、湯がちん／＼沸いてゐる。もう三時だと云ふのに、恁して火を熾して、湯が沸いてゐる、何の爲であらう。葉山は夜中に起きて茶でも飲むのか知らぬ。葉山は隨分種々な事を識つて居つて、種々な事を爲る男だから、是も亦自ら用ゐる所が有るのであらう。今に聞いて見やう、と自分は燈をさへ消して寢るのに、湯が沸してあるには、何の爲かは知らねど、その用意に驚きながら、冷たいと痛いで痺れる手を鐵瓶の胴に摩擦けて、葉山の起きて來るのを待つてゐたのである。お種の寢間へ行つたのは、葉山を起しに行つたのとのみ柳之助は想つてゐる。旋てお種は寢衣の上に銘撰の不斷羽織を引被けて出て來る。
「大相お遲く、何方の御歸りで。」とお種は火鉢の前に坐ると、直に鐵瓶を下して、馳走ぶりに火を撥ける。
「家から來たです。」とばかりで、柳之助は寢間の方へ氣を奪られて、一向葉山の起出でる氣勢のせぬのを待遠うがつてゐる。
「おや、然うで。」とお種は炭を加いで、側に布巾を被けた茶道具の盆の在るのを引寄せながら、
「何ぞ急な御用でも？」
「いや、別に……。」と可成く話を避けるやうに遇ひながら、葉山の起きて來るのを待つたが、寢間はいつまでも闃寂として、誰の起きたらしい音もせぬので、
「葉山君は未だ起きませんか。」
「今晩は留守でございます。」
「えゝ、留守？」
柳之助は失望する前に先づ一番吃驚した。
「未だ歸りませんので。」
柳之助は目を圓くして、
「はあ。」と言つた口を塞ぎかねた。
「今晩は歸るまいと思ひますが。」
「はあ、然うですか。」と姑く茫然してゐて、氣の拔けた時分に、
「何方へ？」
急に旅行でもした事と思つたのである。
「會社の方達と會飲のだと申して、下谷の方へ廻つたのでございます。今晩はもう歸りますまいと思ひます。今まで歸りませんから」
「はあ、然うですか。」と未だ呆れた顏をしてゐたが、
「何方へ泊られたのですか。」
隨分尋ねても行きかねまじき柳之助の氣色。行かうと行くまいと、其は別にして、此答には、お種も窮つた。言へば妬くやうではあるし、第一譽めた話でもない事を聞かせるも恥かしい譯、是まで言つたらば大概解りさうなものを、解らぬほどの人に聞かせるのは、猶の事好くな

いと考へて、其近處の朋友の家へ醉つて轉込むだのであらうと云ふやうに話して置くと、柳之助は渡に舟を失つた心地で、

「はあ、然うですか。」　と言ひは言つたものの、歸らうか、待つて見やうか、何と爲う。

「窮つたな！」　と頭を搔いて、又少し思案して、

「窮つたな！」　と太息を吐く。

「急な御用でございますか。」

「いや、別に何ですけれど……。」　と言ふ傍から兩手で頭を犇と抑へて、

「窮つたな！」

それほど窮るならば用の有りさうなものを、今に始つたではないが、變な人だと思ひながら、此夜深に來たのは切迫の事であらうに、と折惡い留守が如何にも氣毒で、せめては何とか款待をしたいと切に考へながら、先づ出來たので新煎を出す。

柳之助は心を空にしてゐる體であつたが、出された茶をがぶりと飮むで、

「それぢや歸りませう。」　と外套の鈕を一つ掛けて、未だ十分躊躇してゐるのは、如何にも用有りげに見えたので、お種は又推して訊ねると、其の答は前の如く（いや、別に。）であつた。それならば直に歸りさうなものを、自分を對手に爲るでもなく、其事でも思案してゐるらしい様子で、いつまでも遲々してゐる。

次の間の枕時計が四時を打つのを聞いて、柳之助は持つた帽子を側へ投出して、

「貴方もうお寢み下さい。」　と仕舞つた卷莨入を出しかける。お種は寢衣に羽織で、肌薄の寒いこと夥しい。幾度と無く緊々と襟を搔合せては、身顫の出るのを怺へ〳〵てゐたが、

「いゝえ、どうせ目が覺めて居りましたのですから。」

「然うですか。」　と柳之助は其氣で莨を吹してゐる。話は無し、所在は無し、唯惡寒いばかりはお種も辛くて、

「もうお遲うございますから、お泊りなすつていらつしやいまし。丁度拙夫の床が暖まつて居りますから、那を此方へ持つて參りますから。」

好いた人は居ずに、好かぬ人ばかりの内に泊る氣はない。然うかと云つて、是から家へ歸る元氣は猶無い、家に居るのが可厭に此夜も話に飛出して來たのである。然し當にして來た人が不在であるからは、歸るより外に無いが、わざわざ此寒さに歸つた所で、甚麼ものであらうと思ふに就けて、今のお種の言が身に沁みる。（どうせ目が覺めて居る）と言つた。夫の歸を待つて目を覺して居たのであらう。（拙夫の床が暖まつて居る）と言つた。氷のやうになつて歸つて來るであらうからと、其支度をして待つて居たのである。此に火の熾してあるのも、湯の沸いてゐるのも、拙夫の歸を待つてゞある。恁して十分に用意のある所ならば、歸るにも歸榮がある。自分は歸ると、元が寢惚けて戸を啓ける、臺所ランプを假りて眞暗な座敷を通つて、微寒い階子を昇る、二階はランプが陰々黯いてゐて、火も無ければ湯も無い、座敷の眞中に徒然と床が一つ敷いてある、煖まつてゐるどころか、鐵の板のやうに冷たくなつてゐる。此寒いのに那麼處へ歸つて行かれるものか。類さんが居たらば、斯云ふやうに支度をして待つて居るであらう。其を想ふと柳之助は忽ち怳然として暫く心の樂まされて居る間は、我前に人の歸を忍むで窃に寒に震へて居るのも忘れてゐたが、ふと氣が濟けば、待つ人は無い！　待つてくれる人には死なれたのである！　自分を待つ人は亡くなつて、他のは斯うして無事に居ると思へば、可羨しいのか、憎いのか、好かぬお種の姿も不覺に見られる。

彼は長年此家に往來してゐる事であるから、可成會はぬやう〳〵とは爲てゐたものゝ、主の妻であつて見れば、萬更會はずにも濟されなかつた。會ふことは數知れぬけど會つたが、傍に出て居られても、早く行けがしと思ふばかりで、目を着けて淺々視るほどのことは無い。又他から見るやうなれば見られぬやうにして了ふので、可恐いものは見たさであるが、可厭なものには誰しも傍目も觸らぬ。見ることも見られる事も、柳之助は快しと爲ぬのである。今夜ばかりは不思議に例の可厭でもなく、然かと云つて別に如何と云ふ氣のあるでもなく、究竟お種なる蟲の好かぬ細君ではなしに、或一個の女子に對する心地で、其顏なら容なら樣子なら、思はず識らず目を留めて視た。今夜見るお種は彼の平生考へた葉山の妻ではない、葉山の妻は昻然として、愛憐の無さゝうな、何處かに主角のある、男らしい理窟でも言ひさうな、一から十まで彼の氣に適はぬものであつたが、今夜のお種は信に靜淑に、弱々とした所も見えて、不相變愛嬌も世事も無いが、更に憎むべしとも覺えぬ迄に、女らしく可憐であつた。其所爲か又美しくも見えた。固より醜い容色ではない、人に依つたら輕々しく美人と言ふかも知れぬ、色も白し、目鼻立も揃つてはゐる、が、自分は決して美しいなどゝは思はなかつたのが、今夜は左も右も美しいと悟されたのである。何故に然うまで變つて見えたのかは、柳之助も自分ながら解らぬので。洗晒した小豆色のフランネルの單衣に襟を懸けた柳條の布子を重ねて、紫太織の細帶を緊めて、紊亂れた襟は寛け勝に胸の白いのが覗かれる。天神の鬢が少しく縺れて、萎えたやうな肩附をして、何處と無く取締無く、寒さうにしてゐる姿に、夜闌の燈の射した所は、格別好く見えたのである。

　柳之助がお種を見る時は、毎も神々しく髮を結つて、服裝を整然として、一寸坐るにも勿躰臭く、專ら奧樣として見識を取つてゐる最中のみであつたから、此人に滋嫩柔い樣子の有らうとは實に想も着かず、之が大きに柳之助の目には美しく見えたのである。

　猶彼の心を動かしたのは、夫を待侘びて目を覺してゐたのと、床を煖めて、湯まで沸して待つてゐるのと、其までに爲てゐながら夫の今に歸らぬとで。其胸の中を思遣れば、明日は知らず今夜の所は不便の人でならぬ。自分は歸つても誰待つものは無い人、お種は待つても歸られぬ人、大小の差こそあるが、心細さは似たものである。自分は一度たりとも恁云ふ思を爲せたことは無いが、之が姉さんであつたら如何するであらう。

　柳之助は獨で考へて獨で益不便にして了つて、何とか慰めて遣らなければ心が濟まぬやうに覺えて、

「どうも居るものが居らんと寂しいですなあ。」

と取着も無く言出した。

「然うでございますよ。貴方も然ぞ種々御不自由で在つしやいませう。未だ些の昨日のやうに思ひますけれど、もう廿日計で百個日にお成なさるのでございますねえ。」

「然うです。」

「然ぞ御不自由でゐらつしやるだらうと思ひましてね……。」

「不自由は可いです、唯寂しくて、寂しくて、それが如何も敵はんですね。葉山君は何ですか、今夜のやうに他で泊られる事が折々あるですか。」

　お種は寂しげに笑を洩して、指環を拈りながら微に俯いた。

　極の惡い時、言出し難い時、指環を拈りながら其を瞶めるのは、お類の癖であつた。其の謂はれぬ可愛らしい樣子をば、葉山の妻に見せられやうとは、甚麼事にも思設けなかつたから、

柳之助は殆ど其人のお種であることも、恐くは自分の柳之助なることも忘れて、心のみ怪しげに衝跳いた。

偶には内を空けるが、其は交際で如何も爲方が無い、とばかりでお種も深くは言はぬ。因で話は切れて了つたが、四時も半となるのに、柳之助の歸る氣色は無い。お種は益寒くはなるし、少しは睡くもなるに、假初にも客であれば、一人置放にして御免を蒙る譯にも行かず、泊れと言へば、今にも歸るやうなことを言ふし、如何にも手を着けかれて困じ果てた。

柳之助は又、午前と午後とを取違へてでもゐるやうに優々と坐り込むで、それで然と話のあるでもなく、睡くもないから不如此儘夜の明けるを待たう、と云ふ了簡でゞもあるらしく唯兀然としてゐる。

此寒いに歸りたくもないとならば、泊りさうなもの、泊るが好ましくないならば、面白くも無さゝうに悄然してゐずとも、匆々と歸りさうなものを、行きたくもなければ、泊りたいでもない窮屈で氣の毒さうにしてゐるのは、何ぞ心に[illegible]事が有るに違無い。其でこそ此夜更に[illegible]ねても來たのであらう、左も右も[illegible]に違つて[illegible]、[illegible]済まぬので、然して何方付かずに遲々してゐるのとお種は考へたから、切めて話でも無くては彌敵手をしてゐられるので、又其事を訊ねて見る。

二度まで柳之助は（いや、別に。）で紛らして了つたが、今度はやう／＼塞みかねた躰で、

「用ではないです。用ではないですけれど、……實に僕は弱つたです。」と泣出しも爲さうに見えたので、お種も驚かされて膝を前めると、折から鷄が啼立てる、其にも管はず柳之助は家を飛出した仔細を話始める。

成程彼の言ふ如く、用事ではない、然し尋常一樣の用事よりは未だ厄介な、久しく打絶えてゐた夜半の寢覺が今夜卒に再發して、而も其が從來つひに覺えぬほど、寂しくて、心細くて、抑へても／＼曳入れられるやうで、如何にしても内には居耐らなくなつて、寒いも夜深も考へる遑無く、寢衣の上に外套を引被けたまゝ飄然と飛出して、實は來る氣も無しに來たのであると、お種は唯呆れるばかり！　一躰那樣事が有るべきものだか、何だか、皆無腑には落ちぬので。餘程變な人もあれば有るものと、却つて念にも懸けず靜く聽いてゐたが、柳之助は尋常ならぬ氣色で、その心細い家へ還る氣力は無いらしく見えたから、いつそ泊めたが可からう、とお種は獨斷にして、夫の寢床をば此方に移して、須臾夜も明けるゆゑ、暫く横になるやうに勸めたのである。すると柳之助は何と思つたか、衝と起つて、

「いや、歸りませう、僕は歸ります。」

十一

翌日の點燈頃柳之助は又尋ねて來た。葉山は此から一盃飲まうと云ふ所で、茶の間の火鉢の傍に膝を控へて、鯛の拔乳羹を沸々いはせながら、柔かい袷を引被けて、全然冬籠の支度の出來た所を、今更起たせられるのも辛いと、奥へ通されるのは嫌ひの柳之助とは知りながら、幸ひ誰も居らぬから此へ、と婢に案内をさせると、可恐吃驚と云ふ態で入つて來たが、葉山一人で細君は見えず、燗の世話なども自分で爲てゐるのを、希しげに眄して、

「お寒う。」

「いや、お寒う。今旨い物が出來る所さ、まあお坐んなさい。」

「一寸遊びに來たよ。」と柳之助は外套のまゝ火鉢の前面に趺坐を搔く。

「昨夜も來たさうだつたけれど、生憎留守で。」

「君は何處へ泊つたのだ。」

好い所さ。」と葉山は片笑みながら鐵瓶から德利を引出す。
「何處だい、好い所と云ふのは。」
毒見をしたのを柳之助へ差して、
「情人の所さ。」
「情人?!」と啞然とした躰で、
「怪しからん! 虛だらう。」
「虛な事があるものか。」と葉山は眞顏になつて見せる。
「怪しからんね! 其は何處だ。」
「聞いて何に爲る。」
柳之助は叩と塞つて、
「何にも爲やせんけれど、唯聞くのさ。」
「漫然情人の所なんぞが敎へられるものか。」
「何故?」
「財の在所を云ふのも同じ事で、物騷だからね。」
「馬鹿な!」と柳之助は苦り切つて、然も銜付けるやうに盃を返して、
「虛なのだらう、君、ねえ、本當の事を言ひたまへよ。」
「で、もし本當なら如何する氣だね。」
「那樣事を! 無論僕は默つては措かん。怪しからんぢやないか、情人なんて何だ。君は細君が有るぢやないか。細君を何と思つとるのだ。」
眉を昂げて詰りかければ、
「是は難しくなつた。ぢや情人は虛で、實はと行から、實は、飲過ぎて朋友の所へ踏り込むで了つたのさ。」
「それぢや可いけれど、家を空けるのは止し給へよ。」
葉山は笑ひながら、頭を抑へて、
「畜生め、昨夜細君から賴まれたな。」
「何を? 僕は何も賴まれやせんよ。」
「お種が宜く申しましたよ。」
逸早く柳之助は勘違をして、
「細君何處かへ行つたの。」
「何處へ行くものか。今朝から奥に寢て居る。」
「寢てゐる? 如何してね。」と少しく慌てれば、葉山は故と澁れながら、
「病氣でねえ、困つたよ。」
「病氣? 本當かい、君、風でも引いたのかい。」
「なか〱。」と葉山は苦々しさうに首を掉る。
「甚麼病氣だよ。」
「なか〱。」
「だから甚麼だと言ふに。」
「大病! どつと蓐に就いてゐるのさ。」
有繋に柳之助は眞僞を疑つて、葉山の顏を眺めたが、其額には何と書いてもなかつた。
葉山は鍋の物を椀に取分けながら、
「而も君大病は君ゆゑさ。」
「君は何を言ふ? 僕が知るものか。」
「君は知らない? 然らかい、それぢや君の所爲ぢやないのだらう。して見ると誰だらうな、昨夜遲く來た客は? 今朝の天明まで居たのは。」
と諷刺られて、柳之助は躍起となる。
「僕さ、それは僕だらう。」
「あ、君かい、それぢや依然君だ。」
「僕は妻君を如何も爲やせんよ、怪しからん?」
「何ぼ阿多福でも、豈敢に君が今戸燒の火入と間違へて、蹴付けてお出額を打毀いた義ぢやないさ。けれど君のお合手を爲てゐたらう、ねえ、それで到頭風を引いて、今朝から頭痛で、眩暈がして、惡寒がして、鼻が塞つて、苦しがつて唸つてゐるだらうぢやないか。成る程風を引いたのは自分の洒落さ、然し引かせたのは鷲見柳之助君だよ。さあ、それだから切めて見舞にでも行つて遣り給へ。這麼苦しい思を爲るのも鷲見さんの御蔭だと、今朝から言續にして君を怨

むでゐるから、浸然飛込まうものなら咬ひつかれる、用心をして行き給へ。」
　僞を八分に聞いても少しは懸念の氣味で、
「那樣馬鹿なことを！」
「僞と思ふなら、行つて咬ひつかれてお出なさいな、手前は知らないから。」
　咬ひ付くは、葉山が例の滑稽にしても、風を引いたは、何やら信らしいので、柳之助は氣を變へて弱く出る。
「それは濟まん事をした。實は僕もね、那麼夜更に來ては迷惑だらうとは思つたけれど、實際內には居られんだつたものだから……惡かつたね。君が居ると思つたから來たのだけれど……。」
「知れた事さ、丑の時詣の行く時分に亭主の留守を覘つて來れば……。」
「何時僕が覘つて來たよ、失敬な！」　と柳之助は眞に成る。
「何時僕が覘つて來たと言つたよ。他の細君を病氣にして置きながら、逆捻を吃せるのは手嚴しいぢやないか。」
　と聞けば又氣の毒になつて、
「本當かい、君。」
「僞だと思ふなら奧に寢てゐるから行つて見るが可い。」
「それは僕は濟まん事をしたなあ。」
「君は誠に濟まん事を爲たよ。」
　と不知しく爲れるほど、傍に居るのも奇痒いやうで、何と挨拶を爲たものであらうか、と大きに柳之助は氣にしてゐるのを、葉山は其と橫目に見ながら、ちびり〳〵と飲みかける。
「君、濟まん事を爲たね、僕は。風邪は氣を着けんと可かんよ、妻も初發は風邪だつた。風邪は一寸した事のやうに誰も思つとるけれど、多くの病氣は風邪からだよ。それは早く藥を飲まんと可かんね。」
　彼は意を留めなかつた浴後の風邪が因で、最愛の類さんを亡つたのであるから、今お種が風邪と聞いたのは、心の痛と聞いたよりも、腸加答兒と聞いたよりも、なか〳〵死に近い病であるやうに、忽せならず可恐く覺えたのである。
「體は大事に爲んと可かんよ！　人間と云ふものは割合に脆いものだ。」
　と後は何か物の見えるやうに柳之助は晄と壁を瞶めてゐれば、葉山は一寸振向いて、
「旦那、お吸物が冷めます。」　と言ふのを現に聞きながら柳之助は超然と座を起つて、
「一寸僕は行つて來やう。」
「何處へ行くのさ。」
「妻君の所だ、——僕は見て來る。」
「御見舞かい、それは御奇特な事だ、……は可いが咬ひ付かれるよ。」
「可い、もう那樣言。何處に臥とるのかね。」
「本當に行くのかい、是は不思議だ。君は始終來ても家人に會ふのを可厭がつてゐるぢやないか。二十九歲になつて人見識を爲る人ぢやないか、その鷲見君が如何したものだ、寒いから雪でも降らなけりや可いが。」
「行つちや異しいかな。」　と葉山の膳を見下して杉立に立つてゐる。
「何が異しい事があるものか。それが禮なので、從來の方が餘程異しくて御在なさる。」
「然うだらう、だから行くのだ。それに君は僕の爲に妻君は風を引いたと言ふぢやないか。」
「いや、それぢや自分が風を引かせたから見舞に行くので、然も無ければ死ぬほどの大病でも訪ねてはくれない氣かい。不實なものだ。」
　と横を向いて飲むでゐる。
「決して那……那樣事は無いさ。まあ行つて來やう、何處だか敎へてくれ給へ。」
　葉山は婢を呼むで、案內を吩咐ける。其に續

いて出たかと思ふと、直に柳之助は入つて來て、慌忙しく外套を脱捨てゝ行く。
　奥の六疊へ、伴れられて、婢の紙門を啓けた途端に内を覗くと、縞中形の大夜着を山のやうにして、お種は腹這になつて、枕頭に保を据ゑて、張子の面を被つて首を掉つてゐると、保は干菓子の松葉を面の口へ擬つて、面白さうに遊むでゐたが、
「奥さんお客樣が。」　と婢が通じると、お種は屹と振向いて、思懸けぬ面色で暗い紙門の外を見込む目前へ、柳之助が衝と顯れたので、
「まあ是は。」　と夜着を撥斥けて、早速褥の上に居直ると、保は呆れた顔で、眄々した目をいとゞ圓くして、知らない小父さんでもないが、無氣味さうに視てゐるのを、婢が紙門の外から手招を爲れば、彼面と菓子を容れた紙の鞄を引抱へて、疊を蹴立てゝ逃げて行く。
「どうも這麼に取亂して居りまして、大變失禮でございます。」
「はあ。」　と應けた限で、莨を外套の衣兜に入れて置いたのも忘れて、有るたけの衣兜を捞廻して、やう／＼手に觸つた手巾をば切めて曳張出して、出たくもない洟を去む。
「昨晩は又失禮を。」　と實は此方から言ふべき所をお種に先を越されて、彌引込むではゐられず、
「いや、私こそ失禮しました、御病氣ださうですな。」
「いえ、何有、ちよいと風を引きまして。」
「昨晩お引きに成つたのださうで、どうも實に僕は失禮しました。」
「いゝえ、貴方、お午後にお湯に參つて、一寸寒いと思ひましたら、それから頭痛が爲出しまして。」　とお種は取繕つて言ふ。
「はあ、然し御氣分は如何ですか。今葉山君に聞きましたら、大變そのお惡いのださうで、僕は心配しました、ですから一寸お見舞に。」
　と又手を背廣の衣兜に入れたが、莨は依然無い。お種は帶の緩さに前の直に亂次なるのを、氣にして正しながら、
「それは如何も恐入りました。何有もう些の鼻風なのでございますよ。葉山が那樣事を申しましたか。」
「はあ、昨夜僕が晩く來た爲に貴方が風を引いて、今朝から唸つて居る、と然う言ふです。」
　お種は笑つて、
「僞でございますよ。」
「僞ですか、あ、僞ですか！」
「もう始終冗談ばかり言つて居つて困ります。」
「然し、風邪は注意せんと可かんですな、藥は？　はあ、飲みましたか、それは一番可いです。死んだ妻は藥が大嫌でした。究竟其が爲に死んだと謂つても可いでせう。初發は風邪でした。實際風邪は總ての疾病を誘ふですね、それだから注意せんと可かんですよ。一寸した風邪なので僕も那麼に思はんでした、それに妻は能く不斷風を引いたですから、自分は勿論、僕も大した事は無からう、と平氣で居つたです。」
　忽ち打つて變つて柳之助が喋るのにお種は驚いた。
「其が失でした！　輕い内に滔々藥を飲ましたら、何でもなかつたです。實に殘念したのです。貴方の今の風邪ぐらゐの時に藥を飲むだら、難は無かつたです。貴方は善い、貴方は善い！　藥をお飲みなさるから善い、妻は其藥が嫌なのだから爲やうが無いぢやありませんか。ですから僕は喧しく言つたです、然すると直に慍るです……から好加減に爲て措いたですけれど、僕も不注意でした。本當に貴方も注意爲さいよ。體は大事に爲なければ成らんです。死んぢや可けません、死んぢや大變です。もし明日にな

つても癒らんやうだつたら、醫者に診せるが可いですね。葉山君は平氣で酒なんど飲むで居るけれど、僕は心配でならんですよ。妻も同然風邪からですからね、而して同然湯に行つてからです。病様事が似とるですから、僕は何と無く不愉快です。」

　未だ何か言ひたいことが有り氣に、柳之助は熟と首を傾げてゐる。お種は疾から努めて起きて居た爲に少し頭痛がするので、柳之助の手前其とはなしに片手で額際を揉みながら、

「いろ／＼御深切に難有うございます。」

柳之助は忽ち見着けて、

「あ、頭痛がしますか。お寢みなさい。お寢みなさい。」

「いゝえ、何有。」

「お寢みなさい、え、お寢みなさい。」と起つと跳けて、茶托ぐるみ茶椀を蹴飛して、從々とお種の蓐の裾へ廻つたので、何を爲るのか、と逆身になつて見てゐれば、夜着を扛げて、

「お寢みなさい、お寢みなさい。」

「あれ、まあ飛でもない！　貴方何卒……。」とお種は身を拉むのに、柳之助は獨り會得むで、

「何有、可いです、お寢みなさい、被けてあげます。」

「では御免を蒙つて私は横になりますから、何卒貴方それだけは……折角でございますけれど。」

　とお種はやう／＼の思で彼の手から夜着を引放す。

「はあ、然ですか、それぢや……。」と調子の外れた顏をして、柳之助は悄々座に復つたが、坐るか坐らぬかに、

「ぢや又、……お大事に爲さい。」

　と魚膠無く起上るのを、お種は機嫌を損じたと見て、實は頭痛がして早く行つてもらひたいのではあるが、義理にも留めずには居られぬ所で、膝の上に引附けてゐた夜着を掃斥けて、

「貴方、まあ宜いではございませんか。」と蓐の端まで身を進める。

「はあ、難有う。又……。」と逃げるやうに柳之助は此を出て、茶の間に還つて見れば、盃盤狼藉として葉山は既に櫻色の機嫌。

「如何したい、喫付かれも爲なかつたかい。」

「那樣事は無い。」

「そりや、まあ結構だつた。餘り長いから如何したかと、實は今昔の御見舞に出掛けやうと思つた所さ。でも能く這麼に長く居られたね、捉まつて話込まれたのかい。」

「いんや。」

「默然で唯睨競かい、あゝ氣の利かない！」

「いんや。」

「然うでもない？　ぢや甚麼だらう。」

「病氣の事に就いて種々忠告をして居つたのだ。」

「君が？」と葉山は眉を蹙めたが、

「ふむ、不思議だ。何しろ、女と應待を爲るのは、どうも照れて可かんものだ。私などは極臆面の無い方だが猶且窮るね。それを君が今まで繋いだのは感心したものだ。

　いや、毎も言ふことだが、慇してお互に兄弟のやうにしてゐながら、細君には他人行儀なのは面白くない、是非兄樣同樣にお見識り置かれて、末長く御懇意に願はなければ非さ。能く世間に在るぢやないか、獨身の内は仲を善くしてゐたものが、所帶を持つと妙に遠かつて、毎日のやうに往來をしてゐたのが、段々と御無沙汰になつて、結局には年始だけの顏出になるよ。それから其先が、到頭一錢の郵便はがき一枚とまでなるのは酷からう。お互に何かまあ葉書にはなりたくないぢやないか。

　それに、甚だ意氣地の無いやうだが、他が細君を持つと、何と無く其家へ行難くなる奴さね。と云つて、持參附でなければ、御臺所を持つて

來て居るのでもないのだよ、それなら別に細君に對して遠慮も糸瓜も無さゝうなものだけれど其處が妙さ、迫は生きながら山の神とも崇められるほどの德が有ると見えて、十七八の可愛らしい娘でも、頭に圓い髷を載せて火鉢の前に端然としてさへゐれば、さあ諸の出入る惡黨輩は戰慄いて、私のやうな益友までが自と氣兼を爲るよ。そこへ行つて長尻をしたり、夜を更したりさ、就中時分時に落着拂つて、其擧句が引張出しの、其晩が旦那樣御歸などゝ來た日には、神罰は忽ちだね。

君などは然云ふ事は御心得はあるまいけれど細君と云ふものは何處のでも必ず一冊づゝ、親にも見せないと云ふ、それはなか〳〵嚴しい帳面を皆須むでゐるものだよ。えゝ、妄ちやないとも、搜して見給へ、お類さんのもあるから。その帳面と云ふのが、名を聞いてさへ凄然するね。」

葉山は我面白に調子付いて、

「何と書いてあるかと思ふと、可いぢやないか、(屹度覺帳)！(屹度)が面白い。此二字の裏に、伸上つて、えゝ悔しいといふ細君の顏が見えるやうだ。」

柳之助は一向氣の乘らぬ顏で、

「その帳面は何だい、君。」

「おゝ、その帳面、その帳面には第一に、內の亭主を引張出す遊蕩友達、來ると飯を食つて行く客ね、一寸貸せを言つて來る奴、其外亭主の醉つて歸つた晚、內を空けた日、怪しい手紙の來た日、などゝ云ふ所を一々記けるのさ。別して、家の不爲になる友達の名は、泄無く留めて置く爲の帳面だから可恐からう。何の爲に留めて置くかと云ふと、それ、そこが(屹度覺帳)だ。此御帳面に留められた奴が、其次に踊々行からものなら慘憺！輕い所で、異う諷誑られの、少し重いと、顏色を爲れます。一遍お帳面に留められたが最期、もうそれからは行く度に冷遇を蒙るのだから、有繫に誰も行く氣は無くなるわね。因で自然と足が遠くなる、すると、其奴が屹と他へ行つて吹聽します、誰某の家へ行くも可いが、あの嚊が左衞門尉胸惡だから面白くないとか、見たくでもない不見識な面を爲てゐるとか、是が又亭主の名折にもならうと云ふ一件だ。那樣評判でも立つと、來て差支の無い人までが自と來なくなる態、然かと云つて、是が何も、女慧うして牛の肉と馬肉と間違へた義ではない、お帳面に記けられる奴の方が重々惡いのだけれど、一寸聞くと細君の爲方が善くないやうに言はれるのは、そこが女子の損、罪の深い所なのさ。

尤も人間と云ふ奴は弱いもので、所帶を持つた日には、から意氣地は無いのさね、幾許才子だの色男だのと頤を撫でゝも、それは阿爺のソップを吸つてゐる時分の太平樂で、窃と笹折を挈げて親睦會を拔けて歸ると、貴方また差配が來ましたよ、などゝ脅迫されるやうな始末ぢや、萎縮ずには居られないよ。何と云つたつて、獨身の內のやうに氣散は無いのさ。當前で蕎麥を食つて、歸りがけに、一寸その時計を貸し給へ、などゝ云ふ曖昧に物事が手輕に行きません。それが一つは交際の疎くなる發端で、お互に育つて、いつか鼻の下に髭でも生えれば、何か紳士のやうな面にも見える。いや又銘々も一廉紳士の氣さ。因で種々外飾もあつたり、言はれない內情も出來たり、彼此生活が複雜になるに就けて、隔離の出來るのは、實に致方が無いのだ。

然し今の(覺帳)の一件でね、牝鷄の禍を爲る所も大きに有るのさ。其が又所帶の方から謂へば、爲筋にもなる所だから、帶になれば襷には長しだ。だから考へたね、家に女房あるはさ、恰も庭前に畑の有るが如しだらう。

それ、畑には培養をしなければ物は生りません。培養をすれば庭の方が臭くて耐りません。此理窟だよ、女房は庭續の畑さ。臭いからと云つて、それで畑を棄てられもしまい。どうで匂ふものと諦めて、芬と來たら鼻を撮むまでの事さ。

所が君などは臭いのに恐れて、丸で寄付かないから拙いよ。珍しさうに吹聽するまでの事は無いが、夫婦の間は魚と水との如しさ。君などは別して睦じかつたから、穴と鰻との如しだつたよ。亭主は動き廻るから魚だ、内君は澄してゐるから水だらう。その魚を求めるのだよ、人と交際を爲やうと云ふのは、魚を求めるのに水を恐れて如何なる。何處までも水理を呑込むでゐて、因で始めて魚も獲れるのぢやないか。噫、息が切れる。」 と忙しさうに茶を一杯飮むで、

「さあ魚が水を得たから勢を増したぞ、因でだ、君も是からは、冷たからうけれど水にも入りさ、臭かつたらば鼻も撮むでもらはなければならない。と言ふと、何だか私が酷く細君に恐入つてゐて、君が常住來るのを細君が陰で可厭な顏でも爲る所から、その禁厭に些と胡麻を擂つて置いてくれ、と賴むやうに聞えるけれど、那樣不見識なのぢやないよ。實は從來度々言つた、けれども君が聽いてくれないから諦めて居たのだけれど、昨夜と云ひさ、又今の見舞に出掛けた手際と云ひ、如何して隅へは置けません。不斷其呼吸で遣つてもらへば何の事は無いのだ。遣れば其だけに行くものを、變に竦むで居なくても可いぢやないか。その呼吸さ、その呼吸で是非一番今日から改めて始めてもらはう。それに、いづれ君の彼處の所帶を仕舞ふと、内へ來るのだらう。」

應答が無いので、葉山は聞直す。

「來る意なのだらう。」

其顏を柳之助は眩しさうに見て、ほやけた聲で、

「未だ極らんのだよ。」

「未だ極らない？ それぢや此方ばかりで極めてゐたのか、大失敗だ。來たら可いぢやないか、それとも何處か外に所期があるのかい。」

「有りは爲ないけれど。」

「それぢや如何するのだ。」

柳之助は默々してゐる。

「もう何とか極めてなけりや、間際になつて狼狽だらうぢやないか。」

深切にも言ひ、推しても了簡を問いたけれど、漠然とした挨拶ばかりで、竟に要領を得ずに了つた。

旋て十時の時計を聞くと、柳之助は急に身繕を爲るので還るのかと思ふと、

「今晩泊つて行つても可いかい。」

「泊る？」 と葉山は餘りの思懸なさに念を推す。

「不都合かい。」

「不都合な事は些とも無いが、希しいことを言ふからさ。」

「又此二三日寝られんで窮る。還らうと思つたら可厭な心地になつたから、泊めてくれたまへ。」

「可哀さうに元は一人で寂しからう。」

十二の一

所帶を疊むのは姻家の母親は大の不同意で、男たるものが一家を構へたのは一人前になつた證と云ふもの、それでこそ始めて男の數に入つたのである。世間にはやれ政治家だ、學者だと、高慢ちきな顏をして、滿足に一軒の所帶さへ張切れぬ人が幾多もある。甚麼に可重人か知らぬけれど、高が自分の身始末、それが出來ぬやうで、何が出來やう。私に謂はせれば、三文

の價値も無い人士。昔の武士は幾許窮乏しても皆武具の用意はしてゐたと云ふ。紳士とも謂はれやうものが、家を一軒持たずに居て濟むであらうか。世間へ對しても誠に恥しい譯―腑効の無いことである。それとても意氣地が無くて持つて持てない所帶なら爲方が無いが、然でもないものを、躊躇にも程が有つたもの、今更下宿住とは何事であらう、と云ふのが母親の了簡。そこへ、話をしたから以ての外で、柳之助は太く意見を爲れたのである。而して、一旦嫁いた娘は、身體さへ差上げて貴方の物になつてゐるものを、離縁を爲れたではなし、その荷物を復される理は無い、私方では請取りませぬと云ふ口上。母親は辯舌爽快、柳之助は口不調法と云ふのであるから、散々言捲られて、ぐうの音も出なかつた。

然し、如何やつても不愉快の所帶は疊むで了はうと思込むだ柳之助は、辯解がましく反復して、その不愉快の事情を抒べたのである。すると母親の言ふには、其不愉快も當座の事で、長くて半年も經たら、左か右か忘れられる。一旦所帶を持つたものが下宿住や同居などをして、その不自由の辛抱が出來るものではないから、一途の了簡で那麼事を爲やうより、年寄の言ふ事は聞かうもの、那麼にもお類をば可愛いものに思つて下さる貴方の事を、惡いやうには思はぬのであるから、まあ〳〵騙されたやうな氣で、もう二月三月あのまゝで辛抱を爲るやうに、と理を分けての意見、と云ふよりは賴むやうにして言聞かせたのである。

段々談話の裏に、柳之助も（はてな）と氣の着くことがあつた、其は正しく後妻の事に就いて母親が謎を懸けたので。此謎を懸ける前には微見したので、微見す前には匂はしたので。實は匂はしても利かなかつたから微見し、微見しても通ぜぬやうであつたから、到頭謎を懸けて見たので。柳之助も有繋に（はてな）と思つたのは其時で。是は長く話をして居る所ではないと心着いたから、

「それでは最一度考へて見ます。」と草々に切揚げて別れたが、因で思合せると、母親の不同意なのは、お島を後に直さうといふ肚に違無い。それでは愈彼所帶を持つては居られぬ。母親が不同意なら不同意でも管はぬから、此方は此方で斷行するより外は無い、と柳之助の決心は益固くなる。

「考へて見ませう。」と言つて別れた限、七日經つても十日經つても、考へて見た挨拶が無いので、母親は氣にして、百個日の法事の打合旁柳之助を訪ねたのである。

その日は日曜で、彼人の事であるから休日だとて出懸けは爲まいけれど、然し朝の間にと、十が十まで在宅と見込むで、好物の菓子を土産に喜ばれる氣で來て見れば、案外の留守！

「何からお話し申さうやら。」と云ふ顏で、可懷さうに元が欵待をするのも、餘り嬉くはなかつたが、之から樣子を聞いて見れば、昨夜から歸來の無いのは葉山へ泊つたのであらうとの事。と言置いて出たのかと聞けば、然らでもないが、近頃は每晩のやうに食事を了ふと葉山へ遊に出かけて、內は寂しくて寢られぬと言つては泊つて來る。それから直と出勤して四時に歸る。日暮までは內で、又葉山へ出向く。

「內は私一人のやうなもので、もう〳〵寂しくて敵ひません。」

と怨言がましい元の口氣。

「それでもまあ〳〵旦那樣の御爲には、葉山樣が誠に洒脫な面白い方でございますから、お遊びに御出になるのは、御氣霽になつてお宜しうございませう。其所爲か、此頃は一時のやうに鬱切つて御在なさるやうでもございませんから、其がまあ何よりでございます。眞に一時の

御樣子では、御病氣にでもお成なさりはしまいか、と私は悚々いたして居りました。」

段々聞くほど母親は腑に落しかねる。近頃は夜泊を爲る、而して一時のやうに鬱いでは居らぬ、百個日が經つと所帶を疊む、而して此間も言ふには、もう一生妻は持たぬと決心した。如何も言ふ事爲す事が變だと思つたが、それでやうやう解めた。一生妻を持たぬのも、所帶を疊むのも、近頃は機嫌の好いのも、皆其の夜泊が爲る業？　何處の葉山か知らぬが、はて困つた事になつた、と母親は遽に投首をして熟と考へ始めた。元は其態を見て、是は何でも言はねば濟まぬ用があるのであらうと察して、

「遠くもない所でございますから、車を持たしてお迎にあげませう。」

と氣輕に起つのを、母親は力無げに頭を掉つて、

「まあ、止しませうよ。」

「でも貴方、折角御出あそばしたものを、もう一服あがつて在らつしやいまし、雜作はございません、直でございますから。」

「いゝえ、葉山さんには居りますまいよ、いづれ百個日には會ひますから……。」

果は眞に雁首の熱くなつた煙管をば、思切つたやうに筒に容れて、母親は窃と長吁を吐く

「日曜でございますから葉山樣と御一所に御出遊になつたかも知れませんけれど、まあ左も有れ使を遣りませうでございます。」

強ひては母親も止めぬので、元は早速迎の車を誂へて來る。

程經つて門の外に車の音がして、

「へい、唯今。」　と車夫が格子を啓ける。元は飛んで出る、母親は耳を欹てる。

「えゝ、今朝ほど彼方の旦那樣と龜井戸へ梅見に御出になりましたさうで。えゝ、御歸來は晩方だらうと有仰いました。」

「おや、然でしたか、御苦勞樣。」　と元の言ひ切らぬ間に、奥から聲が懸る。

「其車で宅に私は歸りませうよ。」

十二の二

梅見とは虚妄、宿から使の來た時柳之助は確に葉山の二階に居たのである。思懸けぬに母樣の訊ねて來たは、恐らくお島の事、會つては大變と、用捨も無く居留守を遣つたことは遣つたが、さあ後になつて胸の安からぬこと太甚しい。彼の率直の了簡では大罪でも犯したやうに、居ても起つても在られぬ樣子で、默つて考へてゐては、時々堪へかねて、

「僕は惡い事をしたなあ。」　と係り煩く言ふのが、到頭葉山の耳に障つて、

「それほど惡いと思ふ事なら、初發から遣らないが可いぢやないか。後で又惡いと氣が着いたのなら、此で暗々言つて居ずと、先方へ行つて謝つて來るのが早手廻だ。高が居留守を遣つたのぢやないか。それしきの事に變慴するやうな事ぢや、君とは漫然と同乘も出來ないよ。何故も無いものだ、車の底が拔けはしないかと、輪が一つ轉がる度に聞くだらう。弱蟲！」

呵られると、それで落着いたが、依然內々は氣にしてゐるので、葉山は竟に咬むで喩めるやうに、憖ひ歸つて會つたらば、徒足をさせたくらゐには換へられぬ氣の毒の想を爲ねばならぬ次第を說いて、漸く安堵を爲せたが、之に就けても、旋て所帶を疊む大事件の斷行が此人に出來やうか、と危いものに思つて、其始末方を試に訊ねたものである。

如何いふ方寸の內か、と葉山は固唾を嚥むでゐると、柳之助は平然としたもので、荷を積むだ車の後から、鑛物の標本とラムプを兩手に持つて、宰領して行くゝらゐに、いと易く考へてゐる。葉山は呆返つて洒落も出ぬ、恁云ふ場

合には如何する、此處置は何と着けると、先づ媒家への掛合、老婢の始末、差配への挨拶、荷物の世話も有らうし、道具屋も呼ばうし、第一に引越先の算段、然も爲なければ成らず、那も爲なければ成るまい、と一人の才覺で八天狗を働かねば成らぬ面倒を、一々並べ立てゝ責めて見たが、それでも自若として

「那麼事は勿論僕には出來ん。」

「御大名の引越ぢやあるまいし、殿様にも御家來にも一人限の癖に、惡く大束なことを言つて落着いてゐるよ。殿が御手を下して遊ばさなければ、誰が參つて仕るのさ。」

柳之助は莞爾とも爲ず、

「僕は無論始から那麼事は君に遣つてもらふ意で居るのだもの。」

「えゝ！」　と葉山は故と目を瞪つて、

「恐れながら御前へ申上げますが、只今君と仰せの有りましたのは、葉山誠哉の義でござりまするか。」

「何故さ？」

「何故とは酷い。いや此義ばかりは葉山誠太夫平に御免を蒙りませう。」

「何故、何故、何故！」　と柳之助は遽に狼狽へて、

「そりや可かんよ、可かんよ。」

「何方が可かんか知れるものか。」

「可かんとも、もう然う極つとるのだもの。」

「誰が極めたのだ！」　と澄した顏を柳之助は打目戍つて、

「そりや窮る、僕は窮る。」

一切其邊の相談は無かつたから、如何爲るのであらう、と葉山も實は思つてゐたのであるが、いづれ事の有る日には昇込むで來やうと、其肚では居たものゝ、（無論）であるの（極めてゐる）のと、何の話も無い先から役割が付いて、萬端委せられてゐるには、少しばかり肝を潰した。

然し大方這麼事であらうと思つた、と快く引承ける事は引承けたが、爰に甚だ迷惑至極の一條が有ると言つて、葉山は頻に首を傾けた。

それは外でもたい、媒家の思はく、是が極めて辛い。如何あつても由無い恨を受ける人にならねばならぬので。話の樣子では、母親は飽くまで所帶を疊むのは不得心で、柳之助が一生獨身も胡亂で、と云ふのが妹のお島を後へ直さう下心であるから。其を柳之助が嫌つて、所帶を崩して、行先はと云へば自分の家。此自分なる葉山が日頃兄分であることは、母親は能く知つてゐる。して見れば、是は柳之助の智慧ではあるまいと來る。何でも葉山の差金に違無いと來る。餘計な事を爲る憎い奴だと來る。然う來られるのが誠に嬉くない、と葉山は此の處を考へたのである。

因で、此事情を柳之助に話して、萬端の世話を爲ぬではないが、此を何とか一つ稜立たぬやうに、巧く片附けたいもの。君も從來散々世話になつた姑母の事、又此後とても末長く親類の往來を爲なければ義理が濟まぬから、事を手暴に遣過ぎて、此限喧嘩面になつて了ふのも甚だ好ましからぬ。又自分にしても、親類盃の席に列つて、不束な娘を何分とも願ひまする、と開き直つて賴まれた兄様であつて見れば、媒家の阿母さんに睨まれたからとて何の可恐いことは無いが、それでは如何も寢覺が好くない。彼方も立てば此方も立つて、九尺二間に戸が三枚ばかりも實は欲いくらゐの所であるから、此は例の變人で遣られては、本人は其で可からうけれど、哀を留めるのが萬端の引承人、是が皆打被らねばならぬから、君たるものゝ所作は、「大立者の役で難しいね。」と葉山の腕組は容易に釋けぬ。

成程然うでもあらうけれど、素より自分が組立てた所帶、其を自分が毀すのに、然まで他に

氣兼を爲ずとも可さゝうなものである、と柳之助は甚だ其意を得ぬのみならず、母親も亦故障などを言ふべき理ではない。然るに今度の件に就いて不服なのは、畢竟お島を妻に與れたいが爲、其を此方が否むだからとて、それで感情を害するのは手前勝手と謂はねばならぬ。手前勝手に對して會釋を爲る必要は無い、と柳之助は獨で業を沸すばかりで、一向件の始末に就いて智慧を絞らうとも爲なかつた。實は其智慧も葉山に委せた萬端の内の一つに勘定して、那麼思想は全く自分には無いからと高楊枝でゐる。そこは宜しく葉山が引承けて、工夫をしたが、さて思はしい智慧は出ぬもので。

此度も柳之助は泊つて、翌日學校の歸途に直と姻家を訪ねたのは、無論葉山の指圖で、其から二週間の後が百個日の法事、葉山誠哉も知己の格で其席に招かれたが、此が聊か兄分の技倆と、手薬煉を引いてゐた効に、姻家の兩親と懇談數刻に渉つて、左やら右やら例の件は落着した貌。此上は別して親しく末々まで不相變などゝ囁く中に、母親も頻に滿足らしく爲てゐたが、時々忘れたやうに可恐い目を爲る。苦い口角を爲る、氣が着いては溫容にしてゐるのを、絶えず見てゐたのは座中に葉山一人。

（三十年七月）

多情多恨（後編）

一

さて一緒になつて見ると、お種の想つたほど、柳之助は其事を苦に病むのでもないらしい。夫から聞いた所では、暇がな隙がな思窮めて、食べるものも食べずに泣いてゐるのかとも考へられたのである。猶夫は懇々も言つた、鷲見はまるで病人なのだから、其心得で取扱はなければならぬ。何でも看病を爲る意で、深切に、優しくと、聞いた時はお種も自失した。

抑も家内に人一個殖ゑるといふは、思の外面倒なもの。それが、奉公人でもなく、厄介でもなく、泊客でもなければ、萬更預りものでもない、同居と謂へば謂ふやうなものゝ、尋常の同居とは少し理が違ふ。第一主の親友であつて、此方から言出して世話を爲るのであつて見れば、勿論大事に爲なければならぬ、次には看病も爲なければならぬ、總て主同樣に扱はなければならぬ、究竟二人の夫に傅かなければならぬのである。夫一人、その一人に傅くさへが手一杯の大役である。一日の務はそれでもうもう澤山なに、四歳になる保といふ子もあれば七十に近い舅もある。或時は最一人お種の欲い場合も有るのに、同じ厄介ながらも偶には何か小手助になる人物でゞも有る事か、目に見えて手の掛る、相應に氣苦勞も爲ねばならぬ、所謂二人の夫を有つやうなものと思へば、有繋に悵然としたが、案ずるよりは産むが易しで、先づ柳之助が一日の生活は、朝の八時に學校へ出て、午後の四時に退けて來る。それから二階へ昇つて燈の點く頃迄机に向つてゐる。其内には夫も退けて來る、一所に夕飯となる。二階を鷲見に貸してから、夫は大方茶の間にゐる。夜になれば其處へ話に來ることもあり、又此方から二階に遊びに行くこともある。やがて寢る、それで仕舞なので。

別に何の事も無い。言出しては泣き、思出しては騒ぐでもなかつた。夜は寢られぬからとて、過日のやうに雛の鳴く迄側に坐らせられるでもなかつた。お一人で御寂しからうと茶を煎れて持つて行つて、合手を爲なければ濟まぬのでもなかつた。然し、柳之助は無口で、無愛相で、世話になりながら氣障さうな顔も爲ずで、構つてもらはなくても困らぬといつたやうな風で、始終不足らしい、折角世話をしても効の無い、居られて面白くない御客ではあるが、其處が正是手の掛らぬ所で、お種は少しも可厭な顔も爲ずに、彼此と陰ながら心着ける。

葉山は又、自分が押張つて同居させたのであるから、如何でも愛で柳之助に氣が引立つてくれなければ、面目の惡いやうな所もあるので、昨日は然う、今日は如何と、日々の樣子に注意して、殆ど其一嚬一笑にも心を動すばかりであつたが、幾分の歡喜は、學校へ出るにも、話をするにも、乃至は机に向ふにも、大分元氣が出たやう。——假其までゞなくとも、漸く諦は付いた鹽梅。

「もう一息だ。」と葉山は賴しく思つた。

成程一時から見れば、元氣も出たやうではあるが、未だ〳〵顔の色は雨晒にされたやうに、光澤も脂も脱けて、頰の邊は凄いほど羸れて、何を見るにも精の無い眼色で、其さへ直に伏目になる。身體の衰勞した爲か不相變思徹めてゐる所爲か、何と無く起居が老けてゐる。

お種の注意で怠らず滋養物を薦めてゐるが、引移つてから未だ漸く二週間許と云ふので、然したる驗も見えぬ。それをお種は、頻に遣立つて、如何か最少し發揮しさうなものであるが、と折に觸れては言出すと、一日葉山は擽つたいやうに笑ひながら、

「尋常の病氣學句ぢやなし、牛乳やソツプのやうな物で責立てたつて、然う着々肥立つて耐るものか。那云ふ病氣には又別に結構な適藥が有るのさ。」

「何でございます。」とお種が眞に承ければ、

「お前たちの嫌ひな藥よ。」と徐々擽つたさうに笑ふ。

「私が飲むのぢやございませんから私が嫌ひだつて關はないぢやございませんか。甚麼藥なのです。」

葉山は天を仰いで徐に頤を撫でた。

「甚麼藥と云つて、一寸申難いのさ。」

結局は何らぬが、大方野暮事であらう、とお種も稍感付いて、

「貴方又鷲見樣の樣な方に惡い事をお譏へなすつては可けませんよ――本當でございますよ。」

葉山は突と横を向いて、鼻の心で笑つてゐる。

「一時は大層お誘りでございました。」

「然やう、然やう、彼此一時過でしたかな。」

言へば冷かされるか、籠弄されるに極つてゐるので、お種は其なり默つて了つて、暫く無言でゐる内に、葉山は直に我を折つて又話出す。

「實に不思議な事も有るものぢやないか、昨夜俺は吃驚した。」

お種は應答もせずに精々と縫仕事をしてゐる。

「えゝ、おい、吃驚したと言ふのに。」

「然でございますか。」

「もう止さう、張合の無い。」と葉山は座を起たうとすれば、

「はい、伺ひますよ。」

「心身に聽くなら話すけれど、……昨夜まあ社の員と行つたと思ひな。」

「行らしつたのですか。」とお種は顏を擧げる。

「まあ行つたのよ。」

「それ御覽なさいまし。」

「餘計な事を言はずに話の要領を聽きなよ。行つたのだ、すると隣れたのが、四五日前に披露をしたと云ふ藝者だ、可いかね、それが料らず俺の乳母の娘で、『やゝ貴方は』と云ふ事實で、何でも無かつたけれど、吃驚したね。其藝者が十八九だ、十八九は少しも驚かなかつたが、お類さんに生寫し！」とお種も有繋に針の手を停める。

「へゝえ。」

「それ、聞いてさへ吃驚するだらう。まして正の物を見たのだから、驚いたらうぢやないか。」

「本當でございますか。」

「背恰好から體度、髮は全然で違ふがね、それは目鼻立から額際、頬の工合、いやもう肖たとは愚だ。

そこで俺は反復思つたね、嗚呼之を鷲見に見せたら、甚麼に喜ぶだらう。――鷲見は乾度泣出すよ。で、調子が又馬鹿にお類さんに似てゐるのだから耐らない、何處か恁う女學生臭みた、それは餘程似てゐる。那は是非鷲見に見せたい、見せなくちや謬だ。那は全く鷲見の爲に出來てゐる藝者だよ。」

業々しいにも程が有ると言ひたさうに、お種は獨り面白さうな夫の顏を視るばかり。

「何と不思議ぢやないか。」

「然ですねえ。」と不承々々。

「然ですねえ處かい、這麼結構な藥が亦と有るものか、ソツプや雞子で那の鬱の虫が治りつこ無し、所謂氣保養と云ふ奴でなけりや。疾から其は考へてゐたのだけれど、何しろ精進中の鹽だ、そいつを曳張出して茶屋小屋遣入は、第

一佛の前へ對しても濟まずさ、俺も亦餘り無分別のやうで、そこらが何と無く工合が惡かつたから、實は今日迄控へてゐたのだ。

　それで、日増に鷲見の様子が好ければ、酷く譽めた話でもないのだから、那樣事はお舍諸に爲やうと思つたのだけれど、何しろ那してお前が切と盡力してくれるけれど、牛乳やソツプぢや迚も可けませんよ。其處へ持つて來て、今の瓜二つと云ふ藝者を見たものだから、もう耐らなくなつて了つた。如何だい、右の薬を少々ばかり用ゐるのは。」

　法界悋氣でも無しに、細君は徹頭徹尾の不贊成。

「まあ那樣事はお舍諸なさいましよ。」

　極めて冷々に言つて退ける。

「何故?」

「何故でもお舍諸なさいましよ。」

「家暮は困る! 解らな過るぢやないか。」

　お種は色を正して、

「私も家暮ですし、鷲見さんも家暮です。」

「成程。」と夫は餘所々々しく言ふ。

「ですから那樣意氣な藥は症に適ひはしません。」

「適つたら如何する?」と葉山は意氣込めば、

「それですから、適つたら猶大變ぢやございませんか。貴方は、もう……。」と後は言はぬほどお種は眞に〳〵呆れたのである。夫は夫で又別に呆れて、

「困つたものだ、辨らない人だ。如何すればお前のやうに家暮で塊るのだ。一寸洒落に藝者を揚げると言へば、もう直に其場で帯か何かの無心を言はれて、翌日は芝居へ連れさせられて、三日目には起請の取替でもして……。」

「もう可うございます、解りましたよ。」と匆々と針箱を仕舞つて、取散したものを片附ける。

「おや〳〵縁日商人が夕立を吃つたやうに、無闇に片附けるよ、如何したのだ。」

「もうお夕飯の支度を爲なければなりません。あれ、あれ、其を踏むで居らしつちや困るぢやありませんか。」

　見れば膝の下に裁片の端を敷いてゐたので、葉山は其を取つて投付けながら、

「飯だ〳〵と、嚇しなさんな、腹なんぞは空いてゐるものか。」

「それでもう支度を爲なければ。」

「私と鷲見のは御無用になさいよ。」

「喫く上るのですか。」

「いゝや、是から。」

「では直に上りますか。」

「直に行くのよ。」

「何方へ。」

「へん、家暮め!」

二

　湯島切通を驀地に下りて一直線に走らせる二臺の人力車は、三町許も行くと、唯有る横町の角に停つた。

　上野の彼岸櫻も昨日今日咲初めたとはいひながら、未だ薄寒い夜風が砂を捲いて來る。此風さへ無かつたらばと想れるのは、さすがに春めかしい月の色、朧に霞む向側を、古風に辻占や花輪糖が呼むで行けば、此方側では何處とも知らず媚かしい三味線の音が幾所に聞える。

　車を下りた二人は、霜降の二重外套を着て、挽付の低いのを蹈いたのゝ後から、洋服の一人は蹤蹱と案内されて行くやうな樣子、――葉山は到頭柳之助を連出したのである。

　旋て其横町を曲ると、忽ち一廓の別天地、狹い兩側に軒ラムプやら御神燈やらが星の如く輝いて、意氣な音〆は行くほど繁く、通過る格子の内から突然に太鼓を撃つて、黄色い聲を出されたので、柳之助は不意を吃つて、(あゝつ)

と言つたが、其儘を滾して、
「おい、おい、何處へ行のくだよ。」
「まあ何でも可いから跟いて來給へ。」
「僕は西洋料理が可いな。」
「西洋料理でも何でも御好次第。」
柳之助は不安心な顏をして、前後を胸しながら葉山に追付いて、
「非常な繁昌な家だね。」
うんともすんとも言はず、葉山は匆々と歩くばかり。
「えゝ、葉山、僕が出る時細君がね、今晩は早くお歸んなさいと言つたよ。而して何だか心配さうな顏をしとつたが、如何云ふのだらう。」
「まあ、如何云ふものかね。」 と葉山の目は据つてゐる。
「だから、早く喰るが可からう、飯を食つたら直に歸らう。」
「勿論さ。」 と言ふより早く、葉山は磨硝子の燈籠を懸けた門へ衝と入つた。案内が入るから柳之助も跟いて入つたので、何屋であるのやら一向知らぬのである。
門の内は奇麗に、御影石で疊むだ露地の正面に洪然として式臺造で、障子が一枚開いて、燦然と金の衝立が電燈に反射してゐる、其陰を往來忙しさうに通る人影も見える。
玄關にかゝると直に婢が顯れて、葉山の顏を見るより恭々しく可懷さうに、
「おや！ 入らつしやいまし。」
何と無く間の悪い顏で、柳之助は葉山の後に立ちながら、見るとも無く目を遣ると、左手の小陰が立派な供待になつて、自用車らしいのが五六臺並むで、車夫は徒然と火鉢に集つて酒を飲むでゐる。
何といふ家か知らぬが繁昌する店、と柳之助は思つた。奥まつた一間へ、案内される途次、思寄らぬ所に階子があつたり、無理な所に座敷があつたりして、頻に藝者の往復ふのを見掛けたが、大分二階の賑かな様子。
二人の通されたのは、茶掛つた小意氣な六疊で、折廻した縁の外は中庭になつて、その筋向の間では客と藝者の藤八を打つ影法師が映るのを、柳之助は突立つて見てゐたが、
「馬鹿な眞似をしとるな。」 と障子を閉てゝどつかり坐ると、此廣間を電燈の光は隈なく眩く照して、未だ火鉢も出ねば、婢も來ず、唯聞くばかりあつて閑寂した中に、葉山が床柱に凭れて、象牙の煙管筒の蓋を退屈さうに拔差する音がスポン〳〵と鳴る、柳之助は又更紗結の褥の上に我張つて貧乏動をしながら、黒部杉の天井を不思議さうに眺めてゐたが、矢庭に、
「腹が空いた。」
「これから飲まうといふ前に立つて、どうも賤もしいね。」
「けれども腹が空いとるのだから爲方が無い。實際此は西洋料理も出來るのか。」
「何でも。」
「ふむ、然うか、成程。」
「何だい、酷く感心するぢやないか。」
「どうも僕は恁云ふ座敷に電氣燈は可笑いと思つたが、其所爲だな。」
葉山は怪訝な目をして、
「どの所爲だい。」
「和洋を兼ねるからだらう。」 と大いに發明したやうに言ふ。
「何だ、愚にも付かない。」
所へ婢は火鉢を持つて來て、直に引返して茶と菓子を運ぶ。
「あゝ腹が減つた。」 と又しても柳之助の呻くのを聞いて、婢は[illegible]いてゐたが、
「あら、洪水は岐阜と極つたのですが、飢饉に、貴方、何方？」 とばかりに柳之助は荒膽を拉が

れた、處さぬ葉山は、
「今朝の火事は淺草だよ。」
「あら、然う、淺草には私の情郎が居るのよう。」
　と惡身をしながら甘忘れて言ふのを、柳之助は啞然と打目戍つてゐたが、やがて眉を皺めて横を向いた。
「いや、然うだつけかね、はてな、もう臺灣にはゐないのかい。」
　係り葉山の眞面目さに婢も不覺と釣込れて、
「おや、何故、貴方。」
「軍夫の話だらう。」
「おふざけなさいよう！　貴方の洒落は例でも罪が深いから可厭さ。」
「もつと罪の深い事があるのだが、知つてゐるかい。」
「大知り！」　と圖に乘る途端、耐りかねたか柳之助は、
「早く何か食はうぢやないか。」
　正に是晴天の霹靂、婢は打魂消て、如何に此人が家幕であるか、後學の爲に見て置きたいといふ體で、彼の面を眺めながら、
「貴方は餘程賤しいよ。此は待合ぢやありませんか、物を食べるなんて、那樣賤しい事を爲る所ぢやないの。」
　是も亦柳之助には霹靂一聲で、
「や、此は待合茶屋か。」
「はい、待合茶屋でございます。」
　柳之助は慌て氣味で、
「葉山、此は待合茶屋なのかい、おい。」
「何爲、和洋御料理屋だよ。今直に命じるから辛抱したまへ。それぢやお若さん、何ぞ旨さうなものを、大急ぎでね。」
「何に致しませう。」
「西洋料理だ！」　と柳之助は獨で主張する。
「御前があゝ有仰るものだから、それぢや西洋料理と爲やう。」
「貴方も？」
「俺は謝る。」
「では、此方は西洋料理、よろしい。そこで貴方の御肴は？」
　と御肴の二字に惡く力を入れて、頗る諷する所あるが如し。葉山はぐつと呑込みの、
「それには今日は些と註文が有るのさ。」
「でせう？」　と全然心得てゐるのは、更に葉山には心得られなかつた。愍して又彼此と手間取るのを、柳之助は可悶がつて、
「早くしてくれ、もう耐らん。」
　急立られて時も關らず、好い話は後にして、
「よろしい、汽車の網曳！」　と忙々出て行つたが、直に入つて來て、（でせう？）の話を續ける。
「本當に貴方は罪が深いよ。ですが彼妓も流石だと思ひましたね。貴方とは感心！　全く目が高い。一昨日も來て、（先方様は御存無しの片思だからつまらないわ、姉さん。）か何か言つてるから、及ばずながら私も不便になつて、よろしい、今度入らしつたら私が是非一本貫つていたゞいてあげるからなんぞは、今考へて見ると、お若さん馬鹿だつたね。片思とは世を忍ぶ假の名で、實は貴方の方にもトンと胸に應があるのは、こりや凄い！」
　何を履違へたのか、獨合點をしてお若の辯じつけるのを、葉山は一向不案内さらに聽いてゐたが、
「おや、それは又部類が違ふやうだ。誰だい。」
「誰だいもないぢやないかね、かね、かね。」
　とお若は囁く。
「私の今晩の註文といふのは、少々事情ありで、此間の、それ、姫松といふのね……」
　言ひも訖らぬにお若の猿臂は早くも延びて、葉山の鼻頭でぴしやりと一つ拍子を打つた。

「お邪魔しますよ。」

「はて、心得ぬ。」と思入がある。

「怪しやなあでせう。何ですよう、不知不識しい、其ぢやありませんか。」

「ぢやお前の話は姫松かい。」

「はあ。」

「そいつは大失敗た。」と葉山は頭を傾める。

「ぢや貴方の御心當は未だ別にあるんですか。」

「何さ、其は嘘だけれど、……困つたねえ。」

葉山は少しく困つたのである。お若の說に據れば、今呼ばうとする藝者は、嘘にも自分の事を彼此言つてゐると云ふ。それこそ唯呼ぶのなら困るどころではない、至極妙であらうが、生憎妙でないのは、何のやうにわい〳〵で押掛けて來た今夜ではない。不思議にも[illegible]見の[illegible]さんに生憎の[illegible]が、柳之助に見せたいばかり見せての上の分別も[illegible]分無きにしもあらざる矢先へ、富本の門弟は[illegible]有逆意とも、不都合とも、お若は那樣事とは知らぬから、彼者には極く懇意で、物種になるから呼むで遣つて〳〵などと頻に慫慂する。考へた所で葉山も今更窮方がお無い。

「何處に詐があつたら代は[illegible]まいね。」

「貴方でもない、お目が第一曇らぬ鏡でせう。」

「ぢや掛けて見やう。」

「飛んで來ますよ。」とお若も嬉々起つ。

「羽の生えた猫ぢやいよ〳〵看板に詐がありさうだ。」

「なんぞと言つて置いて、後で面倒が勃起つたつて私は知りませんよ。」と出て行く。

柳之助は漸々夢の覺めたやうな顏をして、

「何の話を爲とるのだか、更に解らんぢやないか。而して誰が來るのか。えゝ、何が來るのだ。」

「誰も來やしないよ。」

「羽の生えた猫と云ふのは何だい。唯猫なら藝者だらう。けれども羽の生えたと云ふのは?」

「うむ、あれは酒落を言つたのさ。」

「何の酒落だい。」

益々責められて、葉山も少し塞つたが、

「今に持つて來るから見給へ。」と揶揄ひながらも逃げて見れば、柳之助はそれで得心して、

「うむ、料理だね。何か變つた料理か何かだらう。」

「愛嬌があるねえ。」と葉山は下腹の[illegible]いのを怺へながら。

旋て酒は出たが、食ふものとては、ちよつぴりと淺海苔に烈鰯、氣取つた香の物ぐらゐ、柳之助は到底空腹を癒しかねて悶々してゐると、襖の外で異なる聲が、

「姉さん、此方?」

「はあ、直と。」

とお若の案内に應じて顯れたのが藝者である。鬘ほど豐な髮を潰島田にして、白粉が濃いのかと見えるほど色白の、豐頰の、眉の好い、目許の涼しい、左に泣黒子のある、仇氣の無い、芝居の娘形を模したやうな風なのが、閾際で挨拶をして額を擧げると、はつとした驚愕で、お若の傍へ寄るやうに坐つて、

「貴方、此間は如何も、[illegible]いのね、姉さん。」と菫色の絹ハンケチを顏へ加てれば、お若は横目で、

「御馳走!」

「あら、姉さん、未だ〳〵苛めなくつても可いぢやありませんか。」

「苛められても可いぢやありませんか。」と小松は一寸と背後を向けて、

「知らない!」

「貴方、お[illegible]、」と葉山に盃子を出す。

[illegible]のお若は障子を開けるばかりに、

「えへ、えへ、えへ。」

[illegible]いたのは[illegible]、待ちに待つた西洋料

理は來ずに、[illegible]えてゐるとか謂ふ種が顯れたので。事有りげに葉山は自分を誘出して、晩餐でもといふから其氣でゐたれば、料理屋へは來ずに待合茶屋へ來た。何の爲に待合茶屋へ來たのであらう、而して何の爲に藝者などを揚げたのであらう。其も此も可いが、何の爲に初から斯々だと明さなかつたのであらう。彼は元來洒落の好きな男であるから、是も例の手で、自分を驚かす爲に故と秘してゐたのであらうか。其にしても此場の様子は、五里霧中を徘徊するやうで、一向合點が行かぬ。

成程好むで這麽所へ遊びに來るほど有つて、葉山は誠に面白さうに見える。けれども自分は更に面白くない、のみか、不愉快である、寧ろ苦痛を感ずる。お若とかいふ彼赭面の婢、彼は何者である、客を客とも思はず、無禮極ることを言つたり、厭ふべき擧動をしたり、殆ど我々を侮蔑してゐるのである。實に見るも汚はしい。

それから次には藝者！ 那も大會などの場合には、興も佐ける、席上の周旋もする、必要の道具で、賑かな、好いものであると思はれる。然し、斯云ふ人の少い場合には、何の必要が有るのか。凡そ女子は彼等の年齡では、人の前を憚れて、欠をさへ得爲はぬ、手を一つ動すにも愼しくしてをる、其が處女の美德とも謂ふのであるに、彼は男の如く大膽に物を言つたり、擦れた老者のやうに差出た振舞を爲る。實に其憎さは、面に唾しても遣りたい。

而して彼等は仲間同士で勝手に喋つたり、笑つたり、戯れたり、怪しからぬ我儘を働くばかりで、全く其中に客といふものを置かぬではないか。我々は何の爲に這麽所へ來たのか、而して何の爲に藝者を揚げたのか。這麽中で物を食つたとて決して旨からう道理が無い。恁して居る中にも絕えず一種の苦痛を感ずる。

自分の家で自分の膳で、その方が幾何氣樂か知れぬ。彼等は我々の一擧一動一言一句に卑むべき注意をして、少しでも見出す所が有れば、忽ち捉へて笑草に爲うと、那樣事ばかりを始終念懸けてゐるのであらう。

從來は厭ふべき人としてお種さんを遠けてゐた。今度一家の人となつて見れば、能く世話をしてくれる。それでも未だ何と無く隔てられて、十分には打解けられぬ、何處までも他人のやうな氣がして。彼赭面、彼藝者、思へば彼等こそ他人の、厭ふべき奴なので、家に居てお種さんと話をする時、或は給仕をしてくれる時、決して此に介居るやうな苦痛は感ぜぬ。

西洋料理が來たら、早く食つて、安樂な我家へ還らう、と柳之助は熟と考込むで、葉山の洒落も、[illegible]松の妙な文句も、お若のお喋舌も耳には入らず、兀々と苦い顏をしてゐた。すると[illegible]松は思出したやうに、

―貴方や、大層お眞面目ぢやございませんか。

お一盃付上れよ。―

と柳之助の前に膝行れば、其顏を尻目に挂けて、

―俺は要らん。」

「あら、餘り御挨拶ぢやありませんか。」

其處へ葉山は身替の盃を出して、

―此人はお肚が空いてゐるので機嫌が惡いのだ。お若さん、御誂は如何したよ。」

―那樣にお邪魔になさらなくっても參りますよ。」

と空の銚子を攫つて起つて行く。

―鷲見、ちっとも飲まないぢやないか。今日は君への御馳走なのだよ。これほど御馳走してゐるのに、一言も挨拶をしてくれないのは酷いぢやないか。何とか言つてくれ給へ、此御馳走に就いてさ。―

心付けな葉山の語も柳之助には十分に判

じかねて、

「どの御馳走？　未だ何も有りはせんぢやないか。」

それを理窟ぽく、眞になつて言ふのが、姫松には餘程可笑くて、

「貴方や、御覧なさいな、這麼にお酒だの、種種お肴だの、電氣燈だの、藝者だの、有るぢやありませんか。」

「御馳走さ。」と葉山は卒と頤で藝者を指したが姫松は煙草を喫付けてゐたので知らずにゐる。藝者が御馳走は柳之助にも解つたが、之に就いて何とか言へとは、何と言ふのであらうと、藝者の方と葉山とを見合せて、遽に口を開きかねてゐる。

「よく見たまへ、肖てゐるだらう。」

柳之助は正直に凝と姫松の顔を瞶めるので、

「あら、貴方可厭よ。」とハンカチイフで黒子の邊を隱しながら、首を縮めて斜に葉山の方を見込むで、

「貴方、這麼人の善い方に那樣惡智慧を付けるものぢやありませんよ。貴方こそ肖てゐる癖に。」と憎しさうにしてゐる。

「乃公の・・・にてゐるのは土鍋のお蓋さ、長々の疾患でね。」

「あら、然うすりや。」と姫松は忽ち居直つて、

「私は水を汲むだり、お香々を切つたり・・・・。」

「指を切つたり、血を出したり、乃公が舐めて遣つたり、結いて遣つたり。」

「嘘ばつかり。」と異に絡みかける。葉山は面白半分、

「物は試しぢやないか、切りもしないで何が解るものか。」

「私は隨分切るわ！　星さん。」

彼は此家での變名を星と云ふ。それは一座の同伴は皆各自に持物が有るのに、葉山ばかりは未だに月と見たのがないと云ふので、お若が此名を付けたのである。

「切つてもらはう、切れるなら切つてもらはう。」

「然し薄く切つておくれよ、私は齒が惡いから。」

出し拔れた姫松は悔しさうに默つて了つて、在合ふ盃の冷えたのを把つて自暴に呷と飲む。

「餘り見事！　是はお重ねだ。然し體に障ると誰かゞ共蔭儀だよ。」

と注いで遣る。

姫松は昂然として、

「御心配には及びません、土鍋でお蓋を煮てくれますとさ。」

「畜生め！　お香々なら乃公が切らうよ。」

「どうぞ成るたけ薄く。」

「いや、今度は此方が自暴に飲む番か。」と自分の前には盃が無いので、隣のを拾はうとすると、

「誰に肖とるのだ、僕には解らんよ。」と今まで聞てゐたやうに、柳之助はやう〱言出す。

折から隣に拳を打つてゐた座敷で、調子を低く、

ツヽン　ツン〱　チツチリン　チリレン　ツンテン　ツトチン〱〱去りし女房のツヽンツン形見とてツトチン〱〱行燈に殘せし針のあと、わが子を膝に、引寄せて、男なみだの、もらひ乳。

柳之助は熟と聽いてゐた樣子であつたが、別に何とも言はなかつた。言ひたいことの有る葉山も先控へて默つてゐると、姫松が纔に、

「好いのね。」と呟く傍から、又もや（更行く鐘）を唄出す。

聞捨にならぬ美音が手に取るやうなので、有繋に此方でも水を打つたやうにしてゐたが、旋てそれもチリレン　ツンテン　ツトチン〱〱と納るのを切掛に、葉山はしみ〲藝者の横顔を眺めてゐた目を突如と外して、

「肖てゐるのが解らない？　是が？　是が解ら

ないかい。」

「解らん。」と柳之助は又一目視て首を掉る。

「是がだよ、是が解らない事があるものか。ええ情無い目だ。能く見給へ、ようく！」

「可厭よ、もう、星様、どうせ土鍋でお粥ですからさ。」と姫松は小氣味を惡がつて、外方を向いて了ふ。

柳之助は益希有な目をしてゐるのを、葉山は少しく焦燥氣味で、

「もう解つたらう。如何だい、肖てゐるだらう。」

「もう星様、私は澤山よう。」と姫松は衝と起つて、座敷の外へ遁出した。

「未だ解らないかい、是は怪しからん！ 君は醉つてゐるからだ、……。」

「醉つとるより腹が減つとる。」

「うむ、然うだ。それぢやまあ腹を拵へてから、能く見給へ。」

早速手を鳴せば、漸く今來たと云ふので、姫松とお若が料理を運び込む。柳之助は得たり賢しと、五皿と云ふものを前に並べて、夢の如くスウプを吸つて了ふと、息も吐かずに肉叉と食刀を十文字に構へたが、梭を投るやうに左右の一上一下するのを、感心して視てゐた姫松は、

「巧いのねえ、あの手つきが。貴方餘程黒人よ、而して第一召上るのゝ速いこと。」

「そこへ惚れたか。」と葉山は又言懸る。

「いくら惚れてもねえ、私のやうなものゝ合手にはなつて下さいませんとさ。」

と聞いて柳之助は俯と顔を擧げたが、藝者は葉山の方を瞶めてゐるので、又俯と食事に掛る。

「又お前ほどのものが片思を爲るなんて、那様腕の無い話があるものか。それは丁度金の有る奴が泣言を云ふのと同じ心意氣なのだ、誰が本當にするものかね。」

實際姫松はお若の言つた通り此星さんには酷く岡惚れてゐるのであるから、葉山が何處までも茶にしてゐるのが、悔しいやら、愁いやら、噛付きたいほど憤れたくて、

「好い加減にして下さいよ。何も那様に異う有仰らなくつたつて、御迷惑なら御迷惑だと有仰いな。」

葉山は然も氣の毒さうに、

「言つても可いかい。」

有繋に意外の挨拶に姫松も今は勘忍袋の緒が切れたやうな聲をして、

「はあ、有仰いとも！」

「言ふよ。」

「有仰いな!! 憤れつたい。」

「迷惑……。」

姫松は瞥然と見る。

「どころかい。」

「何ですつて？」

がちやんと物の破れたやうな音がしたので、二人とも吃驚して見向けば、柳之助が肉叉と食刀を皿の上に投出したのである。而して窄袴を緩めながら、

「あゝ、食つた、食つた！」

「さあ腹が出來たら見たまへ。」と葉山は忽ち女の方を餘所にすると、姫松は茫然して、又今に構つてくれるのを心待にしてゐたが、急には那様氣色も無いので、不滿さうに襦袢の襟を弄つてゐた。

腹の出來た目で見ても、誰に肖てゐるのやら柳之助には解りかねた。葉山は怺へかねて、（類さんに生寫）と打明した所で、成程と横手を拍れる豫想が、なか〱蠢然とも爲ぬのみか、

「類さんに!?」と呆れられて、

「然う！」とばかりに二の句は續かぬまでに失望したのを、何處を如何見て、何を言つてゐるのやらと、此人にも似合はぬ馬鹿々々しさ

を、柳之助は聲高に笑つたのである。葉山は又、是程惚てゐるものを、本人にあらざるよりは之より惚やうがあるものではない。彼の目は如何かしてゐる。其も知らずに他を笑ふなどとは以ての外と、小癪に障らぬでもなかつたが、左も右も面々が見る目の事、惚ぬと見たものを是非惚てゐるに爲る事もならず、

「何故是が惚てゐないだらう。」　と持餘して掘出したやうに言へば、

「何故でも惚て居らんものは惚て居らんぢやないか。」

然でもなく柳之助は惚てゐぬと見たのであるが、葉山は見れば見るほど惚てゐるので、如何しても彼の言が信じられなくて、

「本當に惚てゐないかい。如何しても然うは見えないかい。」

と冗くも訊ねた。柳之助は頑として――葉山は實に彼の自分に向つて此時ほど頑とした事を見なかつたのである。

「何處が惚とるのだ？　君は如何かしとるよ。」

葉山は決して自分の目が如何かしてゐるとは信ぜぬ。其通りに柳之助とても自分が然うとは信ぜぬ。

「これは證據裁判となつた。」　と葉山が呟くと、彼は猶頑として、

「僕より確な證據は無いぢやないか。」

間に介つて狼狽されたのが姫松。抑も誰に惚たのやら、惚ないのやら、始は何だか洒落のやうであつたのが、後には段々むづかしくなつて、岡惚の星さんは機嫌を損じたやうな顏色。食べる物さへ食べて了へば可恐い事は無いと云はないばかりに、彼木訥漢の急に氣の強くなつた面の憎さ。左も右も捨てゝ置いたら惡からうと、

「酷いわ、貴方がたは。他の顏を捉へて議論したりなんぞして。」

因で葉山は氣を變へて、

「ちつと心意氣でも聞かうか。」

「是非伺ひませう。」　と姫松は急遽して壁際に寄せてある三絃を取りに起つたのは、是からたつぷりと思の丈を絲に言はせる覺悟、乃至少しは自慢の喉も聽いてもらつて、滿更一山百文の不見手でもない處を見せたい下心。

衣兜の時計を出して見ると柳之助は起上つて、

「行かう、もう十時だ。」

「あゝ行かう。」　といふ聲を聞くと、姫松は三絃を擲けて慌忙しく取つて返したが、ずつと落着拂つて、

「歸すもんですか。」

「でも此人が歸ると云ふから。」

「私は此方は留めはしないわ。」

「さあ、葉山。」　と柳之助は自分の席から二三尺ばかりを忙しく往きつ復りつしてゐたが、左右女が彼此言つては自分を袖にして葉山を留めたがる、葉山も强ひては歸りたがらぬ樣子を見て、往きつ復りつの區域を次第に擴けて、遂に襖の外へ出て了ふ。

三の一

例より早く退けて柳之助は還つて來たが、彼は出入ともに何と下へ言葉を掛けるでもなく、下宿屋の階子を昇降するやうに、すうと出て行つて、すうと入つて來て、直に二階の居間へ引籠るのである。お類の居た頃は、出るにも歸るにも、其姿を見て何とか言はねば氣が濟まぬやうに、捜出しても一々辨るのであつたが、此に來てからは、彿と那樣事は無くなつて、無挨拶に極るのを、（現金な男だ）と葉山は言つてゐる。お種も慣れて了つて今は格別怪みもせぬ。

柳之助は机の上へ帽子とポオトフオリオを投出して、上衣を脱がうとする所へ、婢が昇つて來て、

「あの奥樣が、お茶がはいりましたから入らつしやいまし。」

呼れゝば猶豫をするでもなく、直に婢の跡から降りて茶の間へ行けば、お種は築山の爲るやうに茶器を並べて、姿勢までが似てゐるやう、傍には保が大人しく遊むでゐたが、柳之助が入つて來ると、睫毛の長い、黑睛勝の、圓い目を擧げて、餘り可愛がつてくれぬ小父さんをば、何爲に來たらうと云ふ樣子で眤と打目戍つた。其の狀は彼が馴染の理髮床にある西洋畫の（犬の鼻頭へ葡萄を出してゐる子供）の額に善くも似てゐたので「坊や。」と言ひながら其傍に坐ると、忽ち俯いて、後が可恐さうに母親の方を見向いて了ふ。

「今日は薩摩煎が出來ますから。」　とお種は錫の直截の茶壺を取擧げる。

「あゝ、然うですか。」　と柳之助は例の通り話が無い。

「昨晩は御愉快でしたさうで。」

柳之助は少しく赤面した。出掛に細君は、早く歸るやうに、と心配さうに言つたのを記憶してゐる。それに歸つたのが十一時。彼は早く歸るやうにお類に言はれて、曾て早く歸らなかつた例は無い。十時と云つたのを十一時にでも歸れば、翌日お類は怏々としてゐる。お種も心地は同じであらうと思へば、何氣無く茶に呼れるさへ、餘り肩身は廣く覺えぬのである。

「何爲　愉快ぢやなかつたです、那麼事は。」

「何と云ふ藝者が參つたのです。」

「何と云ふのですか。」

「三味線でも彈いて騷きましたか。」

「三味線などは全然彈かずに、唯喋つとるばかり。あれぢや何の爲に呼むだのか更に解らんですな。御馳走を爲ると云ふから、甚麼御馳走かと思つたら、那麼ものは御馳走ぢやないです。而して頻に肖とる、肖とると云ふのですが、なあに何處も肖とりやせんので。」

「然うださうでございますね。拙夫では大相善く肖てゐる、其を貴方は全然肖てゐないと有仰るが、決して那樣事は無いから、是非私に見せたいなどゝ言つて居りました。」

「肖とるものですか。あれは全く妄で、唯那麼事を言つて僕に嫐つたに違無い。」

「いゝえ、那樣事はありませんよ。」

「然し肖て居つたら……。」　と柳之助は不圖考へて、

「妙でせうな。」

其時には柳之助は如何するであらうか、とお種も差當つて妙に考へた。

「肖て居つた所で藝者ぢや……。」　と柳之助は苦笑をする。

「然うですとも。」　とお種は屹と頷いたが、そのまゝ話は途切れて、二人ともぼつ／＼と薩摩煎に手が出る。誰に話を爲るにも、相對では柳之助は其人と面を合せることを得爲ぬので、別けて馴染の薄いだけ目を逸せてゐる。折々見向けば眩さうにして、可成庭の方を見い／＼、やがて億劫さうに言出した。

「然し藝者でも可いですから、適には氣の紛れるものがあると大に好いと思ふ時もあるですな。酒が所好だと酒でもがぶ／＼飲むですけれど、然うは飲めず。僕は別に娯樂と云ふ事が無いですから、其が實に困るです、毎日々々唯不愉快で。」

長吁を吐いて、見るとも無く、保の顏を眤と視てゐれば、いつか又彼方を向いて、母親の膝を枕にしたのを、彼は猶一瞬もせずに瞳を据ゑてゐる。

「それは然うでせうとも。宅へお出なすつた時分より、此頃では却つてお痩せなすつたやうですよ。」

「然うですかなあ。」　と柳之助は蒼黑い頰の

邊を撫でゝ見る。

「少しは御保養もなさいまし。ちっとも元氣が無くてゐらつしやる、殿方はそれでは可けません。斯うして折角お伴れ申したのですから、甚麼事をしても御氣分を復してあげなければならないと、拙夫も始終然う申して居ります。」

お種の聲は優しげながら命令する力を有つやうに、柳之助は何と無く其が胸に浸みたのである。

「はあ、自分も元氣の無いのは知つとるです、不愉快であるのは可厭なのです。……如何したら此心地が一洗したやうに皆忘れて了へるでせうなあ。生替つて來たいですよ！」

援を乞ふが如く彼はお種の面を鋭く眺めた、その苦悶は非ぬ方を見てゐられるほど弱いものではなかつたので。

「親は無し、同胞は無し、係累も責任も何も無い體だから、實は死んでも可いのです。」

お種は慌忙しく、

「那樣事を有仰るものぢやございませんよ。何ぼ與際の事だから可いと申しても、それでは貴方は依樣女子の爲に身を果すのではございませんか。それでも貴方の……。」 と保を膝に搔載せて、

「あれ、大相生意氣な事を申しました、つい喋過ぎまして。」

「いや、然うでないです、決して那樣事は無いですよ。何卒言つて下さい、十分に言つて下さい。言つてくれる者が無いから、僕は何時までも同じ事を考へて、獨で苦むで居るのです。遠慮無く言つて下さい、僕は喜むで聽きます。ねえ、言つて下さい。甚麼に言つても可いです、無論僕が餘り則過ぎて居るのです、自分も其は知つとるですから、喜むで聽きます。」

誠は溢るゝばかり面に露れて、お種は寧ろ可恐しく覺えた。

三の二

兼てお種は柳之助の餘り女々しいのを善くは思はぬのである。抑も男の涙を流すのは、決して其妻を失つた時などではない、それが又戀しいや、可懷いで、窶れるまでに心を惱ませて可いものであらうかと考へてゐたから、柳之助の所作は馬鹿々々しいと思ふほど氣に合はぬので。男といふものは、もっと佗然としてもらひたかつた。然も無くては、女といふものが、氣の弱い、物に動じ易い、迷の深い、事に臨めば怯れ勝のもので、左右に獨立の難しいのを、傍から支へて、手を牽いて、倒れぬやうには誰が扶けるのである？ 其は皆男の任、その男が柳之助のやうに弱くて如何するのであらう。男としての價値は少しも無いではないかと、彼は此點に就いて專ら柳之助を非難するのである。

とは謂ふものゝ、此世に唯一の樂としてゐた最愛の妻を亡つた柳之助をば、何で可憐と思はぬことがあらう。瘦衰へて元氣も無く、鬱々としてゐるのを見るに就けて、それまでに思込むでゐる心の中は甚麼であらうと思へば、女々しいのは別にして、謂はうやうも無く可憐でもある。

偏屈ではあるが、謹直な、溫和な、潔白な、熱心な、眞率な、眞に惡む所とては微塵も無い人物と思ふほど、お種は誰救はぬ其人の苦患をば、手も着けずに見ては居られなかつた。出來るだけ扶けたい意で、勿論お[illegible]が傍に附いてゐるやうな譯には行かずとも、他人として世話の出來る限はと、靴下の踵の先まで氣を着けて、陰ながら善くしてゐたのである。

他人がそれまでに心配をしてゐるものを知つてか、知らずか、柳之助はお類の外には神も佛も無いやうに、義理も人前も構はず、始終苦々

しい顏をしてゐるのは、餘りと云へば世話効の無い、と能く勘辨はしてゐながら、折に觸れては心地を惡くもする。其とても畢竟餘り女々しいから起る事と考へれば、猶更その女々しいのが堪へられぬほど憎くもあれば、齒痒くもあつたが、決して色にも口にも出さなかつた。適には夫までに呟く事はあらうけれども、怺へ〳〵て柳之助に對しては其不快を洩すやうな粗忽は無かつたのである。

同居してから柳之助がお類の事で浸潤話をするのは今日が初發と云つても可い、又逃げるやうにしてゐる柳之助が同感を求めるやうな理も無い。未だに彼はお種に打解け得ぬけれど、外に居て見た葉山の妻と、今は朝夕と共にするお種とに對する感情の稍違つたのは事實である。彼の舅に仕へる工合、保を愛する樣子、夫を待ふ鹽梅、他に對するから下に臨む調子、一家を治むる技倆まで——固より那樣事を注意する柳之助ではないが——一所に居れば、見るとも無しに長い間には自づと目に入る。彼は人の妻として非難すべき點は無いと見たのである。從來は故無く嫌つてゐたものゝ、實は其人は一家の主婦として咎むべき所は無いのである。人の妻であつて、人の妻として缺けたる所が無ければ、其人は寧ろ敬すべきもの。

其よりも直接に彼の感情に影響したのは、同居する以上主よりは多く細君の世話になるものを、知らぬ顏では濟まぬといふ考量、彼の無頓着は、杓子あたりで給仕の動靜を察するやうな工夫は無いが、善くされると惡くされるとが解らぬほどの仙人でもなければ、お種の深切にしてくれるのが決して見えぬのではなかつたから、猶更其に對して感謝の意を表する必要を知らぬではない。まして其人は敬すべき細君であるからは、少しも猶豫する所は無いのである。

それでもお種に親むのは、何と無く氣の進まぬ所から、然う思ひつゝ猶且逃げるやうにしてゐた。尤も彼は世間の誰にも大方恁云ふ調子で接するので、他から嫌はれるのも全く此點、其代には一旦好かれさへすれば、飽くまで好かれるのも此點である。

此頃では柳之助はお類の事を噫氣にも出さぬやうになつた。實は葉山から堅く封じられたので、言へば益々忘られぬ種であるし、言つたとて復らぬ事を、もう〳〵君も言ふな、二度とは我も聞くまい、と或時屹と言渡されたので、柳之助は其後は慎むでゐるのであるが、その苦辛は忍ぶに餘る。當時の彼の身の上は、富も、名譽も、榮達も、學理の發明も、海外留學も、何も外に所望と云ふは無い、唯一件、言ひもし、聽かれもして幾分の憂を忘れたい。せめて其が彼の心を慰める、一つより無い道、其道を塞がれたのは、彼に取つては呼吸を碍げらるゝほどの苦悶であつた。

如何に然うかとて、打解けた間でなければ、言ふ効も聽かれる効も無し、お種に向つて訴へやう心はさら〳〵無かつたから、他には諦めもしたやうに見えながら、胸の中では一層焚ゆるばかりに思亂れて、此二週間を過したのである。今日料らずもお種に其事を言はれて見れば、有繫に嬉しくないことは無い。設ひ然ほどに打解けた間でないにもせよ、一面には親まねばならぬ人の口から出たのであれば、而して彼は其事に就いて熱心に忠告してくれさうな語氣であつたので。もし其事に就いてならば、如何なる言でも柳之助は喜むで聽くのである。人が有つて、忘れて了へと誨へるならば、自分は復らぬ事は忘れたいのである、喜むで忘れる、忘れる方法を聽きたいのである。

彼は其思に同感を求めたいばかりでない、隨

分抗撃を受けても苦しからず思つた。熱心なる抗撃ならば、冷淡の同感よりは幾何望ましからう。左にも右にも其事の噂ならば、彼の心は一時を慰むるに足るのである。久しく慰められもせず、涙にばかり濡されてゐた彼の心は、忽ち死灰の中に一點の熱を起して、不覺に揺きつつ、彼は遮つてお種の口を開かせたのである。遮られてお種も思ふ所を話した。

其意は依様、復らぬ事は素より爲方は無いと云ふに過ぎぬけれど、其言ふ事の裏に、郷家の母でも、葉山でも、最愛のお類でも、なか〳〵此場合には、飽くまでに窮果てた心を動り得まい、と身に沁みて感じた所があつた。其は優しい情でもなければ、可憐い話でもない、不朽の道理でもなし、高い教にもなし、畢竟は彼が男に仕へるのも、子供を愛しむのも、夫に傅くのも、下に臨むのも、皆其同一なる誠心があつて、彼の心を動かしたの外は無い。

話は不圖又昨夜の噂に轉つて、僕の肖てゐる、ゐないの問答になつたが、其末に柳之助は恁う言出した。

「僕の目には如何しても然う見えんのだから爲方が無いです。無論ものよりはもっと善く肖とるものがあるですから、二三日内に其をお目に掛けませう。」

「へゝえ。」とお種の不思議さうに目を瞪るほど、柳之助は心陰かに得意で、輕々しく説明を與へる氣色も無い。

「それは何でございます。」

彼は愈々誇りかに笑を含むで、

「まあ、何ですか、其時まで言はん方が可いですな。一寸解らんでせう。」

とお種の判じかねてゐる様子を見て、

「解りますか。然う、少し考へれば解るかも知れません。」

と然も興あり氣に子供染みた喜笑を爲る。

「何でございます。」

問はれるほど燥むで、

「解りませんか。」とばかりで、なか〳〵打明けさうにも爲ぬ。而して其を樂みさうにしてゐる彼の洒落は餘り無邪氣なので、お種は馬鹿々々しいのと擽痒いのを可厭がつて、

「はあ、解りません。」と手輕に言つて了つても、柳之助は未だ興有りげに挑みかゝつて、

「解りませんか。」

「解りません！」

彼は常に人の洒落も直言を憎むことは甚しい。談話の中に無用の言語を交へるのは、周章するも同じとまでに考へてゐるのに、一言や二言の洒落ではない、丸で一つの謎を懸けたのであるから、僕も夫に洒落られて煩くなると必ず默つて了ふやうに、又默つて了つたのである。然うとは心着かぬから、可厭がられてゐる謎を柳之助は猶も面白さうに續ける。

「それは大きいものです。隨分大きなものです。」

お種も萬更拋つても措かれぬので、

「へゝえ。」

未だ解つたらしく見えぬので、彼は勿體さうに一歩を進める。

「而して偉いものです。」

「大きいもので、偉いもの、解りましたか。」

默つてゐるお種の顔を見い〳〵、

「へゝえ。」とお種の挨拶は、最早挨拶と言ふよりは嘆聲であつた。聲とよりは太息の破片と謂ふのが寧ろ適當かも知れぬ。

「其の方が肖とるです。一番先で葉山君を驚して遣らなければ、もう二三日の内です。然う、丁度此位の大きさです。」

指頭で疊の上を劃つて、其跡を見ながら首を傾けて、

「隨分大きい。」

顏を擧げて、
「一寸解りますまい。」

四の一

柳之助が前觸をした二三日内もはや明日あたりとなつた。忘れたのか、氣にも留めぬのか、お種は別に何とも言はずに居ると、夕飯の膳に坐るや否や、
「明日ですよ、此間のお話したものは。」
と柳之助は然も其人の待ちに待つ事でも注意するやうに、顏を見ると言出した。お種は生得の坦然とした調子で、
「はあ、然うでございましたね。」
「明日です。」
「明日何だい、此間お話したものだなど〻暗號電信を打つたりなにかして。」と葉山はお種から聞いたのを忘れて了つてゐる。一言心着けられて、
「うむ、あの(解りませんか)事件、彼がいよ〳〵明日? それは面白いね。然し、君の目は腐つてゐるのだから、是が本當の駄目だ。あのくらゐ肖てゐるのを、(何處が肖てゐる?)とは何事だらう。女の方は見ずに物ばかり食つてゐる人物だから可厭になるよ。」
「まあ明日のを見てくれ給へ、此間の讎を復るのだから。」
「へ〻反討にならないやうに用心するが可い。」
「然し君は何でも難すから、何せ難すだらう。難されても僕は管はん、自身が善いと信じたら、それで善いのだ。」
「それで善いとも。誰も然うだらうぢやないか。私だつて善いと思へばこそ這樣細君にでも添つてゐるのぢやないか。」
お種よりは柳之助が極を惡くして、顏の遣端に困り果てる、細君は又始つたと云ふ躰で、默つて聽いてゐる。
「今話をすると實に噓のやうで、小々氣が尤めるけれども、私が嫁を娶ふと云つて騷いだ最中には、一時に八軒から申込が有つて、如何だ如何だと拂曉から媒人が玄關に詰掛けて、我勝に話を付けやうとするので揉めるね、始末にいけないから、番札を渡して會ふ事にしたが、近所では噂だつたさうだ、葉山樣の玄關は嫁取のやうぢやない、藥取だ!」
細君も柳之助も笑はされた。葉山も可笑かつた口角を改めて、
「其よりもつと偉い話がある、横濱物産會社の支配人をしてゐる、それ、あの木澤ね。」
「え〻、澁井樣の御親類の。」とお種も知つてゐる。
「あの木澤、もう其方此方四十だらうが、財はあるし、嬌飾すと來てゐるから若い。細君の歿なつたのは去年の秋の末だつたかな」
好加減に聞流してゐた柳之助も急に身に沁みて、
「はあ、何で死んだのかい。」
「子宮病だ。子宮病だの、胃病だの、熱病卒中、赤痢など〻來ると、まことに死榮のしない病氣さね。そこで此間中頻に繼嫁を探してゐると云ふ噂だつたが、いや、候補者の有ること有ること、それが、木澤の所望は初婚のものに限ると云ふのだよ。財の力だね、四十面を挈げてさ、十五年も添つた先妻があつたのだ、それで初婚の候補者が腐るほど有るとは、日本の婦人も好い度胸になつたものさ。
歐羅巴では七十にもなる伯爵の所へ、花の蕾の十八ぐらゐのが喜むで適くなどは珍しくないさうだ。其を考へると、人氣は惡い國に違無い。偕老同穴の契と云ふのが本文なのに、後家になるのが山で嫁入をするとは好い畜生だ。
成程財は貴いのには極つてゐるが、然ら又

拘られても世の中は面白くなくなるよ。第一生娘などゝいふものは錢相場や米の直を知らないのに限る。財さへ有れば(ひよっとこ)でも老夫でも御用なさいでは、生娘のことがあるものか。賣女だ。

　那麼所へ嫁に適かなければならないなら、私は淵川へ身を沈める、と物も食はずに泣通すやうな魂が無ければ、可賴くないぢやないか。それが本當の生娘さ。」

「貴方、あれ、御酒が零れますよ。」とお種は夢中で辯じてゐる夫に心着ける。心着けられても猶且夢中で、

「いよ〳〵木澤の所へも嫁が極つたさうだが、十九歲とは如何だい。男はもう四十だ。四十に十九！　慘しいぢやないか、え、餘りだね。それで、身分も惡いのぢやない、小金も有るさうだ、何でも[illegible]布達の可也にしてゐる官吏の娘で、高等女學校を卒業して、ピアノなども鳴すし、女子普通の業は立派に出來て、箱入の無垢なのだ。寫眞を一寸見たが、好い器量さ。少し意地は惡さうだけれど、何處へ出したつて見事な花嫁だ。まあ考へて見たまへ、是が食ふに窮る身分ぢやなし、不具でゞもあるぢやなし、年が更けてゐるぢやなし、そんなら出戻ぢやなし、年が十九で、箱入でさ、教育があつて、器量好で、相應な身分なのだよ。いくら陽氣が惡いつて男旱は爲やしまいし、何も好き好むで那麼小父さん見たやうな所へ……噫、情無い奴だ！　若い娘の身空で色も戀も無しに、慾の一點張とは如何たい！　然云ふ匹婦の腸こそ、X光線でお願ひ申すのだ。而して寫眞版に取つて、娘のある家へ一枚づゝ配つて置きたいね。」

　言はれても言はれても酒を零し零し葉山は仇のやうに罵つた。

「女も然うだけれど、その木澤と云ふ人も……然うな、世間のものは妻を失ふと、直に又娶ふやうだけれど、彼は如何云ふものか知らん。死んで了ふと直に忘れて了ふのかね。」

　葉山の不平は花嫁に在つたが、柳之助は却つて男の方の了簡が聽きたいので。十九で二度目の所へ嫁入る娘よりも、十五年も添つた妻の一周忌も爲ないのに後妻を迎へる男の心を疑ふのである。

「それは別問題だ。」

「別問題だ。然し僕は常に疑つとるのだから、聞してくれ給へ。」

　葉山は手を揮つて、

「もう止さう。明晩の前講と談さうよ。」

　獨で葉山の辯じてゐる內に、柳之助は匆々と食事を了つて、此時は膳を離れて、次の間で卷莨を吃してゐたが、獨語のやうに、聞かせたいやうに、

「直に後を娶ふ人が能く有る。」と壁に靠れて、目を瞑つて、徐々に煙を吹きながら、其語を默讀するやうな態であつた。

　暫時は葉山も物を言はず、遽に飯を食ふ氣勢がして、折々お種が給仕をするらしい物音。隱居所には偲の聲が聞えて、急に鎭つた迹とて夜の更けたかと思はれる閑寂を、熟と柳之助は聞澄してゐたが、やがて何氣無く目を開くと、眞晝を欺くラムプの光は、鮮に夫婦の姿を照して、舞臺の幕が開いたやうに、今更異しくも目を惹れる。

　愉快らしい夫と滿足さうな妻とは見好げな一間に相對つて、夫は外の勤から歸つて暢々としてゐれば、妻は一日の事を寬々物語らうと、誠を籠めた饗應をして、待ちつ待たれつした二人は、安樂の天地に塵世を忘れてゐる。

　嗚呼、夫婦一日の樂は夜食に在る。目の前に那麼樂しげな夫婦が居れば、一間隣には這那儚い獨身が、其樂の無い外に更に一の悲を

懷いて、暗い處に蹲つてゐる。ラムプの光は夫婦ばかりを照して、殆ど自分の所へは來も爲ぬ。彼等は明い所に樂むでゐるのに、自分は暗い所に竦むでゐる。何ぞ世に在る我身の上の此居所と相似たるや、幸の光は此身を照さぬのである。彼等は樂むのに自分ばかりは悲む。何故に同じ人間でありながら此幸不幸があるのであらう。如何にせば昔の幸を取復し得るであらう。考へても〱、唯物可恐いほど儚くばかり覺えて、或は此黯澹い所に閉籠められたまゝ、遂に葬られて了ふやうな氣がして、居耐らずに明い方へ飛出すと。二人の驚いたこと！

四の二

此夜は思寄らずも柳之助には格別不愉快なるものであつた。二人を驚かして明い處へ割込むだ所で、その樂しげなのが頒たれるでもなく、二人は二人だけ、自分は自分で、暗い所に居たのと異らぬのである。

其實葉山もお種も自分達の方は措いて、柳之助に話掛けるやうに、努めたのであるが、彼は一向嬉しくもなくて、心の中には、（自分は二人の樂を知つてゐる、彼等は決して自分の此苦は知るまい。嘗て葉山が大醉して年始に飛込むだ事があつた。其時類樣と二人で非常に介抱した事がある。類さんが氷嚢で葉山の頭を冷しながら、一時間も附切で枕頭に附いてゐた、自分は衣類を脱せたり、夜具を出したりして、大騷をやつた。それでも二人して騷いでゐるのは樂であつた。二人が心を一つにして、互に手足の如く動いて、或一つの事を二人して半分づゝ爲るのは、一種の謂ふべからざる幸が自から其中に在る。二人は今如何に幸であるか知れぬ。大醉の葉山は其時前後も知らなかつたが、自分は今知過るほど何も彼も知つてゐる。大醉したやうに此悲がもつと劇しくもつと急であつて、寧ろ前後も知らなかつたならば、此不愉快は覺えぬかも知れぬ。此悲がもつと劇しく、もつと急であつたらば自分は甚麼になるのであらう！）

彼は果して其を願ふのであらうか。此悲の大醉は發狂である、その醉覺の水は無論自殺でなければならぬ。彼は自殺を喜ぶ狂人ではなかつた、發狂に樂まむとするほどの變人でもなかつた。然し、彼は何を樂に生きてゐるのか、生きてさへ居たらば失つた樂が又得られるのか、と常に考へては迷つてゐたのである。

（二人の幸なのに就けて、自分の苦は？葉山の大醉は一時であつたが、自分の憂目は是から長く、或は一生續くのである。）

恁思ふと猶更他の幸を見るに忍びかねて、彼は遂に起つて、二階の居間へ還つたが、還つて見れば、なか〱還つて來るがものは無くて、暗黑の中に唯一個心を引込めたラムプが有るか無きかの悲しく〱に、其滅せてある机の上を照すばかり。而も其光を受ける物は一樣に死顏の色をして、傍へ寄つたらば然ぞ身毛も堅たうと冷たげに見える。此微寂しい影の中に白銅鍍の寫眞立が漸く隈取つて、筆筒の側に飾つてある俤は圓髷で紋服の半身、誰のと問ふまでもない。

柳之助は行くよりラムプを佗と明くして、坐ると寫眞を眤と見入つてゐたが、其目は瞬くのを忘れたやうに、姑く瞠つてゐる間に、机掛の花唐草の上に滴々と露を零した。始めて其時瞬を爲ると與に、兩臂を張つて机の上に俯いたまゝ、容易に顏を擧げずにゐたが、やがて思切つた躰で振仰けば、涙は頰の邊まで濡してゐる。左の掌で腹立しげに其目を擦拂ふと、ラムプの火屋は響を作して、裂けて頽れて落ちる、火は翻られ黑烟を噴く、慌忙しく吹消せば

お類の寫眞も、机も本箱も、二階も我身も、有つたものは皆無くなつて、唯一面の闇い中に柳之助は身動もせずに沈として居た。何を考へてゐたのやら、火屋の碎片の冷徹るまでも、其儘に居竦つてゐると、何時來たのか階子の口で例の元氣な聲、

「や、眞暗だ、如何したのだ。」

柳之助は萎縮れた聲をして、

「待つてゐたまへ、待つてゐたまへ。」

「如何した、如何した。」

五の一

今日はと當惚をした今日であるのに、柳之助は何も持たずに歸つて來たので、お種も有繫に尤めずには措かなかつた。彼は失望に堪へぬ險しい顔をして、

「もう二三日待つて下さい。」　と言ふさへ殘念さうな、其氣色を見てお種も、

「はあ、然うですか。」　で濟して了つたが、今日には限らぬ、毎でも歸つて來ると、不思議に表顔を隱くしてゐる。別して不思議なは、朝出て行くのに斷て那樣事は無い、顔の色なら言語なら、彼は常例に冴々して、謂はゞ樂しげに心の急がれる風がある。それが歸つて來ると憔悴として、門を入るも脚の重いやう、或は然も無く歸ることも數の中には有つたなれど、朝出る時に氣の濟まぬらしい樣子の見えた例は前後に一度でも無い。

不圖然う見出した以來氣を着けると、往と還との容體は版で捺したやうに、いつも〳〵同じである。それは持つてゐられるステッキ、あのステッキでも知れる。往は飛ぶやうで、還は引摺る、と年寄の耳ながら閑さに聞出した隱居所の舅が面白い證明。

返す〴〵もお種は不思議でならぬ。何故に出て行く時は機嫌が好くて、歸つて來れば苦い顔をするのであるやら。女氣の思過して見れば、餘り好い心地は爲ぬのである。歸つて來るのは誰の家である？　その家へ歸るのが不愉快となら、不愉快の因は其家に無ければならぬ。此家の何處が不愉快で、何が氣に入らぬのか。もしお類さんが此家に居ないからとならば、學校へ行つたとて居るでなし、又始終鬱ぎ通してゐるものが、毎日の勤が何の面白からう、誰にしても怠勝になるが當然である。然も此家が可厭さうに、出て行く時は冴々として、歸來と云ふと憔悴してゐる、之には何ぞ理が有らう。

それとも塒に還る鳥の疲れた翼に飛ぶさへ怠く見えるのか、但は例の變人ゆゑかと種々に判じたが、固より何も當推量、唯疑の無いのは其事實で、

「眞に御父樣の有仰つた通り、成程其に違無い、ステッキの音からして然うだ。」

左にも右にも仔細の有りさうな、不思議な、けれども其より未だ心得られぬのは、學校の出勤を怠らぬのが、不思議の中での不思議と謂ひたい。箸を持つさへ力無げに、大息ばかり吐いて、如何に怏々してゐる那裏でも、決して學校を休むだことが無い、休まうとしたことさへ無い。人に言を交すさへ物憂さうにして居るものが、如何して面倒な教授が出來やう、學校へ出る氣が出やう。彼人の氣では、學校も出勤も抛つて、思ふさま鬱いで居さうなものを、是ばかりは頑に掛けて一日でも疎にせぬのは不思議の中の不思議と謂はうか、不思議の上の不思議と謂はうか。迚も有りさうも無い事、出來さうも無い事！　之に就けても熟く變人に違無い、とお種は思ひに思つたのである。

此日の不機嫌は別けて甚しく、昨日までの氣色は何處へやらであつたが、翌朝も同樣で、其睡げな顔はいとゞ恨が有るやうに、其恨を又抑へるやうに下座敷の縁を踏散しながら、

お種を見ると、

「僕はどうも病氣です。」

葉山に呼れて茶の間へ入れば、

「僕はどうも病氣だ。」

苦滯を澁すのか、不機嫌の辯疏をするのか、左にも右にも自分から平生の氣分ではないことを訴へながら、不相變柳之助は學校へ出て行くのである、而してステツキの音も例に依つて飛ぶやうに。お種は呆れる張合も失して、これで歸來は甚麼であらう と午後の退校を待つてゐると、謂ふまでも無く引摺りながら、悄々門を入つて來たが、お種に逢つて始めて出した言は、

「僕はどうも病氣です。」

一度ならず二度までも 病氣と聞いては案じられる。委しく容體も訊ねて、然うならば然うの樣に爲ねばならぬ、と其意で始めた話の中に、お種は竟に日頃の不思議を言出したのである。有繫に柳之助は當惑の躰で、

「はあ、朝出る時は然うですかな。歸つて來る時は那樣風に見えますか。」

姑く考へて居て、

「然し實際然うです。今の所では何も 樂も有りません、學校へ出るのが‥‥何故 樂？ 其理ですか。」 と苦笑をして、

「學校の仕事は割合面白いですよ。それは何でです、氣分の惡い時は面白くはないですけれど、それでも内に獨で悄然して居るよりは未だ可いです。教場に居ると大勢を相手にして、學問以外の事は全く考へんですね、それが大變善いです。内に歸つて來ると、紛れる事が無いから、始終類の事ばかり考へるやうになるです。學校に出て居ると其が無いです。

是ばかりは實に姻家の母の賜だと僕は常に思ふです。類の亡くなつた當座、僕は學校も罷めて了はうと思つて、もう打遣かして長く休むで居つたです。葉山君にも隨分言はれたですけれど、聽かんで居つたのを、到頭姻家の母に勸められて出たのが發端でしたが、それから今日まで、貴方も知つとる通り、懲して病氣をしとるやうな顏をして、心地も快くないですけれど、僕は一日も休むだ事はありません、實際行かん方が不愉快なのですから。若し學校が無かつたら、僕は本當の病氣になつて了ふでせう。

葉山君にも貴方にも非常にお世話になつて居るです、今度お宅に來てから一層貴方の御厄介になつて居るです。それに内に歸つて來ると不愉快な顏ばかりして居つて、僕は甚だ相濟まんです。」

纔に頭を下げたのも、お種には在るよりは可哀に見えて、口には言はぬ心の底までも、それで讀めたやうな態がする。

「何卒是は病氣だと思つて恕して下さい。」

其聲は重く沈むで、聽く身は緊しく壓へられるやうに覺える。

「此間も貴方から忠告を受けました、自分も其は承知して居るですけれど、それで依樣可かんです。どうも病氣です、懲云ふ病氣ですから、管はずに抛つて置いて下さい。」

聞けば不思議でも偏屈でもなくて、這樣可憐も世には在るものか。人の執るべき務は誰 苦に爲ぬものは無い。三十になつても四十になつても七日に一日の日曜を皆 樂 にする。大人氣無いやうに思はれるが、務となれば何仕事もそれ程に辛いのである。彼人も學問が所好だとて、衆が一日の日曜を思ふやうに、六日の務を喜ぶのでもなからうに、其辛い務をば未しも 樂にする身は甚麼思であらう。何程働いても、彼人ばかりは衆と違つて、待つ日曜が無い、其上に七日の間務めるにも勝る辛さが片時も胸を離れぬのであるから、其辛さよりはとて他の可厭がる務をばせめてもの 樂 にしてゐる。同

じ人間でありながら、他の苦を漸う樂にしてゐる其辛さは凡そ如何ほどであらう！ それで堪へられるものか、堪へられぬものか、彼人は日曜無しに一週間を他の倍も倍も働くと異らぬのである。

自身にも病氣だと云ふ。あれで病氣にならなくて如何せう、鬱がなくて如何せう、瘦せなくて如何せう、不機嫌でなくて如何せう、偏屈にもならなくて如何せう。

お種は後で獨り考へては、自分も曳入れられて鬱いでゐた。

彼は柳之助の女々しさを嫌ふとよりは殆ど憎むばかりで、其點に於いては毫も假す所は無いのである。今の歎も悲も憂きも辛きも皆其ゆゑとは識つてゐる、けれども其樣子を見、其心根を聞いては、酷らしく道理ばかりで責めもならぬ、其は其、可憐さは可憐さで、其可憐さの極は、彼の罪すべき女々しさゝへも一時殆と忘れたのである。

我胸一つに鬱陶したか、ステッキの音を聞知つた舅にも此事情を話すと、老の氣は更に脆くも打涙ぐむで、

「あゝ、御氣毒な事たのう、それは能くまあ面倒を見てあげるが可い。私は婆樣に別れてもう十年になるが、今でも時々、あゝ生きてゐたらばと思ふ事がある。其當座は忘れられんものだ、と云うて大切な體を那麼事で傷してはならない。お前たちも何分氣を着けてあげるやうに、のう。」

其後は咽ぶやうなステッキの音のする度々、お種は獨で情無い思をしてゐた。彼が歸つて來ての不機嫌も、内に居ての苦い顏も、引續いて始終見せられるけれど、從來偏屈とばかりに勘辨をしてゐたものが、何も病ゆゑと、今では優しい思遣になつたのである。

お種にははや忘れられてゐた再度の二三日内の期限も今日といふ日、彼の歸來が例より晩いので、例は晩い葉山が先に歸つて、その噂をしてゐると、輕々と玄關へ横付にした車がある。婢は取次に出た樣子、聞えるのは柳之助の聲。

「おや、鷲見だよ、車に乘つて來た、如何したのだらう。」

謠が天上でもしたやうに驚いた葉山の顏色。其顏をお種は茫と視て、

「御病氣か何かぢやないのですか知らん。」

「行つて見な。」

五の二

お種の出るまでも無く柳之助は傲々と奧へ入つて來た。新聞紙に包むで菱繩を廿文字に掛けた竪三尺許に横二尺程の扁い物を重さうに提げて、お種を見ると口を銜いて、

「出來たです、出來たです。」

常は朧のやうな目も嬉々して、擧止さへ何と無く彈むでゐる。お種は呆氣に取られて、

「何でございます。」と其物の何よりは、今日の彼の何が判じたい面色。

葉山は小机を引寄せて、其に大美濃の罫紙の假綴を六七册、膝の上にブック仕立の小厚い版本を披げて、會社の調物をして居たが、柳之助が閾際に立つて、其傍に件の包が壁に寄掛けてあるのを、振向いて横から眺めながら、

「何だい、大きな物を。うむ、それで車に乘つたのか。何を買つて來たのだ。」

「鷲見さん、何でございます。」

「えゝ、今見せます。」

彼は忙しげに其包を明の好い方面へ立直して繩を解き始めたが、未だ帽子を冠つたまゝでゐるので、お種は背後から徐と取つて茶棚の上に置いた。旋て覆の新聞紙を引剝すと、柳之助は一足左側へ寄つて、二人の面前に其物を顯はしたのである。四つの目は忽ち注ぐ。

―能く肖とるだらう。」　と柳之助は左臂を張つてコオトの腰に拳を付けて、右の手で眼鏡の端を抑へながら、逹踏をして二人の顔を眴した。是は教場に於ける彼の得意を表す體度で、他の答を聞くまでは、眼鏡に手を觸れては始に見た點を變へずに視るのである。

葉山の先づ笑を含むで迎へたのは、お類の立姿を七分の半身に寫した油畫の肖像。額縁は唐草模様を浮彫にして分厚の西洋木地で、大さと云ひ、裝飾と云ひ、總體に仰山らしく出來てゐる。

繪姿は柳之助の最も善いと云つて居る寫眞を手本に、歸寧の風俗を寫したので。高島田に結つて、（桃の實に仙雀）の挿込、高い前髮の陰に牡丹形の櫛の端が見えて、見事に鬢が出てゐる。額の廣い、濃くない一字眉の、小さい目の鋭く澄むだ、鼻狀は準繩で、好く緊つた唇頭の愛らしい、頰から頤の邊の四分した、小造の細面は寂しげに、又何處と無く薄つてもゐる。稍横向に、片手は椅子に掛けて、右を袖に引入れて、白襟に縮緬の三枚襲、上は水色の（丸に四方木瓜）の紋服、下着は鳩羽鼠の更紗で、帶は萌葱色地に金茶の網目を織出して、銀鼠で細く光琳千鳥を一群づゝに、處々唐松を地色で配つてある。緋々と綺つた緋の花綸縮の帶揚は胸の邊に雲鶴の形を見せて、帶留の金具は柳の輪の中に金色の一輪椿。

畫は水彩風に見面好く塗つて、飽くまで綿密に筆を用つた、俗氣の多い、仕入染みたものであるが、寸分差はず寫得たとて、柳之助は至極の滿足で、二度まで期日を遲らしたゞけの事は有ると、言分無しに引取つて來たのである。

「まあ大相好く出來ましたこと。」　とお種は物珍しさうに眺めてゐる。其顏を見い／＼柳之助は自分も覗込むでは、

―肖て居るでせう、ねえ、隨分能く肖て居るでせう。」

葉山は元來這油畫なるものが大の所惡で、月の中の兎と油畫の善いのは、話ばかりで見たことが無いと力むでゐるのに、別して善くないのを見せられたのであるから、一も二も無い、續けさまに皮肉が言ひたくて敵はぬのを、やうやう推悛へて、寧ろ拙惡加減を拜見する氣でゐたが、柳之助が得意で喜むでゐるものを、物が物ではあるし、猶更非は付けられぬので、無理に一箇所を取立てゝ、

「なるほど能く肖てゐる。」　と左も右も言つたのは、御座つてゐると知りつゝ目を瞑つて鵜嚥にする想。何とか言はれるに相違無いと、毎度の事ゆゑ柳之助も其覺悟でゐたに、然う聞いては逾得意で、

「好く出來とるだらうか、上手に畫いてあるかね。」

葉山は是に於いて益言ひたい、それを最一つ推悛へて、

―肖てゐるから可いやね。」　と無據に答へる。

―誠に能く肖てゐらつしやるではありませんか。御髮がねえ、好く出來てゐます。」

―然うですかな。」　と柳之助は額の側に立つてゐたが、不知お種と並むで見物の一人となつて了つてゐる。

―何だな馬鹿々々しい、畫を看てゐて髮の出來を譽める奴も無いものだ。同じ譽めるのなら御器量を譽めるが可いぢやないか。」

お種は挨拶ぶりに少しばかり笑を含む。急に憶出したか柳之助は、

「さあ、君、如何だ、是で此間の仇を復つたらう。」

―仇とは？　仇と呼れる覺は無い。」

―有る。君は肖て居もせん藝者を……。」

「うむ、あの一件かい。」

―君は反討にすると云つたぢやないか。」

葉山は怺へ次手に最一つ怺へて、渋々しながら、

「それは偽ても可いけれど。」

「出來んだらう。」

言ひたい口の蠕々するのを頻に抑遏して、

「いや、どうも恐入つたよ。」

此時お種は始めて、柳之助の面上に心の底の打解けた餘波が自から寄せるやうな笑の浮ぶのを見た。旋て彼は油畫の正面の壁に兩膝を抱へて凭れながら、餘念なく瞻盡してゐる間に夢見る如く吾を忘れて了ふと、其繪姿の鋭く澄むだ目は忽ち可懐さうに動いて、堅く結むだ脣も綻びる、横顔をさへ振向ける、傍に寄つて來さうにしては、又佇むで嬉しげな様子をして、遂には物を言懸けた。彼は記憶の出來ぬほど種々の話をした、樂しく過去つた事やら、待たれる行末の事やら、睦じい今の事やら。然し彼は此半年の身に積る歎も、胸に餘る悲も、世は闇の如き淒寥も、それらの事は全く覺の無いやうに捨てゝ置いて、他愛無い私語ばかりに醉されてゐたのである。彼は幻に語つてゐるお類をば、此世に亡い人とは思はなかつた。或時此夫婦は此様に倚添つて、此様に樂しく、此様に話をしたのである、今彼は其の或時の柳之助で、お類とても百年も生る偕老の妻でこそあれ、泉下の魂と思はうか、まして是が畫などとは。噫、それも一瞬の後！　空想の夢は盡きて、現世は終に現世に返り、畫は畫になつて了ふのである。

此幻の醉は長く醒めずにはゐなかつたが、醒めての後も常よりは冴々して、多時雜談に時を移したが、話の中も彼は間がな隙がな目を遣つて、唯油繪に执着してゐた。

彼が見さへすれば、其肖像は必ず微笑を含む、必ず物を言ふ、畫と思へば可恐いまでにお類は活動してゐる。葉山は又見れば見るほど拙いものに思つた。彼の思ふほど或は拙くはないかも知れぬが、左も右も善い出來でないのは事實（これを二階の座敷へ懸けられるのか。）と葉山も肚の中では隨分閉口してゐたのである。

座敷の道具としては然もあらうけれど、是で柳之助の觀好に不足は無いので、強ひて又其巧拙を論じたなら、彼の前にはお類の肖像の名畫は恐らく一面も無い。當時お類の肖像を完全に寫し得る畫家は誰であらう。若くは當世でなくとも、日本でなくとも、希臘、伊太利、佛蘭西、乃至全歐羅巴のあらゆる古來の名匠中にも誰が在らう。天下にお類を畫いて其人を寫得るものは柳之助一人ではあるまいか。彼は其妻を畫くに於ては、古へ無雙の名匠と謂はねばならぬ。彼は水の上でも、闇の中でも、處嫌はず自在に寫得るけれども、唯筆を用ゐて形に現す術を知らぬ。故に此油繪は僅に其術を備つたまでの事で、俤だに眞を寫して誤が無くば、柳之助には其が名畫。お類をだに描いた圖であれば、彼には世間に一人の名匠も無いかはりに、又一面の惡畫も無いのである。

「實に好く出來た、ねえ、好いぢやないか。」

と柳之助は又言出す。葉山は顧みて他を言ひたさうに、

「好いよ、好い。」

「之を懸けたら又一層引立つだらう。」

此拙いのが引立たれたら事だ、と益閉口して、今日ばかりは葉山も小さくなつて、徐々調物に懸り始めたが、柳之助は獨で油繪を眺めてゐる。葉山は折々目を轉しては様子を見ると、何時見ても猶且眺めてゐる。其顏を見れば、心の中が思遣られる、思遣れば傷しくもある。世間には喧嘩ばかり爲てゐる夫婦、性の合はぬ夫婦、折合の付かぬ夫婦、義理で添つてゐる夫婦、此等でありながら、夫婦の効の無い夫婦が幾らも

ある。その中に一人に換へて、せめてお類は死なしたくなかつたと思つた
「どれ、持つて行かう。」と柳之助が額を取りにかゝれば、
「もうお歸りかい、ぢや合乘でも申付けやう。」
「何故？」
「夫婦連で歸るのぢやないか。」
柳之助は弗と嬉しかつたので、
「うむ、まあ然うだね。」と言ひは言つたが、
惘然立つて考へてゐるので、
「何を考へてゐるのだ。」
「いや、もう行かう、行かう。」
額を引抱へて、蹣跚出て行くと、莎縄が縈むで四五尺も後を引摺つてゐる。
「もし、もし、奥様の御帶が解けてゐますよ。」

五の三

築地ホテルに社員の送別會があるとて、葉山は日の薄暮に出掛けたが、歸つて來たのは、世間も寢鎭つて、其車の響は三町四方へも聞える頃、好い心地に搖れて一睡した爲に、大方醉も醒際の薄寒さうな風をして、
「何時だ、大分更けたやうだ。」と居間へ通る。
「彼此一時でございます。」とお種は火鉢の前向の座蒲團を直す。燈の下には疊紙を披げて、子供の衣服が縫掛けてある。其をば一寸推遣つて、
「お茶を淹れますか。」
「何卒ね。」と鼠縮緬の襟卷を脫つて、繋絲織に變八丈の二枚下着の襟を合せ〳〵、身を細くして火鉢の緣に兩臂を掛ける。
「愍云ふ事と知つたら、折を挈げて來るのだつけ。」
「毎でも那樣事を言つてゐらつしやる。」
「何爲、志は有るのだけれど、如何も彼の折と云ふ奴は挈げつけないと誠に恰好の惡いものでね。男風だつて萬更でもなし、一寸好い服裝をしてゐても、翹々彼奴を挈げて行く所を見ると、まあ大概の岡惚は帳消になりますよ。」
「貴方などは些と帳消になつた方が可いのぢやございませんか。」
「痛入ります！（女房の妬くほど亭主持てもせず。）然し其位に思つてゐなければ、亭主が茶屋へ行つたのを一時になるまで夜延をしながら待つてゐるの、歸つて來るとお茶を召上れなど、愍うお手厚くは參りますまい。噫、俺は今晩發起した、お前が死んだら鰥見と二人で尼になつて了はう。」
「私は急には死にません。」
「まあ然う有仰らずに、せめて一月ばかり。」
「然うすれば如何なさるのです。」
「然うしたら少しは女房の有難味が解るかと思つてよ。」
「本當には爲ませんから。」
葉山は笑つた後を欠にして、
「いや、何の彼のと云つて、女房を粗末にしては濟まない。生きてゐれば不足を言ふやうなもの丶、死なれたら大きに不自由を爲ます。鰥見を見るに就けても、大事に爲なければ謬さ。是から精々心懸けて、大事に爲やう。」
と黑魚子の紋付の羽織を脫捨て丶、黑博多の盲獨鈷の帶を解きかけながら、出て行際に、
「さあ奥様、お寢みなさいまし。お風でも召すと可けません。」
「馬鹿にしてゐらつしやる。」とお種は直に其羽織を取つて疊むでゐると、寢間の方で、
「お隱樣で暖い〳〵。」と歴のする傍から、保が暗々言出す。
「貴方、起きますよ。」
葉山が賺してゐれば直に又寢付いた樣子。お種は夫の衣類を始末して、それから茶の間を片付けて、自分が寢支度をした頃には、葉山は鼾を立て丶居る。

階子口への通路の扉が繇つてゐるので、お種は鎖めに行つて偶然瞻げると、二階から明が射してゐる。柳之助は必ず燈を消して寐るのである。もう二時と云ふのに起きて居やう筈が無い、寐忘れたのであらう、と火元を氣遣つて階子を昇つて、窃と襖を啓けると、柳之助の枕頭に若い女が悄然と立つてゐる、と見たお種は一時に體溫を失つて、逆竪つ身毛は全身に鍼を立てられる想。處々の肉は異しげに顫つて、聲は出ず、進退は取れず、目も眩れて立竦むでゐたが、忽ち氣を取直して見定めれば、心の迷でも何でもなく、床脇の壁にお類の油畫が寄掛けてあるので。柳之助は床の間を枕にして、其傍にランプは恰も油畫を照すやうに置いてあるから、一面に陰々として闇澹い中に、其繪姿の物凄さは陰火に現れた影かとも見ゆる。

直に油畫と氣は着いても、お種は猶且傍へ寄るのは無氣味であつたが、思切つて衝と入る途端に、柳之助の衣衾が颯々と動いたので、覺えず飛退つて、凝然目を着けてゐれば、又動く。

「鷲見さん、お目覺でゐらつしやるのですか。」

聲を聞くと、柳之助は枕を擧げて、顏を這向けたが、燈の方に居るお種には、夜着の標に隱れて見えなかつた。枕頭へ進つて、見ると、目は泣腫れて、涙は仍夥しく溢つて、窃に吸上げてゐる。

「貴方、如何なすつて？」

物を言はうにも彼は涙に吭を塞がれて急には聲も出ぬのを、お種は待ちかねて又訊ねるので、柳之助は顏を背けながら、

「何爲又考出して……あゝ、もう、もう泣きはせんです。」

彼は甞てお種に言はれた事がある、其に對しても此始末は面目無いので。お種とても此で何と言つたら可いのやら言に窮つて、何を考へるともなく扣へてゐた。柳之助も姑く默つて、此方に顏を向得なかつたが、

「もう泣きは爲んですから、何卒行つて下さい。」

「はい。」

「もう思ふまいと思つとるですけれど、此油畫を見たら又種々の事を憶出して、吁！」

と彼は打悄した。

「然う貴方のやうに思つてゐらしったつて爲やうが無いぢやございませんか。」

打悄したまゝ又泣いてゐるらしい。

「餘り然う思窮めてゐらつしやると、お體の毒でございますよ。」

「何故僕は忘れる事が出來んでせう！」

身を顫しては、

「何故僕は忘れる事が出來んでせう！」

悔涙を咬緊めながら、柳之助は床の上に起直つて、我と我身を責めてゐる。彼の苦み呻く後に餘所々々しく立つてゐるのは誰？　是ほどに戀焦れてゐる夫を目の前に置きながら、何處を風が吹くと云ふ顏をして、他は如何あらうと、自分ばかり綺麗にしてゐれば其で可いのか、餘りの薄情も、畫であれば所爲も無いが、所爲も無い其畫が憎いほど、お種は沁々柳之助が傷しかつた。

「もう決して思はないと有仰つて置きながら、獨且恁云ふ物をお擶へなさるから、何にも成りは致しません。今晩も之を御覽なすつて、憶出してゐらつしやるのでせう。それでは幾許忘れやうと有仰つたつて、忘れやうが無いではございませんか。何と思召して恁云ふ物をお擶へなすつたのでございます」

柳之助は目を擧げると、寢衣姿でありながらお種は一點の亂した所も無く、屹と容を正して力を籠めて覗こゐられるので、慌てゝ居住を直して、

「實は是は疾に註文したので、其が漸く出來て來たのです。貴方には從來度々言はれたのに、又這麼所を……どうも面目無いですな。然し、如何して知れたでせう、下に聞えたですか。葉山君は起きて居られるのですか、あゝ、然うですか。」

　彼は涙を拂つて、襟を搔合せた。

「僕は今まで人の死ぬのを這麼に悲しいものとは思はんでした。世間には妻に死なれたものは何も僕ばかりと云ふではないですものな、其を僕ばかり這麼に悲しがるのは、考へて見ると可笑いです。葉山君も言つたですけれど、僕のやうに何日までも〳〵思切れずに愚痴ぽく泣いとるものは無い。然うでせう、然うだらうと自分も思ふのです。然し、僕は決して思切れんのぢやないですよ、思切ることは十分に思切つとるです。思切つたのと忘れられんのとは僕は別だらうと考へるです、如何ですかね。もう死んで了つたものは如何したつて爲方は無い、で思切つとるです、併し、始終考へん事は無いですね。それが何も死んで了つたものが思切れんで考へるのではないのですよ、唯考へては悲しくなるのです。世の中には種々不愉快もあるんですけれど、死んだものゝ事を考へるほど、そりや不愉快はありませんな。葉山君は善いです、貴方が居つて。貴方も善いです、葉山君が居るから。僕は此油畫、油畫の外には、外には何も……。」

　と言ひも敢ず顏をば袖に搨付ける。

「それはお察し申さないではありませんけれど、貴方のやうに然う思つてゐらしつたら、御體に障ります。もう現在障つてゐらつしやるではございませんか、ですから猶々氣が閉ぢて、其が爲に、不知紛れて了ふものも附纒つてゐる理でございます。全く、御體を不良してゐらつしやるのです、腦もお不良なつて居るのでございますよ。

　ちと御保養でもなさいまし、而して御體が良くさへなれば、御心地も自然と良くなりますから。而して恁云ふ物を御覽なさるのは却つて可けませんねえ。今日の晝間は珍しく元氣でゐらしつたから、結構だと思つて居りましたのに、是が出來た爲に今晩のやうな事では、此油畫は毒になりますから、當分の内仕舞つてお置きなさいましな。」

　生憎保の啼聲がするので、

「それでは私は是で參ります、貴方も今晩はもうお寢みなさいまし。」

「はあ、どうも種々……。」

　柳之助は階子の口まで見送に出て燈火を見せる。

「憚樣、もう宜うございますよ。」

　お種は降りて了つた。柳之助も枕に就いたが直には睡られぬので、又油畫を見てゐれば胸が逼つて涙が出る。思切つてラムプを吹消して夜着を引被つたが、未だ目は冴えて轉側ばかりしてゐると、旋て階子を昴つて來る音。

　枕を欹てゝ待つてゐれば、又お種が、片手にラムプ、片手に臺付のコップを載せた銀鍍の西洋盆を持つて、小腋に壜を抱へて、入つて來たが、燈が消してあるので、

「おや、もうお寢みなすつたのですか。」

「いや、未です。」　と柳之助は頭を擡げる。

「葡萄酒を持つて參りましたから、之を一盃あがつてお寢みなさいまし。」

「それは故々……。」　と起回らうとすれば、

「然う爲すつてゐらつしやい。」　と一盃注いで盆を差寄せる。柳之助は腹這になつたまゝで會釋をしたが　其時彼は一種異樣の所感を起して、胸の内が漲るやうに覺えた。先一口に其半を盡して、緩かに息を繼いで、旋て飲乾して了ふと、お種は待構へて、

「もう一盃召上れ。」
「はあ。」とコップを出せば溢れるほど注れて、彼は直に口を着けたが、其吃餘を樂しさうに燈に隔して子供らしく眺めてゐた。又一口飲むとコップを盆の上に置いて、言難さうに少し笑ひかけて、
「妙ですな、恁して居ると何だか妻が居るやうな心地が爲るです。失敬ですけれど貴方が妻のやうに思はれるです、大變それで酒が旨いです。」
「多度召上れ。」
柳之助は嬉しげに、
「飲みますよ！　もう一盃下さい、是で三盃。あゝ酔つた。然し這麼に愉快な事はありません。何でも酒を飲むと恁う愉快になれるなら、毎日飲むですけれど、今晩のやうな事は實際有りませんものな。」
何彼と言ひながら三盃目も不知空けて、
「もう一盃、どうぞ。」
「大層上れますね。」とお種は平生と違ふ啣杯の手並に少し驚いてゐる。
「旨いですもの、貴方。」
「上るのは可うございますが、過ると後が苦しうございますよ。」
「酒の苦しいぐらゐは何でも無いのです。酒の苦しいぐらゐ！」
と苦笑をして、四盃目も半分飲むで、
「貴方は御迷惑でせうな。」
「いゝえ。」とは言つたがお種も決して迷惑でない事は無い、彼此三時半にもなるのである。
「お寒いでせうな。」と何ぞ寒くない方法を見出さうとするらしく、柳之助は首を擧げて四邊を眴した。
「いゝえ。」と又答へたが、實は兩袖を重合せて隙洩る風に惱されてゐるので。柳之助は空のコップを拈廻して姑く躊躇する躰であつたが、
「寒いですから貴方も一盃如何ですか。」
「私はもう……。」
「然うですか、それでは僕が飲みませう。」
「其樣に……可うございますか。」と内々加減をして注ぐ。
「旨いですもの。如何して這麼に旨いでせう。然も非常に愉快なのですよ。貴方の爲に今晩は非常に愉快なのです。御迷惑でせうけれど、もう少し居らしつて下さい、可いですか。貴方が行つて了はれると、又寂しくなる、僕は其が心細いですから。」
「それでも貴方もう四時ですよ。」
「四時!?　御迷惑でせうな。」
「朝が早うございますから、もう私も臥りませんでは。」
柳之助は是非も無さゝうにコップを把つて、未だ有るのに、
「それではもう一盃！」

六の一

今日の日曜は、國民生命保險會社の取締役緑川壽平が高輪の自宅に園遊會を催して、葉山夫婦も招待を受けたのである。此催は彼の長男の壽がボストンの商業大學を卒業して、此度歸朝した祝と、支店設立の事に就いて山陽道筋を巡回する主の留別會とを兼ねたので。今や時候も一重櫻の吹きも遲れぬ彼の廣庭は、年月心懸けて名ある花の數を二百餘も寄せてある。時も此時、庭も此庭、誰有つて當日の盛會を豫想せぬ者は無い。夙て壽平の信任淺からぬ葉山は此際秘書官的隨行を命ぜられて、兩三日の内には發足するので、謂はゞ今日の主方である。
天氣は人々の願ひに願つたやうな誂向の快晴ではないが、氣遣れる花曇と云ふほどにも無く、少しく風が有つて、寒ならず、暖ならず、

朝から小鳥などが長閑に囀散して、日曜としては玉の如き日和。
　午前十時からとあるので、主方であれば九時ほどには行着いてゐなければと、お種は七時前から身仕舞に掛つたが、其間に子供もあるし、良人の世話も爲るので、手廻を爲た意でも、漸く滯留のパチンと緊つたのは八時、疾に車は門に來て軛を並べて待つてゐる。
　庭には保が河童頭を十筋ばかりの一寸髷に結つて、黒羽二重の熨斗目の染模樣に鶸茶の同じ下着、淡紅色縮緬の兵兒帶を總々と後結にして、紫天鵞絨の靴を踏いて、遊ばしてゐる保姆も赤柳條の二子の新しい布子に餘所行の柳條繻子の帶を結めて、襟はメレンス友禪の華美なことは千代紙のやう、赤毛ながら結立の銀杏返を大事さうに頸を長く、坊樣の袂の引摺るなどは二の次にして、拘つて帶を掛いたり、襦袢の袖を引張つたり、可笑しいやうに變身を窶してゐる。
　お種は支度が出來て、急遽しく座敷に出て來ると、其處に兩箇の居るのを見て、
「峯や、もう行くのだよ。」　と聲を懸けて茶の間へ入つたが、葉山は見えぬので、二階であらうと昇つて行けば猶且居ずに、柳之助が唯一箇、洋服を着けて、外套まで着て、肘掛窓に靠れながら、投足をした膝に帽子を載せて、保が目覺しく着飾つて庭に遊ぶのを兀然と瞰下してゐたが、人音がするので振返つた。
「おや、此方にも居りませんか。」　とお種は襖を啓けたまゝ内を見込むだ其態は繪にでも畫いたやうで、見違へるほどの美しさに柳之助は思はず軀を捻向けたのである。
　お種は生壁色の小紋縮緬の紋服に、黒繻珍の丸帶を結めて、納戸の染柳條縮緬の二枚下着、白茶の微い綾紗形の襟をして、長襦袢は肉色の中形縮緬。歌舞伎形の圓髷に結つて、髮は艶々と濃いのに、肌理は膩なり、色は白し、薄化粧をさへしてゐるので、何處と無く割然と水際立つて、四五歳は確に若くなつたので、一目見た時は實に別人か、器量勝りの妹かとも思はれた。粧れば恁うも美しくなるものであるか、彼も屢ばお類の粧り飾つた姿を見たが、迚も是程に粧栄のしたのを覺えぬので、如何にとも奇異の思を爲るより外は無い。變りも變つて、其體度まで例よりは嫋娜に、若氣の羞しさが見えるので、柳之助は呆顔をして見惚れてゐるのを、お種は有繫に曠ましい、其風情が彼には猶好く見える。
　此にも居らぬので、お種は挨拶も匆々に降りて行くのを、柳之助は慊らず思つて、續いて降りた、すると其鼻の先に、夫婦は行合つたまゝ座敷の眞中で立話をして居る。
　葉山の扮裝は、黒魚子の五紋、羽織に上は澁むだ平御召の變千筋、下着は紋御召の襲、薄色の仙臺平の袴を着けて、四合として白足袋を踏いた所まで凡ならず見える。彼も此も目覺しく立派になつたのを、彼は陰に驚いてゐた。
　平生は餘り色を動さぬお種も、今日は樂みさうに嬉々して辨の無い保まで跂ねたり、笑つたりして入つて來る。恁う一間に打揃つた親子は皆美々しく着飾つて、是から園遊會へ行くと云ふのを、緣側に足を投出して眺めてゐる人は、此日和の日曜を誰と何處へ行くのであるやら、折々日影に向つては帽子の埃を彈いてゐたが、
「今日は然し天氣で可いね。」　と葉山は振向いて、
「あゝ大當さ。」
「君ももう出掛けるのだらう。」
「僕の方の園遊會は寂しいばかりだ。」　と強ひて笑ひながら漸く身を起した。彼の行くべき園遊會は、何千人の來賓も唯大小の石を並べた谷中の森の中である。それを思ふとお種の胸の中は、此天氣の忽ち曇つたやうに鈍らさ

れて、然ぞ柳之助の身になつたらば、今日の此有様は熱鐵を飲される想であらうと、顏を向けるも氣の毒で、何と言はうかと案じてゐれば、葉山が例の紛かして了ふ。
「それぢや此方は賑かな墓詣か。まあ、何方にしたつて同じやうなものだ、野天でお辭儀をしてばかりゐる工合は。」
柳之助も爲方無しに笑ふ。
「一時に此方は燈の點く前には歸つて來るから、可いかい、留守を頼むよ。」
「どうぞ鷲見さんお願ひ申します。」
「留守番？ はあ。」
「留守番は所聞が惡いね、如何してつて要心の老夫とよりは想はれない。冬になると火之番をして、不斷は門番といふ役廻だ。然し本當に早く歸つて來て留守をしてくれなくては困るよ、一寸火鉢の抽斗にも二百圓と三百圓入つてゐるのだから。」
柳之助は此間凝然と兩箇の樣子を視てゐたが
「實に僕は感服した、どうも立派になつたね。」
「一番此から行つて日本銀行と背競をして見やうか。」
「細君が實に立派になつた。」
「いや、是は大きに失禮。」
「鷲見さん、今日はお人が惡いぢやございませんか。」
とお種の方でも、感服してゐる。柳之助はなかなか眞面目で、
「いや、本當です。」
「飛んだ事を有仰る。」
「いや、實際！ 大變立派です。」
餘り言れるのでお種も窮つてゐる、柳之助は又惡く眞面目になつてゐる。其の兩箇の樣子を何とも請れず可笑く見物してゐた葉山は堪へかねた躰で、
「大した事になりましたな。」
五分の後に三臺の人力車は南に向つて走つて行く。反對の方角にはステッキを曳いた後姿が寂しさうに暫く見えた。

六の二

從來に柳之助は郷家の母にも慰められ、葉山にも勵まされ、兄にも勞られたし、お種の世話にもなつた、其度身に沁みて感じたことの無いではないが、其感情は決して胸に留つて長く彼を樂ませるのではなかつた。彼のお類を悼む執着と失望とは正しく此等の力に十倍して、さほどの人の情も氷の巖に二三滴の熱湯を澆いだやうに、纔に融ける傍から直ぐ氷りついて、後には何の驗も無い。直と其ばかりを思窮めてゐる胸の中には、他事を容るゝ隙は無いのである。其外にも種々の事を彼は見もし、聞きもした、其等の見聞した事は猶更夢か風のやうに過ぎて、要するに彼の胸にはお類が生きてゐて、始終それを對手に餘念は無かつたのである。
疑はしいのはお種の晴衣の姿、是ばかりは何故か夢のやうにも風のやうにも唯一時のものに消えて了はず、墓詣の往復にも彼は其俤を見てゐた。歸つてからは猶目を去らず、再び其を實物で見るのが如何にも樂く思はれて、頻に夕方の歸來が待れた。之をお類にしたならば、珍しくない事で、寧ろ彼の常であつた。學校に出て居ても、歸る途々も、或は人を訪ねて居ても、彼の心の底に此感情の全く絶えた事は恐く無かつた。お類は彼の生命で、彼の神で、彼はお類の彼であつた。
然し、其は最愛のものが存生中の事で、今となつては、所詮其思を樂むことが儘はぬばかりに、彼を瘦せるやら、泣くやらして、失望の苦を極めてゐる。假初にもお類の外の他人に對して、彼の此思をするのは、天にも地にも是が初發である。固より思ふとても、お類に就いて思つた

ほど戀しく切に、極めて樂しく、甚しく待れるではないが、但其の思の全く同じであるのは、今朝のお種の異樣に美しく彼に見えたよりは、更に更に幾分の不思議を加へなければならぬ。

柳之助は考へた――甚麼にして歸つて來るか。歸つて來たらば自分を見て甚麼顏を爲るであらうか、而して甚麼事を言ふであらうか。

葉山夫婦は園遊會の中でも有繁に折々は思出してゐた――内では如何してゐるであらう。孤獨の寂しさに又考へて泣いてはゐまいか。尋常の孤獨の寂しい留守と違つて、夫婦連で遊びに出掛けた迹であれば、然ぞ不愉快も一層であらう。お種は別して女氣に、無情な事を爲たやうに思ふのは、門で車に乘つた時、「それでは。」と柳之助が目禮をして、悄々ステッキを曳いて行つた態が、執念く目に附いて、車の着く迄忘れかねてゐた。其人の心の中を推量すれば、自分たちばかり面白さうに、然も酷しい爲方のやうで、幾度か心地を不快しては思直してゐたが、今日の柳之助は愁ひに彼等の思ふやうなものではなくて、却つて愉快に獨り樂むで、窓の富士を看ては長閑に莨を吃し、茶の間に來て寢轉むでは菓子を撮み、茶に叫れて隱居所へ話にも行き、外の麗かさに庭の内を獨歩の園遊會までして、終局が葡萄酒の手酌と興じて見ると、過日夜深に六盃と傾けたと同じ調子に受けられるので、段々面白くなつて重ねる程に、好い心地に醉つたと思ふと、つい横になつたと思ふと、昏々と、噫耐らぬと思ふと、…………。

お種の歸つて來たのを見れば、此半日胸に浮べてゐた俤は、なか〳〵朝にも増して柳之助の目を牽いた。保に着更を爲せるとて、優しく面倒を見てやる片手には、何彼と誠實に夫の世話をする、其樣子は一日の疲勞も忘れて、自身の事は後廻に、務を大事と心懸ける中に、十分愛情の籠つてゐるのを、傍で觀てゐれば、柳之助も倶共に樂まされる。

何個月と同居をしてゐるのであるから、彼も今日始めて之を見たのではない、又お種とても保護を爲してもらつた有難さに、今日に限つて現金の働振を爲るのではない、彼は終始同じやうに是だけの事は屹と勤めてゐるので、それは柳之助も今晩と平生との間に如何ほどの相違を見出したのでもないが、美しい人の美しく振舞ふだけに、凡ならず幽しく思はれたのである。

此母に育てられる保は幸ひなもの、此細君に事へられる葉山は滿足であらう。何を見せても譽める事の無い葉山が、如何して此無人相の、人形のやうな、面白くもない細君に添つてゐられるであらう、と常に其をば疑つてゐたが、蟲の好かなかつた自分さへ長い日で見てゐれば、恁して合點も行くのであるから、彼の滿足は無理も無い。曩に隱居所で話を聞けば、老人の嫁自慢は非常なもので、我娘でもあるやうに那の恁のと善い事ばかりを擧げてゐられる。口數は寡し、愛相は無し、唯那だけで舅の機嫌の取れさうな理が無い。其で那麼に喜ばれて居るのを見れば、盡すべき所を十分に盡してゐるのでなければならぬ。

始は成程所惡であつた、物を言ふのも可厭であつた。憚無く謂はうなら、葉山が那云ふ細君を持つて居るのが實は不服であつた。類さんも那云ふ勿體ぶつた人は附合ひ難くて可厭だと言つて居た。實に其通であつた。それが一所になつてから、段々親くして見ると漸く解つて來た。別けて此二三週間此方は急に心の隔も薄くなつて。何か朋友のやうに思はれる。今朝の美しさ、又今晩の幽しさに就けて、彼は一層深く其の心立と行とが賴しくなつて、此美

しい、此誠ある人に世話を爲れる自分は、其夫の如くに、其子の如くに、幸でなくとも、其妻としては最も好き位置に居るもの と考へたのである。

左にも右にも其人に對する感情の遂に一變するまでに、柳之助は此日のお種を床しくも美しく見た。然ほどに美しかつたのも疑つてゐた所爲と爲れば、翌日からは又美しくも何とも無くなつて了はねばならぬ。其時彼の感情は果して如何なるであらう。

翌朝彼はお種を見た。無論小紋縮緬の小袖も着てゐなければ 絹のハンカチイフも持つては居らぬ。朝の事とて未だ寢衣のまゝで羽織を着て帶も無く保に取捌れて胸を披開げてゐる。其顏色は決して立派ではなかつた、水際などは一向立ちさうにも爲ぬ、けれども其顏を見るのが何と無く可懷かつた。昨日見たやうに輝いて美しくはなかつたが、何處か床しい其人であつた。

七の一

葉山の發足した後の家内は火の消えたやうになつて、客來は無くなる、車の出入は絶える、急に平日の用は減つたので、自から家中の往來さへ疎になつて、晝間の不景氣、夜の寂寥、主が居れば意氣がられる朧月にも宵寢をして、庭の櫻までが其間の日を面白くも無さゝうに散初める。他はともあれ、何かに就けて心細いのはお種の身の上、せめては保を對手に幾分慰められても、旅中の安否を氣遣つて、由無い過慮などを始めると、居ても立つても在られぬ事がある。床の間には陰膳を据ゑて、朝夕其前に神佛を心願して、立つた其日から歸來を待つてゐる。旅先に案じられるし、家内は寂しし、何方を向いても心細い中では、有繋に柳之助でも賴に思はれる、日比此人をば對手とした所應の無い、幸といふ時には傷けさうにも考へぬけれど、無いには勝して多少かの氣丈夫でもある。それと與に彼は近頃一時の變人でもなくなつて、自分に仕向ける樣子の大分變つたのをお種も認めた。微塵も那樣氣には無かつたのが、葉山に對する調子で自分にも心易くする加減が見えて、夫からも聞いた事もあるが、

「近頃は妻君も一家の人のやうに思はれて來た。」 と言つたとやら。然う思へば然とお種の胸にも落ちて、此際其も賴の力にならぬではない。葉山が不在になつてからの柳之助は殆ど主同樣の待遇を受けたのである。彼の不在の爲にお種の彼に仕向ける事と、彼に對する注意とは、大方否まず與へられて、其樣子は、客でもなく、朋友でもなく、嫂が主の弟の世話をする形で、彼が若し二月前の鷲見であつたならば、毒蛇の舌の上に載られたほどの苦患でもあらうけれど、今の柳之助に取つては、草臥れて倒れた處に錦布の蒲團が敷いてあつた喜にも劣るまい。

主が留守中の兩個の間を簡單に說明する爲に、葉山をば壁に譬へる。夫が内に居ればお種の便は其ばかり、柳之助とても彼の外に賴は無い、謂はゞ双方から靠れてゐた壁である。其壁が取拂はれたらば、勢ひ兩個の背は搗合ねばならぬ。柳之助も對手が無くて寂しければ、お種は循更である。まして柳之助は當時の感情からも、境遇からも、到底お種を疎遠にしては居られぬ。お種とても同じ事で、顏を合せる度の重るほど懇意にもなれば、懇意になるほど好むで顏を合せる、心易い話も出る。

過日彼は愉快に微醺に醉つた時、

「失敬ですけれど、貴方が妻のやうに思はれるのです。」 と言つたが、今は果して何と思はれるであらう! 彼は久しく病人であつたが、薄紙を剝ぐやうに日增に顏色を直して、多くは

油畫の出來た日の機嫌である。

二階は彼の住所であるのに、其二階に昇ると近頃彼は得も謂れず微寂しく覺ゆる。紙門を啓ければ正面の壁に、お類の肖像畫が懸けてあるので、入ると先づ目に着く、柳之助の氣が挫かれるのは是である。其顏を見ると與に座敷の內は黯澹くなつて、寤めてゐながら夢に魘れるやうな心地になる。還つて來るまでは此油畫を見るのが一個の心寛に思はれて、先づ一日見なければ左も右も氣が濟まぬ、因で見れば堪へられぬほど可懷いに就けて直に情無くなる。

彼は出入にお類を見れば措かなかつたやうに、此油畫をも生ける人と同じに考へて、朝々出るにも必ず一目は逢つて行くのである。然れども忘れられぬ油畫でありながら、彼にはなかなか其で滿足されねのみか、一方には彌、忘れられぬ不滿足を高めてゐる。葉山にも言れゝば、お種にも言れたが、如何にしても割愛して此油畫を取捨ふには忍びかねた、見れば胸を傷めると知りつゝ、見ねば可懷さに堪へられぬのである。

長く此微寂しい二階には居耐らぬので、柳之助は不知降りて來る。下は主の留守中でも、茶の間へさへ行けば人氣も多く物豊に、居心好く住馴されて、四下の目に觸れるものは皆活潑としてゐる、其中なれば白湯一杯でもなかなか旨いのに、お種が居て何彼と傍で氣を着けられる。

彼の二階から茶の間に來るのは、草臥足を曳いて旅籠屋に着くも同じであつた。入つて來ると容易に起たうとは爲ずに、話が盡れば默つて居て、長く然してゐる中に又何か話出す。お種も客と云ふのでなければ、用の間を缺いて對手を爲るではなし、格別迷惑でもないので、何時までも居たいほど置いて措くのであるが、柳之助は口數は寡し、お種は無愛相の方であるから、此對坐は時として爭論した後のやうに、反が合ひかねて兩方で持餘してゐるらしく見ゆる事がある。それでも柳之助は立たうとも爲ぬ。お種の思ふには、近頃彼の頻に茶の間に來てゐるのは、主が居らぬ寂しさに話に來るのであらうけれど、話も所在も無くなつても猶且居るのは、今迄とは打つて變つた仕打、如何いふのか知らぬと獨で怪むでゐた。

或日柳之助は例の話も盡れば、所在も無くなつた時、

「此へ本を持つて來て讀みたいですが、可いですか。」

お種は何故とも聞かれず、惡い事も無いので、

「えゝ、宜しうございます。」

「お邪魔でせうな。」

「いゝえ、何も邪魔な事はございません、お持ちなさいまし。」

「然うですか。」と柳之助は滿足の氣色。

彌解らなくなつたのでお種は遂に訊ねた。

「何故お二階で御覽なさらないのでございます。」

「えゝ、二階は單身で寂しくて、此の方が何と無く心地が快いです。此に居ると內へ歸つたやうな氣が爲るですけれども、二階は如何も不愉快で、獨で寂しいと又考出して、工合が惡いですから。」

「あゝ、然でございますか。それぢや此で御勉強なさるのは宜しうございますが、子供が參つたり私が用を爲たり致しますから、お喧しうございますよ。」

「それは一向管はんです。此に居つても唯た單身ぢや依樣寂しくて可かんのですから、其方が却つて可いのです。」

彼は葉山の爲るやうに火鉢の側に小机を据ゑて、試に書見を始めたのである。其日から柳之助の二階へ昇るのは殆ど寐る時ばかりで、夜も宵の內は茶の間に居て、二三日の後には、袋

棚や机の上に彼の書籍、備忘錄、筆硯、圖引器械等が此間の道具のやうに秩然と据置になつた。

七の二

始終傍に居て見ると、何かの端にはお類の噂が出て、又かと思ふほどお種は一つ話をさへ幾度と無く聞される。其人に歿られてからは謂ふに謂はれぬ不自由があるとの述懐が出たのを機に、お種は夙て折が有つたれば勸めて見るやうに夫から令められてゐた再婚の事を其と無く言出した。

「一度奥様のお有なすつた方は、如何しても御獨では可けないものださうで、精細した面倒を見たり、傍でお世話を爲たり致すのは、女子でなくては届きません、それが又女子の務なのでございますもの。」

柳之助は謎とは氣が清かぬから、

「然うです。妻が居る時分には何でも無かつた事が、今になつて見ると一々不便を感じるです。一つは其が不愉快の因にもなるのですね。而して一番窮るのは、實に寂しいですよ。葉山君が恁して毎日お留守ですから、貴方も寂しいでせう、ねえ、寂しいでせう――。僕は能く知つとります。然し僕の寂しいのは、今貴方の寂しいぐらゐではないですよ。丁度貴方の寂しいのと同じ心地の、もつと〳〵非常なのですから、察して下さい、僕は實に耐らんです。」

「留守の事ですから私の寂しいのは爲方もございません……。」

「それぢや僕の寂しいのは猶爲方が無いぢやありませんか。」

「貴方のお寂しいのは如何でもなると思ひますが……。」

柳之助は瞪つた目をば可喜しげに輝かして、

「如何してゞすか、えゝ、貴方。」

想の外の歡喜にお種は少しく怯れたが、

「貴方は御自分から寂しい思をして在つしやるのですもの。」

「それで貴方が忠告して下さるなら、僕は何でも聽きますから、言つて下さい。」

「御忠告の何のと云ふほどの事ではないのですけれど、唯貴方の御心地が伺ひたいので。」

「はあ、何でもお話します。貴方には是から又長く僕はお世話になりたいのですから、何でも遠慮無く有仰つて下さいな。」

「いゝえ、別に御遠慮をすると云ふほどのお話でもないのですけれど。」

「それぢや猶言つて下さいまし。」

「貴方は生涯今の御不自由で在つしやる御意ではないのでございませう？」

「如何いふ義ですか、今の不自由で……？」

お種は言更へて、

「いづれ又お宅をお持ちになるのでございませう。」

「それは持つても可いですけれど、然し何ですな、僕は永遠も御厄介になつて居りたいのですが、御迷惑ですかな。」

「宅に在つしやる分は些とも迷惑な事はございませんのですけれど、恁して在しつては、貴方は永遠も御不自由で、寂しい思をなさらなければなりませんよ。」

「那樣事は決して無いです。」と連に頷いて柳之助は獨で心得てゐる。それでは全で寸法が違つてお種は大きに考へる。

「それでは御不自由でもなく、お寂しくもないのでございますか。」

「不自由ですけれど、其はもう爲方が無いと諦めて居るです。寂しいのも、貴方が恁して家内のものゝやうにして下さるから、僕は滿足して居ます。可いです、是で可いです。」

「何も貴方强ひて御不自由をなさらんでも可いぢやございませんか。」

「強ひて爲るぢやありません、是は究竟自分の不幸なのです。」

「でも今後の御不自由は貴方が强ひて爲さるのぢやございませんか。」

「それは何故ですか。」

お種は姑く考へ澄してゐたが、

「御後をお貰ひなさいましな。」

「後を……妻をですか。」と柳之助は顏の色を變へる。お種は故と事も無げに、

「然うでございます。」

「那樣氣は有りません。」と決然とした挨拶。

「御不自由をなすつても？」

「はあ。」

「寂しい思をなすつても？」

「はあ。」

「それで御病氣にでもお成なすつた時は誰がお世話致します？」

「…………。」

「お年を取つた後の事も考へて御覽なさいまし。お賴りになる子供衆も無くて、六十七十にお成なすつて御自分でお働きなさる事が出來ますか。」

「…………。」

「そこらも少しはお考へなさらなければなりますまい。一體如何いふ御考で御後はお聘ひなさらんのでございます。」

思案に晦れてゐるのか、柳之助は熟と面を背けて、何の答も無い。

「いづれ御考があるのでございませう。」

「別に考は無いのです。」

「拙夫も實は其事を御心配申して居るのでございます。貴方も見す〳〵御不自由をなすつて在つしやるのではございませんか。從來よりは此から後が、奥樣が御有なさらなければならんのでございます。」

「それは然うかも知れんですけれど、もう妻を持つ氣は無いのです。其に就いては種々又事情もあるので、一生獨で遣ると極めて了つたです。」

「事情と有仰るのは？」

「少しお話の出來ん事情です。」と覺束さうもなく話が濁る。

「お話が出來ないと有仰れば爲方もございませんけれど、そこは拙夫とも御相談を爲すつたらば、又甚麼にも御心配を致しませうから……。」

「葉山君に頼むでも行かん事情なのです。もう如何か此話は舍して下さい。妻などは要りませんよ。病氣でもしたら貴方にお世話してもらふ意です。僕は貴方を姉と思つとるですよ——實際然う信じとる！」

お種は可笑らしく思つて、

「姉樣では忝うございます、妹にして置いて下さい。」と何と無く笑談にして了つても、柳之助は飽くまで眞面目で、

「あゝ、姉でも可いです、何方でも可いです。」

お種は覺えず笑ひかけた。

「けれども葉山君が兄ですから、貴方は仍舊姉ですよ、ねえ、姉で可いでせう。」

仍お種の默つて笑を含むでゐるのを、柳之助は不安心さうに、

「貴方が姉です、僕は弟です。」

正午に卷忘れた時計の引摺られるやうに鳴るので、お種は氣が着いて見ると、

「おや、十時、貴方もうお寢みなさいまし。」

「はあ、行きませう。」と柳之助は兩手で膝を拂つて、起ちさうにしたのを伸にして了つて、

「吁、吁。」と言つたまゝ慘然と燈を瞶めてゐたが、

「夜は如何も可かんですな、此頃は晝間は大變快いですけれど。」

「御氣分がですか。」

「然うです。是は全く貴方の御蔭です、今に僕は此のお禮は爲ますよ。」
「貴方何を有仰るのです。」
「夜になると二階へ還るですな。その不愉快なこと、可厭で耐らんのです。」
「あゝして油畫も飾つてあるのに那樣事を有仰ると、お類さんがお怨みなさいますよ。」
柳之助は爲やうが無しに笑ふ。お種は勝手へ下げる物を片付けて婢を呼ぶと、李のやうな顏をした廿歳ばかりのが入つて來たが、柳之助を見ると思出した躰で、
「あの、未だお二階のお床が延べてございませんでした。」
今日は仲働が暇を乞つて朝から出たのである。
「それぢや直に行つてね…………。」
姉には閉口してゐる。
「もうお寝になるのだから。何え、可恐くて行けない？ 如何したといふのだね、子供ぢやあるまいし、二階へ行く〳〵ゐるが……顔が……何の顔が可恐い？ 意氣地の無い人だね、それぢや二階へ[illegible]と二人でおいでな。私も可厭だつて？ 然うすると益々[illegible]は惡いね。おや、然うかい、毎晩お前が頼まれて一所に行くのかい、まあ可厭ぢやないかね。」
柳之助は吃々笑出して、
「あの畫が可恐いか。それなら可い、自分で遣るから。」
「困つた人たちだねえ。」
「誠に相濟みません。」と李はいとゞ赤くなつて姉は匆々に起つて行く。奧では笑事であらうとも、姉等には大抵の苦患ではないので、之を一日の思にしてゐる。抑も事の由來は、始めて油畫の出來た晩、お李が床を延べてゐたら、可愛らしい聲で「もし、もし。」と言つたとやらで、それから可恐がり出して、二人連でなければ夜は決して二階へ昇らぬ。彼等はいつか薄々柳之助の事を知つて、陰では種々の取沙汰をして怪談がつて、實は晝でさへ一人で行くのは皆二の足を踏むでゐる。
「では私が參つてお床を延べませう。」
「いや、決して。自分で遣ります。」
「まあ、行つしやいまし。」 とお種が起てば、
「それなら階子の所まで送つて下さい。」
「大層な騒ぎのやうです。」

八の一

多くの人を好かぬ代に好く人をば甚しく好くと云ふ彼の氣質は、燃ゆる如く、お類を愛して、葉山を信ずることは一途に凝固つてゐるのである。彼は此二人よりは無い友の別けて難換き一人を亡つた爲には、他が兩親妻子兄弟と一度に一家を擧げて亡つたほど力を落して、一時は殆ど此世に望をも絕つたのである。而して其人の亡い後も、一旦燃された彼の念は、なかなか急に消えては了はなかつた。猶其火は他に向つて費やさるゝ所が無かつたので、竟には自己の心を焼れて、彼は如何ばかり苦まされたであらう？ 日毎夜毎の彼の涙も此悲苦き餘をば得堪ぬのであつた。
彼のお類を亡つたのは、謂はゞ優しい聲と柔かい手と、溫かい心とを失つたのである。其聲と手と心とは、安穩に柳之助が一日を生活するに須要缺くべからざるものであつた。彼が病むばかりの不愉快に[illegible]くべからざるものを缺くゆゑで、もしお類が再生したならば、勿論彼には[illegible]も涙もあつた筈ではない。次には優しい聲と、柔かい手と、溫かい心とが別に有つて慰めたらば、彼は如何に爲るであらう？ 彼は決して其等をお類の外には望まぬのであつたけれども、彼の生活の上から其必要の有るこ

とは疑も無いのである。始め老婢の元も其必要の幾分を充さうとした、然し彼の聲は餘り皺嗄れてゐた。其次は姻家の母であつたが、此手も柔かながら餘り乾びてゐた。當人に其氣は無かつたやうなものゝ、實は母親が其必要を全く充させやう爲のお島といふものもあつたが、不幸にも彼は全く不必要以上に遇はれて、恨を呑み、ハンカチイフを咬裂いて還つた。葉山も試に優しい聲と柔かい手を、藉りやうとしたが、柳之助は羽の生えた猫に弄ばれるやうな腐れた愛情は持たなかつた。然ばかりの必要をも、彼は自ら必要とは感ぜぬのであつたか、或は再び外に求める意は無いのであつたか、左にも右にも必要は必要であつて、必要を缺くのは不愉快で、今の不愉快は昔のお類のやうに、柳之助は如何にしても其傍を離れかねたのである。

藥を美味として服する病人は無いけれども病は其が爲に痊るのでなければならぬ。彼の葉山に同居したのは、而して自とお種に親くなつたのは、好しからぬ藥を飲されたも同じで、姑くは苦い思をしてゐたのである。漸く其にも慣れて見れば、圖らざりき、お種の優しい聲と、柔かい手と、溫い心とは彼の不愉快の苦痛を劬るのであつた。柳之助がお種を可懷く思初めたのは之が爲である。例の彼の氣質であるから、一旦心を傾けた以上は、飽くまで其人に心を傾けるので、お種に對する感情も今は日一日に好くなるばかり、葡萄酒に醉つた夜の言が又憶出される、

「失敬ですけれど、貴方が妻のやうに思はれるです。」

然し彼は他の妻をば我妻と思はうとは思はぬ。姉と言つたが、姉に思ふのでもなかつた。葉山が男子としての友である如く、女子の友として彼はお種を愛するのであつた。

八の二

老人も未だ氣は着かぬが、近頃柳之助のステツキの音は出入ともに一樣になつて、時としてはなか／＼歸來の勇しげに響く日もあつた。彼は例として還ると直に二階へ昇つて、油畫を一目見て、直に下りて茶の間へ行く――朝出るにも必ず一寸二階へ昇る。それも彼の居間であるからは、誰怪むものも無かつたが、或朝件の如くお鈴が掃除をしてゐると、柳之助は出勤の服裝で昇つて來た。

何ぞ取りに來たのであらうと思ひながら、何氣無く見てゐれば、直と行つて油畫の前に立つたのである。其額は彼の長と同じほどの高さに掲げてあるので、前に立てば額と顏とが丁ど向合ふ。向合せると柳之助は引還して降りて行く。やがて門を出る靴音が聞えるのを待つて、お鈴は拂塵子を持つたまゝ階子を駈下りて、臺所の口から、

「お留さん、一寸。」　と呼付ける氣であつたが、李色の婢は流槽許から、

「何さ。」と見向も爲ずに洗物をしてゐるので、

「面白い事があるんだよ。あの、ねえ。」　と其傍へ寄つて行つて、

「鷲見樣の、お前…………。」

「お客樣と言はないと叱れるぢやないか。」

「さあ可いからお聽きよ。彼人の面白い所を見ちやつたんだよ、今。」

「何を見たの？」　とお留は用の手を休める。

「私がお二階を掃除してゐると彼人が昇つて來てね、何を爲るかと思ふと、油畫ね、……私はもう考出しても可厭になつちまふ。」

とお鈴は片手に頰を支へて、首を捻曲げて獨笑を爲る。

「如何したのさ、一寸。」

「あの油畫へ恁やつて顏を推付けて、而して降

りて行つちやつたのさ。」
「それつ限かい。」と お留は氣も無い顏。
「それつ限さあ。」
「如何いふ義だらう？」
お鈴は愛想の盡きた目遣をして、
「解らなきや可いよ。」
「油畫へ顏を推付けたのかい。」
「あれさ、油畫ぢやないよう。」
「それぢや何さ。」
「油畫の顏ぢやないか、憤つたいね。」
「依然油畫ぢやないか。」
「それは知れてゐるわね、油畫は油畫だけれど、油畫の顏さ。油畫の顏へ自分の顏を推付けたのぢやないか。」
「お前さんは本當に早口だよ。」
「どうせ貴方のやうにお品好くは參りません。」
「決して馴なんぞは出てゐない御襷を掛けて、島田の根なんぞは抜けてはゐないで、お〻、まあ御品の好いこと！」と、一心に喋立てるお留の顏へ、突然お鈴に手水を引澆ける。
「あ〻、何を爲るのだよ！」と睨む所を追駈け〳〵是な見違と濡手を振まはされて、お鈴は流石に二階へ遁昇つて了つた。
此後と云ふものは、柳之助の留守に二階へ昇るのは、恐しいとお鈴に目を着けられてあれば、此外に用も何も無く、唯其を爲に行くのであると極つて、臺所では（可厭な人）と云ふ事になつてゐた。

八の三

一日彼は學校から還ると、油畫の次には見るものにしてゐるお種の姿が茶の間に見えぬので、隱居所へでも行つたのかと思ひながら、火鉢の傍へ坐つたが、四下の樣子が何と無く變つて、常には取散してあるべきものが片附いてゐるのも心寂しい。例も還つて來る時分には保の聲も爲るのに、それの聞えぬのも張合の無いやう。縁側の障子に遲々と猫の行く影が犬ほどに映つて、老人の咳が一つした限り、家内は森として、眠さうな稽古琴の調が遠く度つて來る。何處で彈くのやら、此爪音が殆ど聞えぬ日とては無いので、其が又耳に附いて、柳之助は可厭で〳〵腹が立つほどに思つてゐるのが、今日は殊更小憹惱く、餘り嫌ふので先方も態と面になつて執固く彈くのでもあるやうに覺えた。跫音が爲る、入つて來たのはお鈴で、
「お召更をなさいまし。」
柳之助は要らざる世話を焼く奴だと思つたが、
「奥樣は如何した。」
お鈴はお鈴で、自分が盗むだのではなし、拷問される理は無いとは思つたが、
「一寸お出掛になりました。」
「はあ、何處へ？」
「本郷の方へ。」
「本鄕、何時頃？」
「二時頃でございました。」
「本鄕？　何の用だらう。」
「私は存じません。」と（如何した）の腹癒に少し手強く出たが、柳之助は氣にも留めず、
「何時頃お歸來だ。」
「直にお歸來になると有仰いました。」
「もう四時だ。」と柱時計を見て、不足らしい顏をして考へる躰であつた。其をお鈴は惡く眞面目腐つて居るのを見て、肚の中は可笑いが一杯。
「あの、御召更をなさいまし。」
「獨で爲るから可い。」
「それぢや御召を出しませう。」と起ちかければ、柳之助は憹惱さうに、
「可い、可い、獨で爲るから可い。」
お鈴は極めて淑からしく、
「はあ、然やうで。」と座を起つて行く。
柳之助は出入の着更には常にお種の手を假る

のであつた。然も無ければ獨で遣るとも、氣心の知れぬ婢僕に身邊の事を爲れるのは無氣味なので、お類の居た頃には老婢の給仕で食事を爲た事が無いのである。

彼は本意無さうに起つて、飄然と座敷へ出て、彼地此地と地平を爲るやうに步き始めた。然して步いてゐる間には不知不識時は經つと考へたらしく、間有つて胴衣の衣兜から銀時計の磨かせたら善かりさうなのを出して見ると、四時十分！　時は彼の步いた間よりは經たぬものを、最少し經つても可さゝうに思つたかも知れぬ。猶其時を費させる爲に、旋て二階へ昇つた。

今昇つたと思ふと降りて來たので、

「一寸お付けて來たのだよ。」　と臺所ではお鈴が囁く、お留が笑ふ。

柳之助は又一通座敷から茶の間へ逆つて、茶の間から座敷へ出て、座敷から緣へ出ると、お種と保との不斷着が魚を開いたやうに日南に並べて干してある。

其側に腰を掛けて、姑く空と庭とを眺盡してゐたが、空は此頃に希しく曇模様で、折々日の光は鼠色に薄れるかと見れば、又急に晴間が射して眩いほど晃いては、次第に淡く衰へる。指して集ると云ふ雲は無いが、空は一面に蒼色を帶びて、□□を一重□てゝ其を望むやうに何より低くも見える。□□い□□々に□つて、沈丁花の甘い香が呼吸を窮るやうに傳はつて來る。庭の樹々は大方、既に青み渡めた中に、垣の隅に三□ばかりの一重山吹が引續つて□え咲に咲殘して、□も無く唯ひよろ〳〵と高いばかりの枝葉が□へるほどの花を擧げて風に搖られながら立つてゐる。

いづれを眺めた所で何の風情も無いので、柳之助は庭へ下りて散步をして見たが、其とても風情は無いので、直に飽いて舊の緣に腰を休めたのである。傍に掛けてあるお種の不斷着を見れば、一高園遊會へ行つた姿が憶出される。

其後は終とお種の裝つたのを見ぬのであるが、今日は甚麼にして行つたのであるか、一寸出たのであれば、然したる事は無からうけれど、低して着更へたからは無論それだけには見えるであらう、必ず幾分か美しくなつたに違無い、何程美しくなつたか、――左も右も美しいお種を見るのは、今の彼には上も無い樂であつた。

同窓會から歸つた時！　お種は輝くばかり美しく見えた。お種とは想はれぬほど變つて美しかつたので、自と氣が改まつて、例のやうに物を言ひかけるのも何とやら憚られたのに、先方からは常に違はず馴々しく爲れた其嬉しさ。其嬉しさと其美しさとを懐へば、今日とても甚麼に快い幾分を覺えるのであらうと考へると、漸く不興も釋けて、又時計を見れば五時である。六時に歸るとしてもう一時間、と有繋に力付いて、風情も無い緣から起つて、内へ入ると始めて心落く、

「おゝ、試驗の答案を檢べるのであつた。」

扨て机に着けば、其處には小机が据つて、飾つたやうに端然と其上が片附けてある。今日には限らぬけれど、今に歸つて來る美しい、可懐い人の注意と思へば、可賴しさも可賴しい。六時といふのを力にして、それまで一勉強と、茶の折革の手擦れたポオトフオリオの見苦しく推込むだのを披いて、三束の答案を取出した。

學問には熱心に、授業には懇切の柳之助は旋て鉛筆を把つて答案の檢閲に着ると、傍目を一つ轉るでもなく、左の手に額を支へて、右の膝を搖りかけ搖りかけ、鋭意の極は吾を忘れて一心不亂であつた。此間に何程の時が經つたやら、全く覺は無くて、唯一級三十四名の答案の半を檢へ了つた時である、沈靜復した玄關に

轟渡る車輪の響、

「お歸來！——」と車夫の聲。

柳之助は衝と起つと、鴨頭に机の角を引掛けて、物の見事に打覆せば、机は四本の脚を逆擧げて、さながら助を呼ぶやうなのを、纔に一目見遣つたばかりで、周章と玄關へ出れば、はやお篠、お留、お勝は居並ぶとよりは折重つて出迎へてゐる。車夫は保を抱いて、一足後れにお種が格子を入つた所。

「やあ、お歸來ですか。」

お種は紺の深張の日傘をお篠に渡しながら、一寸會釋をして、

「唯今歸りました。」

此日のお種は質な風通織の一つ小袖に黒縮緬の羽織を着て、[illegible]沿とした更紗縮緬の[illegible]色の[illegible]と江戸紫とで[illegible]の模様を小[illegible]に散したので、帯は[illegible]模様の[illegible]珍と黒繻子の腹合。輪の大ぶりな[illegible]に玉の[illegible]挿して、昨日結つたばかりのも[illegible]の[illegible]に[illegible]しい髮の縺を、外の暖さに上氣した[illegible]の[illegible]掛けて、何と無く草臥れたらしい様子は、美しいよりは[illegible]に見える。

今日は自分に子供の保を抱るやら、乳を欲がられるやらで、おのづと帯襟も緩むで、腰から襟の邊が稍皺になつて、髮さへ亂れてゐるのに、[illegible]に縮緬を着て嫋々とした横姿の嬌かしさは、平生[illegible]に堅氣作のお種には迚も有るべからざる様子なのを、柳之助は陰に驚きながら、之もなか〳〵可[illegible]にはないのである。然し彼は飽くまで園遊會の姿を標準にして、他それほどに正つては居ずとも、僅まで碎けた風俗をば全く豫想せぬのであつた。曩日のやうに品の高い、立派の所は無いが、今日の[illegible]に色めかしいのも、又變つて更に得も謂はれぬのは、其樣子の打解け易く、何だか可懐さうにして、動もすれば少しは我儘なども言ひたげに想はれるのである。曩日は葉山も居れば、自分も今ほどの馴染は無かつたので、唯美しいと見るのみで濟むだのが、今日のお種は左に右に我物のやうに考へられて、又[illegible]も自分の考へる如くに自分を考へてゐるらしく[illegible]られる。待焦れた顔を見れば、早く茶の間へ行つて、[illegible]になつて落着きたいので、柳之助の胸の内は一秒の前後を爭つてゐると、薄色[illegible]の裾を曳いて[illegible]には[illegible]所を出て、[illegible]へ入つて來るので、柳之助は[illegible]として何も手には付かぬながら、引覆した机の始末をしてゐる。

寧と一息したと云ふ跡でお種が坐ると、得ならぬ衣の香と閑しい人香の頻に匂ふのを、柳之助は軟に醉ふやうに覺えて、傍に居ると思へば、何か無しに唯可喜しく胸の騷ぐのみで、暫くは言ふ事さへ無くてゐる。お種はおのれの姿をば訝しさうに柳之助が連に目を着けるのを見咎めて、亂れた襟を搔合せながら、

「どうも這麼奇い恰好をして、……着更へて參りませう。」

「まあ、可いです。ねえ、まあ、可いです。」

柳之助は謝るやうにして宥めたが、お種は氣の濟まぬ顔で、

「でも餘り亂次がありませんから。」

「何爲那様事が……先から僕は然う思つとるのですがね、貴方は今日は大變變つて見えるですよ。」

「然うですか。」と後を聞きたげに待つてゐる。

「一寸何ですな、藝者のやうです。」

お種は吃驚して而して赤面した。まさかに自分が藝[illegible]者のやうに自堕落に見えやうとは、夢にも[illegible]で、[illegible]にはならぬ[illegible]柳之助の見る目と思返しはされるもの丶、と[illegible]ば有繋心に慚ずにもゐられぬ。[illegible]の常つた夫に詰められたよりは、彼の口から出たゞけに

お種は闇雲く冷汗を流したのである。
「まあ、可厭ですねえ、早く着更へませうよ。」
お種は羽織の紐を解きかけて起たうとすれば
「まあ、可いです、貴方、最少し居て下さい。」
「直に着更へて參りますから。」
「まあ、着更へずに、暫く然う爲とつて下さい。」
「何故でございます？」
「大變貴方は其が好いですもの。」
「其が好いとは？」
「その服裝が好いですよ。」
「貴方は實に此頃お人が惡くなりましたよ。」
「何故ですか。」
「服裝だとか、風だとか云ふやうな事は、從來些とも有仰らなかつたではございませんか。」
「然う、言はなかつたです。言ふのは惡いですかな。」
「殿方は餘り那樣事を有仰らない方が宜しうございますわ。」
「葉山君は能く言ふですね。」
お種は呀としたが、柳之助は何の氣も無いので。
「而して種々な事を知つとるには感服して了ふですね。」
「それですから拙たは口惜しくていけません。」
「然し、妻は始終葉山君の事を譽めとつたですよ。葉山君を譽めては僕の所を攻撃したです。葉山君の着物を見ると、那いふ着物が好いとか、下駄を見ると、大變粋だとか。それから未だ恁云ふ事が有つたです。妻が來て間も無くでした。葉山君は彼時分髭が無かつたですね、然するト妻は切に僕にも髭を取れといふですから、遂に取つたです。それから一時葉山君が生した事が有つたでせう、然すれば又、依舊有る方が男らしいから生せと言ふから、僕は又生したです。葉山君が又取つたでせう、然すると又取れと言ふです。僕はもう那樣に……否だと言つたでさ、然すると妻は非常に不平で、葉山君が來た時其話をしたですね、けれども葉山君は僕は髭の有る方が似合ふと言つたものだから、其で自分も承知して了つたですけれど……。」
と柳之助は今も生してゐる髭を搔撫でゝ、
「他の客などは來たつて極冷淡でしたけれど、其は實に、葉山君が來ると妻は喜むで、御馳走するするといつて騒いだです。だから葉山君も妻を所好でした。けれども葉山君は口が惡いですから、それは妻に向つて隨分酷い事を言つたですね、實際僕が傍で聞いとつても氣の毒のやうな惡口を平氣で言つても、妻は更に嫌はせんです、而して葉山君は淡泊しとつて好いと言つとるのですものね。」
最愛の妻と最愛の葉山の事を最愛の人に聞かせるのであるから、柳之助も心面白く話をした。お種は氣の毒なやうな、嬉しいやうな、又極も惡いやうな、變な思をして、
「それでは、何卒貴方も澤山惡口を仰有つて下さい。」
柳之助は慌て忙いて、
「いや、然云ふ意で言つたと思はれては僕は困るです。僕は貴方に對して惡口を言ふべき理由が無いです。」
「でも私が亂次のない風をしてゐると有仰らないばかりに、藝者のやうだなんぞと……。」
「それは決して惡口ぢやないです。藝者と言つたのは失敬でしたけれど……然う、粹に見えたのです。」
「それが猶且お人が惡いのです。」
此時空は墨の人染むやうに見る〳〵一面に暗くなつて、細い雨が音も無く降つて來る。
「おや、降つて來たやうです。」　とお種は硝子越に見透した。
「然うですか。」　と柳之助は起つて障子を啓

けて空の模樣を眺めながら、
「あゝ、是は降るですな。」と言ふ間にあらず、雨脚は低く垂れて、小糠雨は益降注ぐ。
「ほう、降つて來た、降つて來た。最少し貴方遲いと遣られる所でした、善かつたです。」
一向答が無いので振返れば、お種は何時か起つて了つたので、座敷の方で聲がしてゐる。
火鉢の一角を見ると、黃金の繩卷の指環が脫いで遺いてある。柳之助は座に復つて唯一人の所在なさに其を取つて視てゐたが、不知不識の中藥指に嵌めて了つた。さて脫からうと爲れば、中の節が障へて、牽いても、推しても、捩つても廻しても、いかな上へは動ぎもせぬので、大きに慣れて度々と力を籠めれば、皮膚は赤く腫上つて、ひり〳〵と疼出すばかりで、指環は益如何にもならぬ。
「是は可かん。可かんぞ、可かんぞ。」と散散に踠いて居る所へ、お種は不斷着になつて入つて來て、
「あら、如何なすつたのです。」
柳之助は呼吸を逼ませながら、
「這麼になつて了つたです。」
指の根本は[illegible]の腹のやうに縊れて、處[illegible]した[illegible]が細に血入染むでゐる。

「おゝ、まあ是は！」とお種は其の手を執つて凝視ながら、眉を皺めて、
「お痛いでせう。」
「苦しいくらゐです。」
お種は急いで水油を持つて來て、彼の指に塗付けた。
「さあ、これで靜し〳〵拔いて御覽なさい。」
「自分では痛くて可かんですから、貴方構はず吽と遣つて下さい。」
彼は再び柳之助の手を執つて、頻に指環を動がして見たが、勝手が惡いので、彼地此地と持更へてゐる間に、不知四台と小脇に抱いて了つた。

九の一

柳之助は夜も宵の內は茶の間に居て、十時を打つと二階へ引取るのであるが、居間に還れば直に寢床に入つて了ふのであるから、謂はゞ寢に來るまでなのである。
彼は此二階の空氣に觸れると、忽ち體を緊付けられて、異しく胸が逼つて來る。冷なランプの光、薄暗い座敷の四隅、幻の如きお類の肖像、物寂しい夜具の樣子、右を見ても左を見ても、其獨身の佗しさを悲まれるやうに感ずる。一々其思を打破して、自ら慰める勇氣は無いので、葡萄酒を呷つて、纔に醉を假りて、漸く枕に就くことを得るので、何日とは無しに寢際には必ず二三盃づゝ飲むのが習慣となつたのである。
床に入ると腹這になつて、手酌をする度に思はぬことは無い。
一晩、此にお種さんが居つて、何ぞ話をしながら酌をして、自分の寢付くまで枕頭に附いてゐてくれるならば、それこそ定めて滿足であらう。自分が寧ろ病人でゞもあるならば隨分それほどの我儘も言はれやうけれど、病人ではなし、お種さんは他の妻君でもあれば、那樣失敬なことは到底言はれぬ。又最一つの事が協ふならば、酌も何も要らぬ。其は下の座敷に寢るのである。下の座敷であれば、這麼に寂しく感じる事は決して無い。晝さへ寂しくて居られぬ所に夜に猶更居られる理が無い。寢て了へば其迄であるやうなものゝ、然ら容易に寢付かれぬではないか、寢付かれぬから酒の力を假りも爲る、ついては種々の所望も起るのである。下座敷に寢ると云ふ事は如何あらうか。間を隔てるとした所で、謂はゞ妻君の傍に寢るのである。葉山の不在中であつて見れば、憚らなけれ

ばならぬ事であらうし、お種さんも否むであらう。葉山は自分を信じてをる、妻君も能く自分を知つてをる、況むや自分は自分を信じてをる、けれども俗云ふ事は憚るが道であらう。近頃は妻君は實に自分を弟のやうにして、何かに就けて一時よりは一層懇切にしてくれる。自分も亦彼人に言はれる事は喜むで用ゐる。けれども俗云ふ事は實際何でも無い事でありながら他の事と違ふやうに衆は考へてゐるから、衆に從はねばならぬ。

葉山の歸るまでは苦しくとも之で忍むで、歸つたらば話して何とか工夫をしてもらはう。夜になつて此二階に昇つて來る其不愉快！　床に入つてから寐付くまでの其の又不愉快！　實に何とも譬へやうが無い。若し此不愉快が拭ふやうに除かれたらば、自分は蘇生するのである！　不自由ぐらゐは何としても怺へる、是ばかりは迚も長く忍ぶことは出來ぬ。是が一日の生活中の最も大なる苦痛で、而も其に堪へたからとて何の効も無いものを、唯苦痛を受けるばかりなのは愚の極である。

葉山に話したとて、此苦痛の如何に苦痛であるかは決して解るまい。妻君には能く話すけれども、猶且然ほどには解らぬらしい。到底解るまい、誰にも解るまい！　可愛い、可愛い妻を喪つた人でなければ、而して片時も忘れず思ひに思つてゐるのでなければ。」

日暮からの春雨は蕭索に降頻つて、屋根に浴せる音は谷川の瀨ぐやうに、簷を繞る玉水の貧しげな響は娓々と呟く如く聞ゆる。何處と無く濕つた家の内は、我居間ながら心細さに居付かれぬほど陰に沈むで、人の住むとも思はれず、世間は全く物の音を止めて、悄然と雨に降られてゐる。但頓着も無く時々風が出ては梢を鳴して、此佗しい單調に騷しい合手を入れて、益聞くに堪へざる疎暴の奏樂を逞くする。

柳之助は之を下物に手酌の葡萄酒を飲むのである。鬱陶しい雨の爲に腦は痛む、氣は閉ぢて、酒を口に入れるよりは大息を吐くのに忙しい。

「吁、耐らん、耐らん、何といふ心地だらう！」

無理に一盃飲むで、顏を皺めて、

「うむ、不美い！　藥を飲むやうだ。」

飲むで早く醉はなければ、醉つて早く寐て了はなければ、不愉快は益募つて來る。又直に一盃注いでは見たが、氣が進まぬので其處に置いたまゝ横枕になつて、見るとも無くお類の肖像を見据ゑてゐた。

にた〳〵と簷側の隅に物音がするので、佗と頭を擧げて聞澄せば、雫の滴る音らしい。

「やあ、雨が漏つたかな。」

起回つて次手に其一盃を片附けて了ふと、旋て少しく醉を催したやうに覺えたが、頭ば何重くなつて、三盃とは飲む氣が出ぬので、ランプを細めて、今は觀念した躰で夜衣を引被いだ。

雨漏の音は極めて遲緩に時を限つて、はたりはたりと響くのが、外の雨より風より耳に附いて、氣に懸けまいとするほど氣に懸る、氣に懸るほど可忌しい音が怪しげに鈍い拍手を取つて、人を眠らせぬやうに故と遣るらしく續けてゐるので、姑くは忍むで居たが、到頭怺へかねて、

「えゝ、懊惱い！」と起きて、燈を持つて行つて見たが、承ける物が無いので、ハンカチイフを丸めて敷くと、忽ち音を斂めて了ふ。それで始めて念が霽れて、床に入れば依舊睡られぬ。是非無く飲まうとすれば、起きる時に蹴付けたコップは遙の距離に轉げてゐる。柳之助は其を視ながら壜を引寄せて、栓を抜くと直に口に當支つて、叩々と喇叭で飲むで、慌忙しく大息を吹いて、又引被いだ。

頭の上の谷川の流と亜鉛樋の貧しい獨語は絶間無く響いて、此水の底に葬られる世間は刻刻に朽ちて行くかと思ふばかり靜さを凝して、内を守る燈も今は唯獨りは便無げに點つてゐる。朦朧として壁に佇むお類の姿は、宛然執着の一念に牽されて、夫の枕上に顯れたかと見ゆる。其傍に裾襖の縮緬の夜着を被けて、殆と枕を外した頭を半分出して、柳之助は鼾を立てゝゐる。此侘しい夜を此侘しい座敷に、此侘しい人が侘う寢籠つてゐる其侘しさの、更に如何ばかりかは知るものも無く、——唯雨が降つて、夜の更行くばかりである。

此夜に限つて柳之助は時ならぬ寢覺をして、始は現心に雨を聽きながら、それなり寢付かうと沈としてゐる間に、燈などの消え行くやうに睡氣は次第に卻めて、何時と無しに目も冴えれば、心も確になつて來る。是ではならぬと思へば、轉側をしたり、夜衣を纏ひ付けたり、足を縮めたり、手を組むでも見たり、何でも彼でも寢付かうと、種々に身を揉むだ末が、全く覺されて了つて、被つた顏も出さずには居られず、洞然と目を開いた。

朦朧として枕頭に佇むお類の姿は、寄つて來たいにも動くことはならず、物を言ひたいにも克はぬので、せめては餘所ながら形なりとも顯したものゝ、それさへ生死の隔に遮られて、幽の影を浮べるばかりを、然も恨めしげに打淒れて、その味氣ない身の上でありながら、女心の忘られまいと、生前に可憐がられた、最も美しいと見られた姿を變へずにゐるかと柳之助には考へられる。耐りかねて彼は目を閉ぢた。それでも紛れぬので、轉側をした上に猶固く目を閉ぢた。轉側つたのは彼の體、閉ぢたのは彼の目で、一度思出した彼の心は千々に碎くるまでも忘れ得ぬのである。

侘しい雨は益降つて、侘しい夜は從、更ける。然も無くてさへ獨り居るには堪へぬ此座敷に、生憎も今は寢覺めた柳之助の侘しさは、寧ろ苦められるのであつた、彼は目覺めてから一分經てば一分だけ、五分經てば五分だけ、愈深く、愈急に、彼の心は其の常に忘れ得ぬ事を思ひに思ふので。お類の亡い後の何彼に就けて在りし時よりは猶可懷しい現在、其病中の種々可哀であつたり、三年が間樂しく睦じく暮したりした越方は、繰返々々胸の中を往來する勢に逼られて、彼は行末をも想はずには居られなかつた。

此獨身の後來は如何にあるべきと考へた時、今夜のやうに苦まねばならぬ事は幾度も有らう。是が病で倒れてゐる身であつたらば——葉山にもお種にも遠かつて、不深切の世の中に寄邊も無く獨り疾つて、藥も此雨の如くに誰が世話をしてくれるでもなく、晝も此雨の夜の如くに寂しく、閉籠られて、獨り苦むで、獨り死なねばならぬやうであつたらば、自分は何と爲るであらう？　何と爲なければならぬであらう！

可懷い過去と悲しい現在と、恐るべき未來とを思寥める胸の中は、一種の奇毒を服したやうに、消入る如き苦悶を覺えて、柳之助は在るにもあられず夜着を排却けて、寢床を出るや否や、油蓋に取縋つて、お類の顏を意味ありげに見入つてゐたが、忽ち其顏に頰を摺付けると、其冷さは彼の全身を射る如く走つた。其冷さ！　彼は其冷さを決して忘れぬのである。十一月の東雲の枕に蒼白く病羸けたお類の頰は此冷さに彼を驚したのである。其時彼は其處に倒れた。柳之助は今又其時に會つたやうに、其處に倒れた時のやうに、立ちながら途方にくれてゐた。

其時の事を憶出すと、今更のやうに得堪へぬ心地になる。我命ほども大事であつて、樂みで

あつて、便であつて、可愛いものであつたお類が回復もならず事切れて、石のやうに冷い遺骸となつて了つた。是に死なれて自分は何の生効があらう、無用の命の半を割いて、もう一度生かしたい、と愚痴とは知りながら愚痴になる。唉、愚痴だ！　爲方が無い！　爲方が無い、と思ふほど胸は張裂けるばかりで、其時は息も絶えながら、せめては死顔も見られたのに、今となつては如何に死ぬほど可懷くても、谷中の土になつて了つて、お類といふ名のみは此世に殘つて居ても、其人は全く亡いものである。其時は淺ましく思つた死顏さへ、影も形も消えた今では見ることも克はぬ。幾許戀しくても其人は亡いものである、亡いと思へば猶戀しい。

　其戀しさと傷さとに責めらるゝ心の内！　彼は其思に打勝つことが出來ぬのみか、暫く支へも爲得ず、同くは火水の中へ飛入つても此苦を免れたいとまでに考へる。居ても立つても凌ぎかねて、柳之助は座敷の内を頻に歩いた。夜更の雨の音は十重廿重に家を包むで、聲を限に凄じく悲しい歌を謳ふやら、憂身に其を聞かされながら、歩いても〳〵可忌しい一間の外に行所の無い切なさは、或は悶死に死にはせぬか、と遽に可恐くなつて二階を降りたのである。

下は一面の闇で、唯僅にお種の寢間から隙洩る燈が夢の如く射してゐる。柳之助は茶の間へ行かうとしたが、其處も眞暗黑。ラムプも燐枝も置いてある筈と、足捜に漸く行着いて、燈を點けた。明くはなつたが、火鉢に火も無ければ、其傍に人も居らぬ、侘しい雨の音は此にも聞える。坐りもせずに次の間へ出て　蜘手十文字に唯歩いて居たが、胸の内は容易に鎭らうともせぬ、けれども彼は一步每に其思を踐躙らうとしたのである。次第々々に心弱く苦められて、終には我力で我胸の亂れるを防ぎかねて、獨り居るには堪へられぬまでになつた。燈の洩れる襖の内には、病氣などの折は實意を盡してくれやうと、唯一人の賴む人が寢て居ると思へば、矢も楯も耐らず其傍へ行きたいのであるが、有繫に其もと怺へに怺へて、左にも右にも座敷の内を廻つてゐたが、突然襲はれたやうに彼の心は劇しく惱まされると與に、殆と前後不覺に襖を啓けて、柳之助はお種の寢間に入つた。

九の二

覆を被けた有明行燈を枕頭の壁に寄せて、手近に三四箇の玩具を置いて、藍鼠地の更紗紬の夜着の襟から木地塗の船底枕をした銀杏返を眞向に見せて、お種は閑然と寢鎭つたまゝ、襖の啓く音に身轉も爲なかつた。却つて保が現ながら驚かされて、遽に放してゐた乳を思出して慌忙しく吮始める。

　柳之助は漫然と入りはしたものゝ、其寢姿を見ると與に、是はと思つた。如何に夜深であらうとも、其人が起きてさへ居るならば、憚る事も無いが、許されもせぬ寢込へ踏込むのは、無躾である、狼藉である、後護くもあると思へば、見まじきものを偸見たやうに空可恐しく心咎がして、入つた足で直に襖の外に出て了つた。

　忽ち目に着いたのは茶の間の燈、彼は身を翻して其影を心當に進寄つたが、行着いて見れば何の効も無くて、僅の間を紛れた胸の内は又康しく不穩を感じて、迚も一處には居付かれぬので、假初にも運動を絶さぬやうにしてゐた。彼は其腦に縈る苦悶を振放さむとする如く、懊惱げに頭を掉つては、胸に蟠る惡氣を吐かうとして續樣に大息を吐きながら、道を急ぐ勢で歩いたが、悲しい雨の歌と物凄い夜陰の氣也とが、執念く耳と目とを侵す力は、益彼の思を其最も惡む方へ曳入れ、曳入れて已まぬ。彼は再び其力と爭つた。爭ひつゝ體さへ引掊

られるやうに、座敷の内を幾度と無く廻つてゐたのである。

何故然ほど苦められるのか、柳之助は自分にも解らぬので、如何に戀しくとも、如何に儚くとも、昨日今日の事ではなし、既に諦め果てゝゐる今日、這麼思をすべきではないと十分に心得て居た　然う心得て居ながら、何故に其諦めた事を遽に怎う諦めかねる爲に惱されるのであるやら、自分で自分が解らなかつた。我心であつて我物でないやうに、我什意にならぬのを疑つたのである。餘りの可疑しさに、彼は遂に自分は發狂するのではあるまいかと想つた、と未だ考得る今の所は發狂したのではないが此有樣で續いて次第に烈しくなつたならば、必ず發狂せずば成るまい。今の此心地は發狂の境に迷みつゝあるのではあるまいか、然も無くては何の故に今更這麼に戀しく、取迫て儚いのであらう。

「不思議だ、不思議だ！」　と呟いては歩き、歩いては考直した。

如何に考へても發狂するとよりは思はれぬので、愈耐りかねては無謀も狼藉も何も無い、又お種の寐間へ駈入つて、

「奥さん、奥さん、奥さん！」　と夜着の袖の傍にばつたりと坐れば、その聲に睡た儘して お種は顏を振向けると、夢心地に男が一人身近に坐つてゐるので、慄然して正氣付く途端に、柳之助は尋常ならぬ聲音で、

「奥さん、僕ですよ。」

一人の男であつたよりは其が柳之助であるのを、お種は寧驚いたのである。

「まあ、貴方で……。」　と徐に床の上に起直つて、柳之助の氣色を瞰と視ながら、

「如何なすつたのでございます。」

何時か知らねど家内の寐鎭つた此夜深に、男の身として女の寐間に忍むで來たは？　とお種は漫に胸を騷がせたが、餘人は知らず柳之助に那樣了簡が有らうとは思はれぬ。何ぞ是には樣子が有るのであらう、と直に又考直したやうなもの丶、何と言出すやら其を聞くまでは、左も右も氣が釋されなかつた。

此人に限つては然した不心得は有るまい、確に無いとは思ふけれども、萬が一にも有るやうな事があつたら、如何したものであらう。強く言へば、恥を搔かせねばならぬ。柔に言ふくらゐでは、男も覺悟して來たのであらう。由無い事になつてくれなければ可いが、とお種は身の膏を汗に絞られる想をして、故と佗となつて、睨むばかりに男の顏を見据ゑてゐれば、柳之助は頭を低れて、眉を濕めながら、頻に呼吸の過むのを推怺へてゐる。

夜が深けて燈も暗く、蕭索に雨の降る閨の内に、自分は寐亂れた態をして、其傍に男が坐つて物思はしげにしてゐる 自分は夫の留守中の體、男は同居してゐる朋友、此を他が見たらば何と言ふであらう！　自分が設し他の怎云ふ所を見たらば、何と思ふであらう！　他の言ふ所も、自分の思ふ所も、可忌しい邪推の外は無いと考へると、お種は忽ち灸らるゝ如く身内が熱して、實に此場を消えも入りたいのである。

旋て柳之助は何やら言ひさうにして、忙しく四邊を眴すので、お種は固唾を嚥みながら益佗と居直つた。

「薄暗くて、如何も心地が惡い、もつと燈を明くして可いですか。」

お種が寄らうとするのを、柳之助は早くも起つて有明行燈の覆を取つたが、座に復ると舊の處より猶身近に坐られたので、お種は呀と思つた。

「僕は弱つたです。」　と太息を吐いて、お種の顏を見入る眼色は常よりも鋭く、面上も其に應じた不穩の色を帶びてゐる。

「如何なすつたので？」
佗と言つた意の聲も稍顫へる。
「今晩は如何したのですか、目が覺めると急に不快な心地になつて、苦くて耐らんのです。而して獨り居るのが可恐いやうに寂しくて、それを幾許怺へやうとしても怺へられんので、自分でも氣が變になりはせんかと思はれるですが、僕は如何したのでせう。」
左右の答を待つたが、お種は何とも言ひかねてゐれば、
「吹！　あの雨の音が非常に不愉快なのですよ。あの音を聞くと耐らんほど寂しくなつて來て……。」
柳之助は肩を窄めて、其の得も謂はれぬ苦悶を面に顯した。それでお種の疑も大方釋けて、決して惡い了簡などの有る人ではないと思ふほど、見る通り憫ましげにしてゐるのが一入氣の毒で、何とか助けたいにも手の着けやうが無さに當惑して、
「甚麼お心地です。」
「氣が斯う變になりさうです。」
「此雨で腦がお惡いのでせう。生暖くて蒸蒸する晩ですから、其所爲ですよ。いつそ御酒でも上つては如何でございます。」
「酒ですか、酒はもう欲くないのです。えゝ、惡く降るですな！　天氣でさへあれば戸外へ出て、其邊を駈廻るですけれど。唉、どうも不愉快だ！」
居るに居られず、起つには起たれぬ躰で、柳之助は熟と目を瞑つて、大息交りに呻いてゐる。
「まあ御酒を上つて御覽なさいまし。醉ふと發しますから、幾分か可うございますよ。頭痛でもなさるのですか。」
「いや、頭痛は爲んですけれど、胸が變なのです。胸の中が熱くなつて沸えるやうな工合で、それは耐らんのです。」
益々悶えるのを見て、如何なる事かとお種は氣も氣でなく、醫者へでも駈着けるやうに、二階の葡萄酒を取りに行つたが、彼が起つと柳之助も起つて、中の間を無二無三に歩き散した。
お種はコップと壜とを持つて來て、
「さあ、一盃まあ吃つて御覽なさい。」
注ぐとコップに半分も無くて、壜はそれで全虛。
「おや！」
「もう無かつたですか。」
柳之助よりはお種が途方に昧れた。賴にした酒は一思に無いより蚊の涙ほど有るだけに腹が立つ。外に酒の類と謂つては、臺所に味淋のあるばかりで、有合せたものは何も無いので。醉へば氣も霽れやうし、眠られもするのにと、如何あつても欲しさに、戸棚の隅々まで想回せば、在る時には麥酒が半打も、其上にブランデエも、その上に葡萄酒もなどゝ意地惡く在る。無いとなれば又意地惡く、要りもせぬカステラの折や、ビスケットの罐や、呉服の切手まで貰つてある。
「窮りましたねえ、何ぞ有ると好いのですけれど、生憎……。」
「可いです、もう可いです。貴方が起きて居つて下さるから、可いです。もう少し此に置いて下さい。」
何ぞ藥か、酒のやうなものは、とお種は未だ考へてゐたが、
「では火を熾して、お茶でも淹れませう。」
「いや、一寸戸外へ行つて來ませう。」
「此雨に？」　と呆れて言へば、有繋に柳之助も躊躇して見える。
「而して何處へ行つしやるのです。」
「唯其邊を歩くのです。」
「唯歩いたつて爲やうが無いぢやございません

か。」

「爲やうが無いですけれど、外に爲やうが無いですもの。」

氣が變になりさうと、自身の口から言つたのも思合されて、其人をば此夜更の雨の中へ出すのは、お種も大きに氣遣しいので、既に出ると言ふさへ、異しいと思へば多少異しいと考へたから、是非に止めた。其は容易に止つたが、さて内に居たからとて、お種の別に爲やうの無いことは、彼の出ても爲やうが無いのと、餘り相違は無いのである。

如何にも耐りかねた氣色で柳之助は唐突に言出す、

「貴方、何か話をして下さいな。唯恁して居ると、噫、胸が塞がつて來るやうで。」

「成丈氣を慰めるやうになさいまし、然う苛々なさるから可けません。彼方へ行つてお茶でも淹れませう、而して少し落着くと屹と好うございますよ。」

否應無しに柳之助を連れてお種は茶の間へ從つた、時も三時である。火種の一粒も無いのを手を盡して漸々火を拵へる間に、雨は次第に小降になつて、僅に雫の音が聞える。柳之助は重荷でも下したやうに吁と息を吐いて、

「雨が歇みますよ。あゝ、もう夜も明けるですな。」

此一間はランプも思切つて明く、湯の沸音も賑かに、傍にはお種も居る、彼は始めて甦る如く覺えて、

「奥様！　大分心地が快くなりましたよ。」

「おや、其はまあ好うございますね。」

「全く貴方のお蔭で。然し御迷惑でしたな、實に濟まんですな。」

「何の、貴方。」

「濟まんですよ、這麼に世話をして戴いては。這麼に貴方のお世話になる理は無いのです。這麼にお世話になつては僕は葉山君にも濟まんです。」

餘り遽に今更らしく言立てるのをお種は可笑しかつた。

「那麼事が有るものでございますか。さあお茶が淹りました。」

「はあ、菓子が有りますな、ワツプル。噫、心地が靜々して來たです。」

「それは結構でございます。」

「考へて見ると、僕は近頃は非常に貴方のお世話になつとるですね、今晩の如きは實に……遠慮もなく、お寢つとる所を、餘り心配さしました。それを貴方が可厭な顏もなさらずに、恁して僕の爲に起きて下すつて、種々心配して下さる。實に此御深切は他人のやうには思はれんですな。然し、貴方は然ぞ僕を我儘な、無躾な人間だと思つて居られるでせうな、而して迷惑に思つて居られるでせうな。」

「決して那麼事にございませんよ。」

「然うですか。然うなれば僕は嬉しいのですけれど。一體僕は人好の爲ん質だといふ事を妻は能く言つたです。僕も亦餘り人を好かんですな、實際葉山君一人です。近頃貴方と御心易くなつてから、僕は貴方を好くやうになつたです。」

お種は眩しさうに目を逸す。

「ですから貴方のお世話になるのを非常に喜むで居るのです。それから又貴方を葉山君と同じやうに親友だと思つとるのですから、貴方も何卒僕のやうなものでも親友だと思つて下さい。是でも或時には貴方の爲に盡す事が有らうと信じて居るです、又盡さなければならんと考へて居るですから。」

お種は其言の何と無けれど身に沁むやうに感じた。

「實には甚だ失禮ですけれど、貴方に何か進呈せうと此間から思つとるですが、何が好いのか僕

には解らんですから、貴方の好い物を言つて下さい、買つて來ますから。」

「何で私に？」

「お禮の意です。」

「お禮などを戴く理は有りません。」

油に水を注いだやうに、お種は全然取合ひさうにも爲ぬ。

「それぢや可いです。貴方は何が所好です、欲しいもの？　衣類ですか。」

「衣類は惡いながら一通り御座います。」

「帶？」

「帶も御座いますもの。」

「髮の具は？」

「欲くもございませんね。」

「指環？」

「然ういふものは欲くはございません。」

「それぢや何ですか、何か有りませう。」

お種は少し考へて、蕾が開かうとするやうに笑ひかける。

「何ですか。」

「有ります。」

「有りますか。」

「貴方にお嫁が欲いのです。」

「怪しからん！」と柳之助は苦笑をしたが、お種の嬉しさうに笑ふのを見れば、自分も嬉しくなつて一處に笑つて了ふ。

十の一

翌日も雨は猶收らず、然しては降るでもなしに津瀰と、一日通して染垂れた天氣。柳之助は（可厭な日だ）と言ひ〳〵出て行つたが、歸つて來ても（可厭な日だ）と言續けに暮して、何の思出も無く夜になつた。お種は昨夜の件で怺へられぬほど睡い、柳之助は一向平氣で、例の如く十時までは居る氣組で、敵手欲さうに火鉢の傍を離れぬのである。獨り居るのを可恐がるほどに寂しがる人と思へば、萬更置去にして起つて了ふのも酷いやうなり、他の事を思へば自分が辛し、現責に逼される氣で漸く九時まで怺へたが、寢間で保が啼出したので、乳を付けて横になると、自分の睡るのを目に見るやうに承知しながら、ぐつすりと寢込むで了つたのである。耳近く騒めく音が爲るので、不圖目を覺せば、誰やらが來て、自分の隣に精々と床を延べてゐる。お種は大きに驚いたが、餘り有得べき事でないから、是は夢であらうと考直した。猶考直して見れば、自分は確に目を覺してゐるに疑無い。昨夜は枕頭に男が坐つてゐた、今夜は男が床を敷いてゐる！　昨夜は驚されたが、今夜は呆れ果てたので。呆れたも呆れたし、可恐さも可恐し、目は覺したが、息を凝して、起きも爲ずに姑く熟と見澄してゐたが、

「おや、御父樣ですか！」

「あゝ、私だよ。今晩は此へ泊めてもらはうと思つての。」

お種は早くも起きて、手代をしながら、

「些も存じませんでした。」

「私は若い時分夜這をしつけたから、忍ぶのは得手さ。はッはッはッ。」

「那麼事を有仰つて。本當に如何なすつたのでございます。」

「彼方は今晩は馬鹿に鼠が暴れての、天井裏で、や、もう騒々しい事、寢られる所ではない。それで爲方無しに引越して來た。」

「おや、然うでございますか。私はつい寢忘れて了ひましたが、何時でございます。」

「今し方十時を打つたよ。」

置去にした柳之助は如何したであらうと、お種は舅の介抱をして、それから茶の間へ行つて見ると、机も片付けて、誰も居らぬのである。婢を呼むで四下の始末を爲せて、臺所も寢るや

らに吩咐けて、居間に還れば、舅が、
「鷲見さんはもう御寝かい。」
「然うでございませう。」
旋てお種は床に入ると、寐物語が始つたが、始ると程無く其挨拶が途切れ途切になつて、
「歯が脱けては樂は無いのさ。」
「…………。」
「お前さんの所の御父様は私よりは確三歳下だつけかの、なう？」
「…………。」
舅は徐ら轉側をして、咳嗽を咳いて、退屈さうに大息を吐いて、有間は寐付かれぬ様子。雨の音は全く絶えて、ごつとりと風も凪いで、保の鼾が可愛らしくすや／＼と聞える。
前には自分の立てた音で他の目を覺した舅は、更に物音の爲に眠を驚された。次の間に跫音がして、彼地此地と絶えず徘徊する氣勢である。其音を聞着けると、首を擡けて窃とお種の様子を窺つた。彼は此方向に前後も知らず熟睡してゐる、舅は其顔を視ながら、隣の跫音を聞きながら、（唉、解らないものよ。）と胸に浮べる。
（萬々、那様事は無からうと思ふけれど、其處は若い同士、如何魔が魅して間違ふまいものでもないのだ。誠哉が留守になつてから、鷲見さんの様子が違つて來た。それを臺所のものが噂をしてゐる、此奴が極惡い。夜寐る時二階へ昇るばかりで、餘は初中終茶の間に來てゐる、それを亦何の彼のと婢等が陰言だ。疑ふ譯でもないが、其邊の所はお互に氣を着けてくれなければ困るのさ。些と言はうとも思つたけれど、彼氣だからお種も心配するだらうし、誠哉も直にもう歸る事だからと、言はずに居たのが此方の不念と謂ふものだ。然う謂へば成程鷲見さんの様子は變つたな、一時から見ると飜然と變つた。）
お種は身轉さへ爲ずに能く眠てゐる。次の間の跫音は猶聞える、遠くなつたり、襖の際まで來たりして。
（すると昨夜の始末、彼は何だ！　よしむば惡い事が無いにもしろ、二時三時といふ眞夜中に、亭主の留守の女の寐間へ、男が入込むで話をして居る、それぢや濟むまい！　世間が濟まさない。甚麽に言はれたからつて爲方があるまい。よもや間違は無からう、無からうけれど、有ると言はれたつて動が取れるものか。賢いお種にも似合ない爲方よ。彼が臺所の奴の目にでも掛つて見るが可い、如何する意だ。よもや間違は無からう、無からうけれど、仕草が善くない。とおれは初手から思つたのだ。誠哉があの氣だから何とも容嘴は爲なかつたし、女房を取られるやうな間拔な誠哉でもないから、話を聞いた時も默つては居たのだけれど、猶且然う云ふ面倒があるのだ。誠哉は留守の事だ、年寄が傍に附いてゐて何事だらう、間違は無からうけれど、那樣噂でも立てられたら回復が付くものか。で、まあ、二人に意見だ、何の道言はなければなるまい。いつそ何も言はずに言ふのも實は是し非しよ。恁して張番をしてゐて、誠哉が歸つて來たら全然引渡すと爲うか知らぬ——其と無くお種にだけは言つた方が可いか知らぬ。それとも此で先生に打付つて、窃と……いや、其奴は可かない。はて、なあ、今の所では間違は無いとしても、言はずに措いたら其間に……、早く誠哉が歸つて來てくれゝば、其が一番可いのだけれど。昨夜來て、又今夜彼通り來るのだ。如何も是は、はてな……はてな。）
途端に襖が啓いたので、舅は思はず起返つて、故と不知不識しく、
「誰だ！」
柳之助は眞二つと斫りかけられたやうに動顛

して、

「はあ、」　とばかりで二の句が出ぬ所を、

「誰だ！」

「ぼ……僕です。」

「誰だ！」

「つい、是は失禮を。」　と言ふより早く襖を闥然、次いで階子を駈昇る音がした。

「はて、困つた。」　と舅は身を倒して、枕を付けるとごほ〳〵と咳入る。お種は漸く目を覺して、

「何でございます。」

「あゝ、何、鼠が出たのよ。」

十の二

其翌日である、柳之助は學校から歸つて見ると、曾て然うした事の無いお種の顏色が何と無く勝れぬ。お類が嚔一つしても案じて訊ねるほどであつたから、ポオトフオリオを抱へたまゝ立寄つて其顏を覗込むやうにして、

「貴方如何か爲すつたか。」　と答を聞くまでは落着かれぬ躰で坐りも爲ぬのである。

「いゝえ、別に……。」　といふ聲は彼の僻耳でもなく萎れてゐた。

「那樣事は無いでせう。鬱いでゐられるぢやありませんか、如何爲すつたです、えゝ、顏色が惡いですよ。」

「然うでございますかね、何とも無いのですけれど。」

「本當に如何も無いのですか。」

柳之助は始めて火鉢の傍に坐つたが、未だ胡亂さうに彼の顏を眺めては獨り考へてゐたが、良有つて、

「貴方。」　と改まつて言出した。

「はい。」　とお種も改まつて答へたやう。其時帶と目と目と見合せれば、何故とも知らず互に胸の内を憐み、憐まれるやうな想を誘はれた。

「僕は實に濟まん事を爲ました。」　と投首をして、後は言はずに考へてゐる。

「何をでございます。」

「貴方に濟まん事を爲たのです。」

「私に？」　とお種も後は言はずに考へてゐる。

「御老人が貴方に何かお言ひなさりはせんでしたか、今日。」

「いゝえ、何も。」

柳之助は首を傾けたが、お種は別に仔細を問反すでもなかつた。

「然うですか。」　と彌訝しさうにしても、お種は矢張何とも言はぬ。

「實に僕は昨夜も貴方の所へ行かうとしたのです、二時少し前に。」

然ぞ驚くであらうと彼が思設けたほどのお種の氣色ではなかつた。

「それが、昨夜も目が覺めると、一昨夜と同じやうに耐らん心地になつて、又下に來たです。然し、貴方に御迷惑を懸けてはならんと思つたですから、酒も飲むだです、けれども少しも醉はんです。それから窮つて下に來たですけれど、貴方を起すまいと怺へて見たですが、一昨夜と少しも違はん心地なのです、それで到頭怺へられんで彼の襖を啓けたです。然うすると、實に驚いたですな、貴方の側に御老人が寐とつて、誰だと聲を懸けられたので、如何爲うかと思つたです。で、僕ですと言つて、直に二階へ昇つて了つたですけれど、後で考へて見ると、御老人は或は變に思ひは爲さらんかと思つて、それが心配で、實に是は外の事とは違ふですからな。」

「まあ、然うでございましたか、些とも知りませんでした。然し那樣御心配をなさいますなよ、御父樣も那樣方ではございませんし、又私からも能く事情をお話し申して置きますから。」

柳之助は漸く其で力を得て、

「はあ、何卒、はあ、何卒能く其事情を。」

「ですが貴方も自今は夜更けて下りて入来しやるのはお止しなさいまし。若も臺所のものにでも見られますと、……。」

「はあ、然うですとも、止しますとも！　然し、何で御老人は昨夜彼處に寐られたのですかな。」

「隠居所の方は鼠が騒いで寐られないと有仰つて。」

「はゝあ。それでは今夜は隠居所へ？」

「如何なさるか知りませんけれど、まあ貴方は入来しつては可けません。」

「無論行きは爲んです！」

彼は此點の間も始終氣にして居たが、お種は唯見た目に顔色の勝れぬのみではない、口を利くのも懶げに、頭杯の擧止にさへ力が脱けて、左右に歎息はしけにしてゐる。是で如何も無い理は無いと柳之助は考へた。

「貴方何處ぞ氣分でも不快のではないのですか。」

「いゝえ、那樣事には有りは致しません。」

「それでは何か御心配でも有るのでせう。」

「いゝえ。何故でございます。」とお種は屑と笑をしたが、其笑も其顔も曇いて力付けるやうであつた。

「何うでもないですか。嘘です、それは嘘です。」

「幾許妄だと有仰つても、然うでないものは：……。」

「其が既に嘘です。貴方は前から鬱いで在れる、僕は瞭然と見とるです。貴方が然して不愉快な顔をして在れると、僕は何だか心細いのです。氣分でもお不快のなら何も[illegible]される理は無い、御心配が有るのでせう。で僕が聞いて悪い事なら、それを聞かうと云ふのではないです。唯心配が有るのだと言つて下されば、それで可いのです。貴方が鬱いで在れると、僕も心配なのですから。」

「然して御深切に有仰つて下さるのですから、有れば有ると申しますけれど。」

柳之助も今は意を取直した氣色で、

「はあ、僕が是まで言ふのに妄を有仰る貴方でない事は知つとるです。心配などが有るのではない、而して病氣でもない、ですね？　それなら安心したですけれど、如何も無いのに如何して貴方の樣子が然う違つて見えるでせう。」

彼の問詰めるほどお種は思惱むやうに見えたのである。柳之助は更に爽氣を粧うて、

「然し、若し：ですね、貴方、御心配でも有つた時には、僕にも話して下さいよ、何卒ね、可いですか。僕は恁云ふ男ですから、何の役にも立たんでせうけれど、是でも一箇の男子です。貴方には非常にお世話になつとることは、能く記憶して居るです、忘れは爲んです。葉山君の外に僕は誰も親友が無いのですから、妻の亡くなつた後は心細くて、一層葉山君を賴にしとるです。そこへ貴方が又深切にして下さるので、僕は熟く思ふです、葉山君と貴方が無かつたら吃度病氣になつたですよ。今でも葉山君と貴方に離れるやうな事があつたら、猶且僕は病氣を爲るだらうと思ふです。」

等閑に聽いてゐるらしく粧しながら、其實お種は胸に徹へた體である。

「恁して葉山君と貴方と一所に居るのが僕は樂みなので、宛然自分の家内のやうに思つとるのです。その貴方が病氣であるとか、心配でも有るとか謂へば、僕は妻が然であるやうに心配でならんです。然云ふ場合には平生お世話になる代に僕は一生懸命で盡す精神ですから、貴方も僕を然う信じて居つて下さい。信じて下さるか、あゝ、信じて下さる？　それで僕も滿足しました。」

お種は益々勢が挫けて、悄然と非ぬ方を瞶めてゐるので、

「何だか妙に心細いやうですな。」
「貴方が餘り身に沁みるやうな事をお話なさるからです。」
　お鈴が來て、
「奥さん、御隠居樣が一寸。」
柳之助は惕息。
「貴方能く事情を言つて下さいよ。」
「可うございますよ。」
　お種の行つた後に柳之助は一方ならず胸を痛めて、今か〳〵と歸來を待てども、暇取ること夥しいので、
「是は可かん、仕舞つたぞ！　仕舞つた、仕舞つた。」
　と猿袴の衣兜に兩手を插込むで、座敷の内を搖る〻如く歩いてゐた。
　良有つてお種の出て來るのを見れば、柳之助は猶更心許無くて、茶の間へ入るも待たずに、
「如何でした。大變長かつたではありませんか。」
「少しお風邪の氣味で、腰が痛むから按いてくれと有仰るので。」
「あ〻、それで別に那話は無かつたですか。」
「御座いませんでしたとも。」
「それは可い、それは可かつたです。而して貴方用はもうお濟になつたですか。」
「い〻え、未だ參つて居らなければなりません。床に入つて在つしやるものですから、附いて居てあげませんと…。」
　お種は其を斷謝に來たらしく、立話をして直に勝手へ行つて、何やら吩咐けて、又隠居所へ入つた。
「あ〻、心配した！」　と柳之助は小机の前に坐つて、姑く苦めた呼吸を寛緩に嘘いて居た。
　爾後日の暮までお種は一度も來ずに、お鈴が折々用を聞きに見えたが、彼は一件もお鈴に頼む用は無かつたのである。
　夜食といふ頃に漸く還つて來たので、柳之助は顔を見るより、
「彼方はもう可いのですか。」
「い〻え、又晩に來て居てくれと有仰るのです。」
「又晩に？　餘程お不快ですか。」
「い〻え、唯寐て在つしやるのは御退屈なものですから、それでゞすよ。」
「それは僕も退屈ですな。」
「ですから、貴方は早く奥樣をお有ちなさいましよ。御獨身では何かに就けて不自由な思をなさらなければなりません。惡い事は申しませんから、貴方も能くお考へなさいましな。」
　思遁つたやうにお種は附端も無い事を言出した。
「貴方は突然妙な事を…如何いふのですか。」
　お種はいと〻思入つて、
「私は始終其事を考へて居りますよ。」
「那樣事は考へて下さらん方が可いです。」
「い〻え、然うではございません。」
　先からの浮かぬ顔は、若や此事を案じて居るのではあるまいかと想はれるほど、彼の氣色は此時益崩れる。
「貴方眞に如何したのですか、え〻。那樣事を心配して在つしやるのですか。然うでは無いでせう、然うだと僕は困りますよ。ねえ、如何云ふのですか。」
　心配せぬ事は無いとばかりで、詳い事を話す間は無くお種は又隠居所へ行かねばならぬのであつた。
　迹に柳之助は左や右と凡そ考へ得られる限考へたが、お種が彼程に心配するのと自分の身の上と、如何なる關係が有るのか、無いとよりは考へられぬ。今に見えたらば懸言つて聞かうとまで心算をして、待つたが、待つたが、一向出て來ぬ。其内に神共が遽に犇き散すのを、何

か[illegible]へ[illegible]夜具を運ぶのである。[illegible]何いふ事になつたのかと柳之助には[illegible]無[illegible]様子を見に起てば、今夜はお種が隠居所に泊るのと知れた。

翌日もお種は隠居所に[illegible]切つて居るので、柳之助は帰ると直に見舞に行つた。老人は床の上で新聞を見て居たが、彼の[illegible]を聞附けると、急に眼鏡を脱して[illegible]巻を引被けて、彼方向に横になつて居た。柳之助が入つて来て、[illegible]を[illegible]ける迄は、

「何、大した事は無いので、[illegible]時々腰が痛むでなりません。」

と云ふ挨拶であつたが、如何様病人といふ血色でもなければ、大した事は無いのであらうと柳之助は思つた。と[illegible]にお種は居る、茶の間へ[illegible]つた所で面白くも無いのであるから、暫らく[illegible]で[illegible]たが、老人が[illegible]と目を[illegible]いて、始終自分を見てゐる。[illegible]が[illegible]前に陰鬱い[illegible]に向つて、[illegible]心が好くたい。のみならず、お種と[illegible]のやうではなくて、人目を[illegible]れるやうで[illegible]、[illegible]々しくして[illegible]老人の[illegible]つてゐる[illegible]色が無[illegible]に[illegible]ぜられると[illegible]て、[illegible]は[illegible]から[illegible]たと[illegible]められた[illegible]時の[illegible]色も[illegible]めて[illegible]であつたらうと考へると、もう居耐らずに、此を出て了つたのである。

此日から引続いて三日と云ふもの、勇の腰の[illegible]は去らぬであつた。[illegible]お種は其[illegible]の傍に、[illegible]も及ばず、[illegible]で[illegible]頭に附添つて、[illegible]るさへ[illegible]を離れられぬので。

日に一度づゝ柳之助は見舞に行つてあるが、病人の容態にも血色にも少しも[illegible]は無くて、[illegible]ねれば何時も同じ事を同じ調子で挨拶すばかり。

「どうも時々腰が痛むでなりません。」

而して不[illegible]の[illegible]色で[illegible]の穿くほど[illegible]てゐられる。其はなかなか、実言を云はれるよりも柳之助の胸には[illegible]へるのである。

[illegible]しいながらも、不足ながらも、柳之助は是まで無く茶の間に独り勉強して居た。[illegible]に用があつて出て来る女中にはお種の一寸でも[illegible]るのを心遣にして。それも乙鳥の[illegible]ぶやうに、来るかとすれば直に行くので、[illegible]よりは[illegible]を交す間も無い。而して[illegible]の[illegible]所々々しさは、[illegible]来たのかと[illegible]時は[illegible]はれるほどであつた。[illegible]人と[illegible]する老人の[illegible]は何[illegible]不便さうに見えるでもなくて、[illegible]を[illegible]る人でも[illegible]つて[illegible]しげに[illegible]れて居るのが、心に懸るから[illegible]れに、[illegible]が足りぬ所[illegible]だれて、[illegible]の[illegible]ふほどは[illegible]人の苦にもして居られぬ様子。

其後は此始末で[illegible]々話す折も無くて、彼が午後の四時から十時まで[illegible]で寂しく送つた日も四日になつたのである。幸ひに其間は夜中の[illegible]も無く、[illegible]の夕暮も無くて、彼の[illegible]は[illegible]めて平穏に過ぎたが、気になるのは老人の眼色、[illegible]じられるのは、お種の[illegible]色、茶の間も今は[illegible]む木[illegible]に雨の[illegible]るやうで。

十一の一

[illegible]日の午前[illegible]山は[illegible]に帰宅した。今日とは思ひも寄らず無事な顔を見たのであるから、お種に何とも[illegible]はれぬ[illegible]であつたが、[illegible]も無く[illegible]つて来たのが、場合が場合ゆゑ気[illegible]で、早く何かの様子が聞きたいと思へば、一寸[illegible]居所へ[illegible]間に行つたのが、急に[illegible]て、行つて見ると、暫く外すやうに[illegible]附けられた。さてはと思へば情無い、けれども[illegible]の上の事であれば、一先其の[illegible]へ[illegible]つて、[illegible]を遊ばせながら如何に成行く事かと、其の[illegible]一つを案じてゐたのである。[illegible]一時[illegible]も[illegible]めぬて、[illegible]から[illegible]の[illegible]つた様子。お種は其間[illegible]の上を[illegible]るやうな[illegible]を[illegible]たが、[illegible]て入つて

來る夫の姿を見ると、忽ち冷い汗に滲むで、身が竦まるかと震へる。
「異變も無かつたか。」と例の元氣な調子で、「坊主如何した、如何した。やあ、綺麗に剃髮が剃れてゐるな。」
と保を引抱いて、其頰へ口も鼻も一所に推込むやうに吸付く。
「電報を打つと有仰つたから、毎日御便を待つて居りましたのに、餘り不意なので吃驚しました。貴方も御變はございませんでしたか。」
「異變は無かつたが、不美い飯ばかり吃されるのには弱つたよ。」
保を抱いたまゝ葉山は其處に坐つて、
「異變は無かつたが、不美い飯ばかり吃されるのには弱つたよ。時に鷲見先生は如何した。」
言ふ方は何の氣も無かつたのであるが、先生と附けられたゞけにお種は辛かつた。
「此頃は大相御氣分も快いやうです。」
「何だかお前顏色が惡いぢやないか、如何した。」
「心配な事がありまして……貴方御父樣からお聞でございませう。」
大事に成るか、事無く濟むか、夫の愛の一言で善惡ともに定ると思へば、息も苦しくお種の胸は波立つ。
「はい、承はりましたよ。」と笑つてゐる。
「[illegible]な事ではございませんよ。」
「どうも飛んだ事でしたな。」
お種は獨り途方に昧れて、
「貴方、笑談ではございません。」
「然し御樂だつたね。」
「何と有仰る？」と餘は力一杯に夫の顏を噴めた。葉山は手を持添へて慌忙しく保に顏を隱させながら、
「おゝ可恐い、おゝ可恐い。鷲見さんとこの嬶さん可恐い〳〵。」
餘りの惡洒落にお種は腹立てゝ、
「貴方、子供に那樣事を！　坊やは此へ御出、御母樣の所へ御出。」
手招をすれば保の起たうと爲るのを、
「行くのぢやないよ、お前なんぞが行くとお邪魔になるから。」
衝と寄つてお種は物をも言はず保を引離す。
「これ、手暴な事をしてくれるな、俺の子だよ。」
「もう那樣事は可うございますから、御父樣は何と有仰つたのです。」
「種々有仰つた上に御立腹と來て居る。御父樣の御立腹は大變なものだ。」
夫の言ふ事は一々茶にしてゐるので、他の心も知らず餘りに情無い、と思つて、お種は有[illegible]に[illegible]然として、それなり口を閉ぢて了つた。
暢氣で居るやうには見えながら、葉山の肚の中はなか〳〵然うではない。窮つたのは柳之助の始末、年寄は捨二無二柳之助を出して了へと迫る。彼とても飽くまで二人の間を疑ふではないが、又余然と疑はぬでも無く、左右は若い同士であるから、間違の無い内にと云ふので、年寄の事とて其には其で種々取越苦勞をしてゐる。段々聽いて見れば一應有理で、自分は決して那樣馬鹿げた事のあらうとは思ひも付かぬのであるが、其思ひも付かぬのが即ち間違の因ではないか、と嚴しく極付けられたのである。
今更柳之助を出す？　誰が連れて來たのかと謂へば、元來自分が男氣で、當人の進みもせぬものを引張つて來て置いて、今になつて都合が惡いからとて出されもせぬ。其都合の惡いのも、他の事と違つて、（家内と怪しいから）は前の男氣に對しても餘り意氣地が無さ過ぎる。其も事實に相違無いとならば是非にも及ばぬけれど、と葉山は彼の無言の內散々思案をしたのである。
「それで笑談は舍いてだ、御父樣は如何しても鷲見を出して了へと言ふのだ。」

「それでは御父樣は猶且疑つて在つしやるのでせうか。」

「それは、滿更疑はないのでも無からうよ。」

「…………。」

お種は脣を咬むで熟と俯いてゐる。

「一遍は聞いたが、一躰まあ如何いふ經緯になつてゐるのだか、お前からも樣子を聞いて見なければ解らない。如何いふのだ、そも最初の始はよ。」

「又那樣事を有仰る。」と苦い顏を爲るのを葉山は尻目に掛けて、

「這麼事を言つてゐる內は確なので。俺の酒落の息の根が止るやうぢや大變だ。」

言はれて見れば成程と思つたらしく、お種は返す詞も無かつたが、旋て後は其後の柳之助の樣子から、身に見付けられた迄の留守中の有躰を細密に話したのである。其一々は總て年寄の見た所と無はない、して見れば、二人の關係も、一人を知つてゐれば然も有りさうで、聊も疑ふ所は無いが、知らぬ年寄の其を見ては疑ふのも無理は無い。右も左も有理で葉山は益々處置に窮した。

若し長く彼人を內に置くやうでは、俺が不安心で夜の目も寐られぬ、と年寄は言ふ。然うかとて、柳之助に無き名を負せて出されやうか。

「何とか巧い工夫は有るまいかなあ。」

可憐しげに思凝してゐる夫の顏を見れば、お種はなか〳〵茶にして相手に爲れぬよりも辛い。

「お歸り早々誠に如何も濟みませんです。私も御父樣には面目なし、鷲見樣には又お氣毒で。」

「而して鷲見は些とも知らないのか。」

「私は全でお話をしませんのです。」

「けれども大概樣子で氣取つてゐるだらう。」

「とは思ひますが、御父樣の御病氣が長いもので、それは每日氣にして御訪ねなさるから、實に御氣毒でなりません。」

「いや、其調子ぢや間男は覺束ない。」

「貴方、那樣可厭な言を仰有るな、私は慄然とします。」

「いや、那樣使用ぢやお前も猶且……。」

「あゝ、もう貴方……。」

十一の二

事の無實を知りながら捨置いて、老父には柳之助を疑はせ、柳之助には老父を恨ませるのも不本意の至、成らうなら圓く納めたい葉山の了簡で、再び父親に向つて、柳之助の爲人から悉しく說始めて、有つた事の怪むべきも、彼として決して怪むべきでない理を、段々咬むで哺めるやうに聞かせたのであるが、老父は金輪際不承知で、幸ひに間違は無かつたにせよ、今後の安心がならぬから、是が非でも彼人は謝絕つて了ふやうに、と恐らく動かし難い老の一徹、葉山も今は爲方無さに、柳之助に打明けたのである。之を打明けるには葉山は隨分工夫をし、加減をして、他を傷けぬやうに、氣にも障へさせぬやうに、卽かず、離れず、柔かに義理を責めるのであつた。言はれゝば柳之助も其疑を受けて是非無い覺は腹に在る。何彼は常に老人の眼を陰に憚れてもゐたのであるが、斷然然うと打出されて見れば、身に取つての大侮辱である。

「怪しからん！ それは僕が老人に會つて辯解する――辯解すれば解る事だ。」

柳之助は一圖に赫として、目色も變へて、上聲になつてゐる。葉山は故と綽然構へて、

「老人が敵手になるものか。それだから私が謝るやうに情實を言つてゐるのぢやないか。――君の云ふ事は僻つとる、老人の言ふ事が解らんのだ。怪しからんぢやないか、考へて見て、、

誰が、僕が那樣馬鹿な事を爲る人間であるか、ないか。僕の料簡を如何してくれる。餘り怪しい事を言ふ、——何が怪しからん事を言ふ、ふのさ。疑でもさ、疑でも餘り怪しからんぢやないか。此に置かれんと云ふなら出る。僕は出ます、出ますとも！ 今直にでも出るけれど、此疑を霽してもらはん内は僕は殺されるとも……。」

「誰が殺すと言つたよ、それこそ怪しからんだ。さあ、誰が殺すと言つたか、それから聞かう。」

「それは譬ぢやないか。」

「あゝ、譬かい。それほどの決心だと云ふ譬だね。然すると、愚父に會つて辯解しても、疑を霽さなかつたら如何するい。私の親父を刺殺して返す刀で君も死ぬかい。」

「如何に疑でも餘り情無い、名譽に關する事を……。」

「それは極つてゐるよ。愚父を殺して君も死ぬ氣か、如何するのだ。」

「僕は何も那樣氣は。」

「無けりや會ふのは無駄だよ。愚父だつて其を疑つてゐるのぢやない、間違でもあつては成らないと、那云ふ事が有つたものだから、取越苦勞をしてゐるのさ。」

「いや、たゞ疑つとるに違無い。僕は殘念だ。」

「那樣解らない奴が有るものか。もう疑ひませんと、愛に歴とした證人が居るのに、好き好むで疑はれたがらなくても可さゝうなものぢやないか。うむ、疑つてゐるから辯解に行かうと云ふのだね。」

「然う。——」

「で、疑を霽さなかつたら如何する。」

「僕は屹度霽して見せる。」

「幾許此方で力むだつて、天氣と疑ばかりは先方から霽れるのだ。」

「如何あつても霽れんけりや其迄で爲方ないけれど、那樣疑を受けとつて僕は一言も言はずには居られんから、一言はしてくれ給へ、ねえ、一寸會してくれ給へ。」

行かうとする、遣るまいとする。物音に雜つて高聲の聞えるのを、さてはと茶の間に居たお種は心も心ならず、急いで階子の口に來ると立聞をしてゐたのと覺しく、婢等の慌てゝ臺所へ逃込む後影を見付けた。

柳之助は止められるのを振拂つて降りやうとするのを、葉山が詞忙しく宥める——肯かぬの問着の最中へお種は駈着ける。一目見るより柳之助は、

「あゝ、奥さん！」 と言つた限で潸々と涙を墜す。

「貴方まあ如何なすつたのでございます。」

とお種は氣遣はしさうに進寄れば、今の今まで激してゐたのが、恰も火の消えたやうに萎々と、柳之助も進寄つて、

「貴方には濟まんですな。僕の疑はれるのは爲方は無いですけれど。貴方にまで御迷惑を懸けては、僕は實に申譯が有りません。」

彼は潤む目を擦へて、急來る涙に咽ばされる。

「いゝえ、私は。」 と口には言つても、最前の甲男に言はれた一言の無念さた溢出して、其時は怺へた涙が今となつて不覺に睫毛を濕したが、夫の前を憚ねて熟と辛抱してゐれば、怪しくも少時語が途切れる。葉山は其躰を流眄に見て、

「お前が何で泣くのだ。」

「はい。」 とお種は忍びやかに瞼を拭く。

「妻君だつて猶且殘念だね、殘念さ、殘念でなくて、之が殘念でなくて、如何するものか。」

と柳之助は二の腕に顔た押付けて歔欷をしてゐる。其を見ればお種も猶更誘はれて、佇と無く、悲が充迫る。泣くまいと爲れば物が言は

れず、言はずには此場が濟まず、せめては涙を飲むで、氣の取直されるまでと俯いて居た。此間に介まれては、葉山も有繋に手を束ねて茫然するより外は無かつたが、

「然う殘念がるほどの事は無いのだよ。誰が甚麼に疑はうとも、私といふものが信じてゐたら、是程確な事は無いぢやないか。君にしても、お種にしてもだ、無い肚を探られるのは、それは殘念だらう、當然だ。然し、又愚父の身にもなつて見給へ、私の留守中と云ひ、夜間夜中お種の寐所へ男が這つて來るのを心配しずに居られるものか。内の愚父ばかりぢやない、誰が聞いたつて、此奴は變だと思ひます。謂はゞ君の落度だもの、本來なら私が先立になつて爰は言分の有る所だ。その御本尊が如何だらう、恁して謝り入つて情實を話してゐるのに、未だ殘念だの悔しいのと、君も泣けば、お種も泣くなら、如何とも兩人の勝手に爲るが可い、其方が然云ふ解らない了簡なら、此方も沒分曉漢になつて、精々兩人を疑はうし、君のお宿も拒絶れば、お種も一緒に叩出して了ふから、然う思ひたまへ。」

柳之助は驚き、お種に擬れて、一齊に語を出したので、何方が何と言ふのやら、混じて更に解らぬのであつた。葉山は其を打消して、

「愚父の疑ふのは有理だと私は思ふのだ。然し、其は愚父としては有理だが、私としては有理でないから、能く解るやうに愚父には話をして、それで愚父も全然疑は霽れたのだ。疑は霽れたが取越苦勞だ。萬一の事が有りでもしたら回復がかないから、有りはしまいが——其處が年寄の愚痴と云ふ奴で致方が無い。俺の氣を安める、生先の無い俺を喜ばせると思つて、何よりの孝行だと思つて、今度の事は俺の言分を通さしてくれと云ふ愚父の賴なのさ。考へて見ると隨分念入に家暮な賴だけれど、何しろ親だ。此を能く聞分けてくれないぢや情無いよ。愚父の心にもなりさ、又私の身にもなつて、一番考へてもらひたい所だ。這麼に言つても解らないなら、如何も爲方が無いから、少し古風か知れないけれど、二十四孝と行くのだ。親には換へられないから、友達と女房を棄てる覺悟だ。さあ、如何だい。」

爰で確に急所を抑へて、葉山は依然と銀煙管を九十度に啣へて、もう此方の物さと云ふ態。

濡衣とは謂ひながら、罪は全く己に在るものを、假初にも累を恩人に逮ぼすやうでは、道が立たぬのみか、第一に心が濟まぬ。剩さへ彼は四五日の前お種に向つて、貴方の身に事のある場合には、平生お世話になる代に一生懸命で盡す精神であると言つたのである。今お種の身に事のある場合、而も其事と云ふのは、自分から起つたのであれば、甘むじて汚名をも受けねばならず、無念などは勿論忍ばねばならぬ。又一方には、事を分けた葉山に對しても、爰は己の立てられぬ所と、終に柳之助は觀念して、日頃自分の爲に惡かれとは思はぬ葉山の計畫に任せて、穩便に片付くやうに賴む旨を答へた。

夫の理に責められて、舅の暴い氣色も無く、何も言はずに一切を打委せるとは、然ぞ口惜しからうに能くも可憐くと、お種は彼の性質を識つてゐるだけに、其胸の切なるは幾許かと思遣つては、我ながら恔情無く涙を誘はれて居た。

傍でお種に泣かるれば、いとゞ増すばかりの涙の中で柳之助は、

「それでは僕はもう此家には居られんのだね。」

是が昨日まで生涯此二階で暮すとて喜むで居た人の言である。之を繰返しては屢々喜ばれたお種の悲さは胸を衝いて、力限にハンカチイフを顔に押當てながら、

「私は厭に、誠に濟みません。」

「貴方に然云ふ事を言はれては、僕は何と言つて可いのか、實に――實に――實に……。」

「いゝえ、私も心着かなかつたからでございます。」

「何爲、考へて見ると、僕が惡かつたのです。」

「私が致らなかつたので。」

「全く僕が不注意でした。」

「いゝえ、私も……。」

「それは無論僕が……。」

二人は一所に又潸々と泣く。

「何方でも可いよ、今更那樣事は。お種はもう下へ行きな。あゝ見つともない其顏で、窓へでも行つて干すが可い、何なら池へ行くと龜の子の伴がある。鷲見も好加減に爲ないかよ。何だな、何時までも不景氣な顏をして。

おい、乾いたかね、其方の人は。宜しければ下へ行つて御酒の支度だ。愁嘆場は是で幕の、後は陽氣さ。

さあ〳〵一盃飲みながら、話もあるのだ。」

葉山は例の可笑く其場を紛らして了つて、酒の間に段々語を盡して言慰めたのである。他事なき彼の心底と、旧に變らぬ實意と、久ぶりの洒落とを聞けば、柳之助も彼の前には無念も悲も無い。折から鷲見へ郵便とて婢が持つて來る一通。

「あゝ何だらう、類の姻家からだ。」

「はてな……あゝ解つた。色男め！」

「何だ！」

「何だぢやないよ、お島さんが寄來したのさ。色男、色男！」

「止したまへ。」と狀袋の横端を邪慳に引切つて、早速披いて見て、

「はあ、お島が結婚すると。其を知らせて來たんだ。」

「然うかい、それはお目出たい。如何いふ所へ適くのだね。」

「何處ともしてないが、那麼者を娶ふ奴が有るかなあ。」

をはり

葉山の住居から一町許り隔てゝ小綺麗にしてゐる上等下宿がある。柳之助は一先其に引移ることに取極めた。近廻を擇むだのは、一つ家にこそ居ずとも、今迄通り世話にもなりたければ、二階と下ほどの往來もしたいので。

事の起るまでは然も無かつたお種も、いよいよ彼が出るとなつてから、遽に離れ難い心地の爲るやうでもあつた。其と云ふのが、日頃柳之助は自分を姉のやうに慕つて、一も貴方、二も奥樣と事毎に相談をしては、殆ど自分の言ふ言に用ゐぬは無い程であつたに就けて、那樣にも可憐い心立の人に、今更別れるのを情無く、且は出て行く身をも察して見れば、其も可哀やら何やらで、如何成るか解らぬ内は心配をし、事が極れば、次いで物思はしい日を送つたが、葉山が歸つて五日目に柳之助は終に疑の門を出たのである。

大方婢等の仇ない口から洩れたのであらうが、近所では兩人の間に惡い事でもあつたやうに噂を爲る者もあつた。

轉居した其夕方から柳之助は遊びに來たが、次の日からは降つても照つても毎日一度づゝ訪ねて來ぬことは無い。お種も自から心待にして、好きな物でもあれば、必ず取つて置くやうに爲るのである。

下宿の床の間には正面にお類の肖像畫を飾つて、胡麻竹の井字の寫眞掛に保を連れたお種の立姿が床柱の花入の釘に掛けてあるばかりで、幅も無ければ花も無しに。

（三十年七月）

二人女房

上の巻

一

芝露月町の藤の湯とある長暖簾を推分けて。（淺々とも清き流の杜若）と。出湯のありさうに濡れたる女子二人。いづれも長湯に茹ける顔色は瑩々と湯々。髷の高島田に髪飾も同じ好み。年長けたる方は。容貌優れて麗しく。十九ばかりなり。他は一歳も年少と見えたるが。女子には厚肉過ぎて。色さへ白からず。額の左に寄りて。薄けれども三日月形の創痕あり。

美しき方は聲まで清やかに。辯舌爽快にして。口數多く作らぬに愛嬌具りて。人を逸さぬといふ性らしく。美しからぬ方は口重く。常に物案じ顔なる陰性に。年齢よりは更けて年長の様なり。

「鐵ちやん。お前の帯は彼だから可いけれど。」

と舌打して。

「可厭だねえ。私のは。衣服が好くつたつて。帯が悪けりや。依然引立ちはしない。どうか仕様が無いかねえ。」

年少のお鐵は石鹸を包みたる濡手拭にて。小鼻の傍に玉なす汗を一寸拭き。

「あの帯で可ければ貸事をしやうか。」

「然してくれゝば私の方は可いけれど。お前が窮るぢやないか。」

「私や構やしない。」

「構はない！　そんなら後生だから然しておくれな。其代お禮をするよ。そら彼の海鼠絞の半襟を。」

「屹度？」

「屹度さ！」

「また嘘かも知れないから。いつそ約束をしない方が可い。」

と呟くやうにいふ。

「可厭な女だよ。折角他が深切に上げやうといふのに。」

「でも。此間の半襟も。お流れになつてしまつたぢやないか。」

「だから彼の半襟は。上げられない理由をいつて。あんたに謝罪つたぢやないか。あの事もあるし。帯の事もあるから。今度は屹度あげるよ。」

「有難う。」

談切れて。無言にて五六間行く。

「姉さん。もう何時だらう？」

「もう九時だらう。」

と言はず語らず急足になる。姉は思ひ出したやうに。

「あの。お四季施は何方のお見立だか。華美でなし。質素でなし。實に好い柄ぢやないか。織も好いね。一寸見ると完然お召縮緬のやうだよ。」

「大層立派なものを下すつたね。」

「だつてお前。孟蘭盆と若様の御卒業の御祝と。御祝宴の御手傳のお禮と。三件兼ねてるのだもの。」

「若様の御卒業遊ばしたのは法律だとね。ぢや代言人だね。あんな人柄のお方でも。代言がお出來遊ばすかねえ。」

「代言人だつて人の惡い代言ぢやないんだよ。」

「それぢや上等の代言人様だね。」

「ほゝほゝ。様付にしなくつても可いぢやないか。」

「だつて若様の事を呼捨にしちや勿躰ないよ。」

言葉遣ひを氣をつけないと。お母樣に叱られるもの。」

姉は苦笑をして。何か言はむとする時。通りかゝる男に眤と顏を視られ。少し橫を向いて遣り過し。

「お名前でもいふんなら。樣付にしなくつちやならないけれど。何も代言人といふのに樣が入るものかね。代言人樣といふと。何だか隣家の勝目の三百にも樣を付けてやるやうで可厭ぢやないか。」

「さうね。」　と肚裏では隨分可笑かつたやうな顏色。

此二女子は某省の極く卑いところを勤める丸橋新八郎といふ士族の娘にて。姉の名は銀。妹は鐵。容貌は羽子板の裏表。似てはゐねど同腹にて。姉は父親似。妹は母親似なり。

新八郎は桐村家三代の家來筋にて。今も律義に主從の禮を執つて繁々伺候すれば。同家にても至極心易く思ひ。事ありて人手の足らぬ折は。いつも此同胞を借りて重寶するを。此方は結句有難い事におもうて。お邸へ〳〵と榮譽にして吹聽するほどなれば。此度も桐村の若殿忠準の卒業祝宴に大客をするとて。例の如く手傳に招ばれたるなり。

母親にお銀の立てる後に廻りて。帶を結むで遣りながら。

「奧樣にお目に懸つたら。頂戴物のお禮をよく申上げなよ。」

「あゝ。」と帶揚の結餘を。帶の中へ挿みこむ。

お鐵は自身の容貌の醜きを識りて。餘り念入に化粧するを悅ばず。さればとて塗らねば母親に叱られるゆゑ。申譯のしるしに一寸〳〵と塗りたれば。生地の黑いが衣服を着更へたゞけ目立つて。姉とならべるとお孃樣と下女の如し。

母親は見かねて。

「鐵や。お前の白粉は薄いよ。」

「私や餘り濃いのは可厭。」

「濃くなくつても可いけれど。それぢや餘り薄くつて。傳けたのだか。傳けないのだか。知れやしない。最ちつとお傳けよ。私が今手傳つてあげるから。」

「澤山ですよ。これで。」

と急遽帶を結めに懸る。

「鐵ちやん一寸此方を向いてごらん。」

「もう澤山だよ。」

「澤山ぢやないよ。」　とお銀は手を伸して。お鐵の肩を摑まうとする。

「あれ凝然としてお在。」

後から母親に引張られて。「ほゝほゝ。」と姉の笑聲に。壁を向いて帶を結めてゐたるお鐵は。一寸と此方を向くを。お銀は一目見て。

「あゝ眞箇に薄い。もつと傳けておもらひよ。」

「澤山だつてば。」

「澤山な事があるものかね。」

と母親は衝と行つて。お鐵の結懸けたる帶を捉つて。無理に鏡の前に坐らせる。

「年齡のいかないものゝ白粉の薄いのは。生意氣で下品なものだ。ましてお邸は厚化粧だから。矢張濃くなくつちやいけないから。」

と最一層塗れば。塗られる間も頻に氣にして。鏡の方ばかり向きたがる。

「其方ばかり向いちやいけないねえ。」

と小言たら〳〵大分厚塗して。

「さあ御覽！」

「あら。宛然妖怪のやうだ。私や可厭。」

お銀は鏡の中を見込むで。

「そんな美しい妖怪があつて堪るものかね。」

「姉さん多度おいひよ。」　とお銀を流眄に懸けて。

「そりやお貴孃はお美しうございます。」

「あら可厭な。」　と流眄に懸け返して。

「ねえ。お母樣。ちつとも妖怪の事はありやしないねえ。」

とお譲らしい銀金具の。帶留をぱちんと懸ける。

「白粉を傅けて妖怪なら。先刻見たやうに傅けないくらゐだつたら。なほ妖怪だ。上つ方の前へ出るのに。白粉を傅けないのは。此上もない失禮だよ。官女方を御覽な。私のやうな年齡をしてゐる方でも。みんなお化粧をしてゐるぢやないか。」

といひ〳〵火鉢の前に坐りて。煙草を吹しながら。我娘の容姿を心嬉しく眺めてゐたりしが。とんと吸殼をはたき。指頭を袖口に卷きて。

「お〻熱い。」と額際の汗拭き。

「銀や。お前の襟は餘り後着いてるよ。」

お銀は鏡の前へ行きて。一寸襟に手を懸け。

「此頃は後衣紋は流行らないよ。」

「でも餘り後着いて〻。何だか可笑いぢやないか。鐵や。一寸此所へおいで。下前が下つてる。」と上前の褄を少し引いて。

「懷中から手を入れて少しお引張り。あ〻よしよし。」となほ飽かず。

二人の容姿を見較べて。

「人力車の來るまで其處へお坐りな。」

同胞は人形のごとく取繕らて坐る。母親は左視右瞻。

「まことに好い衣裳だよ。よく似合ふ事といつたら。」

お銀は大事さうに疊みたる絹の手巾を取出して。胸のあたりを扇ぎながら。お鐵の髮を見てゐたりしが。窓より來る風に鬢の毛一二本解れたるを撫でつけてやり。

「今日の髮は好く出來たね。お母樣。」

「まことに上品で好いよ。」

がら〳〵と車の音の。門口に止りたるに。三人齊しく振向けば。格子戸開きて。

「へえ。お車が參りました。」

「そらつ。」といふ聲の下。どたばた。ばたばた。

二

築地なる馴染家にては。晩涼よりの宴會にて。當日の上客は。伯子男の華族十餘名。外に一族諸士五十餘名。廣間の簾を高く揭げて。風を入れ。庭を見せ。葉陰の燈籠三箇所に火を入れて。月影を池水に映し。小華嚴といふ瀧の前の岩陰に灯を伏せて。座敷より遙に玉なす水を見せ。縁より遠からぬ萩山の叢莽に蟲籠を忍ばせ。松蟲鈴蟲の聲々時に亂れて。客に扇をつかはせぬ接待の趣向。衆人杯を片手に見晴す折から。四阿の後に聳ゆる老松の梢に十八日の月の懸りたるは。一段の馳走なり。來賓總代として某伯爵が簡單に卒業の祝詞を述ぶれば。忠準答辭をなし。一族總代の祝詞。藩士總代の祝詞。之にも答辭ありて。滿場拍手の裏に表向の儀式が濟めば、席上は上客より亂れ始めて。浪の碎くるごとく。末席の方も次第崩れかゝる頃。無禮講にして賑かに。とある家令の懇意に。此上はいづれも君の御爲討死といふ覺悟で。いよ〳〵亂酒になる。

席の末の方に柱を後にして。大禮服をいためつけて。白リネンの胴衣に黃金鎖を山形に懸け。頭の括れるやうな前折の衿に。針は黃金の浪に短と見せたる紅玉を嵌ませ。襟になるほど袖釦の煌々は金無垢の征駒。目貫の直し物と見えたり。年配三十六七。大肥として。色は濃く。毛頭渦卷く癖あり。口髭は束ねて取附けたるごとく。硬くして長く黑く。眉毛は小氣味よく一文字に際立ち。團栗眼に一種の光を帶びて。顏色は古りたる素燒の如し。實印を彫りたる黃金の指環を小指に穿めた

る。左手の拇指と中指と薬指との三本にて。ハバナの太卷を輕く持ち。かの一種の光ある眼を傾てゝ。始終お銀の擧動に注ぐを。隣席にゐる藩士山口昇といふ中老漢が認めて。

「御意に召しましたか。」　と突如に囁く。

黄金鎖。黄金鈕。黄金針。黄金の指環と。黄金づくめの紳士は某省の會計課長にて。囁きしは屬官なり。

（御意に召しましたか。）と星を指されて。澁谷課長は悖然。然あらぬ躰にてぎろりと山口に瞳を轉じて。何とも言はずに微笑を含めば。山口は（で御座らうがね。）といふ面色で。

「あの紺飛白の……今立ちました。彼で……。」

と扇子の尾で指せば。澁谷は大く空笑をして。

「まあ一盃差さう。」

と麥酒の硝子盃を山口の前に置く。

「これは。」と一寸戴き。前列に酌をしてゐるお銀を呼寄せる下心にて。

「一寸お酌を。」といへば。お銀が振向くと齊しく。横合からする〳〵と來て。

「麥酒でございますか。」

と壜の銃口を向けたお敵は。名もなく雜兵といふ面體。但し甲冑は目指せし御大將と同じく。此家の小間使にてお種といふ蓮葉なり。

澁谷は山口と眼を見合せて。竊に苦笑を取交はせ。餘所を向いて煙草をふかり〳〵。知つた顔ゆゑ。山口は折角酌に來たものを素氣なくもしかねて。

「お酌は實にお種さんの事だ。」

空々しい愛想に澁谷はくす〳〵と笑へば、山口も可笑くなつて。くすくす。何だか理由は解らねど。二人が笑ふから。お種もくす〳〵。

山口は左手を衝いて右肩を斜に突出し。ぬっと頭を伸して。

「お種さん。」

「はあ。」　と肩を搖かして顔で嬌態をする。

「あの娘ね。」と頤で掬つて眼で見當をつける。

「どれでございます。」

「其さ。」

「お銀さん？」　といふ聲が大き過ぎたので。我を呼ぶのかとお銀は振向いて。

「何御用？」

「いゝえ呼むだのぢやないの。」

「然う？」　とまた後姿になる。

お種は聲を潜めて。

「あれで御座いますか。」

「さうさ。あれはたしか御家來の？」

「はあ丸橋といふ……。」

「うむ。」　と反身になつて。「さうだっ。」と膝を拊つ。

「大層感心あすばしまのすね。」

「なか〳〵別品だね。」　と扇子ぱっちり。

お種は手巾を口に當てゝ。首を縮め。

「ふゝふゝ。」

「何を笑ふんだ。え。何が可笑しうござる。」

「でも貴下は御前樣の前だと。苦い顏をして眞面目な事ばかりおっしゃってゐらっしゃる癖に。今夜に限つて否な事をおっしゃるから……。」

「酒を飲むと誰しもかうなるものだ。」

「虛ばっかり。」　と樣子笑をする。

三

山口は用ありさうに眞面目になつて。

「時にお種さん。」

「はい。」　と釣込れてお種も眞面目になる。

「あの娘のお酌といふので一盃飲みたいね。」

お種はついと傍を向いて。

「多度召上りました。」

「はゝは。一盃願ひませう。美しいのに。」

と猪口を出したは。餘程御機嫌を取る氣なり。

「御遠慮なく……。」　とお種は膝の上に手を

重ねて。ちんと澄す。

此處山口昇大世恨の氣味合にて。頻りに猪口を荷にして。お種の顏色を覗つてゐる。お種は何と思つたか、銜と銚子を持つて。

「どうせ私のやうなお多福のお酌では……●私は彼方へ御遠慮申しませう。」

腹を立ちましたよ。はい。眞箇に腹を立つたんですよと言はぬばかりに。くつ〳〵と口を搖かして傍を向いて凛然と立懸ける袂を。寶してなるかと山口が提へて。

「さう何も怒らんでもいゝぢやないか。」

「あら可厭な。怒りはいたしませんよ。」

「怒らんなら。そんなにぷり〳〵せんでも……。」

「どうせ心太の拍子木でございます。」

「これは御挨拶だ。」と少禿の頭顱を撫でゝ。

「まづ其處で中和にお酌を。」と盃を出して。お種の顏を覗いて。

「實はね。あの娘の……何といふ名だえ?……知らない? おや其知らんちやんのお酌で。私お飮みたいなんぞつて。さう〳〵さうした譯ぢやないのさ。此方が。この澁谷さんが……のお酌で是非……。」

といひ懸けると。澁谷はとんと山口の肩を撞いて。

「怪しからん事をいふ。我は知らんのだよ。」

とどういふ氣でか眞顏に辯明する。其顏をお種が見て。くつと可笑さを飮込み。此面相ならば。とでも思つたのか。但しはお銀を玩らうとでもいふ了簡でか。後を振向いて。

「お銀さん〳〵。」と呼びかけて一寸手招をすると。

「何?」といひながら來て。山口の正面。お種の隣に坐る。其手をお種が矢庭に提へて。

「山口さん。御執心のお銀さん!」

「いやなお種さん。」とお銀は羞かしさうに横を向く。山口は澁谷に一寸目授をして。

「いやお銀さん。」と透さず斫懸けると。お銀は窮屈さうに會釋する。

「一杯戴きませうかな。」

「お酌を……。」と銚子を持つ●

「結構々々。」と猪口を出しながら。お銀の顏を偖貝に大概測量して。一寸氣を變へ。

「澁谷さん。お銀さんのお酌といふので御一盃如何でございます。」

澁谷は故と然あらぬ顏で。冷淡に「可から。」とばかり。なにも言はず、[illegible]にぐつと猪子盃を差出せば、お銀は膝を斜に向けて。少し顏に倚つて酌をする。

見たいと思ふ人の正面に坐るなの格言の通り。澁谷の烱々たる巨眼も。此場には平生の力を失つて。猪口を出す。盃を出す。其瞬間に瞥見したばかり。年効もなく羞かしいといふ氣味で。好加減に盃を引いて。口に持つて來て。飮みながら盃越に可厭な眼をして睨と視る。お銀は山口の顏色の可笑らしいのを早くも見て取つて。浮氣と惡く思ひゐる箭先に。さなきだに好かんたらしい眼光の澁谷に秋波を注がれて悚然として。何となく居心の惡さに立たうとすると。お種が袖の下で手を引張つてゐて一向放さず。立たうにも立たれず。居るのは快くないし。進退維谷つて谷且してゐる。

澁谷は飮みながら是ぞ好下物といふ顏で。お銀の容貌を耽視する眼から。例の刺す如き光は射せど。それと和してまた名状すべからざる一種異様の光の見えるのは、恐らく其刺す如き光の（愛）に蕩けたるならむ。と難解く言へば謂ふのなり。

話次分頭。この席の酌人は。藝者半分に素人半分といふ調合で。藝者は新橋の精選と見えて。流石に可憐の春色も見える。素人の方は一儕盡く（つぶし）といふ中で。お銀の美貌さは

光明を放つかとばかり。際立つて。藝者も頻にお銀の噂連には目を側てゝ囁き合ふほどなれば。無論滿座の客は現になつて。衆心一人を逐うて移るといふ狀で。一見の客も名を聞覺えて。お銀が前でも通ると。爲態けた談話を輟めて。「お銀ちゃん！」などゝ溫言で呼留める。

就中某伯と來たら。眼を絲の如くして。お銀お銀と懊惱いほどのお聲懸りで。酒を飲んでも甘うない。少し御自分の前に見えぬと。「お銀は居らぬか。」と御意ある時の鼻下の寸を。玉八といふ人の惡い老妓が。杉箸を鉛直に立てゝ、遠くから測量して。高島屋の忠彌といふ身をやつて。妹藝者を笑はせてゐる。

遂に此處に居る事がお目に留つて。早速彼を喚べとの御意に。お爲といふ小間使が。勅使三度に及ぶといふ始末。

「お銀さん。一寸でも可いから來て下さいよ。私が窮るわ。」と泣聲を放つ。

「はい唯今。」と立たうとするを。此時は山口大分酩酊の呂律で。

「まあ可いぢやないか。何。室山の御前樣のお召だ？ 然う？」

とつまらなさうな顏色。ぺろりと舌を長く出して唇を舐ずり。

「あの御前も御高慢にましましながら。いつもいつもお助兵衞な御前だ。」とお爲とお種が口を揃へて注意する。

「へゝへゝ。」と冷笑して、

「聞えるものなら勝手にお聞えなさい。」

と身體はぐなぐな。眼ばかり据ゑて。一向多愛ない事を立派さうに云ふ。いつかお銀が立つて了つたとは氣が着かず。

「お銀ちゃん。ねえ丸橋銀子ちゃん。氣を着けないと不可せんよ。あの御前といふものが。いやはや尋常ならぬ助前だからね。高い聲では申されぬが。(どうか聲色のやうなれど。誰のやら當なし。)一體華族といふものは。士族平民より一倍お好色で。お執濃くてゐらっしゃる譯のもんだから。お給仕は辛いよ。ねえお銀ちゃん。」

と再舌舐ずりをして。細い眼を無理に瞬いたが。

「おや不在！ 不在ね。お銀ちゃん。いや遁した遁した。お前たちは。」

四

澁谷は翌日の退省に山口を伴歸り。客間の椽近に。マホガニイの小卓子を据ゑて。これに淡泊とした肴を三品ばかり列べ。獻酬なしと定めて、小さな臺付の硝子盃と京燒の小德利を銘銘に控へ。山口は葛布の洋服をば。糊にぴんと張つた浴衣に衣更へ、紅革の褥の上に割膝をして庭の盆栽棚に咲懸けた柘榴の盆栽をまじまじ眺めながら。髭を撚つて待つ所へ。主人も浴衣になりて。濡髮を拭きながら。のっしのっしと出て來て。

「いや山口さん。貴下も冷水で一寸額をお洗ひなさらんか。」とどっかり褥の上に胡坐を搔く。

「いえ私はこれで結構でございます。」

「水で額を洗ふより。これで口を嗽ぐ方がいゝですか。」

「うふ。」と笑ひながら山口の盃に徐々と注ぐ。

「これはこれは。貴下まあ。」と德利に手を懸けるより早く。澁谷は獨酌してぐっと一息に飲干し。

「あゝ蘇生した。貴下も早く御蘇生なさい。」

と無雜作に茶碗の汁をちゅうと吸ふ。山口は盃を一寸戴いて口を着け。下に措いた手で箸を取つて。洗魚の摺山葵を醬油皿の中に摘み込むで。二つ三つ攪廻しながら。

「時に彼は眞實御媒妁をいたすのでございますか。」

「勿論願ひたい。」

「然し些と茶漬をはいたしませんか。」
「若い方なら過ぎても苦しからずだね。はゝははゝは。」
「そりやまあ老婦よりは宜しいに相違ございませんけれど。どうも此家の經濟を切廻さうといふには。」と輕く首を拈つて。
「どうでございませうか。」と尻上りに言切る。
「そんな事に譯はんぢやないか。經濟といふた所が格別むづかしい事は要らんし。二月か三月も慣るれば。誰にでも出來る事だ。」
「へえ。」と山口は思案してゐる。
「出來んのなら白痴ぢや。白痴ぢやあるまい。山口さん。」
「白痴な事は。それは。そんな事はござりません。」
「白痴でない以上は出來るよ。我が保證する。」
「所で貴下は宜しいと致して。いかゞでござりますか。お母樣の御意見は？」
「母の？母の事ぢやなし。我が可ければ別に不服のある理はない。」
「然し。一應は兎も角もお相談になつて……。」
「昨夜はや話しました。」
「御不服はございませんか。」
「母も喜むでをる。」
「左樣なら一つ此方へ話して見ませう。」
「先方はどうぢやらう。承知をしやうか。」
「此方が二度目といふ所が少々何でございませうけれど。お子樣はなし。御姑御樣はお一人といふのですから。申分はございませんな。」
「さういふ註文にいつてくれれば可いが。」
何かふと思ひ出したと言ふ發端に。卓子の端をとんと拍つて。
「品行はどうぢやらう？」
「左樣。」と鮑魚を一片口へ入れて。もぐもぐと何を言ふのやら全然解らず。
「なあ。品行は？」と問なほされて、慌てて嚥込み。手掌で口角を横摩して。
「其點は私にも解りかねます。一つ糺して見ませう。」
「何分願ひます。」と奥の方を向いて。「こら酒を持て來んか。」
「はい。」といふ聲が聞えて。四十餘の中老女が德利を兩手に捧つて來て。空いたのを換へて行く。
澁谷は「熱いのを。」と一杯を山口の前に置き。自身も一杯注いで。幾分ばかりきゆうと飮むで。緣續きの隱居所を。軒の葦簾の下から覗込むで。
「御母樣？」と又覗いて。「一寸。」と呼べば。六疊の隱居所に新聞を讀んでゐた。六十五六の詰髮の女隱居が。洋銀臺の目鏡の上から。まづ座敷を透して。やがて目鏡を取つて。新聞紙の文鎭にして。「やつと。」と小さな懸聲で立上り。腰もしやつきりとして。座敷へ入つて來て。山口を見ると。
「よう入らつしやいました。」と田舍訛の濁聲で。べつたり坐つて時宜を述べる。山口は急に裀をすべり落ち。はつと平伏して。慇懃に挨拶をする。
澁谷は盃に手を懸けて母親を見遣りて。
「一杯どうですか。」
「今は欲うないから又晩に。」
「少々召上りまし。」と山口は自身の盃を干して獻さうとする。
「私は晩と極めてをりますから。」と德利を取つて。
「まあ〳〵貴下最一つ。」といはれて山口は輕く額を壓へ。
「然し最う充分頂戴いたしてをります。」
澁谷は椰子實の煙草入に銀の長煙管を添へて。雪洞を懸けた紫檀の煙草盆を母親の傍へ廻すと。隱居は背を屈めて膝の上に兩肱を持たせ

ながら、煙管を取つて。すう〳〵と二度ばかり吹いて、煙草を埋めながら。上眼で人を見る癖あり。澁谷の眼の大きくて可恐いのは。遺傳と見えて。此隱居の眼にも同じ大さと。同じ可恐さがあるが、老年に落凹むで奧の方で。ひか〳〵するだけ。いとゞ可恐くも凄くも見える。顏色は日に燒けた澁紙の如く、顴骨高く秀でゝ。頤の先まで瘦細り。七十に・近からうといふに髮は濃くして、目に着くほどの白髮もなく。唯老年の悲しさには。天邊が燒原のごとく圓く赤兀げに兀げてゐる。齒は貝を含めるやうに揃つて。一枚とても瑕のあるはなく。恐らくは衆は入齒と想ふべし。年老の髮の黑いのと。齒の脫けてないのは。いかにも憎躰に見えるものなるが。此隱居はそれに最一つ並通れて。可恐い眼といふものを控へたれば。一目して邪慳の氣が人に逼る。

山口は酒を飮みながら頻りに此相を觀て。(あお嫁になる身は不便だ。)とつく〴〵思つたが。(幸ひに澁谷は。此隱居の相が表はす如き性質ではなくて。外貌によらぬ實意のある好人物であるから。嫁を世話しやうともいふのだけれど。あの姑は他人の我ながら氣が置けて。何となく薄氣味の好くない人物だ。)と思へば。酒もどうやら旨くなくなつて來る。

「御隱居樣にあの御話を。」　澁谷は首肯く。

「何かい、嫁の？」

「可からう。少し若いやうに思ふけれど。な山口さん。」

「其處です。」

「何處かな。」　と言つて見て。「はゝはゝは。」　と澁谷は笑ふ。

「なるほど若いやうではございますけれど。女子といふものは老易いのでございますから。」

「私なども去年までは。餘程若うござつたけれど。」

「左樣でございましたな。はゝはゝ。」

「眞箇。ほゝほゝ。」

隱居はなほ前のごとく屈むで。緩く煙管を持つて、顱首で衆の目を横に睇りながら。鼻の孔からふうと太い烟を出して。

「私の嫁といふのではございませんから。此人の氣にさへ入つたら。私は構ひません。」

「なるほど。」

「士族でありましたな。」　と上眼で見る。

「たしかに士族で。手前と同藩のもので。」

「小身ですか。」

「私は交際つたことがございませんから。詳しく存じませんが。」

「まゝ小身でも士族なら……。平民は不可。」　と憎々しく顰面をして首を掉る。

「何故な？」　と澁谷は笑ひながらいふと。怪しからむ事を聞くとばかり腹立顏で。

「私は好かん。平民なんぞは。」

「今は士族も平民も無いです。」

「否。有る。」　といよ〳〵腹立つて。

「貴下が平民の娘なんぞを嫁にしたら。私が先祖へ申譯が立たん。」

と火の樣になる。餘り腹を立たしたら。此話が〇にならうか。と山口は案じて。

「それは何と申しても。士族の事でございます。」　と隱居の意を迎へると。

「何といふても然うでござるよ。」　と澁を向いて煙草を吹く。これで座敷が白けて。いづれも少時無言なり。

「山口さん。兎も角も先方へ相談をして見て下さらんか。」

「承知いたしました。」　と盃の底にある酒を干して。

「大分頂戴いたしました。」

「まあ。」　と澁谷は德利を向けると。其頭をおさへて。

「否。もうどうも。」

「何のあればかり。」と無理に注げば。山口は盃に盈るのを見ながら。
「どうも。もう是は。」など〻呟いてゐる。隠居は勃然として。ふか〳〵煙草ばかり燻らして居たが。急に吹殻を撃いて。
「山口さん。緩りとお上んなさい。それぢや何分お頼み申しまする。まだ戸外は暑うござる。」
と言捨て〻隠居所へ入る。後を見送つた山口は額を低めて。
「御隠居様は御立腹ぢやございませんか。」
「なあに。いつもの癖だ。」
「左様でございますか。」と山口は隠居所を見込む。

五

や〻煤けたのは去年からの持越。といふ岐阜提灯を。出窓の格子の中に吊して。燈は其ばかりの三畳の薄くらがりに。蚊を拂ふ團扇の音を絶間なく立て〻。姉妹二人行水後の浴衣姿で。肩と肩と相摩ふほどに寄着いてゐる。
平生に異りてお銀は一向に冴えぬ顔色。窓外の方を睨と瞪めて、團扇の柄で膝を小刻みに敲いてゐる。
お鐵は姉の顔を不思議さうに時々見込むでゐたが。小聲に。「姉さん。」と呼べど。返事なければ。手を把つて。
「姉さんてば。」
「え〻。」と振向く。
「そんなに考へなくっても可いぢやないか。」
「何も考へはしないよ。」
「考へてるよ。先刻から。」
推返して然ではないとも言はず。然だとも言はず。お鐵の顔を[illegible]注視ながら又考へてゐる。お鐵は少し焦れ氣味で。
「姉さんてば。」と力を入れて呼ぶと。
「あいよう。」と（よう）を長く引張る。
「否だ。私は。」
「なぜさ。」と平氣。
「お目出たいのに那麼にお鬱ぎでないよ。」とお鐵の肩を輕く拍つて。
「否な子だよ。」
眼中には嬉しさうな色も見える。此嬉しさうな色を見て取るお鐵の眼中には。その（嬉しさうな）を嘲るやうな色が見えて。
「お目出たいのに。」と繰返せば。「否な。」とお銀の方でも繰返す。
「何日迄〳〵の？」
「何處へ？」
「お目出たい所へさ。」と姉の膝を一寸突く。
「否な。」と内向いて。又考へ始める。
「眞箇に冗談は退けて。何日に極つたの？」
「何がさ。」と手強く不知をきると。
「否だあ。」と甘垂れたやうに言ふ。
「否だあって。何の事たか。些も解りやしないやね。」
と怺へやうとするほど。喜色は却つて眼中で舞を跳る。
「そんなら可いよ。」と少し激して。お鐵はわざと横を向く。
お銀は眼中の微笑を満面に廣げて。「鐵ちやん！」と呼べど無言。「鐵ちやん！」いよ〳〵無言！ ます〳〵横を向いて。竟にはくるりと背を向ける。お銀は二本指でお鐵の背筋をむづ〳〵やると。「あれ。」と身を顫はせて。「知らないよ。」と後様に拂ふ手を透さず握むで。片手を肩に懸けて。ぐっと力を入れて此方を向せる。
「知らないよ。」とぶり〳〵するのを。お銀は面白半分、謔戯半分。
「さうお怒りなさるもんぢやございませんよ。」
とぬつと手を出してお鐵の頤の下を擽る。頸を縮めて。怒りたいにも可笑く〳〵て怒られず。仕方なしに擽潰したやうに笑ひながら。お銀の手を振拂って。

「否。もう姉さんは。」　と顔を見てゐて。

「もうお嫁入をして。居なくなると思つて。妾に仲を虐めるよ。」

「お目出たいの。お嫁入だの。とおいひだけれど。未だ決定はしないんだよ。そんな事は。」

「決定らないから心配して鬱ぐの？」

（じれむま）の角に懸けやうでもなく。何氣なしの言葉が。嚴しくお銀の感情を突いたか。流眄をして。「否な。」と苦々しく刎ね返せば。

「だつて鬱いでるぢやないか。」　となほ執念く問窮める。

「鬱ぎはしないよ。」　と叱るやうに説破する。

「さう？」　と眞面目に。おとなしく聞流して。後は双方無言。

奥には今戸焼の蚊遣猪に。炭俵の刻むだのと陳皮とを燻して。その煙を呉服屋の景物團扇で女房が扇ぐ傍に。新八郎は洗晒した阿波縮の浴衣に。寢ぼけ色の淺黄めりんすの三尺を前結びにして。鹽漬の古茄子ほど平坦となつた木綿更紗の座蒲團に。藻に鯉の印附の。卽効紙のやうな色をした擬油團を上敷にして。胡坐を搔き。座敷の眞中に釣した小洋燈の火を借りて。赤くなつた能代の膳を控へて、鯵の鹽燒が二尾と。生乾の雷干で。泡盛を、こしめしてゐると。手水鉢の上に釣つてある玻璃細工の風鈴が。無性にチリン〳〵チンチリンと鳴る。

「おゝ好い涼風だ。」　と女房がいへば。新八郎も。「爽氣だ。」と和して。向脛に來た蚊をぽんと撲つて。

「然し。中分はない誠に結構な口さ。」

「でも二度目といふのに。年齢がちつと違ひますから。」　と女房は幾分か二の足の語氣なり。

「年齢が違ふ〳〵て。幾許違ふものか。三十六だと？」

「さうでございます。」

「十九で二九の十八と。倍は違ひはしない。」

「可哀さうに。倍違つて堪るものですかね。其も初婚なら。まだ何ですけれど。」

「女子とは違ふ。男子の事だ。初婚でなく〳〵たつて。嬰孩がないから仕合せさ。」

「二度目で。嬰孩があつて。姑があつて。加之叔父ほど年齢が違つたら。第一相談になりませんわね。」

「といふがの。今時の娘はなか〳〵那樣事を言つてはゐないよ。髮の出來が氣に入らないといつて。飯も食はずに一日泣潰したなどゝいふ。お前の娘時代とは。全然了簡が別だといふ事さ。」

「いくら利口のやうでも。やつぱり十九や廿歳の處女でございますよ。阿郎。不斷の擧動を御覽なさいな。まるで孩嬰ぢやございませんか。」

「然でないつて事さ。」　と德利を持つと。何時か輕くなつて。ちよろ〳〵と猪口に半分ばかり。倒にして。ぽたり〳〵と滴らして。情なさゝうな貌を。女房は横を向いて見ぬ風でゐる。

「もう少し。」　と思ひ切つて德利を出す。

「過ぎますよ。また明日の事になさいまし。」

「お銀は子供でもいゝが。乃公まで子供扱にするな。もう少しだ。」

「召上るのは可うございますけれど。今夜は彼子の事で相談をしなければならないんですから。お控へなさいましよ。また過ぎると。相談も何も出來やしませんわね。」

「道理だよ。醉つてしまつて相談が出來んと思へば。控へろとも言ひたからうけれど。前祝と思つて。少し。眞のすこうしだ。これつぱかり……。」

　と德利の底を。五分ほど指で劃つて見せて。

「また後を引くと思ふと。止めたからうが。決して後を引くのではないよ。前祝だ。前祝と思へば。憎くはなからう。前言ふ通り前祝に飲むので。醉はうなぞと思つて飲むのではない。

決して〳〵。いかな事があつても酔はない。ああ酔はない。酔つた日には第一前祝に對しても濟まん理だ。別に斷つて飲みたくもないけれど。眞の前祝に飲むのだから。」

「飲みたくないものなら。浪費な事ですから。なほの事お止しなさいまし。」

「そんな皮肉はいひつこなし。後生だから持つて來てくれ。もう猪口に二三盃も飲まして見ろ。いよ〳〵相談が捗どる。といふのは。實は此所等に。」と鳩尾の下を壓して。

「好い分別や文珠の智慧なんぞが。雑然小さくなつて窘むでゐるのだ。之を迎ひに行かなければ出て來ない。迎ひには誰が可からうといふと。それ酒だ。之を迎ひ酒といふ。」

と眞面目にやられて女房も可笑くなり。仕方なしのくす〳〵笑ひ。澁々臺所へ行き、現金に少しばかり注いで來て。德利を膳の上に。印でも捺すやうに。しかと置きながら。新八の顔を覗いて。

「もう是限ですよ。」

「今度は[illegible]ひだ。餘つはお預けかね。」

とにた〳〵笑ひながら德利を持つて。餘り輕いのに驚いて。思はず。「ほい。」と聲を懸けて小首考へたが。

「怪しからん。酒だと思つたら。此中に子供を入れて來たな。」

「また冗談ぢやありませんよ。早く吃るなら吃つて了つて。相談を決めませうよ。」

「いや。何でも子供が入つてゐる。」

「なぜで御座いますよ。」と希有な顔をする。

「なぜでも可いから。一寸振つて見な。」

女房は何の氣も着かず振つて見る。

「そら。そら。ぼつちやん〳〵。」

「えゝもう。洒落所ぢやありません。」と茶漬茶碗の絲底に載せた猪口に溢れるほど注ぎ。早く形付けやうといふ下心から。飯櫃を擔出して側に引着け。胴中を撫でゝ見たり。蓋をことことと。指頭で責鼓を鳴して。短兵急に押寄せたりしても。一向籠城の様子が見えぬに倦むで、最後の策は。蓋を取つて。杓子を入れて。飯を押返して。誰か實のある人は一膳食べてくれさうなものだ。と謂はぬばかりにして見せる。

其時亭主は少しも騒がず。悠然自若として傍に飯なきが如く。ちびり〳〵と旨さうに飲むといふよりは寧ろ舐めて樂むでゐる。舐めても嗅いでも。もと〳〵三四杯の酒と。竟に一滴も殘らぬまでに飲盡して。虚になつた德利を名殘惜しげに膳から下して。やうやく不承々々に茶碗を取上げると、かねて期したる女房は。一番槍と呼はらぬばかりの勢で。茶碗を引取つて飯を盛りつける。

新八大とろんこの眼色になつて。箸どりの模様なども餘程覺束なく。此分では食事が濟み次第、前後不覺の高鼾と女房が察して。今の内に相談をしかける。

「ぢやあ阿郎の御了簡は。お銀を嫁らうといふのですか。」

「大やりさ。お前の考へはどうだ？」

女房は默つて飯櫃に縋つてゐる。

「嫁るに決めなさい。大した結構の口だ。まづ大凌の方に二千圓ほどの地面があつて。さ。よしか。地坪が二百三十坪で。建坪百坪といふ居宅が、自分の家作で、婢女が二人に書生が一人。お抱車で車夫が一人さ。奥には六十五になる姑が唯一人で。當人は奏任の百圓といふ身分で。よしかい。實意があつて。優しいといふのだから。此上の望蜀はありやしない。年齢も。この度目も要つた理のもんぢやない。」

「それはもう結構は知れてゐますけれど。適、身にもなつてごらんなさいましな。妾にでもなるのぢやなし。ちつとやそつとは註文もありませうわね。」

「註文があるならして見なゝ。どらほどの註文か知らないけれど。註文通りより餘程上出來だと我は思つてゐる。十三圓の官員樣の娘に奏任の婿は。慾をいつたら際限がない。實は我も最一杯飲みたいのだけれど。かうやつて控へてゐる。お前も控へて諾と我慢をするが可い。」

　といかにも睡さうな聲をへべろんとして。遂にばたりと横になる。今倒れたかと思ふ間に。すや〳〵と寢入る。話は是だから可厭だといふ顔で。女房は膳を片寄せ。直と夫の傍に寄つて。肩頭を動搖りながら。

「阿郎々々。お風を引きますよ。阿郎。」

「うゝう」といふ聲に。手を退けば。一向他愛なく又寢入る。

「お銀や。お鐵や。」と呼べば。二人はばたばたと駈けて來る。

「此處を形附けておくれ。」

「おや大層な鼾だこと。」「ほゝほゝ。」と姉妹は手分をして膳を引く。流元に手洋燈を點ける。跡を掃く。茶碗を洗ふ。揚板を踏む。がら〳〵ばたすたと騒々しい中で。新八心持好さゝうに熟睡して。折々額に來る蚊を現で撲く。女房は頻りに搖動かして。(もし)と(阿郎)の二三十唱へてもお通じ無しゆゑ。頭に手を懸けて。うんと引起せば。存外に少し正氣付いて。

「何だ〳〵。」と寢惚聲を出す。

「さあお起きなさいよ。先刻の相談はどうするのでございますよ。」

「蝿帳へでも入れて置け。むにや〳〵〳〵。」

之を聞くと。臺所では姉妹が腹を抱へて。きやつきやつと笑ふ。女房も持餘して。手を放せば。又ころりと寢て。足をばたん。

六

子を見ること親に如かずといへど。子を見損ずるも親に如かず。女親はお銀の容色をば。たしかに實價の五倍も買冠つてゐて。お銀ほど美しいものは。世間に二人とは無いもののやうに想つてゐる。

　これまでに數度の縁談も。母親が主唱に立つて毛嫌ひをして。彼でもない此でもないと皆壊した。といふのも。畢竟お銀を寶にし過ぎて。慾を乾かしたからではあるが。また一概に慾ばかりとも謂はれぬ。女親の身にもなつて見たら。いかさま十九年來の丹精。二葉から培養に懸け。雨に風に心を傷めて。やう〳〵花の咲くまでに仕立てたものを。むざと手放すは。いかにも口惜しからう。世話の焼けるまでは散々世話を焼かされて。これから手助にも相談對手にもならうといふ際に。ふいと持つて行かれては無念なるべし。又一面は。可愛くて〳〵。片時も傍を離しかねるといふが。母親が手放しの原因でもあつたらしい。けれども慾の方が勝つてゐたには相違ない。して女親の理想の婿といふのは？　まづ今度の話ほどの身柄で。舅姑が無くて。年齢が二十五六で。容貌の好い。性質の優しい。自分達夫婦を親のやうに大事にしてくれる。ぐらゐの男なれば。

　澁谷に就ては未だ二三個條の不服がある。男親の方はさほど不當な思想を持たぬ。娘の價値を稍正しく知つて。此上も無い寶ゆゑ。どうか縁あて。早く安心がしたいといふのを。女親の眼から見ると。何も我子を然う卑く見て。損物の弱賣でもするやうに。急促つて手放したがらなくても可さゝうなものだが。男親といふものは。實に女の子には情の薄いものだ。其とは言はねど。心中には恨めしく思つてはゐるもの〻。此縁談が頭から不服でもなく。さればとて。二つ返事といふほどでもなし。昨夜は一晩まんじりともせずに考へ明して。今朝になつて見た所が。別に決心が出來たわけでもなし。隨分嫁つ

てもいい。父親も承知、當人も承知ならば。嫁つても可いやうなものではあるが、嘗（二度目）といふのが氣になつてならぬ。尤も二度目といつた所が、新婚といつた所が。二度目だからな房を粗末にする。新婚だから大事にするといふ理もなし。仕立おろしの衣服でも。一度着たのでも。着心に格別の異はなし。と思案をして見れば、體裁もなるけれども。同じ嫁るものなら。外に口が無いではなし。嫁る所に事を缺いて。二度目の所を選るといふのも馬鹿々々しい。これが此方も二度目といふのなら當然にあるけれど、何にしろ初婚で。年齢は十九で。容色が優れて、[illegible]と來てゐるのだから。それに何ら仔細な。二度目の所へ嫁るにも當らない。斷然嫁るまいかしらぬ？

三ヶ所も夫が逸消てからの猶豫と。[illegible]を[illegible]て。すぼりノヽと[illegible]しながら。[illegible]は道理である。[illegible]は此間に人気無きが如く寂然閑と縫物をしてゐる。

やがて八つ時は[illegible]の下駄を見ずつて。[illegible]歩に跟つて來る。斷口を[illegible]したやうな[illegible]の紗の[illegible]口の、[illegible]でも、[illegible]を[illegible]いても。[illegible]、つて、[illegible]と伸びに[illegible]。最も[illegible]の[illegible]に[illegible]たるを。未更に[illegible]目正しく、着做したるが。一心に道を急いだ所爲か。円分五厘ほど拔衣紋になつて。然のみならず背縫が二十三度ばかりも曲つて、御紋の上り藤が風に吹かれてゐる。いつそ裸けたなりに委いたら可いものを。山梔子色に色褪をした麥藁帽子を。仔細らしく入口で脱いで。右手に小さく握つた手拭で、額際の汗から。ぼつノヽと湯氣の立つ頭顱まで。一刷毛に拭きノヽ、[illegible]を戴あて、熱いわ熱いわ。」といふ[illegible]で入れば、妹は[illegible]を[illegible]つて、奥の座敷の折釘に掛ける。妹は[illegible]の[illegible]る白鞣の[illegible]を下駄箱に形附ける。鼻に皺を寄せて又一[illegible]いノヽ、と唸りながら。[illegible]になると。お[illegible]は透きず[illegible]手拭を持つて來て、背を拭けば、老者は[illegible]いノヽ。」と二つ三つ、いかにも胸が開いたらしさうに。凄じい噯氣を放つ。お[illegible]は[illegible]に[illegible]も、今は[illegible]る[illegible]の法[illegible]て何やといひさうな[illegible]を、以も[illegible]に[illegible]むでから、[illegible]の包を[illegible]いて、[illegible]薬紐工の漆[illegible]を取出し。梅干の核を[illegible]へ捨てて行くと、[illegible]の[illegible]大が、[illegible]に鼻を鳴らして、今にも千切れるほどに毛を[illegible]つてゐるのを、[illegible]と[illegible]一て、それで[illegible]を[illegible]に[illegible]る。お[illegible]は父親の[illegible]とあつて。[illegible]の一袋を[illegible]さず[illegible]むだかとも想はれる。ごわノヽした白地の浴衣を着せる。寛然[illegible]を背負うたやうだ。と[illegible]が來さうなり。[illegible]姉妹は彼の相談が始りさうな氣色を見て。揃つて次へ遠慮して。針を持つと。

「どうだ？　いよノヽ嫁るに決めたか。」と父親の聲。お鐵は之を聞いて。娘はどういふ顏をしてゐるだらうと見れば、下を向いて。わざと一心に針を動かしてゐる。

凡そ小一時間ほども相談が有つてから。

「お銀や。一寸。」と母親の呼ぶ聲。聞くと、お銀は針を停めて。午後四時ばかりなる縹色絹を[illegible]から[illegible]下して立起る處を。お鐵がわざと徐と顏をば見上げると。澄して、すうと立つて二三歩行きかけたが。彼事だなと思ふ心があれば。何となく改つたやうな。氣權かしいやうな。恐いやうな。異な氣持がして。[illegible]と[illegible]が[illegible]くなつて[illegible]が[illegible]いて。足がすくむ。[illegible]を少し離れて、父親を[illegible]れて、[illegible]の[illegible]さうな、[illegible]むづかしい所に陣取つて。兩親の顏色を[illegible]やかに[illegible]、[illegible]子は。いかにも、不[illegible]らしい[illegible]があるらしい。[illegible]して下女が[illegible]音を[illegible]に[illegible]されて、と云ふ[illegible]に[illegible]てゐる。

[illegible]を正し、と云ふ[illegible]で。

「お銀。」と顏る[illegible]に[illegible]を[illegible]ると、改まつ

て出られた言葉に釣込まれて。
「はい。」とお銀も改る。
「概略は昨日の相談で聞いたらうけれど。お前も最う好齢だし。いつまでも家に居る譯にはいかない身分だし。幸ひ實に似合はしい緣があるから。取極めやうかと思つて…。」
「やらうかと思ふぢやない。取極めるのだ。」
と横鎗を入れられて。
「まあ貴郎。」と女房は煩惱さうに顔を夫に向けて。やがてお銀の方を見向いて。
「先方は二度目ぢやあるけれど…。」
と言ひ懸けると。父親が突然に!
「これ。直に二度目々々といふよ。」と竹篦返しの恐い眼をする。
「でも。貴方…。」
「えゝ!」と睨みつけて。
「おれが話説をする。銀。何だ。その先方は小石川水道町でな…。」
「あれ貴方。小日向水道町でございますよ。」
「町所ぐらゐは如何でも可いわな。喧しい。」
と顔を顰めて。
「小日向水道町で。澁谷周三といふ人物だ。奏任四等の上月俸といふから百圓の月給で。なかなか評判の好い有用人物ださうだ。住居は自分の家作で。下女部屋。車夫部屋。書生部屋。湯殿もある。物置がある。何のかのと云つて。間數が九間もあらうといふのだ。表の桝形の門から玄關まで十間もあつて。庭なぞは宏々として。立派な物ださうだ。それで六十五になる女隱居様が唯一人で。小姑も何も無しで。當人といふのは三十六になつて。大肥した長の高い……。」
「お前お見だらう。此間お邸の御宴會の時に。見たはずだよ。」と母親が言ふ。
昨日橋わたしに來た男は。其晩醉つて喋つた山口といふ人。いかにも見覺えてゐる。其人の話を聞いた時に。欲しいといふ人も察した。おぼろ氣に名も覺えて居るが。見たとは。どうやら鐵面しくて言惡い。まんざら見ないとも亦言惡いのは。山口が來た時挨拶に出て。先晩はなどゝ言はれた事もある。そこで。
「よく知りません。」と(よく)の字を冠せて跡を晦ますと。深く斬込む必用も無い所から。
「さうかい。」と長追もせずに母親も手を退く。入代つて父親が。咳拂ひを一つして。
「あゝ見なかつたか。肥つた長の高い。誠に男らしい立派な人品だとよ。」(立派な人品だとよ。)とはお銀も少し可笑かつた。
「それに姑は始終隱居所にばかり引籠んでゐて。三度御飯を食べる時の外は。一切座敷へ出て來る事なしで。主人は朝八時から出勤で。四時頃歸つて來る。其間は用なしだ。用があつた所が。下女が二人ゐるから。奥様は用無しで。晩に一杯飲む肴の見繕ぐらゐが役目だといふ。どうだ。女子は十九が厄年といふが。お前は。去年劇く流行性感冒をやつたから。前厄で厄拂をして了つたから。今年が大當なのだ。どうだ。」

七

父親は獨り悅に入つて欣々然と話すに引換へて。有難くもないといふ顔色で。(二度目)といふ事を忘れたのか。わざと言はぬのか。何にも爲よ言はいで措かうか。と唇を蠕々させて。夫の言葉の斷れるのを待構へてゐた母親は。
「唯お前もどうだかと思ふのは…。」と睨潰すやうに言はれて。
「是が今に言つて聞かせるわな。」
「早く話してお遣んなさいましな。」
父親の心になつて見れば。勿論(二度目)の事も言つて聞かせる氣なれど。もし之を言出したらば。お銀が二の足を蹈むかも知れぬ。そんな

物を踐れたら。此御父親大凹と躊躇してゐるのを。女房が(二度目)といふのを讐敵のやうに氣にして。跟けつ廻しつ。やい〱言ふゆゑ。もしやお銀が惡く取つて。何か可厭な事のあるのを裹むのではあるまいかと氣味を惡がつて。談が破れるやうなことでもあつては大變と。言つて聞かせるに決心して。

「子供等があるわけではないが。實はその澁谷といふ人は前妻があつたので。二年前に亡なつたのださうだ。二度目の家へ。此方が年齡が若くて初婚で適くといふのが。少し氣にも入るまいけれど。さうでもなければ。大分格の違ふ今度の話のやうな家へは。我家あたりからは遣けるものぢやない。二度目といふのも子供でもあるのなら隨分思案ものだが。そんな面倒はないのだから。知りさへしなけりや初婚も同じ事だ。男子は三十五六で初婚のものは許多もある。初婚と思へば初婚で濟む事だらう。女子と違つて男子は二度目が三度目でも。那樣事は少しも瑕にはならない。」

お銀は話しの始終頭を下げて。一面は聞き。一面は分別。實更否でもなけれど。(二度目)といふのが。女氣には些と心る滿なく母親と同意で。咄嗟の間に挨拶をしかねて憔悴してゐる。

「どうだえ。」と母親に促かれて。胸は悸々。徐に顔を擡げて。まづ父親の眼色を見て。母親の顔を窺つて。また首を垂れて默然。

此處で(否)ときつぱり斷つたら御父樣が怒る。又自分にもきつぱり(否)といふほど否でもなし。さうかといつて否とも應ともいはなかつたら。父親が癇癪を發す。母親の樣子を見るのに。父親ほど乘つてはゐないらしいから。兎も角も母親を味方に頼むで。好いやうにしてもらはうと。

「私はどうでも御父樣と御母樣さへよければ……。」と言ふを遠しや遅し。新八郎は衝と乘出して。

「御父樣は善いとも〱。大贊成だ。お前はどうだ。」と女房を見向けば。

「さうですね。」と娘の顔を見る。

「そんな生返事をするな。しつかりした所をいへ。しつかりした所を。」と齒痒さうに言ふ。

「私は宜うございまさあね。貴方さへ宜くば。」

「えゝ。他人がましい事を言ふな。貴方も此方も要るものか。胸を聞くのだ。お前の胸をよ。」

「私は宜しうございますけれども。當人が肝心ですから。兩親ばかりが宜いといつても……。」

「それだからよ。それだから當人も。今御父樣御母樣が善いならと……。」

「言つたからつて信にはなりませんわね。」

父親は頰を張らして。

「何、信にならぬ事があるものか。」

「でも然うはいきませんよ。まあ今日は彼にとつくりと考へさせて。而して私が明日すつかり胸を聞いて見ませうから。」

かういふ事は表立つて聞いては實を吐かぬもの。と自身の舊時にも經驗のある母親の調和に。一時の壓服は後來の風波の基と。悍切つた父親も一歩を讓つて其意に從ひ。

「それぢや彼方へ行つて善く考へて見な。」

嫁入は女子一生の大事なり。可か否かは風邪氣の時に浴の分別をするとは大きに寸法が違へば。お銀は頗る案じ煩つて。二疊に還つて再び針を把つては見たものゝ。悵然として溜息ばかり吐いてゐる。胸の中では。どうせう。御父樣もいふ通り。先方の身分には實に申分はない。玉の輿だと世間はいふだらう。媒妁人の山口は。お邸の祝宴の時。お金さんに私を呼ばせて。酌をしろといつた人だ。澁谷といふ人は。なるほど右隣の柱に凭れてゐた。太つた色の黑い。眼の可恐い。髮の縮れた。口髭のもやもやと生えた。あゝいふ風だから更けては見え

るけれど。三十五六？　那樣ものだらう。私は十九で先方が三十五六。大分違ふけれど。女子は更け易いから直に丁度好くなる。最う少し若いと好いけれど。三十一二……二十七八……五六なら何も申分はないけれど。さう又若くっては些の書生上りで。自分の力であれほどの身分になれやう譯もなし。年齢の所はどうにも我慢は出來るとして。それから男振だが。役者や藝人ではないのだから。男振なんぞはどうでも可いやうなものだけれど。又然うもいかない。醜いにも次第がある。同じ醜いながら。何處となく愛嬌のあるのがよく有るものだが。那樣のならまあ〱可いとして不承もするけれど。どう考へても彼人の目が可厭だ。何だか腹の黑さうな。えゝ誰かに似てゐるよ。えゝと誰かに……然矣。山王樣のお祭禮の時。醉拂つて佩劔を揮舞はした兵隊の眼色に宛然！　本當に可厭な眼色だっちやありやしない。媒妁人は、實意のある。優しいことゝ云つたら外貌に據らない男だといふけれど。媒妁口だもの。何だか分りやしない。あんな眼色の人に限つて。邪慳で執念強くて。薄情でやかましやで。氣心の知れないしんねりむつつりが多いものだ。そんな人に添ふ事は否々。一月か二月なら。機嫌も取れやうけれど。これから一生涯……。あゝ思出しても肩が凝るやうだ。けれども人は眉目より心といふから。何でも心が肝心だ。容貌はまあ彼でも可いとして。どうだらう。心が？　それがさ。邪慳で薄情でやかましやで……とは想ふけれど。蟲も殺さないやうな顏をしてゐて。隨分邪慳な人もあるし。地主樣の隱居樣見たやうに。赤鬼のやうな貌をしてゐながら。慈悲深い人もある。さうして見れば彼人だつて優しいかも知れない。容貌は當座の花で。夫婦は相互の氣心といふから。生白い人形のやうな亭主を持つた所が。それが永久どうといふではなし。あゝ容貌の事なんぞはもう〱考へまい。考へまい！

それから二度目の事だ。之が第一氣に入らない。二度目だから如何といふ事もないけれど。何だか他人のお古を引請けるのは可厭だ。先方は甚麼好い家か知らないけれど。此方は十九の嫁入盛で。初婚で。年齢の更けた二度目の所へ嫁くのはつまらない。それも此方が疵物で。他に娶ひての無いといふのなら仕方もないけれど。娶ひては世間に許多もある。それぢや二度目がどういふ理で可厭なのだといはれて見ると。かういふ理だと返答も出來ないけれど。誰だつて二度目は可厭だ。一寸譬へて見ると。古衣を買つて仕立直して着るよりは。同じ直段なら誰しも新しいものを買ふ。古衣の方が品が良くても。新しい方が着心が好いわけだ。どう考へても二度目は氣に入らない。否だと言はうか知らん？　否に決めやうと思へば扨又眷戀として棄つるに忍びざる處もある。月給が百圓。家作が有つて。地面を持つて。中の上。上の下といふ生計。這麼縮緬のくちや〱帶をしてゐる。丸橋の娘銀が。忽ち奏任官の奧樣！なりたい。否どころではない。願つたり協つたりだ。男振が好いの年が若いのといふのは些の當座の事だ。當座より行末を考へなければならない。末の事を思へば此上もない良緣だ。と奧の手に悟入して見れば。なるほど父親の喜ぶ胸中も全然讀めたといふわけ。そんならいよ〱適くに決めたかといへば。色氣も大有で。未練も大有で。せめて並むで行いても可恥しくないくらゐの容貌の男にしたい。那ではどうもと。復分別が立戻る。

胸一つに置きかねて。妹に相談をしかけると。まづ（あの人かい）と馬蛤を撮む時のやうな顏をされて。妹に對しても彼を我夫はちと可恥しく。舍さうかとも思つて見る。否々よく〱。本當によく〱よく〱考へて見ると。依然適

く方が可い。私でさへ其樣の事を左右思ふのだもの。年端のいかないお嬢がさう思ふのは無理もない。行末を考へて見れば斯樣事を言つちやゐられない。もう誰が何と言つても。適から適から適かう。

中の巻

一

若き女子は箸の轉けたも可笑く。笑ひ興ずる心の中にも他事の勞は絶えずして。老は玉簾に譬え付きたや。好き婿取りたや。世帶持つとも苦勞なきやうにと。金持も容色美しもいづれか身のをさまりを案じて。行末の憂慮とせざるはなし。思へば女子の身は夏の牡丹餅のごとし。餒易くして賣れ難し。之を抱ふる心配は實にさもあるべし。

縁は出雲の神の思召すまゝとかや。容色の美惡に由らず。身代の貧富に拘らず。持參が二萬兩お臺所をも持ち。御年紀十九にましまして容顔美麗なる姫君の。二年良媒をもとめて今に几帳の蔭に物思ひはたえたまふもあれば。味噌漉に五厘が胸肉買ひに行く姿のかひ〴〵しきを。至極の世話女房と見立てゝ望めば。銘仙縞の麗服にて事にも乘らざる嫁入に埒明くもあれば。縁は口箕の當の知れざるに。世間の娘を案じ。親の淋しくなりて。昨日今日家に過行くを手を空うして。朝夕のみは啻て所爲なく。横町の小間物屋に河豚のやうなる嫁の來たるさへ恨まれけり。

此國の人口男子一人に女子百人といふ比例にもあらざれば。何のかのと案ずる間に吉事の鐘頭向きて。思ひざる方より持込む縁談は上々吉。願ふ所と家内愁眉を開き。首尾の饅飯。縁ひなものは鉄餅と。今過ぎてか嫁られぬほどの諸書さ。食事は何處で見て置いた簞笥の事間に今行らず。長持は埋葬もの。用に立つは三心能なれど。彼も道具の花なれば。と深夜を知らぬ嫁入物品。傍に娘は寐たる風して。後來の取越苦勞。其中に小袖の染色。模樣の工夫も挿みて。嬉しさ。氣遣しさ。樂しさ。心元無さ。打混じて一塊となり。胸に幅たく込上げて。我と我心を持餘すべし。

粋なる婿殿の萬事を察して。支度金百兩結納の目錄に取添へ。帯代として贈り來しければ。甘蔗の落葉に降りたるばかり。兩親驚を潰して難有がり。さあ何でも買へと奮みあがれば。所望の品を殖してお銀の雀頭。其も是も一諾に承けこみ。思ふまゝなる支度出來て。約定の日を遲しと待つのみ。

縮緬深き近所の讃役目を側め。聞耳潜して。分外なる方へ適くさへ合點のならざるに。聞けば支度金まで出たるよし。容色美くても然ほどの代物にもあらざれば。準妻準妻。其に極まれり。日比は鼻を輕で蔑るやうに優しげた言ばかりいうて居ても。其は榮耀と云ふもう〳〵それはそれは尊い難有い神樣から。運といふお使が來ぬ前の瘠我慢なり。早くお銀樣の三輪か束髪に結うて。大方旦那のお召古しを土産にして。歸寧の美しき姿が見たしと囁き合ひけるを。おてつが聞きつけて口惜と母様に告ぐれば。腹立ててまた之を父親に語りぬ。

新八郎は鍋り打笑ひ。捨てゝ置け。法界悋氣の仇なき長屋者。陰にては大臣の事も彼此いひくさる人の口なり。そのやうな言吐す日傭貸の瓜が娘は。下水淺の蔦の瑚助と腐り合ひ。金錢まで攫み出して新網に遁げ。今はさながら乞食の境涯。また合羽屋の女房めは我娘を茶屋奉公に出して。三十に足を踏みたる身に亭主も持たせず。淫樂の應報は此頃顔に吹出て病院入の不始末。他事よりは銘々の事を構ふべき身の嫉妬と思へば。腹立つ處か不便といふべし。始まる〻ほどの銀の出世は。日出度い〳〵と取合ざれば。なる程と合得して。其後は又もや嫁

入の障礙ともならむ根も無き取沙汰を虞れ、ふつとお銀を戸外へ出さず。首尾よく荷物を送りすまして。吉日もいよ〳〵二三日に迫れば。親類へ暇乞の次手。小癪に障る近所を廻るは快からねど。祝うてくれたるものを捨も置かれず挨拶に行けば。陰言とは雲泥なる輕薄たら〳〵。お銀樣に感れと小娘引出して挨拶させし。惡口の頭領株。小間物屋の(じやらくら)女房はいよいよ憎くこそ。

前日には例規の立振舞とて。一升炊の赤飯に家例の盃事。父親は目出たい〳〵と口にはいへど。常に酒に對ふほどの元氣は無くて萎れたる顏色。母は脆くも涙を浮べて。今日ばかり物懷しげにお銀の顏をのみ眺むれば。庭の柿の落葉する風も哀を誘ふ心地して。お鐵もしみ〴〵悲しく覺えぬ。お銀は淑かに盃を納め。これまでは長々お世話になりましたと。後はいはず俯むけば。母は堪へかねて涙を流す。父親は鼻聲にて。凡女子の身一たび人に嫁がば。生きて其家を出でむと思ふなかれといへり。他人の中へ出づるからは。むづかしからでも兩親の手許にある時とは。大分了簡を違へねばならぬ事なり。今改めて一々いふまではなけれど。第一夫を大切にし。姑をやさしくし。奉公人を憐み。他人には信を以て交はるべし。

我等もさま〴〵苦勞して。育てあげたる効ありて。此度は仕合せの出世。家の面目。此上は無き兩親の滿足なり。年寄れるものに苦勞懸けまじきやう心して。夫の氣に稱ひ。姑の機嫌損ぜぬやう。隨分油斷なく仕ふべし。但又女房は内を治むる大役にして。家の榮ゆるも衰ふるも女房の所爲唯一なれば。華美を好ます。冗費を愼む事肝要なり。人情は咽喉許過ぐれば熱さを忘れ。苦しかりし時に憶はで。在る時の心奢り易きは身上の大禁なれば。其方も些少なる官員の娘の今日を。奥樣になりすましての後も努々忘るまじきぞ。嫁入りては澁谷周三の妻。過失あらば夫がいふべし。我娘と思うての意見も此限りなれば。疎略には聞くまいと。此時は父も涙を催しけり。

我娘と思うての意見も此限りとの言葉を。何と聞きたるか母は悲哀を強め。餘りの名殘惜さに更に酒盃を取擧げ。今一盃其方の飮さしを母がもらはんとは。其子に知られぬ親の情。こぼるゝほどお鐵が酌すれば。多しとお銀のいへるに。母樣の餘に私がと。一盃の酒に親子三人の涙を酌交して。納を父親に獻し。姉はお鐵の手を執りて。我跡にては二人分親人を大事にして。世話燒けぬやうおとなしう仕へよ。お前も身を厭うて病はぬやうになどゝ。別れては長く會れぬか何ぞのやうに心細げなる事いうて。後は涙に濕りがちなるを。何時までも盡きじと。父親醉に紛らして小聲に謠を始むれば。其顏が可笑きとて眞先にお鐵が笑ひ出せば。いづれも笑顏は雨後の月。これぞ末吉やれ目出たし。

二

先方は財産家の何不足も無く。隱居樣は長持の底より白無垢の下着を出して。帶も名ある織物。今日はかゝり息子の嫁取と。一際あらたまりたる服裝にて控へらるゝ座敷へ。我等の嫁の兩親顏して罷出づべき衣裳の用意あるべきにあらず。願くは次の間にて御免を蒙りたき仕義なれど。此も禮なれば是非に及ばず。膳に列ぶ段になれば。父親嘉平次の袴にてもならず。母親柳條の小袖にても濟し難し。さりとて知人に借るべき方はなし。また世間に知れて陰言の種となるも愁けれど。かゝる時の重寶は。裏の路次の口に差配の質屋が損料貸するを幸ひに。父親一走り行きて恥辱を話し。家の定紋下り藤をつけたる女小袖御座るかと問へば。縹色裏の小紋縮

綿二枚襲を持合せたりといふ。
　染色も質素にて間に合ふは仕合せなり。次に黒の同じ紋付の男物はと尋ぬれば。黒羽二重の中古あれど。惜き事には紋が少し違ふと亭主頭を掻く。いかなる紋かと聞くに。藤は藤なれど上り藤に大字とはいかさま持餘し物。此小袖六年の間。前後に借人唯の二人と。迷惑さうなる顔色然もあるべし。
　亭主のいひけるは。いづれ御羽織御着用なるべし。さらば大字でも天字でも見えぬ處なれば御量見なるべしと教へぬ。なるほど。羽織だに脱がずば何の事もあるまじ。されど羽織も此方に持合せざれば。之もお宅の御厄介なり。羽織には大字の附かぬがござりまするかとあれば。亭主少時小首を傾け。損料物の中には無けれど。今月質に取りたる中に在れば。一日二日の御用ならば。御懇意の間から極内にて御用達申すべし。されば酒汚等の染など隨分御用心下されたし。いかにも心得ました。今一つ仙臺平の袴をと望めば。其には至極上等ありとて。多時待たせおきて註文の品々を渡しけるを。懐中にせし三布風呂敷の。萌黄も春過ぎて夏も茂り。秋も末。冬の初の枯草色なるを。そゝ廣げて大事に包み。夜を幸ひに長屋の前を忍びて我家の裏口に着けば。見識るはずの犬めに吼えられけり。
　此夜父親は長年の重荷を卸して草臥の高鼾。耳にうるさく寢がての母は。明日こそいとし子を浮世の潮に突放し。許多の苦勞の爲始めと。はや行末を豫想りては。また更に過去の事を喚起し。とかくに別離の暗愁胸に滿ちて。此折から目出度き心地せぬを。何故と我さへ知らず。人に奪はれて遠き國へ我子の送らるゝやうにも想はれて唯悲しかりき。
　お銀は親妹に別れむ時のいよ〳〵逼りて。銀釵の指環を玩弄びて流許に轉がし。遂に庇間の下水に墜して涙の出るほど母親に叱られ。父親を頼みて探してもらひしが今に見えざるなど。幼稚の古蹟多き馴染の住家も今夜を見納。明日の今頃は知らぬ座敷の屏風の中と。かゝる古借家も故郷となれば懐し。
　來年は廿歳と女子の價もやう〳〵過ぎ行くを悲み。此度の相談を良緣と心急かれしまゝ。たしかなる思慮もなく一圖に取極めたるものゝ。其姑尋常勝れて氣むづかしく。夫なる男も情薄くして。居辛き家なりせば如何すべき。暇取るにしても。氣に染まぬ主取りたる奉公とは譯違うて容易き事にあらず。離れてどうぞなるかといへば。どうもならで歸物で來るべし。もし又緣切りたくも切られぬ義理など起りて。厭忌を忍び。苦患を怺へて。荊棘の床に起臥の。世に在る思出もなくて暮さむには。一思に死なむよりなほぞ辛かるべき。
　分別の上にも分別して。よく〳〵添ふべき人と見立て。緣附くべき方と斷定めての後ならでは。返事は嘘にもすまじき事なるを。と思へば思ふほど身上の氣遣はしさに。後悔の汗流れて。身毛は彌立つばかりなり。惡き事のみ考へ窮めて。行く處まで行けば。又我を慰むる意も發りて。否々さにもあらじ。此方だに眞實を盡し自己を正しくせむには。祈らずとても神や惠を垂れたまはむ。鬼を欺く人心も自ら和ぎて。樂き目をも見るべし。誰もかく後來を案じ人を怖れなば。世間に嫁入する女子はあるまじく。嫁入りても孫を見る母はなかるべきに。一軒の家には其々の女房ありて。同乘して花見に行くもあれば。黑くなりて倶稼するもあり。是皆案ずるほどにあらぬ證據なり。
　女一代に一度は誰しも夫を持つべき身なれば。此緣夫を危みて破談にすとも。其次の緣夫にも必ずこれほどの取越苦勞はあるべきを。女子を愚痴とは恁る處をぞ謂ふなるべき。今

更何程案じても悔いても復らぬ事と心を定めて。鶏の初めて鳴く頃少し交睫みしが。覺むれば小春の日影麗に。鶴も舞ふべき天と兩親に語れば。斜ならず歡びぬ。

（いよ〳〵今日の今朝は。心地清しく胸は隈なく霽れて。思ふ事無く考ふる事無く。唯食事の進まざるは平常に變る喩かと自ら思ふのみにて。昨夜までは涙も出で汗も湧き。悲歎に裹まれ。憂慮に惱まされ。骨も瘠せ血も冷ゆるかと疲れ果てし其悲歎も憂慮も。涙も汗も。今日を焦點なる今日となりて。我境遇の遂に一變したらむやうに。不知不識しくも心落着きたるは。何故との疑念は融けざりき。

姉と同伴も今日を納めなれば。隨分中好く洗しあうて。今まで喧嘩せし囘復して。後悔の種を遺すなと母親に笑はれて。石鹼垢摩朴木炭。糠袋には平素よりも多分の洗粉を仕込み。頁白粉の小裂物。取揃へて新しき手拭に裹み。母は用あれば一足後より。二人は混まぬ中にと立出づる後影を父親見送りて。まだ一人重荷がと太息吐けば。散々に世話を燒かされ。物を懸けられて。頓て手助にもなる頃誰他に取られ。女子持つは五割の損と。母親はつく〴〵愚痴をこぼしぬ。

湯より歸來れば髮結待懸けて。御祝儀戴くばかりにもあらず。花客様一代に一度の曠と。腕を揮へば時間も入りて。見事なる島形。髷の形も高等に出來て聊も言分なし。其鏡仕舞ふにも及ばず。化粧急ぎて。やう〳〵首から上の仕揚りたる頃十二時の鳴りければ。それ二時には媒妁人の入來と支度急ぎ。父親は例の羽織。母は例の小紋縮緬。借りものとは想はれぬ衣裳閉出々しげに揃列び。上座にはお銀が黑縮緬の目立たぬ裾模樣の小袖に。下着は鶴羽鼠地の更紗縮緬。白茶繻珍の丸帶して。帶揚は緋無地の縮緬。襟模樣の絹手巾を疊みて左に持ち。右手の遣端に迷ひつゝ。置床の前に端坐したる姿を。之を我姉かと驚き。許りに見違へて。お鐵も頻に眺め入るほど美麗なり。間も無く媒妁人車にて驅着け。從此談合の間にざつと親の盃出でて。時分は好といふ頃日は落ちて戸外も闇うなりぬ。

娘に附添ひて兩親出拂ふ後に。夜分お鐵一人は氣遣はしと。かねて心易きお針の老女を午後より賴みて。留主は二人の役。隨分氣を着けよ。遲くとも十時には還らむと契り置きて。人力車も揃ひたればいざと一同席を立てば。媒妁人を先に次は父親。花嫁を取圍みて殿は母親。しづしづと立出づれば。座敷の隅に物思はしき顏して。音も立てず沈みゐたりしお鐵はばた〳〵と駈來り。姉様と袂に縋りて泣出せば。お銀も一足づゝ迫る別離に胸塞がれる折から。堪へかねて手巾を嚙緊め。顏を背けてお鐵の手を緊むれば。なほ泣立つるを門外には人の居るぞ。見惡しと母は小聲に叱りて引放せば。仆れたるまゝ袂を敷きて涙は歇まざりけり。せめては別離の一言と。姉は物を言はむとするに。涙咽喉に塡りて聲は出でず。唯一目見返りて車に乘れば。門の外には。町內の男女皆此處に集まるかと覺えて。黑山のごとく立重れり。

三

馬には乘つて見ろ。人に添つて見れば。年齡は三十六であるが。醜男子ではあるが。二度目ではあるが。澁谷周三が何の〳〵可厭な譯ではない。その譯ではない譯は。謂ふに謂はれぬ譯で。之を識るものは當人のお銀。其一斑を聞いたものは獨り母親である。

半月ばかりの內に衣服が出來る。簪が出來る。黃金指環が出來る。家重代の黃金裝の一刀の目貫を剝して帶留が出來る。時計が出來る。此上は早く子供の出來るやうにと。兩親は大熱

家の大歡喜。然し我女房の事なれば。婿殿は然もあらうけれど。蚊遣火の烟たき姉はどうか。と、案じながら心配した隱居は。なるほど人間の惡い。愛想氣の無い。竹倚を藤蔓で縛つたといふやうな性である代り。萬事に無頓着な。朴訥だけに何條入らずで。家內も無爲にして化すとは何よりなり。

旦那樣は御寵愛遊ばさるゝ。御隱居樣とのお中も至極好くお見受申せば。婢も書生も車夫も奧樣〳〵と奉り。威令自ら行はれて勢旭日の登るごとく。昨日の娘の身を考へて見れば、今日の奧樣の我身が我身ながら不思議でならぬほど不思議で。これが玉の輿かと乘つて見れば異なもの。

庭は廣し。花卉果木は多し。裏には畑もある。家宅は大きくて座敷は奇麗で。旨いものも食べられる。嗚呼母樣やお鐵にも。斯うした所で保養させたい。といふ念の起るは人情の常。近日呼む。御馳走でもしたいと思つたものの。日數も經たぬ內から我儘らしいと憚へてゐれど。歸寧の時に。妹に。かうだあゝだと種々話をしたれば。是非近い內に。呼ぶとも呼ぶとも。呼ばなくて何としやうと。堅く約束したを待遠に思つてゐやう。と想ふほどなほ一日も早く呼びたい。妹の方でも來たい。母は尙更逢ひたいは山々なれど。先方は男女の四五人も役つて居る家へ。あれが奧樣の母樣か妹か。といはれるやうな服裝で行きたくない。お銀の恥辱と。切ない思をして辛抱してゐるとの事。なるほど然う聞けば道理ではあるが。さらば澁谷へ行く晴衣は何時出來るのか。博多結城の布子か。縮緬の袷ぐらゐは出來る事もあらうけれど。小袖はまづ難しい。さうして見れば姉の處へ遊びにゆくは叶はぬやうなものだ。とお鐵は折々母親に不平訴訟の愚痴を吐す。

澁谷奧よりの手紙が二三通も來て。呼ぶほどの用も無いに。奴婢の子を貰つたから見に來いの。羊羹とカステラが戶棚に一杯貰つてあるから。お鐵を伴れて是非々々などゝ。氣樂な事をいつて寄來してお鐵の心を苦める。もう耐らなくなつて。母樣よう〳〵。ようつてばと鼻を鳴らせば。父親が可恐い眼をして。憎らない奴だとぐつと一睨。これに縮むで。陰へ廻つて。母親に噛りついて。泣くがごとく悲むがごとく。怨むるがごとく縋むがごとく口說き立つれば。母親は不便な體に惱して。鏡の裏に虎子の金子もあらば。紙を引剝して此急場の間に合せたいほどなれば。泣付かれる體を持餘して。衣裳の工夫に肝膽を碎いても無い袖は振られぬで。當惑の極は吐息虹のごとく。最少し辛抱しなと。親の口から言憎さうな挨拶に。お鐵は失望して此上强請る元氣もなく。めそ〳〵と泣出す傍に。母親は硯箱に向つて。用事があつて行きかねると返事を認め。お鐵が投函に行つてポストの蓋が裂れるやうな八當。小腹を立てゝ二三日はつんつんしてゐる所へ。お銀は右の返事を見て。隱居が親類廻りの留主を覘ひ。今日は書物だといふ夫に留主を賴み。車を飛ばして來て見ると。おやまあと母親は駈出て煙草盆を蹴かへす。臺所で水仕事をしてゐたお鐵は。妙な顏をして入口を覗けば。束髮の美しい……………。

「あら姉さん！」と持つてゐた束藁を水瓶の中に投込み。飛着かむばかりの勢で駈着ければ。威儀備はる奧方扮裝。悠々として立ちたまふのに拍子が拔けて。笑ひたいやうな。たくないやうな。不思議な顏をして襷を取りながら。ぴしやんと坐つて例の熟さうに挨拶する。

お銀ちやんは舊時の事。今は澁谷の奧樣改つた挨拶をして。

「おや。お前大層髮が壞れてるぢやないか。」

「あゝ。」とお鐵は悲しい顏をして。慣れたさうに髷を拈くりまはす。

「何處か惡いのかえ？」と聞けど默つてゐる。
「なあに少し御機嫌の惡い事がありますのさ。」と母親は茶を煎れながら。お鐵を尻目に掛けて笑ふと。義理に遁つて苦笑をして。お鐵は横の方を向く。
「どうしたの？」
「へゝへゝ」と母親はお銀とお鐵とに當てて。意味兩用といふ笑を爲る。
お銀もそれ何か因のありさうな。其日は何か可笑な日―あらうと笑ひかけて。
「どうしたの？　鐵ちやん。」
お鐵はくるりと母の方を見向いて。
「お母樣いはうか。」と姉を得たので勇氣日頃に十倍する。
「何だね。いはうかなんて。」
「何だよ。」とお銀に言つても可からうかと母の氣色を窺つてゐるお鐵の膝を突く。
「あのね。羞かしいから止しませう。」と問答の中へ母親が。
「先日はまた度々手紙を。」と横鎗を入れる。
「何故來られないの？」とは龍の腮の珠に手頭の觸るやうな心持。お鐵は機一發と身を硬くして。俯むいて固唾を飲むでゐる。
「用事があるなんて他人がましいぢやありませんか。」
「實はね……。」と母親も言出しかねて。
「お茶を。」とお銀の前へ。籐編の茶托に露根蘭の金色燦爛茶碗を載せて出せば。
「おや綺麗だ事。家の茶碗？」と取舉げて眺める。
「失禮な事をおいひなさいな。此急須も宅の品でございますよ。」
と母親大自慢で。茶碗と對に買つた急須を見せると。
「おや〳〵。」といひながら手に取つて見れば。蓋の鼻鈕の蘭の花は好けれど。葩が一枚缺けてゐるのにぷうと噴出して、急須を下に置いて吃々と笑ふ。二人は何の事やら解らず。お銀の獨して笑ふを呆れて見てゐる、
「おや御母樣氣が着かないの？」
「何が。」といふ目前に急須を出して。
「蘭の葩が一枚無いよ。御覽なさいな。」
どれ〳〵と視て。
「おや〳〵おや〳〵。」といふ聲に。節が附いて可笑いとて。姉妹が哄と笑ふ中に。自若として母親は。眞面目に希有な顏色で。
「怪しからん事だねえ。鐵の麁相かえ？」
「あら御母樣否な。買立から私は懲いふ花だと想つてゐたら。目が惡いものだから御母樣。自分が勸工場で欺されて來たのだよ。」
「さうかね。まあそれでも此間御父樣は頻りに捻繰まはして。どうも此鼻鈕の花の恰好が好く出來てゐるといつて。大層賞めてお在だつたよ。」
否ぢやないかね。」といふを聞きながら。お銀は茶を一口飲むで。
「おや。お土産を出すのを忘れて居た。鐵ちやん二疊にある包を一寸。」
お鐵が取りに行つて見ると。萌黄羽二重の定紋附の袱紗の大包。菓子ではあるまいと持上げれば、下には衣類でも在るやうなり。
お銀の指揮に習いて見れば。四棹入の羊羹二折。カステラ一釜」持來です。」と出せば。
「其はまあ澤山に。御父樣大喜悅。」と母親は蕩けさうな顏をして。他人に百圓もらつたより大恐悅なり。
袱紗の底に殘りたるは水色縮緬の羽織と。其下の一枚は。嫁入の半年ばかり前に出來た糸織の。其縞の好さといつたら。もう〳〵もう〳〵とお鐵が其時身顫をした小袖なれば。彼をどうする心算かと薄々横目を遣つてゐると。お銀は此二品をお鐵の前に出して。
「代りが出來たからお前に上げやうと思つて。」

聞くや見るや[illegible]々く、唐茄子と薩摩芋と芝居が、手を引かれて誘ひに來たやうな氣持がして。目の眩ふほどの嬉しさ。母親は思はず乗出して。

「お前まあ這麼に可いのかえ。代りが出來たつて不斷着にでも爲れば可いのに。可いのかい。」

「鐵ちやんのが無からうと思つて。」

「無からうの段ぢやありやしない。あの銘仙のね。彼と椿縞のと。古うい鳥總縞の黒手の八丈。そんな物だけれど。着て出られるやうな衣は無し。實は其一條で二三日大不機嫌でね。」

「さう。何か強請つたの？」

「強請つたつて目的はありやしないけれど。之が（と自分の衣服を指して）無いものだから。折角手紙をおくれだけれど。行けないところから、御父樣に叱られたり何か大世話場があつて。御愁嘆の處を。鐵どうだい、否な子だよ。那麼顔をして。お禮でもおいひなさいな。」

「姉さん……。」　と何處か澁つたいといふ恰好で會釋をする。

「さう。まあ。」　と大方右の如く鑑定を落けたお銀は。始めて知つたやうな顔をして。

「ちや之お間に合へば。別に手離されない用事もないのでせうから。二三日の内にお出な。御母樣と。」

聞でお鐵の御機嫌は直る。母親は一層喜ぶ。お銀も滿足する。お父さんが早く退省になれば可いにと噂をしながら午餐も濟めば。また茶を煎れかへて。女同士の話は愚にもつかぬ事を。大事さうに問うたり答へたり。誰さんが引越してしまつたから。此町内に柿のなる家はなくなつたの。襦袢の袖を色揚にやつたら。紬と違へて縮緬が來て。亭主が謝りに來た事の。唐茄子は柔かいが。澤庵は刻むで鰹節を懸けたのが好きになりましたの。緣の下で鼠が九つ子を産むだの。釣瓶に釣られて裏の春ちやんが井戸へ陷ちて助けられたの。一昨日初霜が降つたが御覽かい。昨夜の火事は半鐘が鳴らなかつたの。火燵は毒だの。山の手は寒いの。雪の降る日は地面が白いの。梅が咲くと匂がするの。何のかのと話して居る内に時計がちん／＼。

「二時かね。長話をしました。」　とお銀が襟紗を捻くれば。

「まあ最う直に御父樣もお歸宅だから其まで。」

長い事はない後一時間。」

と留められて見れば、どうで今まで居たものを、會はずに歸るも氣が濟まぬ。と立かけた膝を敷いて。又何か話の種を拵へて。火鉢の側に巴のごとく額を寄せてゐる所へ。お父樣のお歸宅。

「すばらしい駒下駄があると思つたら。お銀か。よく來た。御馳走をしたか。澁谷樣は御機嫌よしか。我も一寸上らうとは思ひながら御無沙汰ばかり。御母樣にも御機嫌好しか。お前も風を引かんかえ。結構々々。彼處に居て這麼處へ來ると。何だか鼻が支へて息が塞るやうだらう。否。彼くらゐの家は東京にも瓦多は無いて。今日は何ぞ用か。御機嫌伺だと。伺はれるほどの御機嫌ではないが。いつも達者でまづ／＼目出たい。時に久しぶりでお銀が酌で一盃飲みたいものだが。何急ぐと。なるほど。御隱居の際を覗ひ。極内で怪しからん事だ。微行といふ洒落か。なるほど。我の歸宅を待つてゐた。遲くならん内に歸る。いや其は。はい／＼。どうぞ澁谷樣に呉々もよろしくよ。はい／＼。氣を着けて行きなよ。車は餘り駈けさせんが可い。緩々とな。」

四

姉の來た次日に髪結が來て。明日はといふ座懸りの所爲か。至極御意に協つた島田の出來。宛然姉樣のあの時の樣だと後生ヶ事に髱を痛り。蝸牛が日和を見るといふ顔付をして、洗物で

もさせると小桶の水に映る影を。撓めつ直めつ眺めてばかり。「それほど氣になるなら戸棚へでも仕舞つておけ。」と父親に窘められても。猶且氣になつて竊に一策を案じ。戸棚に鏡を立て置いて。隙を覗つては一寸々々見に來るといふ寸法。

「いくら大事にしても寢たら形なしさ。」と母親の言つたのが。ぐつと警策になつて寢像頗るおとなしく。常よりは凡そ二時間も蚤起をして。無性に朝飯を急ぎ立て。甚だ相濟まん事だと。律義を言張る父親を。昨夜から飛付二人懸りでやら〳〵負して。病氣届で役所を休ませの。扨留守居の我一人が貧乏鬮だと。先から愚痴の出ぬ中此方から一合増といふ觸込に。父親は醉はぬ前から口が利けずに頷いて。早御自身に徳利を提げて。裏口から買ひに出られるといふ手廻しの好さ。此方も早くと。塗る。着る。車が來る。乘る。走る。

車の上で衣紋を繕ふやら。襟を直すやら。何を急くのか。誰に逐はれるのか。一向解らずに。母はお鐵に急かれるからなれど。お鐵は夢中で唯急ぎ散し。車に乘つてから少し落着いて考へて見ると。通魔がさしたやう。

無紋稍古の二人乘。車夫は中形の草鞋ばきで。白地に竹に虎といふ徽號では。玄關まで曳込ませるには大に憚りありと。門で下りて裾を叩き。帶を直して直と玄關から懸れば。襠の無い袴を穿きて。右の硝子に裂の入つた眼鏡を懸けた書生が取次に出て。變に訛のある聲をして。「何方から。」といひながら蜘蛛の如く跼ると。小鬢に一團浮いてゐた雲脂が。ちら〳〵肩へ降積る眺望の。氣味の惡さにお鐵はぞつとして。「姉さんは癇性の癖に。よくまあ彼を何ともいはない。」と入らぬお世話を氣にしてゐる。

取次が引込むとお銀が。家にゐた時分は命から二番目であつた他所出の綺羅に。今度出來たらしい黒繻子と更紗縮緬の晝夜帶をしめて。生意氣な束髮に結つて微塵飾氣無しといふ頭で。内白粉を傅けて臙脂を一寸點して。粋な粋な! 父親が見たら苦い顏をしさうな姿で出て來て。

「おや。さあ此方へ。よく早くねえ。」といひながら案内する後に跟て行けば。四疊の玄關の次が十疊の應接間。食べたいほど綺麗な天鵞絨氈を一面に敷詰め。眞中に淺黄地に花鳥の縫模樣のある薄羅紗の卓子被をした圓卓を据ゑて。一間の板床に古薩摩の唐冠の香爐。幅は一蝶が浮世人物の二幅對。床脇の違棚。袋棚の上には古畫の聖觀音。違棚には古代蒔畫の手文庫。並べて印譜一帙。白磁の扁壺には。庭のを奥樣が入れたとも想はる。山茶花が一輪。此下に古竹提梁式の菓盆に佛手柑を盛つて。額は大小二面を相對に懸けて。一面は東湖自筆の七絶。一面は某大臣の揮毫なり。此次奥の間の正面。鋪込袋棚の下に西洋式の書棚耶蘇の厨子のごとく。此中の書籍が凡そ千圓と聞いて御母親吃驚。隅に黄檀の大机を据ゑ。其前に緞子の座蒲團。脇に手爐。茶道具。煙草盆などよろしく。總て主人居間の體。隱居所の咳の聲にて幕開〳〵といふ誂。お鐵は始終信次が古除に尋ねて來たといふ見得で唯きよろ〳〵。母親はまご〳〵。旋て奥方の居間に通れば。下女が黄八丈の茵を持つて來る。手爐が出る。茶が出て少時すると。隱居は羽織を着換へて挨拶に出て來る。

「此處は汚うござる。彼方へ〳〵。」と切に勸められて母親は立上る。

「貴方も〳〵。」といはれて。お鐵は何も言はずに會釋ばかりしてゐると。

案「これは宜しうございますよ。」

「澤山御馳走しておもらひんさい。はゝはゝ。」

と男のやうな高笑をして。

「さあ。あんた。」と母親を伴れて出て行く後影を。お鐵は眤と見送つて。

「可恐い顔だねえ。」　と極小さな聲。
お銀は何ともいはず唯莞爾。
「姉さん旦那様はお役所？」
「あゝ。」　と横を向いて。何だか耳の底が痒さうな面色でゐたが。傍に在る長煙管を取つて。
「鐵ちやん。煙草を吃むで鼻孔から出して見せうか。」　とは餘程修行を積みて。自慢の一藝と見えたり。
「馬鹿々々しいぢやありませんか。」
奥方は蚤を捕るやうな指頭をして煙草を捻つて。雁首に詰めると。ちと餘計の分を挾取つて。
「いゝかい〳〵。」　玉子に手裏劍といふ恰好で。すう〳〵と吸ひ。ふうと見事に二條の煙を立てる。此處に到りてお鐵も感に堪へたか。
「おや〳〵。」　と極めて賞讃すると。圖に乘り。最う一服と取懸る時人の跫音。煙管を押隱すと隱居が入つて來るので。二人共慌てゝ居住を正す。
「お銀さん。御酒の支度でもなさらんか。」
「母ならば一向不調法でございますが。」
「お鐵みんさらんか。それなら御膳の・・・・。」
「あなたはお一杯召上りまし。」
「私も一人なら頂けませう。お鐵さんっ　ちとお出んさい。」　と捨言葉で出て行く。

お鐵はかねて姉に逢ひたい〳〵で。胸には一杯話柄が溜つてゐれど。扨逢つて見れば昔日のお銀ちやんにあらざる澁谷の奥方は。流石に奥方の見識が附いて。自分とはまるで段の違ふ人のやうに考へられて。左右なくは擧つて寛られず。何となく變に他人を見るやうな心地がしてならぬ。其癖姉の方では打解けて煙草の曲藝もして見せる。相互の外には他の知らぬ祕密の定なれども。妹の方で氣後がして。兎角奥歯に物を介むでゐる。其著しき證據に。何かにつけて遠慮をするやうな氣色が見える。

どうも隔心があつて眞實の姉妹のやうに思はれぬ。親類の娘が遊びに來たやうな挨拶で。其では面白くないからと。お銀がいろ〳〵手を盡して此隔を打毀しに懸れど。お鐵は固く氣を緊めて。或親しい奥樣のやうに遇つてゐる。想ふに。之はお鐵の氣質がちと偏人の方ゆゑ。姉だな。お銀ちやんだなと心の中では思つても。奥樣の姿が強く眼に染みて。多くの奉公人が氣味の惡いほど唯々いふやら。其處等の戸棚を開散らして。立派な道具を惜氣もなく取出すやら。此宏々とした家内を自在にする威權を非常に驚くと倶に。其樣威權ある人を崇ふ念が出て。どうも狎れにくいのである。二つには。かねがね兩親にいはれた言がある。姉も澁谷の奥樣になつたからは。家に居た時分のお銀ちやんと同じに思つて。仂なく狎々しくする事は決してならぬ。姉の顔にかゝる事だと。其も感化の力はあらうけれど。首には含羞が先に立つて。おのづから思ふ事も控目にして言はぬやうになるのを。お銀は不滿に感じて興無がる。お鐵の方でも逢つて見れば想つたよりは樂みが少い。

時分といふので御膳が出ると。尋常ならぬ馳走で。皿の數々所狹く。箸が戸惑して。見たばかりでも腹中が一杯になる。旋てお銀の案内で庭を巡見り。裏木戸から畑の方へ出て座敷に還れば。食事の跡を一掃除して。人數ほど褥を敷き。前とは變つた茶道具を按排して。銀瓶がふう〳〵と煙を吹いてゐる。茶菓子は切籠細工の硝子の大蓋物に西洋菓物と。九谷の鉢に象牙箸を添へて色々の蒸菓子が山盛にしてある。隱居も同席で四方山の雑話の内に車の音ががらがら「お歸り」「それとお銀は急いで出迎に立つと。「あ。然うか。」といふ聲がして。緣先に現れたのは主人の澁谷周三。小豆色の小外套を被て。思ふ樣縁の反つた茶の山高帽子を冠り。茂布革の書類入の。裂けさうに脹れたのを小脇に

して。一寸會釋をして次の間に入り。頭髪を撫でながら直に出て來る。

緣談のあつた時。(あの人かい。)と眉を顰めたお鐵も。つら〱視るのに。我姉の夫と思ふ所爲か。容貌は惡い。惡いけれども氣障な處が無くて。いつそ武骨らしい處が却つて好い。様子も言語も顔に似ず柔和で。氣も善さゝうな。かうして姉様と並べて見ると。松の樹に藤が咲いたやう。容色の揃はない夫婦は照應が惡いとばかり想つてゐたが。決してさういふ事はない。男の異に生白いのと。女の美いのと伴立つて行くのは。信に見ばの好くないものだが。此人と姉さんは信に照應が好いよ。眞實に好いよと感心した。

三十分許愛想をして。此から宴會があるからと。挨拶をして又出て行く。夕飯を食べてから歸れと。陰にお銀が留める。陽には降居も。此方の暇乞の挨拶を。一向取合はずにやい〱と抑留はすれど。今日散財を懸けるほど。お銀が姑に對して其丈心勞をしなければならず。又實家が良くないだけに口善惡ない奉公人に陰言を利かれるのも辛し。何の彼のと母親は母親だけに氣を働かせ。若いものゝ思ひつかぬ。綿密な思慮を持つて無理に歸るとなつて玄關に出れば。洒落さうな車夫が綺麗な二人乘を格子外まで附けて待つてゐる。菓子やら有合の料理やらを。詰め持上るほど填めた二重箱の包を。下女が先に持つて出て。滴れ物だからと車夫によろしく頼む。

之に乘れば。往はよい〱還は早いで。日没前に家に着くと。洋燈掃除で火屋を壞して。指を切つて狼狽してゐた父親が。やれ待兼ねたと飛んで出る。

五

其後は天下泰平家内無事で。お銀からの手紙にも。旦那様がどう遊ばされたの。母様はかう仰せられたといふ風説も無く。それが何より結構と生家方の悦喜。此上の願は。初孫の顔を見たいのと。お鐵に好婿を娶りたいの二件であるが。女親は家に掛替のお鐵といふものがありながら。離れてゐる姉のお銀が案じられるやら戀しいやらで。火事でもあればお銀の方ではないか。風が吹けばお銀の方は寒くはあるまいか。旨い物でもあれば。あゝお銀に一口と。何かに就けて。念に懸るはお銀の事ばかり。因でお鐵は。母親の(お銀〱)に聞飽きて。又かいと可厭な顔をして。私の事も適には言つてくれても可さゝうなものを。同じ腹の子ではないかと少し妬ける氣になり。母親の曰く。其は同じ子だものを。彼が可愛くて此が憎いといふ理はさら〱なけれど。お前は私の手許に居る。お銀は遠く離れてゐればこそ。雨に風に案じられる。其はお前。親の情といふものだ。其證據には二人一所にゐた頃には。少しでも分隔をした覺は無い。一個の物を尺度を當てゝ二個に折つて。分けて遣るほどにしてゐたではないか。と切に分疏をいへば。それでも内々は姉様の方を。餘計に可愛がつてゐた證據が。又私の方にもある。其は謂はれないけれどもなどゝ未だ拗る。

懸る次第なれば。儘になる事なら毎日でも母親はお銀の家に行つてゐたい。行つてどうするといふ事もなし。會つてからといふ話説のあるではなけれど。唯行きたい。會ひたいといふ。其處が親の情かも知れず。矢も楯も耐らぬほど行きたくても。今は我子ではない澁谷の奥方。其處には主人もあれば親もある。我出店でも見遁るやうに。繁々は行きかねる。行きかねるほど意固持に念は嵩す。

そこで。用も無いに繁々出入は不良と知りつつ。何とか用を拵へては出懸ける。お鐵も一所に其都度伴れたい事は山々なれど。さうしては

腹立つて遊山臭くなるから。色々に宥めては。三度に二度は留守番をさせる。それ又愚痴をいふ。御母様は一人でお樂み。つまらないのは御父樣と私ばかり。私が一所ではどうせお邪魔になりませうからと泣顏をするのを。父親が見兼ねて。行くものなら伴れて行けと。家では責められる。彼方では。さしたる用のあるでもないのに。何のかのといつて好く來る嫁だ。とまづ隱居が顏を顰める。といふほど實家へ度々出入るではなけれど。姑は姑根性で。生家の親の餘り來過ぎるのは。畢竟嫁の心の鈍る原因で。何時までも生の親を恃む氣が拔けぬと。自然姑が粗末になりたがると。異に僻見を出す。母親からは之を僻見といへど。萬更僻見とも謂はれぬのである。

姑は最一つ僻見を抱く。其僻見は。來るの日に遡るにあらずして。遠く此嫁の來た時からともいふべし。身一つの己より優れた家から嫁は娶ふなといふ格言は隱居も承知してゐるが。さればといつて餘り不釣合の貧家の嫁を娶ふのは。家の恥辱といふものでござるよ。今は知らねど往時はと。媒妁人と周三を並べて置いて。隱意を知れがしな言をいうたれど肯かれずに。お銀を娶る事に決つたものを。隱居の身で故障をいふ理もなしと目を眠りて。お銀が來て見れば氣は着く。優しくはする。當人に言分は少しも無けれど。生家の家筋の卑いのが頗る御意に召さずして。先方は磁石で此方が鐵。いづれ吸はるゝに極つてゐると。其ばかりを苦にして。私の亡後は彼の東京辯のちやほやと世辭の好い母親が這入こむでどういふ事をするか知れたものでないと思つてゐる矢先へ。此頃はもう其下拵へか。手廻しの好い。煩いほど出入を爲始めたが。會計はお銀の預りゆゑ。どんな幻術も自由自在なれば。其處を見込むで強請に來るのかも知れぬ。事情をいつて泣付かれて見れば。親だもの。苦しい思をしても貢ぎたいは人情。まして財布尻を握つてゐて見れば。摑出して袂へ捻込ませるは知れた事。十が九まで其に相違はない。

金錢の事は措置き。來る度に何か知らぬ包を提げて歸るのを。お增に聞いて見たれば。買つて置いた魚だとか。肉だとか。到來の菓子折だとか。時によれば澤庵のやうなものまで。茶漬だの。味が好いのといつて持せて歸すさうだ。其奉行はお光が鼻藥を貰つて忠義立に勤めるといふ事まで知つてゐる。

其だから言はぬ事ではないに。周三もまた周三だ。美貌望みで娶つたとはいひながら。あれほど鼻毛を延ばさずともの事を。お銀がいふ事爲す事是が非でも唯々と。馬鹿になつて聽いてゐる事もないものだ。あれだからお銀も好事に思つて精々と運ぶのだ。此家を嫁の親などに掻廻されて耐るものか。と浮世を十五年前に捨て。隱居所に籠つた姑も。政權藤原氏に歸すると見て。痛嘆悲憤の餘り。奮然被布の袂を擧げて。大いに爲すあらむといふ意氣組で。此頃は前のやうに隱宅の隅に屈むで。綸入新聞のお家騷動ばかりを苦にしてはゐず。居間の火鉢の正面。張肘をして烟草を吃しながら。まづ嫁の擧動から奉公人の働振をじろり〳〵。八方睨といふ眼色をして。何も言はずに腹の中の小言帳に委細留めてゐるといふ樣子。

然とは知らず母親は。有りもせぬ用を拵へて來て見ると。之はどうした事。隱居どのは日暮の梟といふ顏で。まじ〳〵と火鉢の正面に坐つてゐる。眼中の容體、眉間の皺の工合。いかにも尋常ならぬ樣子で。奉公人はまた心中大に憤る處あるがごとく。母親は頗る愼む處あるが如く。常は竈の前に笑聲のするのが。今日に限りて火の消えたか。水を打つたかと想ふほど寂寞閑として。流許で大根を切る音が妙に冴えて聞える。

お銀を見れば。いつもならば火鉢の前に天鵞絨の布團を敷き。隠居所へ上げる茶でも淹れてゐる傍に。小説本の讀本了が伏せてあるといふ儀なるに。今日は臺所に自身出馬とありて。午飯の菜の指揮をしてゐる。

母親は入つて來たは來たれど。變つた様子に氣を奪れて。ちと足が進みかねるといふ状。婢等は「お入來なさいまし。」と襷を外しながらばたばた下坐をする。

「もうお支度ですか。」　と愛想を與れてから。簡略に親子の挨拶がある。

此時お銀は餘り嬉しくない顔をする。

「光や。之が煮えたら直にお魚を架けておくれ。」　と母を伴れて中の間に入り。

「此頃はちつと御機嫌が悪いのだから。」　と耳語をする。

「然うかい。」　極小さな聲に極力を籠めて。母親は直と居間に通ると。隠居は一目見て。（また來た。）といはぬばかりの顔色で鰾膠ない挨拶をして。後は物を言ふのも大儀でござるといふ風なり。

此處でちやほやしてくれゝば。母親も居易いといふ譯なれど。根が格別の用事も無くて來たのゆゑ。餘り度々來るのを變に想つて。隠居の機嫌でも悪くなければ好いがと。案じてゐる處へうんと一睨ぐつと肝頭に應へたのである。

然し自身が來てから急に不機嫌といふのではなし。むか腹立と兼て聞てゐれば。何か此事を氣に懸けてゐるのであらうから。どうか機嫌を取直すやうにしたいと。種々御意に入りさうな事をいつて見れど。蒟蒻に吻瓢を懸けたほども利かず。「然やうでござるかな。」などゝ張合のない應答ばかりして寄せ着けず。忌々しい婆めと勃然とはしたれど。可愛娘の姑。姑の不機嫌の捨所は嫁の身一つ。お銀の難儀になる事なればと。目を瞑つて下から出れば増長して。遂には新聞を取つて讀始める。さほど對手にするが否なら。隠居所へ引籠むだが好さゝうなものを。どうして此處が一寸でも動けるものかとは隠居の腹なるべし。

かくまでにしても隠居に見放された母親は。此上の手段は無しと諦めたが。お銀を對手にして談話を始むれど。例の用無しゆゑ談話らしい談話は出來ず。少しは話の無いではなけれど。其は隠居を憚る事のみなれば。母親も戸惑して此處少時默然。隠居は澄して新聞を讀む。お銀は灰に○や□や十文字を畫いたり消したり。母親は鐵瓶の霰を食指で摩でながら。湯氣の立つのを眤と見てゐたが。

「それからね。お鐵の縁談だがね。」　と漸く一條の血路を開く。お鐵の縁談といつても極模糊した事で。未だ相談に來るほど出來たのではなけれど。隠居の手前子供ではなし。萬更用無しで遊びに來たと想はれるのが苦しさに。不圖考へて。さも用あり氣に恁う言つて見たのである。

お銀は母親の切々來るのを。隠居が快く念はぬとは薄々知つたゆゑ。今日も亦來たのを南無三首尾惡し。どうか隠居の前へ取繕はなければと心を痛めてゐる處へ。妹の縁談とは成程親の來るのも尤な用事。何の用で來た。來ずともの事をといふ顔の隠居へ是見よがしに。

「おや。お鐵の……而して大概極たんですか。」

「極つたといふほどでもないけれども。まあ良さゝうな話だから。お前にも急に行つて相談して來いつてね。また御父様が彼性急だものだから。何でもかでも今日行つて。是非話をして來いつて。突出されるやうにして來ましたのさ。」

隠居は何も聞かぬ顔で。頻に新聞を讀むではゐるが。甚麼談話をするかと引立耳で。其方にばかり氣を取られてゐるゆゑ。口はお留守になつて。同じ處を繰返しに讀むでゐる。

「さうでしたか。見合は？」

「四五日内にしやうかとも思つてゐるのだけれど。其前に少しお前に相談をしたい事があつてね。」

と言未了てわざと忸怩する。忸怩などはせずともの事なれど。これからは他聞を憚る秘中の秘密。隱居は其と氣を利かして。大分遠慮をするであらうと思の外。猶且悠然自若として新紙を眺めてゐる。（讀むでゐるにあらず）

母親は此業突張といはぬばかりの悔しさうな目をして。隱居の樣子を熟と視てゐる。

「さうして先方の身分は？」

お銀は此話を眞に受けてどもゐるやうに。突込むで來るので。母親は大きに辟易して拮据す氣味あれども。目顏で知らせる事もならず。爲う事なしに落着き拂つて。

「父親の上役の方の周旋で。お役所は違ふけれども。やつぱり勤吏さ。」

「それはまあ。大概好いぢやありませんか。」

「まだ最う一つあるのだよ。」

「外に……」

「外にさ。其方は會社へ勤める人だが。之も相當の口さ。それで……。」

と頭ならば首を掉るか。のゝ字を書くかといふ處なれど。掛軸なれば雁首の脂を火鉢で抉つて。少時思ふ處あるがごとく。遠慮する處あるがごとく、其内に雁首の掃除も出來て。すうと一服吸つて。とんと敲き。最う一服吸つて敲いても。隱居は更に耄ともせず。例の通り新聞を眺めてゐる。

「裏の山茶花は盛だらうねえ。」と禪の問答でもするやうな。緣のない言を突然言出す。

「盛はもう過ぎて今は何も無いけれど。もう少し經つと梅がね。」

「梅は好いねえ。花はもう梅の事だ。」

「あゝ。庭の枝折戸の側の蜜柑が餘程黃みましたよ。」

「あの蜜柑が？　さぞ見事だらうね。」

「行つて御覽なさいな。」

「蜜柑なんぞは八百屋に列むでゐるのより外に見た事のない人だから。ほゝほゝ。」

蜜柑を玉につかつて此場を免れる計略。やれ嬉しやと母親はお銀と倶立ち。隱居一人置去にして庭に出る。と。隱居は急に新聞を捨てゝ伸上り。硝子障子から二人の影を透して。

「何を談しくさるか。」と鐵瓶を下して火を掻け。手を暖るとて火鉢の緣に懸けた肘が下つて灰にすぼり。はつと思つて擧げる袂に扇られて、雲のごとく灰が舞ひ立つ。

「これ誰か。增！　光！」

女が駈着けて。おや〳〵と箒に團扇。水に雜巾。拭いたり敲いたり。隱居も堪らず陣を退いて本城に逼籠む。

二人は庭から裏へ出ながら。こそ〳〵話。

「どういふものだか此頃は大變機嫌が惡いのだから。當分御母樣も來ない方が可いよ。」

「何でそんなに機嫌が惡いのだえ？」

「何だか解らないけれども。何か旦那に言はれたらしいの。」

「お前にも辛く當るかい。」

「何。別に。辛く當つたところが悖はずにそつとして置くから構ひはしない。誰が來てもあいふ佛頂な顏をしてゐるのだから。御母樣も來れば側杖を食ふから。當分來ない方が可いよ。」

「あゝもう懲々した。來やしないよ。ぢや別に用も無いのだから私は歸るよ。」

「まあ御膳でも食べて。」

「あの目で睨まれて咽へ通るものかね。」

「ぢやあお歸りか。」と帶の間から懷中物を出して。紙幣を一枚紙に包むで。

「御父樣に何か。」

「おや然うかい。」と氣の毒さうに請取る。

六

歸途に母親獨り徐く。隱居の今日の不機嫌はどういふ理由であらう。銀が何か氣に入らぬ事をしたのか知らぬ。さらも想ふけれど。聞いて見れば旦那に何かいはれたらしいといふから。さらかも知れぬ。あゝいか風の姑だから。我は親だよ。大事な御母樣だよ風を吹かし過ぎたので。旦那も勃然とし、何、か言ひなすつたのが氣に障つて。一同に八當りのお相伴をさせるのかも知れぬ。一同のお相伴に兎も角も。私にまで當る事は無からう。私を何だと思ふのだ。馬鹿々々しい。私は銀の親ぢやないか。銀の親なら周三樣にも親だ。して見れば隱居とは親と親同士で同等の位ぢやないか。それでも娘が世話になると思ふから。一段下に出て御隱居樣御隱居樣といつてやれば好氣になつて。他を目下に見て大きな顏をしてゐる。何の事た！

娘が可愛からこそ腰を卑くして。月に一度でも行つてやるのだ。何のあの佛頂面に用でもある事か。もう〳〵もう〳〵もう用があらうが。何があらうが。行つてやる事ちやない。馬鹿馬鹿しい。憤起しても腹が立つ。今日の始末は何だ。我と我が話を爲懸ければ。何處に火事があるといふ顏をして新聞を讀みくさる。母親が娘に會ひに行くからは。色々話のあるのは知れた事だ。側に他人にゐられては骨肉同士の話は爲惡いぐらゐは誰でも知つてろ事だ。それが解らないくらゐなら山出しの田舍ものだ。おゝ田舍ものだつけ、第一隱居といふものは、隱居所へ引籠むで。猫火鉢にかじりついて。新聞でも見てゐれば可いのだに。嫁にしや〳〵り出して奈何いふ意だらう。

噫それにつけてもお銀はさぞ辛からう。私なぞは半日ゐても此樣に腹が立つて悔しくて耐らないのを。御母樣々々と何事も風の柳に受流して。機嫌を取るといふのは大抵な事ぢやない。それにあの娘は鐵と比べると。氣の快濶けた發揮發揮した娘であつたが。彼處へ嫁つてから大層落着いて。落着いたといふより何とも無く鬱いで。始終考へ事でもしてゐるやうな鹽梅で。家に居た時分のやうでないのは。勿論一家の主となつたのだから然らもあらうけれど。一つはあの隱居に何のかのと苛まれるので。自然と氣が弱くなつたのに違ひない。なるほどこれだから世間では姑のある家へ娘を遣るのを否がるのだ。尤だ。無理はない。

那樣事をいつちや何ぼう何でも濟まないけれど。あの又隱居が來年や再來年お目出度くなるやうな格ぢやない。もう六十六になるといふのに。髮は革々として皺寡で。腰は屈まず目はたしかで。馬のやうな齒で澤庵の厚切を咬るから。總入齒だと想つたら入齒は唯四枚だといふ。第一骨太の嚴丈造で。ぼちや〳〵と水澤山とは因果な事ぢやないか。まだ十年はあの娘も苦勞を爲ることだらう。

「おや〳〵行過ぎた。車やさん二軒後の家だよ。」

「あら御母樣！」とお鐵が格子を啓けて待つと。氣の無い聲で。

「今歸つたよ。」と毛絲細工のシオールを渡す。之はお鐵の所有品なるを。今日は寒いからとて時借をしたものと知るべし。

「御母樣。午飯は？」

「未さ。」と五音の調子は頗る不平は帶びてゐる。

「さう。なぜ食べて來なかつたの。」

「今日はそれ所ぢやなかつたよ、あゝお腹が空いた。お前もう濟むだのかい。」

「今し方。一人法師でおいしくなかつたよ。」

「何かお菓子を拵へて？」

「魚屋がね。大變味美から味噌煮にってね。鯖を置いて行つたから味噌煮にしたよ。本當に旨い鯖。支度をしやうか。」

「あゝ早く爲ておくれ。」

おゝ饑い〳〵といひながら帶を解いて。暖めてある不斷着を取らうとして火燵を啓けると。櫓が焦げて黄臭いほどの火氣。

「まあ此は！」　と慌てゝ火箸を取つて。おやおや〳〵と埋けながら。

「お前まあ此火はどうしたんだねえ。襦袢が焦げやしないかね。」　と衣類を探すと櫓の上には無くて辷落ちて壁の方に固つてゐる。

「何だねえ。鐵。」と不承々々に拾ひ上げると。

「何。どうしたの？」　と臺所から覗いて。

「あら落ちてゐたの？」　ふゝふゝふゝと笑ふ。

「笑ひ事ちやないよ。おゝ冷い。ほう冷い。」　と面を顰めながら幾度も身顫ひをして着て仕舞ふと。火鉢の側に坐つて先一服。

其內にお鐵は劾々しく膳立をして。母親の前に据ゑて。脫捨てゝある衣類を疊みに懸る。

「御母樣。姉樣は何をしてゐて？」

「別に何もしてゐなかつた。」　と飯に茶をかける。

「何とかいひましたか。」

「別に何もいひはしなかつた。」　と手を停めて母親の顏を見込むで。

「あら可厭な御母樣。」

「どんな樣子だつたか些と話をなさいなね。」

「別に話をするほどの事はなかつたよ。」　と鯖の骨附の肉を一口入れて。菜漬を挿むで又一口入れて。共箸を茶椀の中の茶でさら〳〵と濯いで。木地塗の二箇所ほど剝げた箸箱にしやんと納めて。襟の小楊枝を拔取つて。「大旨おいしい鯖だつた。」と膳を少し前へ押遣り。物思はしい顏をして齒を鑿つてゐる。

お鐵は此躰を見て合點がゆかず。

「御母樣何だか鬱いでゐるのねえ。いつも姉樣の處から歸つて來ると御機嫌が良いのに。どうしたの。」

之を聞くと母樣は憮然疊を瞶めてゐながら。一寸苦笑をしたばかり。直に又眞面目に復つて思案してゐる中に。啣へてゐた楊枝をぶッつり前齒で咬折る。

どうも異した樣子を氣にしてお鐵が又訊ねる。

「どうぞしたの？　御母樣。」

「なあに。」　と素氣の無い回答で拂はれて。お鐵は希有な眼色で母親の樣子を測量しては見たものゝ。一向理には解らず。但不思議な事だと腑に落しかねてゐる。衣物も羽織も帶も襦袢も疊むで。簞笥に藏はうと。起つて火燵の櫓を退けると。紙に包むだ物が遺ちてゐるから。拾つて開けて見ると貳圓札が一枚。一寸小首を傾けて。背後へ隱して。御母樣と呼び懸け。

「遺失物をした覺はないの？」　と母親は少し考へて。あゝと兩手で火鉢の緣を拍つて。

「あるとも。大事なものを。」　と出して見せる。

「無代は還さないよ。」

母親は笑ひかけて。

「何處に遺ちてゐたえ。」

「御母樣是はどうしたの。」

「どうするものかね。私が持つてゐたのさ。」

「ほゝほゝ。不可ませんよ。隱しても。」

「何を隱すものかね。」　と眞面目。

「不可ませんよ。一寸此芳芬を嗅いでどらんな。」

と包紙を母親の鼻頭へ持つて行く。嗅ぐと香水の芳芬がする。

「好い匂がしませう。」

「するとも。」

「いけませんよ。隱しても。」

「何だねえ。」と母親は叱るやうな目で視る。

どんな目をしてもお鐵は一向平氣で。(いけませんよ)を又繰返して。

「これはね。これは。ホワ‥‥ホワア‥‥ホワルト薔薇といふ舶來の香水の匂で。姉樣が手巾に布けるのに持つてるのをちやあんと知つてゐますよ。」

四相を悟る重忠が。といふ鹽梅で。屹と見えをするほどお鐵の仕濟し顏。御母樣ぎつくり。殆ど已むことを得ず。

「さうかねえ。」と苦笑し。

「でせう。」とお鐵は意有るがごとく首を傾げて。母親の顏を覗きこむ。

「奢らうよ。」

「何を。御母樣。」

「何でも好いものを。」

「何にしませうね。」

お鮨にせうか。お蕎麥にせうか。いや〳〵直と飛んでお鰻にせうか。其が一番好いのだけれど。餘り增長つて熱を吹くと。叱られるに違ひない。それぢやいつそ鰻に似てゐる骨拔鰌にせうか。お刺身も好いし。蒲鉾を買つて附燒にするのも隨分旨し。

母親は舌の痛くなるのも忘れて思案煙草を吃しながら。切に今朝の無念を思返してゐる。

お鐵は一思に鰻飯と決めて言出して見やうか。「何だね。そんな大相な事を。」と遣られはしまいかと暫く躊躇ひて。任よと遂に切出す。

「御母樣。」とまづ呼むで見たれど一向返事無し。

「御母樣。」と最一度。それでも返事無し。

「一寸。御母樣。御母樣てば。」三度目は一寸といふ冠と。てばといふ沓付で。餘程念入に呼むだれば。通じた代りに「何だね。」と思つたより手嚴しい挨拶。其聲斜ならず不機嫌なり。

お鐵は憮然として默然。右の食指で左の掌に鰻のうの字を續け樣に幾許も畫いた跡を摩りながら。悄返つて母の樣子を視てゐたが。旋て火鉢の傍へ擦寄つて。また「御母樣。」と極小さな聲をして小當りに當つて見ると。從前の通り默々として深く思案に暮れてゐる。火鉢の緣に持せて啣へてゐる煙管を見ると。雁首は疾に殼になつてゐるのを夢中ですぱ〳〵やつてゐる。お鐵はそつと煙草を撚つて塡めても知らず。火を挾むで點けたのも知らず。例の通りすぱすぱとやると。卒に來た煙を吸過ぎて。「えへ〳〵。あは〳〵。」ほゝほゝほゝとお鐵は笑ひ轉ける。

「何を爲たんだねえ。」と猶且煙草の事は知らず。正氣に復つた處が機會と。お鐵は奢つてもらふ註文をすると。

「大業な事をいふぢやないかね。」と察しの如く御採用がない文句なれど。其裏自ら調子の弱い處あつて。此處から擊つて來いといはぬばかりの隙を覗つて口說立てれば。

「まあ御父樣に伺つて。」と意あるがごとく。遁げるごとく。然はさせじと追窮めて。到頭唯といはせて。

「まあ嬉しい。」

七

豐作には一粒萬倍。手習には一字千金。詩には一日三秋。軍記には一騎當千。一の數を百。千。萬に當てた語は幾多もあるが。玆に小姑は鬼千疋と唱傳へて。誰が割出したものやら。不思議な數理がある。

愚案ずるに何樣小姑といふものは。嫁の身にして鬼千疋でもあらう。尤も雪は白いに極つてゐながら。年代記には紅の雪降るといふ事もあり。仙家の雪は紫としてあるから推して見たら。中には小姑でも佛一體といふやうなのが無きにしもあらざるべし。石といふものは重いに定まつてゐても。氣紛れにおらは水に浮いて

見たい。と輕石といふ奴があるのも同じ理窟かも知れぬ。けれども雪といへば白い。石といへば重いに。人が合點する其理で。まづ小姑といへば。嫁たるものは蛾眉を顰めて。あゝ鬼！と念ふが多く。實際もまた其が多いやうに見受けられる。

同種の人間である小姑が。何が故に鬼であるか。其又鬼の一疋ならず。百疋ならず。千疋であるかと考へて見るに。凡そ嫁といふ身上は殆ど一種の居候で。かの雨だれほどに戸を叩いたり。鐵納戸の茄子を食つたりする軟骨動物のごとく。食無魚と出無車が愚痴の種になつて。女主人の不興をおそれみ〳〵。氣輕に水を汲むで。言はれぬ前に障子の切張をするぐらゐで。責任が盡せるやうな生易しい食客とは譯が違つて。所謂任重うして道遠く。苦勞が多くて不覊の寡い居候である。

はて何故といつて御覽じろ。第一に夫といふ。護謨の釣竿のやうに馬鹿に取扱ひにくい物の世話をせねばならぬ。鶯のやうな小鳥一羽飼つてさへ。少し放綱してゐると。さあ事だといふ始末になる。況て無類の寶貝をやで。其手の懸ること。世話の燒けること、骨の折れること。氣の揉むこと、腹立さへ少時と髪を握り。あれお歸りと哺を吐くなどは。恐らく九牛の一毛であらう。

其で又貞女は兩夫へ見えざる事になつてゐて。女大學にも唐土には嫁を歸るといふ。我家に歸るといふ事也として。愁くとも後は寢易き蚊遣哉などゝ。どのやうにも辛抱をしろ。死ぬとも夫の家を出るなとまでに訓へられてある。そこで針の筵に坐らせられてもと怺へて。三界に家無しと諦めねばならぬ事にしてあるから。一種の居候で。また一種の終身懲役でもあらうか。

然し夫の無理とか。姑の非道とか。其外添遂げ難き事情があれば。無論離縁も取らうし。家へも還るゝ其をあの女が違つてゐるといふものは。一人も無い。けれども。其身の不幸とはいひながら。去られたにせよ。おん出たにせよ。兩夫に見えるといふ事は。兎にも角にも女の身には此上もない瑕であるから。誰も死ぬのゝ次ぐらゐに可厭がる。さほどに可厭がる離縁沙汰であるから。自家から求むるやうな事の無いやうに。と寢覺にも思の種にして裝を愼まぬものはない。愼む心になるが常情であらう。愼まぬのも隨分ある。其は人の屑といつて。紙屑。絲屑。鋸屑ほども役に立たねば。好くしたもので買手もない。

扨嫁といふものは。これほどに爲なければならぬものであるから。無能無効な猫の抜毛のやうなものかと思へば。寡夫に蛆が生くといつて。一家内には米鹽薪炭の筆頭たる大事の品物で。家内の女王であるから内君といひ。內寶といふから寶でもある。さほど有難くもまた尊き品でありながら。給金を貰つた例もなく。褒美を戴いた話も聞かぬ。而して居候のごとく。懲役のごとき。境界に墮されて。花散りて空しく梅干となり。嫁古うして姑となる頃。やうやう樂をするのでもあらうが。其頃にはもう戒名が出來てゐる。

右の通り嫁の身には夫一人で十分で。澤山で。精一杯で。之でも如何かすると。揮舞しきれない。いかにも人間一匹の始末をするのであるから。此取扱は隨分至難いには相違ないけれども。先方も一人。此方も一人。ところで先方は夫で此方は女房である。天の配剤妙なる哉は此處等であるか。男女の間には愛情といふものが天然と出る仕掛になつてゐて。此大產物の脂が兩性の間を和げて。軋轢を遏めること請合の妙薬に出來て。歌にも番ひ離れぬ鴛鴦の、詩曰死爲二同穴塵一。まづ憖ふ格に行く譯のものにな

つてゐる。因で此愛情といふ和合剤の脂が。始は水のごとく。後にはとろ〳〵になるほど多量に分泌されると。夫婦二體が粘着いて。其から其上に脂が凝まつて粉衣を被けたやうになると。どれが夫の身だか。どれが女房の口だか分らぬやうになつてしまふ。此時を二身同體といつて。彼も無く我も無く。夫の心は妻の心。今日は花見に行かうか。向島へね。其が可。お酒はおよしなさい。うゝよさう。と恁云ふ場合には琴瑟和合の関々雎鳩のといふ語などは已に迂こしい。

百人が百人恁う行きはせぬけれど。恁うもなるべき特効のある脂であるから。嫁が夫に事へるのは。主人に事へるやうなものではない。女蘿非獨生であれば。頼む喬木に攫むで。其恵を受けるだけの義理はせずには置かれまい。夫一式の世話は女房の役目である。それくらゐは固より覚悟の前で嫁にゆく。

然し。また攻撃するやうで恐入るが。姑なるものは。實に贅肉さ。贅肉といふは嫁たるものゝ味方をしていつた言で。道をいへば夫の母であるから。則是母で。贅肉とは勿躰ない。大した尊像ではあるが。彼と我との間には愛情の脂(夫婦の和合剤)といふ代物が湧かないから。何處までも心は他人で。此他人の氣を抜くには。例の脂より外に薬がないのだから爲様がない。で。他人といふものは。離れてゐると大相工合が好く。あの人はと慕はしいのは。舞臺の上で役者を見ると同じで。近いて見ると。大星力彌に皺があつたり中將姫に青髭があつたりする殺風景は免かれない。欠點が見える。襤褸が出る。口論もすれば摑合ふやうな事にも及ぶ。其中にも女は。豚肉に蟲のゐるごとく。僻見と嫉妬と意地惡の三毒分を含む有機物なれば。女の字を二つ書けば(あらそふ)。三つは誰も知る(かしまし)で。途上に娘の行合ふのを見てゐると。まづ相對してゐる内は。お姫様が花道に出たやうな狀で。擦違ふかと思ふと。双方の首が同時に捻れて。髱の毛筋が通つてゐないとか。木履が何寸減つてゐるとか。精細に觀察して。やうやく得心して別れる。

此執念の可恐しさは。女難といつて男の相に表れるほどの邪氣を持つたものである。これほどの可恐しいものが。此度は不思議な御縁とはいひながら。一家内に落合ふのであるから。嫁姑の間の四合行かぬのに論は無いといふべし。これがもし同等の權を持つたことなら。家内は修羅の巷。各々の得手々々で。舌戰もあらう。組打もあらう。目覺しくも又淺ましいであらうけれど。それ姑は母といふ御旗を翳して控へたるがゆゑに。嫁は百歩を譲り。三舍を避けるは。敢て其威を憚るゝばかりではない。南方深く不毛の地に入り。孤軍糧竭きて夜胡笳の聲を聞く有様であるから。心細いこと夥しい。援兵と頼む夫は。敵が母者人の御事であれば。弓を彎くことが協はぬ。それでは更に後楯にはならぬ。こゝが嫁の窘む所。姑の悍る所で。今は心安しと鎗襖を造りて。無二無三に突蒐る。嫁の方は何時も敗走して。小座敷の隅に匿れてしく〳〵泣沈入に事が極つてゐる。

といつて。姑が何處のも無理といふのではなく。嫁にも落度はあらう。あらから姑の氣にも入らぬといふ話になるのだが。我子の非は見えず。他の子の徳は見えぬ親心で。嫁のわづかの過失は。精細に眼に入るところから。自然疎ましくもなり。憎くもなる。麁想があつたから言つてやらうと思つても。他人だから先先と控へる。其控へる勘定が段々溜つて來ると。胸がむか〳〵爲だす。いよ〳〵爲る事が癪に障る。不和の基となる。

其處までに到つては回復のなるものでないか

ら。と嫁たるものは此禍を未然に防がむ爲に。まだ來て間もなく。姑も物珍しく。私の内も嫁が出來まして。と吹聽がてらに風呂へも連れて、御母樣お仕合せでございますなどを言はれると。無性に嬉しくなつて。まあ〳〵雪のやうだと背を無理に流してくれる時分から。第一に機嫌を損ぜぬやうに。落度の無いやうに。お氣に入られるやうにと勗める。此氣苦勞が業に一通りのものでない。加ふるに主任には夫といふものがある。二兎を逐ふのであるから難い。然し其をも難しとせずに勤めなければならぬ身上だから。大抵の侠やお劍は尾鰭を動かしもせず。爼板に載せられた鯉のやうに。唯恨めしい顔をして。責めに遇はせる人を横眼で睨と睨むばかり。これほど可哀さうなものはない。其でも姑の意は得難くて。半歳一年の間には機嫌も損ねる。尻尾も捉まる。やっさもっさが起る結局は、母親の貯金と嫁の身はいびられる事になつて了ふ。

凡そ女と生れ。人の嫁となるものは。前世いかなる宿業のありしかは知らねど。かく泣苛まれたら大抵の罪は消滅しさうなもの。さすがに[illegible]名が相談の上で帳消しにしてやつても可いわけなのに。最も罪の深かりし女中衆でゞもあるか。

此大姑の上に小姑といふ小附のある重荷を背負はされる御方がある。此小姑が小敵と見て侮るべからずで。姑の隱目附を勤めて。嫁の擧動は細大洩さず密告する。何日の何時頃お客へ出す茶菓子の何を撮むで。二口半に食べた事から。旦那に強請つて蒔繪の櫛を買つてもらつて。用簞笥の何番目の抽斗の何邊に入れてある。些と思ふなら持つて來て見せませうかまで附言する。此中に種々潤色をして。姑が氣を惡くするやうに話すこと尤も妙なり。

之が又どういふ理であるかといふに。例の豚肉塊に外ならすで。この嫁が幅をする樣に見えて。おのれはいはゞ厄介物。と異う邪魔にするのが氣色に障る。といふ僻見から面が憎くなつて。返報がしたいにも力の及ばぬ爲に。虎の威を假りやうと御注進をやる。此注進が私怨を帶びてすることゆゑ。姑が自身に見たよりは一層利が強い。で。單嫁の非を許くばかりでなく。私が懲された罪された。と陰ではどのやうにか小突廻される事を情なさゝうに哀訴するから。親子の情で之が又一層利が強い。[illegible]に油を沃がれては一大事と思ふから。目下ながらも嫁は待遇を善くして。無理も聞き。我儘をも通してやれば。其では此千疋鬼が滿足せずに又其上を望む。望む慾が充されなければ御注進で困らせる。困るから其慾をも滿してやると。増長して其上々々と募らす。我に法律なくして彼に權義ありと恃むから。其兇惡は鬼といふより外はない。一疋の鬼では然う手酷くは行くまいから。鬼千疋！と嫁は怖毛を慄ふのである。

八

抑爰に哀れを止めたのは澁谷夫人銀子で。彼は尋常ならぬ（むづかしや）の姑を持つてゐるが。姑は然したる事もなかつたのが。月日の經つほど箔が剥げて。おひ〳〵に本地が見はれて來る。此頃の樣子では。素人畑の胡瓜を見るやうに。姑の心が變に曲り出して。餘程持餘しの態。之さへあるのに。鬼千疋の小姑が突然出現した。小姑のあることは嫁姑の話には無かつたものを。と今更いつた所で爲方がない。

其小姑といふは周三の妹でお錦といつて。熊本鎭臺の工兵中尉の城井泰造といふものゝ家内である。なるほど嫁姑も話さなかつた理。自齒で家に居るではなし。餘所へ縁附いてゐた所で。東京にゐるのではなし。遠い熊本に世帯を持つてゐるのであるから。此鬼とお錦との關係は。娑婆の人が牛頭馬頭を地獄變相の圖で見る

くらゐのものであらう。これならば呵責に遇ふ理がないから。有つても無くても同じ事である。ところが。此度城井中尉は東京詰になつて突然出京すると。旅装束で直入に澁谷へ飛込むで。居宅の見當るまでと梱の繩を解いて。何年ぶりといふ親子の對面であるから。三日でも四日でも車轄を炙るやうに。隱居とお滋の物語は絕えぬ。絕えた所で物見遊山となる。每日のやうに親子連で朝から出懸けて。今日は歌舞伎座。明日は上野。淺草の凌雲閣。玉乘。花は無くとも久しぶりで向島。何のかのと七日ばかりも保養を爲續ける。家の人でも今は城井といふもの丶妻で。ともかくもお客であつて見れば。總菜一御膳といふ譯にも行かぬ。まして近頃は隱居の機嫌が好くない那裏で。此お滋がお氣に入と來てゐるのであるから。どうでも善くしなければいよ〳〵姑の感情を害する。其報は覿面お銀の眞向へ祟つて來る。

因でお銀が手の懸ることは普通でない。女の癖に酒を飲む。隱居も飲む。城井も飲む。夫は勿論飲む。每晩夕方から四人一座で始めて。十二時近くまでちびるから一升餘も入る。それくらゐの事は我慢をしても。お銀を始として婢等から書生に至るまで。之が爲に奔走させられた擧句。夜は一時頃でなくては寢られぬのに。朝はまた六時頃に起きねばならぬ。隱居やお客樣方は夢の七つも見るほど寐て。手水をつかふか間も無く午砲。

奉公人の嘆すことは！　陰では城井の事を(長)。お滋の異名を(お長)とつけて雜言をいひあふ。お銀の苦勞はまた這麼ものではない。

姑といふものは湯屋で會つても。御法談の席でも。嫁の讒訴をいひあふが古今の例であるから。我娘といふ敵手を獲た日には耐らぬ。澁谷は役所へ出る。城井は公用で留守になると。母子隱居所へ立籠つて。猫が水を舐めるやうな音をさせて。密談の種はお銀。からだあ丶だと隱居は小言帳を繰返して平常を打撒ける。其勢といふものは。銀河の九天より落つるかと想ふばかりで。僻見七分の愚痴三分で。「今では周三まで一緖になつて私を邪慳にする。もとはお前も知つての通り。實に優しい子であつたのが。此頃は宛然生れ變つたやうに慳貪になつて。何といふと私が惡いやうなことをいひくさる。それといふのも全くお銀が那麼に爲てしまうたのだ。」などゝ兩眼に淚を浮べて口說くから。お滋は。「どうも怪しからん。」と捨置かれぬ氣の先走りがお銀を憎む心となつて。「あんな優しい顏をして。猫撫聲を出して。御母樣どうだの。お滋樣辷つたのと。懐っこい言をいふ口と腹とは反對で。えゝ小癪に障る。」の念があるから。お銀のする事爲す事共裏ばかり見えて。「なるほど御母樣のおつしやる通りです。」「然うおちやらうとも。」と合體して。變に突懸る擧動をする。味方が一人殖ゑただけ。隱居の偏僻が一倍劇くなつて。お銀は手も足も出なくなる。

中尉も着京して精々一週間も休むだら。出勤せねばならぬ身であるから。其内に借家を探して。一日も早く引移るが至當であるのに。二週間經つても二十日經つても。未だどうも思はしい家がないといつて此家から出勤してゐる。

貸家一日といふものさへ出來てゐる此東京に。どれほどの家を借りるのか知れぬが。中尉殿の住はう家なら四五圓の店賃が精々であらう。そんな家は腐るほどあるのに。あの(長)は何處を探しあるいてゐるのか知らぬ。四五圓で土藏附の邸仕立の家などは。花のお江戸にはございませんよ。熊本の山の中とは土の直段が少々違ひます。一月でも店賃と米代を庇はうと思つて。無い〳〵といつて御厄介になつてゐやがる。一躰お國ものといふと根性が汚いつて。

無慚しくつて。貪婪が多いよ。と婢等は聞えよがしに陰言をいふ。之が耳に入つたら皆自分の科になること。とお銀は獨り心を傷めて。止めても一向肯かずに。尻の長いのと。手の長いのと舌の長いのが。幾人の中の一番厄介物だ。と之に手前節を附けて。車夫は門内の嚔話をしながら鼻唄で諷する、

この尻の長い由來は。中川のづう〳〵しいばかりでない。お滋が貪婪の根性から隱居を旨く說付けて。借家の見當らぬのを口實にして。居られるだけ長く居て。家賃と米代を掠らうといふ肚から。中川には。在家だから幾日居ても構はないと御母様がおつしやるから。まあゆつくりお泊しなさいなどをいふと。城井に於ても押は輕くない方であるから。「然やらかの。」ぐらゐで。自然其方針を取つてゐる。抵一月にもなると。汗漫の質の周三も餘りの事に思ふ矢先へ。お銀も女の事であれば相應に苦情を鳴らすから。質にもと嬉しくない顏色が母子の目に見える。もうお倉に火が着いたと曉つて。やう〳〵立退支度にかゝる。それも斷乎とにやらずに。最う二三日もゐたらどうか。と誰か言ひさうなものだと云ふ顏をして。荷物を纏めてゐても。留めては一人もない。味方の隱居が獨り喋いで留めても。同ずるものがないから。澁々出たのが一月と二日目！

それも離れて家でも持つことか。人力車なら三錢といふ所に構へて。隔日にも往來をしやうといふ肚。閑散の身の隱居は。當座朝夕にちよこちよこと會ひに行く。其度に。「お銀様。何か到來の菓子がござらう。一つ下され。」と搔へ出す。「玉子か。鰹節の折はござらんかな。」と提げて行く。其も積が盡きると。午飯の總菜を重箱に詰めさして持つて行つて。自分も先方で食事をする。新漬を運ぶ。薤を持出す。種々篤食して了ふと。其後は何でも手當り次第。干鱈でも。切干でも。高野豆腐でも青豆でも。菜になりさうなもの。お滋の世帶の足になりさうな。と見た物は精々と運ぶ。これしきの事にお銀も何とも念はぬ。然し女といふものは。心の細な。氣の小さいものであるから。這麼ことでも快いではないが。高の知れた事と一度も可厭な顏を見せず。唯々と言ふなり次第にしてゐるが。外に可厭な事は。なにほど良い嫁でも中位の我娘のやうには行かぬ。他人であつて見れば嫁でも遠慮がある。氣兼がある。又氣兼も遠慮もあつたで好いもの。これが取外された日には嫁の情が粉になる。それが。然う娘と行違をすると。愛情が其方へばかり傾くから。自ら嫁に疎くなる。嫁に優しい言をいはれるより。娘の所へ行つて劍突を食べる方が心地が快いやうなもので。此處が親子の情で。嫁といへば現在の娘。我子といへば過去の娘。どちらも娘なら親の仕向に二つはなさゝうなものだが。實子と義子を並べて手一つに傅をしたら甚麼ものであらう。一枚の煎餅を分けてやるのに。四分六分に割るであらう。此情は自然のものであるから。其が強ち善くないといふではなけれど。おのれも一度は嫁をして來た身。可愛く思ふ娘も今嫁の身である事を念つたなら。我嫁へも煎餅の情を。等分にするやうに勉めるが。姑の本分でありさうなもの。口に忠義を言ふのと同じで。之が容易のものでない。其には小姑の無いに越したことはないが。あつたにしても隔れてゐれば。嫁は一厄遁れるといふものだが。からいふ事情では到底耐るまい。

日毎に往來して會ふ度の話の種はいつもお銀で。隱居は記錄でも讀上げるやうに。楊枝せせりに昨日の所爲を。然だ那だと陳べると。お滋が傍たり顏で之に一々註釋をする。姑の會ひに行くも。一つは懷しいからではあるが。半分は嫁の不平を泄すのが樂みで出懸けるのだか

ら。今は嫁にどうされやうとも。お滋といふ味方があるといふ心持から。おのづと家に居てもさあ來いといふ風で、お銀に抗るやうな處がある。お銀は之が爲にいとゞ遇ひかねて。辛いのを飲込むでも飲込みきれぬから周三に訴へる。周三は自體少事に屑々たらざる性だから。一々取上げぬ。「唯。然うか。辛抱しろ〳〵。我が附いてゐるから。」ぐらゐで張合のないこと。綿を摑むで打着けるやう。

まゝよ。生れて持つた身分から見れば。數寄立勝つた今の身上。家にゐた頃は。二子か瓦斯絲に。めれんす友禪の帶といふのが。かうして縮緬の羽織を寢起から着て。黃金の指環を穿めてゐられる身上になつたのを念へば。これぐらゐの苦勞はありさうなもの。肝腎の夫が優しくしてくれるのだから。之に優した事はない。あの姑だからとて生涯附いてゐるでもなし。此家に波風の起るのも起らぬのも自分一人の了簡次第。と父樣に聞かせたら。然ぞ有爲奴と喜びさうな健氣な分別をして。何事も姑の心に悖はぬやうにして。お滋にも可厭な顏をせず。自分が妹でもあるやうに下から出て。腫物にさはる柳のしなひかな。まづ雪折れもなしに過ぎた。

それから一月餘經つて。お滋は隱居の口を藉りて三十圓の借用を申込むだが。隱居も周三へは言出し惡いと見えて。お銀に賴むとの御意。此隱居が近頃「賴む。」などゝいふ重い語を用ふるのは。殼蜊の裏から眞珠が出るよりも珍しいので。流石に氣毒と思つたか。何となく言語が重複して。「あのな。」「誠にの。」などゝ煮切らない文句を挾むで。「お前さんから周三へ言うて見ておくんさい。どうでも用達てゝもらはんければ。城井が差當つてえらう困るので。」義理の惡い借財があるといふやうな事を微見す。

「どうでございますか。後刻旦那樣にお話をいたして見ませうけれど。此頃は何だか御都合が……。」

此(が)と聞いた時。隱居の目は鮑貝を日向で一寸動かしたやうに。ぎらりと光つてお銀の眉間を睨みつけたのである。

「今晩にも御返事をいたしませう。」

「何分お賴み申した。」 とつん〳〵隱居所へ入つて。羽織を着更へて城井へ出向かれる。

九

お銀は周三が晩酌の間に此話をすると。以の外の機嫌で。

「貸すことはならん。」と言放つ。其勢に呑まれてお銀は次ぐ言葉もなく。煙管を拈つてゐると。

「今月は大分都合も惡いのだ。好かつたところが貸しはせん。」 と宛然お銀が借主でゞもあるやうに慍りつける。

「でもお母樣が那麼におつしやるものでございますから。どうか御都合なすつて半分でも……。」

「成らんよ。今月はあゝいふ事情の費用で窮つてをるのぢやないか。都合の爲樣も無いさ。然し。そりや都合して出來んことはないけれど。それほどまでにして貸す義理はない。お前は知らんけれど從來幾度貸したか。つひに返したこともない。第一あの家で那樣に金錢の入る譯はないのだ。城井は是といふ道樂のない男で。酒は飲まうけれど。藝者を買ふでもなし。球戲ぐらゐは滋の芝居を見るから思へば輕い事だ。それに二人暮しに婢一人で。月給で足りぬといふ事は決して無い。滋が自分の好きな眞似をして足らぬやうにするのだ。熊本にゐる時も貸せ貸せいつて來て。お母樣の前があるから何程か貸してやつたけれど。然う度々は此方も出來ん。あれば貸してやる。無いからいかん。さういてお母樣によう斷るが可い。」

「はい。」 とは言つたが此役は儲からぬ。

「どうぞ貴方からお母樣へ然うおつしやつて下さいまし。私からは何だか申惡くつて……。」

いかにもと思つたか。周三は頷いて。酒が濟むと隱居所へ話に出懸けた。噫。またこれから一層御母樣の目が光るであらう。お滋樣からは憎まれるであらう。ひよんな事が出來たと獨り心を傷めてゐたが。果して翌朝の隱居の顏色と云つたら。何ともかとも謂はうやうが無い。

鋭く睨めたり。慳貪な聲をするのは。蓋し未だ不平の十分ならざる時の事で。此一段上を行つたら憤死するかと想ふばかりの險相で。睨みもせねば顏も見ない。聲も出さない。唯是死灰のごとく。枯木のごとく。冷然として沈思してゐる。朝飯も食はず。湯を一つ飲まず。全く隱居所へ閉籠つて座敷へは影を見せず。[illegible]周の粟を食はずといふ意氣組で。時々思はせぶりに唾壺を擊く音をいつもより暴らかに響かせる。藁人形に五寸釘を打たれるよりも[illegible]苦しく。お銀は得もいはれぬ心地で火鉢に取着いて額を抑へてゐる。

かねて合圖やしたりけむ。午が過ぎて間もなくお滋が來て。珍しくお銀に喋々しく挨拶をして。今日の結髮は大相好くなどゝ空々しい世辭をいひながら。立つて隱居所へ行つたが。少時密談がありて出て來る迄は……お銀が當時を追想して魘される種にでもなると氣毒であるから。明細に書くのを遠慮するが。其は眞に凄かつた。御母樣いらつしやいと。呼吸の迫つた調子で呼懸けて。襖障子の開閉を仂なく手暴にして。隱居を伴れて。お銀には一言の挨拶も無く。ぷういと。出たぎり夜になつても還らぬから。夫婦は心配して。車夫の友藏を城井へ見せに遣ると。今晚は一宿。翌日も翌々日も御歸宅無しで。四日目に城井の婢が來て。御隱居所の簞笥の一番上の抽斗の紬のお羽織と。三番目にある霜降の南部の小袖と。フランネルの單衣と。足袋を二足お渡し下さいといふのは。當分歸らぬ心算と見えたり。其も承知して。お銀は玉簾一折と到來の鱧の蒲鉾に。新版の小說を二册添へて。いつ頃お歸りでございますか。お待ち申してをります。と傳言をして還したが。攷へて見るに。是は容易ならず腹を立てゝ。私を苛む仕掛に相違ない。飛んでもない事になつたと。お銀は氣が氣で無く。周三が退省るを待つて。此次第を話して。

「どう致しませう。お迎ひにまゐつた所が。迚もお歸りなさる事はございますまい。」と

いふと。周三は（つまらぬ眞似をしたものだ）と思ふらしい苦笑をして。

「まあそつとして構はん……が可からう。誰が好くない。」と舌鼓をして。

「そつとして置くが可い。」と至極落着いてゐる。

お銀の身になつて見れば落着いてはゐられぬ。姑を突出した。餘程酷い事をするに違ひない。年寄が可愛さうだ。といはれるに極つてゐる。親類の手前も面目ない。女房に卷れて非道を働き。親を疎末にするとは。學者にも似合はぬ鈍漢だ。と夫までが恥辱を搔ねばならぬ。其罪は皆嫁の身が被なければならぬ。して見れば世間へ對し。親類へ對し。我身上に大事が起らねば濟みさうもない。

夫に相談すれば構ふなと言ふけれど。構はずにはゐられぬ。此上は是非が無いから。年寄に心配を懸けるのは氣毒だけれど。生家へ話をして力を藉りるより外に手段はない。手紙では思ふやうに事情が解らぬから。御母樣を呼むで話さうか。否々隱居の留守を[illegible]むで。母親を引入れて好事をしたなどゝ言はれぬとも限らないから。明日生家へ行つて篤り相談をして來やう。と其とは言はずに明日暇をくれといふと。夫は心快く承諾して。

然し無人であるから。正午に周三が退けて來ると大背戸に出懸けて。直に歸つて來る心算で傍の錢湯にも行き。丁度結日で髪も出來て　さあと待つてゐると。十二時二十分頃轔々といふ車の音。お歸りかと出て見ると三池といふ周三の叔父で。苦い顏をして格子を取る。續いて車が又一輛。これには伯父の樫村といふ。此一門での名高い御意見番。二人が格子を入ると又車が。其は此方の人である。

二人は顧みて。

「これは丁度好かつた。」

周三は衣服も更めず挨拶に出ると。直に酒の支度をとお銀を呼ぶ。

「否。今日は御酒どころではない。」と三池が口を切ると。御意見番の樫村は詮議の筋有之といふ顏でお銀を一睨する。大方さうとお銀は察するほど無氣味で。こそ〱と次の間へ寛げて酒の支度に取懸る。

其内に話が始つた。聢とは聞えぬけれど。「御母樣を。」「お銀樣を。」「風波が。」「辛くあたる。」等の不祥の語が耳に入る。聊も我心に疚しいところはなけれど。背から冷汗が出て。身が竦むやうな心地がする。

爛も出來て。下物は後にしても。先一盃と膳を出すところなれど。どうも座敷へ出惡いから。婢に運ばせやうかとも思つたが。親類が來たのに應待に出ぬといふ方はない。いつも出るのを今日に限つて出なかつたなら。心に怯ける事があるから顏が出せないと想はれやうと。婢に手傳はせて襖を啓けると。話がぷつつり斷つたやうに寢むで客の四の目が一直線に我顏に注ぐと思ふと。赫として心が悸々。

何か言はれるかと氣遣ひながら。銘々へ配膳して酌をして。退らうとすると。周三が。「少し待て。」「はい。」と坐つたが。その手持無沙汰な事。何處へも顏の遣端が無くつて。身體が荷厄介になつてどうもかうも成らぬ。旋て御意見番が和かな調子で。「扨な」を冒頭に。此度の始末を一通り陳べて。不取敢今日城井へ行つて一々聞いた所が。恁云ふ話で。と隱居とお滋との口上を聞いて見ると。お銀もえゝ！　と吃驚。

半分は痕跡もない虚誕で。三分は僻見で。殘る二分は鷺を鴉といひくろめた片口で。被せられた罪は綿まで透した濡衣で。傍りの事に辯解にも當惑して。可惡人等と思はず周三の顏が見られる。

それから筋路を正しく始終を話して。御母樣に然う取られますのは私の到らぬゆゑ。此後は十分氣を着けてお世話をいたしませうから。何卒お歸り下さるやうに。貴下方の御骨折を願ひますと頼めば。樫村は理の分る性ゆゑ大概疑念が解けて。

「どうも然うであらうよ。隱居樣だつて係り負けてゐる方ではない。若い時分強盜が三人押込むだ時。長刀の鞘を拂つて水車のごとく揮舞はした事もあつたのだから。」と酒も身に染みて來た樣子。

然るに三池の叔父の方は。元來隱居贔屓で。血系だけに似てゐる性もあり。醉へば卽ち搦上戸。醒むれば可なり偏屈といふ人物であるから。心中大に服せず。此女の柔和に見えるほど。肚は善くないのだと只管念込むで。樫村がお銀の肩を持つなら。我は何處までも隱居の尻押をしてやらうと。兩派に分れて見ると。敵の酒は美くないか。これから城井へ行つて。まだ話す事もあるからと先へ還る。

此三池が一人あるばかりで話が纏らず。姑とお滋は益々悍立つて。彼嫁を出せと喧しく言出して。お銀のゐる間は決して還らぬといふ悶着になつて。親類の誰彼が毎日のやうに澁谷と城井へ往來して。どうで御座るの。あゝで飲

ふのと結極が附かず。とにかく敵手は親といふので澁谷の方でも苦戰で。今の所ではどういふ事に極るか。運命は獨樂のごとく廻つてゐる。

之を聞くと。生家の心配といふものは謂ふにも謂はれぬ。新八郎は苦勞性の老人であるから。もしもの事でもあつた日には。と夜も碌々寢ずに考へて。一日隔に媒妁人のところへ樣子を聞きに行く。母親は母親で。女だけに取越苦勞をして。鬱とりと攷へてばかりゐる。

御父樣は焦躁。御母樣は悄然。お鐵は中へ挿まつて狼狽。日に四五度づゝは缺さず衝突を喚起されて困れてゐる。

下の巻

一

抑も隱居の心は石に匪ず。轉すべからず。どうあつてもお銀を出さなければ。私は家へは還らぬと力む。樫村は手甲摩つて扱つたれど。お澁。三池といふ二人の影武者が附いてゐるので。隱居は益々我を張つて。牡牛の乳を搾つてお目に懸けたら。といふやうな難題をいつて弱らせる。

いかにも。大事の母なり。一人の親ではあるが。無理は無理だと澁谷も腹を立てゝ。罪の無いものは離縁は出來ませぬ。と斷然した挨拶をすると。さういふ了簡なら。私も澁谷家代々の位牌にはなるまい。と隱居も凄いことをいふ。其ではお互に穩でないから。と諸親類總立で宥めたけれど。兎角隱居が無理ばかり言募るので。いづれも此處は手を退いて。今に目が覺めて。皆樣賴むといふ時があらうから。其折思入れ「構うて下さるな。」といつた口の端を摑つてやらう。今日の所はまづ〳〵默つてすっこむ事になつたが。周三の身になつて見れば。敵味方と別れても。縁は繋る親と子の間であれば。城井の食客にして。知らぬ顏もしてゐられぬといふので。月十圓づゝ扶持を送る事にして。一時落着した。

然し。先方が無理とはいひながら。親を別居させた紛擾の發頭人であつて見れば。お銀は寢覺に之が懸念で如何も快くない。

「親を逐出した。」といふ謂は我耳にも障る。無理をいはれても親は親。邪慳にされても姑は姑。それを辛抱するが嫁の身の務なり。又いかにも邪魔を拂つて爽然したやうに。いゝわで默つてゐられぬ夫の手前。そこで義理と人情が糾むで。可憐しい哀顔となつたけれど。周三は母親の氣の折れるのも今にと見てか更に騷がず。態と手を着けると不可から構ふな。と一向取合はぬので。其なりけりになつてしまつた。

生家では此紛擾が起ると。兩親は殆ど狂氣の沙汰であつたが。一先かういふ事になつたと聞いて。がっくりと腰の拔けるほど安心して。お銀から手紙の來た翌日赤豆飯を炊いたが。馬鹿に目出度いのだからと赤豆澤山にして。いっその事參の飯にしたら。と父親が酒落たほどだから。餘程日出度かつたに相違ない。

さる親の申した。凡そ世中に養子をもらふのと。女子を持つほど損なものは無い。女子にはいかほど丹精しても金を懸けても。預物で。遂には手放さねばならぬに極つてゐる。殊外へ遣つてしまつたから。其で縁が切れて。死なうと活きやうと構はぬかと思へば。我子は何處までも我子であるから。苦樂を俱にせずには措かれぬ。して見れば生涯の厄介で。損は立つとも德にはならぬのが女子である。もし親たちに不心得から左團扇と目懸けたら。これほど德の行くものはあるまいけれど。親が女の厄介になるやうでは。相互の不仕合せといふもの。

丸橋ではお銀を良家へ形附けて。ほっと呼吸

なりたく間も無く。今度のやうな事が起つて苦勞をする。其苦勞が一息吐むだかと思ふと。直に胸に痞へるのは妹のお鐵の身上。

さる銀行に勤めて。今新潟に出張してゐる新輔といふ長男があるから。お鐵も他へ遣りもので。今年は十八になるから今が嫁入の旬で。十九までは盛といふやうなものゝ。お銀などは容色が好いから。廿歳が廿一でも乞ひては許多もあるけれど。妹の方は三割も四割も品が落ちるから。一歳でも若い内が花で。女子を緣付けるのは。緣日の植木と同じ事で。時刻が遲くなるほど捨賣にしなければならぬ。と口を探しに懸ると無いもので。長し短し。細し太し。圓かつたり角張つたりで。兎角四合と適ふやうなのが見當らない。然うかと思ふと。有り出すと又迷ふほど落合つて。都合三軒といふもの前後に言込むで來たのは。一番に官員。二番に商人。三番が職工。官員といふのは年齡が廿五で郵便局へ出て二十五圓の月給。男親が一人ある。商人といふのは横濱の商館勤で。二十枚の給料。これは兩親附の代り。地面家作が少々あり。年齡は廿七。職工といふのは砲兵第一方面舊砲兵工廠の小銃製造所へ勤める鐵砲鍛冶で。年齡は廿八。月給は廿圓。之全く係累無しで。喧しい伯父があるが。別に世帶を持つてゐる。お鐵から列べた所で。まづどれが好いと母親がお鐵に質ねると。官員は何だか嫌ひ。商人はどうも否。腕に藝のある職工がといふ好みに。兩親は膽を潰した。蓋し父親は官員といふものを徳川時代の武夫のやうに考へて。「花は櫻に。人は喃」など〻直にやらかす質だから。當時では何でも官員で無ければならぬやうに念つてゐる。母親は。誰に聞いたか。商人が一番割の好い利益の多いものだ。と素人了簡の商賣氣を出して。どうか商人へ遣りたい。それに横濱商人といふのは。異人を敵手で格別儲ると。澁谷ぐらゐになれば大丈夫だけれど。卑い處では兇が恐いといふ肚で。二十枚と目懸けたのである。

お鐵も夫に持つなら。綺麗な仕事をする人をと思はぬではない。足で飯炊いて手で金延ばすなどゝいふ洒落から。鍛冶屋樣と極めた譯ではなけれど。腕に藝のあるのが世を渡るに一番安心。所帶臭く考へて。眼中常に官員無しでゐたが。鍛冶屋とは少し豫想外であつた。

腕にある藝といつても。あながち職人には限らぬ。何も緣で職人でも否は言はないけれど。鍛冶屋の女房は御思案であるべき娘氣に。ぐつと色氣を捨てゝ。一思に其が望みといふには仔細がある。

この鍛冶屋を尋常の鍛冶屋と思ふと大いに了簡が違ふ。七八年前まで近所に住むでゐた石黒信之といふ。兄新輔とは幼稚馴染で。自分も識つてゐる男である。其頃評判の孝行者で。堅人で。物の道理も解つた。お銀ちやんなども。あの人はと噂をした息子であつたが。父親に早く訣れて。學問の修行もしかねる所から。十七の歳鐵砲鍛冶になつて。わづか二年ばかりの間に驚くほど腕を上げて。母親をもどうやら過せるやうになつたと聞いたが。砲兵工廠へ出る事になつて。小石川の方へ引越してからは。久しく音信を聞かずにゐた。其信樣だ。職人でも。鍛冶屋でも彼人ならば添つて見たいといふお鐵の所思で。御母樣。あの石黒の信樣ですよといふと。然うさ。まあ不思議ぢやないか。あの信樣がもう二十七になるかねえ。人間は極良いけれど職人がどうも。と一向進まぬ形で。御父樣も子供の時分知つてゐる石黒の息子なら不足は無い方なれど。右同斷鍛冶屋といふのが不承知で。最少し外に職がありさうなものだと首を捻る。

けれども。お鐵が切りに進むでゐるから。當人の緣だからと母親の思飜したのは。あの信樣

といふ處に惚れて。あの子ならば確だと父親に相談すると。長らく職人をしてゐたのだもの。氣質も變らずにゐるものか。子供の時分の堅氣ではゐまい。と一應有理な言葉に。母親もなるほどゝ氣が着いて。お鐵にも此事を言聞かせる。それでは。舊時の氣質か氣質でないか。調べて見て下さいなとも言はれず。お鐵は可厭な顏をして失望の様子であつたが。其代り郵便局も否。横濱も否と皆撥附けて。どうとも話は煮えずに。毎日紛擾してゐる内。喧しいのと觸込のあつた。信之の伯父の瀬川又之丞が。中に入つたものから丸橋の娘といふ事を聞込むで。なるほど之は好からう。と信之に聞いて見ると。惡くはない挨拶で。まことに不思議な御緣だ。早速丸橋に尋ねて來る。

伯父の瀬川から段々様子を聞いて見ると。味方同士の片口であるから。一から十まで信にはならぬけれど。十分證據のある事が許多もあつて。信之の堅氣なことは十餘年前の信様に異らず。伯父の口からいふは可笑なものだけれど。御遠慮なく申上げると。あれなれば實に御薦め申したいとまで申出した。

一躰彼工場で。二十五圓以上取るものは上等の職工で。弟子の四五人づゝも使つて。皆職人風の勇肌で。大工の棟梁とか。左官の親方とかいつたやうな身持で。宵越の錢をつかはず。華美が年中ぴい／＼してゐるのを鋪強にして。つてゐるのが風習であるけれど。信之は決して然うで無い。第一服裝からして堅氣に作つて。行跡も職人風で無い。實直過ぎて偏屈のやうで。交際を外すでも無く。優しくて實意のあるのが愛嬌になつて。上役にも可愛がられゝば。下へも通りが好く。職も惡くない所から。隨分用ゐられてもゐる。

昨年の暮母親が亡くなつたが。それまでに。不自由だから女房を持てと度々勸めたけれど。未だ早いと云つて下女を置いて母の世話をさせて。自分は不相變孝行にして面倒を見てゐたが。親の亡後に男の身一つでは所帶が持切れず。此度嫁を探す事になつたが。信之の行跡が甚麼であるか。私が喋つたばかりでは御得心が行くまいから。兎も角も一日お出下さいまして。當人の様子も見。また家の様子も御覽下さいまし。申惡いことではございますが。職人風情の住居とは見えませぬくらゐ。整然と致してをりまする。

一口に職人と申すと。どうやら噺合せの衣服に尻こけの三尺帶をして。袖の中に握拳をして往來を鼻謠で行くやうな人物と思召しませうが。彼の氣質の堅い所へ。私が大の偏人で喧しやでございますから。決して然やうな不行蹟はございませぬ。と伯父だか媒妁だか知れぬほど。感心な來歷を種々並立てたので。丸橋夫婦の心は稍動き始めて。どうやら一思案して見る氣になつた。

二

瀬川の話に據れば。一口に鍛冶屋といつても了はれぬ様子で。活計も餘り苦しからず。厄介は一人も無しで。當人は子供の時に變らず實躰といふ譯になつて見ると。まづ相手に取つて不足は無い。それは如何いふものか。お鐵が切りに進むでゐるから。此話は纏めて見やうかといふ念も起つたが。今度は母親が乘らぬ加減で。澁谷の顏に對しても。妻の妹が鍛冶屋の女房では嬉しくあるまいといふ遠慮もあつて。之は一寸お銀にも談して見ずば。と出掛けて了簡を聞くと。信様なら可いぢやありませんか。職工といつたつて。種々類がありますわね。それくらゐの顏になれば。慭ひ小官員よりはどれほど好いか知れはしません。伯父様とやらの話の通りなれば。決して惡くは無いと思ひますから。

倘能く一つ調べて御覽なさいまし。と何の苦も無く極められて。母親はなほ〳〵迷ひ出して。兎角職工といふのに我慢が爲きれず。鍛冶屋といふのにうんざりして。横濱商人にまだ未練を殘してゐたが。二日過ぎて瀨川からの手紙で。明日は日曜で信之も家であるから。家内中で遊びに來てくれといふのは。家の樣子見やら見合やら兼ねて。何とも付かず手輕に呼寄せやうといふ肚。

こゝはお鐵を伴れていつては拙い。我が一人で行つて見やう。と新八が出向く事になると。母親は氣を揉むで。

「貴方は惚れつぽいから可けませんよ。獨り惚込むで。うつかり約束なんぞをしてお出なすつちや困りますよ。」

「宜しいよ。心得てゐるよ。」 と五つ六つ頷くと。お鐵は後から羽織の衿を反しながら。

「御父樣よく見て來て下いよ。」

「縞の好いのであつたら買つて來やうか。」

と一同笑つて目出たく門出をする。

どんな樣子であらうかと二人は言暮してゐると。午後三時頃に父親は門口で噯氣をして。折詰を二箇ぶら挈げて御機嫌で歸つて來る。待兼ねた母親とお鐵は左右から詰寄せて。さま〴〵な事を問懸けるので。何と應答をして可いのやら。さう一度に話す事は出來んよ。二人とも控へてゐて。我が一通り話して聞かせるから。扨な。まづ家を出て新橋から鐵道馬車に乘る。と本町通りで線路を外しての。と言出すとお鐵は可悶しがつて。

「お父樣。那樣事はどうでも可いから。先へ行つた所から話して下さいよ。」

「さうか。そんなに先を急ぐなら。道中は端折つて。小石川柳町に着いたとする。柳町といふ所は新開町での……」

「そんな事も端折つて下さいよ。」

「無闇と端折らせる。鈍漢が驟雨にでも遭つたやうだ。註文なら爲方が無いから。思入れ端折るよ。ずつと端折つて。石黑の家を尋當てたとする。貸家ではあるが。一軒建の極新しい一寸した家よ。格子造での。出窓の下には矮柏が植ゑてあつて。南向の二階屋だ。我が案内をするとの。瀨川が直に出て來て。皆樣も御一緒だと心待にしてゐたのに。殘念だ殘念だといつての。まづ二階へ通した。」

「信樣は居りましたか。」 と母親が嘴を容れるとお鐵は俯むいた。

「まあ急くなよ。追々話すから。二階へ昇つて見るとの。八疊一間だけれど。實に小瀟洒として。道具建が好かつた。堺段通を一杯に敷填めて。更紗の褥が三枚。桐の刳拔の手爐に櫻炭が埋つて。此方から三人行くつもりで待受けてゐたのだ。床には蘭が二鉢。掛花活には梅が入れてあつて。置物には。何だか自然木に蠟石のやうな青い玉が載つて。墨畫の山水の軸だ。時代な竹の聯に詩のやうなものが彫つけてあつて。斑竹の編むだ短册掛に何とかいつたつけ。信之の句ださうだ。發句があつた。それから袋戸棚の下に唐机が一脚。これに種々硯だの。水滴だの。筆架文鎭のやうなものを列べて。筆筒に孔雀の尾が二本ばかり。右の方には書物が五六册。其側に桐の手頃な本箱が對あつて。胡麻竹の茶棚に大分茶器類が綺麗に飾つてあつた。北の窓には小銃製造場の寫眞が金縁の額にして懸けてある。床の向うが押入での。襖に千鳥の形のある襖で。明取の好い。風通の好さゝうな二階よ。南は擴出しになつてゐて。下が庭で。庭は中々手入が届いたものだ。裏へ通ふ處に枝折戸があつて。其外には盆栽が澤山列べてあつた。我は瀨川に挨拶をしてゐると。階子の音がとんとん〳〵。誰だと思ふ。信樣だ？ 大違ひ。四十ばかりの婢がお茶を持つて來たのだ。それか

ら又とん〳〵。今度のは石黒だ。我を見て少し笑ひかけた處に子供の時の面影はあるが。いやどうも立派な男になつた。我家の新の所へ來て。お神樂の眞似をして遊んでゐた頃とは大きな違ひだ。十六七の頃も一向生意氣の風の無い。親孝行でもしやうといふ子だから何處か違つて。物柔かな裏に端然とした處のある。依然其通りで。最一息威が付いての。どうもそれは人品なものだ。八字髭を生やして。髮を撫附けて。絲織の小袖に白縮緬の兵兒帶をして。黑の奉書の三紋の羽織で。屹とした扮裝よ。擧止も閑雅で。口上も確なものさ。總體しつとりした鹽梅は。どうしても氏といふ奴は爭はれんよ。誰が見たとつて職工ぢや承知が出來ない。まづ四五十圓も取らうかといふ官員だ。鐵砲鍛冶だといふから。我は鼻の下や眼の邊を炭だらけにして。棕櫚箒のやうな頭髮で。臍の穴を黑くして。鼠色の犢鼻褌に。襦袢一枚で出て來るかと想つたら。さうで無い。それから酒が出て中々の御馳走よ。場末だと云つても馬鹿には出來ないものだ。」

　と云ひながら折の莎繩を解いて。勿躰らしく蓋を取つて。

「この通りだ。こゝに鐵があるだらう。これは味噌吸の種だ。この汁の加減といふのが無かつた。飲めたよ。」

「そんな事はどうでも可うございますから。それから後は。」

「信樣も御父樣御酒をお上んなさるの？」

「結構な事には大の下戸で。」　といふと。母親は妙に眞面目で。

「それが何より。」　と諷する所あるが如、に言ふ。

「何よりとは情無いなう。然し若いものゝ飲むのは憎いものよ。」

「老人の飲むのは厄介なものですよ。」

　はつくしよいと大きな嚔をして。

「誰か我の噂をしてゐると見える。」

「それから御父樣どうしました。」

「それからの。勸めて二三盃さしたらの。いつの間にか梅酢漬の生薑見たやうに。爪指まで赤くなつて。この通り不重寶でございますといふとの。何處のも酒客は同じ事をいふと思つて可笑くてよ。瀨川がいふには。まあ〳〵飲まないに越した事は無い。おれくらゐの年齡になれば少しは飲むが藥でと。惡く澄してゐたから。我も一寸。「御同樣に。」と愛想をいふと。瀨川は如何もといつて笑ひ出したて。」

「飲むのが二人寄つて。信樣はさぞ迷惑でしたらう。」　と意あるが如き母親の詞に。父親は故と無頓着に答へた。

「さうでも無かつた。誠に喜むでの。どうか澤山召上つて〳〵と。我の飲みやうが足らんで不足に思つてゐたかも知れぬ。」

「何の貴方。そんな事を不足に思つて耐るものですか。」

「それから瀨川に案內されて。家探でもするやうに家中殘らず見て來た。下は玄關が三疊。中の間が六疊。奧が八疊だが。全く瀨川のいつた通り、男世帶とは想はれんほど片附いて。何處も彼も劃然と極つたものだ。餘程世帶持の好い男と見える。

　我は別に不服は無し。お銀も至極同意だし。本人は勿論の事だから。どうだ。極めやうぢやないか。鍛冶屋といつたつて。鼻下を黑くしてゐる鍛冶屋とは違ふよ。此日本帝國を守護する兵士の。最も有用なる武器を製造する役人だ。どうだ合手に取つて不足は無からう。日本帝國を守護する…。」

「もう解りましたよ。」

「解つたなら言つて見な。」

「言はなくても。解つてゐますよ。」

「何解るものか。日本帝國の武器を守護する。兵士の最も有用なる製造の‥どつこい。」

「おほゝほゝほゝ。御父樣違ひました。」

「それ御覽なさいな。貴方だつて其通り‥‥。」

「なに我は遊つてゐても解つてゐるのだ。」

「貴方は實に惚れつぽいから可けませんよ。」

「惚れて可いものなら早く惚れるのが目があると謂ふのだ。恐多くも日本帝國を守護し奉る。兵士の最も有用なる武器を製造する役人。東京府士族石黒信之の妻鐵子か、鍛冶屋の女房に鐵子は合性だ。」

「可厭。お父樣は！」

三

母親は獨で不得心な顏をして見たものゝ。當人が得心で。父親が得心で。お銀がまた得心で。都合三得心に敵しかねたる一不得心。皆が然らいふ事ならと。爰に始めて四得心となつた所へ。瀬川又之丞が來て。どうで御座らう。御承知は下さるまいかといふに。此方からも望む所と。目出度く話が纏つて。然らば棧橋をした濱田氏に媒妁を賴みませう。そこで之も儀式でござるから。一寸見合といふやうな事を。なるほど何處に致したが可らうござらう。左やう此見合といふものは。お互に手持無沙汰な。妙に冷い汗の出る不氣味なものでござるから。家の中で顏を合せるのは廢止にいたして。京橋の勸工場で落合ふといふのは甚麼ものでござりませう。之は新しくて至極お思附でと。來日曜の午後二時を合圖に約束して瀬川は立歸る。

お鐵は此前姉の事を嗤つたが。今我身上になつて見ると。依然諸の情にも差違はないもので。氣の揉めるやうな。嬉しいやうな。變に。不思議に。餘程妙な心地になつて。憺然として了ふ。之をむづかしくいふと萬感交到るで。泥鰌の穴へ酒を沃けたといふ恰好で。心裏で何か無上に悶ゆるやう。さしあたつて夜寝られず。晝夢を見て。御飯が吭へ通らず。何か氣になつて。而して唯雑したくなる。其中に絶對絶命の日が來て。此日は父親が留守番で。仲人の羽田と母親と三人連。入口は繪草紙と玩具。曲ると瀬戸物に小間物。もう二時を打つたから先方も直に來るであらう。後から來るか。それとも出口から入つて。待伏をしてゐるだらうか。と會ふのが主意で來ながら。其の合ふのゝ辛さ。辛さといふのは妥當で無い。辛いやうな心地。此(やうな)の三字が最も力がある。約言すれば羞かしいの極で。少しの間でも會はぬやうにと。一寸逃れの氣が出て。もし出會つたら身を隱さうといふ下心から。母親と仲人の間に挾まつて。店の品物を見る目を傍に油斷なく働かせて。前後の人聲にぎよつとし。跫音にびくりとして。顏は上氣して火のごとく。胸は早鐘を撞いてゐる。

母親が。まだ見えませんねといふと。羽田が頻に前後を眗して。もう見えなければ成らない理ですがと話す一言毎に。毛孔から汗がたら〳〵たらと滲出す氣の不快さ。いよ〳〵時刻も迫つて來たと思ふほど。横を向くことも出來なくなつて。造りつけられたやうに。見たくも無い物をまんじりと視て。中頃まで來ると。「おや前面から」と羽田の聲。そらと思ふと體が竦むで。足が擧らなくなる。

「さあ鐵や。」と母親に手を曳張られて。我にもあらず歩き出して。唐木細工の店の前で。はたと出會ふと。首がぐつたり。

双方で頻りに挨拶を始めると。姉樣いつもお變りなくといふのは信之の聲。當時とは全で變つた大人染みた。底に濁のある。強く聲が耳に入る。竊と顏を擧げやうと思つても。どうも擧げる事が出來ない。「お鐵や。御挨拶を。」と母親に曳張り出されて。も、協はない。一寸顏を擧

げた其間は。電光。石火。刹那。瞬間。ちらと信之の顔を見たばかりで。後は唯腰を屈めて。先方にばかり物を言はせて。それでも挨拶になつて。下ばかり向いてもゐられぬからと。迹を變へて今度は横を向く。それから。御一所にと。これでもう〳〵澤山なのに。五人一群になつて舊の道へ還す。此時の方が險にゐられて。却つて能く信之を見る事が出來る。

勸工場を出ると双方へ別れる。今度の挨拶は前よりは幾分か確に出來たつもりで。信之の顔もどうやらかうやら見て。まづ氣が澄むで。ぶらぶら煉化通を歸り道に。母親は今日の見合で大分惚込むだ樣子で。羽田を捉へて切りに褒めるのを。聞くお鐵の心地は不快は無い。

翌日羽田が結納を持つて來る。酒を出す。目録を披げて。噫。見事な手蹟だ。石黒が認めたのでござるかと父親は恐悦がると。媒妁は當惑した顔で。左やう。伯父樣がお認めになつたやうでといはれて。まごつく。二日過ぎて。お銀の處から祝儀として。惣桐の重簞笥が來ると。母親は嬉しさに價ぶみをして。安くふむで父親に叱られる。お鐵は此中に一杯になるほど衣類が無いとて氣を揉む。漆臭い道具が毎日二つ三つ宛殖えて。座敷に飾附けてある前に。絲が列ぶ。鰹節が列ぶ。長持と簞笥に場を取られて。父親は今夜から獨り二階へ寢ることになる。

當日も迫るといふ大騷ぎの最中へ。お銀が顔出しに來ると。おやまあ大層だ事。悉皆揃ひましたね。と妙に笑ひかけてお鐵の顔をじろりと見る。お鐵は嚮に姉を散々冷かした廉があるし。さうでなくても。お銀樣は一体他を冷かしたがる方だから。どんな事をいつて諢はれるかも知れないと大きに恐れて。座敷の隅に小さくなつて悄げてゐると。

「お鐵ちやん此度はお目出度うございます。」

とわざ〳〵前へ來て。改つて挨拶をされて。居堪まらずに臺所へ遁込むと。迹には三人で笑ふ聲がする。もう出ることが出來なくなつて。竈の前に立つて釜の縁を撫でゝゐる中に。幻の如く信之の姿が現れて。自分と盃をしてゐる。あゝ死にたいほど極りが惡いと思ふ途端。空中樓閣がぶた〳〵と壞れる一聲。

「鐵や。」

と母親に呼れて。振向くと障子を開けられた。

火鉢の端に三人坐つて。皆此方を向いてゐるから。又顔を背けて釜の縁を撫でゝゐると。父親が肚では笑つてゐるらしい眞面目な顔をして。

「姉さんに御祝の御禮を言はんのか。」

其は知つてはゐるけれど。其處へ行き難くて。忸怩してゐると。母親が又。

「如何いふもんだね。」　と窘める。

「鐵ちやん〳〵。」　とお銀は例の氣輕に呼ぶ。それでも返事無しでゐると。

「可厭な鐵ちやんだね。含羞むでさ。そんな事で信樣のお嫁になれるものかね。」

とお銀が諢ひつゝ窘める。

何と言はれても動がざること山のごときに。お銀も張合拔がして捨置いて。母親と話を始めると。父親は今度は極眞面目に。

「鐵。」　と呼ぶから。もう好頃とやう〳〵座敷へ出て。母親の陰から。

「姉樣。一昨日は有難うございます。」　といふと。お銀は話を輟めて。

「どういたしまして。貴方も石黒樣へ御縁がお極りで。さぞお嬉しくつてゐらつしやいませう。あのお婿樣は當時何處にお住ひで。」

お鐵は俯むいて默然。

「お幾歳でゐらつしやいます。」　と疊みかければ未だ默然。

「おや石黒樣の奧樣はお唖ね。」　と笑ふと。お鐵は有合ふ煙管を把つて。竊とお銀の膝を雁首でぐい。

「あ痛。」と不意に駭いて立てた聲に。兩親は吃驚して。

「何だ。」

「どうお爲だ。」と口を圓くして訊ねる。

お鐵は濟して。可笑さを忍むでゐると。お銀が。

「鐵ちやんだね。」と肩を一寸衝く。

「何を？」と恍ける顏をお銀は眤と視て。

「お姉樣が附いてると思つて。他を虐めること。」と態と悔しさうにいへば。

「姉樣はもう否。」と袂を拂つて。怫然といふ鹽梅に立上る所を。

「まあ石黒樣の奥樣」と留める。

「姉樣はもう……。」と母親の方を向いて。

「御母樣。姉樣が種々な事を言つて。」と憐を乞ふと。母親は嬉しさうに。吃々笑つて取合はず。父親は妙に眦底で笑ひながら。

「石黒の奥樣に違ひないぢやないか。」

「だから私が石黒の奥樣……。」

「僻りましたよ。姉樣だつて澁谷樣の奥樣。」

「はい何でございます。」と落着き拂つて。

「石黒樣。何御用でございます。」

「私はもう。知らないわ。」

四

結納の交換も濟み。三荷の荷も目出度く送り込むで。お鐵は唯わく〳〵してゐる中に。はや黄道吉日も今日となる。

お天氣で仕合せだと喜むだも午前の事で。二時頃からぽつり〳〵と落ちて來たのが。しとしとと降出して。雪にもならず寒いこと。

「今はどういふものか流行らないけれど。三頸の方が好いやうだね。」

とお鐵の頸に濃厚と塗りながら。

「お前お赤飯にお茶をかけた事があるだらう。だから這麼に雨が降るんだよ。」

と妙な事を責めると。又お鐵の應答が妙。

「お鮨にお茶をかけた事はあるけれど。」

父親は火鉢の傍で。此妙な問答を聽いて笑ひ出し。

「鮨にお茶をかけると。大方お彼岸に降られるだらう。」と二人を笑はせて。

「天氣の好いのに幌をかけるのは可笑いものだ。雨で幸ひよ。」

と極無理な負惜みを言ふ。

こんな事を言ひ〳〵。支度の出來た所へ媒妁夫婦が乘込む。そこで簡略な立振舞があつて。いづれ先方でゆつくり。といふやうな吝な口上で膳を退き。五臺の人力車を揃へて小石川を指して急がせる。

旋て石黒の近所まで來ると此處彼處の辻や軒下に。骨の折れた蝙蝠傘やら。番傘やらさしかけて。お神樣達娘子供が花嫁子を見物に出てゐる。車の音を聞くと齊しく。彼地の窓から首が出る。此地の格子から體が現れる。それらが無遠慮に噪ぎ立てゝ。其甚しきに至りては。從々と車に近寄つて。阿部宗任が八幡太郎の寐息を候ふといふ身で。幌の内を覗きこむのがある。暗い中に白いものが見える許で。あれは紀國蜜柑船だか。何だか解るもので無い。お鐵は前桐油を楯に車外の樣子を見て。自分も那して近所へ來た嫁を見に出た事もあつたつけ。それが今は見られる身になつたかと。難しくいへば俯仰今昔の感に堪へず。御父樣や御母樣も年齢を取つた理だと思へば坐に心細くなる。

姉樣が澁谷樣へ嫁く時には。別れるのが悲しくつて。袂につかまつて泣いたらば。姉樣も泣いて。私の手を握つて放さなかつた。今日は家を出る時。誰も殘つてゐる人が無かつたから。それほどでは無かつたけれど。隨分可厭な心地だつた。よく考へて見れば。かうして御父樣や

御母樣と一緒に來たやうなものゝ。今夜は私一人泣いて行かれるのだ。明朝からは石黑の家の人になるのだ。年に幾度と勘定するほどしか家に行くことの出來ない軀だ。御父樣の肩が凝つても揉むものは無い。御母樣が頭痛で寢たら臺所を爲るものがあるまい。姉さんとも今迄のやうには逢へない。

　と念ふと浮む涙を指頭で拭いて。おや白粉が剝げはしないかと。懷中鏡を取出して見る。どうもなつては居ない。鏡を出した次手と。ほんの少しばかり曲つたかとも想はれる前髮を理して。延紙で油手を拭いて。鏡を仕舞ふと同時に。狹い路の片側長屋の格子戸の前に車が停る。お鐵は幌の中から竊と見ると。父樣の話に違はぬ結構で。窓の前に垣があつて矮柏が植ゑてある。

　此處で下りて。媒妁夫婦兩親に前後を圍まれて。俯むいたまゝ。玄關から中の間を通つて奧の八疊へ入ると。我家から送つた荷物の飾つてあるのを見れば。他國で知人に會つたやうに。何と無く懷しい。

　話に聞いてゐた婢が香煎湯を持つて出て。お鐵の顏を上眼と斜視とで見て退る。嫁御寮は此時既に三分の正氣を失つて。懵としてゐながら心は落着かず。腋の下から汗を出して。顏は熱る。頭痛はする。少時にして媒妁が彼方へと合圖に來ると。母親が唯と挨拶をして。

「さあ。お鐵。」といつても。お鐵は逡巡してゐるから。小さな聲で。

「お盃だよ。」と聞くと。心臟がどき〱どき。裂けて一時に血が出たかと。想ふほど。動氣で。火に翳されたやうに總身が熱くなる。此時はや七分の正氣を失つて。何が何やら一向窈心で。二階まで伴れられたが。ふと座敷の障子の硝子越に人影が見えたので。また心臟がどき〱どき。

　座敷へ入ると。三方の長熨斗。三組の盃。雌蝶雄蝶の銚子など。草雙紙の大團圓で能く見る道具が眼前。下座に羽織袴で。兩手を膝の上に。置いて。俯首になつて控へてゐるのは。花婿の信樣（では無い）石黑信之。お鐵は赫として眼がくら〱。脚がわな〱。汗がたら〱。前後不覺の中に盃が濟むで。下座敷に還つて來ると。始めて人心地がついたやうな。間も無い。二階で親類の盃が始つた樣子。また彼處へ出るのか。と那樣事を苦勞にしながら。お鐵は獨り茫然。肱懸窓を開放して。顏を冷して逆上を下げてゐる所へ。媒妁が呼びに來ると。續いて母親も衣替の世話に下りて來て。鬢を搔いてやる。顏をなほしてやる。彼此氣を揉むで座敷へ伴れて行く。

　そこで。鏡餅は重ねるもの。女夫は並ぶもの。此出來立のほや〱の夫婦も。否應なしに上席に直されて。信之大いに閉口し。忸怩と外於を向けば。お鐵は倘以て。横を向く。惡く洒落たら。雛段の地震といふ趣がある。媒妁は此處を見計らつて高盛を出し。本尊は床入で片附けて了ひ。さあこれからは此方のものと。袴を脱ぐ。扇子を捨てる。三人とも大童にもなつて。おもしろさうに飲み始め。十二時頃までに二升五合といふものを傾けた。

五

　話說お銀の身上にかへる。例の紛擾以來引續いて。隱居は城井の一間に祀られて。當座は頻りに崇められてゐた。其理。拾圓といふ扶持がついてゐるのであるから。城井家に取つては少しも損の立つ話でない。まづ五圓を食雜用に入れて。剩餘の五圓といふものは私費として。蝦夷錦の仕合袋の底に。番號の揃つた。折目の無いのを。二つ折にして仕舞つてあるのを。お滋は殆ど毎月の書入にして。一御母樣濟みま

せんけれど二三日……。」などゝと言ふと。其處は親子の情で。又色々世話にもなるといふ心から。唯々と貸してやる。返してもらはう氣も無ければ。返さうといふ了簡も無しで。

如此重寶な。秀鄉が龍宮からもらつて來た米俵のやうな。無盡藏の臍を持つてゐる御母樣の事であるから。何かと氣を着けてお滋は孝行する。城井も此魂膽を表向は知らぬ顏の御存じであるから。隱居を邪魔にする所では無い。口には稅が賦らぬと思つて。虎髭で掩はれてゐる鰐口を窄めて。御母樣から遊ばせ。あゝなさいませ。おや嚔が出ましたな。お風邪を召すとなりません。滋や其の私の褞袍を。いや今日の飯は硬うてならん。貴方には好うない。粥にして上げるが可え。なんのかのと至極優しい言をいふ。

。隱居殿は眞に受けて。ほく〳〵喜び。實の子でもない城井が。軍人のやうにも無く。きつう優しうしてくれる。其に。周三は如何いふものぢやあらう。嫁と心を合せくさつて。私を邪魔にして。年寄つたものを流人同樣に遇うて。私を城井の門から葬式を出す事か。それでも。滋といひ。城井といひ。揃うて優しうしてくるゝものがあるから。不仕合せの中の仕合せじや。と周三夫婦を情無く怨むだけ其丈城井を賴もしく嬉しがる。焉んぞ知らむ。周三といふものが無く。月十圓といふ扶持を仕送る源が微かつせば。隱居の境遇は甚麽なものであらう!

奥の四疊半に置火燵をして。好きだといつて。床に花を絕えせず。牛乳は異人臭うて飲めんから。半熟の鷄卵を二顆に。食鹽とスプウンを添へて。午餉には鞠を細く碎いて。齒齦でも潰せるやうに調へさせて。晚が五勺などゝいふ。寸法に行くものと心得らるゝか。これ大いなる不了簡の極度。まづ世間の手本を見るに。いはれぬ前に氣を利かせて。天氣の好い日にては洗濯の一つも爲ねばならぬ。孩兒のがあれば。孫の可愛さの醉興からといふやうな貌をして。傅もせねばならぬ。と一々數へ立てたらば。下女奉公人のすなる事をも敢て辭せず。喜んで其勞を執るやうにせねば。我娘はともあれ。聟殿が好い顏をすることではあるまい。太甚しきに至りては。我孫を坊樣の孃樣のと。不倫千萬の尊號を奉りて。湯屋の女房に傭婆と間違へらるゝほどに身を墮さなければ。臺所の隅になりと含いて。死水を取つてやらうといふ聟が多度あるものではない。已に此位にしても。十人が九人までは無くもがなと念はれる。嫁にやつた先方の厄介になるのと。茶呑友達を欲しがるのは。壽長き女の恥辱としてある。

鮮魚と珍客は三日おけば臭ふといふ。西洋の諺があるが。當分は隱居も珍しいのと。十圓の扶持といふので。珍重されたやうなものゝ。日が經ち。月が累るに就けて。第一の要素の(珍しい)が消えて。差代りまして(厄介な)といふ感情が。先づ城井の心に崩し始めると。踵いで第二要素の(月十圓)も。補充になる。重寶にはなるが。唐辛子も食慣けると辛味が鈍くなるがごとく。今では尋常のやうな氣持になつて。これ丈でも入らなかつたら一寸困るのだが。さて入りつけて見るとさまで有難くも無いやうな理屈で。自分の方の爲筋になる事は少しも感じずに。不利益になる一塊の老肉團が。惡く厄介で。兎角邪魔で。所で近來は餘り(御母樣)を唱へない。少しお滋がちやほやいふと。城井の御機嫌が麗しからぬ。

城井は軍人で。軍人といへば。多く杯を呼び妓を聘し。一醉王公を輕んずる的氣象の者であるが。城井は其例で無い。斗酒も敢て辭せずの豪飲はやるが。頗る愚痴上戶で。尤も不斷から量の少さな。所帶臭い。戰場に臨むだら。敵の首よりは分捕を專一に働きさうな性であるから。面と向つて否な言こそ言はないが。頻

に心の色を面に表はして。悟れがしに仕向ける。けれども。お滋が中に立つて、色々遠回しに宥めるので。隠居も心地に好くないけれども。今急に澁谷へ澄した顔で還る譯にも行かぬ所から。節を屈し。疳を抑へて。潜龍無ㇾ用と忍むでゐる。其所で破裂も無しに。納まらぬやうに納まつてはゐるが。正に是機一發といふ處。所謂七分三分の兼合。

一夜城井中尉が飲過ぎから舌を辷らして。ちくと癪を言ふと。腹を立てる段では。自分が無理でも默れる代物の隠居だから。況んや理あるに於てをや。無料で置いて貰ひはしまいし。怪しからん事をいつたものだ。と散々に立腹して。憤て翌日は一食絶食をするといふ勢。お滋が種々に詫びたので。晩には快く五椀召上つて下さる事にはなつたものゝ。隠居は肚裏に。此家は長く留まる處で無いと始めて曉つたのである。

時に不運なるかな。官海の風波穏かならず。餘踊大いに恐慌の折から。澁谷周三も非の字となつて。官制改革後であるから。三年間の涙金は下らぬ始末。手許に現金といつては。僅かしながら從來の生計を二月と續けるほども無い。幾分か氣強いのは。地所と我住むでゐる家作と。外に株券が少しばかり。差當つては之を賣食にしてなりとも。命の蔓にありつくまでは。籠城しなければならぬ。それも一二年の中に有附けば好けれど、長引かれると大事になる。

まづ此家作を賣拂つて。四五圓の借宅に蟄居と極めて。時節の到來を待つの外無しと。恩顧の奴婢に暇を出す。入るものは書籍屋。道具屋。近所へは面目無し。自分は心細くして。お銀は夫が切腹せぬ纔世御前といふ思で。混雜する中に半病人で鬱いでゐる。

恁る次第なれば。此際どうか勘辨して一所になつて下さい。それともお可厭ならば。六圓に減じて不承してもらひたい。此二者何方か一つといふ。掛合を城井方へ差向けると。隠居も吃驚。憎いの怨めしいのと謂へば謂ふものゝ、懸り息子が一世の浮沈。厩まで闘いてゐる家を出て。背の低い疎な杉垣に。歳古る丸太の御門といふ構は。餘り嬉しくは無い。辛からうと夫婦の心の中も思ひやられる。又自分にしても。今こそ恁して聟の家の客分になつて。何不足無く暮してゐるのも。原はと云へば。周三といふ確とした後楯があるからで。お滋も大事にしてくれるには違ひないが。老の杖となるのは周三ぐらゐの事は隠居も心得てゐる。（但し之は近來悟つたことゝ知るべし。）其證據は。額面六圓といふ減額。六圓では小遣も浮かぬ。然し此上は出し切れぬといふ其も道理。ではあるが此方も窮る。其で勘辨が出來ぬといふなら。一所になれといふ。今更一所になるも意氣地が無さ過ぎる。六圓でどうか我慢はなるまいか。それとも胸を摩つて一所にならうか。何方にしても昨日に變る身上を。心細く考へるばかりで。どうとも分別が着かぬ。

是は扨置いて。隠居は當座ほど珍重されぬのを。面白く思つてゐないのに。根が我儘の方であるから。一寸した事まで腹が立つて。こんな譯のものではあるまいにと。（御母樣風）の吹かせ損ひをして。獨り胸を惡くしてゐる。お滋も亦親子の心易立から。長い月日には隨分麁末な待遇もすれば。氣に障る言をいひもする。始めの内こそ。嫁の優しい言葉よりは。娘の劍突が嬉しくもあつたが。此頃になつて。見ると。城井の爲所の面白くない所から。自然僻見を及ぼして。お滋も餘り香しくもなくなつて來た。因で折々は嫁の事も憶出される。周三も優しかつた。と考へると稍歸心が動き初めて。家の樣子はどんなであらう。一寸一晩泊で遊びに行つて見たいけれど。未練らしく其も否だ。先方から詫を入れて。歸つてくれといつて來

れば。其を機に歸りたいものだが。今となつて此方から口を切る譯にも行かぬ。と些の意地ばかりで持つてゐた矢先へ。六圓といふ一大事が起つたので。さあ爰が考へもの。澁谷の言分には。十圓では送りかねるから。六圓で免してくれ。もし其で勘辨がならぬなら還つて下さいと。此挨拶では心から我に還つてくれろと頼む氣は無いので。六圓で否なら。どうでも可い了簡なのを。有難さうに喜んで還る事もない。最う少し辛い思をしても。客分でゐて見やう。周三だつて一人の親をいつまで妹に預けて苦勞をさせもしまい。今は未だ還る時節でないと。其趣を澁谷へ答へたのは立派であつたが。六圓の聲が懸ると。忽ちお膳に其反響がして。二尾の魚は一尾となる。鷄卵のお羮が葱ばかりとなる。その理屈ではあるが。今更のやうに隱居は額を顰めた。金拾圓でさへも飽かれたのが。殆ど半分の減額であるから。これではほんの米代だけで。少し孝行の眞似でもすると。忽ち食込む始末。それも城井の會計に。ちつとでも餘裕があるのなら兎も角も。從來隱居の臍を豫算に入れて繰廻してゐたほどの内證であるから。世話の燒けるだけも損に立つと。實の親であつて見れば。お滋もそらほど精算をしてかゝる譯でもあるまいけれど。打明けて言つて見た所で。十圓の時ほど嬉しくないには相違あるまい。是に於て城井は隨分煩くお滋に氣障な事をいふ。隱居は隱居で亦お滋に否味をならべる。中でお滋が大弱り。此分では迚も納りさうも無いから。いつそ大悶着の起らぬ内に。澁谷へ還したが得策と。此筋を隱居に微見して見ると。どうか物になりさうな鹽梅であるから。かねて一味の親類三池方へ出向いて。自一至十を話して。舊の鞘に納るやうに話をしてくれと頼むと。其は我の口からは言難い。樫村めに其見ろといはれるのが業腹だ。我からでは却つて稜が立つて好くないから。お前が自身に周三に會つて然う言つたが好いからと斥られた。

六

彼此悶着があつて。結極お滋が我を折り。隱居が角を折つて。多く謂ふ本木に勝る末木無しで姑は矢張娘の世話になるといふ事に納つた。水の流と人の身は。今日に知られぬ飛鳥川。と歌でゞも聞くと豪勢意氣であるが。淵が瀨に變られた身のつまらなさ。外套の裾を朝風に飜してハヽナの烟を口髭に炷籠めながら。馬上優に出勤した姿は。玄關に跪つて見送るお銀も。遖れ殿振と心勇むだものが。此頃では建附の惡い格子をがたくり引開けて。葱の味噌汁の曖氣をしながら。ぼく／＼出て行くのを見るにつけて。情無いやら。味氣無いやらで。胸が一杯になる。

それがお銀ばかりでは無い。親は親だけに。老婦は老婦だけに悲しさも勝る。あのやうに身を卑して苦勞をしてゐるのに。と有繫に隱居も我儘を節むで神妙にしてゐられると。角に出はせぬ窓の月だから。お銀も自づと優しくして上げたくなる。其處でやさしくすると喜ぶ。喜ばれる。やさしくするで。爰が家内の治る大本とも謂つべく。御母樣といへばお銀樣やと。和氣靄然堂に滿つる澁谷家今日の有樣に於て。貧は諸道の障碍としてある本文が大いに疑はれる。恐らく周三が再び出世の曉に忽ち霧消して了ふであらう。して見れば。他日の榮華は寧ろ今日の貧樂に如かざる譯であるが。それは唯の理窟で。富と貴きとは。人の願ふ所。少々家内に風波があつても。不自由の無い方が先づ。と色氣を出すが常情で。一日も早く好い官途があれば。と隱居もお銀も只管そればかりを念じてゐる。他の思ふほどにも無く。本人の旦那樣は綽々

然として呑氣で。大晦日に例の見そぼらしいぼく／＼で出かけて。飛梁の辻車で四方を推廻し。同藩出身の大臣やら。局長やら。然るべき處を賴みにあるきながら。思はしい口も無くて歸つて來るのに。一向苦勞さうな顏もせぬから。少しは好い話でもあるのかと思つて。どうでございましたとお銀が氣にして聞くと。さうお前のやうに急いたつてあるものでは無い。半年や一年で腐るものでもないから。氣長に待つが可えなどゝ。鰹節でも転しておくやうなことを言つて。根から台手にならぬ。

お銀は獨り鬱勃念つても。向河岸の火事へ柄杓の水を打懸けるやうに 氣の揉榮も爲ぬといふもので。後には根負をして餘り言はなくなる。口頭にこそ出さぬが。心の中の苦勞は尋常で無い。然れど苦勞にしたからといつて。其でどうといふ事は無し。結句心を痛めるだけが損とは思ふものゝ。そこが凡夫の淺ましさには。兎角行末が案じられて。苦勞も心配も爲ずには居られぬ。

周三が一向無頓着であるのを。隱居も餘りお事に思はなかつたけれど。面と向つて詰々言はれぬところから。何と無く其積りをお銀の方に向けて。聞き辛いことを聞かせられるからお銀は堪らぬ。遣り切なさに。無駄とは知りながら折々周三に口説くと。おつに嘲弄かされて。太平樂の仕舞は定文句の。我を譏だと想ふ。澁谷周三だ。お前たちを乞食にはさせぬからと大きく敵冠せられて。すご／＼お酌するが例である。

却說お識の方は睨む姑も無く。面倒な親類も無く。旦那樣は幼稚馴染の信樣で。成人したお坊樣と飯事するやうな世帶。慾と謂つたら早起が辛いか知らねど。亭主の出勤を送出して了へば。其から五時頃までは一人天下である。お薩の蒸焼をして寢ながら食べて。お腹がよくなつたら居睡をしても。誰が何と言ふものも無い。但戶鎖をしておかぬと。此近邊は下駄泥棒が行るから。と叔父さんの言つた通りの始末で。嫁に參りましたと謂はうよりは。舍兄の處に助手に來た方が適當らしい。

身分を謂はゞ職工。月の入高も輕少なもので。其に應じて活計もお麁末ではあるが。憚んながら脊越の錢は持たねえのさの訳ではなくて。生れ得て元來篤實一遍。元朝から後に近き大晦日の事を慮る質の伴樣であるから。奢侈にはせぬが奢侈がましい眞似も爲ぬといふもので。月給の四分の一は。毎月相違無く郵便貯金通帳に記入されて。月に二度ほどは日曜日に。夫婦連で遊山にも出懸ける。其内に懷姙の噂があつて。實家の兩親はころ／＼權次。正月の帶といふ頃。丸帯の鎌倉の燈明に。三晩續けて大きな丁子が擢いたので。實家は無上に目出たがつてゐると 果せる哉。淀ヶ内よりの文ゝ何を知らせて來たか。皆々様御推もじ被下度候。

（廿四年八月）

二人比丘尼 色懺悔

自序

二人比丘尼色懺悔成る。儂の九華。香夢樓思案麻溪漣眉山等わが机をとまりき。言葉よりまづ大口をあいて笑ひ。爾紅葉。若氣のいたりからまた〳〵好色の書を著はすか。喝爾等鞘の塗で兼光か竹光か。判斷がなるか。そも色懺悔を題にして妙齡の比丘尼二人が山中の庵室に奇遇し。古を語り今を慕なみあふといふ脚色。一字一涙の大著作即ち是と。薄汚なき原稿をさし出せば手にだも觸れず腹を抱へ。

扨も企圖のしほらしさよ。心根のふびんさよ。茶番狂言の飯炊場か。情なからぬか悲しからうか。尺八に似た火吹竹。いかなる音をやいだすらむ。爾性諧謔。爾口善罵。なぐり書の滑稽もの或は怪我の功名に。見らるゝもの出來すやも計られず。爾が悲哀小說——盲人が染小袖の是非。其器にあらずして之を言ふは間違へるなり。鴝鵒は濟を過ぎず。貉は汶を渡つて死す。鳥の知に如かざる紅葉。毛物の愚に似たる惡太郎。勞して物笑ひの種となるとも。我等が知る所にあらず。我知る處なり。爾等が知る處に非ず。向横町の東坡きのふ我に教へていふ。貧家は淨く地を掃き。貧女は巧に頭を梳る。ずゐぶん骨を折つて見なさいと。これわが宗旨ちがひの小說を試むる所以なり。われ諧謔自ら喜べど涙なきに非ず。口よく罵れど慰言なきにあらず。さては力を盡さば縱鼻横目のすなる事。などか我れのみならざらむ。英國のシエークスピアといふは。鬼にもあらず神にもあらずして。一枝の筆に萬象の人情世態を寫して。泣くやうにも笑ふやうにも得書しと聞く。かれは富家にして下男に掃かしめ。富女にして髮結に梳づらしむるものなれば。手細工の及ぶべきにあらざれど。紅葉果して涙なきか。須らくこの書發市の曉を待つて世の看官に問ふべし。淵を素通りしてその底に蛟龍の棲むを見るか。林を一日してその奥に栴檀のあるを知るか。麁忽ばしのたまふなと咳二ツ三ツ。一同嘲笑していふ。天水桶には蛟龍湧かず。芋畠には栴檀生えず。紅葉爾が非望の著作は。蛟龍を天水桶に覓めて底をぬき。栴檀を芋畠に探して地を荒らす。笑止々々と歸りゆく。紅葉その影遠くなるまで見送り。やがて二三尺とびすさつて衣紋かいつくろひ。大方の君子に向つて合掌再拜して曰。拙劣の才學もとより變幻の人情を寫すに。萬分一さへうべからざるを信ず。世間の蜆わが門前の蛤今ほざいたる誇大の過言は。人を見下し罵詈に對する一團の肝癪。ほんの内々だけの高話。眞平御免下さるべし。もし方々に惡まれ奉り。色懺悔を見てかなしがり涙を落すものは。書肆の主人ばかりなどの惡評。かの五人の耳にいらば。むごらしやわれは彼等が爲に罵殺せられむ。他人にむかつてならば。惡口雜言御心まかせ。たゞ五人へは。コレひそかに〳〵

明治廿二年小草生月戲作堂の南軒に

紅葉山人戲誌

作者曰

一此小說は涙を主眼とす

一時代を說かず場所を定めず。日本小說に此類少し。いかなる味の物かと好心に試みたり。難者あらば。ある時ある處にて。ある人々の身の上譚と答ふべし

一文章は在來の雅俗折衷をかしからず。言文一致このもしからずで。色々氣を揉みぬいた末。鳳か鷄か——虎か猫か。我にも判斷のならぬかゝる一風異樣の文體を創造せり。あまりお手柄な話にあらずといへど。これでも作者の苦勞はいかばかり。それをすこしは汲分けて。御評判を願ふ

一對話は淨瑠璃體に今時の俗話調を混じたるものなり。惟みるに。これを以て時代小說の談話體にせんとの作者の野心

一前述の通り。世間在來の文とは。下手なりにも趣を異にすれば。讀人一見してつらいといふ。作者は少しもつらからず。我つらからざるを人々何ゆゑにつらしといふや。專ら句讀をたよりに再讀の御面倒を請ふ

月　日　　紅葉山人

發端　奇遇の巻

栞は眉目容すぐれ髮長し。常は西施が鏡を愛して粧臺に眠り。後世なんどの事は露ばかりも心にかけぬ身の。一念の恨によりて。ごそと剃こぼして尼になりたるこそ。

肝つぶるゝ業なれ。　百花譜　許六

蕭寂はそも如何ならん。片山里の時雨あと。晨より夕まで。昨日も今日も凩の烈く。あるほどの木々の葉——峯の松のみ殘して——大方吹落しぬれば。山は面痩せて哀に。森は骨立ちて凄じ。

茶の煙だに舉らずば。山賤も知らぬ谷陰に誰かすむ庵ぞ。かくても倘捨難き浮世の面影のこす菱垣。疎に結び繞し。竹は蝕み。繩朽ちたれど。枯蔦の名殘惜しく縋れるまゝに倒れもやらず。二本の黒木を入口の標に茅葺の屋根は處に黑み。落懸る檐風に傷はしく。風情は月にばかりの破壁。強くは踏れぬ竹緣。切株の履脫より左に三尺。其處に筧の。水ほどにもなく絕えせぬ雫。閼伽桶に滴る音の。やうやう幽に疎に成りゆくは樋の口凍るにやあらん。夕暮の風寒し。

麓路に梅香りて。扨は春。窓外の山白うなれば。冬ぞと知る。此處には曆日なく。晝は伐木の音に暮れ。夜は猿の聲に更けて。鐘も鷄も響かず聞えず。戀する身には此上なき隱れ家に似たれども、愛欲を棄てずしては。一日假の住居も難し。夕日影木末に薄ぎ。反古張の障子赤くなれば。程なく内に鉦鼓の聲す。何處よりか來にけん法衣の人。塗笠目深に打冠りて。此門に休ひ。

「頼む。」　と音なふは女の聲。鉦の音息みて。障子の外に現れしも法體の女人。鼠木綿の布子に墨染の腰法衣。頭巾着たるが外面を窺ひ。

「何御用でござりまする。」

「是は行脚の比丘尼。慣れぬ山路に迷ひ。難儀を致しまする。御無心ながら一夜の宿を御願ひに。御看經のお邪魔を致しました。」

寒さに慄く聲なり。

「御覽の通の荒屋。夜の物とて御座りませぬが。お厭ひなくば。さゝお入遊ばせや。」

客の比丘尼は凍る手のもどかしく。笠の紐とくとく緣に立寄りて。主が勸むる微溫湯に疲れし足を濯ぎ。導れて爐近く座を占め。初對面の挨拶。やがて澁茶一碗。歡待ぶりにさしくぶる榾の。焚上る炎に背くる顏を。主は何心なく打見るに。俗に在りし昔の我ならば。げに可妬しき其の容色。今も見て、臭骸の上を粧うて是とは覺えず　おのれに二十一歳。二つば

かりは少かる可し。此の眉目容姿――此の年紀
菩提の種には何がなりし。まだ爪紅の消えやらぬ指に、珠數つまぐる殊勝さ……過ぎて哀なり――我身に思ひ較べて濕む涙を。爐の榾掻動かして、紛しと紛はす。客も主を見れば。世に捨てらるべき姿かは――世に飽くといふ年かは。或は我に似たる身の果か。聞かまほし、語らまほしや。我が事、人の事、互に一樣の思は有れど言出づる機會なくて。山路の險阻――麓の川の名――堂塔伽藍――昨夜の氷、其等を他に語る裡に。彌煮えたりと、主客夕餉の箸を取り。やがて又少時の物語。
「――旅の疲もさぞ、心置かれず御寢なれ。」
と紙帳釣下して。切に勸むれば。明朝を契りて客は先づ臥戸に入りぬ。
　里ならば初夜撞くほどに夜は更けて。山を嵐物に暴す風、其に吹轉けじと。松の梢に取附く梟の濁聲、其に呼吸つまらせて。月に哮く狼の遠吠。庭にたまりし落葉の、又其に揉れて。哄と一度に板戸を打てば、夢破られし客の比丘尼は。目を見開きて、今眠りしと思ひしに。同じ床に主の寢姿、外に凄く。内は寒く、目を閉ぢても心は冴え、微なれども耳につく主の鼾、枕邊に夜を守る行燈の火影に。紙帳の反

古の文字鮮に讀まれければ。寐られぬまゝに頭を擧げて。目近の一通を見るに。

一書置の事。

一筆申のこし候。我此度戰場に罷り向ひ候上は。一命は無き物との御覺悟有之度候。勝負はもとより時の運に候の間。相構へて捨つる命に極れるにも候はず。やがて目出度凱陣致さん事も。有之べきかなれど。兼而今日を期し候千歲の一時。仇に過すべきや。日頃の主恩を報ず可きに候へば。比類まれなる忠戰に美名を留め可申所存に候。宿世いかなる緣に候てか。忝くも上樣の御仲立を以て、其許と祝言致し候過分の條。人々に羨れ候ひしも。夢の世のしばしにて。淺からぬ情の嬉しく。玉椿の八千代。二葉の松の末と賴みしも。今は仇と相成申候。逢瀨ひてより今日まで廿日に足らぬ束の間に。友白髮の年月を縮め。飽かぬ思の短き契。長の別の今と相成候ては。なまじひのかたらひこそ殘念至極に存ぜられ候。始より斯ある可しと知り候はんには。いかに御心淺からずとも。將又主命重ければとて。假の世の假の契は思もかけざる事と。女々しくも後悔致され候。よしなき契ゆゑに。其許にも數の苦勞相掛け。又我とても此のみ死出の迷と相成申候。翌日にも我討死と聞及ばれ候とも。構へて狹き了簡出すまじく候。暮々も賴入候。一圖の心より世を儚み。髮を切り衣を染め。わが亡き魂の修行道の苦患を救はんなどゝ。思し立たん事最も不所存の至に候。主の御恩には家を忘れ身を忘れ候は。武門の掟に候へば。吾家の面目。吾身の本懐。何事か之に過ぎ候はんや。妄執少しも無之。往生致し候べく候。ただ折々思ひ出され候砌。一遍の回向なし下されば候はゞ最も過分に存候。其許はまだ年若く在し候へば。何方へなりとも似合しき緣邊を求められ。萬々年の御壽命の後。冥途にてかさねて對面を期し候。此儀はわが一生の願に候。暮々も違背あるまじく候。もし聞入れ申さざるに於ては。未來永劫他人と相成るべく候。別札の遁去狀認め置候の間可然身の振方取計はれ度候。當座の用までに金子五十兩。革籠の内に差置申候。春雨の香は殿より拜領の品なれば。平常大事に懸け候を。此度兜に焚しめ出陣いたし候餘りを。形見と思召され度。取急ぎ候間名殘をしき筆とめ申候。以上。

若葉どの

涙に碍げられつゝも讀了り。首を傾けては又打眺め。
「はて小四郎様に其儘の筆の蹟。」
暫く思案に沈みしが。
「あゝ氣の迷。」
と口にはいへど。心に懸るか。牛頭より七八行見返して。
「亂世の習とはいひながら。酷たらしい殿御の討死……南無阿彌陀佛……其故の御發心か。お道理や。似た身の上もあるもの。」
人の哀──吾哀。一時にさしぐむ涙を拭ひ。
「噫。思へば夢の浮世。」
主の尼は目覺して。其の獨語を聞咎め。
「如何遊はしました。」
客は鼻つまらせて。
「お目覺め遊ばしましたか。只今此のお文を拜見致し……。」
聞くより主は眉を顰め。
「文を?!」
「この紙帳のお書置。」
不注意を悔る主は。呀と言ひしまゝ。語は次で出でず。扨は秘する事か。卒爾なと心付きけんやうに。客も且く遲ひしが。
「このお書置の若葉様とは。あなたの俗のお名で御座りまするか。」
此の山中の侘住居。遁世してより若干の月日。今の法名だに。知りて呼ぶ人あらざるに。まして俗の名……若葉……他人の名か。鈍や我耳に珍しくも聞ゆなり。我名……若葉……俗の名……俗の時。それを思へば早や涙。聲も萎れて。
「はい。若葉と申しました。」
書置の名宛は若葉。討死せしは慥に其の夫。傷はしやと思ふ心はいと切に。
「運あらば目出度皈ると之には書いてござりまするが。あなたの其お姿では。まさしく討死なされた事と存ぜられますが……。」
「仰せの通り。敢ない最期を遂げました。」
「これほどお勇ましい御覺悟では。定めてまあ花々しい御働を遊ばしました事で御座りませうなあ。」
「はい。ようお尋ね下さりました。人傳に聞きますれば。武士の手本と成樣な。目覺しい働きを致して果てましたとの事。私までが何の樣に嬉しうござりませう。」
「けなげな事おっしゃるだけ。お心の中が御推量申されて。他人の私まで涙が零れまする。」
「お察し下さりまし。」　と言ふにや。聲は斷れて。鮮に聞えず。
「よしない事を申出し。お歎を懸けましたは私の無調法。御免なされまし。」
「何の〳〵。やさしいお心に絆されて。不躾な……お詫ならば此方より。」
とやう〳〵涙を收め。
「先程から私一人が味氣ないやうな事ばかり申上げ。お見受申せば。あなたにも花の盛を其の有樣……尼法師にに勿體ないお姿を。」
あれと赧らむ顏を枕にさしつけ。嬌羞を笑む初心の風情。振袖着たる昔見たし──さぞやしをらしき聲して普門品。見れば麗しく。思へば憐なり。
「おいたはしう存じまする。どういふ因縁で御發心なされましたか。苦しからずばお物語が承りたう存じまする。」
「お心にかけられた其の尋問。思出すも涙の種。儚い身の上で御座りまする。」
姫百合は露の重きに堪へずやありけん。そゞろに零す一雫。
「兩親ともに世に在りながら。睦む夫に死別れ。味氣ない身の浮世を觀じ。佛の御弟子となりまして。話に聞き──繪に見たやうな旅路をば。同行もなくさまよひあるき。死ぬにもましたる艱難辛苦。夫の事は片時忘るゝ間

は御座りませぬが。また其樣な時は兩親の戀しさに。身も世もあられぬ思を致しまする。今日も今日とて道に迷ひ。日は暮れかゝる心細さ。幸ひの火影を目的にお門まで參り。御無心申しあげましたに。心よう御承知下され。又お目に懸つてお話申せば。お優しいお心やら。お言葉やら。姉上樣か何ぞのやうに思はれて。もうあすからは廻國致すが不好になりました。どうぞ此儘お傍にお召使ひ遊ばして。閼伽を汲め。花折つて來い。汚れた物の洗濯。何なりと御用仰付けて下さりまし。もし。お願で御座りまする。」(へ眞白に細き手を合せ。涙浮ぶる目を擧げて。なつかしげにも主の顏を打瞶れば。

「ようおつしやりました。不束な私を姉……私も親身の妹にでも逢ふやうに思はれまする。物心つく頃兩親を喪し。幼少からお上へ御奉公。緣づいて間も無く夫の討死。何便もない身の上。あなたのやうな妹でもあるならば。憂を語る相手にもならうものと。お目もじ致した其折に。しみ〴〵胸に思ひました。御覽の通りしがない活計。御辛抱さへなされうなら。十年が二十年。何の。いつまでも御出遊ばしませ。」

語に誠を顯せば。客は嬉し悲しの涙を禁め得ず。

「そんなら今夜から姉上樣。もし姉樣……もう此からは他人では御座りませぬ。互に身の上を打明けて。お話が致したら御座りまする。あなたの其のお姿を見るにつけ。どうも不審が霽れませぬ。」

「この姿に不審とは?」

「さればで御座りまする。御書置に尼法師となるならば。未來まで緣切るとの事。その御遺言にお背き遊ばして。御法體は何故で御座りまする。」

「あゝ。其を言うて下さりまするな。あなたがおつしやつても。草葉の蔭から夫に申されるやうな思がいたしまする。あの通り書置に懇々其を申しましたも。私の行末を心に懸けての事。其志を無に致すではござりませぬが。たとひ七生まで緣切られましても。どうまあ操が變へられませう……そんな女と思はれましたが。口惜うござんする。討死と聞いた時は。いつそ自害と思ひつめましたなれど。短慮は出すなとの遺言。それかと申して。生効の無い身……世間の人は何にも替へて惜む——命の遺端が無いと申すのは。前世にいかなる惡業を致した報でござりまするやら。夫といふは。私同樣。幼い折双親に死別れ。伯父とは申せど。これも實の伯父では御座りませぬ。いはゞ他人に育てられ。緣者といふは御座りませぬ。もし私がない後では。死んだ命日忌日を。誰あつて回向致しませう。修羅の妄執もなく成佛する。と立派に申しても。合戰とはいひながら。人の命を取つた夫。あの世で佛樣がおゆるしなさらう筈は御座りませぬ。私が出家いたした爲に。夫の未來の苦患が少しなりと助かる事なら。連添ふ女房の役目。去られましても……私の寸志。其ゆゑのこの姿で御座りまする。たゞ返す返す恨めしいは。(わがなき後で再緣せよ)とは。餘りと申せば私を見下げた言葉。連添うた日はわづか半月ばかりゆゑ。私の心を疑つての言葉かは知りませぬが。女夫となるまでの私の苦勞……。」

客の比丘尼は流石に處女氣。

「さやうなら。あの戀婿樣とやらで御座りますな。」

羞かしげにも打笑む顏を背けて。

「お羞かしい事申すやうで御座りまするが。私が御奉公致して居る中から。思ひ初めました夫。若氣の至から文などをつけましても。噂の高い律義な生。露ほども打解ける氣色が見えませぬゆゑ。くよ〳〵と思ひ續けて。疾ひ

つきましたを。日頃私をいとしがつて下さるお主君のお取持にて。やう〳〵念願が叶ひ。やれ嬉しやと思ふ内に。隣國との合戰――夫の出陣。翌日は別といふ前の日に。食事はおろか物さへ言へず。たゞ泣くと夫の顔を見るとばかり。武士の妻ではないかと叱られましても……いかに武士の妻だとて。夫婦一世の別が泣かずに居られませうか。先祖から家に傳はる三方白の兜を。殊外秘藏致して居りましたが。今度の合戰に其を着て出陣致すと申しまするに。忍緒が見苦しく古びて居りましたゆゑ。もしもの事があつてはと。新しく縅易へて置きました。一方ならず喜んで。之をそなたと思ひ。是に對しても卑怯な擧舞はせぬ。目出度歸るを待つて居よ……此一言が今だに恨めしくてなりませぬ。水くさい……口ばかりその樣な氣休め……鎧櫃の内にはこの書置……兼て討死の覺悟なら。から〳〵となぜ打明けて有仰つては下さりませぬ……恨で御座りまする。其とお打明け下すつたら。何の未練がありませう。夫の討死で自害をして。冥土へ參つて待つて居りまするに。再縁へとの……夫を持てのと……此ばかりか去年までは見るも汚らはしい。其僧に引裂いて……了ひました。」

昔の恨を――其時御たんにも其人なければ。胸に苦しく包みし恨を――つれなかりし夫の前に鑿つ如く口說かれて。

「お道理では御座りまするが。其も皆あなたを御苦勞に遊ばしてお討ひなされたを。お恨みなされては勿體ないと申すものでござりまする。」

「其を思はぬでは御座りませぬが。女と申すものは。我ながら愚痴なもので御座りまする。つれない――水臭いと。人樣にまで恨がましい事を申すほどな夫が。なぜ又この樣に戀しい事で御座りまするやら。どうか成佛致すやうにと。お經を讀んで。上の空。勿體ない如來樣のお顔までが。夫の顔に見えまして。心の迷は少しも消えず。夜晝のわかちなく〳〵。戀しい――懷かしいで。胸の安まる暇は御座りませぬ。妾ばかりが佛の御弟子――心はやつぱり淺ましい愚痴な女。此通り書置を紙帳に張つて之を見ては思出し。また思出しては之を見。每夜この中へ臥せりまして夫と添寢を致す思。佛樣の冥罰も忘れ、未來の苦患も覺悟の上。御佛樣とも神樣とも思ひまするは夫ばかり……早く……今にもあの世へ參り。夫と一緒に苦患お受けしたう存じまする。まだしもお主樣がお出遊ばしましたら。力にも成りまするに。夫が討死の其後の合戰に。お二方とも御生害。お家はつひに斷絶して。館の跡は薄尾花。今は枯野の姿でござりまする。」

「お主樣まで御滅亡とは。重ね〳〵のお不仕合。そのお歎きは御尤で御座りまする。とは申すものゝ。やつぱり前の世からの約束事。過去つた昔は長い夢とお諦め遊ばして。煩惱を去つて一心に御回向遊ばすが何よりと存じまする。今更どの樣にお歎きあそばしても。死なれた方の生返るではなし。今までの迷をお覺しなされて。心からの出家を遂げ。佛樣にお仕へ遊ばすが。お連合樣の爲には。此上もない弘誓の舟で御座りまする。あなたに御意見申上げる私では御座りませぬが。現身の妹がお身の爲を思うて。申す事と思召し。必ず小ざかしい――差出ものとおさげずみなされて下さりまするな。」

「御深切によう有仰つて下さりました。」

主の尼は淚に濡ゆる目許を押拭ひ。

「先程から手前勝手な事ばかり申して……どうぞあなたのお身の上をもお聞かせ遊ばしまし。御苦勞になる事は。及ばずながら又私がお慰め申したうぞんじまする。」

今まで泣きしは人の身の上。主が優しき言葉

に、更めて我とわが身をなく涙。無言に凌る。其も暫時。やう〳〵自ら顯まして。さやうならお聞き下さいまし。かやうな譯でござりまする。」

戰場の巻

ふる雪にまがふ卯花縅
一聲血になく浦松小四郎が事

高きは梢か。低きは野か。唯一面に白く。なほちら〳〵名殘をふらす曉の空。岡の片陰に破れ格子の薄氷に。緣を取せし小澤近く。古りたる栴樹。下は幹を染分け――上は（紅血）を包む――雪。誰……此美を亂し――此美を傷く……こは何事。低き梢に。切口より血汐を落す生首三つ結ひつけて。こぼれ歯の長刀の。朱に染れるを幹の二叉に寄掛け。諸膝組んで雪を掃ぶ若武者――鎧は……草摺、小袖の下二段を萌黄に威し。上を白絲――其華美さ卯花縅。いかに手痛き合戰やしつる。射向の袖の菱縫の板はちぎれ。草摺の板をほつれて。下る匂の絲。胴の緘毛には、血液斑點に染むる散紅葉。顱巻もなく散髮大童にふり亂し。額から眉を割つて斜に左眼の上を行くは斬疵か。紫ばめる唇の下に。三寸ばかりかすられて。朱ににじむ眼……うす青む面色。一口ごとに呼吸せはし。やがて水際に膝行寄り。氷をおし破りて。丸く碎けたる處へ首をさし伸べて。我顔を水鏡に寫して。暫く見詰めたりしが。やがて面の疵を洗ひ。四邊を睨めまはして苦しき肩呼吸。雪に深く弓手をついて。半身起上る……其時……右の股へ……誰……鎗を――草摺の外より……骨をも貫いたか。「あゝつ。」と叫びあへず。吉則の二尺八寸……閃く……丁と切拂ふ。鎗は螻巻より穗に切れ。其餘勢に二三步前へよろめく敵を……見れば鐵地の半首……小具足身輕に出立つ雜兵。手に殘る鎗の柄からり投棄て。腰刀引拔き。眞額に振翳し（二つになれよ）の身構。若武者はたと睨めつけ。

「下郎。推參な。」

彼は一言も返さず。矢聲高く切下す。二三尺飛退つて。股を穿つ鎗の汐首拔取り。敵の胸板目がけて投付ければ。體を捻つて……なほ斬懸る。

「物々しや。」

口には言へども初の深手に苦しき進退。片膝ついたまゝ斬込――受流し十二三合亙り合す。虎は病めども虎。苛つて附入る若武者の切先を請損じて。敵は右の肩上の外をしたゝか割附けられ。しどろになつて仆るゝを。透さず二の刀に細首打落せば。氣の寛か我にもあらで。撑と坐し。はっと呼吸。時しもあれ。耳許近く。手綱烈く搔繰る、鑣の音。すはや敵よ……味方か。味方ならは……此處に深く腹搔捌いて。首級を彼に賴まばや。我とても生く可き命にあらず。敵ならば……行歩は自在ならずとも。今生の思出。快く斬結んで。美名をかれの口より擧ぐ可し。「來れ何者。」

太刀の血を雪にすり拭ひ。遲しと待つ處へ。青總かけたる白栗毛の。逞しき逸物の蹄に雪を蹴らし。驀地に駈け來る武者一騎。鎧は褐色縅、目深に頂くは同毛の六十四間の星兜。獅子頭の前立物に金の鍬形を聳かして。左脇に青貝摺りたる二間柄の大笹穗を横へし騎馬の姿――天晴物慣れたる武者よ。此處に人ありと心着かずや。驅拔けて通る後より。

「此は浦松小四郎守眞なり。手傷少々負ひたれど。勇氣は少しも衰へず。御不足ながら御相手仕らむ……いかに。」

と聲をかくれば。かれ遽に駒首引廻らし。其足を留めて目庇の陰より。守眞の顏を篤と見。

「やあ。小四郎か。」

いふは誰。守眞深く怪み。兜の内を伺ひ

ながら。
「如何にも拙者は小四郎守眞。貴殿は……。」
問はれて。背に閃く指物の旗の端をとつて。守眞にしめす。見れば緋羅紗に遠山左近之助武重と白し。
「やあ。伯父上か。」　涙聲。
「小四郎……珍しや。」　これも涙聲。急しく馬を下り。鎧とつて進み寄れば、守眞恭しく一禮して。
「其後は御健勝で祝着に存じます。」
「御身も達者で……。」
いひかけて眉を顰め。守眞の姿を左見右見。
「大分の手傷。面色といひ呼吸といひ。氣遣はしい。重手では御座らぬか。」
戰場の習とて。親は子を棄て子は親を思ふ暇なく。人の心は剛に流れ。寄手の松火に目さまし。胡籙枕にいぬるまで。やさしき言葉は。かけられも。かけもせず。かゝる時なれば。骨肉の血を分る。大將の慈悲の舌には。惜むべき命も物かは……棄てる氣になるぞかし。人と見れば。討つか――討るゝかの中に。思ひもよらず逢ふは……伯父――御身は……混言。ぼろぼろと走る涙は草摺の血を洗ふ。
「は……はい。」　あとは無く。さしうつむく。
武重は皆綾の燧袋より。金瘡の藥とりいだし。舌頭に濕して指に載せ。
「さ……さ。小四郎。藥……面を……。」
守眞會釋しつゝ顏をさし出せば。武重其頤に手をかけ。傷口に藥を塗りながら。
「ほう。此は……どうぢや。痛むか……うむ。左程痛まん……外に矢疵でも請けられたか。」
「は。……左の籠手と腰の番ひ……外に一ケ所高紐のあたりへ。強く横矢を請けました。」
「左樣か。」　と聲をうるませ。「玉傷は……。」
「幸ひに彈丸はうけたやうに覺えませぬ。」
「玉は受けぬ……其は目出たい……ひどく震へる樣子だが如何いたした。」
「只今此處で……。」
と倒れたる雜兵を指し。
「此奴に不意に右の太股へ鑓を……。」
「此奴に……仕留められたのか。」
勇氣を心に疊む笑顏。守眞も寂しげに笑を含む。
「細首打落してくれました。」
「ふむ。天晴。」
と守眞が亂髮にふりかゝる雪を拂ひつゝ。痛手に潤るゝ姿を見て。竊に涙おし拭ふ。響く、……突然……彈丸の音――釣瓶ばなし。守眞むくと首をあげて其方の空を睨め。ふり向く顏と武重の顏。
「計らざる處にて見參致し。今はの際の喜悅……。」
「なに。今はの際。」
「は。此より戰場へ引返し……花々しく斬死致す所存でござります。」
「いゝ所存――いゝ覺悟。さりながら御身が勢は無慙な敗軍……あれ……あれ味方が揚げる鯨波。今御身が取つてかへし。一働きとは天晴……業の潔しとする處なれど。累卵を以て大石の喩。御身一人欠くゝ味方もなく。群る敵へ斬込んで。三面六臂の目ざましい働をした處が。急に味方の勝利になるではなし。言はゞ犬死……ましてかけ退も不自由な重手をうけて居ながら……餘りといへば無謀な量見……如何なる怪我で名もなき下郎に。首級を揚げらるゝやも知れ難い。合戰は今日一日に限るではなし。十分手當をして。英氣を養つた其上で。存分の働をしやれ。何時でも一命は捨てらるる。……先拙者の館へ立退え。ゆるゆる手疵の療治を……なう小四郎。」

實意を籠めて說諭むれど、忠義一徹の守眞。武重を恨めしげに見遣り。
「お言葉とも思ひませぬ。死すべき時に死せざれば。死ぬにましたる恥辱を受くると申すに……武運拙くして味方の敗軍。たとひ手疵を負へばとて。戰場を脫け、此處等を徘徊致すは、我ながら快くも存じませぬ。まして……卑怯者と敵味方の者の思はくも恥かしう御座るに。此處を落ちて方へ來い。ゆる〳〵療治せよ……御深切は御深切なれど。伯父上、平常とは違ひます……名を惜み義を重ずる武士に……夫が仰せ下さるお言葉か、名を惜み義を重ずる武士の……夫が御意見か、餘りと言へば女々しいお言葉。此小四郞は命を惜む腰拔者と。おさげすみの上の御遺言で御座りますか。伯父上。亡父と疾年御入魂の御馴染、且はその遺言を以て。我子と思召して御意見下さるならば。何故に潔く討死せよとは。仰せられて下さりませぬ、却て御厚志な恨しくぞんじます。」
當然の理に責められて。武重は――鎗を突き。較にもたれ――首を下げて無言なり。返事如何にと。流眄に見やる守眞。かれ一言の答なければ。苛ちて。
「伯父上……さらばで御座ります。」
何を思案の武重。言葉は耳にいらざるか。體さへ顏さへ。少しも動かず。鎗の柄に身をふるはして。馬のみぞ高く嘶く〳〵。
「是が此世の御暇乞……伯母上にも芳野殿にも、……よろしく〳〵申しあげましたと御傳言を賴上げます。」
次で言ひださんとせしが。懷舊の涙に暫く閉ばされ。
「不運の小四郞。八歲にして父母に別れ。夫より今日廿五歲の曉まで。伯父上伯母上の御不便にかけられ。實の親さへ及ばざる御慈愛。山とも海ともたとへ方なき御高恩を蒙り。小祿なりとも給はりて。父の名籍を受嗣ぐ迄に相成しは。偏にお二方のお骨折。いつかな此御恩報じと。日夜忘るゝ暇もなく。思續けて罷在りしに。計らず此度の合戰。伯父上とは敵と味方に別れ〳〵。勿體なくも大恩ある伯父上に弓をひきしは。私にかへ難き主君の御爲。武門の奉公のつらいと申す事、今日始めて思ひ當りました。方へ來いとの今の仰せ。日頃に替らぬそのお言葉。何處までも不便と思召せばこそ。平常なればいかやうなる無理難題を仰せらるゝとも。心骨を碎いても。御意を背く心は御座りませぬ。まして御深切のお言葉。推しても願ふ心なれども。假初にも主君を持つ身の上。武士の意氣地、小四郞がいふにいはれぬ心の中。御推察下し置れて。折角の御厚志に背くの段は幾重にも……伯父上……これこの通り。手……手を合はして……。」
（願ひます）は涙に紛れ。ハッと伏せば。聲は立てねど武重も。震ふ鎗先に隱されぬ涙。守眞曇れる聲を勵まし。
「わけて伯母樣には……」
少時勵みても。また擤む。
「言語に絕せし御慈愛を蒙り。常々身のまはりの物何不自由なく賜り。風引いても人を使はされ。氣分はどうぢや。欲しい物あらば申遣せ。この藥を用ゐよ……我子と思しめしての御心勞。風引いてさへ夫ほどに……此度小四郞が討死せしとお聞遊ばさば。いかなる事に成行かせたまはんかと。今死ぬ際に臨んでも。心に懸る伯母上のお身の上。なる事ならば唯一目。なつかしいお顏を拜し。長年うけし御恩の御禮なりと。せめては一言申上げ。此世に思ひ遺す事なく。快く生害致したら御座ります。尚又伯父上にも伯母上にも。改めてお詫を致しますは。芳野殿の事。」
決然としてひそ〳〵涙を拭ひ。耳を濟せし

左近之助。わが娘の名を聞くや否。身を背けて鞍の前輪に。兜を鉢と押つけ。堰留めし奔流一時に注ぐ涙。如何なれば……所以あらむ。

「風の便に承れば。不束なる小四郎を思ひ詰められ。頼みなきほどのお疾……有難いお志……伯父上始め伯母上の御心痛。御推量申します。これと申すもみな不義なる拙者がなす業。御免下さりまし。芳野殿と拙者とは幼少からの許婚。今日明日と祝言の延々に相成る内両家の確執。其處へ足下から鳥の立つやうな御舎様のお言葉。たつて侍女の若葉と縁組せよ。仲立してとらせると……往生づくめの祝言。御主人の仰なりともかねがね許婚の妻を餘所にするとは。いかなる人非人と。御二方の思召も御座りませうが。よくよく申すに申されぬ。深い仔細のある事と。お免し下さるやうに願ひます。此度小四郎が討死も。不義の天罰と思召して。御無念をお晴し下さりまし。」

武重は聲を震はし。聲をうるませ。

「何の。何の。お身が若葉殿とやらの祝言のお儀については。拙者を始め奥はいふに及ばず、む……む……[illegible]まで、共々に[illegible]喜び泣にな……ない[illegible]る。[illegible]は[illegible]る通の不束者。氣に入らぬは尤千萬……。」

言ひも切らざるに。矢庭に守眞立上り。鞍の痛手に撻と倒れ。倒れながら武重の脛楯に取縋り。おろおろ聲を震はし。

「そりや伯父上……そりや伯父上。あ……あ……餘りで。ご……御座ります。其樣に御立腹では。小四郎が此世の心懸り。冥土の障りになりまする。犬畜生にも劣つた恩知らずの顔を。御覧なさるもこれ限。不便の者と思召して。ただ一言許してやる……とのお言葉し……さもなくば。あの世へまかり越し。どうも父に逢はす顔が御座りませぬ。何卒お心解けられて……これ伯父上。ゆ……ゆるしてやるとのお言葉を……土産に心やすく死出の旅が。い……致したう御座ります。」

刀を杖に身を起し。力なき足を踏占め。梅の木下に立寄り。花多き小枝を切取つて。武重の前にさし置き。髪の毛一束切拂つて弓手に掴み。

「伯父上。此髪の毛は伯母上に……遺物と申すも恐れ多くは御座りますが。たゞ小四郎が討死の記章までに。御届け下さりまし。またこの紅梅の一枝は。芳野殿へ拙者が寸志。先頃お目にかゝつた節。拙者の庭の梅が咲初めたら。是非一枝との御所望。今日は持參しやう。明日はと思ふ内。遂に本意を果さず。さ……然や今頃は庭の梅もいゝ詠で御……御座らうが。其を進ぜる譯には參らず。さいはひの此梅と存じつき。一枝御覧にいれまする。小四郎が魂は此花につきそひ。伯母上にも芳野殿にも。やがて見參いたす心持にて。其を樂に潔く討死致します。伯父上には武運長久。御壽命萬々歳……死後れては一大事。時刻の移らぬ内……伯父上。此……此が長の……長のお別で御座ります。」

俄に涙を揮拂ひ。立上らんにも痛手の苦しさ。二三歩をよろめき――よろめき踏出す。鞍に身を寄せ。涙に暮れし武重。鎗取直して突立ちあがり。鼻聲を張揚げ。

「暫く……小四郎。」

守眞は立留り。頭を振向け。

「は。何御用で御座ります。」

「何處へ行く……。」

「戰場へ……。」

言はせも果てず。怒氣を含む大音聲。

「[illegible]れ。此刻から言葉を盡して。言聞かするに。更に用ゐる氣色なく。二言目には討死する……。」

鼻の頭に（へ丶）と笑ひ。

「さほど命が捨てたくば。戰場へ行くまでもない。伯父が相手を致さう。老體ながら御身如き若輩づれの。未練な刃は‥‥。」

胸板を。弓手に丁と一つ叩き。

「よも立つまい。見事伯父が皺首斬つた其上で。まだ刃が鈍らずば。其時こそ戰場へ。引返すとも——斬死するとも。御身の勝手。武重此處にある間は。其處一寸も動かす事はならぬ。さあ勝負。」

二度三度鎗を引扱いて。身構ふれば。

「勝負とは‥‥情ない‥‥。」

目も眩み心も消ゆる。いぢらしや守眞が無慙の姿。強く口には言へど。胸には涙。泣じとすれど曇る聲。

「情ないとは何が‥‥今となつて後れたか。さ‥‥さ‥‥勝‥‥勝‥‥。」

「後れも致さねば恐れも致しませぬ。」

「それになぜ勝負は致さぬ。」

「どうあつても勝負は出來ませぬ。其鎗で。さ‥‥さ。一思に突通して下さりまし。」

一手向ひせんものは死人も同然。左樣なものを手に掛けるは本意でない。戰場へ向ふも此處で戰ふも。命のやりとりに二つはない。さ。早く‥‥。」

「いつかな成りませぬ。相手といふは大恩のある伯父上。互合はさむ其鎗は。亡父が祕藏の笹穗‥‥刃向ひがなりませぬか。」

實に其鎗は守眞の亡父守道が双なき祕藏の業物。遺物とてかれに讓れるなり。見るからに思出さるゝ亡人の事——其人の遺言（我子を頼む。）我子とは‥‥小四郎。小四郎は‥‥此姿。武重は鎗をからり投げ。立つたるまゝ男泣に咽び入る。

今迄は遠くも隔てぬ戰場の。物騷がしく聞えしに。先程より寂寥となりしが。えい——えい——おうといふ勝鯨波。俄に天に轟けば。守眞礑と膝を打ち。無念の一聲。

「南無三。」

言ひも敢ず太刀取直して。咽に突立てんとす。武重あわてゝ其手を捕へ。

「逸まるな‥‥これ。」

太刀を捥放す處へ物の具の響。後の方より遠山が郎黨一騎馳來り。武重の前に跪き。

「味方大勝利。敵は最早二三里も引きました。大慶に存じます。」

守眞のうつむけたる顏を覗込み。

「おゝ‥‥珍しや小四郎樣。」

力なく首をあげる守眞。郎黨を見て。

「新六殿か。」

「はつ‥‥。おう。おう。そのお手疵は‥‥殿樣。」

武重と顏見合せ——顏を背け‥‥涙。

やがて武重に何事か囁かれし新六。頷いて守眞に近き。

「小四郎樣。拙者がお伴を仕ります。」

「一先。館へ引取られよ。」

守眞今は詮方なし——戰場へは向はれず‥‥義理の箭に射すくめられ。自害は得遂げず‥‥恩愛の手に支へられ。死を望む身の‥‥何事ぞ——死を嫌ふ人と異らぬは深手の苦痛。新六の肩をたよりに辛うじて立上り。せはしき呼吸の間より。

「伯父上。さらば‥‥。」

武重は言葉なく。たゞ返答の首肯。郎黨には。

「新六。氣を着けて參れ。」

「はあつ。」

西へ靜に急ぐ二人の後姿。東へ遠く薄らぐ駒の嘶。あとは蹂躙りし雪間の死骸——梅枝の生首。澤邊の枯蘆風に友摺れて。頂く雪をふり落せば。驚き立つ羽音高し二羽の鷺。

怨言の巻

留めても行く春
なげきに散残るよし野が事

遠山が館の奥まりたる別室に身を忍び――病を養ふは浦松小四郎守眞。苦惱の中も敗軍の無念やる方なく。戰場の戀しさ胸に絕えず。明日にもあれ。矢一筋射るほどにもならば――この家の人々承引あるまじ――夜に紛れて竊に脫出し…その時はいかなる强敵に亙り合はすやらむ。先頃の合戰に。森陰より現れし武者――鎧は胴丸…黃櫨匂…筋骨の逞しさ。あはれよき敵。亂軍の中なれば姓名を名乘り合ふ暇なく。彼は大太刀。我は長刀。二三合合はす間に。崩れ懸る雜兵ばらに隔てられ。勝負を決せざりしこそ遺憾なれ。あの武者風――あの太刀風。誰が御内の誰なるか。捨つる命ならば。あれほどの刃に。札を試さんぞ武夫の本懷。此度もかけ向ひたらば。あはれいみじき敵に出逢ひ。守眞が目覺しき合戰の樣を。其口より人々の語草に傳へたき。血氣に逸つてかく思ひたつ時は。矢も楯もたまらず。夫は心ばかり。矢疵は扱置。太股の銃疵に。五體のあがきも思に任せず。焦れて獨泣き。身もだえ――苦痛。足ずり――苦痛…淚…呻聲。

「もし。小四郎樣…小四郎樣。」

枕許に誰そ。優しき聲。守眞閉ぢたる眼を細細と見開き。

「おゝ。芳野殿。」

「御氣分はいかゞで御座ります。母も一方ならず御案じ申して居りまする。」

「難有うぞんじます。して伯母上は…。」

「一日も早くあなたの御本復遊ばす樣にと。此頃は每朝山の不動樣へ日參を致します。もう大方歸るで御座りませう。」

「何。不動へ…日參…。」

青ざめし頰を流るゝ淚。拭はんと夜具の中に手をもがけば。芳野はさし寄り。我袖に柔かく拭ひ。

「今朝はお顏色がお惡いやうで御座りますが。また强くお痛み遊ばしますか。」

「いや。追々苦痛も薄らぎました。伯母上はじめあなたの御介抱。お禮は言葉に盡されませぬ。」

一何の他人がましい。左樣な事を思召さずと。御自分の家にお出遊ばす同樣に。何なりと御用をおつしやつて下さりまし。」

一拙者ゆゑに伯母上は御日參…あゝ勿體ない。冥加に餘る御厚志。」

芳野の顏を見護りて。

「久々御病氣とうけたまはりましたが。もう御全快なされたか。」

一私…はい…その病氣を御存じで御座りましたか。一

裏に怨を含む言葉――麗しけれど薊の花。刺ありとしれば手はのびず。守眞は眼を塞ぎ。

「ゆるして下され。」千言より一句のつらさ。

「お日出たうござりました。」

應ぜぬ答。目出たいとは何が。守眞の今の身の上に。不吉ならぬはなし。敗軍――武士の最も忌む可き。服藥 ―人の最も厭ふ可き。守眞は解せぬか。――答なく。解したるか――顏を背く。

「御祝言遊ばしましたとやら…。」

扨は是…此恨か。毒を塗りし尖矢。うらかくまで守眞の胸。呀とも言はず身を縮まし。あとは何事をいひ出すかと。血は脈管に浪を打つて。胸は安まらず。あとの言葉を氣遣へば。今は無言の氣味わるさ。呀。口を開く…身は縮む。

一小四郎樣。女と申すものは貞操が大事と申

しますが。その樣な物で御座りますか。」

荊棘に咲く櫻——思もかけぬ……奇異な質問。守眞は深く訝りながら。しかし容易に。

「申すも愚。女は貞操を守つて兩夫に見えず。男は二君に……。」

言ひかけて猶豫ふは。我身に恥ぢてか。

「吉野殿の手前も面目ない……忠臣は二君に仕へず……難有い御教訓。なか〳〵生長らへて居らるゝ身では御座らぬ。思へばあの時伯父上のお言葉に背いても……。」

米を種ゑて稗——芳野は呆顏。

「あれ何事で御座ります。私の申した事がお氣に障りましたか。その樣な心で申したのでは御座りませぬ。女は兩夫に見えずと申しますが。殿御は澤山戀人をお持ちなされ……てもよろしいので御座りますか。」

守眞が氣を損じてはと。こは〳〵ながらいふ怨言。氣を損じてはと。斟酌するは（愛）怨言は（惡）水火のやうな（愛）と（惡）を。加減する處女心。何處までも憎からぬもの。守眞が答——應といはゞ。我身を辯護へども……道に背く。否といはゞ。道に合へど我身に裏切る。思案に暮れて口を閉ぢしが。露を厭ふも濡れぬ前。我身を裏切れ……道に合へ。

「たとひ男たりとも左樣な事を致すやからは。男傾城とか申して武士たるものにはあるまじき擧動で御座る。女とて忠義は忘れてならず。男とて貞操なくては叶はぬかと存じます。」

「其ほどよく御存じの上で……。」

他人と緣組は……と詰らんとせしが。（はしたなし）と我を誡め。

「あなたは私が左近之助の娘といふ事を。お忘れ遊ばしましたのか。」

守眞の心の（箭）は芳野が言葉の（脫兎）を逐ふ。此處の藪に認むる形。瞬く間に彼處、林に其影。出沒謀られざれるを。足場も定めず逐廻し。不測の崖を蹈外さんかと。氣は退けて進まぬながら。

「なに。左近之助の娘といふ事……なんで忘れませう。異な事をおつしやる。」

「いゝえ。お忘れ遊ばしたに相違御座りませぬ。」

少し聲をうるまし。膝を詰寄せて言懸ければ。

「何故に其樣な事を……。」

「何故……とはお情ない。左近之助の娘なら。幼稚折から浦松小四郎守眞の許婚の妻では御座りませぬか。親と親とが誓文許した夫では御座りませぬか。まらし……小四郎樣。」

夜其の袖に取附き。身を震はし。

「あなたは左近之助に芳野といふ娘がある事を。お忘れ遊ばしたので御座りませう。餘りといへば……お……お……お情ない。」

守眞は青く——焦けたる手をさし出し。芳野が伏したる肩にかけて。

「なんの其を……八幡忘れは致さぬ。」

肩に懸けられし。守眞の手を握詰め。

「なんとおつしやつても。現在私をお見捨遊ばして。外に言交はしたお方と……。」

言ふに言はれぬ口惜さは。涙と咽び聲が物語る。暫時は其等に物語らして。

「男とて貞操といふ事はあると。只今おつしやつたからは。夫はよく御存じの筈……。」

此處でまた言葉を途切らし……途切らせしは。はしたなく言過さばと男の心をかぬる例の娘氣。なるたけは柔かに。しをらしくと心を配れど。其人の顏見るからに戀はいやましに募り。募るほど恨は一入深し。恨があればこそ言葉は恨。言ふ事は思ふ事——思想の媒。鏡に花を翳して月の影とは見えず。此（自然）に逆ひて。泣くに笑ひ。怒るに喜ぶは。世なれし曲者の業なり。

「それ程御存じの筈……それをいかにお主様の命だとて……またお主様だとて。人では御座りませぬか。鬼か蛇でもある様に。まるで情を御存じない方でも御座りますまい。たつて今の奥様をお勸め遊ばされたとき。小四郎様。あなたはなぜ私といふ……左近之助の娘好野といふ。歴とした妻があると。おつしやつては下さりませぬ。いかに無理なお主だとて。其を推して縁切つて。今の奥様をとお勸めなさるやうな事がありませうか……其様な事が御座りませうか。母が話に聞きますれば。今の奥様はお主の御臺様が御秘藏な……子のやうに御不便がられるお傍の衆とやら。其方があなたをお慕ひ成されて。死ぬほどに……他人さへ一命かけて焦れるものを。幼稚馴染の私が。それに愚が御座りませうか。御臺様もその心根を不便に思召し。お上からのお言葉……おとり持で。御縁組なされたとの事。其時のそのお傍の衆の心持は、まあどんなに……えゝ。思出しても口惜う御座ります。御臺様も御臺様、御自分のお傍の衆が不便なりや。私の心とて。不便は同じ事、其方が死ぬほどなりや。誰も死ぬほどに思ひますに。あなたの口から此々と。譯をお話し遊ばして御辭退遊ばして下すつたら。いかにお主の權柄づくでも。其を無理にとは。よもやおつしやりはなさるまい。其方とかねて深く言交はし。私のやうな不束なものは。厭におなり遊ばしたゆゑ。言譯もおつしやらず。御意を幸ひに御祝言なされたので御座りませう。なんとで御座ります。小四郎様。」

守眞が手を握詰め――抱〆め。戀の一念が言はせる恨。日頃に應ぜぬ舌の働き。なよやかに見ゆる庭の若竹も。可恐しや雪を刎返す力はあるもの。

いかに芳野。知らずや戰國の常として。味方同士に狐疑を抱き。一言の譏に千人の命を失ふ。某の城某の陣。妻を遺し子を棄り。人質に誠を明す頼みなき世の習。春秋戰國の時。魯の兵術者吳起といふは。齊との合戰に大將として。差向けられたき望あれど。その妻齊の産なれば。魯人の思はくをかね。神ぞ二心なき眞心を明さんがため。咎なき最愛の妻をわが手にかけ。功名首尾よかりしが。殘忍薄行の男よと名立てられ。遂には身にふりかゝる禍のあらんかと可恐しく。魏國へ走りし例もあり。無情なる吳起の振舞。人の人たるものゝ學ぶべきにあらざれど。時にとりては此に似たる心懸なくては叶はじ。小四郎守眞八歳にして孤となりしを。父が諸兄山左近之助蔭ながら守り育て。弓彎き太刀打つ業をも傳へ。此までに……。瑣少の事より兩國の合戰さし起り。伯父甥其君を異にすとて。敵味方に立別れたれば。守眞は敵の内に伯父と頼む人あり二心はなきか。油斷なく擧動に心着けよなど。あらぬ陰言も耳に入る其矢先。若葉が戀慕――もだしがたき主命。敵の内に伯父を持つさへ。讒口の種となるを。其娘――敵の片われと二世の契……此を大膽にも主の前にて言放つべきか。祝言は否むべし……我身の浮沈。主の心を損じて君臣の縁を絶れ。編笠やれ鼓――轍の魚と落ぶれても。むかしの一諾を重んずるがために。不道の君に見放されしと名を立てらるゝならば。知行や扶持に心を煩はす守眞ならず。義ゆゑの浪人ならば犬となつて。肩衣に臂張るよりは心易し。それしきを曉らぬ小四郎か。それしきを得爲ぬ守眞か。又芳野が怨言に。許嫁の我に秋を吹かして。萌出づる草の若葉に見替へしとは。そもや亂心しての言葉か……心得ぬ。此守眞は甲冑を伊達に衣る男傾城と見たか。十餘年の長の月日。小四郎が額ばかりに氣を奪はれて。皮一重内の腸は。仇に見過せしか。芳野といへば筒井筒、振分髪の許嫁。其兩親は海山

の恩を受けたる伯父と伯母。思案の外に迷へばとて。この義理を忘れやうか。若葉との祝言に。熱鐵の盃を酌み。新枕の針の床に。鬼と添寐の夢を結びしは。讒言の外に身を措く一時の策略。もし芳野の事をいひ出して。二心の汚名を受けなば。味方の笞に背を破られ。敵に濺ぐべき血汐をむざ〳〵流し。）剰へ馬革に裹むべき屍を藁席に卷かれなむ。此身一時の苦痛は忍ぶに難からざれど。萬代不朽の惡名は。守眞が恥辱祖先の名折。かほどの事を土百姓は甘んずるか。素町人は得忍ぶか。武士は得忍ぶか守眞が甘んずるか。常に似ぬ愚痴の繰言。爾がそれを言ふにはあらじ——戀が其をいはするか——戀には誰が性根を奪はれし。此程守眞が戰場へ向ひしに。二つの目的あり。一に主恩を報ずる事。二に遠山夫婦の恩を受け。芳野を妻と定めながら。若葉に添ひしは餘儀なき主命。半日なりと添ひしからは。主命に背かず若葉の心を無にせず。扨は一命を捨て。遠山夫婦未婚の妻芳野へ言譯の事出陣の砌遺したる書置も。此心を籠めしなり。かくは思ひながら。今更なまじひに言出しても。疑心の鬼は撲ぐに難しと。半句も吐かず。答なきを芳野はなほ恨めしく。

「お主様のお取持で御縁組遊ばした奧様。それをとやかう申すでは御座りませぬが。つい此間まで此處へお出遊ばした時は。女房と思召してか可愛らしい情らしいお言葉をかけて下さりましたに。今度戰場からお歸り遊ばしてと申すものは。恩に被せるなんのと申すでは御座りませぬが。三度の食事からお藥のお世話まで。女房の役目と心嬉しく。人手にかけず及ぶだけは。御介抱申上げても。いつも御機嫌わるく。頼みもせぬ事をといはぬばかりの御樣子。私の不束なは御一緒にお遊び申した幼稚時から御承知のはず。其を今始まりでも致したやうに。急につれな〳〵遊ばすのは。御同慾と申すもので御座ります。幼い時から戀ひ慕つて居るものを……よしやお氣にめさずとも。よそ外の方を奧様にあそばしたゆゑ。定めし口惜くも無念にも思つて居やう。不便なものだと露ほども思召があるならば。切めて氣安めなりと優しいお言葉ぐらゐは下さりさうなものと。この頃のつれないなされ方を見るにつけ。恨めしいやら悲しいやら……く……口惜しいやら……かうかうだと母に申せば。みんなお前の不束からと……取着かうにも頼まうにも……。」

聞けば憎からぬ心——哀の述懷。守眞の骨は碎けるばかり。芳野の胸は裂けるほど。袂を噛しめて疊に伏し。淚は惜まず聲を惜みて泣く。やうやく面をあげ。頰にかゝる鬢の亂れ毛の濡れたるを。掻拂ひ掻拂ひ。

「いつそ死にたう御座ります。」

「死にたい……。」

「はい。樂ない命を長らへて。こんな苦勞を致すより……。」

「惜からぬ身をいつまでも……口惜しい日を送るより……。」

不思互に見合はす顏。見合はす間もなく背ける顏。芳野は淚を拭ひ。守眞は眼を閉づる。戀に死ぬるも命——名に捨つるも命。因緣いかなればかく惜からぬ命の人。二人まで相逢ふ事か。憂世は獨りの憂世ならず。

「はあつ」と守眞の太い溜息に驚かされて。芳野の眼はかれに向ひ。其顏色は光澤なく青ざめ。頰骨の露はなる。二ケ所の疵の赤黒き。面影かはりて其人とも思はれず。此前逢ひし時は。今凄味を添ふる亂髮。其を油艶やかに取上げ。今愁に濁る眼。其も冴々しく愛嬌を含み。今苦痛に慄く紫の唇。其も丹く潤ひ。何一つ戀を媒たぬはなかりしに。哀れ何一つ愁を語らぬはなき今。

見るにつけ其人の盛なりし越方を思出し。行

末いかになるらんなど心細く推計り。目ばたきもせず守眞の顏を目護る內。芳野の心には(憐)の情(懷舊)を呼出し。(懷舊)(戀)を催し。情無くされても其人の傍——脊衰へても其人の顏。ならぬ戀かと思亂れて。重き枕に御ちたる時を思へば。薄々の酒も茶よりはまし。夢になりと面影の通へと。願ひし事さへありしを。嬉しや樂しや今の我。芳野は悅の中の我を忘れて。寂しさうに笑を含む——思案定まらぬ處女氣。(悲)も手のうら返して(喜)。顏は紅に染ぶ間に。風に吹かれて紫に眠る。

芳野の初々しき笑顏に。守眞も思はず笑み返す。今となつて何を恥づるか。芳野自らも知らで。顏少し背けて振袖の袂を抓り。(どうしてあの時にはしたなく言過したか。思へば一倍の羞恥さ。

「芳野殿——芳野殿。」

靜かに守眞が呼聲。抓る振袖を横顏に翳し。其隙から男の顏を詠めて。

「はい。」

「芳野殿。改めてお願が御座りますが聞いて下さるか。」

「あの。私に。さ。叶ひます事ならば。何なりと……。」

「必ずお聞き下さるか。」

親しく問ひ懸けられて。嬌羞さも薄らぎしか。枕近くにじり寄り。

「其樣私のお願も……。」

「其は申すまでも御座りませぬ。」

「小四郎樣。此度……あの。此度で御座りますか。」

思の外の挨拶は疑惑の種。

「武士に二言は御座りませぬ。」

淀なく言放てば。紅らむ顏を。袂に包む嬉しさ。

「お嬉しうぞんじます。」

守眞は二つ三つ咳く苦痛さに。眉を皺め。

「改めてお尋ね申すも異な物で御座るが。あなたは此小四郎を二世の夫と思召す其お心に。詐は御座りませぬか。」

言切らざるに打返して。

「今更其をお尋ね遊ばしますか。」

「相違は御座りませぬな。」

戀に最も恐るゝは(疑念)。芳野は聲を濕ませ。

「あらゆる神樣佛樣を誓にたてゝ。此に詐は御座りませぬ。」

「其ほど思うて下さる拙者に。なぜ匿しだてを成さる。」

語氣を鋭く詰り寄る。思も寄らぬ難問に途方に暮れてはや……涙。

「小四郎樣。あなたは根もない事を拵へて。私の願を叶へぬやうに。遊ばすお心で御座りますな。」

「小四郎は左樣な卑怯ものでは御座らぬ。あなたの深く包んで居らるゝ事を。疾くより見拔いて居ります……一昨日伯父上からお便が御座りましたらうが。」

「えゝ。」驚くを見て。さこそといふ笑を含み。

「そのお便を聞かして下され。」

いかにして守眞は知りけむ。此便といふは左近之助が陣中から凱旋の吉報。敵の大將は不意の夜討に自害を遂げ。名ある侍は同じ道にと骸を晒し。殘せるは降人となり。落人となりけり。此便に妻を始め下人まで。われが命拾ひせる嬉しさ。父が目出たき歸館は。小四郎がやる瀨なき遺恨。笑うてよきやら。泣いてよきやら。芳野の痛苦しさ。「父上がお歸り遊ばす。」と襖越に妹がいふを。義理にも泣顏はならず。人情としても喜ばねばならず。嬉しいが五分なれば。悲しいも五分。父の凱陣言ひ易へて顏

の敗軍。其と聞かれたら嘸や守眞の歎。戰の吉報を母から耳に入るゝと同時。目に浮ぶは守眞が涙の顏。心に浮ぶは守眞が遺憾の情。

「此上もなく目出たいに。何を不吉な・・・涙を出す。」と母に詰られて包むによしなく。「嘸小四郎樣が御無念で・・・。」と一思に言放てば。「道理。」と一言。あとは貰泣にして暫時あり。「味方敗軍と聞かれたら。利かぬ氣の小四郎殿。逸つた事するも知れず。此は父上がお歸まで必ず祕めて・・・。」「あい。」と覺束なく答へたりしが。今守眞にとひつめられ。(語らうか)母の言葉の如く。もしもの事ありては・・・。(祕さうか)我戀は此返事一つに。成りもし破れもす。實を語らば。一時我戀叶うても。小四郎樣の一命。語らずば我戀は此儘朽ちて我命まで・・・我戀――人の命。いづれ輕重の別なく。思案に迷ひしが・・・我から語らずとも終には露れむ。

「母の堅い申しつけゆゑ。深くお包み申して居りましたが。祕しだてする水臭い女と。お疑ひ遊ばすゆゑ申上げます・・・から。どうぞ私のお願を・・・。」

「憖に・・・。」

一乾坤で御座りますか。實は敵方はさん／＼に破れて。大將までが討死。あしたあたりは父上も歸ると。母上の話で御座ります。」

「なに。大將まで。う・・・う・・・討死・・・。」

苦痛を忘れて跳起き。五體を震はし齒を食〆め。

「む・・・無念。口惜しい。」

逆立つ眉。血走る眼――駭く芳野は守眞に取着き。

「小四郎樣・・・もし。小四郎樣。」

縋るを突退け。枕許の鞘卷に手を掛ければ。突退けられし芳野。また其手にしがみつき。

「何事を・・・御生害か。」

「しいっ。」

芳野は忍ばす聲に力を籠め。

「逸つた事をして下さりますな。」

女ながらも一生懸命。男なれども病苦の痩腕。白き手と。青き拳の間に。二寸輝く刃の光。振解き――拔放す力はなく。無念と苦痛をまぜし守眞の呼吸――驚駭と恐怖にせはしき芳野の動氣。それの漸くしづまる時。

「父上も明日は歸りますゆゑ。御相談遊ばしましたら。よい御分別も御座りませう。御短氣はどうぞ・・・小四郎樣。」

痺るゝ手より鞘卷は掠放され。守眞は無言――

―拔首。今此處で。自害覺束なしと思へば。

「いかにも・・・伯父上に御目に懸って・・・。」

掛岡と知らねば、

「はい。どうぞさう遊ばして・・・。」

「芳野樣・・・芳野樣。」書院の方に侍女の聲。

「どうぞ御短氣を遊ばしますな。此馬手差はお預り申して參ります。」

芳野は鞘卷を懷に押入れ。亂鬢を搔き――眼を拭ひ。

「お風を召します・・・御寐なりまし。」

「此儘でよろしう御座る。」

「左樣ならば後ほどまた・・・。」

力なく立上り。しを／＼と襖を開く。

「芳野殿。」

「はい。」

ふり向く顏をつく／＼見て。

「伯母上に・・・よろしく・・・。」

「はい・・・必ず御短氣を・・・。」

首肯く守眞。出行く芳野。知るや其鞘卷は遺物――黑髮を切れとて。

自害の卷

吉野の春若葉は夏
われは世を秋の露の命の事。

行燈の覺束なき火影。隙間偸む風に搖れて。

明……滅……定なき人の命。屛風立てまはしたる床の上に。我後櫛も寛むほど。痩衰へし膝を組み。陣刀に縋つて亂髮の頭を垂れ。我目にも我身を今宵が見納め。一死と覺悟は極めながら。心といふ物ある間は。氣に懸けらるゝ此世の事。主命に是非なく。心外の契。とはいひながら初枕――忘られぬ物。妻――我に焦れし女。若葉――名は。詐にて姿は花と人の譽物。氣立もやさしくしをらし。これ程の女が戀婿とて。身に替へて大事に勞るを。懷にいる窮鳥――鳥は言葉もなく情もなく。獵師は殺生に慣れて心自ら荒し。其さへ之を射らず。筒井筒の芳野を思はぬにあらねど。半月たりとも妻の若葉。憎からう道理はなし。その憎からぬ妻……心にかゝる。またの逢瀬を未來にたのみ。生甲斐もなく取遺されし心の中……しかも女心。出陣の時十分悲しました上。又鎧櫃の書置。命の絶えざりしか。心の狂はざりしか。玉の緒絶つばかりが殺生ならず。絶たずして絶つにます苦。無慙な……無慈悲な……此が女夫つ間にする戯か。離別の折切めては笑顏を見せ。優しき言葉をもかけべきに。未練を殘させじと……せしは不便の妻……可哀の若葉。[illegible]に浮ぶ[illegible]別の有樣。

更衣初の六日……（春の曙）……聞けば暖に長閑のやうなれど。雪を腹に持つ空。灰色に曇りて。日出前のいとゞ薄暗く。芽ざし柳を搖く朝風に。鎧は冷えて霜を浴び。足も踏留まらぬ寒氣。二番鷄に凄じく啼立てられ。式臺へ立出づる若武者。引添ひて妻と覺しき美女。眞紅の忍緒を手繰つて。五枚錣の三方白の兜を。馬手重げに捧げ。弓手は鉢卷の形を繕ひ。或は。赤銅魚子の覆輪かけて。螺鈿の櫻を散らせる。黒鞘の埃を袖にて一拭ひ。夫に死花飾らせんとか……けなげにも。哀を知るや其處に跪る郎黨の。さも惡氣に半頬當てたるが。鋭き上眼づかひに主人を見遣り。草鞋を直しながら。白く――太き息を吐く濁聲。

「大分白むで參りました。」

若武者は首肯くばかり。やがて草鞋の紐を結び。立上つて二度三度足踏して。

「若葉……兜。」

聲の下。郎黨心得て。物をもいはず若葉の手より。もぎ放すやうに兜を請取る。凋れて式臺に坐したる若葉。じり／＼と居去つて夫の草摺に縋れば。振向ける顏――見上げる顏。兩人ながら身を動かさず聲を出さず――たゞ見詰合ひしが。四つの目ばたき。自ら隙まく集くなりて。堪へずや一雫……若葉か。次で一滴……守眞か。跡は孰れを誰のと分たず。傍に見る郎黨は。手持無沙汰の氣の毒顏。手に持つ兜の星を數へて。素知らぬ風にもてなす。若葉は女氣の脆く。一聲わっと泣立つるに。守眞もたまりかね。草摺にかけし妻の手を執り。引寄する時郎黨と顏見合せ……其手を酷らしく振拂つて。一足踏出す。

「暫し。」

と言ひながら鐙に取附くを。またふり切り。

「[illegible]で……參れ六郎太。」

侍す若葉の耳に響く跫音。すはや行く。

「御無事で……。」

いふも嗚咽聲。矢庭に立上り――追ひかけ門口まで走り出て見れば。其處に。あれ二人の姿……急足に。まだ袖や草摺の音も聞ゆる間近。

「一聲か懸けたい……六郎太の手前……えゝ。名殘が惜しい。」

門の柱にしがみ附き。身悶え――足踏み――袂を食裂き。

「えゝ……えゝ……えゝ。」

胸は滿える。五臟はちぎれる。身を伸ばして見遣せば。二人の影は二尺ばかり。右か……左は[illegible]毛白し。白きが夫。えゝ重なり合ふ。叱……

…六郎太脇へ寄れ。
「あの閃きは長刀……長刀は守眞様。」
姿はいつか朧……霞みて。霞の中に薄黒きを心當に。其人と眺め入りしが。生憎眼を曇らす乾ぬ涙。拭ひてまた見れば。その薄黒き粒も跡なく消ゆる。消えてほしき霞は消えもせで。
念力に碎くるほど。柱を抱きしめたりし腕の力は。次第々々に弱り。今はたゞ始め犇と取附きし形ばかり。五體はたゝかれし如く勞れ果て。椛色に腫上る背重げに。何を見む目的もなく。見詰める瞳は少しも動かず。茫然と立つ心の中は無念無想。悲しいも無く。戀しいもなく。夫もなく吾身もなし。慈悲に殺すといふこと。此世にありとせば。此時此若葉の命を絶つぞ是。守眞が向ひし方より。風が運ぶ陣鐘――雲に響く法螺の音。心づきしか目ばたきする若葉。眼を閉ぢ手を合せ。
「南無正八幡大菩薩。」

＊　＊　＊　＊　✿

守眞「思ふまい……女々しい。」
此一言が唇を出るや否。太刀も鞘から。火影近くさし寄せ。鍔許より切先まで。切先より鍔許まで。見上げ――見下す銚子から五六寸に。一際の血の曇。守眞にっと笑み。
「是……肩先を……。」
敵を斬らむず太刀――我身を護るべき太刀。今は……我腹を裂く……此が我本意か。そもまた太刀の本意か。主を殺す不忠の太刀……とは言ひながら今死なずば。君に對して臣たるの道に背き。伯父伯母には人たるの義理立たず。父母の在す冥土の手引き。また我守眞を臣たらしめ。人たらしめ。且は嬉しき對面さするは此太刀。身は護らずとも。義を守り。忠を守る――太刀の本意――我本意。同くは捨つる命ならば。憎き敵一人たりとも。手に懸け死すべかりしを。鈍や伯父に説伏せられ。久しく渇せし爾に。思ふまゝ血を啜らせでやみしは。爾が長年奉公の志を酬いざるに似て。守眞が畢生の落度。もし精あらばよしなき主取りて。一代功名も成さず。果は腐れし腸に汚さるゝを。遺憾とも恥辱とも思ふべし。我なき後誰が手に渡るとも。守眞が佩刀たりしを。ゆめ曉られな。曉られなば未練者の指料よと囃されて。誰帶ぶる人なく。光を糞土に埋め。われからの錆に朽果つる事。よき誡のこの守眞。
「父上の遺物と思へば。太刀までが懐しい……一刻も早く懐しい父上母上に對面しやうか。」
取直す太刀を袖に巻き。切先少し露はして。襟押寛げ。下腹を左手に撫廻し。
一書置なりと認めて。伯父上伯母上に此まで受けた。御恩のお禮を述べたいものだが。矢疵の爲にどうも手が……あすはいよ／＼伯父上も目出たくお歸り遊ばすことか。伯父上が御無事でお歸りなさるは何より重疊……それにつけて味方の總敗軍。殿までが無慙な御最期……な……何が目出……たいのやら……あす勇むでお歸りなさる矢先へ。小四郎の切腹さぞ。仰天遊ばす事であらう。日頃あれほどにおぼしめして下さるお心では。大抵のお歎きではあるまい。どれほどお恨み遊ばすか。あゝ……勿體ない。伯母上はまた女だけに。御病氣にでも御成遊ばしたら。日頃痺弱いお體……今日聞けばわれ故の日參……あ……あ……有難涙がこぼ……れる。
かねての堅い約束を無にして。若葉との緣組。定めてお腹も立たうに。この戰でなくば宿許へ安否を知らしてやりたい。誰の思も同じ事。若葉が一人でどのやうにか苦勞して居らう……此樣な言葉が僞にも出るものか……また芳野殿の深切。今日の恨は一々道理。其心を知らぬではなけれど。どうで一日か二日の命。なまなか思の種を殘しては。後の爲になるまいかと。お

身の偽を思つてわざとつれなく致したので御座る。若葉に心が引かされてと疑はれて。薄情者とさぞ恨れて御座らうが。幼少からの馴染の守眞。その様な男でないは。よく御承知で御座らう。此も因縁とあきらめて。思切つて下され。再び此世へ生れ替つて参つた時には。今最期の一念で。きつとあなたの顔を見覚えて。必ず女夫になりまする。あなたもどうぞ忘れずに居て……此世では。な……なき縁……心にもない不實を致した段はどうぞ許して下され。焦れて重病になられたとの事。小四郎が生きて居る中……逢瀬の頼がある中でさへそれほど……今夜自害して果てたらば……あゝ思遣られる。お両方が命に替へて御贔屓のあなたゆゑ。もしもの事があつては。お両方の御苦労はどれほどか。あまり歎いて疾はぬやうにして下され。それが何より小四郎への供養……芳野殿頼みます。」

更け行く鐘に驚かされ。忙はしく涙搔拂ひ。

「南無阿彌陀佛。」

聲の下。あゝつといふ叫喚。突立てしか……湧出す血汐。左の小脇から五六寸。病苦に震ふ手は進まず。唇を噛裂くまで力を籠めて。じり／＼と一文字に……仕て遣つたり右の傍腹まで……敢なく絶ゆる命。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「そんなら夫守眞の……。」

「小四郎様のお内方か。」

こは／＼とばかり呆れ果て。互に顔。板戸洩る日影白く。紙帳に騒ぐ風寒し。ほの／＼と明くる一夜。

（廿二年一月）

巴波川

上の巻

わが友青木某、此一事は神にも親にも祕めど、仔細ありて我一人に語りき。一昨年の暑中休暇、筑波へ登山して麓を早發に、栃木へ廻れば其日は暮れけり。旅店を求めけるに嚢中乏しければ、大構の店を餘所にして某町の小路に、煤け行燈の見る影もなき安泊に飛入れば、四十恰好の女房背戸の風呂に、柴を烟らせたりしが客と見て出で來り、挨拶たら〳〵洗足の水を汲り、疲れて氣力なく上り框に腰を据ゑたる、青木が草鞋を解かむとすれば、颯と凉しく吹來る風に、ふす〳〵と音して柴の焚上るに驚き、蔦よ〳〵と喚起てながら小股走りに行きけり。

梯子下の黯淡所にあい〳〵と聲嬌饒しく、やがて立出でゝ、お入來なされましと小腰を屈め、お濯ぎまをしましよと草履を突懸けて青木が前へ廻り、引上げし褄を挾みて盥越に屈み、油掃除を致してをりましたればと兩手を嗅ぎて、何ともござりませぬ、おとりまをしましよと草鞋を解捨て、砂まぶれの靴下を脱り、汗ばめる脚絆を解き、氷のやうなる冷水に剝きたる足を趺高に浸して、指の股まで洗うてもらふ快哉。なるほど地方の人が東京の旅籠屋を不深切といふも道理こそ、木賃類似の安泊だにかうした丁寧なる待遇、茶代なしでは勿躰なし。女人は帶に挾める手拭にてやは〳〵と拭ひ、お上りなされまし、御案内と駈上り、手早く行燈に火を移して引提げ、蹈めば櫓を盪すごとく鳴る梯子を昇れば、二階は二間なり。表座敷にても裏にてもお好み次第。裏は田圃の樣子風通しよかるべしと、肩に懸けたる革包を抛出してどたりと倒るれば、柱も動ぐに駭けば女人笑うて、家が古うござりますゆゑと行燈を適所に直し、しとやかに跪きて燈心を搔立つる時、始めて其顏を見れば！　やゝ、此處は魔窟か、此奴變怪か、凄いほどの美色。火影を眩がりて纖むる眼波に、えも言はれぬ情思の籠れるに、女色には鈍き青木もしみ〳〵感じて、心魂脫けたるごとく惘と其の顏に瞳を凝せば、女人は振向き様に合はす顏を微紅めて俯きながら、只今お煙草のお火をと、小聲に言捨てゝ逐はるゝやうに下りけり。

青木は手を組みて顰むる眉の下よりきつと壁を睨み、此女の正體何と判斷に苦しむは、安泊に過ぎたる女人、過ぎも過ぎたる美色、栃木町にも：：縣にも過ぎたる美色、いや〳〵下野、下野はおろかな事、都にとてもあるまじき花艷、下女か女子か、淫賣か、其にしても此にしても過ぎたる容色。我心には措かじと誓ひし迷信發りて、一笑に付したる聊齋志異剪燈新話などの怪談を憶ひ合はせ、理外の理のなきにも限らざる妖怪などにてあらむも知れずと、虛心に復れば我ながら愚痴なる分別の出づるも、意外の顯象に惑へる心の曇なり。迷信なりと悟らむか、悟ればかゝる家に眞人間としてかゝる美人のあらむこそ、妖怪にてあらむよりいよ〳〵奇異なれ。此地にはそよとも淫風吹かずとも聞かざりしに、さりとて良家の娘子ならば知らず、見れば夕暮の町にむらがる淫行男子が翫弄までおくべきか。其より優るにしても多錢人面の河獺が餌物にならざる理なし。さるを其等に發されたる臭味もなく、言語に此國の訛はあれど、噪がしからねばさし

ては鄙びず。擧動は嫋柳のわづかに風を知る風情の幽婉。想ふに壬生藩士の落魄などにて、武家氣質の義ずくめに當世には立交らふ方法なくて、かくはなり果の安旅籠を渡世とすれど、むかしのまゝに崩さぬ家庭の嚴格なれば、廢垣の野花をも鳥啄み落す事なく、枝頭の春色ひとり盛なるにや？　確然にそれと小膝を拍つて、變化にても淫賣にてもなきにまづ胸穩まれば、邊然ゆかしく慕はしく覺えて、この家外に下女のありとも見えず、晩飯の給仕はあの娘子に極まれば、其時風采容顏思ふまゝに觀察くべしと、疲勞も空腹も忘れてその事のみ思ひ續け、そはそはとする氣体に樣子を覗かむと、徐と立つて一足の二つ目に、何やら母に言うて娘子の昇り來るにあわてゝ座に還り、何食はぬ顏して用なき革包を披くれば、そのまゝ頭壓るゝごとく重りて上らず、觀察…と思へどなほ重りて上らず。娘子は木根の煙草盆を青木の前に直して、只今すぐに御飯をと立つて行くと思へば、輕く頭上りて意氣地なくも後姿を見れば、瘦肩、細腰、頭の桐根の花蕈なる事、今度は決然眞向になつて十分見むと、一服敲うて心魂を落着け、二服吸うて勇氣を養ひ、今度は必然見むとの誓の三服目の半頃にまた來り、上りロに手をつかへてお風呂をめしますか、直に御飯にいたしませうかと顏を見合へば、頭また重りて俯きながら、風呂をと手拭を握むで立上れば、此方へと先立つ娘子に跟いて下りながら、無念なまた見損じたるかと其のみ思詰めて、心入らざる足下に一段どたりと踏外せば、娘子はあれと驚きざま三段すべり墮つるに、さらぬだに鳴る梯子は百雷の響に奥より女房飛出で、お怪我はござりませぬか、お蔦氣をおつけ申さぬか、あいあい。どうも遊ばしませぬかと劬られて、青木顏より火の出るほど面目なげに、どうもない〳〵と口早に答へて案内のまゝに行けば、家内が居間の閾外に古蓙を敷き、此へお脱ぎなされてあれへと背戸を女房指せば、お蔦は客に草履を揃へておのれは先に下立ち、此方へと湯加減見に走り行きけり。青木背戸に出づれば、南瓜畠の側なる野晒の水風呂に溢るゝばかり湯沸き、お蔦は襷懸になりて脛高に裾を褰げ、いそがしく風呂側の小桶に水を汲込む姿、湯の中より眺むれば、頭巾と薄くらがりと女の衣の殊に美しく見ゆるものとて、玉のやうなる色白闇を破つてきは〳〵しく、眉目の鮮明には見とれぬあたりに無量の美あるごとく覺えぬ。

ざっとお流しまをしましよといはれて、念のいり過ぎたる待遇と薄氣味惡けれど可厭にはあらず。濟まねどざっとにて好ければと手拭を渡し、風呂を出て床がはりの敷板に背を向けて屈めば、お蔦は丁寧に手拭を疊み、やは〳〵と垢を搔く手の觸るゝ處は、玉を磨るか、羽二重を當つるか、油を塗るか、ぬらめくばかり滑かなる心快は、肉じた〳〵と蕩けむとする思なり。青木はつひに覺えぬ嬉しさ三分は、七分の羞かしさに勝れて身を縮め呼吸を凝め、好まぬではなけれど長くかうしてあるべき心持なく、折々首を擧げては禮を述べてやめさせむとすれど、はい〳〵とばかり應へて容易に放れず。やがて吹さらしの風に湯の覺醒とれて、冷亙る肌さはりに驚き、一杯湯を浴せてごゆるりと。夕飯の膳に坐ればお蔦給仕に出たり。蕭破や！　觀察の時到れりと青木は十二分の勇を鼓し、かくぞと行燈の火口を其方にさし向け、我はその陰になるやうに用意したれば、娘子の髮際まで數ふべく鮮明に見らるゝを、晴がましがりて、顏をそむけ身をひねりて、所謂のため塗の飯櫃より、粃糠まじりの冷飯を盛る杓子さばきのにほやかさ、なるほど小笠原流とは彼處なるべし。我顏の暗所にあるを機會、茶碗を口にしてさりげなく眼を配れば、瓜核の薄肉頤に細れ

どふくやかに帶を結み、舊時は美術の一つなりし垂髮しをらしく、瞼に少しく暈ありて睫毛長く、唇は纖々と薄げにして常に微笑あり。艶かなる唇子の運動は捷くして左に動くも右に動くも、それ〴〵の情を含みて無味なる眼波なし。髮際はさながら一筋づゝ描けると思はれて、細く、黑く、長く、濃き髮を手東の銀杏返に結び、襟元に染みたる黄楊の橫櫛と短き銀釵の簪を挿したり。衣裳は見るにさへ羞かしければ、語るは後の事この娘子の爲に氣の毒なれど、淺黄の中形の浴衣は、肩、腰、臀のあたり白みて、裄丈の足らざるは猶の事つらかるべし。帶は昆布を絞りて巻けるやうなるを、結びは無理に引き延べたるを見れば、紅入友染の葡萄色のめれんすにて、腐りたる微塵は衾の前とて体揚げ、片手に給仕の鐵銚盆を引掛け、片手は裾に擔きて俯き、火影を避けむと橫顏になりて坐れるに、容色よりもなほ比類あるまじく羨かるゝは膚色の眞白なり。雪も白けれど雪の純白にもあらず、玉には寒けき光澤あれどさるにも似ず、眞白の裏に暖氣を籠み、清めるにあらず濁るにあらず、透明なるがごとく曇るがごとし。肌理濃に膩氣を帶びて、えも不可言一種の美色あり。青木恍惚としてわけもなく胸寒がり、咽喉を通らぬ飯を詰めこむやうに二膳までは入れたれど、口の中に觸ばかりして味なければ箸を捨てけり。此時の感情何とも難道けれど、學士試驗の席上に受驗者の點呼濟みたる時の胸騷にやや似たり。女子に可恐しきもの、特別美しき女子と試驗ほど世に可恐しきものなしといへる、朋友の言葉を今宵といふ今宵はひたと思ひ中りて、無經驗なる男は何しても物の用には立つまじきものと悟りぬ。お蔦は膳を退きてまた來り、床を延ぶべきやと問ふに、餘り蒸暑ければ少時涼みて後と、櫺子窓に腰を懸けながら下り行くお蔦を呼び、團扇をと望めば、心注かざりしを慚ぢたる面色にて、表座敷の隅より古團扇を持來り、躊躇ひて手渡し、御用なる時にはお呼びくださりましと梯子を下りぬ。筑波山中にて七絶の結句を得たれば、漸々も之を纏めむと苦吟せしに、疲るゝまゝに忘れたりしをふと憶出して、かゝる時にこそと轉句を案ずれど、風景眼前に浮ばず、工夫字中に入らずして、女子の事のみ頻りに想はれぬ。

夕飯の汁濃かりしゆゑにや。劇しく渇きて咽喉ひたと密着がごとく堪へがたければ、お蔦を呼び氷水を取寄せて三杯一息に飲めば、胸やゝ冷えて風腹中を通ふ思も少時、また〳〵煎熬くばかりに渇けばまた二杯續みけるに、お身の毒なればとお蔦は苦勞にして諫むるに、おのれも藥にはあるまじと思ひ留りけれど、いよ〳〵渇氣堪へがたければ、無理に吩咐けてその二杯も空にしけり。

時移るほどに天曇りて雲低く、戶外にも襟鬱氣の晴らぬまでに悶死して夜熱のすごとく、何もせで臥せる者に汗流るれば、青木は赤裸になりて大字に仆れ、蚊を逐ひながらうと〳〵と睡りしが、腹痛におのづと目覺めて起上れど、浴衣をひとりして得被ねばかり下腹痛み、起きては仆れ、たふれては轉け、のたうちまはりて呻く聲に、何事？とお蔦駈上りて此體に仰天し、けたゝましく母親を喚立て、倶々に介抱すれど、腹痛いさゝかも息まらず、なほ苛立て突立て腸を噛まるゝ苦惱に、顏色變じて身を悶ゆる樣子はもしや虎列剌かと、母親は怖れてどきまぎ狼狽ふるに、お蔦はかひ〴〵しく看護すれど、一粒の丸藥だに持合さず。さればとて藥屋へ此時節からあわたゞしく腹痛の藥買ひに行かむは、疑念の種を蒔く恐怖もあり。なほさら醫師を呼びて類似虎列剌などゝいはれなば、我家の迷惑はともあれ、此旅人を殺すが情なし。さりとて藥と醫者との外に急病を

濟ふべき方法なきに分別盡き、心狭き女人は泣くにも泣かれぬ絶體絶命の淵に臨み、母親は斷念に覺悟を呼びに行かむといふをお蔦は引留め、呼吸も絶々なる青木の耳の根に薬のお持合はなきかと叫べば、其包に〳〵と二聲、心得て懐中に紙包を探かせて底を覆せば、天助か實丹の一包、母子見るよりはやく拾ひさせる心地して之を飲ませ、氷のやうなる濡布を敷き、二人眠りにて青木を床上に臥かせ、蚊帳は不用なりと釣らねば、お蔦傍添ひて扇を搏び、腹を摩し、藥を飲め、十二時過ぐまで母も看病したりしが、苦痛も少しは薄らぎたる様子に、お蔦は母親を寝ませ、一人遺りて懇ろに介抱したりしが、一時頃より下痢を催し、便所へ通ふこと殆ど數ふるを得たざるばかりなれど、この娘々お蔦は病者が起居往還の杖となり、汚穢も厭はず深切に世話して徹夜に疲れ、その枕頭にてとろ〳〵と眠る間もなく母親にぞ呼覺されける。

其朝になれば痛苦も大分に薄らぎ、折々下痢はあれど人手をからず行歩に自在を得たれど、昨夜の痛苦に[illegible]未だ直らず、筋違ひ[illegible]るごと〳〵覺え、頭を傾け枕に倚れて呼吸迫く、[illegible]より吹入る[illegible]の朝風を面にうけて心快くうつゝの裏、お蔦の昇り來るに目を開けば、枕近くすり寄りて御氣分はと青木の顔を見るに、色青黒く眼凹落ちて光なく、顔骨の際立てるに驚き、お腹痛はと重ねかけて尋ねぬ。青木は徐に、頭重ければ今暫く心に輕く首肯き、お蔭様にて腹痛も大分薄くなりました。昨夜のお世話は譬へやうもなく、骨肉も及ばぬ[illegible]きお實情の數々は五臓に徹へて……徹ふるばかりにて報恩もならぬ漂泊の旅人、一樹の蔭とにいふものゝ、往けば還らぬ無縁のそれがしにと思はれての御深切か、御心のやさしくも嬉しきに絆され、昨夜一夜が一年のごとく、今朝は此家に皆馴染みて更に旅中の想をなさず、此方さまも他人とは思ひ離し。御身の病にて無慙や他國の土になる事かと、身も世もあられず心細かりしが、唯今あたりにて命拾ひをしたり。やゝ快くはあれど今日の發足は覺束なければ、御迷惑は察すれど今宵の一泊をゆるしたまへ。明朝ともならば強ひても出立べしといへば、その御遠慮は御無用になされまして、かく汚穢き家だに御辛抱なるものならば、ゆる〳〵御養生遊ばしまし、届かぬながら御看病まをしましよ。お言葉は難有けれど階下には用事もあらむに、頼む事あらば手を鳴らさむほどに、其忙中を附添はるゝに及ばずと遠慮を言へば、晝間は客なければ閑暇なれば、看病してあげよと母の吩咐もあれば、隔心なく御用をおほせられましてと、立たぬは青木も望む所なれど、嬉しさと羞かしさに氣味惡く身を縮めて、壁を向けば顔も見たく、顔を見れば面逢く、夜衣を被れば切なく、身の措置に苦しむ混雜紛れに、一つ二つの雜談が發端にて、其日の中に隔心はなくなりぬ。骨肉の様だにもかうまではと思はるゝ注意の周到なる看護に、青木の心解けて蕩けて他人行儀失せて、表座敷に客あり階下に用事ありても、枕頭を立たす事を憚らず、さもなきに事々しく手を打拍きて呼寄せ、用はなけれど來てくれといへば、今の間に用を濟ませてゆるりと來るほどに少時の辛抱をしたまへとて、行く〳〵行かぬに手を鳴らせば、またしても用事はないにと知りながら、[illegible]呼立るゝを結句悦び、我まゝをいひたまふなと戯ざれざ叱責に來るがうれしく、叱責るゝがうれしく、青木の心には是來識らざりし一種異様の感情萌えけるが、いつしか胸一杯に蔓延りて、常に胸部に擾かれぬ痒氣あるがごとし。

此夜は表座敷に客ありてやうやく十一時頃に來り、青木が枕頭にてわけもない事をかた

り合ひ、何が嬉しくてか相互の面に和氣溢れて、ひそ〳〵話の種のよくも盡きず、二時過ぐるまで語り續けぬ。明る朝は青木の顏色復り、元氣常のごとく食慾復して、無病の人となりける樣子なれど、なほ床を離れず、惣身だるくして十分本復とも思はれざれば、今一日の厄介を賴むと見舞に來し母親に告げて、其日もお蔦を片時離さゞりき。我人に聞かせほし、南軒鐵座の夕、思ひかけず月影の明かなるに、心躍りて酒を酌めば、月盃中にふはと落ちたらむ時の思はいかならむ？　其盃は放しがたかるべし。戀には無雅なる青木も此盃は放し難く、苦惱なき腹痛の長く癒えずして、此家に逗留の便宜ともなれかしと祈るにかひなく、この一時の暑氣中は洗ふごとく癒えけるに、此地は人の長く逗留すべき名所にもあらず、此家もまたさるべき旅宿ならぬに、口實もなく滯在せむは母子の所思も羞かしく、よし其は忍ぶにしても此女子に契らむとまでの心はなきを、仇なる戀に繫がれ何時まで在らむも同じ事なるべしと、攪眠てふと其氣になり、手荷物の用意する所へお蔦來合はせ、何處ぞへ行かるゝかと不審を立つるに、東京へ還ると手もなく言放つ顏をじっと視て、もはやお還りかとばかり、事の意外に呆れたるよりはむしろ恨を籠めたる短句なり。此裏に悲愴の調子ありて痛く青木の心に染み、何ともいはで顏を見かへせば、俯きて萎るゝ風情に愛憐動き、さまでに思ふものをと懦軟出でゝ、慰めむ言葉を考ふる間にお蔦は立ちけり。

やがて朝食の膳は母親が運び、女子は飯櫃を持來り、今朝ほどは御全快の由と、母親慶賀をいひながら樣子を見て、今朝は御出立かと問へば、青木の顏に凝せるお蔦が隱裏なる無言の語に、青木の決心鈍りて、大平山へ行かむと思ひしが、今日も此樣子にては暑氣劇しからむほどに、病餘の身に恙やあらむと思ひ止りたりと聞く、お蔦の眼にいはれぬ喜色浮びたるを、己も識りてや羞かしげに俯きぬ。

母親はさりとも識らず、なるほど御病氣餘なれば炎天に出歩行は惡かるべし。快方とて心を恕されなば大事に及ぶべければ、ゆるりと御養生なされましとて立ち行く後に、お蔦はいそいそと膝を進ませ、ようぞ思止つて下されました。お發足と聞きし時はどうせうかと思ひましたと、行懸りの旅人をさまでに懷しがりて、末は何とせむ心なるか。青木は此言葉に女子が所爲を照合はせて、我に心なきにもあらざる事と判ずれば、何といふ目的はなけれど心牽れて離れがたく、飲みもせぬ藥を買はせて母親の手前を繕ひ、例の通り看病をとて側に引附け、二人會りて何の仕草もなきに、この長の日を短く暮しぬ。

下の卷

其日暮、二人欞子に腰掛けて凉みけるが、格子の外をゆら〳〵と螢の過行くをお蔦團扇に招き寄せ、手攫にしてこれと青木に差出す手首をじっと握りて、娘子に摺寄りざまに邪魔なる燈を吹滅し、星影の薄くらがりに顏を寄せてお蔦を覗けば、否にはあらぬか聲をも立てず、耳の根火のごとく頰に觸れければ、此處ぞと青木は握りし手首をいよ〳〵緊め、發言むとすれど言葉に迷ひ、胸の跳るまゝに見ともなきほど呼吸喘めば、娘子は猶の事顚へてせむすべを知らざりけり。嫌ふものならば其手を拂ふべきに、聲をも立つべきに、振拂らて逃げもすべきに、手を握らせて動かさず、身は固くしながら退らせもせず。嬉しや恥辱は搔せぬ心か、虛いたる手をお蔦の肩へ懸けて引寄せむとすれど、身を縮めたるが上に我にも恐怖あれば、力入らずして寄らざるに此方から寄添ひ、お蔦漸と顫聲を忍ばせば、娘子は唯とばかり有るか無きかに

應ふれど、青木は續く言葉を失ひ、唯そのまゝに少時無言にて化石のごとくなりしが、梯子に人足の聞ゆるにはっと離れ、お蔦は脱兎のごとく梯子を下りぬ。わが無禮に驚き、もはや昇りては來まじと階下を覗けば、風の爲に火を取られたりと、擦切木を持て來る樣子に猶希望ありと心を落着け、煙草を移火けむとする時お蔦昇り來るに、面はゆければ見せじ見じと、煙草盆に額をさし寄する間に、行燈を點すお蔦の額を窺へば、なほ上氣して眼の上下薄紅に耳根の眞赤きを見るからに、花の蕾を剝きたる心地して氣の毒に覺えけれど、酒狂か、過失か、惡戯かなんぞのやうに謝罪もしにくゝ、いひ懸けむ言葉なくて手持無沙汰に控ふれば、娘子は猶羞ぢて居愁く、よそ〳〵しく下りむとするを小聲に呼留むれば、はいと此方を向きて手を支ふるを此處へ〳〵といへば、つひぞなき顏を背けてうぢ〳〵するをもどかしく、立つて手を引きまた梯子まで伴れ來りしが、怖くてまたと手だしはせざりき。

青木が心中に芽ぐみたる戀は、一時ごとに募るを覺えむともせざればいよ〳〵募りて、眼はやゝ空に光り鼻息はやゝ戀に鳴り、機會もあらば[illegible]らむと爪を磨げど、お蔦は温柔き裏に固面四角の氣ありて、つけ入るべき妖淫を見せねば、十分我には落つべしと見ながらも、はづかしき事を仕懸けむ曉、萬一其人に心無からむには合はすべき面なしと、蛋行に物馴れぬ男の良心に負け良心に勝ち、その爭鬪に胸中顚倒して、斷行？　斷念？　兩岐の分別に迷ひぬ。

されど乗りかゝりたる船の如き想して、このまゝ捨て還る心なければ、病餘の不快に託して逗留六日になりぬ。さりとて戀の仕草は少しも捗らで、螢をとらへし夕にさしては異ることなし。唯それとはなしの青木が日々の所爲の謎を、お蔦も解きて憎からぬ思の募れるにや、とやかく母親を瞞着めて青木が側を離れじとばかり計らふ心情の美味を忘られず、此間に旅費は底をはたくばかりとなれど、なか〳〵還るのかの字も想はず、いよ〳〵窮りて東京なる親友に手紙を寄せ、小額の爲換を强願りて辛くも旅費を調へたれば、もはや泣いても笑うても明日は離別とお蔦に語れば、留れともいはねば行けともいはで唯歎くを見るに、ふりすてて還る心はなけれど留まるべくもあらず。長々うけたる世話の禮やら、身を大切に一人の母に孝行せよといふ事やら、縁もあらば再會はむといふ事やらこま〳〵と語れば、お蔦は泣いて更に物を言はず、再會期しがたき別離かと思へば青木も興醒がり、晩餐も食はで思案にくるることそ不便なれ。

我思ひつひに斷れず。我戀つひに協はざる事か。それも切なし此も切なきは、愛情の鎖に綴着けられて微搖もならざるを、無體に引放されむ離別の惜さ、心細さ、悲さいふ方なし。お蔦は失神して言も發はねば身も動かさず、壁に向うて折々吐息を洩すのみ。

これまでにして本意を果さゞるも、畢竟は我氣の脆弱からなり。馬には乗つて見よ、此まゝ事もなく別れての後悔は、一生胸に曇の病ともなるべし。とにもかくにも今宵は必ず首尾を遂げむものと心を定め、夜深に隣室の容寐息をはかり、便所へゆく風してお蔦が臥床を蚊帳越に覗へば、跫音に額を此方に向くるは、これも寐ぬかといとしく、小手招して二階へ還れば續いて昇り來るに、顏想思に窶れて色蒼く、しよんぼりとして影も薄く見えたり。青木滿心の勇を鼓して矢庭に燈火を吹滅し、有無をいはせず契りぬ。

けたゝましき喚聲に、驚きて青木攪眼せば、枕頭に母親半狂亂になりて、蔦が家出と泣聲

に喚かれ、たゞ夢かと刎起きるしだらなき懐中より、ばらりと落つる一通。南無三寶。書置の事！

一筆かきのこし申候。わたくしは今夜うづま川へ身をなげ相果て申候。なくなり候後後までも、きっと愛想づかしの種と思ひ候へば、今までは深くつゝみをり候へども、わたくし事は淺ましき病の片輪ものゆゑ、一度男に肌ふれ候へば、一時に病發りて、見るさへいまはしき體に相成候因果のうまれとて、かたく男を愼みをり候ひしが、いかなる御縁にや御情のほど身にしみ／＼と嬉しくおもひまゐらせ候へども、疎ましき姿に相成候はゞ、生がひのなき恥さらし、とても思ひあきらめむといろ／＼に心を叱り候ても、お顔を見るたびにゆかしさまさり、思ひきる氣に相成不申候へば、命を捨てゝ御情にあづかり申候。日頃のつゝしみを破り候上からは、今にも顔はくづれ、眉毛はぬけて、二目とは見られぬ姿に相成り、世間に疎まれ候事が今より思ひやられてつらく候まゝ、いっそ身を投げ候覺悟いたし候。思染めし御前様に、願かなひ候わたくしの命は、さら／＼惜くは候はねど、頼みなき母一人を遺しおき候へば、あすからはたよりを失ひ、苦勞をいたし候事眼に見るやうにて、それのみが今はの際の氣懸りにござ候。わたくしごとき因果ものと枕を御かはしなされ候は御身のけがれと、つゝみかくせしわたくしをさぞかし御恨みなされ候事と申譯なく候へども、唯一夜の御情ゆゑに命も捨て候に免じ、どうぞ御ゆるし被下度候。先日いたゞき候御名札を肌身につけ相果て候はむかとぞんじ候へども、御名前にもかゝはることゝぞんじ、此末にまきこめおき候へば、まん一わたくしの死がい見あたり候て、葬式の折は棺の内へ御いれ被下度、申上げたき事は胸一ぱいに候へども、とりいそぎ候ゆゑ、惜き筆とめまゐらせ候。一たんのいたづらから先立ちまする不孝の罪は、なんとも母様へ申譯なく、あまりとや面目なさに、手紙をさしあげ候ことわざとゑんりよいたし候。御前様よりよしなに御わび被下度。わたくしの身なげいたし候は、まったくわたくしの迷からに候へば、かならずかならず青木様を御うらみ被下まじく母様へ頼み上げ申候。おしつけがましく候へども、わたくしなき後は便なき母様を他人とおぼしめさず、行末ながく御つきあひ被下度ねがひ上げまゐらせ候。

あら／＼かしこ。

十五日　　つたより

青木さま

(廿三年十二月)

戀の蛻

一

男は十八、女は十六、揃うて初心同志は、戀ふ事の十分には言はるゝものならば、と言語の可憐を憾みて、互に手出しなどは思ひも懸けず、水も洩さぬ吉野川を隔てゝ情の目授こそ、戀も浅瀬に立てる一人は、横濱太田町に野田屋といへる貿易問屋の息子千之助、對手は軒を並ぶる同業綿屋の娘に初といふ美形、隣同志と七八歳より馴じう遊びければ、此年紀になりても如何往来すれど、双方の親たち然しては氣遣はず、まだ〱子供にて許しぬ。並べて似合はしき容を見れば、いづれの親心も行末は同樣にと、折に觸れては言出すこともありながら、離れてる両人にも及ばざれど、苗々は二人ともお附きて、その心算に愛情は増すなりけり。神田の祭禮とて母屋の座敷よりお初の招かれけるに、去年も一昨年も折角の志を無にしたれば、今年は見物に行け、母も久しぶりにて新京の山車が見たければ連行かむと言へど、物見遊山何にまれ、往來の出嫁にて、子然と一間に籠りて草雙紙小説などを讀むか、稽古の對手なしに閑寂なるを好めば、心に染まぬ事ながら、兩親の揃うて義理が濟まねばと勸めける上、女は女にて、此夏新らしく絽の單衣の出來たるに、一度も着たる事なければ、其を着ても見まほしさに、明日は涼しき内にと一番汽車にて出京と定りける夕景、一風呂汗を流して身化粧の薄化粧、紺中形の浴衣着て、亞米利加行の絵團扇片手に庭口の切戸を啓けて涼む時、結立の髪を氣にして、蔦傳ひに隣家の切戸を推せば、毎も納涼に来るお初を待ちて、鎖を外したる扉のやさしく啓けば、千様とは言はず嬉様と小聲に會釋して通りぬ。可厭味は有れど數寄を盡せる小庭は田舎源氏を宛然にて、時雨ぬ打水に木の葉の露を含み、変彩の手水鉢には水漫に溢れて、軒下の釣忍に小鈴の揺ぐも涼しく、縁先の陰に蚊の燻して、二人隠の竹葉几に陶器の獅子に野道の燻香の薫りけるが、人の氣勢に臭より鹿小紋の單衣着て、少し挾め足に竹笄を鳴らして出来るは千之助なり。お初を見るより温顔に、今日の暑い事は、御嬢様もお變は無いかと言ふに、お初は團扇に顔を埋めながら浅黙に見て笑へば、千之助は庭に下りて、此人は何が可笑いと、床几に掛れば、別に可笑い事は無けれど、番頭さん染みた挨拶をなさるゆゑ。はて十九にも成つて是式の挨拶を為いでか。其樣な生真面な挨拶は私は嫌ひと、蚊遣火を中間に夾み互に腰を掛くれば、お初が扇ぐ團扇の風の余に、千之助は背を吹かせて、何處からか知らねど深切な風が来て涼しいことはと言へば、お初は其横顔を望と睨きて、扇ぐ手を停むれば、千之助の斜向くに些と顔を向せてほほと笑ふ。最すこし扇でたまへ。此方が疲れなば我代らむ。必然代り給へと二つ三つ扇ぎて、千様草臥れましたと中途に千之助の顔を覗けば、其樣に骨惜みする人には何も頼まぬと、お初が放さじと握る團扇を力まかせに奪取り、はたはたと無暗に扇ぐ手真似をしかと思へて千様千様と喚べど、真向に向きて知らぬ顔の顔を一寸衝けど、なほ物をば言はねば起上りて、後方より両腋に手を入れ、こちよ〱〱、此方様にえゝ悪男の子かいな、如是にこちよ〱こちよこちよと擽れば、千之助堪へ難してきやっと

飛退き、母に見られなば叱らるべし、もゝ堪忍したまへと二人ともに床几に懸くれば、お初父窃と千之助の脇下を衝く。驚き刎退き、まだ悪戯するならば此處には居るまじと、縁側に外らむとするを引留め、もう擽らぬかはりに沈默て居ずと、何か雑談をしたまへ、何も言はずに如此して居るは面白からねば。さらば有興やうな、お樂みのやうな、後は寂寞やうな、詰らないやうな、我にも話さず秘してゐるやうな、聞いたら吃驚するやうな、雑談をして聞かすべきやといへば、お初膝を摺寄せ、裾に纏る蚊を拂ひながら、何卒其物語をして下され。話すは好けれど吃驚したまふな。可怖話かえ。否々。可怖はない話かえ。否々。あれ其ならば什麼なる事ぞや。可怖やうな不可怖やうな……其はどうとも御勝手次第。其様な談話なら聞きたくはござんせぬと向背になれば、千之助お初の島田髷の新結なるに目を着け、其でこそ髪も結うたれ、白粧も傅けたれ。えゝとお初振向けば、此度は千之助が向背になりて、獨語のやうに、什麼あるべきぞ今夜の長さは！ 待しき明朝の一番汽車にて、東京は神田の伯母様方へお客に行きて、明神様の祭禮は濟むとも、五日も十日も廿日も一月も一年も逗留して、好所夭を採擇むまでは此地へは歸るまじ。其様に思うて見ればおもしろからぬ横濱なれど、少しは名殘も惜まれてと。聞くよりお初きゝと向直りて、千様何年の何日私が御所夭を選擇に東京へ行くと申しました。否、我とて此方様が東京へ行くと何時申しました。此方がもしまた一日なりとも東京へ行かるゝやうな事あらば、何とて交情好き我に裹みたまふべきや。今の話は今日の新聞にありし餘所の女子の事と説遁れば。否、否其は虚言なり、早誰かゝら聞かれてか。おつしやる通り明朝は母様に連れられて、神田の御祭禮并に伯母様の宿へ参ります。此暑氣といひ、行き度い事はなけれど、毎年招かるゝを外したれば、今年ばかりは是非一度は行かでは、他人の深切を無にするといふものと、父様のお言葉ゆゑに進まぬながら参ります。今宵は一寸その事を話しに参りましたに、失言れて此方様に先を越され、所思もない濡衣を被せられたは口惜うござんす。明日明後日は必定歸つて來るほどに、其様に腹を立てたまはずと、平素のやうに温和してそして待つてゐて下され。何なりと此方様の好な物を土産に買うて参りませうほどに、かういふ物をと言うて下されと、手を取れば引込まされ、袂を牽けば振拂はれ、喃千様と泣聲になりて縋れば、土産などは欲しくもない。東京などにあるほどの物が何とて此横濱に無かるべき。御機嫌好うとばかり突然起つて奥へ入りける後影を、お初惘然と見送りけるが、やがて續いて座敷に入れば、千之助の母一人中の間の縁に端居して煙草を薫らしけるを、見るより慇懃に挨拶すれば、應、ようお出なされまし。見事にお髪が出來ました。お宮參か、島田は彼女の事なり。なるほど明日は神田の御祭禮へお詣なさるとの事、おたのしみでござんす。其處は疊の端、此處が涼しければと我對坐に革蒲團を敷きて此へ〳〵といふに、馴染ならば遠慮はなく一寸會釋して其處に坐れば、今し方まで千之助と庭にて納涼みたまひける様子なりしが。千様を怒らして床几に一人取殘され、淋しきゆゑに此處まで参りましたと、哀訴がましく語れば母親笑ひて、千奴は吾儘ものと、まだ十一二のやうに思うて、他人が見た所を立派なる若衆といふを聞かぬか。下女を呼びて未だかと問へば、大概宜しうございましよと立還りて、臺所より氷菓子の鐉を運び、匙玻璃盃等を取揃へて立つを女主人は呼留め、部屋へ行つて千之助に來やれと吩咐くれば、やがて來りてお初の姿を見るより、拗ねて母親に

倚添うて坐れば、えゝ此暑熱に少し離れてくれぬか。それ、此方の註文ゆゑ拵へましたれど多分には進げませぬぞ、悪疫流行の折からなれば。其にしては一杯の多量が辛しと、眞顔になつて喞てば、母親も笑へばお初も笑ふ顔をじつと視て、何が其様に可笑うて笑ひたまふぞとぷりぷりすれば、あゝ、まだ先刻の腹立は解けざりしものをと、日常は有情の眼許が此折は一層怖ろしく、身を竦めて俯視きぬ。千之助腹立を見せ態にわざと默れるに合點て、お初は母親にだに氣易く話懸くる便應ければ、おのづから默りて氷菓子を味へど、窮屈なる從の中に身は跼蹐らるゝほど切なき思すれば、そこ〳〵に仕舞うて歸らむとせしが、なほ見れば千之助の腹立顏、心の障碍となりて其儘にして行くべきにあらねば、試に挨を言懸けゝるに、顏を背けて生返事の可憎、我に何罪科ありてと勃然としければ、淸助に怨念を留め、母親に忍びて千之助の顏を凝視めながら、突然、母様左様ならばと、言出る氣色に、千之助の心少し弛みて、お初孃は時刻にて歸宅るほどに、女子は勝利に乘りて氣輕く、闇を潜して足を早め、縁より庭院に落つるごとく降りて、急く儘に踏返す下駄を止むる間はなし、千之助運着きてまたお初様と、肩頭に懸らむとする手に身を退り、跣足のまゝにあたふたと切戸を潜りて裏へ出づるを、なほ逐懸け——逐着き、何とも言はでお初の手頭を握り、何を其様に。其も聞かずして振解き、我庭へ逃込みて内より切戸をぴしやりと立て、戸外の力に推開かれむは口惜と懸鐵を懸けぬ。拗ねては見たれど拍子からの所爲。憎くはあらぬ男子のさぞや望を失ひ、戸外に佇みて此心の無情を恨まむと、脆くも心折れて様子は什麼。覗くべき戸の節孔塀の間隙を探せどあらざれば、呼吸を殺し耳を峙つる時、ほと〳〵と戸を打つ音胸に徹へて辛抱しがたく、手はおのづから懸鐵に行くを引戻して、餘り弱きも羞かしと思鎭してなほ忍べば、少時ありての跫音は隣家へ其人の歸るなり。戸を開きて見廻せば、果して誰の姿もなきに遽に慕はしくなりて、跣足に隣へ忍び、切戸に立寄りてそつと推せば、開くに驚きて逃歸れば、引續きて來る跫音、扨はと内に身を忍ばし、切戸閉めたれど推せば開くやうにして、此度はきつと和解の覺悟して待てど、觸りもせずに行きけり。希望外れて戸を開けば、脱遺きたる我庭下駄の入口に揃へたるに、土足にかゝるものを手づから持來りたまひつるかと、嬉しくもあれど氣毒にもあり、勿躰なくもありて其志の忝さに、お初も足には懸けず手に持ちながら、燈籠の影に明るき隣の軒端を、爪立つて詠むれど思は盡きず。

二

心を此所に遺して其朝、お初は母親と下女の民に伴かれ、神田多町なる伯母許に赴けば、既巳五六人の先客ありて家内は煮ゆるがごとし。伯母の喜悅は斜ならず、この一組は別座敷に請じて伯父とも〳〵に心を盡して懇待しけり。戸外には樽御輿を舁く兒童のよつちよい——わつちよい濤を崩して一しきり過ぐれば、遠近にきこゆる飾屋臺の囃子に雜りて、拍子木の音、木遣の聲、耳に間なく心の庭へ闖入み、軀體もおのづから搖くほどの雜沓。お初も之に紛れて出窓より窓外の雜鬧を眺めやり、往來少女の風俗に心を着くれば、櫛、簪、染色、縞柄、下駄までが、土地變れば變る流行、下賤なる箇所なきにあらねど、横濱はらしやめん金剛石のごとく光りて思ふまゝの華美を行れば、潔白少女まで見やう見まねにおのづから自墮落の風に染みて、あるまじき異様の趣味を悦ぶ事の淺ましさと、毎々なる伯父の言詞思ひあたりて、さる事もやと我風俗のいやしく横濱ばた

んを氣遣ひ、側なる民に我姿を質ぬるはしをらし。

やがて來客一同に打揃ひ、家内も一群に表江の懇意なる店を借りて竹欄を結ひ、毛氈敷かせし桟敷に山車十臺を見物して、此夜は晝にもまして賑はしければ一泊して、明日は歸らむといふを、祭禮濟まば久しぶりにて演劇を見にゆくべし。此地に住めば何時にても見らるべきなれど、所人が知るほどの出しぎらひなれば、かゝる機會ならでは入難ければ、お客樣を口實につかうては濟まねど是非に付合うてと伯母がいふを、素氣なくも否まれず、抑留らるゝまゝに逗留りけるに、彼此繁忙みて伯母は其日に間なく、また一日と延ばして見物濟めば、淺草へ、上野へ、何處の何は横濱にはなき美味物なればなどゝ釣られて、うかうかと四日逗留せしも、なほ放すまじき氣色なるを、お初の母が、宅は無人なれば唯二日の間をもらうて參りたるものをなどゝ百方に遁詞して、今日は午後に是非とも發足といふ午前、土産に何もなければ人形なりと買うて進ぜたしとて、伯母はお初を十間店へ伴ひぬ。

お初は好むまゝの函入の男人形を買うてもらうて還れば、まづ母には大概に見せ、民を小蔭に招きて見せけるに、唯可愛らしとばかり賞むるがお初氣に入らず、民は眼が無いのか、猶よくよく視やれといふ。何程熟視ても唯可愛らしきに相違なく、外に何ともいふべき詞なければ、この半袖の友染がどうもどうも誠に好いと賞めて見れば、衣裳などは何にてもよし。人形の顏が誰やらに肖てゞはないか。其を言うて見よとあれば、民は左傾右斜流視めて會得の微笑、まことに眼の邊が。それそれ誰に肖てか。誰樣やら知らねどなるほど能う肖てをります。然うも心着かで見ましては肖たとも覺えませねど、視れば見るほど生寫。お前にも肖たと見ゆるか。見えます段ではござりませぬ。そんなら誰に？ まあ貴孃こそ誰樣に肖たとお思ひします？ まあお前は？ 貴孃は？ お前は？ 貴孃は？ えゝもうそんならと民の手より人形を引取り、兩袖に抱へて奥へ行きながら振向きて、民！ はい。千樣に。

三

この四五日は賑はしさに心を奪はれ、千之助を忘るゝといふにはあらねど、絶えず思ふにもあらで過ぎたれど、汽車に乘れば川崎鶴見と横濱近くなるほどに、不快意ざりし別離を思出せば、此より歸りても何と詫びて再訪問るべきや。二日にて必ず歸らむといひしが、四日にもなりたればいよいよ此身の僞詐者と疎まれて、如何にならむは推量かるべし。さるにても此人形は一目なりと見せ申したきものなり。まだ此外に上等品は腐るほどありて、其を伯母樣に薦めたまひたれど、さしては良品ならぬ人形を撰びたるも、眼許と口頭の千樣に肖たる懷しさに。かほどまでに思ふ心を知りたまはむものならば、いかに腹立ちたまひたりとも折れたまふべし。何はともあれ之を見せて、二なき心のほどを明して詫ぶるより術なし、大概はそれにて堪忍したまふべし。早く着け早く、神奈川はまだか。逢うて顏を見るは心苦けれど、まだ見ぬ内は心の濟まざるに、[illegible]車室の床几に落着かず、氣は急くほど車輪の進行緩く、やうやう横濱へ着けば人力車を飛ばして歸宅るが否や、呼吸も繼敢へず土産を持ち、人形を抱へて例のごとく庭傳ひに、隣家の庭の切戸口までは容易に着きたれど、其扉は鐵[illegible]推すべき氣力なくて少時佇みぬ。

其人に逢ふは異なもの、逢はぬは猶更心慊まず。さりながら此木戸を開けて入らん時、其人庭前の座敷に居らむものなれば何とすべき？

歸るにも歸られず、行くには行かれず、立留るとも埒は明かず、其手持無沙汰の極惡さはいかならむ？　もし折よく下座敷には居で、われ座に落着く頃出て來る都合にまはり合はさば何の事はなかるべし。南無不動樣、さうした都合にあれかしと胸悸々、口を閉りて一思に切戸を開け、半身さしいれて緣口より座敷を覗へば、嬉しや嬉しや其人の姿は見えずして、例の座敷に其人の妹のみ見えたり。其人は出にか、二階にか、出て來ぬ間を命といそ〳〵入室れば、お初樣今お歸宅か、大分ゆるりとした御逗留、嘸かしお面白い事と皆までは聞かず、千樣は？と尋ぬれば、急に昨日大阪へ發足ました。えゝ其樣な事をおつしやつてもよく存じてをります。お店か、お居間か。餘り突然の事なれば私とても、夢のやうにて、今に心が迷うてをるものを、然う思ひたまふは無理ならねど、眞實大阪へ遣りました。嘘言とも疑ひたまはゞ店へなりと、居間へなりと行て見て念を霽したまへといへど、なか〳〵腑に落ちず、衝と立つて小座敷より襖を開けど姿へはなし。二階へ昇りて見れば唯ひつそりと片付き、千之助が座右雜具は何一つ影なきに張合無さ、膝つる如くばたばたと梯子を駈下り、下女のお貞、千樣は在宅なさらぬのか、あの居間の光景はと泣聲になりて見凝むる眼中に、涙を湛ふるしをらしき心情に誘はれ、千之助の母も多愛なく涙を催し、此方樣にもよう傳言てくれとくれ〴〵も頼むで發足ました。幼穉頃よりの好伴侶といひ、是から大分長年の別離なれば、せめては一目見たかりしなるべし。そして私の家からは誰がお見送に參りました？　御多忙中をお父樣がわざ〳〵停車場までお見送下されましたに、懐人濃き千之助なれば、汽笛の鳴るまで側を放さず、お父樣もまた車室の裡まで侍いて百方お世話をして下されました。扨は眞實に極りしか。そして千樣は何日お歸りなされます？　まだ昨日行たばかり、丸伊の本店へ商法見習とての奉公なれば三年は戻らぬつもり。えゝ三年、三年とは！　なぜ電信なりと打つて告して下さりませぬ？　姨母樣あなたは餘りぢや〳〵。それも此方樣が我家子ならば知らぬ事、他家子を我子のやうにその樣な勝手がなるものぞ。ならぬというてならぬ事があるものぞ！　餘りな姨母樣と纏着きて歔欷ぐれば、持餘せど、我子を懐しがりて泣くほどの心を想へば、我子にも劣らぬ可愛さに涙を零して、そのやうに泣かれては折角紛れし私までが悲しくなる。電報で知らせざりしは私の過失、どのやうにも詫ごませうから機嫌を直して、さあ〳〵其涙を拭してとお初の背を撫りながら、我膝に仰向けし髮の亂を見て、我挿櫛を取りて梳上くれに、お初はしぶ〳〵顏を擧げて、あゝ三年といへば長い月日、其間一人何をして……このやうなる事あらむと蟲の知らせしにや、御祭禮へ行くは可厭で可厭でならざりしを、親父樣が何の彼のと喧しくいうて、斷つて行かぬといへば叱責るるが可畏さに行つたればこの始末。今度からは御祭禮なりと何なりともう東京へは行きませぬ。そんなら姨母樣女房を更へてまた[illegible]ほどにと、萎れ〳〵て歸りぬ。

四

意中の人の姿は晝夜見徹しに見るに倦かずして、片時も見ざるに切なきこと渇きて水を思ふに似たり。情慾は人生の苦の樂、喜の憂、有つて是非、無くて善惡、物の利害の兩極端なるべし。

二つの心愛に粘りては、義利の力も智識の手も引放し難く、心の器は東西千里に離るゝとも、この精神力の消ゆべきにあらず、消ゆべきにあらずしてなほ濃からむこと、水一滴だ

になければいよ〳〵渦氣堪へざるに異らじ。別際に名殘を惜まむとて餞別を世上の風習にして、孰れか此時に袂を牽き涙を餞けざるはなし。さりながら、今はと一刻に惜みて盡くべき名殘にあらず、戀思はなほ之に募りて執交はす手は石にならむまでもえは離まじ。別れでならぬものならば知らぬ間にふいと別れ、此一時は逢うても逢はでも別れて後、肉を搦り腸を絞るに輕重なき苦愁に堪ふべき精根を、仇なる名殘の悲嘆に可惜費さしめむは、思へば無慈悲の至極なり。おのれを捨てゝも他の萬事に利からむを望むこそ、おのれが愛する方への惠賜なるべけれ、誰も之を知らざるにあらねど、執着の一念、熱、鬧、狂すれば、前後も分別も忘れ果て、往人は此世を其日限りか何ぞのやうに未練に竦めば、送る人も亦同じやうに泣いても喚いても、別るゝものは終に別れけり。この寸時の苦思たしかに生命の五六年は短むるを、かくても滿足するものならばともあれ、なほ後後までの思出草となりて心を責むるぞかし。

去りにし夕の口論は睦まじき口論、折には戀の花なり。根もなき事は二人の心に何も遺らずして、明日過ふおもしろ味ともなりたらむを、千之助はさぞやお初を一日なりと見まほしく、お初も一日たりと見まほしかりつらむをと、我等が推想るはおぞし。名殘をえせざりける二人は、その無垢なる戀を神の嘉したまひて、心を入牢の苦患に陷したまはざりしなるべし。さりとも心着かでお初は名殘の一日、後れけるに切齒して一生の口惜き事と、茲へ溯れば捨つるごとく衣裳を更へ、他人を見るも可厭、發言ふも可厭、いはるゝも可厭と、かの人形を抱へて二階の一室に籠りぬ。口惜や、無念は千樣に逢はざりし事！　またというては三年も後の事とやら、朝夕逢ひにしものが一月逢はであるべきか、一年辛抱が成るべきか。ならでもせでは協はぬものならば我慢もすべけれど、其にはせめて別離際に存分逢うて、話したい事を話し置き、聞きたい事を聞いて置き、何やかや一寸は考へきれぬほど所懐は澤山にあるものを。我には似ざる千樣の水臭さ、これほどの大事が足下から鳥の立つ樣に起るべきか、以前から薄薄相談ありて知りたまふべき理なるに、何とて此身には裹みたまひしぞ。もし又我出京たりし日に相談起りて昨日發足に定まりたらんには、電報なり葉書なりとも知らせ次第飛んでも還りたらむに、さはなく我を他人にしてこっそり發足たまひたる後、あれしきの事を根に持ちて此身を袖にしたまひしか。あのまゝにて別れたれば心懸りになりて、からしてある間も快意からずと、戀慕よりはさしあたりて別離に逢はざりしむしやくしやに、じれて、泣いて袂を噛み、搔き髮に櫛を入れて引縺る毛をぐっと抜けば、脆くも櫛齒は三枚缺けたり。えゝと疊に打着くる側に臥かしたる人形の顔笑むがごとし。むずと抱上げて胸に押當て、徐にその面貌を視れば、靠ける睫毛の長きより黑漆の眼裏まで肖て、丹花の唇の間に瓜核のやうなる前齒二枚見ゆるまで其人に寸分違はず、視れば視るほど別れし人の懐しく、その手を吮ひ、その顔に頰摩してせめてもの消愁、窓の簾を明けて隣家の庭を下瞰けば、竹床几もその所にありて履脱にその下駄のあるも恨めし。

五

お坊樣の千之助、兩親の膝下を百五十里も離れむは、十八年來無經驗き可厭なる想の譬ふべきやうなし。悲しさ、心細さ、じめ〳〵腸に染入りて心消ゆるが如し。窓に肘懸けて汽車の走るまゝに、當分此地の見納めと眺めやる眼に、涙おのづと湧きて滴つるを人知れず拭へど、なほ慨かしき泣顔を帽子に掩し、革包に俯首きて、

母親が病身なる事を思へば、わが留守の不慮も氣遣はしく、父親が勝負事好より破産の憂を危み、火事ありて全燒ともならば、地震ありて壓死なば永劫このまゝの別離、われ一人生殘りていかなる憂目を見る事やらむ？ 其を想へば父親に叱責るゝとも母親に怒らるゝとも、此奉公は廢止にして家に居たらむものを、さりとて商法の習はれぬ譯はあるまじきにと、いよいよ此旅の悲しきを感えぬ。箱根にて乘車せし少女が浴衣といひ年齢といひ、お初を思出の種となりて、さりし夕涼の折からにすねし風采、あまえし言葉、ものいふ唇頭、見る眼、笑顏、分明に想に浮びて、隣席なる女子の髮の油の匂ふも懷しく、百感胸に逼りて安眠を妨げ、東雲頃に車の停りしは名古屋なり。此處までは早や百里に幾しと越し方を見やれば、一念雲に入りて逢はれぬ。日に照られてうつら／＼と斷續の夢の間に、正午少し過りて大阪に着けば、出迎の案の言葉の訛可笑くも耳馴れざるに、旅[illegible]りて心細きこと限りなし。車に乘せられてせゝこましき小路の幾曲、見る物毎に馴染なく、逞[illegible]士女の風俗とんと異れば、此中に交らふ事かと所詮なき身にはいよ／＼心細し。二十分も引廻されて丸伊の店に着きけり。

我店とは年來の懇意といひ、親父より格別の依囑ありてや至極手厚き待遇にて、我を待受の風呂に入れば、名物の蒲鉾――鱧の皮などにて午餉を出し。旅疲を息めたまへとて、異な髮形の下女が臥夜被に空氣枕を持來り、御用もあらばと喚鈴を手近に置きて行くなど、不足なき待遇に、翌日からはかうした身分にてはあるまじく、一寸逢ひし伴頭の眼光の可恐さ、意地惡げな丁稚あがりの面貌、隨分涙を呑むやうなる日にも逢ふべけれど、主人夫婦は物柔かなる性らしければなどゝ、行末を思煩ふまゝ、疲勞はあれど、就眠れぬ耳に、人の昇り來る跫音に起返れば、階子の口より顏だけ見せし丁稚は、ばた／＼と下りゆきぬ。程なく主人先立にて、噂に聞きし二十歳になる子息と、其後に引添ひたるは娘裝なれど嫁ならむ。紹會はされてそれ／″＼挨拶濟み、二つ三つ談話はせしが初對面なれば、相互に手持無沙汰の坐愁くて直に暇乞しけり。同く商家の子息に生れ、財産とても對等なるに、此身は故郷を離れ、家中に氣兼し、身體に樂なく、松坂木綿着て冷飯食ふに引替へ、此家の子息の運の好さは、さる苦を知らざるのみか、我お初のやうなる少女を女房にして……えゝ……年季の三年、早く經つて還る事になれ！ 停車場まで歡迎に出て逢はむ時は、さぞや嬉しくて物はいはれず涙が先立つべし。お初も物はいはで泣くべし。えゝ、還りたや！ 還つて顏見む時の心はいかならむと空想に弄られて、鬱ぐやら笑むやら、やがて今の身に思かへせば、今日來たばかりに失望してまた枕に仆れしが、衝と起つて床間の提嚢を持來り、裏なる懷中物よりお初の寫眞を出し、孔の穿くほど視凝めて太息を洩しぬ。

奉公人姿となりて二三週を經るに、麁食も馴るれば砂にもあらで腹は膨れ、木綿の肌觸とて肩の剝けるにもあらねば、苦とも覺えず。毎日の用事も店に居ながら役の濟む事とて、何もかも思ひしよりは樂なれば、今の境涯にさしては不足の恨なきに、衍許の戀しさは一重づゝ引剝ぐ如く減りて、其減るほどに、増すはお初を戀慕の一念なり。

巧手が笛を吹けば、下手の歌口も感じて其調子の鳴出づるごとく、我より二歳上なる此家の息子にお初と同歳の嫁あり。奥の別座敷を居間にして、覗けば重箪笥の木地の新らしきさへ備きに、[illegible]も用なければ息子此裏に籠りて飯事のやうなる遊戯、千之助お氣入にて、茶が出來たりとて呼ばれ、菓子があるとて呼ばれ、

その度々若夫婦の膠漆を見せつけらるゝ辛さ、撲つやら抓るやら、そんな事を散々見せし擧句は、妻の寢像の惡さは顎を枕にして、夜衣の袖から隻足出してと息子がいへば、千様それは根據もない空事、人事よりはお前様の朝寢坊、夜は大方死なるゝ事などゝ聞かされて、思ある身は業が沸えて、寫眞抱いて寐ても及ぶ事にあらず。

六

事なく其年は暮れ、春も過ぎ夏も過ぎ秋も半の九月十二日、横濱よりの電報スグカヘレとあるに、仔細は知れねど一大事と暇乞うて歸港し、太田町に來て見れば淺ましき事？ 店は入口の外格子戸を下して巡査の張番するは、誰が不養生からの虎列剌なるか。奉公人ならば遙々我を呼寄する事はあるまじ。母親か父親かと跳る胸に足もしどろに駈入れば、奥より母親は轉び出で、還來しかといふより早く、泣腫したる眼に涙を浮ぶるは心許なく、誰が病氣！と問へばおろ〱聲にてお父様が！ えゝ！と荷物を投捨てゝ、逸散に父親の居間へ行けば、後より母親斯來りて、昨日の明方お父様は亡なられしぞと、二人とも仆れ重なりあうて、少時泣くより外はなかりき。やがて母親は涙の隙より、此外にも驚く事あれば、千、心をたしかに持つて聞きやれ。六年の秋から父様は眼病を疾はれ、はじめのほどは霞む〱とばかり、許漫にし給ひしが大事となり、後には雲懸りて物の色だに辨じかぬるに驚き、その歳末東京駿河臺の井上病院へ入院したまひたる留守は、番頭の嘉七が萬事の支配。さりとは賴まれぬ人の心、僅少二月ばかりの間に手の屆くほど負債の額は六千圓。父様やうやく快氣にて御歸宅の際に嘉七め身を匿しければ、店の名の借財とて父様の負債となり、剩へ此宅まで抵當にいれたる始末に、飼犬めに手を嚙まれたりと、父様も私も其を聞きし時の無念は！

無念にては濟まねば、顛末を債主に話し、ゆるぎの附くやうにして一回復と、さらぬだに苦勞性の父様なれば、夜の目も合さぬ御心配。それゆゑに痛められし身體の、暑氣に中てられ、一日一晩無比の苦痛の中に、な……な……亡なられしぞ。逢ひたうござりました。

父様も亡からむ身と知られてか、苦痛の中にて千といふ事を幾度いはれしか知れずといへば、堪らず聲を揚げて泣入るを、母も泣きながら泣くなと制め、明日からの身の處置は！ 家ぐるみ道具までも負債に取られ、其方の腕には何の藝はなし。二人活計の小商賣も捏集錢の覺束なければ、今月中には此家を明けねばならぬ對談、さしあたりて何とする意ぞと問はれて、からといふ分別の段か、暴風雨の沖に漂流ふ心地して思慮もなく手段もなく、唯可恐さ可怖さに途方に勞るゝを、母はかひながりていとゞ心細く、行末の苦勞死別離の悲嘆の中に式のごとく葬禮を濟ませければ、此家を立退の支度は、店のもの悉皆暇取りし中に、一人殘れる子飼の長藏、下女の鶴、母親、千之助、四人懸りにて大方形附きたる日暮、千之助風呂あがりにて庭の床几に倚り、明日からの始末を案じて伊勢山の鐘 腸に染み、つく〲世の味氣なきにほろりと涙を溢せしが、奥へ行きて母親を慰めむと起上る足下に、からりと音して落ちたるものを拾上ぐれば、文を卷きたる 簪なり。隣の二階を仰げば果して！ お初欄干より乘出して此方を覗きこみ、挨拶ぶりに小腰を屈むる姿を見れば、父親が死去の不意に惑ひて、中絶えし戀慕の情むら〱と湧き、飛立つばかりの懷しさにお初の方を物珍しげに仰ぎて、手招すれば首を掉り、其文を見よとの手摸に解いて見れば、留守中の戀しさ、歸宅の慶賀、父親

病死の弔詞などつきまぜて七八行に書記し、お歸りと聞くより飛んでも行きたけれど、傳染病の後なればと、兩親彼此いうて出さねば、ゆるしてくれとの添書あり。千之助讀了りてお初の方を見上ぐれば、文の意を得たりやと尋ねかほに一寸首を傾ぐれば、千之助は首肯き、日は暮るゝ――談話はならず、告別の目授して入らむとすれば、お初あわたゞしく手招して呼留め、返書をくれとの手摸に、奥へ行て、我思とても異らねば、同じく逢はざりし戀しさを認めて簪に結び、塀越しに二階に投還せば、お初請取りてそのまゝ袂にいれ、月なき宵を相互に恨みつ、見えぬながらもしみ〴〵と顏を見合せて別れぬ。

荷物は此夕停車場へ運びて、東京芝金杉なる母が姉の方へ送り、明の日暮には此地を去るに極め、其日の午後母子つれ立ちて、長年の懇意なればと隣家へ告別に行けば、夫婦しきりに言葉を盡して氣毒がれど、小慮は癪もしからぬに長座は心快らずと、直にも歸らむ母親の氣色に、お初一人切に抑留て還さねば、なほ語る事實とて無人の胸には外に何かあるべき　いづれ不幸の物語に、お初涙を浮べて千之助を眄る眼には、千萬言もいふにいはれぬ實意溢るゝ如し。話したき事聞きたき事は山々なれど、親等の前とて憚多く、千之助には物いはぬ勝なれば、首尾して人なき所へ連れむものと、母親同志話す間にお初目授してすっと奥へ立てば、お庭の樣子が大分變りましたといふを機會に、千之助も續いて奥へ行き、梯子の側に隱れて手招するお初に尾いて二階へ昇るや否や、千樣と手を握られけるに女のも握り、お初樣と繋がりて坐れば、お初は擦寄り、此方樣はまた大阪へ行かるゝのか。もはや大阪へは行かねど東京へ引移りて、明日からは裏店住居の身上なれば、また當分逢ふ事はかなふまじく、東京へ出らるゝ事もあらば立寄られよといひたけれど、來らるゝやうな住家ならねば……。何のそのやうな事を厭ふべき？　きっと尋ねますほどに、其節は泊つて行けと忘れずにいうて下され。お父樣には亡なられ、故郷は離れ、さぞや悲しき事なるべし。何やら澤山に逢はゞいはむと思ひし事あれど、胸充滿になりて…東京へ行きたまはゞいかなる商賣をしたまふぞ？　何を爲むにも資本といふほどの金なければ、當分は叔母の家に寄食りてと談話の中に、千樣々々と下女の呼聲は、母親の歸らむといふなるべしと、膝を立つればお初は其膝を壓へて、今日の日暮にお出立か。晝間は人目憚かしとて。それそれ此方樣に見せたい物がと、戸棚より箱入の人形を取出し、去年神田のお祭禮の時貰うて戻つて、見せやうと思うたれば行違のお發足。熟視たまへ眼許が此方樣生寫。此眼許に肖たりとか。自分の事がいうてもらひたさに、人事にして謎を懸くるにやといへば、お初眞顏になりて、此方樣はいつも〳〵意地惡な曲つた事ばかりと、柱なる小鏡を持來り、よく較べて肖たか肖ぬかを見たまへと、千之助の顏に人形をならべて前に鏡を映すれば、笑ひながら千之助は鏡を引取り、子供のやうなとお初を流眄れば、此方樣が留守中はその人形を朝夕眺め、此上にお菓子を供へてと、雛の三寶まで見せられけるに、千之助紙入の中なるお初の寫眞を出し、此身とて眞實に劣る所なし。寢るにも離さず肌身に添へてと、答へされ。お初人形の帯を解けば、中には千之助の寫眞、私とてもこの通りと、二葉の寫眞をならべて其前に人形を飾り、この子の名は千太郎と顏を見合ふ所へ、下女の民が忍びより、千樣と大聲に呼ばれて周章る二人の風情を笑ひながら、お母樣がおかへり遊ばします、といへば、お初は恨めしげに民を睨めて、わたしがおつた申せば其方は先

へ下りよといへど、なほ梯子の中段に立ちて、否、千様はわたしがおつれ申します。えゝお下りといふに。其方の千様かえ！

七

千之助母子は横濱を引拂うて、東京芝金杉なる叔母の家に同居して、二月許は何も爲で過ぎけるが、坐して食へば山も空し、落魄の身は世に唯恃みなる貯金の少額なるが日々に減行くを、命の縮むほどに心細がり、なほ少金にても有る間に營業の道を見出さむと、千之助に何にてもあれ其方が此うと思はしき稼の業もあらば、まづ其に取着き、身の落着を定めて、ともかくもすべしとあれど、もとより商人の身なれば手に覺の職はなく、讀書は尋常の店のものなどより巧者なれど、取立てゝいふほどならねば、其とても出世の役に立たず、大阪までも奉公に行きて此ほど覺えたる商賣の道も、資本なければ今の間に合ひ難く、さりとて之をと口實て給料取るほどの活力もなければと途方に暮れ、私の量見はしか〳〵と立派なる挨拶もしかねて、面目なげにさし俯向けば、母親は口にこそ出されね、心中には効ながりて無心の涙を催せば、千之助認咎めてはまた何を泣きたまふぞ、生者必滅會者定離、老少の不定なるはすべてこの世のならひなどゝ、商人の知らでもよき坊主染みたる言を高慢に言立つるがいとゞ腹立たしく、此涙を知らぬか。父様の卒去よりは生命長き其方が行末を案じ、且は男一匹でありながら、女憎かしき質がひたさに呆れ、その様に意氣地なく此母は生まざりしものをと、口惜さに泣く涙とは知らざるか。幼稚頃は玉のやうなる容貌にて、しかも女子優りの氣立の柔婉、餘所の男子のやうに喧嘩せず惡戯せず、よく兩親の言葉を守りて素直なるを自慢にして、家にも大方ならず譽められ、青年になりてもその氣象は、枉まず、浪費せず惡所へ近かず、親には温順く、奉公人には情深く、家にのみ引籠りて、道樂は新聞雜誌等を好くに止まりしを、藤久の大旦那が、千之助は天保時代の生息子、または明治の當世の男としては、日本橋邊の大店向の息子株ならば知らず、往來を素手にて行くも心を緊めて行かざれば、何時の間にか眼玉を拔取らるゝといふ、寸の間も帶を寬むる事だにならざる土地に、平家の公達見るやうな此方の千之助は、とても此所の土合ふ種にあらねば、二代の太田屋は彼ではあるまじと常々語られしに違はず、合戰のやうなる今の世中に立交らひて、一人前の稼は覺束なし。之を思へば男子の氣烈からぬは、利かぬ辛子も同じ事にて物の用には立ち難し。色黑く、でく〳〵肥り、喧嘩して人の子に傷付け、惡戯して世間に疎まれ、游泳に行きて苦勞を懸け、親の身は刻まるゝばかり世話は燒いても、成人の後山氣はありとも才動き、氣丈にて老人の杖となり、孝行といふほどにはなくとも、唯邪慳ならずば其外に慾なし。養育効ありといふものなれど、女子ではなし男子にして、根性に骨なく所志に心なく、二十になりても三十になりても、頤鬚ある懷兒ほど、頼もしからぬはなし。なまじひに子あればこそ、効なしと知りながらも、侍るべき氣は興れ、その氣興りて侍らむ氣力なければ、かくよしなき苦勞を求めて、寢食の安からぬも此子あるゆゑなり。寧無くば無いにて諦め、おのれ一人は女子ながらも世は渡らるべし。

千之助も大阪へ遣る前までは、かほど意氣地なしにてもあらざりしが、他地に一年も居たりし內に、言葉の訛鈍くなりしのみと思の外、根性までも上方になりて、歯痒き事は我慢しても見て居がたく、なほ又父親亡なりてよりいやが上に氣脫して世を儚み、見物聞事につけて無

闇に迷ふる様子に、一[illegible]描き世に打つて出で、足から[illegible]けても人を倒し、剰ゆゑには[illegible]肉をも蹂躙り、我一人だによくばの可恐しき[illegible]を、板子一枚にて乗切る敗れ業のなるべくもあらず。親一人を[illegible]も養ふ段か、自分の身始末だにならで今に孩兒のやうなるは、とても希望なき性根なり。我もし明日にも目を瞑りなば早速路頭に迷ひ、狭き心はそれしきに亂れて、亡せにし兩親の戀しさに首縊るか、身を投ぐるかが果なるべし。石に噛着き、鐵を爬掻りても、男子と生れしからは男子らしくやつて退くるなどの魂は無もない事、男[illegible]婆の女とは千の事なり。我は女子なれど身貧に育ち、亡せにし夫が三十の年、渡世帶に小包背負うて嫁入りけるが、夫は物事氣に懸け過ぎる人なりしが、無一文より成上りて、藩の野田屋と外國にまで知られし身代になりしほどなれば、何處かに剛太き所のあるをなほ我は小さく思ひ、腰を推すやうにして一六勝負の商賣に[illegible]め、個々に肝臓を碎きて二十餘年の間に人がまし[illegible]仕出してのちは、[illegible]く手を[illegible]きて[illegible]の[illegible]に[illegible]め、良人に[illegible]を[illegible]て[illegible]せず、[illegible]に[illegible]……[illegible]ば、昔を知れる人はともあれ、野田屋と仕出でてからの[illegible]、[illegible]まで此身を[illegible]と知るにたゞし、[illegible]の[illegible]に一日々りて、猫背を撫づるより外に能なき、お[illegible]様上りの内儀と思ひしこそ可笑けれ。

其頃も番頭の[illegible]に欺かれて、かくの仕合せに落魄たるは、天の成せる不幸にして、此家の運とて是非なし。

女子には無用らしき我氣象の半分なりとも千之助にあるものならば、[illegible]の片蔭に人の[illegible]を借りて、[illegible]の上下に頭を下げ、いひたくもなき追從いうて、偽たくもなき氣兼して、[illegible]る時にも[illegible]られぬ[illegible]食の辛さは、一日生きむが[illegible]に一年の壽命を縮むぞかし。

人の[illegible]に[illegible]を[illegible]く食客は、[illegible]の中に求食る犬猫よりも劣りて人の中なる人屑なり。其と知りながら世帶持つべき術なさに、我から好みて畜生に劣るも——愚痴をいふにはあらねど——千之助が[illegible]力の無きゆゑなり。

不[illegible]なれども[illegible]を[illegible]ち、母子の[illegible]に[illegible]して、人[illegible]に[illegible]れぬやう分別に始末してやり、後[illegible]を安穏にして、二つには此母が老後の心を安んずべし。さりながら[illegible]ほどなる[illegible]心に[illegible]して[illegible]れども彼も男子！　いかなる[illegible]で[illegible]して、足腰の[illegible]けたら、立つ事もやと、親は親ほどありてなほ未練に引かされ、まづ彼の心を試し見むと、二階へ呼寄せ、財諸の[illegible]も大方盡きて此後の身の處置なき旨を語り、[illegible]と一[illegible]く此家にも[illegible]けれぱ、我なほ老いたるにはあらねば、奉公してなりと一人は身を得過すべければ、其方は書讀む事の好きなるを幸ひ、髮を剃りて行衣を纏ひ、從來は一寺の住持ともなりなむ後、此母を引取らむ心はなきかと問へば、千之助は[illegible]の顏をじつと視めて涙を浮べ、お前様が下女奉公に出らるるとか、何と、仕様もあらむに其の事ばかりは思止りたまへ。亡なられし父様に對しても申譯なく、母様にはまただ不孝に當りますゆゑとあるに、我は詰寄りて、私とても此年して下女奉公のしたき事は少しもなけれど、みなしやう事なしの分別なり。其方の才覺にて何とか仕様ありて、二人揃うて暮さむ心組あらば其上の事はなけれど、その仕様とは、かなる仕様か、[illegible]かせよといはれて[illegible]がり、萎れし首をやうやう上げ、かねてお話しなをす如く腕一本にて食ふ術は知らず、少しは心得の商業も資本なければ其効なく、さしあたりて如此といふ事はなけれど……其挨拶は耳古りたり。仕様なきを知ればこそ此母が日夜心を傷め、やうやく

抛り出して其方を寺へ入れ、功錢ともなしたらばむつかしき世間を離れて、露ほどの苦勞なく、唯身を堅固に持ちて平素好める字を讀み經を習ひ、十年も辛抱せば軈て一寺の住職となりなむに、此母一人を安樂に過さむは家鷄一羽飼ふより易かるべし。今日より此世は思を絶ちて寺へ入れかし。其方が錦襴の袈裟衣らるゝ身分になるを、母は樂みに何方へなりと奉公に住込むべし、其までは足腰も達者にして其方が懸念にも及ぶまじければ、母の事よりはまづ其身の末々を思ひ、油斷なく一心に勉强して一日も早く住職にならむ事を心懸けよ。なまじひに浮世を戀うて活路ゆゑに僅少の利を爭ひ、樂に蹈付されて憂目に遭はむよりは、和尚樣になりて心に懸る雲なく、朝夕に佛樣を拜みて亡き父樣に回向怠りなくば、草葉の蔭にてお心も安まりて成佛なさるべきに、母とても其方の身をもお父樣に預くる心地して、苦勞の重荷を下すべしとありければ、恃みし父の病死といひ、母を負ひて家を喪ひたるといひ、重ね〲の災難に弱き氣は折れ、狹き心は亂れ、味氣なき身を恨み續けて此世の懊惱き折から、しみ〲と此言葉臍に徹へて、母だに其心ならばと覺悟して、髮を剃り世を捨つるは願ひてもなき事なれど、母樣一人遺すが氣懸りゆゑ、住職もあらむと言うては見たれど、眞實お前樣が奉公を辛抱して、我が一人前になるを待つて下さるとの心ならば、明日からにても寺へ入るべし。

かくあらむと母は大方推したれど、その日から言ふを聞けば今更のやうに頼もしからぬ志に涙を催し、思ふに違はず、とても一旗擧ぐべき根性ならねば、いふがまゝに寺へ捨つるのほかなしと、此次第を叔夫婦に語れば、呆れ驚きて、千之助いかに氣力無しとて、坊主にせやうとは情ないにも程はあるもの。兩親もなく、親類もなき、捨子などならば知らず、片親ながら歴としたる此方といふものあり、叔父又肉緣の此方が姉もあり、此處がある樣の我まで据へてゐながら、千之助血氣盛にて何程の米食ふか知らねど、一人や二人が一年居たりとていくらが物ぞ。一生もながき事なればゆるりと好分別の出るまでは、ともかくも二階に窮屈を忍びたまへ。及ばずながら此胸にも思ふ所あればと、叔父が言葉も千之助の母は不承知なるに、叔母は涙ぐみて、今の青年に千もよく〲なればこそ心弱き事いふ心中の可憐さ。お前はまた我子が可愛うはないのか、千が坊樣になりたいなど、假にもいふならば叱りても留めべきに、我口から發言して、未練なしと一圖に捨つるとは、當にも似ぬ無分別の行止と、我子を母樣にいはれしほど腹立ちて、千之助に寺へ入る事は思止れと言葉を盡して意見すれど、我愚鈍にしてこの年齢に及び一生一人を得過さず、このまゝ三十になるとも見込なければ、出家となりて身を立て、母親をともかくもせん量見。此上の心懸りに、母親奉公に出むといはるれど、これまで水一桶汲みもなされざる身にして、下女のまねなどなるべくもあらず、强ひてしたまはゞ身體をも傷めたまふべければ、何卒我身の立つまで此家に置きて役使うて下されと、聞くより叔母は聲を揚げて泣出し、かほどまでに親思の一人子をむざ〲坊主にしやうとのお前の心は木か石か、あの心根は不便ではないか、涙は無いかと疊を拍いて責むれど、母親に首を俛れて言葉なし。

二日ばかりも夫婦かはる〲搔口說きて、思留れと迫れども母親は少しも動かず、責めて下さるはお慈悲に似たれど、我子の爲にも私にも慈悲にあらず、此方等さへさほど思召し下さるに、生みの親の心の中はいかばかりぞ。思ふ仔細もあれば此ばかりは留立して下されな。氣弱き千之助なれば、餘り門邊にてとやか

ういはるゝに心塞り、可笑をいひ出しなば彼が一生苦勞の種を蒔くべしとて、決心磐石のごとく動くべき氣色なければ、つひには夫婦も口を閉ぢて、其方が千なれば何も其方まかせと手を退きければ、三日ほど經て母親千之助を横濱へ同道し、亡夫が菩提所なる淨正寺へ入れて、悄然と歸京しけり。

八

千之助淨正寺に入れば法名を日周と呼びて、昨日に變る姿を僞れる人いつしか見て、野田屋の末を當まざるなし。

他人の思ふほどにはあらで千之助は結句今の身上を心安がり、亡父の回向に餘念なく、殊勝に讀經を習ひ師僧には忠實に仕へ、相弟子にやさしく[illegible]るには、今の若年には珍しき性質、僧には似合しき人物、かならず辛抱遂げて行行はたしかに一ケ寺の住職ともなりなむと、師僧に賴もしがらるゝほど、母親は[illegible]もしからず思ふべし。

野田屋の息子が僧となりて淨正寺に在るよし[illegible]て、横濱の[illegible]と聞えし[illegible]の今樣は[illegible]にて、[illegible]とし[illegible]なれば、[illegible]寶女などわざ／＼見に行きて後に心を動かすも多かりければ、誰も彼もその出家姿を見むと、淨正寺の裏手なる藥師へ參詣は間たりにて、餘所ながら垣間見て野田屋の延命院日當生寫と、一人がいひ出せしより此噂高くなりて、千之助の昔姿を知らざる者まで藥師へ參詣して、美僧の御影を拜まむと、門前の賑ひを師僧訝しみて、遽に裏の藥師の流行し始めたるは、何ぞ一際の利益ばしありてか。誰にもあれ、さる物語を聞きたるものはなきか、と尋ねけるに、藥師如來よりは日周といふ活佛の御利益ゆゑに、藥師までが遷業の繁昌とあるに師僧眉を顰め、それこそ日周が修行の大障礙なれ。凡そ出家の姿を下す[illegible]、姿は人間の飾なれば、まづ飾を拂うて塵世の慾念を斷たむとの意なるに、日周は容顏美麗にしてまことに女人などの好きぬる風俗、[illegible]し、道心此に由つて破れむは往古より例ある事なり。彼は今[illegible]の志深くして一[illegible]に佛道に入らむを願ふに似たれど、なほ年少く[illegible]ければ其[illegible]からず、[illegible]けれ[illegible]お花を[illegible]け、[illegible]ばまた[illegible]べき勢あるに、[illegible]の色、[illegible]時は、自[illegible]に[illegible]るべし、[illegible]でもなほ[illegible]るべき事なりとて、日周に仔細を語り、奥まりたる一室に入れて[illegible]は端[illegible]出さゞれば、美僧信心の[illegible]失望して、一週間ばかりにして人足全く絶え、藥師堂には[illegible]日の[illegible]寂び、淨正寺の裏には松風颯々としてまた舊時に還りぬ。

＊　＊　＊

松屋の下女の民は此事を聞付け、お初に語れど露ばかりも信ぜず、芝金杉の叔母樣の家に同居して、私にもし出京する事もあれば、きつと尋ねよとまでいはれしものを、二月も經つか經たぬに此濱へ歸られて淨正寺へ入りたまひしなどゝは、滿更にもあるまじく思ひ懸けざる事なり。ならるゝものに事を缺きて出家などになりたまふ理なく、また此地へ來たまひたるならば葉書一枚遣はしたまふまでもなく、自身に訪ねたまはむは知れたる事なるに、其は大方人違ひといへば、たしかに見[illegible]りといふ女より聞きたれば萬更の空言にもあらじと日頃の末、お民共見に行くに[illegible]りて、淨正寺へ行きし頃は、男女の出盛りの中にて、本堂にて[illegible]を見、日當[illegible]して、[illegible]から、自[illegible]にして、[illegible]の[illegible]に[illegible]け、お[illegible]に[illegible]から[illegible]りて[illegible]して御[illegible]に[illegible]へなされて

と、身振までして見たれりし委細を語れば、お初は眼色を變へて擦寄り〳〵、そして私への御言は何とありしぞ、早く聞かせてと急込めば、お民は當惑して、人中ゆゑつひお話もいたしませず、一寸の御挨拶ばかりにてお別れまをしましたといへば、お初は氣色を損じ、我心も知らで氣の利かぬ、大方千様のお顏に見惚れて物言ふ事も遺失しならむ？　さもなくてはいかに人中なりとて、懇意の間にて物いふ機會のなかるべきやと詰懸れば、お民はいよ〳〵當惑の手を揉み、存じも懸けぬ事をおつしやります。此方様の大事のお方なれば、千様も御主人同様に思うてをりまするに、無躾がましくお顏ばかり見てをる事のなるべきや。また人中とて話してならぬ事はあらじとのお言葉なれど、舊時と違ひし千様の今のお身上、女人は禁物の御出家様なれば、もし物など申懸けて其事お住持の耳にも入らば、千様は私の疎忽ゆゑにお譴責を受け、お身に大事もやと思へばこそ御遠慮をもまをしましたれ。なほまた人中にて私のやうなるお多福に言葉を懸けられむは先様の御迷惑と、何事も承知の上にての所爲。千様彼處に居たまふ事知れたる上は、また何時にても首尾はあらむほどに、その樣に急きたまはずと、私にお委せなされかしと、理ある言葉にお初も其場は納得せしが、それからはお民の顏を見る度に此事をいひ續け、昨夜に書いたる一通の手紙をさしつけ、之を今日にも、屆けてとせがまるゝを、明日は〳〵と切賺けたれど、つひには主命を聞かぬとて一方ならず腹立て、何いひ懸けても返事せぬまでにあたりて、用事もわざと外の下女に吩咐けて、お民を寄附けざるをやう〳〵詫びて機嫌を回復し、他出の用事を幸ひに迂廻して淨正寺に到れば、此一日前に活佛の一條師僧に知れて、日周は閉居の折からなれば、若き女の尋來りたるに、弟子共は目を峙てゝ扨こそと袂を牽合ひ、けんもほろゝの挨拶にて會はさむともせざりければ、手紙も其の人の手には落ちずして、飜然お身の難儀の種と、太田町の松屋より用事ありて、民といふものお使に參りしと傳へたまへと言遺きて出でしが、面會もせず手紙も屆けずして、歸宅りたりなどゝいはゞ、お嬢様の道理解らず、無理を言懸け、打腹立ちたまひて、また不興を蒙る事と心を傷めながら歸れば、案のごとく理も非も分らず腹立て、其手紙を受取るが否や、寸斷々に引裂き、お前は頼まぬ、明日にも自身に行きてきつと逢うて來る。此後は何用もお前には頼まぬと、つと立つて部屋を出けるに、お民も爲方なくて女部屋へ退きぬ。お初は自身行くに決心したれど、家を出づべき方法なきに苦しみ、逸る心を抑へて一日二日と過ぐるほど、なほ飛立つ思のみして、好智慧も出でざるに、獨思案に暮るゝを見てお民は其氣の晁り時と、一倡お初に、今日は野毛山の招魂祭なれば午後からお暇を乞うて外出なされまし。私がお伴いたしまして淨正寺へ御案内いたしませうと勸むれば、用は頼まぬといひし口上も忘れてお初は機嫌好く、何處へ行くとて私一人にては出難ければ、其方が同伴といへば母様も安心して御承知なさるゝに相違なしと、母に尋ぬれば許可が出て、野毛山は餘所目にも見ず淨正寺へ急ぎ、門外にお初を待たせてお民一人玄關へ行けば、此前二三人見えし弟子僧は誰も見えず、火鉢の側なる机の下には蜜柑皮を取散らし、火も灰になりたるは、前より長く此處に人の居らざりし樣子なり。

女人の聲にて取次を頼み、よしなき邪魔の入らむは口惜し。寺男などもや居らば千之助の事を尋ねむと、徐と裏手へ廻れば、垣根に小さき山茶花を栽うる四家の後窓、どうやら千様

と、なほ忍寄りて斜に横顔を覗へば千様！と、力を籠めたる忍聲に日周驚きて顧視き、お民殿。千様：　お一人か。玄關に誰も居らざりしかと悉皆まで聞かず、飛ぶが如くに引還してお初を伴來り、四邊へ氣兼してきよと〳〵する日周の傍へ推遣れば、千様！　といひさま縋着かれて日周も胸を躍かせ、お初様無事か。お前も御無事でと顏を見合ふ眼に涙ぞ浮びける。日周お初の手を袂の蔭に握りながら、お民殿玄關に誰も居らざりしか。誰も見えざりしか何時人の來らむも計り難ければ、表へ行て私が番してをりますほどに、ゆるりとお話をなされましと外せば、後には人目の關なく、お初はなほ寄添ひて、いかなる仔細ありてか知らねど、淺ましき此姿は何事ぞ。いかに思うても焦れても、もはや女房にはなられぬお前の身上、ようも思切つて情なき事して下されたと、怨言を聞きて日周涙を拭ひ、我とても忘るゝ暇なく焦るれば、此方を女房に持ちたきは山々なれど、親にも見放されたる意氣地なし、世に立ちて活計の才氣なさに出家して、甘い物も食はず綺麗なる衣も着ず、日々に香花の世話ばかりして、末は山寺へなりと引籠り、夜明の鐘撞鳴して、戀知らずにて一生を果さむ身を、不便と思うて下されと泣けば、お初は顏も得上げず咽び入りて、お前はいふやうもなき不實な男、私が思ふ半分も思ふならば、誰が何といふとも出家などには得成りたまふまじきに、私を可愛々々とは口頭ばかりにて、女房に持ちたくも何ともなければこそ斯した身になりたれ。眞實私が可愛くて、女房にせむとの心ならば、さあ昔時の姿に還つて下され、えゝ還られぬのは此身が可愛ないゆゑと、日周が指を兩手に握緊めて身を顫はせば、一度佛門に入りたるからは所詮還俗はなりがたし。何事もこれまでの縁と諦め、此方も今年は十七、早く良家へ嫁入して、兩親に安心さすが孝行なり。不肯々々と泣入れば、此間は離別までも別れて後までも、早く身を立て一軒の主人となりて此方を迎へ、年月の思を霽さむと、其事ばかり夢に見てまで樂みし效もなく、不圖せし事より家出の心起りて、此姿となりたる上は夫婦とならむ希望なし。幸ひに枕を替せし事なければなほ思切る瀬もあるべし。此方を飽くの厭ふのといふにあらず、今も語りし事實なれば、不實と我身を恨むで下さるな。かゝる姿となりてもなほ心を變へず。この樣にわざ〳〵尋ねて怨言までいうて下さる心中はなか〳〵仇には思はず。餘りの歡喜に胸塞がりて禮をいふべき言葉も出ねど、歡涙がこのやうにと袖に拭うて顏を背くれば、お初は聲を絞り出して、夫婦とならるゝものならばなられぬとて濟むものを、良家へ嫁入せよとは誰にいはるゝ言ぞ、外に嫁入したくばお前に心配は懸けませぬ。幼稚より良人と思ひこみたるお前に添へずば、私は他人の女房にはなりませぬ、一生寡婦暮しの覺悟にて、お前が山寺へ行かるゝなら、私も其隣に家を持つて、何程嫌はれても此方からは少しも嫌はずお側は離れぬ覺悟と、思入りたる言葉に日周も持餘して、今はいかに說諭すとも聞入れじと、離るの離れぬのといふ事はわざといはずして、まだ〳〵話したき事は數あれど、此處は戸外にてゆるりと話し難く、家へ入れたけれど次間に師僧の居たまへば其も成らず。四五日內に所用ありて、他出の次手あれば、此方の家へ行きて委細を語るべし。人に見咎められなば大事に及ばむほどに、今の內に早く歸りたまへと諭せば、近日は我家へ來むといふを恃みにして、名殘惜氣に日周の顏を眺め、その栽ゑたりし山茶花を一輪折らせて髮へ挿し、手を牽かれて表まで送られ、なほ離れがたなくや日周の手を放さぬをお民に引分けられて、惜々と歸り行く後影を、じっと

見入れる日周が後に、小坊主が密告けるよ。

九

出家にして浮世に希望なき身を省み、戀は心底に焚えながら氣强くお初を還せしものゝ、顏を見ては人の物にさるゝも惜く、心を聞けば其情も棄てがたさに、愛着の羈絆太りて日周が了簡昨日に變り、一思に還俗してのけ、彼を妻に持たむの決心もなけれど振棄て難く、唯わけもなくもだ〳〵と戀しさに思亂れ、捉られし手頭になほ痒所あるが如く、兎角に忘れかねて、此方より今一度の逢瀬を明日にもと望ましき心逸りて矢も楯もたまらねば、なほの事お初は、民を對手に首尾の折の物語ばかりして、嬉しかりし事は繰返し、無情かりし事は繰返し、また逢はむ事を只管賴めど、繁々の外出は露顯の端緒、今少時日を隔きて好機會を見合せ、請合うてお逢はせ申すべしとて早急の相談に乘らねば、お初が胸には逢ひたさ見たさの遣る瀨なさに、家内のものゝ目を忍びて庭口から逸走し、淨正寺へ單身行きて民がせし通りに玄關へ行けば、障子を立切りて中に書讀む聲は幼稚なり。樣子を氣取られで取次には好きものと、小聲に案内すれば應と障子を開けたるは、日周に口留の大福買はせし小坊主なり。日周樣内にかと問へば、一時頃所用ありて出られ、今にも還らるべしと答ふるに、何處へ行かれたるにやと問へど其は知らずといふ。人目を憚る身の歸來を待つに待たれず、さればとてやう〳〵の思にて馳けて來りしものを、此儘に歸らむも無念と猶豫しが、ともかくも會うて行かずば胸の痞治まらず、此處にて待つは見る目もうるさし、門外にてと心を定めて門を出でしが、此間の話に四五日中には我方を尋ねむとの事なりしが、もしや我家へと思へば其も心許なく、急足に引還す途にてはたと出會ひぬ。單身にて何處へと問はれ、今お寺へ尋ねしにお他出と聞き、先日のお言葉もあれば私の家へかとも思うて、お待ちまをさで還る所といへば、日周合點行かぬ顏して、お民殿をも伴れず只一人とはつひになき事。逢ひたさに窃と馳けて來ました。話したい事あれば何處へなりとお前の識つた家へ伴れて行て下されといふに、日周もまたとあるまじき首尾を見遁さむも口惜く、胸には積る話もあり、大旱に雨を望むばかりに戀しかりし顏もゆるりと見たさに、二人が少時の隱家もがなと思案すれど、世間狹き男なれば、女人を伴込むべき宿もなく、若き男女の連立つは、夫婦にしても人目に着り易きに、法衣着て頭顱の圓き身は、いとゞ目立ち、此處は往來稀なる所なれど、なほ來る人行く人に顧視らるゝ度に油汗流れて長くは立話もならず。此處ぞと思當てゝ行く家もなけれど、さればとて別れがたさにお初を伴れて、道路の兩側に立分れ、相互に知らぬ顏して人目を避けて行くに、かねて話說に聞きし怪しげなる小料理屋など目には入れど、勝手知らねば可恐しくて得入らず。かくては何處にも行所なし、思切つて入らむにも、日周靑道心の身の懷中に五十錢の用意もなければ、此は當惑して耻かしながらお初に語れば、帶の間より縮珍の可愛らしき紙入を出して日周の袂へ推入れ、其裏に三圓餘あれば如樣にしてといふにやゝ心丈夫になりて、さらば今過ぎし料理屋にせむと立戻りて、門口から恐る〳〵家内を覗へば、中に女中の居るは耻かしとお初が足の進まざるに、日周も亦臆せる心に强ひては勸めずして此家を去り、なまじひに茶屋小屋は曠がましければ、彼處の小路に行燈の見ゆる汁粉屋は。お初肯かず。此二つ先の横町に小綺麗なる蕎麥屋ありて上流客も行き、離座敷もあり、今頃は客もなかるべきにその蕎麥屋はといへば、外に行く所なければ其家にても善し

からずとの言葉に、其家と決めて濱町の曲角にて端なく師僧に會へば、日周面目を失ひて赫と顔を紅めながら默然に一禮すれば、師僧お初を尻眼に懸けて、日周今歸宅か、同道すべしとあるに否とはいへず、お初に目配して師僧の跡に跟いて行くを、悄然と佇みてお初は呆れて顔を見護りけり。

師僧日周を伴還れば黄昏に近し。忠實なる老僧に何やら囁きて日周を渡し、何氣なく居室へ入りぬ。師の譴責にや遭はむ！　老師の折檻にや遭はむ！と氣もそゞろに身をちゞめて机の前に坐り、經を披けど字は眼に入らずして其事のみ可恐しく〳〵、可恐しき中にお初の眞實はしみ〳〵と嬉しく、心盡してやう〳〵逢ひながら本意なかりし離別をさぞやと、物足らざる我思に比べて女子の心を察し、明日にもまた首尾を偸まむ氣のみ躍るばかり逆れば、萬慮之が爲に消えて胸は一面戀火に焚え、切なきにあらず苦しきにあらず、切なきにも似、苦しきにも似て、身も世もあらず、悶えけるが、九時頃に老僧來りて師僧が召さるゝと傳へぬ。

罪は今日の事！　尋常の譴責または折檻ならばいかやうにも辛抱すべし、唯可恐しきは破戒の科によりて此寺を放逐せむなどゝ申渡されなば、此寺より外に身の置所なしとて入れられたる寺を出されて、おめ〳〵と還るべき家なく、あの氣の母様なればいよ〳〵愛想盡かされて、親子の縁切るなどゝいはれむには死ぬより外に道なしと、心細く覺えて顔色土のごとく、おど〳〵して師僧の面前に危坐れば、温和なる面色は常に異る所なく、物柔に出家たるべきものゝ心得を諭して、今日伴れし女子はいかなる俗縁のものか知らず、行状堅固なる其方なれば女犯の不品行などあるべしとは假初にも疑ふにはあらねど、出家の身にしては殊に衆の思はく〳〵を畏れて、若き女子には近寄るまじき者ぞ。此港は土地狹く〳〵して寺の數もあらざる上、其方が太田町の野田屋の子息なる事は此處に誰知らざるものもなければ、淫猥なる事あらざるにもせよ、女人との同道が人目に入らば、在俗の昔時は堅氣なりし千之助も、出家となりて却然あの身持と、後指を指されむは其方一人が名折のみにあらず、亡くなられし親父様の恥辱、東京の母御の苦勞、また其方を預る師僧の我が世間へ對する不面目なれば、愚鈍なる其方にあらねば、此道理を辨へて向後は其身を愼みくれよ。古參の弟子はあのやうにあれど、我は特別其方が行末に希望を繫け、人先に一ケ寺の住職に取立てゝ、母御の喜ばるゝ顔も見たしと、日夜思慮くる實意を酌み、専念に修行して早く我力にもなれかしと、情を含みて理を分けたる意見に、日周は頭を上げず、不心得の段々を詫びて退れば、明日よりは何となく老僧の監督嚴しく、一寸の出入にも目を離さず、我へ下命るべしと思はしき用事まで、他出とあれば他のものが勤め、言はず語らずの禁足なり。

押籠は二週日條に及びて免りざれば、さなくも氣は結ぼれて心は腐るものなるに、先夜の師僧の意見も其場は實に徹へけれど、更に戀は心を責めて〳〵晝夜の差別なし。

大阪に在りし頃は一年も遇はざりしに、起つても居てもかゝる辛抱ならざるほどにはなかりしものを、此寺へ來てわづか二度の首尾より慾火熾に炎を立てゝ情思を炙ること太甚しく〳〵、他人は眠るに眠られず、机に倚りてお初の寫眞を眺め、それも憂くなりて手枕に仆れ、現に思ふ事とてはお初の可愛さ、この戀の苦惱さ、其顔の見たさ、窮命の身の煩悶さ、戀の一字が、百態に形を變へて日周の眼前に現れ、思に纏まり、玩弄物にされて獨り悶え苦しみしが、ふら〳〵と心浮きて起上り、卷紙

を延べ筆を走らせておはつへの手紙、屆けむ心にもあらで此頃の胸の切なさを我知らず書いて見れば、平素の運筆にも似ず、いさゝかの案文もせずして、長さ六尺ばかりの卷紙に端の端まで書詰めても、なほいひ度き事遺りけるに、かゝる事も戀に惱みてやる瀨なき折からの心ゆかしうなりておもしろさに、手文庫の裏なる半紙を出して後を書續くれば、卷きたる絲を繰る如くする〳〵と、筆の留度なく半帖ばかりも書いて卷紙と倶に一通に封じ、印紙だに貼らば屆かむばかりに封書して、一時の戲事ながら折角この樣に出來たるものを、引裂かむも惜く覺えて肌に添へ、其上より堅く腹卷して臥戶へ入りしは、いかなる心か知らねども戀は人を愚癡にするものなりけり。

弟子僧の某晨起にて、其朝も例のごとく第一に起出でけるに、日周は夜熱に夜衣を踏脫き腰より下へわづかに懸けて、寐衣の胸あらはに眠れるに、腹卷の下より書狀の端の出でたるを認めて、寐るまでも肌に着くるはいかに大事の文かと、祕す物は見たさに徐と引出せば、お初へ宛てたる狀なり。扨はかね〴〵聞及ぶ情婦の一條、露顯してかく窮命に遭ひながら、なほ思切り難くてかく窃に文通するものならむ。告口する奴等に見咎められなば、重ねての事となく此度は不便なる目に遭ふべし、老少僧俗に論なく、人と生れては誰か戀に繫りては之に泥まざるべき、一命を捨つるものだにあるものを、と、やさしくも哀憐を催し、舊のごとく腹卷の中へ人目に懸らざるやうに推籠みおかむとする所へ、監督の老僧來合せ、手に持てるは何ぞと嚴しく糺され、陳ずるよしなくて日周が懷中より獲たりとかの書狀を出せば、老僧請取りて、此事人に語るなと緘口して師僧の部屋へ持行さぬ。

驚破、一大事！ 我より起らむ日周が難義と、某は頻に氣を揉みけれど回復のつくべきにあらねば深く裹みて日周にも語らずして、彼がいよ〳〵といふ瀨戶際には、其身を爲くじりても謝罪を入れて、見事此過失を償はむと心を定めぬ。

日周目覺まして腹卷の中を探れど、昨夜たしかに入れし手紙なければ、周章惑ひて夜衣を振ひ、蒲團を覆し、血眼になりて穿鑿する樣は、某傍に見てたまらぬほど氣毒なれど、仔細を打明けて今我過失を詫びなば、心狹き男なれば只管恨まれむも辛しと、此躰を見るが可厭に戶外へ出でけるに、さりとも知らねば日周は涙ぐみて一生懸命に、隣の床の下まで探れども見當らざれば、胸を明けてゐたりしといひ、腹卷の緩みたるといひ、扨は晨起の老僧巡視など來りて持行せたりしならむと想へば、戲事に書きしものなれど封じて番地から宛名まで記したれば、辯解は立ずして此度は重き罰を食ひ、いよ〳〵放逐に極まりたり。あれまでに言はれし師僧に對はさむ顏もなければ、今の間に此處を遁げたけれど、母親の許へは還り難し。されどもやさしき叔母樣夫婦に賴まば兎も角もならむと、お初より先頃贈りたる紙入を懷中に捻込み、井戶端へ盥嗽に行く風して拔出さむとせしに、かの某認めて走來り、此方は血相變へて何處へ行かるゝか？ 仔細はいへねど不始末ありて此寺に居られぬ身なれば、此手を放してと百搔を放さず、不始末とは手紙の事かと星を刺されて日周呼吸の止るばかり驚き、いかにして其を知りたまふぞとあるに、今は裹まじと今朝の事詳細に語れば、師僧の手へ其文渡りし事と極まるほど可恐しく、此上はなほ以て一時も留り難ければ、人目に懸らぬ間に放して遁したまへと焦るを、これ皆わが落度なれば罪は我身に被て、此方には科なしに濟さむ程に、心の餘りに小さきも損なり。何事も我に委せて知ら

ぬ顔したまへといへど、日周なか〳〵背かず、此方が告口せしといふにあらず、我不用心からの災難なれば、露ほども罪なき此方に迷惑を懸け、おのれはぬけ〳〵として在らるべき。とても戀に傷りたる心の天晴なる出家には成遂げまじき日周、唯このまゝに見免したまへ。なまじひに不便を懸けたまひて、辯護立して此方が潔白の身に傷着け、出世の障礙せむは忍びざる所なり。慈悲に此處をはなしてといふを兎も角も〳〵。

＋

松屋にては娘の行方知れざるに、家内の騒動は一方ならず、誰は東へ行け、彼は西へ走れと夫婦は半狂亂にて、奥と店との往來に目眩しきばかり、大晦日の繁忙も之には過ぎまじく見えけり。

民は何事なれば其方が落度といはぬばかりに夫婦に責まれ、心の中には大方それと行先も略ぼ着きたれど、千之助と手に手を取りてなどいふほどの事もあるまじく、はや日暮なれば今にも歸來るべしとお初が憂目を見むことのいとしさに、さりとは知りながら包みていはねば、夫婦の心配を見るに見かねて、私も心當りを探して參るべしと淨正寺へ急げば、前面より物思はしげに首を俛れて來るはお初なり。

やれお孃樣、一言なしにお一人にてまた淨正寺へでござりますか、ちとお嗜みなされまし。お家は此方樣の見えぬにて割れるほどの騒動と手を取れば、お初袂にて目を拭ひ、民や口惜い聞いてたもれといふを、其所ではござりませぬ、お兩親の御心配はどれほどゝお思召しますか、お話は後にてゆるりと拜聽りますほどに、早くお歸りなされまし。御一所に家内へ入りましては、お出懸先を私が存じてお伴れ申せしやうにて、家内の手前よろしからねば、一足先へ裏口からお歸りなされまし。私は途にてお目に懸らず、尋ね飽みしつもりにて少し後から歸るべしといへば、お父樣もお母樣もお腹立か。否お立腹ではござりませぬゆゑ、早くお顔を見せて御安心させてお上げなさいましと、民は娘の後より護衛をしながら家近く來りしが、不圖心着きてはた〳〵と追懸け、もしお孃樣、一人して何處へ行きしかと責められたまはゞ、何と御返答なされますか？　只謝罪りて何ともいはぬ覺悟。否、おつしやらでは濟みませぬ。されば何というてよいやら敎へてといふに、民も當惑してない智慧を振ひ、別に好い思案もなければ、何とやら頭腦重く、氣鬱して堪へがたかりしゆゑ、庭からぶら〳〵と戸外に出て淨正寺邊を散歩に參りました。お斷り申さで出懸けましたは私の不調法とお謝罪をなされなば、それは嘘ならむともおつしやるまじ？　合點でござりますか。その通りにいうてお詫をせむと一足先へ還れば、お孃樣のお歸宅となほ煮えかへる騒動に、お初は我ゆゑにかばかりとは思ひ懸けざりければ、只管驚きて呆れ顔にて家内を見廻す所へ、兩親來りて座敷へ伴ひ行きけり。

母親火鉢の前面にお初を坐らせ、おづ〳〵身を小め冷えたる手だに遠慮して、火へは翳さず袖口へ引籠めて胸に置く娘の姿を、言分ありげにじつと觀て、一言もなく單身にて今頃まで何處を步行てゐたりしぞ？　女子の身にあるまじき事と、心配懸けし恨と、歸り來れる嬉しさとに、胸轟けば聲顫ひ、涙をも交ぜての言葉に面目なく、さしうつむきし面をわづかに擡げ、欺かむ事の仔細なしと思ひながら、眞實を告げなば譴責れむと可憐しく、民に敎へられしまゝを語れば、親は子を見ること年齢よりは幼稚き人性とて、戀に浮かるゝ身とは知らず、氣分惡くばなぜその樣にいうて醫者に懸らむと

はせで、夕暮までもそゞろ歩行して兩親によしなき苦勞を懸けしぞ、此後を愼むべしとばかりにて、父親の小言もいやらしき嫌疑を含まず、女子の身の輕事なる事を叱られて事濟みけり。

されど二度とかゝる事のなからむ爲、母親の用心深くなりて、侍婢の民にも耳打ありければ、擧動に心を用ゐたまはずば一條露顯の緒端と、民が注意をお初はさまでに思はざるは、兩親の心を知らずしてなほ千之助を許嫁同樣に思ひなせば、此事露はれても不義淫行の責を受けざる氣階ありて、なほも民を口說きて密に文通の所望焚立つごとし。

河豚に命を殞すは其味を覺えたる人なるべし。曾て食はざれば食はでも濟むべきものを、一度は命に別條なく、その味を忘れかねて死を求むる例あり。

十六のお初一歲加れば十七とて去年のお初にあらず。苔のふくるゝ時は吹く風も仇には受けずして、戀に染む頃、其味を知らざればともあれ、千之助を今年思ふは去年の思ふにあらで、色も濃く光澤も出づるにおもしろ味を覺え、人形にも衣裳にも芝居にも替へ難きは唯是なり。逢ふ度に思募りて、辛き事は、辛ゝ覺え、嬉しき事も亦まことに嬉しく覺ゆるほど、まことに河豚の食ひたき一念熾にして、二十四時、その次の二十四時、その又次の二十四時も逢ふ事のみ思づめにして、其慾を充さむとばかり心を役へど、其慾の充ざるに失望して、自暴て鬱していつとなく面瘠せ、起居重く言詞少く、精神鈍れるがごとくなりぬ。

お民はいぢらしがりて慰めむにも、其事をいはざれば愁眉の開く事なければ、思を募らさむは殺生なりと曉りながら、眼前喜ばるゝ顏を見る事の心快さに牽かされ、間が隙がな其事を語りて機嫌を取りけるが、やう〳〵思餘りて是非に今一度逢はせてと、拜まぬばかりに賴まるゝを背かぬも心苦しけれど、とても添はれぬ惡緣なれば、なまじひに逢はせて大事の起らむを氣遣ひ――其は後の事さしあたりては外出禁制の折から、何に託しても此家を出づべき方法なければ、好機會を見合せてと遁辭も四度五度と重なれば、お初も堪へかねて迫るに逃場なく、主人夫婦へは濟まざる義理と承知の上にて、文の使を引承け、他出の用事ありける時淨正寺へ持行きしが、お初よりの物語にて師僧に一義の見咎められたりと知れば、女子も罪ある方よりの使者といふに自ら恐怖を懷き、世間晴れて玄關に立つべき氣力なく、まづ藥師へ參詣して裏手の樣子を覗ひけるに、取着かむ蔓もなければうろ〳〵して、去りも遣らざるを老僧認めて、此寺に御用のお方かと尋ねられ、邪氣のなさゝうなる和尙と思へば、お民は日周が千之助といひて、太田町に居りし折の隣家なる松屋の召使なるが、主人の傳言せむ爲に來りたれど、女子なれば人の思はくをかねて取次を賴み兼たる趣を語れば、老僧はこれを日周が破戒の種の綱片と知らず、彼は此頃少しく落度ありて禁足同樣の身上なれば、宿許よりの人の外には誰にも面會は許さゞる樣師僧の申渡もあれば、用事を此方まで聞かせたまはゞ傳へて進ずべしとありけるに、扨は効なしと諦め、直々に傳へよと主人の吩咐なれば、歸りて一應此よしを傳へ、指圖を受けて又參るべしと、さりげなく答へて還り、しか〳〵なれば當分は逢ふ事は扨置き、文の往來も覺束なしといへば、お初はまた素戾りの文を口惜氣に引裂きて、何時を逢瀨といふ顏に見かぬる悲愴の色顯るゝに、他人事とは思はれず、民もいふやうなき不快を感じぬ。

心底焦れてはかゝるものにや、床間には例の人形を飾り、萎れたる山茶花を花立に挿して、肌身には、千之助の寫眞を放さず、日に幾度と無く取出でゝは眺め、其間は多く柱に凭れて

目を瞑れど眠るにあらず、唯病めるがごとく思ひ沈む風情に、母親氣遣ひて病氣もやと問へど、氣分は惡からずとて醫者をきらふに强ひてもといはざりしが、もし病ならば日増に病勢募るごとき樣子に青春にはある例の氣鬱ならむか、其にしても此儘に捨置かば、つひには病氣を引起しかねまじき容體に驚きて、父親に告ぐれば此も斜ならず驚き、當人醫藥を嫌ふとも等閑にはしがたしと、醫者を招きて診察を乞ひけるに、此處と指して惡き所なし。氣鬱なれば藥劑よりは湯治などこそといふに、母親と民が附添うて卽日箱根塔澤へ赴きぬ。——（草津の湯でも）と聞きしが。

十一

塔ケ峰に狂花の梅あり、それ見にとお初は民を伴れて、四邊に人なしとてまた千之助の噂、浮かぬ顏にも此時ばかり喜色の見ゆるも憎し。其樣に思召したればとて、今は日周樣といふ他家のお身上、とても無き緣とふっつり思ひ切り、無効なる戀ゆゑの御病氣を早く治して御兩親樣のお心をお休めなされませと、民のいふを聞けば道理と思はざるにあらねど、理はなしに唯千樣の戀しくて、忘れむとするも忘られず、我ともなく思ひ續けて氣の鬱ぐが積りての疾病、かほどまでもと推量してたもるならば、お前のいふ言は道理のやうな無理なり。誰が何といはうとも千樣の事ばかりは思切り難し。惡緣とやらにてもし添ふことのならずば添はでも苦しからじ。思ひ續けてこのまゝに病重り、死ぬ覺悟と、嘘ならぬお初の口吻に民は内心驚きけれど、言諍ふも徒なしと說話を外らせど、お初は千之助の事、我思の事ならねば挨拶だにせざるばかりなれば、氣に向くやうに口を合せて其事語し、口頭にちら〳〵と見ゆる心底は、まさしく一圖に千之助を思詰めて、夫婦とならでは措くまじき氣色なり。

お初梅花を一輪摘みて、歸咲といふ名も羨まし。我も早く横濱へ歸りて千樣のといへばお民が、早く歸りたく思召さば、その浮かぬ顏をいつもの御機嫌にお復しあそばさではといふ。この氣分は千樣と……ならでは治し難し。

今日にて半月餘りにもなりぬれば、此山中の飽き〳〵して……。

木枯の吹くに湯治の寒氣を感じ、もはや還らむと山の半腹まで下りけるに、下行く若僧を認めて、知らざる人ながら床しく胸轟き、瞳を据ゑて見詰るを民は心着きながら、何を御覽なされますと問へば、僧の後姿を指して民の顏を見れど、なほ悟らざる風して、あれが何でございますと推返せば、あのやうに千樣が尋ねて來て下さらばと言止して、鬱ぐを紛らせむと不意に手を執り、そんなら追蹤けて千樣のお顏をと急立ゝ驅出せば、お初は木根に躓きて仆れたるに驚き、御免遊ばせと引起し、膝の泥を拂ひ、手掌の土を拭きて、何處ぞにお怪我はといふにまくり手して見れば、臂を磨剝き血に染むを、民は頻りに詫びながら袂紙を撰りて二人佇む所へ、湯治客の歸家と見えて、人力車四輛列、勢込むで下り來るを何心もなく見れば、眞先はお孃樣裝の十三四なる可愛らしき娘、其次は三十恰好の奧樣とも見ゆる人品、其次は二十三四の食客書生、革包持と同車して、最後は仲働の年增。其は思も懸けぬ千之助の母親なり。お初は我を忘れて姨母樣と、走寄れば、其人も驚きて車を停めぬ。お久しやお初樣、お民殿も御一所か、逢ひますも羞かはしき此風體、此方樣の中好なりし千もと淚を飮み、坊樣にしてしまひました。お父樣もお母樣もお變りなうお出なさるゝか、よろしく傳へて下され。また重ねてと車を進むとすれば、お初は走懸つて其袖に取着き　姨母樣少し待つ

て、聞きたい事が澤山ある。聞いては上げたけれど、私も今は奉公の身、奥様は先へ行かれたに、私の用事に暇入らせてはお首尾が悪し。今日は放して。放さぬ〳〵。民お前もお願ひ申してくれぬか。何やらお初様の御用とあれまでにおつしやる事なれば、お手間は取らせませぬほどに、少時待つて上げて下さりませと、民は車の前途に塞がり、お初は緊と袂を捉へて放さざれば、千之助の母も所爲方なさに車を下りて、此處にて談話もなり難ければと、近きあたりの掛茶屋に入りて、扨其お話はと尋ねられ、あらたまりてはお初も言出しかねたるを、民が會得みて、御母様御一所にて先月末より此處へ湯治に參られました、その御病氣はお初様の命懸けて千様をお慕ひなさるゝ餘と聞けば、千之助の母は子ゆゑの涙脆く、なるほど幼少より朝夕睦まじき遊戯朋友、似合はしきも縁と、やがては夫婦の口約束まではせしものゝ、不慮の災難より知らるゝ通り野田屋の瓦解、雨を凌がむ軒もなき假乞食の身となりて、千の嫁に此方様をくれなどゝは、なか〳〵口幅たくていひ難し。よしやうたりとて、さる方へ誰の親が大事の子をくるゝものぞ。其も千が一人前の魂ある男ならば、また野田屋の家を興さむ目的のなきにもあらじ。其上にて嫁にともいふならば、此方様も好い、望む縁なり、親御として萬更否とはいふまじけれど、何をいふにもあの運の悄なし、我々の讒訴を面白うていふではなけれど、とても〳〵此世智辛い世中に一人前の働のなる根性ならねば、可哀けれども子を捨つる藪を探して淨正寺へ入れ、一生經讀ませて果てさする了簡。あのやうなる不束者にても幼稚馴染なればこそ、其様にいとしがつて下さる此方様の心がいとしうて、かはゆうて、嬉しうて、これ此様に涙が溢れます。千に代つて此母がお禮を、忝うござりますと、お初の手を執つて泣出せば、お初はしく〳〵啜上げて、例令どれほど慕うても焦れても、千様の女房にはなれませぬか。とても添はぬ事ならば、彼は死にたるものと諦めて何處ぞよい所へ嫁入して、親御に安心さすが孝行ぞや。千ゆゑ妾は老の坂に懸りての苦勞、此齢して奉公とは何事ぞ。子に不孝されたる親心をよく知れば、此方様もよしなきものを戀慕立して、それゆゑ親御に苦勞懸けらるゝが、身につまされてお傷はしければ、此方様には孝行を勸めまする。此處を理解けてふつつり思切つて下されよ。あのやうに人並ならぬ千之助も、可愛や戀は切なきかして、暮々も此方様の事を遺惜げにいうて發足ました。發足とは？　成程此方様は知らぬ事。此五日に信州の山奥なる、靈岳院といふお寺へ學問修行に遣られて、五年の難行積る効の見えなば、其邊の田舍寺のお住持になられむとの事と。始めて聞きてお初の仰天！　そのまゝ正體なしに泣崩折れ、賺しても宥めても聞分なく、涙のあるほどを此處に盡して、其後はいかにせしやらむ？

この娘今に寡居のいたづら臥、二十歳の春の夜、月にも花にも憧れて、寐ぬに曙、かの山僧も不便や鐘撞く心の中は？

（二十三年七月）

やまと昭君

やまと昭君自序

思はぬ人に思はれて、破鏡かされて照らさず。ちる花のまたとは枝に歸らぬ娘。一葉がはかなき身をむかしによそへつゝ、扨「やまと昭君」と題す。此物語は原「あらびあん ないと」に見えたる、"THE HUSBAND AND THE PARROT.（夫と鸚鵡）の作意を飜案せしに、稿成ての後、馬琴翁が盆石皿山記を見れば、是とよくも似たる[illegible]色あり。先人すでにかく物したまへるからは、毛延壽が委縮より、なほこれの醜かるべし。[illegible]さむも羞かはしと、古篋の底に陰れ、滿面の胡沙に淺ましく衰へ果、うき年月を過しける。このほど手細工の「京人形」その上いまだ乾かざるに、艷なるものはなきやと問はれ、なしといはん事の口惜く、これをやうやう瞞して世に出さしむ。漢宮のむかし風俗をその儘、時世粧をも辨へず。顏は世に好ぶる色も失てたれば、なかなか人と寵を爭はむとにはあらで、たゞなつかしの人々に逢ふ事の嬉しさよ。

ことし七夕再校　紅葉山人

一の卷　花にもまさる一葉

戀慕。これの影となりて離れぬものは疑念なり。戀慕が募れば募る疑念。つまりは（戀ふ）とは（思ふ）にして、（疑ふ）とは（思ひ過す）に外ならざれば、戀のさむる曉には、疑念の雲はなきに極まれり。いよいよこれが高じて、嫉妬となるときは恐ろしき事多し。一時鳴るに歸らぬ夫。今頃は誰さす盃に醉うて、誰様枕にうつゝをぬかしてかと……此時はまだ疑念ばかりなれど、一時過ぎてやうやう玄關に轟く車の音　わざと出迎へず。ほろ醉の旦那は千鳥足をふみしめ、しだらなき帶を解かけて「寢衣を……」といふ顏をジロリ。少し鼻をつまらせて「どなたかに着せてお貰ひ遊ばしまし」此時ははや嫉妬。いかにも（はしたなき）やうなれど、其身になりては、これはかりにて言足るべきにあらず。（やき持）とたゞ一口にいひ消す奴は死で見よ——犬に喰はれてしまふ。身に替て夫を思へばなれ。思はざれば無孔笛に音色あるはずなし。されば加減したる嫉妬は、夫婦の中にはあるべき事にして、露ほどもこの心なき女は、心底知れずして恐ろしとは、兼好でもいひのこせしか、戀知らぬものゝ句にあらず……なれどこれも過てはうるさく——いやらしく、七去の憲則に明文ありて婦人に此を誡むるはよけれど、男の修身には打捨て、構はざるこそ不審なれ。嫉妬ゆゑに一命に及びし[illegible]の例は、昔より數の語草ありて珍らしからねど、男のこれゆゑに大事を引起せしを見れば、謹まむこと、あながち婦人のみには限るべからず。

某の藩に卯木平馬とて譜代の家老職、主君の御覺も目出たき武士。今年五十の坂に近く、雪之丞行年十八歲の子息を持ながら、幾歲になりても已ぬは是、家中に隱れなき好色者。足輕風情の女房娘、其は論なし。女といふ女は、垣間見ずといふことなければ、一藩擧って武藏殿と仇名し、これが今の願ひは、生涯の命から二ツ目の妻を、病氣に横取され、淋しき閨の一ツ枕。物足ぬ心深く、美色あらば妾にもと思へど、流石に我子の前をかね、家中に後妻を求

むれど、我娘をと名乘出るものなし。爰に同じ藩士の娘に（一葉）とて國を傾くる艶顔。ことし十九の花盛り。大振袖の八口を、紫の組にて留めたる異樣の物數寄。其いはれを聞けば――日に何度といふ數を知らず、人に引かるゝ袖のちぎれぬためとてかく。また或時はいきぬけ底なしの、袂をつけし衣をきたりしは、附文のこれに溜らぬやうにとは……うそらしけれども、この藩士の物語。半分に聞ても娘の容色思ひやるべし。　其頃士分の娘が嗜の業、何をこれといふ不足なく、取わけ琴は八橋撿校の祕曲を傳へて、花の宴月の宴、よし風が吹いても、雲が出ても、此爪音なくてはとの難有き御詞。手跡は瀧本の流をくみて、ちらし書の麗はしさ。書捨の反古さへ手にいれる若侍は、此を元結にして、ゆかしがりける、姿を聞くものは自分の戀に亂れ、おき〳〵に拜し參らせては（君の御馬前）まで預り物の一命を、用捨もなくわが物にして、そもじ樣の庭草の露にも消なむと、無分別に惱ます心、幾個とも數へ難し。この眉目にしてしかも、性質までやさしければ、柳の枝に梅の香がする花櫻と、御臺樣ひとしほ御目をかけたまひ、十四から御殿の奉公。身柄はさまでにあらねど、近衆出頭の御寵愛。それて朋輩の妬忌をうけぬとは、何樣かの御化身にや。闇で見たらば御光が見えさうなもの。　また一ツの不思議は、かゝる美人でありながら、この歲になるまで汚されず。十九の春をむざと過さして、あったらあの振袖枕の、移香かぐ男はなきかと、人々にいらざる苦勞をさせるにつけても、女は罪なものなり。

　人知らぬこそをかしけれ。いつも奥女中の物語になる若侍――浦波田鶴彌がいつしか思を……かけつ懸られつ、危き首尾を樂み。二人ともこれが戀の初峯入、路ならぬ路に迷ひ、露顯の曉は、一ツ席に生座をわけ、一ツ刀の血にならむと、命をなきものにしての逢瀨。もとより此戀ならざりしならば、いづれも焦れ死――思ひ死にすつる命、今本望この樣に遂げての上なれば、一夜なりと枕を双べしをこぼれ幸にして、その覺悟はかねてなり。逢ふ度ごとに未練を語り、別の盃をくみ、たゞ今日や明日やと、西方お引移りての新世帶をいそぐ……不便。庭先のこの貴妃櫻、いかで平馬の詠めを洩るべき。深く思ひ籠みて、はや實さへも結ぶべきを、それと心附かねば、散らぬ間にと氣をいらち、一葉の親許に談じかけて見れば、いやとは言れぬ家老の所望。親子ほど違ふ年――家中の思はくもはづかしと、額を突合せて一夜の談合。その結句は「これが目掛手掛といふではなし」親父が榮利に良心を曇らせて斯く言へば「御家老職の奥方」張る馬に一鞭母親の言葉。大金とよき娘は、持主に變心さする物といへり。善は急げ――わが娘には死を急げ――この由御臺樣へ申上げ、首尾よく下されし御暇と數々の小袖。つつむにあまる兩親の喜悅。引替て一葉の不機嫌。すこし淚聲になりて、御臺樣の御裾に取つき「お慈悲にこの暮まで……」お主も不便に思はれて「親共があれほどにいへば、一先宿へ下り、折もあらば遊びがてら、機嫌見に來や」とのお言葉。一葉は身を震はし、とり附し手を放さぬを、やうやく宿へ連歸ると其儘「何の用で……」言はせも果てず左右から二ツの口を揃へ、しかじかのよしを語れば、竹に紅い花が咲た話ほども承知せず、「お國許の伯母さんが長々の御病氣、このほどは一層むづかしいとのお話、もしやおなくなり遊ばしましたのか」と思ひもつかぬ事を言ふ。母親はもどかしく「噓でない證據は……」と奥の一間へ連てゆき「是をみやれ」

　見れば、夢かやまぼろしかや。夢でもなくまぼろしでもなく、疑ひもなく我家の奥に、所せきまで押並べたる結納の品々。一葉は驚き易

き娘心を礙かせ「眞實か」と問へば「おう……おう」と人の氣も知らぬ笑顏。母親ながら……勿躰なけれど、心底惡らしく、おそる〳〵眺めつけ「一生私はお嫁入は否で御座ります」すねちらして母の手には乘らず。親父は立腹の眼を血走らせ、「親に背く不孝者。否とあらばたつてとは言はぬ。其處へ直れ。手打にする」（ギラリ）光る物を拔放せば、（詫るか）（逃るか）二ツの内と思ひの外。詫もせず――逃もせず。其場に直ッて少しもわるびれず、「不孝の罪はあの世からお詫を……」と鬢の後毛を靜かに掻上げ、象牙の棒に美くしい頸をさしのばし、眼を塞ぎて唇の動くは、南無阿彌陀佛を唱ふるのか。

親父は振上し白刃のやり場を失ひ「さらば」と一際聲を張上げ、兩肌寛げる有樣……母は其手にすがり涙聲。一葉も仰天して「何ゆゑ……」と抱きつけば「御家老に申譯立ねば切腹して……」と日頃無藝の親父が一ト狂言。一葉も今は是非なく「あい」とはッきりした返事はせねど、流石に「いや」ともいひかねて、其晩は泣寢入。娘のすゝまぬ躰を見て、事の起らぬ内と、その翌曉が四海波……靜ならぬは一葉が胸。瞬く間の事なれば、田鶴彌に逢ひてこの趣を語るもならず。祝言の前の夜に、家内の寐息を伺ひ、この始末を一筆しめし參らすも、涙に摺る墨――無念に噛む筆。花にも鳥にもすらすらと歌を聯ぬる身が、とり亂しては前後不覺の文言。三尺あまりの卷紙にわづか胸三寸の萬分一を籠めて、これを遺物にしていたはしや一葉。王昭君の怨を吞むでゆく先は……霜白く、草葉黃なる千里の遠きにあらで、裏の肱懸窓から、つい向うに見ゆる黑塀がそれなり。　祝言の其夜から、今に三月餘り、寐ぼれても下紐をゆるめし事かつてなく、ならべる枕も其人に逢ひし夢さめては。羞かしく。夜はこの通り。晝は打解けし言葉をだにかはさず。　つれなきやうに――飽かれるやうにと振舞へど、平馬の戀はいつかなさめず。一葉が此處に來てからは、髮さへ心に留めず、まして紅白粉の顏見せし事なし。書眉の手傳をといはぬばかりに、平馬はさま〴〵機嫌をとれど、鏡にだにむかはず。衣類に綺羅を好まざれば、平馬が心を竭せし染模樣も、長持にあたら夜の錦と朽れぬ。

これでも堪忍して、今や解くると、春の氷にうれしき風をまてど、百日を一日、かはらぬ一葉の素振。ありとは見えて逢はぬ君に、おもしろからぬ日を送りける。　いかに迷へばとて、假寢の手枕さへゆるさぬ人に、われからはまたゆるされぬ心。これが人目を忍ぶ戀といふではなし。偕老といふ吾妻――吾持物。それの自由にならぬといふ事……一定子細あるに極まる。生來の疑深き平馬なれば、一日はおろか片時も暇あれば、一葉の傍を離れず。わが出仕の留守は家來婢女に含めて、護花鈴嚴しく、かれに翼ありとも無益、鳥一羽だに近よるべきにあらず。雁の音信、これとても覺束なし。

去程に昨日の主命。明朝早天より御鷹狩の御供仰せつけられ、二日泊とは情なけれど、こればかりは辭退しがたく、何くれと用意せはしき中にも、二日の留守に心引され、用事は手につかず、茫然と一間に閉籠り、胸の色は顏に見はれ、食事まですゝまぬと聞傳へて――此度の狩には、日頃無慈悲な御家老の鏃も、よもや妻乞ふ鹿にはたつまいと、とり〴〵の陰言。此を聞こみし出入の鳥屋、善助御機嫌伺ひとて此日の午後。

二の卷　善助の口は禍の門

「善助が御機嫌うかゞひに參じました」
色白な桂といふ侍女が、かく奥へ申上れば
「是へ」　との言葉。ほどなく善助居間の外

に両手をつかへ

「へイこれは殿様御機嫌よろしう……」

平馬は脇息に片肱をかけながら

「おう善助か。よい處へ參つた。徒然の折からぢや、一石どうぢや」

善助は首を少し傾け、小鬢を掻ながら

「へ。へ。此頃はなか／＼もちまして、手前どもはお合手になりかねまする。先達てのお手なみには、どうもはや恐れいりました」

「はゝゝゝゝ」　さもさうづと言はぬばかりの高笑ひ。

「こりやもそッと近う」　御意の下に善助は、疊一枚ほどにじりいる時、摺足の音して茶煙草盆を運ぶお桂の、やがて出て行くより

「時に殿様奥様は……」

「この兩三日氣分が惡いと申して伏つて居る」

聞くと額を顰めて

「へエそれは。お癪氣で居らっしやいますか」

「大ぶ左様な事であらうが、只氣分がわるいとばかり申して、醫者にもかゝらず、食事もあまり致さんでは伏つて居るので困る」

「それはどうも……定めし御心配で居らっしやいませう。一躰が花車なお生つきでお出遊ばしますから、お風も召やすいやうなわけで……お大事に遊ばしまし。しかし殿様お樂な事で居らっしやいませう、あゝいふお若いお美しいお方を奥様に……」

平馬は苦笑ひをして

「馬鹿を申すな」

「馬鹿を申すな」

と襖の陰で誰やらいふ聲に、平馬は其方に目を配り

「誰ぢや」　少し張あげし調子に聲をかければ、

「誰ぢや」

また同じ樣にいひ返され癇癖の目皆を釣つて、

「善助見て參れ」

善助は獨をかしさをかくし、かしこまつて座を立ち、襖の陰より持こむ鳥籠。その中に羽たくは、御覽ぜよ鸚鵡なり。平馬の前へ是を押直して

「これで御座ります」

「何……是ぢや」

籠の中を透し見て

「鸚鵡か」

「御意にござります」

「御意に御座ります」　鳥がまたまねるに

「はゝゝゝ」

平馬は膝を拍て笑ひ

「是はよい慰ぢや。予が求めてとらさう。ウム何程ぢや」

得たりや應。此處ぞと善助すこし膝をすゝめ

「これは和蘭陀種で、尋常の鸚鵡では口眞似と申しましても、今人の申すことをすぐそばから眞似ると申すわけには參りません。教へただけのことでございますが、これはなか／＼そんなものでは御座いません。只今の通り何でもすぐ傍から眞似まする。其外……こゝが和蘭陀種で……一日中聞きました事はのこらず覺えて、夜になりまするとすっかりそれを饒舌まする」

「うウむ」

「それと申しまするも、この親鳥と申すのが神通を得ましたもので、これはまた見たことをすら／＼饒舌ましたさうで……」

「ふウむ……てな」

「それにつきまして面白いお話が御座います」

と子細らしく説出すを聞けば、

日本の地をあちらへ去ること二萬三千里。御案内樣の和蘭陀の都。はキヤピタンに――かやうな處はかつて聞いたことなし。たゞ善助が話すにまかせて――親指か人さし指に數へらるゝ大分限者にて、何かこの問屋の主人が、大金に代

てこの親鳥の鸚鵡を飼ひし。　此家には手掛もの四五人もありて、その中新參の一人は、花櫻昨日からといふ年頃。身柄はこんな奉公せずともなれど、借財の抵當にしたが親父一生の落度、返濟の期限と共に親子の緣きれて、此處に引とられ。あるじの寵愛夜を重ぬれば、あまる手掛ども狹き胸の火焰たえず。いかにしても此女をたゝき出さずば、流行の小袖一枚きることさへまゝならずと、恐ろしき詭計數をつくせし中に、此女餘所に陰し男あり。約束の晩ありて忍びあふのよし。なき事をふるれば、主人の耳もすこしこれに傾きて、もとより我に靡きたるにあらず、金と枕を替はす氣の女。左樣な事もあるべしとの疑念起れば、晝夜身も心もその傍をさらず、庭のそゞろあるきにも自分からおしかけて、鴛鴦のやうにして暮しける。

帝王すら心まかせにならぬもの三ッあり。富貴自在なれど、商人の身の用事は是非なく、一日一夜留守にせねばならぬこと出來て、こんな時のこの鸚鵡と、その籠を妾の部屋へ飾りて、大事の鳥なればよく氣をつけてと、朝まだき出てゆきし其晩は、氣のつまるものなし。久しぶりの今夜と、下婢どもは一處に集りて、おもしろさうなる話聲。此女も其處へゆきて、主從なしの浮世物語。　その中に年寄たる女のいふは。いつぞやお座敷にて、旦那樣の居ぬ間に、花掛を倒して少し緣をかいたを、誰知るまいと思のほか、とくに御存じにて、目のぬけるほどお小言をたべた。誰ぞいひつけ口をする人があると、意味あり氣な目をして、座中を見まはせば、十五六の小女が口を尖らし、わたしも此間、旦那樣のお居間を掃除いたした折、つい粗相してお硯箱の蓋に疵をつけたを、誰一人知るはずはないに、淚の出るほど叱られました。誰方かは知らねど、朋友がひのないあんまりなといふ。扨そのつぎは我も彼も、似たことをいひあひ不審をたつれば、一人の仲働、それはみんなあの鳥の告口といふに、妾までがくやしがり、旦那樣がわたしの部屋へ今日に限つてあの鳥を置かれたのも、留守の樣子をしらうとの御了簡、思へば小づらの惡い鳥め。「あなたからしておやり遊ばしまし」と入智慧する女のさしづにまかせ。まづ鳥籠を緣に出し、其上に雨戸を翳し、障子の影に石臼を据ゑ、籠をすこし離れし處に鏡を立かけ、やがて如露にて戸の上へ水を撒けば、透間もなき雫の音、盆を覆へす夕立のやうなり。合圖はこゝと四五人がゝりで、から臼を挽まはせば、雲あらざるに殷々たる雷鳴。蠟燭四五挺とぼして、動かす鏡に映せば、電光閃々として、さながらの大雷雨。鸚鵡もこれには誑かられて、羽翼を收め首を縮め、恐れ慄き籠の隅に蹲るを、見るより女共手を拍てどつとわらひ、日頃の仇思ひ知つたかと、籠を叩いてわめき、夜更るまでかうして責れ、あくれば朝霧にぬれて戻つて來る主人、可愛の妾の顏よりは、あふむの言葉が氣にかゝり、籠をわが部屋へとりよせ、樣子を聞けば　昨夜は大雷雨。　愚かや門外を見よ。雨一雫ふりたる模樣はなし。扨はかの女がこれを欺き、不義を遂げしに極まれり。憎くき奴め用捨がならうか—　手文庫の内より短銃つかみ出し、一散に妾の部屋へかけいり、物をもいはせず、雷のやうな額許へ、あらけなくも筒口押當、火蓋を切れば、湧あがる烟より早く命は消えぬ。

「と申す次第で御座ります」

虛實九分一分にとりまじへ、平馬が今の思ひにも嵌めて物語るを、其とは心づかず。今きいたばかり前車の戒遠からざるを、女に魂を奪はれての思案、大枚二十金を出して災を買ふ。　花は櫻、人は武士の……數のなかには、こんなうつけものも御座るてや。

夫は一昨日立ちて、其夜と昨夜の通ひ路――夢なれば人目もなく、誰に心置なくあり〱と首尾して、後朝の別に袖をひたすと覺えて醒むれば、庭の芙蓉におく露いつより滋く、朝風身に答へて、其まゝ氣色すぐれず、臥戸から手水を呼ぶも鼻聲なり。朝御膳に手も就かず下がれば、勝手には(末)が

「お桂さ　奥様の御機嫌は」

「今朝はいつになく大層お顏色がおわるいよ」

「あなたはお顏色が大層よろしいでは御座いませんか」

笑を帶びるやうな――意味あるやうな眼に、ジッと見詰れゝば、お桂は窻の角を中指で撫ながら

「おや何故」

「今にわかりますから、まアお着なさい、あれ袂が灰へ……まるで夢中ほゝゝゝ」

「何だねエお末さん、何な事だか聞かして下さいヨ」

「お着ンなすつたら」

「何でも奢ります」　末は布巾を絞りながら

「今ね……。」

「はア」

「今ね……」

「はア」

「今ね……」

「わたしやいやよ」

痛くない五分試しに、少しおれて細い眉をしかめれば。末は笑ひながら

「先刻から三度ある方が此處へいらしってね、桂は何處へいつた」

言葉の了らぬ中に、紅める顏を横に向ければ、お末はわざと

「お桂さん」

呼ばれてもどうも顏を向けられず。屹度お末が例のひやかす眼で、自分を見詰て待かまへ、見合たら笑ふ下心、しれた事と思へば。其を羞かしがつて返事をせぬと、是も知ぬいて居ながら、また呼かける。

「お桂さん」

居たゝまれず、足早に二足ばかり遁て行くを

「憚さま、これを奥へ　」

聲をかけられ、奥へ何か持て行く物でもと、羞かしいながら引還して

「何を……」　近寄れば末はわが額へ指を當て、

「此處ンとこへ墨がちよいと……」

「虚言」

「おやア鏡を御覧なさいな」

それほどにいふゆゑ、懐中の(はこせこ)に手をかける時

「ちよいと顏をあげて御覧なさいまし」

言葉につきて顏を上れば

「それ嬉しいと書て御座いますおほゝゝゝ」

散々に玩弄られ、(憎らしい)とも言はず。末をジロリ見ぬふりの上目づかひして、遁て行く後で

「簪が落ました」

といふ聲聞えたれば、髮へ手を上げ、また虚言をと思ひながら、書院の方へ姿は見えずなりぬ。

庭の檜垣の陰、遣水の落てゆく處に、縁から見れば後姿にかゞみ、紫縮緬の紐襷を右肩へしだらなく綾どり、長き袂を挿みこみ、(玉をむいた)やうな二の腕を惜氣なく暴らし、小盥を抑て鸚鵡の籠を洗ふお桂の後に、一尺ばかり離れて雪之助の立姿。五所紋の淺黄羽二重の袷に、献上博多のはさみ帶、鞘卷裝の脇差を柄深く手挿み、白と薄紫を打分たる下緒貫かに下げ、月代のあと青く、大束ねの髷に濃油のつめ髪、その爲に少し釣りて凜々しき眼許、

鼻の高きと、二ツ合せて賤しからぬ顏。細造りにしてすべて花奢なる中に、自ら武士らしき骨を失はず、誰が目にも殿様。よしや袴をきてあるかうとも、御落胤に疑ひなし。庭下駄の音を立てじと、沓石を除て忍びよりしなれば、後に此人ありとはお桂は知らず。其を幸ひに何か悪戯して見むと、暫時立ちしが、何を思ひついたか。無理に笑ひを忍び、下緒の端を、そつとお桂のぬき衣紋の間にさしいれて振はせば――蟲か「あッ」といひ、掻拂ふ機會、濡手の雫を颯と面へ、これは時ならぬ時雨。不思一足さがつて

「えヱ冷たい」

顏に見上れば若殿なれば

「おや御免遊ばしまし、ちつとも存じませんでした」

「なに知つて居ながら」

「あれあんな事を、お人のわるい」

「お人のわるい」

鸚鵡に口眞似されて、お桂は袂をとんと叩けば、雪之助は笑ひ出し。仕掛し口説もこれに消され、しばらくは挨拶なし。お桂は籠を挟ながら

「若様」

「何だ」

「今朝ほどはまだお稽古にお出遊ばしませんの」

「今日は頭痛がしてならんからの」

いふ顏を見上げて

「梅干をつけてお上申しませうか」

心附て言てくれるものを

「きたならしいそんな物を」

「其ではあなた治ることでは御座いません」

「治らぬ方が勝手だ、明日も稽古を休む」

「まア……孩兒のやうな事を」

「自分もよく孩兒のやうなことを言ふくせに」

お桂は片頰を笑まして

「わたくしも孩兒で御座います」

「おれも孩兒だ」

「孩兒同志で中よく致しませう」

「これほど中がよければよいではないか、先刻探したが何處に居た」

「お末にお尋ね遊ばしましたか」

雪之助は立草臥れて其處に腰を屈め、ひたとお桂に寄添ひ

「尋ねた」

聞くと眼を見張つて

「えゝ」

「其がどう致した」

「どう致したでは御座いません、お末は存じて居りますよ」

「知つて居てもよいではないか」

無頓着な心を恨めしく思ふか、聲の調子かはりて

「よろしい事は御座いません」

「なる程お前はいやかも知れん、おれはいゝ」

かういはれて見れば、また惡くもなく

「またそんな事をおつしやいます、もしこれが殿様に知れましたらどう致さうかと、此頃はそれが心配でなりません」

「何知れるものか」

これ〳〵ゆゑ知れぬといふ譯もきかせず、いつも氣休めの一時言葉。男は掛念すべき事をさへ、掛念せぬ大膽の處あり。女はまた其にも及ばぬを、内氣過ての物案じ。胸の中へ兩手をついて、鬱ぐ姿を見れば、見るほど流石はわが戀人。かゝる姿を、窶れさせやうと、肥らせやうと、わが思ふまゝになるかと思へば、そら恐ろしき冥加、われながら我身が難有し。少し愁に沈む風情のしほらしさは、似たりや、其處に咲亂るゝ常夏、幼稚じみる中に何處やら色を含む姿――かぶりつきたく、思はずさし出す手をお桂の頤へかけ、顏をこつちに引向けんと

すれば、くすぐつたがりて首を縮め、はづかしがりて横をむく、手を引けば顔をこちらにして何をいたづらなといはぬばかりの眼許。雪之助は何も言はず、わが眼に心を籠めて見詰しが
「可愛い眼だのう」
思つたまゝをふつと口走れば、お桂は玩弄ると思ひしか、雪之助の膝を打むとして……濡手。また盥へ入れ
「たんとおツしやいまし」
奥に時計の音凄じく、數ふれば
「オヤ四ツで御座いますね。殿様も今にお歸りになりませう」
「もうお歸りだらう。また暫らく思ふ様には逢れない」
「それが何よりつらう御座います」
悲しい聲でいへば、雪之助もよき心持はせず
「もう四五日留守だと……」
「四五日も四五十年も百年もお留守にしてほしうございます」
鸚鵡がまた口眞似をしかける時、玄關遠に騒がしく、「お歸り」と高く一聲。南無三……二人は狼狽へ、この聲が嵐……雷……連理木は眞中から引裂たり。

四の巻　後袈裟にばらりづん

狩場にあかす二夜は、妻の夢にしばしば驚き、曉近く草枕の露さへ、われに濡れるものをと、下紐のかたくなる一葉恨めしく、晝は山深く狩暮し、馬も疲れておのづと足を留むる、谷河の流に臨めば、これすら淺瀬ありて底のしれるものをと、見るものにつけその事氣になりて、騎射は達人の名聲ある平馬が、此度の狩に限りて、不思議にも仇矢多く、勝誇るべき獲物なきを、勢子ども嘲して心は家路に逸る箭竹の、的が違へばと、兎の足を縛りながら笑ひける。
是までに啣しがつて歸りしに、一葉は無事を祝賀の挨拶にさへ顔を見せねば、野太刀を解きかけ、「奥は」と額の靑隈見るより、お桂は恐れて聲をふるはせ
「昨日からの御病氣、お食事も遊ばしません」
凝たる癇癪も、病氣と聞いて哀憐に溶され、面色までがおのづと和ぎ
「左様か」　と答流し、づかづか一葉の寢屋に行き
「今歸宅した」
一葉は眼を閉ぢしまゝ寢返りして、顔を向うにすれば
「今歸宅した」
重ねて言ひ懸られ
「お歸り遊ばしまし」
顔を此方へ向けるでもなく、いやでいやでならねど、義理ゆゑにといふが、調子に知れた挨拶。恨めしいとも思はず――思はぬではなけれど、一葉の美色一目見ると、堅いだけ碎け易き武骨心、他愛なく成り、天下に主君もなく我身もなく、唯是ばかりに諸事を忘るれば、一葉が言葉はつれなくても、やさしくても、其には論なし。其脣に觸れし音聲――其胸が醸せし音聲は、無二の妙音に響きて、寒冒がするほどの喜悦。
「氣分はどうぢや。藥を飲んければいかん」
「はい」　この一句の裏にある意味は。早くゆけがし。多く言葉を替すもうるさし。今一葉は想像に、田鶴彌様に、縫うてあげたき袴の地色縞が、どんなのが似合ふか――是でもなし、其でもなし、撰好みして居る處を、えエ邪魔な平馬面、歸つて來ずともなり。山には馬の爪づく木根岩角はなかりしか。溪にはふみ外す掛橋はないものかと、假初にもかく思ふは鬼々し。なるほどいやなるべし、厭惡には相違あるまじけれど、罪も恨もなき……のみか、慕うて

くれる人を、死ねがしとの心底、情なくも恐ろし。かゝる。一葉にてはあらざれども、戀は一方に弱く、一方に強く、わが好人には命を捨てても添ひたく、きらふ男は命を捨てても嫌ふが常なり。

　病氣と聞て御機嫌直りし顔色なりしが、づかづか奥樣の寢間へゆかれたは、もしやとお什氣遣ひて、襖の外まで跡をつけ、内をのぞけば子細もなき模樣。

「殿樣お召替を」

　と促せば、後にと一葉に言遺して、平馬はわが部屋へ引遷し、衣裳を更め、夕餉の膳に向ひしが、今日の飯は小砂利を炊ぎし物か、いかにしても咽喉へ通らず。たゞ式の如く箸を持ちしばかりに濟まして、再び一葉の寢屋へ行きし。

此時はいかなる物語せしか、知る人なけれど、恐らくは十符の菅菰、われを三符にと平馬が逼りしを、一葉が膠もなき言葉を放ちたるにやあらむ。

　襖荒らかに引あけ、疊ざはりも穩かならず、臨守におきたる鸚鵡籠を左手にして、部屋へはゆかず、わが寢屋にいりたり。

　枕一ッの床に寢よとの鐘の音無情をつげて、夜は更初め、家内漸く靜まるを待構へ、浦團の上に寢もやらず、折々四邊を見廻し、小首を傾け、耳を澄すは、一物胸にありて、その成就の時刻を量るか。

　衝と立つて屏風の陰より、かの鳥籠を持來つて枕邊に据ゑ、おのれは舊の座に居直り、二ツ三ツ籠を叩けば、物言へと常に慣せし相圖か、鸚鵡は羽繕ひするに、扨こそ――聲聞かむと、呼吸を吞こみ、顔をさし出す時、爽かに

「おまへは否かも知れむが我はいゝ……殿樣に知れましたらどう致さう

　ぶッ。留守の相引、今は僞なきに極まる。

枕刀を引摑む時。

「可愛眼だのウ」

　えェ舌たるい。惡い女。

「今にお歸りになりませう……また暫く思ふ樣には逢はれない」

　思ふ樣に。留守のみと思ひしに、我目をさへ眩ませしか。八幡用捨はならず。鞘を反せて、柄も碎けよと握り、齒切をして鳥につめ寄れば。

「留守だ。四五日留守だ……四五十年も百年もお留守……何知れるものか」

　知らしてくれむ。と踏出す左足の力に任せて、鳥籠を蹴倒し、襖も障子もあたるを邪魔と、蹴返し踏越え、暴に暴れたる阿修羅王。無二無三に一葉が寢間へ躍込めば、戀にせめられて、まだ寢もやらぬ一葉は、奥の方の物音に、何事と起返る間もあらせず、其音は此方へ近づく……驚破と思ふ處へ推參な……狼藉者。有明燈の薄あかりに顔を見合ば、わが夫なり。

「やア」

「おのれ」

「あッ」

　後袈裟にばらりづん。切先屏風へ餘り、墨繪の松枝を折られぬ。

（二十二年七月）

拈華微笑

上

不說說。不聞聞。口よりも眼はよく言ひ、耳よりも聞くこと聰し。市ヶ谷御門外の御濠に、鴨の羽音朝の霜に冴えて、松の梢は靜なれど、身を斬る風吹きさらしの大路を往來の土方ども、あいつをしめて、きうと熱いのをと、交番所の前をつぶやいて過ぐる後より、二十五六の判任づくりの男、手頭をポッケットの底に煖め、兩脣をくの字形にして、腋の下に辨當包を挾み、何省へ勤むるか知らねど、南の方から來て、御門を入り左へ曲りて行きけり。降らでかなはぬものならば、雨もふれ、雪もふれ、難義らしき顏もせず、いつが日にも休むことなく、しかも徒行なり。客待の車夫も此人は別物にして靡を懸けず。いかな朝も見えぬことなければ、烏官員と囁きちらし、帽子と外套の黒色までが、笑の種となりけり。それにしても此男は小白く、眼にいはれぬ可愛き處ありて、近來のばせし八字髭の形もよく、これで身のまはりさへよくば、車夫づれにとやかういはるゝ人品ならねど、世の中は錢が大明神!

今年の二月以來、毎朝同じ時刻——同じ場所にて行遇ふ車上の美人あり。召物のうつついは此が學校衣かと驚かれ、ぽっとりと萬事が上品粧。いつにも日本風の髮を結はれしことなく、鬢髱引つめて、ぐるりと左卷の無雜作結、薄紅の一輪花の簪に、琥珀色の束髮櫛。或時は洒落て蝶結、俠なれど氣が替りて此もよし。肌理濃に地色の白きが上に、薄り刷かれしは可厭にあらず。地藏眉柔和にして眼許情らしく、左の眼下に一粒目立つ黒子のあるは、大いなる愛嬌になりて瑕ならず。車の走るに少し反身の姿はにくいほどよし。

此男偏屈にて同僚の交際を知らねば、譽むる人なく、第一馬鹿律義にていつこくにて、無口にて、ぼんやりにて、雪を書けとあれば六角に書き、花を詠めよといへばまじ〳〵見つめるほどの人物。女の噂が出れば、むかう向になつて書見とは、若いものがあゝでも困る、世情に疎きもこれゆゑといはるゝ男が、擦違ひ——電光石火の姿に、何の目留る理はなく、留つてからが、なるほど美しいと見ても、其美しきが何でもなく、其美しきをどうといふ氣はなほなし。天の配劑妙なり、戀なり。美しきあれば醜きあり。今のは美の部に生れ合せとばかり、手輕に思ひ消してあとには何も殘らず。いはゞ肉眼に光線の作用ありしばかりにして。物は幾度も見るにつけ、眼光次第に骨髓にいれば、其味自ら知れて、初はさも思はざりし物まで、其々其物の妙にありつけば、花は櫻のみかは、海は須磨にも限らざるべし。まして美しきを見て、勿躰なくも美しと思はぬは、食はず嫌ひの妙處を曉りえせずして、女などは好かぬと言ひちぎり、人に惡くいはれし例なきを一つの誇みにして、嫌ひですましておけど、道理は二つはなし、これが學問ともいふならば、進まぬながも大好物といふべし。好色、不德はよかるまじけれど、男として眉目麗しき女を見ながら、顏を顰むるなどは、僞聖人か、但しは食はず嫌ひか。僞聖人は濟度の沙汰に及ばず。食はず嫌ひだけは、いかにも慈悲を垂れて成佛させたきものなり。

我から好んで見るにはあらねど、同じ時刻同

じ場所に同じ現象。彼方は車上、此方は徒歩、もとより一呼吸の見る口ながら、其も續けば自然眼につき、また今朝も……いつも遇ふ女、何處へ行くのやらと、何となく見過すに日數つもれば、ます／＼目馴るゝにつけ、神以て戀にあらねど、此顏懷しくなり、其姿見ぬ朝は物足らぬやうに覺ゆるに、女も思はかはらず、男に睨まるゝはいやな物にて、顏を背くるか、傘を傾くるか、娘氣の一寸隱をすべきに、其をせず、我からも見るまでに仰合ひぬ。半町距てゝも其車は目に入り、かの人と歩行風な見知り、やがて近處り――擦違ふ時、彼此見合ふのみにて二月ばかりが間は、別の所作もなかりしが、いよ／＼見知になれば、何時も希有な顏を作すもどうやら艶なく、また遇ひ悪くもなりしが、ある彼方よりまづ微笑こぼれしに釣出されて、男も笑みかへせしより、俄になりて、其後は微笑が挨拶となり、偏屈者も此は萬更わるい氣もせぬかして、行遇ふ時笑み、二三步して後をむいて獨りまた笑みし事あり、此心中測り難し。

日曜の待侘しきは、自他ともにかはることとなし。偏屈なりとも、六日勤めて一日の休業は、此日一刻千金、寸陰今日を惜みて餘りあり。なるほど今まではさもありしに、此日頃は、存外日曜も嬉しからず、思へば人間得手勝手にして、彼の笑顏を見られねば、餘所にては長かれと祈る大事の日を、つまらなく一間に籠り、早く暮れよと待明し、今日出勤の時刻平常にかはらぬに、悲しや見られねば、失望に氣を腐らし、其翌日はまた今日もかと、思の外なる首尾にて、嬉しや、無事なるお顏を見たり。

此次の月曜も見えられぬに少し不審を立てしが、其かと思ひつく事ありて其次を試みしに、果して前の此日に變らず。扨は休日なりけり。今まで斯る事はなかりしゆゑ、あつたら苦勞をしたり。我する苦勞ならばいかほどでもあれかし、まづ其人の身に恙なきこそ幸ひなれ。

此秋の神嘗の祭日、所用ありて〈山下〉に行きしに、鹿鳴館に奏樂聞え、鐵柵よりのぞけば木陰に馬車人力車群集し、何ぞ催しありて今を最中と覺しき時刻なるに、門に懸る時、車一臺馳出し、車上の貴婦人は其人なり。此は變つた所で遇ひたり。互の不意に例の笑顏はなく、如何なるはずみか、馬手跳つて帽子に懸り、男が頭を下げて挨拶すれば、女はし後れしを詫ぶる思入にて、いかにも會釋ありて其儘別れぬ。遇ふに定れる處にて、其時宜しそゝくれては、中途から改るは異な物なれど、かうした思懸けぬ時には、かねての知己といふ氣になり、調子よく挨拶も爲得るものなり。此次の日からは、此迄の笑顏に會釋加はれば、大分親密の度を增し、人目には嘸や格別の交際と見ゆべし。思へば我らしきの分際にて、かゝる高貴のしかも美しき婦人と挨拶する事、過分の名譽といふべし。この人の車走らす時は、過ぐる人は振返り、來懸るものは見迎ひ、誰が目も見遁さぬ容色なれば、彼の人の馴々しく時宜するはどんな奴かと、其顏を見しものゝ、また我顏を見ぬはなきに、此年齡にていふもをかしけれど、羞かしくなりて逃ぐる如く早足にすれど、また思ひかへせば、われ尊からずしてかく尊き知己あるは、何にしても肩身は廣し。さりながら、彼の人は心憂く思はるべし。なる事ならば先方の恥辱にもならぬやうにと、此が一つ、二つには其人の手前少しは繕ひたく、まづクラワットも新形を好み、此冬の移替を機に品はともかく、パンタルウンを細くするなど、しをらしき心遣ひを覺え、今更色氣づきしかとの陰言はありながら、あれほどの偏屈これほどに和らぎしも戀でこそあれ。良藥、毒藥、用法一つ。裏から見れば、樣巾もかはることなし。

此心づかひ自ら先方へも通じて、今迄はさ

もなかりしに、此頃女は三日にあげず、羽織・小袖、取替へ、引替へ、何を着てもうつらぬはなく、なほ寐覺間のなきお出懸なるべきに、髮の毛一筋亂さず、顔の化粧行屆きたるに、生やさしからぬ思の籠れるも知れて、嬉しさ身に染み、此分では萬更鰒の貝ではあるまじとはずみかけ、到底出來ぬ事なるべけれど、其處が戀にてどうぞなるものならば、是非この人をといふ一念日色にあらはれ、昨日に增して心を籠めたる微笑をつくれば、女も意味ありげなる笑顔を見するにいよ〳〵のぼせ、なほ其心を試すべき工夫を案ずれど、これといふ思つきなく、二三週は夢のやうに過ぎけり。

大雨夜を籠めて朝にやまず。傘は二重張なるに、面に霧を吹きかけ、袖も背もしぶきに濡れわたる往來の人を見て、母は乘れといへど車は榮耀と、古外套の惜からぬを引かけ、戸棚に棄てし古帽子を、禍も三年たてばと打冠りて出でしが、此雨ゆゑ彼の人は休なるべし。よし休まずとも、母衣深ければ、中秋無月、不愉快！ 元氣薄くして道はかどらず。いつも此處らは車の見える邊と、見るに見えず、車は大分見ゆれど其らしきはなし。もしや見過せしか、我思ふほどにもあらば、母衣の中よりのぞく位の實意はあるべきにと、一町餘ゆくに一つ車に出逢ひたり。此雨に母衣もかけず。不思議と見れば、その車夫！ 其人！ 車の上なは。今朝はいつよりにこやかに、會釋も叮嚀に、此雨に定めて御難儀なと、慰めたき風情たしかに見えたり。車には母衣のあるものを、かはつた物好と立留つて見返れば、五六間ゆくと車の中より、燃立つ色の襦袢の袖口にからまる手をさしのべ、母衣をふわとかけて車は急ぎぬ。扨は眞實我に劣らず、我顔見んとてしよぼ濡れたまふか。さほどの心中とは知らず、我恥かしき此扮裝、吝嗇男などゝ愛想つかされなばと悔みしが、次の日少しもかはる事なかりし。

下

沖の石水に圓まり、鐵も磨ぎて針となる長の月日に、眞顔は笑み、笑顔は語るまでになれば、はや言葉を交さむと十日か廿日の辛抱。言葉をかはす段にならば、何の苦もなくあとは此方の物。やれ宿願成就の緒、うれしや〳〵に胸逼・、世の中何となく愉快になり、課長の小言、愉快！ 同僚の毀言、愉快！ 母親の壁訴訟、愉快！ 森羅萬象愉快に輝き、愉快に響き、夏暖かに、冬涼しく、茶漬甘く空財布重く、ユウトピア・今はユウトピアの王となりぬ。一時は苦しき事又は樂しからぬ事ありて、かくては此命捨つるに惜からずと、無法一徹に思つめし事もありしが、世間にて我よりも苦勞ありげにて、なほ生き長らへたく見ゆる人の數多くあるを、なぜ死にはせずして、一日長らへば、其だけのうい目を見ずにはおかれぬ物を、して見れば、他人は呼吸の通ふ限りは、苦勞に換へられぬものありてなるべきに、我には其物なければ、他人一倍命を麁略に思ひしなるべし。其物とは何ぞ。疑團の氷結、なるほど今解けたり。鈍しとや笑はれむ。此ほどまでの女人の名をいまだ知らず。住所も知らず。手懸りとなるべきは、車に三蓋松の紋あり。車夫の背にも此あり。偏屈ものゝ悲しさには、かゝる事は打明けてかうといふべき友なく、獨り心を傷め、いつかは車に尾いて行先を突留めむと、思ひ立ちしことなきにあらねど、勤仕の身にして何條かゝる事ゆゑに一日休むべきや。良心に耻かしくて止みしが、何時まで待つとも知るゝにあらずと一念飜りて、ある朝小陰に忍びてその車をやり過し、七八間行くも待たず、辻車に飛乘をして逐かけしが、引添ひて行かば見咎めらるべし、見え隱れに逐へば、其車夫の

健足韋駄天にて、とても始終うまき距離を保ち難く、見失ひこけり。此に懲りずまた試みしに、結果はかはらず。其上に、途にて同僚の某に行逢ひ、南無三と見ぬふりしても先方にも眼あり、見露されて役所に此沙汰ひろまり、今まで風一つ引かぬ男が一週に兩度の所勞屆。それのみならず、いつもの徒歩がしかも其日に限り、車に乘つてゆきしは何の用事か知らねど、此頃のそぶりと照合せて不審の條々、奇怪々々と目を欹てらるゝに、此はならぬ、露見せば一大事と、根が小心謹直の男なれば、おぞけを振つて懲れいり、すまじき事と其後を愼みけり。念願これゆゑに空となれば、又思直して我儘にはならぬが繫なり、時節なり、急いて仕損ぜぬと氣を長くし、毎日顔の見らるゝものを、今の不足ありてと心を叱れば、其場は素直に鎭れど、またむら〳〵と不滿足萠して、たしかに其とは思へど、話し合うて見ぬ上は黑白知れ難し。何をいふにも目顔でする仕方話、此方は太陽の心にて丸い形をしても、先方は鏡と倶ずるも知れず。もどかしや、戀か、戀でないか、一刀兩斷にと思へど、車夫といふ邪魔あれば、卒爾に聲もかけられず。此方と彼方と首肯きあふことは彼も知らざるべし。なれど、日毎行逢ふ我はよく知らむ。されば一度あやしめられては、其後車夫に目をつけられむかと是も心許なく、いかにもして車夫の手前あやしからぬ樣に、言葉をかける方もあれかし。考ふれどなかりき。望むは、かの人に怪我もなく穩かに車倒れ、車にも損所なくして、車夫にも傷つかず、暫時氣絶するやうな事あらば、しめたり！　我馳寄りて介抱し、話しかけ、つい其わけをつけて退けむに、何の仔細もなし。其吾氣にていよ〳〵我に御心なきに極らば其にてもよし。人知らねば恥にもならじ。是上策上分別。車倒れよ——靜に、怪我なけよ、車夫躓けと、祈るに効なかりき。外に手段なければ、唯物いひたげなる風情を見すれば、女もまた言ひたき樣子、人目をかぬるそぶり、可愛き人の志のほど哉。さほどの眞實あらばなど一日は車の榮耀をやめて、徒歩ならば首尾はあり、日頃の思を霽らさしてはたまはらぬ。先頃母衣に見せたる心中あらば、これしきに思ひつかざる理はなし。して見れば此戀もどうやら覺束なく思へど、なほ未練をひくはその顔いよ〳〵情らしく、答禮のしぶり媚かしきに合點ゆかず、樣々に思過せば、惡推かはしらねど。世間にはある例の、器量優れて不便や、唖娘。それでこそ物が言はれぬか。車を下りて首尾してくれぬは、もしや跛者ではあるまじきや。跛者はしらねど、唖者は樣子にてそれと辨別るものなり。かの人にさせる樣子はなければ、跛者か、疑はしゝ身分といひ、年頃といひ、器量といひ、默つて人の置くべきものならぬに、あゝした野邊の花、孃樣は因緣なくてかなふまじと、其か、あらぬかに一夜迷ひあかして、朝飯一膳味なしにかつこみ、風でも引きしかと不興な顔を母親に諦られ、唖者だと答へて嘴を潰させ、出勤の道々も此分別に苦しみ、人に怒られ、犬に吠えられ、また遇うて見れば、此日の扮装一際まばゆく、花に露そひしたるゝ愛嬌に、今更に消え〴〵となり、何の他愛もなく根性昨日に返り、跛者でなし、唖者でなし、無垢清淨圓滿具足の美人、唖者でなし、跛者でなし、たしかに唖者ではないぞ。跛者でもないぞ。十一月の二日は亡父の命日。母と妹と此男三人連にて、谷中天王寺へ參り、南無阿彌陀佛と花を手向けて戻り道、入口の休茶屋を出づる五人の一組、内に老女は母親らしく、若夫婦の外に女二人は從者なり。

　此男路傍の新しき石碑に目留り、立懸けて墓誌を讀むに、母も妹も其處に待つ間に、五人連近く來れば、こそ〳〵と妹の母に囁くは、あ

んな帶が欲しいの、下着が好いのと出來ない事のねだりなるべし。何の某撰と讀了り、行くべしと踏出せば、さりとは思ひがけぬ、其娘は紛ひもなきかの人なれど、人目を憚れば笑顏も目禮もせず、ほんの他人にて行違ひぬ。ふりむけば、細腰しな〱と練りゆく風情、車にては此好き所を見せずにしまふものを。何はともあれ、跛者でなきこそ、わが身蘇生りしほど賴もしけれ。母に向ひて、あの娘は何か話して居たりしかと尋ぬるに、母親いぶかり、顏を詠めて答へず、妹さしいで、御亭主と何やら話してといふ。啞でなきは好けれど、亭主の一句が口惜しくて顏を睨めぬ。

今思へば、片輪にて獨身なるこそ望ましけれ。滿足なる上に主ありと知れては、玉を掘出し他人に奪はれ……其には力づくもあれど此は手出しもならず。奥齒に無念を嚙み、熱涙を飮む辛さを、何ほど二人は知らぬとて、團子坂の菊盛、大人形がどうのかうのと、少しも我氣を知らず、餘に遠慮なさ過ぎるに腹立たしく、扨もぬしある身にして今までのしなしは、弄つて遊ぶ心か。女惡し。その男なほ惡し。

いちや〱物語る亭主の顏目前にちらつき、無念いよ〱骨髓に徹し、杖とりなほして、おのれ！と横薙にすれば、びゆうといふ音に、あれと妹飛除くに、はつと心附き、呵々と高笑に紛らせば、母親は何も言はずまた顏を詠めけり。

落花重ねて梢にのぼらす。

またとは遇ふべき心なけれど、これが言葉をかはす自由あらば、百萬遍の恨つらみをならべ、存分腹を癒やしてくれる所なれど、物いひかはされぬ悲しさには、恨のいひやうなけれど、天地も照覽あれ、言はでやむべきか、と業を沸して來懸るに、轔々とかの車轟く音胸に響き、何とせむ——われ眞向になつて行過ぎなば、女は必ず曉りて、笑顏も念入にして媚ぶるを、此方はそしらぬ風にて、一昨日來いとすねて見せなば、張合ぬけて、菅なきしかたと恨めしき樣子を見するを、見てやらず。ずつと行過ぐる——これにて萬分が一の念霽しと、側目もふらず反りかへつて行過ぎながら、女はいかにと流眄に偸めば、かの人も眞向になり、唾さへ吐きかけぬ樣子に目算外れ、むしやくしやと面白からず。此方にて立腹する道理こそあれ。かの人のつんとする所謂はなきにと、其心中少しも合點ゆかず。扨は陰せし夫を知られ、とても契るまじきと思切り、どうでならぬものならば、なま中物を思はむよりとの下心ありて、今朝から改めて昔の他人となりしか、學問せる女の雄々しさ、氣强さよ、一度は呆れけり。

其より一週ほどは朝々かはらず遇ひしが、かはりしは互の心中にて、我もさうした女に阿らむも男らしからず、と氣まづくはなりしが、また折々は未練の目づかひすれど、女は人形の如く更に情はなかりき。

其後幾朝か續けて其車を見ず。疾ひでもせしかと、流石に他人のやうにも思へず。遇へば不興な顏をしあひながらも、其すねた顏も見ぬになれば懷しく、萬更心に懸らぬでもなく二週間を過しぬ。

或日役所にて同僚ども物語りけるは、課長の數年前亡せし娘に、妹あり。此姉を氣に染まざりし人に、推付けて嫁入らせしに、いやが高じて疾ひつき。それが原因にて身まかりたれば、此に懲りて、妹には好いたるものをと、今年廿歳まで氣に入るものなかりしに、日毎學校の途に行過ふ男あり。物もいはず單の見知越ながら、此ならばとの御心ありて、名も所も知らねば、さま〲手をまはす內、兄につれられ母とゝもに寺參詣せしに、此男の妻と連立ちたるを見かけ、世に望なく思沈みしが、數月前ベル

リンより歸りし、ドクトル丸山某は、課長の緣者にて、娘とは幼稚友だちの中にて、身分にも男振にもいひ分なければ、娘は左も右も此に得心して、結納は早や濟みたり。今年中には輿入と、外ながら聞くに胸躍り、あまり似た話と、此を寢言にまでいひ續けて過ぎしが、ある日退省の途より赤坂へまはりしに、三蓋松の紋つけたる油單かけし釣臺七つまで續きたり。紋に目留り、氣にかゝりて、其儘におかれず。用事を捨てゝ引添ひゆけば、氷川町の玄關いかめしき新宅にぞいりにける。何者かと門に立寄れば、南無三！ (MARUYAMA)

(三十三年一月)

紫

自叙

十日畫一水、五日畫一石、能事不受相促迫。からやうにこそあらましかはと、筆援るたびの獨語は、壁の耳より外に聞くものなくて、其日を逐はるゝ新聞小説の漫書、心には捨てたる反古も世間に散され、またこゝに一篇の拙速は、側の茶を濁したる紫の、見苦しと打覺みたまはむ人、なぞ我をして試に王宰が崑崙方壺の圖を畫かしめざる。噫それも愚痴なる哉。

（一）夜半の魘

「おや、まあ氣味が惡いねえ、何だか人の唸る聲がするよ。お隣だ、お隣の煙草屋様の二階だ。」と呟きながら、疑懼首を擡げて、寢床から聽耳を欹てる六十ばかりの老婦の萎びた横顔を、同じ様に勢の無い煤行燈の光が、なるほど闇よりは明るく、枕頭に朦朧と照してゐる。

此間は八疊唯一間の二階で、西と東に窓がある。西が櫺子格子の明窓で、鴨居一杯に釣つてある棚の上には、吸物膳十人前、藍染附膾皿、蒔繪重箱など、書附のある箱が五つ六つと、菓子の古折、鶏卵の空箱、鐵葉の罐、銘酒の壜、其外總て禍も三年經てば、と謂ふやうな物が抛上げてある。

北側に欅造の一間の戸棚を取附けて、横手が階子の口で、その上の梁に用心籠が燻つてゐる。東の壁側には古葛籠に竹骨柳と重ねて、其傍に夜具の拔手綿が一組、厚風呂敷に包むで寄せてある。之と斜面に、昔仕入の溜塗の簞笥の上に、革文匣、針箱、用箪笥等を片附けて、行燈の側に小形の長火鉢、紀州ネルの座蒲團。見廻したところで、此二階は寢間だけに用つてゐるのでは無くて、此老婦の住居であらうと想はれる。と爲れば、この老婦は此家のお袋とは受取れぬ。或は姨様といふやうな格で、繋がる縁の有難迷惑、否の言はれぬ生涯の厄介？まづは其邊であらう。いかにも壁一重隣の二階に人の唸るかとも覺しい聲が聞える。老婦は少時凝然と聞澄してゐたが、其聲が益劇しくなるのでも無いが、いつまでも息まぬから。

如何爲たのだらう。どうも唸つてゐるやうだが、病人でもあるのか知らぬ。誰だらう。病人のゐやう理は無いが。夫婦に小僧限で、今日も皆店に見えたし。それとも病人でも來たか知らぬ。一向そんな様子も無かつたが、異しい、何だらう。どうしても唸る聲に違無い。病人でも引取つて、あんなに唸るくらゐなら、誰か見舞に昇つて來さうなものだし。それとも小僧さんでも急にお腹が痛出したのか知らぬ。子供の聲のやうでも無いし。

と百端考へたが、さて解らぬ。解らぬほど猶氣味が惡い。安火は冷えかゝる、襟許から風は入る。枕掖を頭に捲着けて、鼻の上まで夜衣を引被つても、未だに息まぬ唸聲が耳に附いて、睡りかねてゐると、階下の時計は二時を打つ。其鳴の鎭らぬ内に、こつん〳〵と唾壺を撃く音がする。

「おや！」　と老婦はまた顔を出して、

「煙草を呑むでるよ。」　と思はず呟く。

煙草を呑むでゐるから、病人の理は無い、病人で無ければ唸ることは無い。さうすると唸る

のでは無いのか。でも確に唸つてゐたのに違無いもの。唸つたり、煙草を呑むだり、餘程變だ。

　と思案に餘してゐると、又一つ唾壺の音がして、續いて前の如く唸る。

「おや、また唸出した。」

　五分間も唸つてゐて、突然に地響のするほどの嚏をする。老婦は肝を潰して、「おや、まあ。」といふ後から、最一つ、「はっくしよい。」續けて、「はあっくしよい。」最後のは極めて大きく、

「はあっくしや。」

（二）晝間の嚏

　その夜も明けて朝飯の時、二階の繪樣は階下の夫婦に昨夜の一件を物語つたが、思ふやうには取合つてくれぬ。尤も思ふやうに取合つた日には、圖に乘つて際限無しの話好であるから、今朝には限らず、いつも取合はぬやうにしてゐるのである。

　繪樣は然とは氣が着かぬ。夫婦とも素氣の無い人たちだと信じてゐる。それならば始から合手にせぬが可いのであるが、御念佛を唱へるでは無し、壁と對坐で獨語も冴えぬから、そこで、顏さへ見れば、何の此のと頻く話をしかけたがる。

　其上この繪樣といふ人が、隨分分曉が惡くて、言ふことが冗くて、結果を聞いたら必ず原因を窮めなければ承知が出來ないので、（それが何いふ理で）と言ふのと、（それから奈何しました）と言ふのが癖で、話が始ると、直に此二つの責道具を擔ぎ出すので、大概の敵は立どころに竦される。やっぱり兒雷也の蝦蟆の術のやうなものさ、と此家の女房が名言を云つたことがある。

　取合はれぬからといつて、腑に落ちぬことを其儘にしては措かれぬ例の癖で、食事が濟むと、怱々勝手へ出て行つたが、水口の障子が啓いて、下駄の音がすると、火鉢に靠れてゐる女房は夫の顏を一寸見て、

「おや、繪樣は又お隣だよ。」

　と半襟へ爪楊枝を插して煙管を把る。

「喋出すと執冗いから困るよ。何を言ふにも精細で、あんなに言はなくったって分るのだ。だから此方から話を爲るにも、子供に言聞かせるやうに爲なけりや得心しないのだから、憤れったくて堪へられやしない。なぜ如彼だらうなあ。」

「老年の所爲ですかねえ。」　と女房は輕く合槌を搏つ。

「なに、若い時からよ。お袋は能く然いつたっけ、繪樣と話をするのは牛に牽れて善光寺へ詣るやうだって。お袋は癇癪持の、宛然電光のやうな氣象だったが、同胞でゐながらあんなにも違ふものかさ。」

「同胞といふと肖てゐるやうですけれど、却て然でないものですよ。」

「然かも知れない。お邸へ奉公してゐるお仙樣なんぞは、お前の妹とは見えないからな。」

「どうせお仙は好い女です。」

「ありや好い。年々好くなるよ。」

「どうせ好くなりますよ。」

「お前とは大違だ。」

「どうせ大違ですよ。」

「來月また來る、といつて寄來したぢやないか。」

「來たつて内へ入れるものか。」

　とそろ〳〵嫉が進立つて來るほど、亭主は面白半分に、

「なぜさ。」　と眞顏で尋ねる。

「なぜでも可うございますよ。」

「可哀さうに、そんな事を言ふなよ。折角お前に逢ひに來るのだ。」

一誰に逢ひに來るのか知れたもんぢやない。さういへば此間どうも變だと思つた。」

「なぜ〳〵。」と顏を出すと、女房は口惜紛れに孤憤煙草を喫して熱くなつてゐる煙管の鴈首を亭主の横面へ推附ける。

「あつっ！　何を爲るんだい。」

と可恐い眼をして睨みつけると、女房は泰然として、

「お仙がよろしく申しましたよ。」

（三）話相手

隣の煙草屋の裏口を徐に啓けながら、

「御免なさいましよ。」

女房は火鉢の側から頸を延して、

「お隣の姨樣、さあ此方へ。」

「お早うございます。」

と丹精した銘仙の半纏の袖を胸の邊に推重ねて、大寒、小寒、山から小僧が啼いて來たといふ態で入つて來て、

「今朝は又めっきりお寒いぢやございませんか。」

「お寒うございますね。さあ火の側へお寄んなさいまし。」

と共邊の物を掻除けて、早速の愛想に酌むで出す番茶を、姨樣は一寸戴いて、口を着けると、もう話の種を拵へる。

「結構なお茶だこと！　お初煎に限りますねえ。やっぱり川柳でございますか。へえ、宇治の出店の「それぢや正銘でございますもの、へえ、なるほど違ひますねえ、我家ぢや旦那殿が、もう〳〵沸熟かし拔いたのが好なんでございますから、お初煎の味美のは飲めやいたしません。お茶といふものは一つは煎法でございますとも。」

と背を圓くして、大きな黒子のある口の端を妙に尖して、そろ〳〵嘉しかける。

固より此家の女房も辯舌は爽かなる方であるから、他の想ふ程迷惑はせぬ段では無い、寧ろ或時は好むで合手にもなる。いつも此方から十言いへば、必ず七言ぐらゐには答へるのであるが、どういふものか、今朝は少しく氣の重い顏をしてゐる、一膳過ぎたかの如く。

姨樣は階子傳ひにづいと二階を見上げて、急に憶出したやうに、

「妙な事でございますけれども、ねえ貴方、私は今朝何はうと存じましてねえ。」

と茶碗を下に置いて、衣紋を一寸拔く。

「何でございます。」

一附かない事を何ですけれど、此方にお客樣でもございますか。」

「客？」と女房は首を傾ける。

「もしや御病人の。」

「病人の客？　いゝえ。」

「さうでございますか、」と顏色が得心せぬ。

「あゝ！　客が、在ります〳〵。」

「ゐらっしやいますか。」と囅然笑ひかける。

「病人ぢやございませんよ。」

「おや〳〵。それぢやお達者な？」

「當分勉强に參つてをる客がございますの。」

「へえゝ、勉强に！　まあ然でございますか。」

「どうして御存知で？」

「其が、あなた、可笑いことがあるのでございますよ。昨夜ふっと眼を覺しますとね、唸聲が聞えるぢやありませんか。其がね、あなた、此方樣のお二階なんですよ。」

と云ふのが前文で、それから長々と迂曲陳じる。やれ恐かつたの、咳が出たの、時計が鳴つたの、戸が動いたの、耳を澄したとか、目を瞑つたとか、あんなに吃驚した事は近年無いとか、お邸に御奉公してゐる時分、お庭で狸が鼓の稽古をすると、猫が御錠口で舞を舞つたとか、可恐いと冷汗が出て、寒いと水涕が出る

とか、愚にもつかぬ事やら、面白くも無い事やらを、懸懸け〳〵聞かせられるので、女房も請太刀の足許四途亂になつて、既にかうよと見えた時、やう〳〵隙を覘つて、曳と引外すかの如く、

「唸つてをりましたか。」

と矢庭に打込む唯一句で、嬢様の長話は胴切になる。これで拍子抜がして、後段はぐつと簡略に、

「私も耳が何でございますけれども、どうも唸つてゐらつしやるとしか聞えないのでございますよ。」

「唸る筈はございませんがねえ。」

と女房は少時考へて、

「唸つたのぢやございません。」

と思はず頓狂に大きな聲をして、

「本を讀むでゐたのです。」

「あの唸つてゐらしったのが。」

「唸つてたのぢやございません、口の内で本を讀むでたのですよ。」

「まあ余何せう？　私はまた大病人のお客様でもあつて、お二階に寢てゐらつしやるのかとばかり想ひましたよ、御勉強と御病人とは、大抵の相違ぢやございませんね。」

と果は大笑になる。

「實は昨日から二階に參つてをるので、拙夫の御親類筋のものでございますの。もう久しく日本橋の山路といふお醫者様の弟子になつてをるのでございますが、この四月には醫者の試驗があるものですから、それでまあ勉強しに當分お暇をもらひましてね。當節ぢや往時と違つて、何になるのも大抵ぢやございませんよ。」

今まで氣の重さうに見えた內君も、段々と口輕になつて來る。

「へえゝ。」と嬢様は感心した風なものゝ、その試驗といふ事が根から解らぬので、早速例の責道具の一種の（何いふ理で）を擔出す。

「その試驗といふことでございますか。其は貴方からでございますよ。何商賣を始めるからつて、願ふのでございませう。ですから、お醫者様を始めるのでも、矢張政府から御免にならなければ可けないので、それには試驗といつて、醫者を爲るだけの腕が有るか無いか、その掛の役人が力量を試して見た上で、これなら可いといふことになつて、そこでまあ天下晴れて一人前のお醫者様になれやうといふのですから、二階の人も今その試驗の下稽古を精々としてゐるのでございますよ。」

「そりやまあお大抵ぢやございませんねえ、それぢや其試驗とかいふことは、定めし難しいのでございませうねえ。」

と嬢様はぐつと一つ首を撚つて、ふうと鼻の中で節を附けて唸る。是が所謂聞上手といふので、かう身を入れられると、話す方でも自づと張合が出て來る。

「それは難しいの何のといつて、お話ぢやないさうですよ。その試驗が又一度では濟まないので、前、前何とかに、後何とかと、都合二度あつて、而して前の試驗には三圓、後の試驗には五圓納めるので、それが貴方首尾よく參ればねえ、試驗も二度で、お金子も八圓で濟みますけれど、運が惡かつたり、勉強が足りなかつたりして御覽なさい、試驗が好く參りますまい。」

と嬢様は益鼻を鳴らして乘出す。

「然すれば復た再試さなければなりませんわね。」

「こりやあ成程然でございませうね。」

「再試す日には、また勉強を爲直した上に、またお金子を取られるのですから、愁いぢやありませんか。」

「なぜ又其度にお金子を取つたものでせう。政

府でもねえ貴方、そんなに取りたがらなくっても可いぢやございませんか。何かと云ふと税々って、徳川様時分にはとんと無かつたことで、これだけでも眞個世が悪くなつたのが分りますよ。」

と昏濁した眼にも自から憂憤の色が見はれる。

「姨様、税ぢやありませんよ。」

と宥めても、自體天朝と薩摩が大の嫌であるから、なか〳〵聞分けない。

「税でなくっても、下々から取りたがるのが悪いぢやございませんか。」

と彰義隊は鋭く突蒐けて來る。勢ひ内君も錦切の肩印で駄荷袋を着かなければならぬ。

「それだって、その試驗には何千人といふほど醫者にならうといふ書生様が聚るのですし、掛りの役人には名高いお醫者様達を大勢喝むのですから、手も掛れば、費も入る、畢竟その雑用を拂ふのでさあね。」

雑用の一言が氣に入って、税で無いのは思召に稱つたか、但その取りたがるのが癪に障ると見えて、

「雑用なら雑用らしく取るが可いぢやございませんかね、馬鹿々々しい。なんぼ政府だつて餘り阿漕過ぎますわね。」

と段々解らなくなる。

そこで内君は話頭を一轉して、

「お金子は兎も角も、その勉强といふものが仇や疎ぢやございませんよ。夜も碌に寢るといふことは無し、第一あなた、まるで御飯なんぞは食べないと謂っても可いくらゐでございますの。夜も晝も机に靠かり通しで、本ばかり讀むでをるものですから、もう〳〵それは、顔の色なんぞはありは致しません。傍で見てゐましても、彼で能くまあ健康に障らないと思ひますよ。」

實に此説明は簡にして盡してある。有繋の姨様も得心して、

「へえゝ。唯もう念力でございますねえ。」

「もう一生懸命。眼といつたら釣し昂つて、眞紅に血走つて……。」

「然でございませうともね。」

「そのまあ勉强といふものは、眞に感心。」

と息むほど力を入れて、

「してしまひますよ。」

と獨りで感心して、眤と額を視られるので、姨様も爰は默ってはゐられないが、扨何とも言ひやうが無いから、

「結構でございます。」

と魚軒の交のやうな言を云っておく。

「それで貴方、極堅い、正直な、誠に其は素直な質でございますが、如何いふものですか、記憶が少し悪いので、その通り勉强は爲るのですけれど、度々試驗がまあ不出來で、それでも始の試驗は最う疾に濟むでをりますから、今度は後の五圓の方の試驗を受けやうといふのでございますが、自分もねえ、さう申してをるのでございますよ。今度また仕損つたら、餘り面目が無いから生きてはゐないってねえ。」

裏の窻から早桶を抛りこまれたほど、(生きてはゐない)の一言に姨様は悚然して、

「生きてはゐない?! 飛でもないことを。そんな短氣な。」

と半は人の無分別を誡め、半は己の恐怖を鎮めんとする。

「それはもう然ですけれど、在所には年取った兩親が在りまして、幼稚の時分に引取つた許字が、最う廿歳にもならうといふのですから、さう〳〵は待たれないから、今年も遣損つたら、其娘には他から聟を納つてしまふ。そんな馬鹿者は子とは思はないから、親とも思ふな。家へも足踏をする事はならないってねえ、父親

のとこから拜三の手紙なので……。」

「そりや貴方、何ぼ何だて餘りぢやございませんか。そんな無理な、可哀さうに、そんな事といふものが……。」

と姨様はもう顫聲になつて、眼の中を潤ましてゐる。

「ですから自分も貴方、涙を滴して悔しがつてねえ、親にまで見放されるやうな不束なものなら、生きてゐる効が無いからつてねえ、自分はもう死ぬ氣で、許字の娘の寫眞まで引裂いてしまつて……。」

と内君もほろ／＼涙を滴し始めると、姨様は袂から丸めた紙を出して、披げる間も無く眼を拭き／＼、

「どんなにか、ねえ貴方……。」と洟を啜る。

「而して其手紙を壁へ貼付けて、それを見い見い勉强してゐる心地は、どんなだらうと思ひますと、情無くて情無くて。」

と言ひながら又泣く。

みしり／＼と階子を踏む音に、姨様は顔を擧げると、怪げなる銘仙の綿入にフラネルのぼやけたのを重ねた褂と、薄汚い白足袋とが見える。

やがて下りて來たのは二十五六の、ひよろひよろと高い、柔和相の男で、髪は蓬の如く、鬱陶しさうに額へ振被つて、口髭が疎に生えて、蒼白い頬に顴骨が露立つて、鼻孔が煤ぼけて、眼が朦然して、氣の無い顔で懐手をしながら、下りて來ると、火鉢の側に見馴れぬ老婦が在るので、一寸會釋をして、のそり／＼と勝手へ行くのを、姨様は珍しげに目迎へて之を送り、

「あの方ですか。」と極小聲で訊ねる。

「彼でございますよ。まるで病人でせう。」

「嘸まあ、ねえ。」と姨様は大息を吐いてゐると、流許で水を覆ける音がざつざ／＼。

「何でございますえ。」と吃となる。

「水を浴びてるのでございますよ。」

「水を？」と眼を圓くして、「ふう、」と感じ入つて、

「水垢離？　然矣、もうかういふ時には、何でも信心の事でございますよ。」

「なに信心といふ譯ぢやございませんけれど、甚く勉强をしますと、逆上て頭痛がするさうで、日に二三度位あゝして冷すのでございます。」

「おや然で。私は又、行を爲さるのかと思ひましたよ。それでもまあ眞箇に大抵ぢやございませんね。その試驗とやらの御勉强ばかりぢや無し、お國の事やら何や彼や、三方四方の御心配で、さぞ御體も傷むことでせうけれど、そこがお若いお方だから、まあ格別の事も無いのでございますが、あなたも折角御面倒を見てお上げなさいましよ。段々世中が難しくなるほど、何に成らうと、生半熟なことぢや行きませんねえ。」

「さうで御座いますとも。彼人も此四月が首尾好く參れば、そこで一肩拔けるやうなものですけれど、それから玄關を構へて、一流行らして、株にするまでが、又骨でございます。」

「この先は先で、又如何とも成るものですから、兎も角も此四月を、ねえ貴方、好くばいいと、何卒まあ。」

「眞箇に然でございますよ。」

「それでも勝負事は時の運でございますから、どういふ拍子で仕損じがあらうとも、ねえ貴方、決して短氣な了簡なんぞをお出しなすつちやいけませんから、よく其事を、ねえ貴方。」

「それはもう、宿夫も私も、申してをる段ぢやございません。」

「若い内といふものは、後前見ずに隨分つまらない了簡を出すものでございますから、眞箇にお氣をお着けなさいましよ。」

と有繋老年だけに取越苦勞をして、萬一の事

でもあつてはと、眞に番でもしてゐたいほどに思ふのに、内君は然して心配さうにも見えぬのさ、奴樣は氣が揉めて、氣が揉めて。

（四）記憶力

この烟草屋の二階に勉強してゐる醫術開業後期受驗生は、埼玉縣平民味木長助の長男靜馬（二十六年）といふものである。

幼少の時から學問が所好だといふのが親父大の自慢で、此奴には鋤鍬は持たせたくねえものだと、十四の歳から東京に出して、日本橋で有名の小兒科山路朴卿の玄關に住込ました。

當分塾僕のやうなことを勤めてゐる間に、調合を覺えて、藥局の助手までになると、それからは勉強時間も自由に與へられて、假（藪）といふのが醫者の隱語であるならば、正に是錦苞の稈龍地を拙いて、淩雲一寸の心を露し來れる靜馬は、美くも二十の歳から代診試補に擧げられ、傍ら藥局の取締を預つてゐたが、二年の後には一廉の代診生と成果せたのも、一つは容貌の極めて温和なるのと、氣質の至つて篤實なるのが、與りて力を致したのである。

學理の方は少しく覺束ないが、施術はなるほど巧者なもので、長年實地で鍛へた匕頭は一寸侮難い、と先生も陰ながら頼もしく思うてゐらるゝ。病家から、是非味木樣にと言つて來るほどの馴染も大分あるのだから、舊時ならば山路朴卿先生出張所の看板を掲けて、一戸關構へて、可也に行れる業はあるのであるが、當今では開業試驗を經なければ、禮を取つては瘤に唾を布けてやることもならぬ。そこで内務省の試驗を受けると云ふことになる。靜馬も其氣で粉骨碎身するのであるが、此人にして此病ありと謂はうか、其記憶力の鈍なことは太甚しい。であるが、全體の記憶力が遲鈍といふのでは無くて、單に其が學問上に止まるとは、なほさら因果である。

自分も然と知つてゐるから、衆の二倍も三倍も勉強する。けれども、衆の半分ほどよりは記憶めぬので、然も無くては、始終机に向つてゐながら、前期試驗を四度も取外さう理が無い。四度目も兎も角も五度目には及第したけれども、四度目の落第の其日は謂ふにも及ばぬ、當座は切りに考へた。自分は全く記憶力は無いのか。無いものならば勉強するのは無益の事だ。到底學問することの出來ない體だ。それに未練を出して、及ばぬ事に骨を折らうよりは、分相應の業に就くのが道であらう。而も孤獨といふのでは無し、國には兩親が自分の一人前になるのを待切つてゐるのだから、いつまでも呑氣に落第ばかりしては居られない。醫者は罷めやう？　學問は不適當だ！　百姓の子に矢張百姓か知らぬ。

とは念つたが、十何年も年季を入れて修行した醫者を今更罷めて、百姓なり商人なり、これから又新規に蒔直すのは、如何にも殘念でならぬ。なるほど記憶力は惡い、試驗には落第する。實に學生としては此程不面目の事は無い、既に學生たるの資格は無いのである。が醫術の方では如何だ？　先生にも折々賞められる、病家の方の受も好い。また隨分手重い患者に處方の工夫をして、面白いほど思はく通りに行つた事も往々ある。其度に先生を驚かしたが、自分ながらも診斷は容易で、何となく病根が眼に見えるやうな心地がする。であるから藥も利かうし、病も治らうし、從つて信用も厚からうといふのである。

醫者といふものは一體如何いふ者であらう？　無論、病を治すのが醫者だ。病を上手に治しさへすれば、それで醫者は可いのだ。可いどころでは無い、名醫だ。世間には病理が精くて、施術の一向いかぬ人もあれば、また其反對のも

ある。して見れば、學力があるから必す落第を善くするとも限らなければ、學力が無いから落第が下手とも附かぬ。餅屋もあれば酒屋もあるのだ。自分は如何にも記憶が悪いから、試験問題に十分の答案を與へることは下手だけれども、いつでも其問題が解らぬのではない、解つてはゐるが、思ふやうに書けないので、もし其問題を實地に應用するくらゐなら、嚢の物を探るやうなものだ。

　自分は學術より實地の方が長けてゐるのだから、かうして代診生こそしてゐるけれど、其道に開業してゐる學士連中と立並んでも、腕盡ならば決して敗は取らぬ。それに今更罷めるといふのは實に愚の至だ。わづか二度の試験さへ濟してしまへば、それで可いのだから、爰で氣を腐らすのは損だ。どんなにしても貫いてしまはう。

　流石に心配を爲たゞけの効が有つて、五度目には首尾の免状を取つたから、さあ此勢！　一擧直ちに我くれしと、勇進して、翌年の後期試験に懸ると、脆くも斥ねられた。續いて其翌年も何やら彼やら落第．

　静馬は、上は奥より下は臺所、車夫の末に到るまでが、味木様々々々と、ちやほや言ふほど人氣があるのであるから、始終落第ばかり爲てゐても、それを氣毒がられこそすれ、誰一人態を見ろと好氣味がる者が無いから、同じ面目無いながらも、居られるやうなものであるが、之が日頃憎まれてゐたものなら、尋常外れて某所の皮が厚くでも無ければ、をめ／＼と代診でござると、突袖で澄してはゐられぬのである。

　然無くても、静馬が心中の愁さは、實に言ふにも言はれぬ。

　先生の子供が及第したの、賞品を貰つたの、と噂をされる度に、總身の肉がひく／＼動く。

　静馬が此程落第して、其都度三圓なり五圓なり棄てさせられながら、先生は唯の一度（亦か）と言つたことも無ければ、不興な顔色を見せたことも無い。例のやうに快濶な調子で、

「慢々やれ、大器は晩成だ。」と機嫌好く笑ふ。

　奥様は奥様で、わざと手輕に、

「おや然でしたか。又この秋がありますわね。」

と慰める。

　それが實に肝に徹へる、毒舌の熱罵より肝に徹へる。

　後期試験も此春で三度目！　もう今度は遁すまい。遁すまいでは無い、斷然遁さない！　命に換へても遁さない、と静馬は健にも覺悟した。

　試験には未だ七十日許も間があるので、受験生の多数は、書燈を吹消して寄席へ出懸けるもあれば、机の上に書を伏せて花牌を始めるのもあるなど、用意をさ／＼懈つて、光陰の流るゝを質ほどには驚かず。勉強と遊戯は間際で可いものさ、と落着いてゐるけれども、静馬の身は然してはゐられぬから、暇を乞つて、從兄の煙草屋の二階に閉居して、はや試験の準備に着手したのである。

　國許でも毎々心配してゐるのであるから、今度は屹度錦を衣て歸るから樂みにして待つてゐてくれ、と一通嬉がらしてやると、親父から以ての外の返事。それは女房が隣の遠様に話した通り、今度といふ今度落第したら、一も二も無く親子の緣を切る。而して許字のお政に婿を納つて、それで家の名跡は立てる、といふのである。

　尤も、去年の秋、二度目の落第の時、既に此事は言來したのであるが、此度の手紙は、いかにも其と了簡を固めたらしく、殊に嚴かに書いてある。

　親であり、子であれば、盗するやうな悪漢でも、可愛のが人情であるのに、常々勉強して

ゐるのをも知りながら、毎度落第するからと云つて、親子の縁を切るとは情無い。而してお政には婿を納る！　凡そ人の子としての不面目、一個の男子としての恥辱。なるほど我は親にまで見限られるやうな無能漢かは知らぬけれど、餘り口惜い。無理かは知らぬが腹が立つ。爰で如落第をした曉には、まづ親には愛想を盡かされる、先生夫婦へは顔向が出來ぬ、朋友へ對しては面目無い　古風な言は道ふやうだが、實に生きてはゐられぬ體だ。世の中は四尺五寸になりにけりといふ歌があるが、それに違無い、天地濶しと雖も身を容るゝに所無しだ。死ぬのだ、潔く死ぬのだ！　死ぬ覺悟なら天下に可恐いものも無ければ、苦しいことも無い。その精神で一つ勉強するだ。

　静馬は感激して狂せる如く、いでや死を以て及第を買はむと決心したのである。

（五）讀書癖

　寝床は机の側に敷放で、静馬は夜も碌に睡らずに勉強して、朝でも晝でも宵でも、堪らなく疲れて來ると、そのまゝ打僵れるのである。

　それほどであれば、三度の食も快く吭へは通らぬので、多くは生鶏子で凌いで、合間には食麪包を咬りながら書見をする。元來入浴が嫌ひといふのに、此始末であるから、何が日にも湯に入らぬのが、始終洋燈には燻らされる、着のまゝでは寝ると謂ふので、その不潔は夥しい。

　長い間の事であるから、鬱屈して病めるが如くなる。それに静馬は散歩に出やうとする氣色も無い。食事をするのも、入浴するのも、散歩するのも、究竟は讀書の單調に與ふべき好變化で、之に因て眠れる如き精神を興奮し、死せるが如き氣力を復活する。いかに醫者の不養生とは謂ひながら、然らぬだに記憶力が無いと喞つ腦髓は、其が爲に益遲鈍になるとは心着かぬのであるか。

　否、静馬は心着いてもゐれば、知つてもゐる。先生の常に忠告するのも此點であるから、無論十分に曉つてゐる、のみでは無い、實行せうとも心懸けて、忘るゝ事は無いのである。けれども静馬には其が爲得ない。元來量の狹い質であるから、是と一事に拘らふと、寐ても寤めても其が心に繋つて、兎も角も片附けてしまふまでは、胸が安まらぬといふのである。

　まして一身の浮沈に關するほどの大事！　それのみか、恥辱といひ、義理といひ、一旦事破れなば、命は捨てやうと、心に誓つたくらゐの今度の試驗は、實に幾分膽大疎豪の輩と雖も、顔色を失ふ可き一大難題であれば、小心の静馬が身にしては、「肺結核も既に乾性に陷りて、打診上には全腸濁音を呈し、聽診上には到る所水泡音を聽かざる無し。」と診斷された神經家の如く、可恐くも、悲しくも、愁くも、情無くもある。

　この自覺には、勉強して記憶するより外は無いので、机に向つて書を披いてゐれば、其間は希望も、義理も、恥辱も、名利も、何も一切忘れ果てる。やがて疲勞が出て少時休むか、或は用事にでも立つか、一分間でも書見してをらぬと、空間を容さるゝ腦の裏に、忘れてゐた思想が忽ち群つて顯れる。是が心の鬼か、身を責めらるゝ苦惱に、静馬は少時も書と眼とを離しかねる。それが、膳に向つて、二千粒もある一碗の飯を、二本の箸で悶着してゐられやう理が無い。業に如此であるから、入浴、散歩は言ふまでも無い。

　此上にまた静馬は寐るのを喜ばぬ。寐るのは喜ばぬでは無いが、夢を見るのを忌むのである。試驗準備以來交睫めば必ず夢を見る、それが又盡く惡夢で、診察所の椅子の上で立

腹を切損じたり、乞食姿で在所の我家の門に倚る寐をしたり、試驗官に斬りかけて捕縛されたり、國の許嫁が醫學博士と駈落したり。

（六）正信偈

亭主はもう店に出て、跡には女房が火鉢の傍を離れがたなき風情で、寂しさうに香箱をつくつてゐると、時しも姨樣は煙草屋からちよこちよこと歸つて來る。

二階へ昇りながら一寸聲を懸けて、挨拶の樣子でも好からうものなら、直に話しこまうといふお積であるから、女房は適宜に遇ふ氣で構へてゐると、豈計らむや、姨樣は物をも言はず直と昇つてしまつたので、女房は利かない辛子を舐めたといふ見得で、けろんとして階子を瞻げてゐたが、

「珍しい事たよ。」と獨語つ。其が聞えたか、あらぬか、亭主は店から頭を振向けて、

「姨樣歸つたな。」

「あゝ歸りましたよ。何だか變ですよ。鬱いでるやう。」

「鬱いでる？」

「怫然としてるやうでもあるし。」

「奈何したのだ。餘りお前がつんけんするから、御機嫌を損じたのだらう。」

「私は何もつんけんしやしませんよ。お隣で口論でもしたのぢやありませんか。」

「口論なんどをするやうな氣の强い人ぢやない。」

「それとも氣分でも不快のか知らん。」

「さう、そんな事かも知れないよ。一寸お前二階へ行つて樣子を見て來な。」

「御容體何？」と氣の無い聲をして立ちかねてゐる。

「行つて來なよ、早く。」と急きこまれて、

「今行きますよ。」とじぶくりながら、千鈞の鼎を扛るが如く身を起して、

「行くのも可いけれど、又捉まつて話しこまれると困つちまふ。これから襦袢の袖を附けて、午餐の蓮根を茹で……。」

「早く行つて來なと云ふのに。」と亭主は大憤に憤れて、今にも其邊の物を取つて投着けさうな見脈に、女房はやう／＼恐怖を鎭して、「ぢや行つて來ますよ。」と階子の口まで行くか行かぬに、二階で鈴の音が二聲、續いて、

「歸命無量壽如來南無不可思議光法藏菩薩因位時在世自在王佛所……。」

女房は之を聞くと、ばた／＼と逃還つて、

「あれ、お經が始りましたよ。」

「うゝ、なるほど、南無不可思議光法藏だ。何だつて今頃始めたのだらう。今朝もうお勤行は濟むだのぢやないか。」

「えゝ、もう一遍濟むだのですとも。」

「はてな、晩のゝ御取越といふ洒落でも無からうに。」

と亭主は少時首を傾けてゐたが、

「行つて見な行つて見な。」

女房は階子の口から首だけ出して、二階の樣子を窺ふと、姨樣は戸棚の佛壇の前に端坐して、一心一向に阿彌陀佛を深く賴みまゐらせてゐる。有繋に心無く聲も懸けかねて、女房は少時視てゐたが、別に變つたところも無いやうであるから、まづ安心して下りて行く。

輪燈の燿く處、香爐の薫ずる邊、姿見の火影に立たせ給ふ如來の尊像は、（夫人間の浮生なる相を倩觀ずるに）と今にも宣給ふ可く拜まれる。念佛の行者は心靜に唯可信斯高僧說と唱了して席を退くと、直に女房が入つて來て、前の如く階子段に立ちながら、

「姨樣、如何なすつたの？」

「如何とは？」

「否、如何かなすつたのぢや無いのですか。」

「如何かしたとは？」と未だ解らぬ。これは解らぬ方が何やら道理らしい。けれども平生が解らない姨様であるから、之も無理に解らないにしてしまつて、

「あれさ、氣分でも御不快のぢやありませんか。」

「否、如何もしませんよ。」と煙に卷れて女房の顏を凝然と視てゐる。

「それでも先刻お隣からお歸んなすつた時、何だか鬱いでお在のやうでしたから、氣分でも御不快のかと思ひまして。それに、例に無く今頃勤行なんぞを爲すつたから……。」

「おや、然う。有難う、それで態々尋ねておくんなすつたの。何、さういふ事實ぢや無いのだから安心して下さいよ。まあお昇りな、よう、お茶でも煎れませう。」

と火箸を把つて鉄瓶の下を撥ける。そりやこそ一大事と女房は狼狽へて、

「否、また後刻ゆつくり。」と片足下りる。

「でも、もうちん／＼いつてるから。」と鐵瓶に觸つて、蓋を取つて、湯氣の立つところを見せて、

「時ならない時分に勤行をしたのは外の事では無いけれど、昨夜の、それ唸聲が聞えたといふ話ね、あれが能く聽いて見ると、お隣の二階へ書生様が來てゐるのさ。その書生様の事に就いて、それは／＼涙の滴れる話が色々あつて。まあお昇りよ、此方へ。そこぢや話が出來ないから。」

「今少し爲かけた用がありますから、後刻ゆつくり上ります。」と言ひながら一段下りる。

「あれさ、もうお茶が煎るといふのに。」

「後刻ゆつくり。」と又一段下りると、姨様は立つて來さうなので、女房はもう堪らず、一散に斷下りると裾を踏へて、どた／＼と辷落ちる。

（七）隣は麵包

姨様の心願なるものは、實に現世當來の兩界に亙つて、唯二つよりは無かつたのである。玉露を煮て合口の友と頤の痛くなるほど話をして見たいのと、彌陀の報土に往生したいのと。其は昔。隣の内君から靜馬の身上を聽いてからといふものは、合口の友も極樂淨土も二の次になつて、一向に靜馬の及第を祈るばかりである。

隣家から歸つて來た時鬱いでゐたのも、來る四月の安否が危はれるゆゑであつて、怫然としてゐたのは、かういふ勉強家で、かういふ氣毒な身上の人を、幾度も／＼落第させる掛の役人の無慈悲を憤る餘でがなあらう。又時ならぬに正信偈を誦じて、如來様にお願ひ申上げたのも、我身の未來の事では無くて、あはれ靜馬の一命を助けさせ給へとお頼み申したのである。

後生を助けていたゞくのが御宗旨の本願だに、塵一筋の慾も現世の事に願はれぬのである；と知りつゝ我身の後生を忘れて、緣無き他人の現世を願ふ心の中は、當流の開山聖人も照覽あれ、抑も十惡五逆の罪人をも助けたまはむとの大願を起しまし／＼たる阿彌陀佛の慈悲にも劣るまじく、末法の世の女人には、いと／＼有難くも尊さは、是ぞ即ち煩惱を斷ぜずして涅槃を得るもの乎。

かういふ話こそ、聞いて置いて益になるからと、姨様は折角女房にも聞かせやうと思つたのに、慌てゝ逃げてしまつた跡は、獨り孑然として物の寂しいにつけて、壁一重隣に苦學の肩を聳かす靜馬の事が懷ひ出される。

今度遣損つたら死ぬと言つた。それは餘り了簡が狹過ぎる。男は氣で持てと謂つて、そんな氣の小さなことでなるものか。一旦からと念込むだ事は死ぬまで遣る、遣遂げなければ死ない、といふぐらゐの肚で無くちやいけない。

短氣な了簡は出さないが善いのさ。私なんぞこそ、死ねばまあ〳〵有難いことには、阿彌陀樣の御傍へ行かれるといふ樂みもあるけれども、若い身では信心もあるまいから、今死んだとて行所は無し、これからが全盛の體でもあることだから、何でも彼でも愛の所は勉強して、この四月には首尾好く遣つて、早く立派なお醫者樣におなんなさいよ。及ばずながら私も阿彌陀樣へお願ひ申して見るから、貴方もまあ精々遣つて下さいよ。他人の私でさへ色々考へると、嘸愁からうと思ふから、貴方の身になつたら、半時だつて心の休まることは有りますまいけれど、そこが修行で、辛いのが修行だから。」

と姨樣は肚の中に泣きながら慰めて、愛は戀ならば、正是灰に守を着く物思の所なれど、安火に凭れて珠數を爪繰つて、時々思出したやうに念佛を唱へてゐる間、下から女房の聲に、

「姨樣、御膳！」

「おや、もう午飯かねえ。」と立起つて、

「お隣の人は目覺めた。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。」

（八）貧の一燈

冬の夜風の寒い橋の袂に、賣るほども無い燐寸枝を並べて、薄暗いカンテラの陰に四歳ばかりの兒が霜の蓆にすや〳〵と睡てゐる側に、干魚のやうな乳兒を抱へて、往來ふ人に泣顏を曝す女乞食を見懸けた時は、惻然に胸が一杯になつて、買物の錢と知りつゝ巾着に手が懸る。有餘る金子があるならば、かういふ者を引取つて世話してやつたらば、嘸功德にならうとまで考へるが、橋一つ越ゆれば直に忘れてしまつて、縁日の植木屋の前を通ると、欲しい鉢の梅が幾株もある。

猫が鼠を食へるのを見ても、噫可哀さうだと思へば、鳥屋の店頭に樽の中から鷄が黄色の足を出してゐるのを見ても、噫酷たらしいと、一寸した事が情無い代りには、直傍から忘れもする。忘れる傍から又情無くもなる。その後が御念佛！といふ次第になつてゐるのであるが、今度の靜馬の件ばかりは、女乞食にも、鼠にも、鷄の足にも勝して憫らしいのが、姨樣は浸々と忘れられぬ、啻忘れられぬばかりでは無い、自分も味木靜馬のやうな氣がして、此四月が懸念で〳〵、どうか好くやりたい念が鳩尾の邊で鬱勃してゐる。

贔屓の力士が取組む時には思はず力瘤が出て、後で肩が凝る。贔屓の俳優が手柄でも負はされると、もう〳〵情無くなつて、觀てゐる空は無い。靜馬は實に姨樣の贔屓である。力士は強いとか、愛嬌があるとか、俳優は藝とか顏とか、何處と無く好いたらしいとか、それ〳〵に贔屓の點がある。姨樣に靜馬を贔屓の點は、些と異つて、その身上の憫然に在るのである。人は其得意の點で愛されるよりは、失意の點で憐まれる方が寧ろ能く人の情を鍾める。

容易に感じる代りには容易に忘れる人が、容易に感じて容易に忘れられぬとあるからは、靜馬の身上話は御門跡樣の御一言の如く、深く姨樣の臓腑に入つたものと見える。

かほどに思ふ靜馬の事であれば、身に應つた事ならば、何なりともして今度は卒業させたいと、心は矢竹に逸るけれども、自分の力の最も及びかねる金の沙汰でも、是ばかりは行かぬのであるから、何ほど陰で思つても、手の着けやうが無い。譬へば鐘の七徳と謂ひたいが、恐らく其より未だ[illegible]。

思案に餘つて、無理をば阿彌陀樣にお願ひ申したのであるが、それでも氣が休まらぬ、と謂つては勿體なけれど、寐る目も寐ずに勉強してゐることを思ふと、少しは其苦患も助けたい。

燈が點くと間も無く、姨樣は（一寸買物に）と出懸けたが、稍半時も經つて、裏口が蹈と啓いたと思ふと、水口の油障子をこそ〳〵と叩いて、

「お金さん〳〵。」と女房の名を呼ぶ聲がする。生憎お金は人知れず何やら頰張つて、茶を一口今嚥むだばかりのところを出拔かれて、周章狼狽ながら、「姨樣？」と問返したのが、口に物があるから、ウバラアといふやうに聞えたので、

「私だよ。今歸つたのだよ。」と姨樣は頻に名乘る。

此時女房はやう〳〵何やらを嚥下して、

「其處は開きますよ。」と少しく慳貪に言ふ。御隱居樣ぢや無し。手があるのに勝手に啓けるがいゝ。御大相な、といふ肚で、女房は膨れてゐる。

「入るのぢや無いよ。一寸お隣へ行つて來るから。」

と出て行くと、女房は水口を横目に睨むで、

「よくお隣へ行くよ。何の用があるのだらう。あゝ胸に閊へた。」

と土瓶に手を懸ける時が、話次分頭姨樣が煙草屋の裏口を入つた頃である。

「御免下さい、又上りました。」

と然も氣毒さうに躊躇しながら、臺所へ上りは上つたが、居間の障子が啓きもしなければ、内から何方とも言はぬ。眞を引込めた釣玻璃燈が不景氣に留守をしてゐるかの如く、障子の硝子越に見える。姨樣は竊と板間を躡むで、居間の中を窺ひながら、

「お留守でございますか。」と訪ふと、矢庭に店から十一二の小僧が飛んで來て、奮然障子を開けて突走ると、闇い所に在る姨樣を通拔けて、水口まで行つて、

「へい、何方でございます。」と甲走る。

「内君はお留守ですか。」と背後から聲を懸けられて、小僧は慄然としたか、顫聲で、

「へい何方？」と團栗眼で見廻す。

「私ですよ。」と明るい處へ出ると、小僧は笑ひかけて、

「あ、お隣の姨樣……吃驚した、吃驚しました。」

と獅嚙面をして洟を吸つて、それから横撫をして、

「内君ですか。お湯へ行らつしやいました。」

「おや、お湯へ？　然ですか。もう餘程前ですか。」

「えい、唯今、内君のお湯は長いのですよ。」

店番の旦那は臺所の問答を聞着けて、

「平太郎、何方だ？」と喚はる。

「お隣の姨樣でございます。」

と答へると、其限吽とも諾とも挨拶が無いので、姨樣も立往生、小僧も立往生。風が標を驅ける。

姨樣は袂の中に大事の物あるが如く窸々と搜つて見て、

「そんなら一寸旦那にお目に懸つて。」

と居間へ入ると、小僧は先に立つて、

「旦那、お隣の姨樣が入らつしやいました。」

と通じると、可恐く睨みつけられた揚句が、

「店へ行つてろ！」と噛付くやうに叱咤られて、蝸牛が角を斂めたやうな恰好をして、こそ〳〵店頭へ逃げて行く。何で叱られたのか、小僧は自分ながら一向解らぬ。姨樣も傍に見てゐて全然解らぬ。

旦那は一面は呶鳴り、一面は莞然に、

「おや、姨樣！」と急作の機嫌顏。惣領のお組もよろしくと謂ふ見得である。

少時照れてゐた姨樣も、此一言に間を直して、

「今晩は。毎度もう上りまして お喧しうござ

います。」
　と座に着くと、旦那の顏は忽ち苦々しくなる。傍から然あらぬ體を裝つて、
「生憎只今湯に參りましたが、歸途に一寸寄る家がありますから、遲くなるかも知れませんよ。女の湯といふ奴は長いものでなあ。」
　はっはっはっと空々しく笑ふ。
「さうで御座いますともね。私のやうな老婦でも小一時間は懸りますから、お若くって在らつしやるのですもの、その理でございますよ。又男樣のお湯といつたら、眞個に鴉の行水で、是と比較にはなりませんわね。未だ〳〵其でも素人のお湯は短いのでございますよ。茶屋女だとか、藝者、ま藝者のお湯と謂つたら、凡そ長湯の女の二人前よりは長うございませう。あれで湯錢が同じなのでは湯屋が引合ひませんと。是は眞でございませうよ。たしか宇都宮とか申しましたよ、あの、それ釣天井の騷動がございました、あの大工に何とか申しましたね。あの、それ與…何とか、與、與四郎、與四郎、殺されましたね、可哀さうに、大事を他言するからとつて。さうすると又將軍樣を御湯殿へ入れて、一人で舁いだお侍がございます、其は石川八左衛門。昔は隨分強い人があつたと見えますねえ。」
　湯錢が一轉して釣天井の實談となる。然ればこそ田鼠化して鶉となり、雀海中に入つて蛤となる。黙つて聽いてゐやうなら、昔の強い人物語が始まつて、追ては宮本武勇傳、尼子の十勇士等を今様に演じられるかも知れぬ。爰は神妙に承はつてゐる所で無いと、旦那は構はず相槌を入れる、
「その宇都宮では、ねえ貴方、尋常の湯錢が八厘で、藝者といふと二錢五厘ださうでございますよ。これは感心好い規定ぢやございませんかね。東京でも早くそんな事に致せば可うございますのに、ねえ貴方。」
　湯錢に就いては、旦那も持論無きにしもあらざるけれども、若夫此姨樣に取合つたら、滔々たり、滾々たり數十萬言、車轄を炙るが如く、電鈴の狂つた如く、息も續かさず聞かされるのを恐縮して、物言へば唇寒し秋の風、見猿聞か猿言は猿がよしと、ほんの御挨拶までに、
「左樣々々。」　と受けてゐる。
（左樣々々）の鰾膠無さぐらゐでは、姨樣更に撓まず、どうめった、からめったと、縱橫無盡に得意の長舌を弄する。旦那も之には閉口頓首の額を掉いて、此上は手短に引導を渡してしまふより外は無いと、急に不興な氣色をして、碌々返事もせずに、折々已むを得ざる場合には、鼻頭で（ふん〳〵）とばかり、火災保險に加入してゐる人が一點鐘を聞いたほどの無頓着さ加減に遇つておくと、有繋の姨樣も少しく氣の拔けた鹽梅。爰で最一息と、旦那は柱に懸けてある賣上帳を取つて、今日の附込を披げて見い見い、十露盤を彈いて見せる。姨樣も之でぐんにやり。漸く桃尻になりかけて、竊々と袂の中から菓子袋を取出す。旦那は之を横目で睨みながら、ぱちり〳〵と忙しげに珠音を立てゝゐる。姨樣は袂で揉めた袋の角を丹念に引立てゝ、恭々しく之を旦那の前に出して、
「あの、是は誠にお恥かしい品ではございますけれど、お二階の書生樣にお上げなすつて。」
といふ口上の、餘り思寄らぬのに旦那は驚いて、
「二階にをります書生に。之を？」
と不取敢禮を言ふべき所を、姨樣の面上に不思議があるかの如く、頭を延して、眼を圓くして、
「何かと思ひましたけれど、私風情の事でございますから行屆きません。ほんのもう志は松の

葉で、こんなものはお口にもお合ひなさいますまいけれど、今朝ほど色々内君からお噂を伺つて、ねえ貴方、私のやうなものでも陰ながら御心配申して、何卒まあ此四月には首尾好くねえ貴方、それはつかり苦勞にいたして、他人でさへ這麼に氣が揉めるのだから、彼方の身になつたら、それこそお大抵ぢや無からうって、ねえ貴方。それに御飯も碌にあがらないさうで、それぢや何ぼ何でも御健康に障りますよ。何か精の附く、根のお藥になるやうなものをと思ひましたけれど、牛肉や鷄卵のやうなものは召上つてゐらつしやいませうし。これでも色々と考へまして、これは最後の飴でございますが、大相脾胃の藥だと申しますから、御勉強なさりながら、お口へ入れて、なんと思ひまして、こんな物でも持つて上つたのでございます。未だ染々お目には懸りませんけれど、隣の婆が志だと、さうおつしやつて下さいましよ。」

高の知れたる飴の袋：脾胃の藥も凄じい。これしきの物を貰つて、大の男が禮も言はれぬ、やうなものではあるが、唯其志！尊さは長者の萬燈より貧の一燈。旦那は思はず頭を低げる。

「それは御深切様に有難うございます。然し、どうもお氣毒様でございますなあ。」

かういふ事になつて見ると、旦那も今更姉様を振りつけたのが面目無くて、

「靜馬も幾許にか喜びませう。有難うございます。」

と太甚く痛入る。

旦那を敵手では話が捗まぬので、體く物を置くと、姉様は匆々に歸る。跡に旦那は飴の袋を取上げて、

「氣の毒だなあ、無け無しの錢で這麼ものでも買つて來て。」

と呟きながら、袋の口を開けて覗いてゐるのを、小僧は又一心に眺めてゐる。

これでも心配して、靜馬にって持つて來てくれた所が有難い。その實が忝いよ。あゝいふ人だから、何が可からう、彼が可からうと、色色氣を揉むで、飴か可からうとなつたのだ。何か返禮をしてやらざなるまい。海苔か、羊羹か雞卵かと、魂は戸棚へ入つて、到來物の中を搔捜してゐる間に、女房は蒸したての薩芋のやうになつて歸つて來る。

「おい、惜いことをした。今お客様がお歸りになつた所だ。」

と旦那は眞顔で言ふと、

「お客様？　誰？」と女房は赤光に照らつく額を引向ける。

「中てゝ見な。お前の好きなお方よ。珍客さ。」

と鐵漿附仕人といふ見得で煙草を輪に吐く。

「誰さ、眞個に。」と女房は向になると、傍然居頭に聲ありて、げら〳〵と笑ふものは小僧平太郎なり。旦那は吃驚して、

「何だ、その聲は？　宛然化物が笑ふやうだ。」

「でも可笑うございますもの、内君は本當にしてゐるんですもの。」

「いゝから默つてろ！　鼻汁でも拭め、鼻洟でも。」

旦那が小僧を窘めてゐる間に、女房は飴の袋に眼を着けて、

「おや、其袋は何です。」

「これが其お客様のお土産よ。」

「しみつたれなお土産ぢやありませんか。本當に誰ですよ。」

「實は隣の姨様よ。」

「へえゝ。」と女房は笑ひかけて、

「なるほど姨様らしいお土産だ。」

「そんな事を言ふな。此には段々事情があるのだ。」

「何？　お煎餅ですか。麵包菓子らしい。」

「下司張つたことを言はずに、まあ事情を聞けてば。」

「でも、まあ何ですよう。」

「下司張つた奴だなあ。」

と言はせも果てず、ちよろり袋を攫ふ。

「これさ。」　と旦那が手を出す間には口を開けて、

「おや〳〵打切だ。」

「手を着けちや惡いよ、靜馬の所へ來たのだから。」

「靜馬樣の所へ、然う、姨樣が？」

と袋を下に置くと、旦那は徐に其由來を語つて、

「憎くはない人さ。」　と珍しいことを言ふ。

「それでも煩くて嫌ひだ、とお前樣常住言つてる癖に。」

「それは、煩いことは煩いやな。煩いと憎くないとは別物だ。」

「でも嫌ひだと言ふぢやありませんか。」

「嫌ひなこともあれば、嫌ひでないこともあらあ。」

「勝手な！」

「何さ、姨樣は嫌ひぢやないけれど、但あの喋りつけられるのに閉口するのよ。今晩も弱らせられたぜ。」

「何を其樣に？」　と顏を顰める。

「何をたつて、彼をたつて、可恐く虐られちやつた。あれを敵手に爲やうと謂ふのだから、お前も餘程佞舌には違ひ無い。第一、根が無くちや出來ない仕事だ。」

「なぜ根が無くちや？」

「根も入らうぢや無いかい。あの雜談を神妙に聽いてゐやうと謂ふのは、なか〳〵の辛抱だぞ。あの病さへ無けりや、申分の無い好い姨樣だけれど、人每に一つの癖はあるものよとは、好く謂つたよ。」

「あれで又彼姨樣は好いのですよ。」

「曾我兄弟も大石も敵討たねば尋常の士か。はつはつはつ。」

「でも、まあ深切に好くねえ……。」

と女房は飴の袋を横にしたり、竪にしたり、

「これだつて姨樣の嚢中ぢや、なか〳〵大したことだ。」

と獨語のやうに言ふ。

「然とも。これで此飴は廉くないよ。十錢だらうか。」

「十錢はしませうよ。ほんとに氣毒な、姨樣の十錢は我家あたりの壹圓より痛事でさあね。」

「我家あたりの壹圓なんぞ、と甚く大盡がるが、そんなに心得てゐるなら、ちつとばかり拜借したいものだ。」

女房は鼻でフン。

「貸せなら貸すまいものでも無いけれど、去年からの貸を一先お返しなさいな。」　と頤を突出す。

「頓でもねえ科詞を云ふ！　憚んながら未だ嚊の臍繰を胡麻和すほど耄碌はしねえ。」

「嚊の臍繰？」　と亭主の顏を見て、わざと失笑す。

「何を笑ふのだ。」

「躰の好いことをお言ひなさんなよ、嚊の臍繰だなんて。お前樣が他に臍繰らせる風か！」

「其中で臍繰るだらう。」

「大概におしなさいな。世間の女房はね、十人が九人までは臍繰つてゐる。それは、偶には芝居の一つも見たからうし、帶も欲しからうし、女房は女房の義理首尾もあらうと、そこは色々察して、大目にも見れば、少しは餘計にも給つてくれるから、自然と臍繰れるやうなものだけれど……。」

「それから恁麽したい。」

「後は言はずとお前樣の惡口さ。」

（九）漂母の餐

互ひに冷一句、熱一句、少時は口說のやうな、戲言のやうな事を言合つて、結極が、

「早く之を二階へ持つて行きなよ。」

といふ旦那の被仰出。然るほどに女房は飴の袋を抱へて、階子を騰つて行くと、書燈耿々として一閑張の机を照し、主は壁に靠れの縮小まつて、他愛無く睡てゐる。

女房は竊と火鉢の側へ行つて、

「靜馬樣、もし、お風を引きますよ。」

と鐵瓶の下を覗くと、火は消えて灰ばかり。

「おや、まあ、如何したのだらう。」

と烏府を引寄せる。見ると靜馬は未だ眼を覺まさぬ。

「もし、靜馬樣、靜馬樣、靜馬樣！」

と痿臂を伸して靜馬の肩の邊を搖れば、愕然と夢覺めて、

「あゝ寒。」 と身顫して、眼を刮り〳〵呟をする。

「お風を引きますよ。」

「はあ、ついとろ〳〵と、あゝ睡かつた。」

と復た眼を刮つて、女房が火を熾してゐるのに心着いて、

「これは奈何も憚樣でございます。」

「貴方、火も何も消えてるのですもの。」

「消えましたかな。それぢや餘程睡たと見える。」 と生欠をして涙を浮べる。女房は火を吹いてゐた顏を擧げて、

「お睡うございませう、碌にお寢みなさらないのだから。今直にお湯が沸立ちますと、お眼覺にお茶を煎れて上げます。」

「有難うございます。どうも色々御厄介になりまして、お手の無い所を濟みません。」

「何の、そんな遠慮が入るものですか。ちつともお構ひ申しは爲ないのですから、貴方も我儘にしてゐて下さいよ。私はかういふ不作法者ですから、お客樣も何もありはしないので、なかなかお世話どころぢやありません。」

とぷう〳〵火を吹立てる。

「一寸どういたしまして。お蔭樣で思ふやうに勉强が出來ます。」

自分から言出して、「勉强」と聞くと、忽ち心に浮ぶ四月の成績、其が案じられて鬱ぎこむ。

「私は今凶な夢を見ましてね……。」

と靜馬は氣の無い顏をして話しかけると、

「もうお止なさいよう。貴方は苦勞性だから可けない。夢を見たからつて一々氣にした日には、際限は有りはしません。」

「それは何も、信じる譯ぢやありませんけれど、かういふ矢先だから餘り心地が快くないです。」

「貴方は男子にも似合はない。善いも惡いもあるものですか。夢ぐらゐ馬鹿々々しいものはありはしません、貴方が餘り苦勞に爲過ぎるから、それで凶な夢を見るのですよ。」

「無論自分でも然思つてるですけれど……。」

咜乎と長吁をして、

「實に學問は否だ！」

「また其樣ことをお言ひなさるよ。」

「此苦患をするくらゐなら、死んだ方が夐勝だと思ふですよ。」

「それは貴方、及第さへすりや先生になるのですもの。苦しいのも愁いのも、なあに今に昔語ですよ。」

「早く昔語にして、此二階で一晩皆樣を御馳走したいものです。」

「家ぢや其日はお赤飯を炊きますよ。」

と女房は膝を進めると、何と思つたか、靜馬は首を俛れて、ほろ〳〵と涙を滴す。

「如何なすつたの？」

と女房は毒ねたものゝ、手持無沙汰に呆れてゐる。靜馬は鼻を窄らして、

「それほど迄に思つて下さるかと思ふと、私は、う、う、嬉しくて……。」

と涙を拭く。

「それは、かうしてねえ、一家に在て貴方の勉强してゐらつしやる所を見て居るのですもの、揃夫だつて私だつて、どんなにか躍起勃起思つてるか知れやしません。ですから貴方が及第なすつたら、お赤飯を炊いて祝はうって、さう申してをるのですよ。」

彼此話す間に火は熾る、鐵瓶に松風は聞える。

「おや、私はすっぱり忘れてゐた。かういふお茶菓子が。」

と例の飴の袋を女房が出すのを見て、

「何ですか、其はどうも。」　と靜馬は一寸頭を低げる。

「これはね、今朝ほど下に來てゐました隣の姨様が、貴方へって、先刻わざ〳〵持つて來たのですよ。飴か何かで、お美くは無いものでせうけれど、貴方の話をしたものですから、御勉强の御見舞だといつて、厄介になつてゐるその、其賓しい中で、心に懸けて寄來したのですから、一つまあ食べてお上げなさいよ。」　と手渡すと、靜馬は戴いて机に載せて、暱と眺めてゐたが、忽ち捧げるやうに聲を放つて、

「噫、及第せずにはゐられない！」

「衆の念ばかりでも今度は及第ですよ。」

と女房は急須に湯を注す。

「皆様は這般に念つて下さるけれど、本人の私が覺束んのだから……。」

「何、そんな事があるものですか。まあお茶でも上つて氣を拔いて。その飴を上つて御覽なさいな。」

「はい有難う。早速戴きませう。」

と袋の口を開けて、女房へ差向けながら、

「あなた一つ如何です。」

「まあ貴方。」　と推返す。

「それぢやお先へ。」　と一つ摘むで、袋を女房の前に置いて、

「召上つて下さいよ。よう召上つて。」

と强ひるので、女房も袋を取上げると、果たる飴の中に唯一つ、確に辻占と見える紙片が入つてゐる。辻占入かと思へば、二つとは無い。兎も角も女房は摘出して、

「おや〳〵辻占がありましたよ。」　と珍しがる。靜馬も顏を出して、

「へえ、辻占が入つてるのですか。」

「何、入つてるのぢやありませんけれど、入つてたので、迷子の辻占。」

「何といふ辻占です。」

と氣にして益顏を出す。女房は之に歸命頂禮して、南無乾元亨利、乾元亨利、

「さあ御覽なさい。」　と火鉢の角に置く。靜馬は取つて披いて見ると、其文に曰く、

「たのもしいよ。」

此折からの辻占は、御夢想の神託よりも肝に銘じて、靜馬は心を轟かす傍に、女房は浪に推戴いて歡ぶ。靜馬は寂しく笑ひながら、

「好い辻占ですねえ。」

「好いの何のって。貴方、今度はいよ〳〵及第に極りましたよ。」

と掲示を見て來たやうに女房は確に請合ふ。

「はゝはゝ、あなた一人で極めてゐる。」

「極めてる譯ぢやありませんけれど、ちやんと如斯極つてるから仕方が無いぢやありませんか。」

と〈たのもしいよ〉を掌上に載せて靜馬へ突附ける。靜馬は歡喜さを推隱すやうな風が見えて、机に片肱立てゝ頭を掻きながら、

「當にはならんけれど、惡い心地はしませんなあ。」
「當にならないやうなもので、なか／＼是で馬鹿にできませんよ。物には前表といふ事が屹度有ります。それは爭はれないもの。」
何かゞ憑託つたやうに女房は力むだ顔をして、いと／＼嚴かに說示すので、靜馬は已むを得ず謹聽の首を傾ける。
「この辻占がさ、貴方、此飴に入つてゐるものに極つてゐるなら、何でも有りはしませんわね。ですけれど、唯一つ、どうか間違つて紛れこむでゐたのですから、唯の辻占とは理が違ひますよ。」
「然ですねえ。」と靜馬は輕く應へると、
「然ですとも。」と女房は力を入れる。
未だ／＼何か言はうとする所へ小僧が呼びに來る。
「唯よ。」と中腰になつて、
「此辻占を少し貸して下さいまし。下へ行つて見せてやりますから。而して明日また姨樣が來ませうから、來たら見せませうよ。嘸まあ、眞個に、どんなに歡びますだらう。」
「明日姨樣が來たら知らして下さいな。一寸挨拶に……。」
「あゝ、ようございます。まあ折角御勉强なさいまし。」
と階子の口まで行つたが、ちよこ／＼と立戻つて、
「姨樣といふ人はね、まことに話の冗い人ですから、その積で好加減に遇つておかないと可けませんからね。」
「あ、然ですか。」と飴の袋を取つて、
「之を何かに入れて下さいな。私は齒が惡いから、此樣には食べられんのですから、半分ほど其方へ何卒。」
「でも折角姨樣の……。」と斷るのを、種々に言宥められて、女房はまた袋を抱へて下りて行く。跡は大風の凪いだやうな、と謂ふほどでも無いが、潮に退かれて汀に殘る流木の如く、獨り佗しく靜馬は懷手をして考へてゐたが、やがて心に問ひ、心に應ふる如く、
「此飴は丁度漂母の餐だ！」
汝長大にして、好むで劔を帶ぶると雖も、能く我を刺さむや。似てゐる、餘程似てゐる。この辻占はまた好い、妻君の說に從つて、物には前表が有るとすると、漂母の餐は非常に好い辻占だ。
「あゝ漂母の餐、漂母の餐！」と机に向直る。

（十）若松樣

昨夜の留守も本意無ければ、靜馬の消息も聞きたくて、姨樣は朝の勤行をして、それから膳に向つて、箸を措くと、少時天昇してゐたが、やがて例の(おさすり)の銘仙の半纏を着して、徐々下りて來る。
女房は膳椀の後仕舞をして、今襷を外したといふ所で、まだ臺所に逍遙してゐる。
「姨樣何方へ？」
「あの、一寸お隣へ。」
「然う。」と苦り切つて橫を向く。
「お隣へ日參だ。」と捨言葉で、姨樣は倉皇出て行く。跡見送りて女房は、と芝居ならばチヨボが入らうといふ見得で、
「またお隣！ほんとに日參だよ。朝朗から出懸けて行つて、長々と話込むのだらう。察しの無い人ぢやないか、何處の家だつて迷惑すらあね。一躰まあ何の用があるのだらう、每日每日。」
女房は鼠不入の前に茫然突立つてゐる間にはや隣家では話聲がする。煙草屋の內君は、先づ昨夜の飴の禮を述べる。次いで靜馬の大

喜を話す。あれから直に歸つた趣を語る。扨其後が火鉢の小抽斗から恭しく（たのもしいよ）を取出して、その故事來歴を具に陳述る。

姨様は之を聞くと、前後に（おや、まあ）の二三十も並べて、ぞく〳〵歡ぶ。朝から晩まで鬱通してゐる靜馬も、此辻占を見た時ばかりは、不思咲つたなどゝ話すと、姨様はころ〳〵歡ぶ。さうして見ると、此は凡の辻占では無い、如來様の御示に違あるまいといふが發端で、昨日から阿彌陀様に試驗及第の願を掛けて、四月の當日まで、御勤行の外に毎晩怠らず正信偈を唱へると打明ければ、女房は有繫に其程までとは思ひも寄らず、（まあ、どうも）とばかりで、少時は外に言葉が無かつたが、俄に小僧を呼んで、靜馬へ知らせにやる。

程もあらせず、蓬頭垢面の人、昔は奉書紬の代診羽織、今は紋所の黄ばむで、袖口の傷むだのを、折目低に着做して、居所の羊の怏々として下りて來る。姨様は見るより、少しく席を讓つて待つと、靜馬はのっそり火鉢の側に坐つて、

「これは始めまして。」と慇懃に挨拶する。

姨様は竦むだやうに丸くなつて、首を低げながら、

「始めましてお目に懸ります。」

「昨夜はまた頂戴物をいたしまして、有難う存じまする。」

「いゝえ貴方、まことにお愧かしい、失禮な物を差上げまして、御挨拶では婆が痛入ります。さあ貴方此方へ。」

と體を片寄せる。

女房は靜馬の前に辻占を出して、

「お大事な品を御返し申します。此は貴方の守本尊ですから、大事にしてお置きなさいましよ。」

と幾分か姨様に御馳走を言ふ。靜馬は受取りながら、

「ほんに守本尊です。」と此も嬉しがらせると、姨様は忽ち顔の紐を弛まして、

「守本尊！」と頷く。

「靜馬様、それから未だ、貴方御禮をおっしやらなければ成らない事がありますよ。姨様があ御深切にねえ。」

といふ前文で、正信偈の始末を話す。靜馬は殊勝に耳を澄してゐたが、

「ほんとに有難いぢやありませんか。」

と局を結びつゝ女房は感歎すると、

「飛だ事を、あなた。」と姨様は痛入る後から、俯いてゐた顔を擧げて、

「それは如何も御深切に。何ともお禮の申様がございません。」

と兩手を支へて丁寧に禮をする。姨様は慌てゝ、

「あれ、貴方勿躰ない。何卒もうお手をお上げなすつて。私もお話を伺ひましてねえ、陰ながら御心配申してをるのでございますよ。道箇婆が幾許御心配を申したからとつて、何といふ事はございませんけれど、それでも氣は心で、ねえ貴方。と申した所で、私の力では及ばないことだと存じまして、昨日からまあ一心に如來様にお願ひ申してをるのでございますよ。御文様にも、（更に餘の方へ心を振らず、一心一向に佛助けたまへと申さむ衆生をば、設ひ罪業は深重なりとも、必ず彌陀如來は救ひましますべし。是則ち第十八の念佛往生の誓願の心なり。）と申しまして、かういふ御有難い如來様でございますから……。え、何とおつしやいます、飴が結構だ？　まあ、あんな言をおつしやつて、年寄をお喜ばしなさいますよ。不斷お美いものを佰上りつけて在らつしやるから、どうせお口にはお合ひなさいますまい

けれど、あれでも尋常の打切と違ひまして、遙と此の高田といふ所から參るので、障子を閉て、咳嗽には妙藥だと申しますから。否、辻占なんぞが入つてゐる譯は無いのでございますよ。其は全く內君のお話の通り、えゝ然でございますとも、前表！ 前表でございますとも。文句が宜しいのぢやございませんか、「たのもしいよ」とは。あの辻占といふものが、當節は一向行りませんけれど、私共の若い時分には……
……。」

と婢樣の談は之を譬ふるに若松樣の如く、見る見る枝も榮えて葉も茂る。話をするのも口が酸くなるが、之を受けるのも隨分肩が凝る。靜馬も良持餘した狀で、茶ばかり飲んで紛らしてゐるのを、女房は見かねて、

「さあ貴方、御免を蒙つて御勉強なさいまし。」

と鋒を切ると、婢樣も心着いて、

「さあ何卒お構無く。」

「それぢや失禮いたします。」

と靜馬はお辭儀無しに中座する。婢樣は恍惚と後影を見送つて、

「好い御人品だ。今に立派な御方にお成なさいますよ。」

（十一）生死の界

兎角に昨日と過ぎ、今日と暮し、寒い／＼といふ間に蒲田の梅が開く、上野の彼岸櫻が咲初める、それ白酒を賣出す、雛々が竝ぶ。三月もやう／＼盡きなむとするほどに、味木靜馬が生死の界は波の寄するが如く、一歩は一歩より逼來る。此間には格別變つた事も無かつた。婢樣が毎晩正信偈を唱へる事、淺草屋へ日參の事、婢樣は其事情を聞いて、大きにお世話だと悅ばぬ事、度々の御出には內君も有繫に待ひかぬる事、靜馬は苦學に苦學を積み、憂世に憂身を重ねる事、[illegible]と[illegible]になる事、山路から折々見舞が來る事、まづは[illegible]なもので、もし强ひて別條は無いかとならば、變果てたのは靜馬の容貌である。

憔悴痩面、其は始めて婢樣が見た時の味木靜馬であつたが、二月の後の今日の靜馬は、之を喪家の犬と謂はうか、地獄變相の圖にあると謂はうか、旦夕も危き患者と謂はうか、長く土牢に埋もるゝ身と謂はうか、見る影は無い！

もうこゝ[illegible]此儘に捗くならば、今樣半死の身は竟に松の下に倒れて、肉塊氷の如く、喚べども起きず、六親眷屬來りて、嘆くに其効無く、壁隣には涙ながらの白骨の文、夜窓の雨の寂しくも、花は散りて野外の土となるを、悲むやうの事にならうも知れぬ。

幸ひにして試驗は四月の一日。及落の結果は左にも右にも、かほどの志を齎し、恨を遺して、歸らぬ身ともならず、之を最期の思出に、七生までの怨敵に一矢射て、鎧の札が貫るか、鏃が鎔るか、運を天に任せ、勝負を一擧に決して、事の成らざる曉には、命一つを捨つるまでの覺悟！ 其上ならば、死も更に憾無き靜馬が、世間は花に遊ぶ春の日を、試驗前の心の中は、凡そ如何なるものであらう。惟ふに無實の罪に陷ちて救ふ人無く、助くる術無く、手を束ねて死を待つ人の心！ 其が靜馬の心である。

其が此二月餘を如何に苦しみも、氣遣ひもしたかは、更めて爰には說かぬ。見る影も無いとばかりで、領く首は領く。噫、至誠は天を貫く／＼と聞けば、靜馬は及第するに違無い。とは謂ふものゝ、倶不戴天の讐の爲に、果敢なくも返討に遭つた孝子の例もあれば、及第か、落第か、笑ふか、泣くか。泣いても笑つても、生死の界ははや其處に。

(十二) 唐茄子

林[illegible]先生は裏の小座敷に[illegible]前の[illegible]を[illegible]へて、[illegible]に[illegible]のお香は[illegible]の島田に、[illegible]後の[illegible]化[illegible]、十七の花の姿は匂ひこぼるゝばかりで、端然として給仕をしてゐる。

先生は[illegible]の[illegible]を大様に取り[illegible]けて、[illegible]の[illegible]を[illegible]て／＼、

「美は未だかい。早くしてくれんと、二合ばかりの御扶持は無くなつてしまふよ。まことに心細い。」

「まあ[illegible]々お上りなさいよ。今[illegible]の人が御[illegible]て、[illegible]してゐるのですから。」

と[illegible]は[illegible]手の[illegible]を[illegible]びながら宥める。

「[illegible]の[illegible]を[illegible]々[illegible]されては、[illegible]、[illegible]と[illegible]れたやうなものだ。」

「あれ、あんな事を。今[illegible]に出来ますよ。」

「[illegible]体を言ふな。使者に立て。使者に立て。[illegible]を貰ふばかりが能ぢや無い、お茶屋の[illegible]は[illegible]様らしく働くのだ。」

「まあ、否な。いつ御[illegible]儀を下すつた？」

と立ちかけたが復た坐り、父親の顔を覗込む、

「[illegible]、[illegible]、それでも[illegible]つて下さいな、ねえ。」

「此間の彼[illegible]、[illegible]な[illegible]たな、此間の彼とは其[illegible]ともか[illegible]」

お香は恨めしさうな顔をして、

「否、もう。わざと知らない風なんぞを為すって。此間の、そら、かの字の[illegible]つて[illegible]たゆの字のちの字」

と[illegible]しげに[illegible]の上を[illegible]く。

「さあ、いよ／＼解らなくなつて来た。かの字のゆの字のちの字？」

「解つたでせう。」と[illegible]と[illegible]る。[illegible]先[illegible]して、

「それぢや私の[illegible]でも、今の[illegible]見たやうな言で挨拶をするから、判じなければ可けんよ。」

「はあ、はあ。」とべつたり坐つて、[illegible]さうに父親の言葉を待つてゐる。[illegible]に[illegible]をして、

「可いかい。」

「あゝ、可うございます。」

「それは、どの字に、めの字に、[illegible]の字さ。」

「ごの字、めの字、ごめ、ん……[illegible]、[illegible]は……」

とお香は[illegible]て立上る。所へ[illegible]

[illegible]に[illegible]を載せて持つて来る。

「お[illegible]お[illegible]お[illegible]をしないかえ。」

「でも、父様が種々な事を……。」

と父親の[illegible]を見て、また[illegible]の[illegible]を見て、[illegible]

「[illegible]が種々な事を言ひながら。どの字にめの字[illegible]」

「あら、其は父様がおっしゃったのぢゃありませんか。」

「お[illegible]も、何だか、そんなやうな言を言つたよ。まあ何しろ、[illegible]れてゐた[illegible]が来て、[illegible]ほふ、[illegible]煮か。これは[illegible]た、そこで一[illegible]注いでもらはう。」

と[illegible]を出す。お香は[illegible]と少許注いで、[illegible]して[illegible]を[illegible]くと、

「[illegible]る[illegible]」と父親は[illegible]と[illegible]める。

「ちやんとお酌をなさい。」

と[illegible]に[illegible]られて、

「でも父様に[illegible]はもう[illegible]って。」

「如何したのさ。」

「私は言はないけれど、お肚の中ぢゃ大変に恨むでゐる。」

と手巾を指に卷付けて、ぐい／＼引張る。

両親は一度に笑出して、

「お肚の中で恨むでゐるなら、何も断るには及

ばんのに。」

と杉輔は頭を撫でゝ可笑がる。

「お前に恨まれても、父様は恐いことは無いとさ。」

とまた浮雄に冷かされて、お香は益大變に恨むで、

「私は覺えてます。忘れやしない。」

と食指で卓の上に線を引いたり、輪を畫いたり、獨りしよげてゐる。

御町先生は箸を持つ手に礑と小膝を拍つて、

「おゝ、明日、明後日は翌日、味木の試驗が始まる。久しう見えんが、如何したらうな。」

「半月ばかりも參りませんが、何でも一心に勉強して在るに違ありません。何卒今度は好く參つてくれゝば宜しうございますが……。」

と夫人は熱と考へこむ。

「間際に餘り勉强するのは却て良くない。些と氣を拔きに來れば可いになあ。人間は惡く度胸の据つた奴も困るが、如彼また神經質でも可かんよ。試驗前などゝ來たら酒に限る。微醉機嫌でな、太平樂を抒べてゐる間は、泰山前に崩るゝと雖も怖れず、勇氣が充滿してな、まづ此程の興奮劑は無い。其を味木などは一滴も飲めんとは情無いことだ。」

「貴方は父試驗前でも無いのに毎日。」

と杉輔は笑ふ。お香は其尾に附いて、

「父様が試驗をお受けなさらうものなら、肝心の日に宿醉で缺席でせう。」

先生は傲然と髯を撫げて、

「いくら醉つても五斗兵衛のやうなものだ。今擊ちし鐵砲は。」

と御自分の假聲を遣ひ、

「なんて、勇士は酒の爲に事を過るなどゝいふことは無いのさ。その證據には、我は醉つてもつひに物に躓いた例が無い。」

「何とおつしやつたつて、貴方の勇士は信にはなりませんけれど、味木様のやうな人は少しは御酒を飲んだ方が可いので。」

「待て／＼。味木様のやうな人は……やうな人はが甚く耳立つ。それぢや私のやうな人は甚麼ものだらう。」

と詰寄せるといふ見得で、身を横に肩を聳かす、

「さあ、お香甚麼だらうねえ。」

と夫人は嫣然娘を顧る。作眼をして睨めてゐる父親の顏を、お香は（柳に風）といふ見やうをして、

「今に中風になるのが可いなら、多度お上んなさいましな。」

と浮雄と相見て笑ふ。

「中風？　酒を飲むで中風になつたものが何所の國に在る？」

「其の中に在るぢやございませんか。」　と夫人は息卷く。

「馬鹿な？　彼にな、渾是唐茄子で飲むからだ。」

此洒落大出來といふ氣味で、先生自ら大に笑ふ。お香は躍起となつて、

「唐茄子で中風になるといふのは嘘ですよ、ねえ母様。」

「唐茄子の肩を持つのは可笑い。あれは蔕を摑むで、裏返して尻を見るものだ。」

「そんな事は知つてゐますよ。」　とお香は眞面目に應へる。

「野暮で困るな、今のは洒落だ。洒落の解らんやうなものと論をするのは、總菜で酒を飲むが如しさ。」

（十三）別の盃

折から無作法に疊觸の足音がして、襖が啓けば、十六ばかりの取次兼務の藥局生が顏を出す。

「味木様が入らつしやいました。」　と案内して立つと、入違ひに味木は徐々と入つて來て、ぴたりと[illegible]に坐る。
「今晩は。御機嫌よろしう。大變御無沙汰をいたしまして。」
と袂からピンヘッドを取出すと、一所に摑出した紙屑を落して、慌てゝ拾ひこむ。
「火鉢の傍へお寄なさい。」
と夫人は、お香と共に左右に開いて、手爐の前に席を拵へる。[illegible]まして、
「久しく見えなかつたが、相不變勉强か。」
「はい、勉强だけは十分にいたしたつもりでございますが。」
と[illegible]いて[illegible]る。[illegible]をお香は[illegible]てゐたが、
「[illegible]に[illegible]てゐてねえ。」　と[illegible]いたかの[illegible]く[illegible]める。
「ほんにねえ、宛然病後といふ顏色。此手の[illegible]痩けたこと、而して眼がまた大變陷落ましたね。」
と夫人も氣毒さうに惟眺めてゐる。
「そんなに痩せましたか。」　と[illegible]てゐる。
「痩せたとも。まだ此から痩せる[illegible]。」

と先生は卓に倚懸つて、酌冷しの一盃をぐいと[illegible]んで、
「まづ明後日の[illegible]を[illegible]じやう。」
と靜馬へ差す。お香は德利を持つたが、冷えてゐるので燗直しに立つ。
「どうだ、様子は。今度は好く行きさうかな。」
「左様、どうも……。」　と頭を掻く。
「どうもでは可かんよ。どうでもと、でを一字入れて欲しいものだ。」
「無論自分では其決心でございますけれど。」
「自分で澤山。己より外に天下に恃むべきものは無い。一つ目覺しく行つてくれ。」
「はい。」　と靜馬は俯いてゐる。爰へお香は燗をして來て、
「はい味木様。」　と銚子を持つ。靜馬は會釋をして、
「どうぞ少々。」　と半分許受けたのを、[illegible]の嘗めるほど一口附けて下に置く。夫人は[illegible]して、
「味木様に御酒は可成さうですよ。お菓子[illegible]がいゝ。お香、[illegible]にワツフルがある。それから、[illegible]に。」
「これ[illegible]、[illegible]の首途をお菓子で[illegible]ふ？　そんな[illegible]があるものか。」

と先生は兩手を擧げて[illegible]する。
「[illegible]てから貴方は御酒、此方はお茶で。」
「酒と茶では甚だ調和せんね。それは下戸なら下戸で可いけれど、羊羹だの、駄菓子だのと見苦しい物を陳列するのは少し遠慮してもらはうか。」
と推問答の間に、はやお香は茶器を並べる。食籠、菓子折を取擴げる。先生は喟然として、
「吁、とう／＼開店だ。香は又茶となると恐ろしく輕捷に周旋するよ。その心意氣で我の酌をしたり、また量などを良くさへすれば、實に[illegible]から御沙汰もあるべき淨女だけれど、嗚呼あつぱれ不孝なものだ。天席茄子をして汝を中風に罹らしめる。[illegible]る可し、[illegible]る可し。」
「羊羹では中風にはなりませんから。」
とお香は澄したもので茶を淹る。
「先生は一口召上ると御機嫌で、結構でございます。」
と靜馬は[illegible]を言ふ。夫人は首を振つて、
「結[illegible]なことはありませんよ、もう／＼手ばかり[illegible]つて、[illegible]なんぞこそ實に[illegible]、[illegible]
[illegible]に[illegible]をか。」
と[illegible]えよがしに[illegible]する。先生は[illegible]々と笑つて、

「[illegible]の志を知らむや。[illegible]」
と[illegible]かける。
「はい。」と静馬は[illegible]ると、
「お前さんはかりそめにも[illegible]するのだ。[illegible]胸中の[illegible]ないか、[illegible]前には堅く答へたが、返す[illegible]無い[illegible]と[illegible]何處までも洒落の[illegible]で、一[illegible]茶の[illegible]さ。だから今度及[illegible]と[illegible]なら、[illegible]之を一[illegible]まんければ可かん。[illegible]無いか。」
と[illegible]角に[illegible]を[illegible]いて、其を静馬に指す。[illegible]人は[illegible]落[illegible]るに[illegible]へかねて、
「貴方何ですねえ、[illegible]ですよ。やつとの思で御[illegible]をしたには、[illegible]ございませんか、そんな[illegible]な事を[illegible]ものぢやございません。」
と膝を進めて[illegible]める。先生は笑つて應へぬ。
静馬は捧げる面に[illegible]、[illegible]を含むで、
「乾度及第いたしますな[illegible]ませう。」
「勿論及第！　さあ及第すべし。」
と[illegible]ら[illegible]を取つて切りに迫る。
「縁起でございますから、そんなら盈々と[illegible]いたします。」
と静馬は[illegible]ず[illegible]を[illegible]げる。

「[illegible]、此[illegible]だ、面白い[illegible]く、さう[illegible]なら、我も一つ[illegible]に[illegible]ふよ。やあやあ、[illegible]からむものは[illegible]に[illegible]聞け、近くに[illegible]つて[illegible]にも見よ。我こそは小兒科に[illegible]る[illegible]者ありと聞えたる、日本橋[illegible]町の住人[illegible]なり。此[illegible]味木[illegible]後期試驗及第[illegible]祈禱の爲とあつて……其[illegible]と[illegible]うな[illegible]」
と夫人を[illegible]ると、
「まあ早くお[illegible]をなさい、味木様が草臥れますわね。」
「[illegible]だつ[illegible]れる。」と盈々注ぐ。
「味木[illegible]にお[illegible]みなさんなよ、[illegible]ですから。」
と[illegible]夫人は[illegible]じる。
「はい、なに、一[illegible]くらゐは。先生、では戴きます。」
と口の[illegible]、[illegible]を[illegible]けると見る間に、[illegible]ち仰いで[illegible]に[illegible]た[illegible]さ、[illegible]も[illegible]も[illegible]
「見事[illegible]及第[illegible]無した。」
と先生は、[illegible]を[illegible]と開いて[illegible]く[illegible]かぬばかり[illegible]て、[illegible]れ、目力むである。静馬は[illegible]を[illegible]しながら、面を背けて涙を忍ぶ[illegible]の[illegible]、

「[illegible]な、な、永々御[illegible]、[illegible]、う、うけま……して。」
先生はぎろりと静馬の面子を見て、
「[illegible]があつて、師匠となり、弟子となれば、[illegible]子も同然さ。今更他人がましく、[illegible]ることは無い。何を泣いてる？　[illegible]の悪い。」
「[illegible]へといふ所ぢやないか。」
「こ、今夜、い、いたゞきましたお[illegible]が、……頭は一[illegible]の。」
と[illegible]に涙に咽ぶ。夫人は目授でお香を次の間へさたして、
「味木様、なぜ又今夜に限つて、そんな否なことをお言ひなさるの？」
「[illegible]、私はもう今度落第いたしましたら、面目がございませんから、もう二度とお目には[illegible]ません。それで、今夜[illegible]に[illegible]ましたのですが、十四の年から御恩に[illegible]まして、今年でもう十二年、[illegible]お顔を見てを[illegible]で、[illegible]には[illegible]る[illegible]に、此[illegible]お別れ申すかと思ひますと、[illegible]なりまして、つい／＼涙が。」
と[illegible]に手を置いて[illegible]きながら歔欷をしてゐる。
「お前様[illegible]許此限り別れるとおいひでも、先生

が別れさせはしませんわね。もう〳〵、そんな氣の弱いことをおつしやんなよ。」

と夫人は温和に慰める。

「面目無いから二度とはお目に懸らん？　而して如何するのだ。國へ歸つて百姓でも爲る氣か。」

と先生は笑ひながら詰る。

「國へも歸られませんので。」

と靜馬は唇を噛むで涙を呑む。

「國へも歸られん。それぢや往所が無いぢやないか。」

「はい、往所がございません。」

「往所がございません！　甚く落着いてゐるな。まあ、そんな言を云はずに、最一度此家へ歸つて來るさ。お前は面目無いといふけれど、男は氣で持てだ。肚の中では面目無くても、其を一々外へ表にして、面目無がつて騷ぐやうでは、到底事を成すには足らんよ。お前が他の世話になつてゐながら、平生怠つて落第する。さうしたら面目無からう。けれども一心不亂に勉強してゐて躓くのだから、我は實に傍から氣毒でならん。[illegible]時の運だ！　楠正成ほどの智勇兼備の大將でも湊川で討死をしたよ。それから見れば、お前は何だ。十善の天子に頼まれ奉り、御國の爲に一命をなどゝいふわけでも無い、高が一個人の私の爲の開業試驗で、十度や二十度落第するのは、更に憾とするには足らんと我は思ふ。面目無いなどゝいふのは婦人女子の言さ。お前も男なら、殘念だと言ふが可い。」

「無論殘念でござります。」

「殘念！　殘念と言つたね。よし、殘念ならば斃れるまでやれ。唯殘念でお仕舞では不得心だ。死ぬまでやつてもらはう、死ぬまで嘸。今年はお前二十六か。人間の定命五十年とすると、まだ二十四年あるな。年に一度宛の試驗だから四十八度、隨分ある！　其中、度々ゐるは中るだらう。米相場でも、二三萬圓持つて始終張つてゐる中には、一度は言ふ目が出るさうだ。試驗はまさか[illegible]のやうなものでも無からう。其氣で力を落さずに幾度でもやつて見るさ。お前は一體氣が小さい。度胸がないから困るよ。鮟鱇と男は膽で買ふのだ。何でも楠正成を忘れては可かん。嗚呼忠臣楠氏墓、さ。あゝ醉つた。醉つた。お香、香や、枕をくれ。」

と先生は肱を枕に、ごろりと仰向に倒れる。

靜馬は手[illegible]の緣に兩手を[illegible]に揚げて、目を閉ぢて俯いてゐる。

「幾度落第しても構はない、と謂ふわけぢやありませんけれど、試驗には拍子物だともいふし、お前樣が又不斷怠けてゐるといふのでも無いのだから、面目無いの、此限會はないのと、そんな事はありませんよ。國でもお父樣がねえ、如何なにか待つてお在でせうから、今度は何卒憤發して、一つ喝采とやつて下さい。」

と夫人の勸る傍に、先生は無頓着の高鼾。

（十四）　おもひ〳〵の隱。

靜馬は思ふまゝ泣いて、夫人は辭の有らむ限慰めて、力は落すまい、短氣は出すまい、と辛抱しますと固く約束して、もうお暇と膝を立てる。夫人は醉倒れてゐる先生を搖起す。

「もう何卒其儘に。」と靜馬は押止めて、

「左樣ならば御機嫌よろしう。」

「それぢや、まあ隨分お大事に。眞個に氣を大きく持つてねえ、而して好い便を聞かして下さいよ。」

「はい、成可好い便をお聞かせ申します。左樣ならば、お孃樣—」

「もうお歸り？　そんなら折角まあ。近い内に又入らつしやいな。」

この挨拶の間に先生は夫人に起されて、黄八丈の臥被を勃起々々擡げて、目を刮りながら卓の前に胡坐を掻く。まづ四邊を見廻して、

「歸るのか。」　と寐惚聲。靜馬は優しく兩手を支へて、

「はい、もうお暇をいたします。」

「あゝ然か。何だか甚く北の方が辯じてゐたやうだつた、寐に聞いてゐたが、長談義だつたな。」

「はい、色々御深切におっしやって下さいまして。」

「忽ち夢の覺むるが如しか。」

「はい。」

「此方は夢と共に醉が覺めて、あゝ薄寒い。何でも先刻言つた通り。楠正成を忘れちや可かんぜ。十二年間我の世話になつたのを、恩……とも行くまいが、有難いぐらゐには思つてゐるかい。」

「其は毎々親父からも申して參りますが、先生の御恩は生の親より……。」

「よろしい。而して其報恩は何時爲てくれる？」

先生は未だ醉つてゐられる、と靜馬は思つたが、

「何れ私が一人前になりました上は。」

「うむ、一人前といふのは、一人前の醫者になつてからといふ意だらうなあ。」

「左樣でございます。」

父樣は寐惚けてゐるのだらうと、お香は獨り氣を揉んで、一寸々々母親の顏を見る。

「其前に報恩は出來まいかな。」

「いたしたいと存じましても、今尚お世話になつてをる身分でございますから。」

「なるほど、其では一人前になつてから、屹度十二年間の報恩は爲てもらはんければ成らん。恩を知らざるものは畜生だ。」

「はい。」　と靜馬は忸怩してゐる。

「あゝ、其を聞いたら宜しい。試驗はいよ〳〵明後日からだな。書生の試驗を受けるのは、武士の戰場へ出るも同じ事だ。私が首途を一つ祝はう。先刻の盃の贐は大分迷惑のやうだつた。」

「否、どう致しまして。」

「改めて贐をな。香や、私の紙入を。」

お香は立つて、納戸の小簞笥から絽刺繍の紙入を持つて來る。先生は其中から若干金か紙に包むで、

「これで一盃景氣を附けて……一盃ぢや無かつた、一擧か。それぢや景氣が附かずに、停滯れるだらうなあ。」

と底の拔けたやうに笑ふ。それに釣られて三人も笑ふ。

爾時お香は母親の肩へ笑顏を差寄せて、何を囁くのか、喃ばかりが兩三聞える。母親は頷いて、

「あゝ、持つてお出な、折角拵へたものを。」

「でも巧く出來てないでねえ。」　とお香は躊躇してゐる。

「何だ。拵へたの、うまくないのと。御馳走なら早く持つて來な。」

と先生の早合點。

「あら、父樣、食物ぢやありません。」

(好い物)といはぬばかりに、お香は獨りで承知してゐるのを、

「香がね、貴方。」　と母親に話しかけられて、

「あら母樣。」　と慌てゝ目顏で遮る。

「香が如何したと？」

「香からも贐がございますと。」

突如に祕密を發かれて、お香は餘りの事に何も言はず、籠る思は千萬無量とも謂ふべき橫眼で、母親の顏をじろり。

「感心々々。持つて來な、早く持つて來なよ。何だ、お前からの餞は。元結か、洗粉か。」
「もつと上等の品ださうで。」
と母様は益々裏切る。お香は怫然として、
「嘘！ 何も有りはしないのですよ。」
「折角出來てゐるものを。否な人だよ。早く持つてお出なさいな。」
と母様は竟に敵となる。
「持つて來なよ、洗粉でも何でも可いから。どうでお前の寄贈ぢや、大出來で手巾が二枚、それとも更紗の風呂敷か――玉轉へ行つたやうだ。」
と先生は獨りで燥つて獨りで笑ふ。
「玉轉だつて。あんな憎いことを。玉轉でも可うございますよ。」
とお香は益々拗ねて、もう持つて來ないと決心する。其間に靜馬は起ちかける、兩親からは遁られる。「惡ひ餞」など〻言出されたからは、靜馬の手前、品物を出さねばならず、出せば口の惡い父様が何とか冷かすに極つてゐる。出さうか、出すまいか、懐、袂、前方と襟を數ふる遑も無く、急立てられてお香は竟に取つて來る、洗粉か、手巾二枚か、但しは風呂敷か、何やら知れぬやうに袖の下に藏して、母様の陰で竊と靜馬へ渡してしまふ。
先生は故と脊延をして、覗きながら、
「何だ〳〵。金米糖の箱だな。」
「好物！ 味木樣、此處で出しちや否ですよ。」
「はい、有難う存じます。先生、かういふ物を頂戴いたし……。」
と律義に明るい處へ持出すのを、
「味木樣、可けま……。」
とお香が奪取らむとするより早く、母様が攫つて父様の御目に懸ける。
「何だ。本式だな、恭しく水引なんぞを懸けこむで。」
と包紙の端を排つて見る。
「何かと思つたら肱褥か。ほう、紫縮緬！ どうして〳〵、半衿の御古を縫合して、一錢が紫粉のお手染とは見えない。これは結構な物だ。」
と襟の皮肉を言ひ〳〵揃くる。
「可哀さうに、それでも新しいんですよ。」
と有繋に母様は肩を持つ。
「一體肱褥とは如何いふ着想だらう。」
「その紫が、貴方趣向なんですわね。」
「紫が？ うむ、紫！」 と先生は肱褥を靜馬に見せる。
「なるほど、紫！」 と靜馬は飛立つほど喜ぶ。
醫術開業試驗所から及第を通知する郵便葉書は蒟蒻版摺、紫は其色である！
重ね〳〵の吉兆！ 第一には漂母の餐の越後の飴、其中に辻占の（たのもしいよ）、今生の暇乞に來れば、思懸無く紫の肱褥。心細い折からは果敢ない事も便に慰められて、靜馬は機嫌を復して煙草屋に歸ると、二階は留守間に掃除をして、始終取散してある机の上迄が、歌人でも坐りさうに秩然と片附いてゐる。
白毛布を上敷にした緬天の褥に靜馬は撓乎と坐して、物思はしげに卷莨を喫し始めたが、忽ち座右に積むである書物を突崩して、抽出した虎氏の外科通論を慌しく披いて、半頁ほども見ると、直に丁と伏せて、褥の所へ放り出す。
其莨を喫つてしまふと、茶を煮れて、茶を飲むでしまふと、机の上に頰杖を支いて、惘然考へてゐる。其考へてゐた間は、莨を喫つて茶を煎れて二杯飲むだ時間の、凡二倍よりも長かつたが、やがて實用産科學の一冊を取出して四五頁讀むと、直に取替へたのが内科類症鑑別。それも氣が乘らぬか、吁と虹のやうな太

息を吐いて、熊の次郎に睨まれたるかの如く仰向にどつさりと倒れる。
「寝やうか知らん。」　と復た起上つたものゝ其處に書物の在るのを見れば、有繋に思切つて寝られもせぬかして、懶さうに懐手をしながら貧乏顫をして、何を見るでも無く、恐い眼をしてゐる。
　間際に勉強するのは可かん！　先生も言つたし、實際また可くない。折角今まで記憶したのを無茶苦茶にしてしまふ。一個月も勉強して、それで行かんければ到底行かんのだ。心の進まんのを無理にやつたところで實に成るもんでは無い。それよりは・今迄の疲勞休に精神を養つて、試驗に臨むこ勇氣の出るやうにするのが肝腎だ。明日も最う書は見まい、朝から一つ保養に出掛けて、思ふさま一日遊んでやらう。先刻先生から五圓許戴いたし、自分のが十圓許あるから、好きな眞似が出來る。吁、もう／＼試驗の事は忘れやう。幾許思つたつて、奈何なるといふのぢや無し、詰らん事を考へて氣を傷めるのは馬鹿々々しい。一體なぜ我はかう氣が小さからう？　まるで女子だと、能く先生に言はれるけれど、自分ながら實に物事を苦勞に爲過ぎる。苦勞にしても、しなくても、成る事は成るし、成らんことは成らんのだ。然う考へれば、苦勞にするのは詰らん。忘れやう／＼。明日はいよ／＼一日出遊だ。今晩も寝るとせう。今晩早寝で明日は出遊か。結構な身分だ。靜馬は豁然と大悟して、俄に火鉢の火を埋ける、灯を消す、急いで夜具の中へ潜込む。
　間も無く昇つて來たのは女房　思ひも寄らぬ眞の闇に吃驚して、
「呀、もう御寝！」　と階子の口で立往生。
靜馬は夜衣から顏を出して、
「今晩は早寝で、明日は出遊です。」

（十五）　今日は出遊

日影は煦々と、輕暖い風が吹くでも無く、吹かぬでも無く、店前は衣香、傘影、車の響、人の聲。是が或人の生死の界の前日、三月晦日の日和である。
　否でも應でも今日は出遊と觀念して、焦茶の山高帽子に金縁の眼鏡、靜馬は凛と扮へて二階を下りると、
「あれ、まあ、眞箇にお出掛なさるの？」
　と内君は夢かとばかり驚く。
「眞箇ですよ、これから一寸行つて來ます。」
「眞箇ですか」　と内君は彌よ呆れる。
「眞箇に！」　と靜馬は屹と言ふ。
「然う？　可いんですか。明日ぢやありませんか、試驗は。」
「あゝもう試驗の事は謂つて下さんな。否だ、否だ。」
　と戰慄をして見せる。
「然う？　貴方さへ可ければ、それは保養してお出なさる方が可いけれど、眞箇に可いんですか。」
　念を推れると、靜馬も内に疚しきところ無きにしもあらざれば、突立つたまゝ挨拶に窮つてゐる。
「貴方さへ可ければ行つてお出なさいな。」
　靜馬は良久く考へてゐたが、
「行つて來ませう。」
「然う、行つてゐらつしやるの？」　と内君は餘り氣の無い聲。之が爲に又迷はされて自分ながら不安心の靜馬は、
「行つちや可けませんかね。」
　と危さうに訊ねる。
「私には解りませんわね。」
「然ですね。それぢや一寸行つて來ませうか。」
「而して何方？　やつぱりお花見？」
「まあ、そんな積で淺草から向島の方でも浮

浪浮浪。」
「然う、おや早くお歸んなさいよ。姨様も大變心配してゐますから。」
姨様と聞くと靜馬は忽ち悄然として、
「他が心配してゐるのに、氣樂らしく花見でも無い。止しませうか。」
「折角御親類が出來たのだから、一寸まあ行つてお出なさいな。随分今迄勉強が過ぎましたからねえ。」
と内君も右樣に折れる。
「それぢや行つて來ませうか、思切つて。」
と話してゐると、亭主は店から聲を懸ける。
「いよ〳〵お出掛？」
「えゝ、まあ出掛けて見やらかと思ひます。」
「元日から稼いで大晦日には遊ぶのだ。可からう、まあ精々愉快を盡しておいでなさい。」
「おや味方が殖えて、貴方も氣丈夫だ。」　と内君は笑ふ。
「姨様が來ても、私が遊娯に出たことは秘しておいて下さいよ。」
「なぜ。可いぢやありませんか。」　と内君は假意と言ふ。
「でも、餘り氣毒ですからさ。」
「私は言ひますよ、今朝女の所から手紙が來て、どうも一所にお花見にでも行つたらしいつて。」
「困りますよ、そんな事を。」
「これで何とも知れないのさ、急に思立つてお花見なんぞは。」
と亭主は挾撃にする。
何の彼のと弄られた擧句は、土産を買つて歸ることになつて、靜馬は後髪を引かれながら出懸ける。
其留守に姨様が來て、凡そ二時間も、明日が苦勞になる話ばかりで持切つて、午砲前に歸る。内君は晝飯の後片附をして、裏へ水を汲みに出ると、靜馬は悄然露地を入つて來る。
見れば櫻餅の籠を提げるでも無く、思案投首憔悴して、算段が出來なかつたといふ恰好で、此處に内君の在るとも知らず、摩違ふと、
「おや、もうお歸り。」　と聲を掛けられて、屹と顔を擧げて、
「歸つて來ました。」　と本意無げに訴へる。
「大層お早いぢやありませんかね。花は如何でした。」
「詰りません！」　と吐出すやうに言捨てゝ、匆々と木戸を入つてしまふ。内君は鳩に於る豆鐵砲の如く呆れて、釣瓶竿に手を掛けたまゝ入りにけりを見送つてゐたが、やがて水を汲むで歸ると、はや靜馬は二階に引揚げた跡。旦那は待兼ねて、
「おい、二階の人は歸つて來たが、滅法早いぢやないか。」
「何だか、甚く鬱いでね。今井戸端で會つたら詰らないつて。」
「其はどうで詰らなからうさ。けれども折角出懸たものだから。思入れ遊んで來れば可いのに。といつた所が病人に鰻飯を食へといふのは無理だ。」
「やつぱり其は試驗が胸に痞へてゐちやあ。」
「浮かないのよ。其理よ。然したものよ。」
と旦那は獨りで呑込む。
店に客の來たのを機會に、内君は後を捨てて二階を見舞ふと、唯今花を看て歸つた人は、もう机に向つて書見をしてゐる。座敷の眞中には、脫放した儘の曠衣が、蟬の蛻を生で見るやうに蹲つてゐれば、不體裁にも蟠局を卷いてゐる内と外とに、埃塗れの山帽子と、泥に汚れた白足袋とが追放り出してある。内君は見るより駈寄つて、片端から始末をしながら、御膳は？　と聞けば、濟むだ。名所は何方と訊ねれば、苦笑。花は咲きましたかと問へば、うるさ

く人が出る。お歸宅が早過るぢやありませんかと謂へば、一向詰りません！

何と話しかけやらが、思はしい挨拶も爲ず、机の上に氣を奪られてゐるので、内君はこそこそと下りてしまふ。

早三時が鳴る、四時を打つ。もう明日には僅十五時間、勉強も今日一日、之が名殘と、讀むでも讀むでも、丁數の進むばかりで、何が一つ記憶に留るでも無い、靜馬の心は妄想の爲に麻醉して、不思議の夢を見てゐる。夜に入るほど雜念は益す增長して、知らぬ間に、書物の上に紫の肱褲と紅摺の辻占が現はれて、折々は壁上の手紙に眼も動く。例刻と見えて、隣の二階では正信偈を唱へ始める。今宵限と嬶樣も心を籠めての祈誓は、其聲に悲しく、節に哀に、何よりも殊勝さが身に浸みて。何事とも覺えず靜馬は頻に涙を誘はれる。

（十六） 御機嫌よう

折から戸を敲いて、頻に女の聲で訪ふのが我の裏口のやうに聞えるので、下では頻りかへつてゐる。今から寢るといふことはあるまいに我家では無いのか知らぬと、なほ耳を澄せば、益す敲いて益す訪ふ。其を又何家でも取合ぬので、（御免なさい）といふ聲は次第に泣出しさうになる。

忍びかねて、靜馬は裏窓の戸を窃と啓けて、聲のする方を覻すと、月影の朧ながら裏口に佇むは誰やら、眤と視てゐる窓に向つて、忽ち辭を懸ける。

「芳澤樣とおっしやる煙草屋樣は此方でございますか。」

其聲の艷は十七八とも想はれる。

「はい、手前でございますが……。」

と、直に内君を呼んだが、寢てか、留守か、返事が無い、門外には立つてゐる、靜馬は氣忙しく階子を下りれば、眞黑闇の臺所、蹴躓いたり、衝突つたり、がたぴし取急いで、木戸を啓けると、頭巾を冠つた女が從容に會釋をする。

「何方でございますか。」

と靜馬は何氣無く顏を出せば、女は一目見るより、

「あれ靜樣！」 と思はず寄添つて又退る。靜馬は荒膽を挫がれて胸は悸々、聲まで顫へて、

「誰？」 と頭巾の中を覗く。

「私！ 綱ですよ。」

「綱だ！ えゝ、綱？」

と靜馬はきよと〳〵女の顏を覗く。手早く頭巾を脫げば、島田が仇に少し亂れて薄化粧の顏が櫻色に上氣してゐる。熟視れば、なるほど在所の許字！

「おゝお綱だ！」

「まあ御機嫌好う。」 と小腰を屈めて、羞合みながら木戸を入る。

「どうして來た。」

と尋ねれば默つて笑つてゐる。

「能く此家が知れたな。」「今頃どうして來たのだ。」「先刻から敲いてゐたぢやないか。」 など云ひ〳〵靜馬は戸締をして、二階へ伴れて昇る。

お綱は何と無く忸怩して、薄闇い處に居たがるのを、やう〳〵火鉢の前に坐らして、

「久しく見ない間にもう大人に成つてしまつた。何年だつけか、此前國へ行つたのは。」

靜馬も嬉しいは胸一杯、其中に三分五厘ばかり羞かしい所もあつて、顏を見るやうな、見ぬやうな、變に紛らしながら切りに炭を加ぐ。

お綱は玻璃燈の火影を眩しさうに横を向いて、

「あれから五年になりますよ。」

「五年になる？ お前は幾歲になつたのだい。」

「あなたは二十六、ねえ。」と一寸顔を見て笑ふ。
「お前の年齢さ。」
「私……もうお婆樣。」
「誰がお婆樣が島田に結つて、白粉を傅けるのが行るのかい。」
「そんな事は行りはしませんけれど、今日は、あの……。」
と片靨を出して、
「止さう。」と仇氣無く顔を掩す。
「何だよ、今日は何だと謂ふのに。」
とお綱の手頭を捉へると、銀の指環を嵌めてゐる。
「銀の指環はお三殿のやうで見とも無いよ。」
「どうせ私はお三殿、どうせ山路樣のお孃樣のやうには參りません。だから私は來るのは否だと謂つたのに、家父が是非行け〱つて。」
「何を謂つてるのだか、些とも解らないな。」
「私はちやんと解つてますから、可うございますよ。」
可愛い憎いと謂ふ眼で、お綱は可恐々々睨める。
「お前には解つても私には解らんもの。一體如何して來たのだよ、家父と一所かい。」
「否、私單身。あゝ、素指忘れてゐた。まあ眞個にお目出度うございます。家父もね、大變喜んで、もう人の顔さへ見れば自慢をして、可笑いやう。」
とお綱は嬉々。否然事情の解らぬのは靜馬。
「何がお目出度いので、何を家父が喜ぶのさ。」
「あら、隱したって可けませんよ。あんな眞面目な顔をして。ちやんと知つてゐますよ。」
「これは彌よ解らないな。眞個に何だよ。」
「何でも可うございますから、さあ早く御盃をしませうよ。よう、靜樣。」
「お盃……」と靜馬は不審の眉を顰める。
「御盃よ。あれ、もう此人は。御夫婦の御盃でさあね。」
と膝を搖つて閊かしがる。
「夫婦の盃、それは及第してからの事さ。」
「あれ、未だあんな事を言つて、幾許隱したつて私は知つてますよ。昨日立派に及第をなすつた曉に。免狀も最見ましたよ。だからお目出度うございます。」
と息も繼がずに捲しかける。靜馬は頭から袋を冠せられて、尻からは焚かれるやうな想ひで、
「何を言ふのだ― 明日から試驗なのだよ。」
「嘘、嘘。隱したつて可けませんよ。家父がね、ちやんと私に免狀を見せて、今度は此通り立派に及第をしたんだから、一日も早く東京へ行つて、お盃をして來い。我も直ぐから行くからつて。だからお目出度うございますだから、よう靜樣、お盃をして下さいつてば。」
膝は次第に進むで、いつか男にひつたりと寄添ふお綱、
「私と御盃をするのは否なの。」
「否な事は無いけれど、眞個は明日から試驗なのだから、及第さへすれば御盃をするのさ。」
「一體如何間違つたのだらう、及第したの、免狀を見たのと、此方は少しも覺が無い事だ。」
と靜馬はどうやら途方に暮れる。唯見ると、お綱は彼方を向いて、是見よがしに忍泣をしてゐる。
「何を泣くのだよ。えゝ、お綱。」と抱起せば、靡れかゝりながら顔を背けて、
「私はもう歸ります。」と益々泣く。
「歸ることは無いけれど。」
「否、私は歸ります。」と羽織の袖をびりり咬裂く。
「これさ、何を爲るのだよ、」と力一杯に

抱緊めるほど、お綱は身を躱はして、
「どうせお呑でせうから、私は歸ります。」
と云ふより早く振拂つて駈出す　靜馬は轉るやうに逐懸ける　階子の口で無手と抱留める。
袖で隱してゐる泣顔の中へ、顔を推込むやうに覗きながら、
「お綱、何だな、折角來て歸るなんて。こんな夜深に歸られるものか。」
「歸られなくつても私は歸ります。」　とお綱は身を悶えながら、聲を立てゝ泣く。
「あれ、又泣く、窮るなあ。ぢや御盃でも何でも爲るよ。見とも無いやな、そんな大きな聲を出して。」
盃をするといふのに賺されて、お綱は不承不承に手を牽れて、座に復つても、まだ歔欷。
「いつまでも泣いてゐるなら、御盃はお止だ。」
「あゝ、もう泣きませんよ。」　と涙の眼許で忙しなく笑ふ。
「盃を爲るつたつて、酒も無ければ、道具も無し。」
「在りますよ。」　とお綱は右の袂から、朱塗の盞臺に同塗の金蒔繪の三組盞、左から女蝶男蝶まで附けてある銀の銚子を取出せば、
「やあ揃つてる、揃つてる。」　と靜馬は頭を掉いて呆れる。
「さあ御盃ですよ。」　とお綱はそは〳〵か大恐悦で、はや盞に手を掛ける。
「ま、待つた。いくら内祝言でも媒妁が無くちや。」
「媒妁、可いぢやありませんか、そんなもの。」
「媒妁をそんなものとは、畏いお嫁様だ。」
と言ふ聲の下、
「はい〳〵。御媒妁は是非私！」
と皺嗄聲を振立てゝ、階子を昇つて來る隣の姨様！　見慣れし縞の半纏に、變る姿の不思議にも、何處で工面を白襟や、昨日の派手も京染の黒縮緬の紋服は、申下刻か六時過ぎて、宵の内なる媒妁に、備はる威儀は有繋にも、昔偲しく見えにけり。
「おや、姨様、好い所へ。それぢや早速お媒妁を願ひます。御挨拶は後にして、お綱、さあ御盞を。」
と夫婦は開直れば、今まで在りける姨様の姿は消えて、金色の光明赫奕たる阿彌陀佛が、銚子を御手にして在しますので、靜馬は呀と驚くと、轉寐の夢は覺めて、折から隣の正信偈がばつたり歇む。

＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊

やがて五月廿日の夕、吉事殆ど此夢の如く、今築地一丁目に正信醫院といふのが其である。

（二十七年八月）

胸算用

―ドストイエフスキイ―

本篇は露のドストイエフスキイ氏の作にして、原「コルカと結婚」と題する者、予近ごろ正教神学校長瀬沼恪三郎氏と相識るの故を以て、特に氏を勞して、其の正譯を得たり。然れども、予が措辭の際筆の運びに、所聞章句を存せる條無きにあらず、但自ら原意を害せざるを期すと雖も、又決して瀆褻の罪を免れざるを知る。爰に一言を附して、予の尤も徳とする所の譯者に累ひせざらんが爲にす。

明治三十五年十二月

此間私は或婚禮を見た……いや、それよりはヨルカ(クリスマスツリー)のお話を致さうかな、然う、其方が餘程面白い。今の婚禮と云ふのを見て、遂然以前のヨルカの夜を想出したのだが、其は恁云ふ次第です。

今から五年前の新年の前夜、さる人の子供の夜會に招かれた。其人と云ふのは、交際も廣く、人にも知られて、相應に氣の利く所から、始終何ぞ彼乎謀圖の有ると云つたやうな人物。で、此の子供の夜會も其の名義で、其實は親達が集つて、お互に旨さうな計畫をば餘所ながら話合つて、先づ樂むのです。私も其、呼ばれたのであるが、別に然云ふ種の積は持たず、此會には殆ど無關係の者であつたから、其晩は随分無關係に通したのだが、爰に又一個私のやうな風來の客が有つて、偶然此の家族の歡娛の團欒に加つた。

さあ、其男と云ふのは、素性も身分も總然分らん者で、丈の高い痩せた、生眞面目な、綺麗な扮裝をした、然し、餘日此會には随分關係無しと見えて、隅の方へ引込むと、直に笑顔が曇つて、其の濃い眉を顰むのです。此男相合なのは唯一個で、如何にも退屈で居るけれども、了時まで辛抱して、居る積らしくも見えた。幸らしく、愉快らしく、而して居た。後で聞けば、さる地方から、大分大切な用事を帶びて出て來た者で、其に就いて、此家の主に添書を持つて使つて來たのだと云ふ。這箇は故爲使つて來たのだが、這箇は些も使られては居らんので、其晩も些の愛想に招いだので。

可哀さうにトラムプも葉卷も勸められんと云ふ有様であるから、鳥は遠くから羽色で見分けるで、客も誰一個對手になる者が無い。まあ、手の遣端にさへ困つて、此男一晩中頰髯ばかり撫廻すので、意ふに頰髯から先に生れて、其を撫でるが爲に生活して居るのではあるまいかと想れるくらゐ。いや、どうも實際好く撫廻して居た。

五人の太つた男の子の有る此の家長の歡娛の團欒の中で、私は此男の外に他一箇目に着いたのが有つた。此方は全く此男とは正反對の人物で、其名をユリアン マスタコイチと云つて、始から名譽ある客の中での客と云ふ事は見えて居た。

此人の主人に於ける關係は、恰も主人が彼の臣下の如く、主人は彼に對つて鄭重の限りを盡し、愛想の仕丈を言つて、後生大事と機嫌を取る。此者に紹介する爲に座中の客を一々引張つて行くやうな始末。此のユリアン マスタコイチが一家の金庫の鍵は握た、と

世辭を言つた時などは、主は確に兩眼に涙を浮べて居たくらゐ。

私は今云つた人の居る處は、何やら憚られるやうな氣が爲るので、子供達を見ながら席を起つて、人の居らん小さい客間の半分を、妻君が植木鉢の間に造つた、（ヨルカの節の物とて、一室別に盆栽を陳列す、之を花の小屋（直譯）と稱ふ）其中に入つた。

子供達は皆何とも謂はれぬほど可愛らしい。姥や母の言ふ事などを聽くのではない、些の間でも大人しく爲て居る事か、見る〳〵ヨルカの菓子を取つて食盡し、誰が何の玩具を貰ふのか解らぬ中に、大概半分は毀り壞して了つた。中にも可愛らしかつたのは、目の黒い、髮の縮れた男の子、持つて居た木製の鐵砲で始終私を狙つて居たのだ。又最も注意を惹いたのは、其子の姉で、十一ばかりに成るのが、美しい事は、アムウルの神とも謂ふべきもので、物靜に、考込んで居る、色のちよと蒼白い、少し出目の、大きな涼しい利發らしい眼色の、誠に氣高い標致好であつたが、子供達に窘められでもしたものか、私の居る客間に獨り入つて來て、隅の方で持つて居る人形と遊び始めた。

來客は金滿家だと云ふ此娘の親に皆敬意を表して居たが、誰やら小聲に話して居るのを聞くと、此の十一の娘にもう持參金として三十萬圓と云ふ物が銀行に預けてあると云ふので、其を感心して聽いて居た人達の顏を眄すと、思はずも彼のユリアン　マスタコイチが目に着いた。兩手を後に廻して、少し首を傾げて、何かは知らず非常に注意して居る風に見えた。

それから私は子供達に贈物を頒けるのを見て、主の如才無いのに驚かざるを得ぬのであつた。彼の三十萬の資産家の少令孃には、一番價の高い人形が當つて、それから誰に何、誰に何と云ふのを見ると、總て親の身分に依つて子供の贈物に高下が有る。親の位置が卑くなるに從つて、段々と品も末生に成つて、遂に最後の十歳約の、軀幹の小い、痩削けた、雀子斑だらけの、赤毛の男の子になると、畫も何も入つて居ずに「天然の美」とか、「感動の涙」とか書いてある那樣な本を唯一冊貰つた限。

此の極怯けた老こびた子は、主の子達の媬姆の貧い寡婦の悴で、粗い木綿の上衣を着て居たが、貰つた本を手に持つて、他の子供の玩具の傍を廻つて居る。心では衆と一所に遊びたいのであるが、遠慮して居るらしいのは、可哀さうに子心にも自分の身の上を知つて居る樣子が見える。

私は一躰子供を觀察するのが至つて所好で、且彼等の生活上最初の自由と云ふ者の顯はるるのが見られるのを、甚だ面白く感ずる。赤毛の子は始の內は他の玩具を可羨しさうに睨めて居たが、大勢が芝居事を爲て居るのが殊に氣に入つて、自分も是非仲間に入れて貰つて、何かの役を遣つて見たさに、如才なく立廻らうと考へたものらしく、急に躡々然しながら傍に居た子と戲け始めて、ハンカチイフに一杯菓子を入れて帶に垂下げて居る、頰邊の落ちさうな子に、自分の持つて居る林檎を遣つて見たり、他一箇の子をば世辭半分に負つて遣らうと爲たり、いろ〳〵勤めた。が、一分と經たぬ內に、意地惡の子が居て其に酷く撲れたが、それでも泣きも爲ぬ。すると、母親が出て來て、他の子供衆の邪魔を爲てはならぬと譴られたので、悄々と此處を出て、前の娘の獨り遊んで居る客間に遣つて來た。すると、娘は自分の傍に寄せて、其子と兩箇で人形に着物を着せ始めた。

私は半時間ほども此の小屋に休んで居たが、赤毛の子と三十萬圓の娘とが仲善く遊びながら、小聲で頻に話を爲て居るのを、空寐入に昏々して居ると、俄に人の跫音がして、ユリア

ン　マスタコイチが此室に入つて來たのだ。

　つい先まで彼は未來の大持參附の花嫁の父親と或吏務上の事で盛に談を爲て居たのであつたが、子供達が喧嘩を始めて、わい〳〵云ふ騷を機に竊と外して、此處に來たものだ。何を考へ込んで居るのか、獨く思入つて突立つて居たが、扨て指を折つて勘定を始めた、而して極小聲で、

「うむ、三十萬……とすれば、今が十一……十二の……十三、十四、十五、それから十六――五年か。

　假に百に付いて四と爲れば、一萬二千の五の、六萬。假に五萬年と見て、三十六萬……まあ四十萬だ……いや、なか〳〵四十萬どころではないぞ!!　彼奴或は百に付いて八も取り居らう、十も取るかな。何度無しに五十萬だ。五十萬と見て置いて差支無い。而して其辨は身の所前の證明からむ、然う。」

　鼻端を撮んで、出て行かうとする途端に、直ぐ其の隅に居る娘を見付けた。けれども鉢植の蔭に成つて居る娘には全で氣が着かぬのであつた。

　今の計算の興奮の樣子、其何故か知らぬが、彼は恐々しながら熟として居られぬやうに頻に手を摩つて、最一日此の未來多望の花嫁を視た時には、彼の不安の念と云ふ者は、其極に達したのだ。

　前まんとして四邊を眴した。惡事を働きでも爲るやうに忍足で女の子に近いて、少し笑ひながら、寄ると突然其顏に接吻した。是は誰でも驚く〳〵、娘はわつと聲を揚げた。

「おゝ、愛らしい孃ちやんや、貴方は何を作つて被在るの?」

　又四邊を眴しながら、娘の頰を些と突いた。

「遊んで居ます。」

「然う、此子と?」

　とユリアン　マスタコイチは赤毛の子を睨つて、

「あゝ、あの、な、お前は好い子だ、お座敷の方へ行つて遊びな。」

　子供は何も言はずに、目を圓くして小父さんの顏を視るばかり。彼は又四邊を眴して、娘の方に屈んで、

「貴方の持つて御在のは、其は何ですね。お人形ですかえ。愛らしい孃ちやんや。」

「お人形よ。」

　女の子は眉を顰めて、少し氣味の惡いやうな容貌。

「あゝ、お人形さんですか。愛らしい孃ちやんや、貴方は御存じですか、其のお人形さんは何で出來て居るか。えゝ?」

「知りません。」

　と言ふのも小聲で、全で內向いて了つた。

「御存じないの?　愛らしい孃ちやんや、其は、ねえ、布片で拵へたのですよ。――こら、お前は部屋の座敷へ行つて居な。」

　と怖い目で赤毛の子を睨むと、子供同士は泣きさうな顏をして、ひたと抱合つた、離れたくないと云つたやうに。

　ユリアン　マスタコイチはもう「愛らしい孃ちやん」で夢中だ。

「愛らしい孃ちやんたや、貴方は奈何して這麽好いお人形さんをお貰ひだか、知つてお在ですか。」

「知りません。」

　と愈よ小聲になる。

「あゝ、是はね、貴方が愛らしい、大人しい、善い孃ちやんで、此の週間中お行儀を良くしてお在だつたものだから、其の御褒美なのですよ。」

　彼は居ても起つても耐らぬ樣に逆上せ返つて、又例の如く四邊を眴したが、轉々するのと、

堪へかねるのとで、殆ど聞えぬぐらゐの幽な聲で、

「本に愛らしい孃ちやんや、あの、私が貴方のお內へ遊びに行きましたら、貴方は、ねえ、私を可愛がつて下さいますか、えゝ？　奈何ですか。」

又接吻しやうと爲たから、女の子は今にも泣出しさうに成つた。傍に觀て居る赤毛の子は、可哀さうに成つて默欲を搔き始めると、ユリアン　マスタコイチは慍つたの慍らぬのではない、烈火の如くに成つて、はったと睨んだ。

「行け、行け那裡へ行け！　貴樣は何だ！　男は男同士と遊ぶもんだ。早く那裡へ行かんか！」

「いゝえ、可いのよ！　居ても可ござんすわ。貴方が行つて下さい！　此子を那樣に言ふもんぢやありません。」

と娘は到頭泣出して了つた。

戶口に人聲がしたので、ユリアン　マスタコイチは頗る慌てゝ其の尊大なる體を立直した。其時遲く、赤毛の子は餘に彼の可恐さに、女の子を捨てゝ、こつそり壁傳ひに、客間から食堂の方へ逃げて行つた。疑を避くる爲にか、ユリアン　マスタコイチは後から追掛けて食堂に入つたが、其顔と云ふものは、茹蝦も宜しくであつたから、思はず鏡の前で自分を見ると、有繋に間の悪さうな顔であつた。

彼は今更、慷情もなく一圖に赫と成つたのを、定めて悔く思つた事であらう。察するに、彼の百に十の五十萬と云ふ胸算用の爲に自ら昏迷して、己の見識も品位も滅茶々々に大人氣無い眞似をして、其の目的物を手に入れやうとばかり逸つたが、奚ぞ計らん、其物たるや、而後五六年も經つて見なければ奈何にも成るのではない。

私も亦此の先生の蹤に尾いて食堂に行つた所が、いやはや目も當てられぬ一場の活喜劇を見た事だ。

憎いと悔しいとで怒氣紛々たるユリアン　マスタコイチは又此處で戀の敵を追掛け追廻して、散々に脅し付けて居る。男の子は逃げて、逃げて、竟に逃場を失つて了つた。

「叱、出て行け、此の餓鬼め！　貴樣は淸麼處に入込んで、何を爲て居るのだ。うむ、果物を偸みに來居つたのだな。盗坊する事は成らん。行け〳〵、出て行け。貴樣は太い奴だ！　惡い奴だ！　馬鹿な奴だ！　此の餓鬼の鼻涕垂め！　さあ、さあ〳〵早く出て行かんか！」

子供は此の險脈に辟易して、何爲れて事かと戶惑して了つて、食卓の下へ潜り込んだものだ。怒り哮つたユリアン　マスタコイチは衣兜から大きなキヤリコのハンカチイフを曳ずり出して其を隆々と揮つて、食卓の下を拂き廻すと云ふ騷。赭面の肚膨の腓の太い大兵の、一口に謂へば胡桃のやうな圓っこい奴が、眞赤に成つて、すう〳〵言ひながら大汗で立廻をして居る。妬けたの乎、妬けぬの乎知らぬけれど、何でも餘程癪に障つたものと見える。餘り可笑しかつたから、私は吾知らず聲を放つて笑つた。實に見苦しいほど遣つたのは此時のユリアン　マスタコイチ。折から主か入つて來たので、子供は踊々這出して、埃だらけに成つた膝から肘などを嘘いたり、拂いたり爲て居ると、這邊ではユリアン　マスタコイチが又慌てゝハンカチイフの端を摑んだまゝの手を鼻の所に持つて行つた可笑さなどは、迚も耐つたものではない。

主も此場の樣子を變に思つたらしく、私達三人を眴したが、物馴れては居るし、何事も爲にならぬやうには考へぬと云つた人であるから、直に客と向ひ合つた折を利用する。

「いや、是なので御座ります。此の男の子

で、（と赤毛の子を指して）貴方てお願ひ致し度存じて居りましたのは。」

「はあ……。」

とユリアン　マスタコイチは未だ吾に復らぬ。

「宅の子供の[illegible]の伴で御座りまするが、（と哀願するやうな調子で）母と申す者は誠に可哀な女で御座りまして、はい、後家で御座りまする。元は官吏の家内で御座りましたが、はい、唯今では……で御座りまするから、何分どうか然やうなことに願へませうなら、」

「いや、其は余程と[illegible]の何でありますが、今些と然云ふ譯に行かんのですて。實は私も調べて見たです、所が一向[illegible]員が無い。又有つたと爲た所で、既に、何ですな、十人約も候補者が有つてからに競々言うて居る。究竟です、此の子供より、未だ[illegible]を有つて居る者が澤山有るやうな始末なのであるから、甚だお氣の毒ではありますけれど、……はあ、然うです。」

「其は奈何も殘念な事で、當人は誠に素直な、[illegible]な奴で御座りまして。」

「はあ、然し、私の見る所では、[illegible]然うでもな……、[illegible]は[illegible]い、[illegible]らし……」

と[illegible]で引摩るやうに口を歪めながら答へて、直に男の子に向つて、

「お前達裡へ行つて居な、え、、何だつて其處に立つて居るのか。早く、彼裡へ行つて！」

未だ稜々した様子で、片方の目で私を見たものだ。彼の激して居るのが、私には徹頭徹尾可笑しいから、今度は面と向つて又大いに笑つて遣つた。すると、彼は[illegible]と他を向いて、聞えよがしに、男の[illegible]な男は何者かと主に[illegible]ねた。而して餘は何か小聲で話しながら兩個は出て行くのであつたが、彼は主の言ふのを信ぜぬ[illegible]で、頻に頭を掉つて居た。

[illegible]て私は[illegible]たい[illegible]なつて、それから廣間に返つて見れば、彼の先生主夫婦を始め大勢の客に取卷れて、今紹介された當人と熱心に話を[illegible]て居る處、其の婦人は即ちユリアン　マスタコイチが、十分前に[illegible]を[illegible]じた愛らしい嬢ちやんの母と見えて、彼の女の子の手を取つて居る。

ユリアン　マスタコイチは其娘の美しいのと、慧いのと、様子の好いのと、教育の有るのとを、[illegible]て居ると、[illegible]は[illegible]を[illegible]て、[illegible]つて、父[illegible]て、[illegible]の[illegible]緊めるやうな口許をして、[illegible]を爲て居やうと云ふもの。

主は主で、[illegible]中に溢れるのを見て、是亦大恐悦の體。來客も同様に目を細くして、[illegible]を爲て居る。此時子供達の遊戯さへ[illegible]しいと云つて止められたやうな有様で、室内は全く[illegible]話の爲に充されて居た。

[illegible]て彼の母親は最も鼻を高うして、ユリアン　マスタコイチに向つて、其の[illegible]に[illegible]る所の光臨を[illegible]屋にも賜るやうにと懇望した所、彼は無上の滿足を表して此の招待を承けたのであつた。

左右する間に時移つて、客は皆歸る[illegible]に成ると、口々に彼の愛らしい娘と、其の兩親と、殊にはユリアン　マスタコイチを譽めて噂し合ふのを耳にした。

「あの方は[illegible]お有なさるのですか。」

と私は彼の直傍に居た婦人に聞いて見た。無論彼の耳にも入つたのだから、ユリアン　マスタコイチは目を轉じて私の顏を疾視した。

其人は私が故と無[illegible]を[illegible]には知らぬから、大きに不興の躰で、

「いゝえ。」と言つた限。

其夜の話はそれで了局です。所が、つゝ[illegible]頃です、私が[illegible]の[illegible]を[illegible]と、馬車[illegible]

集つて大混雜して、口々に婚禮の噺を爲て居るのではありませんか。其日は朝から曇つて居たが、折から霧雨が降出した。

私は其の雜沓の中を搔分けて、やう／＼の事で聖堂に入つて見たのです。すると、花婿と云ふのは、腹の便々たる、脊の低い、圓こく太つた、美々しく着飾つた男で、何か頻に奔走して、指圖などをして居た。然う恁うして居ると、それ、花嫁が來たといふ騷ぎから、又押合ふ人込の中を割つて、其の花嫁なる者を見ると、驚いた。喫ひ太つた新郎とは雲泥萬里の婀娜たる美人、而も春尚淺き蕾の花。そればかりでない、美しいことは此上も無く實に美しいが、其顏は凄いほど色蒼白めて、瞼面に憂を含みながら、惘然と恁う他を見据ゑて居る眼色が、どうも今泣いたばかりらしい。で、其の顏相は上代美術の要件を具足して居るとも謂はうか、美しい中にも自と威有つて重々しい。然かと思ふと、又其奧には、極初い、處女ぽい、何とも謂れぬ可憐らしい所が恁う微露いて、而して其處に助けて欲い、賴む色が有るので。それは眞に一見して憐愍人を動す者でした。

聞けば、花嫁はやう／＼十六になつたばかりと云ふ。私は段々注意して彼の婿君を視ますとは、忘れもせぬ五年以前のヨルカの夜に見たユリアン　マスタコイチ其人だ！　斯と思つたから、私は又一層の注意を以て花嫁を視た。．視ると其儘私は聖堂を飛出して了つた。あの娘は財産家だとか、五十萬の持參だとか、許物が奈何したとか、見物は密々と那樣噂を爲て居た。

私は街に出ると、噂と一息吻いて、

「然し、奴、勘定は巧いものだ！」

（三十五年二月）

小品及隨筆

大鼻毛

一

男に係れば女は饒太くなり。女に係る男は鼻毛の延ぶること。人に[illegible]無く。時に古今を問はず。[illegible]に[illegible]を引く[illegible]業[illegible]に一箇の[illegible]して。茶屋[illegible]を手[illegible]の[illegible]とし。七十餘人の[illegible]に[illegible]らぬ[illegible]く。[illegible]名をキの字と呼ばれて。[illegible]の[illegible]を[illegible]となる[illegible]は。[illegible]の山の手に今[illegible]の[illegible]。[illegible]の[illegible]より[illegible]て。[illegible]を[illegible]すこと[illegible]やうに[illegible]年[illegible]にて[illegible]く。[illegible]に[illegible]して。[illegible]に進[illegible]何[illegible]まで[illegible]しい[illegible]のキの字[illegible]と。[illegible]の河岸に[illegible]で[illegible]たやうに騒[illegible]ず。[illegible]

種の色男様を。誰か態[illegible]はねはたけれども。御名前はキの字とばかりに。[illegible]業を知る者とてはあらざり[illegible]。小石川の方より金紋[illegible]の車を飛して。殆ど夜毎の御来臨に[illegible]も連れず。朋友と来るでもなく。色には[illegible]とや唯一箇の。様子聞くべき便も無ければ。隠たい程は隠もたされぬ方を。[illegible]の二[illegible]ばかりは大[illegible][illegible]様の[illegible]と手[illegible]にして遣せしが。其後偶然知れて見れば。[illegible]の[illegible]長殿が[illegible]子。御[illegible]には[illegible]の[illegible]む[illegible]もありて。[illegible]まで[illegible]が金の[illegible]とは。[illegible]氏にも無い[illegible]の[illegible]。それは少し[illegible]の[illegible]もあるべし。[illegible]入りて[illegible]知る[illegible]の一[illegible]に。その身は[illegible]行に[illegible]御の[illegible]光を以て小[illegible]頭の[illegible]。[illegible]もあらぬ月[illegible]なれば。[illegible]の[illegible]に[illegible]。足も[illegible]分[illegible]行に[illegible]ゆるを[illegible]もせず。[illegible]て来ては貸はることぞかし。年[illegible]なればとて男一[illegible]で。[illegible]なされうとは。と[illegible]に[illegible]て[illegible]するゝほど[illegible]に[illegible]する[illegible]も二十六にも[illegible]て此身分[illegible]らはねも。此邊の寸法なればなり。恐らく此人の行末水野[illegible]一郎と頓て知れても。むづかしげなる名を此人に愛しとて。女はなにも假名にキの字と[illegible]かき男[illegible]。心も其通りに[illegible]食の了簡は無けれども。子守に[illegible]の古[illegible]せたやうなのも。[illegible]札出して[illegible]つて行けば。先は[illegible]者と見ゆる女どもから。誘ふ水を向けらるれば。萬更でもないかして。或時は雨の[illegible]、酒の[illegible]。寒き夜深などに[illegible]されて。契の[illegible]も多かりけれど。是はと心留るほどの女も無かりしが。其年も[illegible]の[illegible]。今日披露せし新[illegible]何屋の[illegible]助と云ふを[illegible]まれて呼びしは。新子と聞きて迂闊と十七八に[illegible]ひしを。来て見れば二十六七の夜目はどうやら[illegible]なれど。[illegible]の生[illegible]は[illegible]道はしく。[illegible]は[illegible]の如く。而は野生の[illegible]に似たり。[illegible]に[illegible]るゝ所もあれど。其は名さへも知らぬ[illegible]の一度去つて又来ぬ[illegible]し。[illegible]はとへば。[illegible]は[illegible]れども。茶何も[illegible]。[illegible]は[illegible]一本で[illegible]る[illegible]した[illegible]何に[illegible]の[illegible]には[illegible]。[illegible]を去らず。[illegible]も[illegible]れ[illegible]。[illegible]の[illegible]しまふ。[illegible]は[illegible]るゝ[illegible]も此[illegible]せをい[illegible]もの[illegible]て[illegible]なる[illegible]の中に[illegible]一人

出放題に飛れる漂語の。段々と合せた拍取遊べて。吐す紫井の空嘯きてぞゐたりける。

二

逢うたが縁の始から尋常ならぬ様子とは。一座の見た目に違はず。其後キの字の座敷は金助一箇が荒物になりて。然しも時めきし女ども盡く荒められぬ。横町の風の月。新道の雨の夕。此座や彼処の長火鉢に頬杖の裏々打侘ひて。此を濟らすべき沙汰ぞありける。二上りの小意気餘粧を風呂敷包にしたやうな膝を前めて。今更口惜いと云ふも此方の器量の悪いことながら。皆が大事の〳〵大事のをば漂泊の老朽に占められて。化粧鏡におめ〳〵と何の顔が合はされう。又キい様もキい様なり。座付一唱が満足に弾けもせぬ鸚鵡姐を。二度と呼ぼるゝさへ御座敷の汚辱なるに。人目を忍びて名も知れぬ小待合に陋い首尾をなさるゝとは。法界悋気で言ふではなけれど。彼方の御名折になるが御傷い。左右は彼馬骨の素性を洗ひ。其をば中立てゝキい様に愛相盡かさせるが上分別。糺して見たらば。女同士でも一座は御断の履歴もありさうなと。無い智慧絞る玉の汗。白粉の剝ぐる髪際に熱心の程は形れたり。

さあ家其に接るからは。彼奴の小西瓜が金鶏臓頭に年金とやら人参とやら八十四圓無いたやらに。奢撰とか云ふ事して。一生懸命に探索をせうではござんせぬか。一番に種を揚げたものには。歡迎會と慰勞會とを一所にして。皆家から出張衛生座を奢つた上。歸路は料酒で西洋料理。代價ライスカレイは鐵り辛くないのにするよと。食氣にまじる色と慾。心ひかるゝ三筋の絲のチン〳〵騒は始りけり。時しも頃は臘月や。お茶碗くまゝの徒然に幸をさへ怨諾も無かりければ。二日許してチョン來なの勝次が注進に。十八の年から去年の秋まで。吉原の小格子に彼は年古る野干の身。今は奈何やら藥罐の頭。情人ゆゑに二度までも駈落して。身疎なるまじき借財の中を。九尾を振て三國傳來の化粧のもの。今も見付り次第追手の蒐る日蔭の身を。此に藝者と假の姿。娼妓にてこそ厳しき名の錦であれ。撥取らせては眞鍮臺の金助。あの鍍金引剝してやらずば。と各々力を得て。其から其と猶も手分して。いよ〳〵確なる所を突留め。さて是からがキい様の御座敷へ押掛の使者の大役。誰彼と云ふまでもなく。生米七粒生玉子を七遍まで饒舌の小静が名指になりて。副使には甚子。よし松。介添にはのたまくのメ吉。初音家の小暗き奥に呼込れし人身御供のキい様を。生血桃れぬ内救けまゐらせ。そろ〳〵かしこへ出掛けやうと。夕落を待ちて錦魚の子坂の如く打連立ち。初音家の帳場をばキい様の御約束と詐りて。難無く奥の一間に亂入れば。待つ身につらき置火燵と。火鉢抱へてキの字が唯一人。獨酌點孤にして寶子閑なり。南無三寶と驚きながらも落着拂ひて。是は潮鬼と此方は顔を見合すれば。奈何して來たとは是いな。もうし貴方はなあ。貴方はなあ。彼方でも貴方はなあ。此方からも貴方はなあ。

三

鬼の留守とは謂ひながら。何時來るやも知れぬものを。此に置奉るは危しと。然りとは迷惑がるキい様を四人の藝者手舁にして。待合の門を探みに揉むで。やう〳〵馴染の茶屋の小亭に移し參らせ。途よりにメ吉が脱けて其々へ此始末を注進しければ。御見限の藝者ども驚破事こそ起つたよと。一中の常磐を彈きさして。缺けたりとも此撥持つて駈出るもあれば。焼芋の口拭ひも敢へず。待人を忘れて馳參ずるなど。瞬く間に十六人犇々とこそ詰寄せたれ。此勢に恐れて。平生より温和きキの字は女

讒島の土辨に取圍れたる想して。命ばかりはせめて免せと。色男の本懐に此時に留めたり。藝者ども怨の餘りも稜立ちて無躾に騒ぐを。年嵩の由松が推鎭めて。皆に代りて私から申上たき事あり。と金助が素性濁無くと謂はうよりは。大分尾も附けて初發の耳に入れければ。キい樣も聞く毎に膽を潰して。少しは厭氣も發したる氣色と見ゆれど。脫然とは思切られぬ心の中。他には云はれず金助にさへ隱したることながら。此老朽の棄てられぬには。ちと仔細のあることなり。謹一郎が十六の年。同い年の小間使ありき。島とて旗下の妾腹に生れ。成程容色勝れて才氣ありした。嬉戯に袖牽きし郞下の闇に。若様かと云ふ聲も紅葉して。かねて彼方にも思のありしより。不圖實となりて。二年が間知る人も無く契りしに。十九の年はいよ〳〵婿取るとて。宿許より暇を願ひぬ。此事情親には言はれず。謹一郎も今修行盛の身にて。兩日も無き婚行を口にはしがたく。人目を偸みては夜毎書院に出會ひて。此結構の心遣せしも。分別は出ずして女は泣くのみ。此まゝ別れ參らせて。餘所の男に添ふほどならば、淵川に身を沈むる心底、と囁くに、[illegible]聞きてさへ言はれぬ中を、問はれて言はれぬ内に、

はや其日となりて。宿よりは生木裂く斧迎に來る。名殘は盡きず悲は重なりて。亂るゝ胸を一筆に懷紙の端を裂きて。添はるゝ分別聞かせたまふまでは。婿は取るまじ。二三日內に御便待つと。投文して泣く〳〵出でしが。最期の首尾を人に見られて。母人もはや合點の上にて。其々手の廻りたりとは露知らず。約束通り宿へ尋ねて行けば島は見えず。親類方へ泊に行きしと聞きて。悄々戻りし翌日。母の傍に呼れて。島には幼きより定まる夫のあるものを、如何に好いた同士なればとて。添はされぬ親の義理。此を能う酌んで了簡仕替へよ。思切れと。其日より堅く外出を止められ。一月餘思ひつめてばかり夢の如く暮せし間に。島は無慙や心に染まぬ婿取らされて。泣暮すとは人傳に聞きしが。籠の鳥の恨めしくも。程經て島が母來りて。祝言の夜より比衾もせず。物さへ言はず。食事もせずに。男を嬲死に身歿りける由。それよりはや七歳になりぬれど。今に忘られぬは其面影。金助が生寫ぞかし。

四

それゆゑの戀なればとて。今此場の難澁にもならず。然りとて[illegible]据いてばかりもゐられず、

照隱に在合ふ盃を由松に差せば。一同目で知らせる。なるほど此御盃滅多には受けますまい。一寸行つて彼子にお斷り申してから。と立ちかゝるをキの字は抑へて。いつまで酷いこと哉。もう今日限彼奴を呼ぶことではない。衆の深切は必ず無にせぬ。然した阿婆擦と知らぬ昔の事は。水に流して免してくれ。今より改めて舊の衆のキの字の祝。さあ〳〵飮んでくれ。と手を鳴して熱いのを喚べど。このくらゐの挨拶にては十六人の心解けず。那麼奴と緣切つたと云ふ。何ぞ確實な證據を見せたまへと迫りぬ。如何なこと。此後は口も利くまい。座敷へはなほ呼ばぬ心底。此胸割つて見する外に。是と云ふ證據は無し。證據の無いのを詐と疑ふならば。氣の濟むやうに何なりとも。衆の隨意。所望があらば聞かう。と身を投出したる言分。弱りはてたる面上に誠も見えて。好い男の弱りたる姿。松の時雨むとする風情なり。十六人の中にも別けて惚れた目に此側しさ。少し涙ぐみて。もう堪忍してあげたいと言出づるもありて。證據の沙汰も力[illegible]み。それでは金助呼ばぬ後日の爲の一札を入れて下さへ。若し違變なさるゝに於ては。毘沙門[illegible]の[illegible]所掲示場を借りて。貴方の御[illegible]と

奥に貼付け。十六人の中二人づゝ出の競婆にて見張に付き。七十五日が間浮氣を曝しまする御合點か。何の否は言うまい。現在今宵も今に聞知りて。此へ尋ねて來やうも知れねど。素性を聞いては顔見るも恐しや。逢ぬやうに衆で欅をしてくれ。力盡でも乗込ましてくれるな。と噂半に婢慌忙しく駈來り。店口に金助様が何と斷つても確に御出なさるゝとて。帳場の前を動かぬとは一も仂ないおいらん殿。ちと藝者の作法行儀と云ふものを教へてやらう。と氣萬の玉次。萬作。小奴。鶴舞の榮次。愉快節の八重吉。テンツ、の春子。哄と喊いて立塞れたる勢に。金助も道は敵はじ。賴むお方の二心を。又更めて恨む夜もありなむと。無念の後毛咬緊めて。船板塀の門を出でぬ。

五

弗と思切つた何なりとも。證據見せうとは。今迄嘗て女に嘘吐いたことのなかりしキい様の口頭。よもやと想ひしが十六人の疎忽。餘の客ならば濱醛甘茶を舐めさせらるゝやうなばかりでもあらざりしが。鼻の前なる歌加留多。燒くや藻鹽の色男は。此は人目の煩ければと。山の手を河岸に替へて。其後は富士見樓に花柳の首尾を。例の十六人辻占の後にも知らで。近頃は御越のかれ〴〵になりけるを異み。或夜の次手に此事を怨みしに其よ不審は然ることながら。努々浮氣の沙汰にはあらず。愧る事よ我口より云ふも異なものなれど。内をば外に無間斷の夜遊。竟に親父の青筋となりて。銀行より直に他處へ廻ることならぬ。何が何でも一先歸宅の上にて。出るならば必ず出先を言へとの事。否何なりとも言うて出るは易けれど。それも日毎に夜更けての歸來は。首尾甚だ宜しからねば。此處當座謹愼の人の如くはちと無沙汰もせう。恨むお前よりは恨まるゝ身の微痒き尻を揉みて。此夜長を菓子吃つて更す辛さ。二三日は眞面目にして。一日隔けて來る經營の苦勞も思うてくれよ。と痕跡も無い事言うた嘘が。圖らずも實となりて。其より三日過ぎての夕方。金助と酉町へ行く約束を、是からと出掛くる處を。父様の御召ぞ。謹一は何處に。と奥より母の聲。那麼事と知らば後影見られても驅出づべきを。何ぞ五六分にて濟むことゝ引返して。父の居間へ行けば。段々の不埒を言葉に責められし揚句。世の戯嘗めに太平洋越えて。紐育の某商會へ二三年修行に行けと。不興の體は少も無くて。金遣うた事も。酒飲むだ事も。内に居の坐らぬ事も。其は若い内に一度はある事と。過ぎた事は皆免して。もう好程爲た筈なれば。是からは魂を入替へよ。と譴責もせずに身の爲になる事ばかり。眞綿で緊められては身動もならず。唯赤面してゐる間に事は極りぬ。意見の内も始の程は。金助の嘸や待つらむにのみ思を馳せたりしかど。紐育と聞くより餘の事に動顛して。日本の酉町などは其方除に。行末の事取つ追つ胸を痛めて聢りしも四時間。十一時となりて漸う父の前は退りたれど。今意見されし側から此遅いに出ることならず。着飾りし衣引剝ぎて。悄々寐衣に更ふる無念さも。爲う事無しに臥ては見たれど。門外鐵に車の音すれば。彼も酉の市の歸路なるべしなど。身の苦き折は心の滅多に遊ぶものにぞありける。

六

はやキの字も通の名殘迄なり。と明る日は銀行歸の車を金助方に回して。その奥座敷にしみじみと。語れども〳〵話は盡きず。御歸の日は知れずとも。操を守つて必ず待つてゐませうほどに。毛色の變つた浮氣などせずに。月に二度づゝの音信は缺かして下さんすな。と日毎

に見ても他かぬ男の顏を長うても此月中の餞、かと、讀む目の中に涙を浮べて。竟には賤に打俯す心細さに。キい樣も愛別離苦の胸迫りて。十里隔つるさへ味氣無きものを、何方向いても見知らぬ亞米利加の空。曠野の闇に捨てられるやうな。今から其が案じられて。と弱る心を濟に勵し。最一献まぬかと差すを受けて。[illegible]ぬ御名殘の心ばかりに。何で御餞別と申したけれど。私風情より進らする物も無し。せめてはと今思付きたるは。私の伯母婿にて[illegible]と申すもの丶、兩三年前より桑港の日本領事館に書記とやら勤めて。今も折々文の便せるがあれば。嗚呼がましけれど其方へ紹介狀とやらいふものをして。何かに縋けて貴方の御世話しまするやう。文の中にも[illegible]御賴の段々を書きまして。必ず[illegible]の無いやうに能う許はせませうほどに。私の一念貴方の影身に添ひて。桑港に御出の間は御不自由はさせますまい。と思入りたる言の端々、[illegible]の事[illegible]の口からは[illegible]の情程も[illegible]るものを。紅つけた唇からの[illegible]なさよ。咳唾を珠の如く[illegible]いて[illegible]に沁み。能う言うてくれた。其[illegible]も[illegible]に付けるならば海上も安全に。此身も然ぞや[illegible]なるべし、女房は有難に注意も細く。

是ゆゑに忘られぬぞと。少しは實走に纒綿るれば。女は振拂ひて。ゑゝ嘗いて下さんせ。行き掛の駄賃に又迷はせ、留守の內に焦死させて。煩く纒綿ふ老朽をば片附けて了はう下心か。

七

出發の日も迫りければ。無理なる逢瀨の度重ねて。金助よりは錢の一封キの字よりは當座の小遣三十圓。彼方へ着の上當の玉になるやうなもの遣來さう。然らば無事で暮せよ。商賣とは云ひながら努めて夜更させぬやうに。例の無理酒は構へて飮むまい。あい〳〵貴方も御身を大切に。風も引いて下さんすな。浮氣の沙汰は[illegible]の事ぞ。三年が四年でも此金助は待ちまする。待つ內からば百年でも但し心は[illegible]ぬ私なれど。貴方は見かけが男盛。此身は色香衰へて。御歸朝の頃には好い姿になる小[illegible]。左樣よりは兄妹が似あはしうなるでござんせう。其時捨てられたとて。今宵の玉が證人に立つて一言ふでもなければ。情無うござんす。と何言うても聞分けさへなかるゝほど。男心に縋る小山田庄左衞門が[illegible]相對の未練の內にはや一時の時計の音。懲しては居られぬ所。と縋るを拂ひ。[illegible]るを脊けて。

[illegible]りとは〳〵心にもあらぬ[illegible]かし。その[illegible]日は泣いても笑うても出發。[illegible]は牛込の坂を[illegible]へども、身はなほも人々に取卷かれて[illegible]橋の停車場に行けば。中等待合の[illegible]炭悲しげに燃ゆる火も凍けたる[illegible]の長椅子に。銀鼠の御高祖頭巾を目深に被ぎて[illegible]色のショールを[illegible]かに[illegible]たる[illegible]か[illegible]し[illegible]見きて[illegible]はしけなる[illegible]つらむと心有る身はなほ[illegible]。謙一郎は見送の衆を離れて。[illegible]吹ひに暖爐に[illegible]りながら。風俗[illegible]花裏と見るほど[illegible]きて、[illegible]に見送る顏と顏。夢ではないか。夢に歸りし昨夜の金助。謙一郎は思ひもかけぬ嬉さと懷しさに。わな〳〵と身内顫ひて。今日にも限らねど戀に邪魔なは人目かな。人目の中の人目とも。其處には兩親此處には親戚。四邊には朋友知己。[illegible]氏の叔。切無さは實に身を斬るばかりなり。謙一郎は暖爐の前に立盡して、首を低れて。眼を閉ぢ。物言かけられても應答無さを。人は然こそと正直に涙を催しぬ。女はやがて帶の間より。キの字[illegible]紋の[illegible]荷を古代模様に[illegible]したる[illegible]體形の[illegible]を取出し。[illegible]の優しきをば純金の嚴しき指に[illegible]りつゝ、徐ら立退りて火の邊に近き。[illegible]に會[illegible]してぞ男が[illegible]

に立ちにける。

謹一郎は忘られざりし人香を戀しく。然あらぬ態して寄添ふに。女は盡さず其手を握りて、縮緬の袖の内に引入れ、じつと緊めたる忝なさに、思はず緊返せば又緊返し。抓れば抓る手と手の名殘も盡せぬに、はや鈴鳴りて。いよいよの別れは近きぬ。言ひたきこと言はれたき事。目と目に通はする内。姿を群集に見失ひて心細くも謹一郎は中等列車に乘込みたり。窓の外には人足繁く、頬は赤し、髮は狼狽へ、で唐は落着き。驛夫は喚く、物尋ねるに橙色のショオルの車室々々を覗きながら急ぎ來るを。謹一郎は不圖見付けて、來てくれたかと嬉しく涙の零るゝ顔を差出せば、女は飛付くばかりに其車室に入來るは、怪や金助。取逆上せて。我を何處までも慕ふのか。その心根は不便なれど。醉など懸けられては、と嬉しいやら。可恐いやら。首ばかり出して、身を竦めてゐたりしに。女は淑しく片隅に蹲まりて、例の物思はしげに折々顔を背けてはキの字を見るのみ。旋て横濱に着けば、在りける姿は消えて。宿屋への途も似たる影は見えざりけり。謹一郎は力落して。しみじみと鬱ぐ午後、黒帽仕立の車夫一枚の名刺を持參して。今朝旅先より歸りしに。はや御出發と承り。御名殘惜しさに是まで參りたり。勝手ながら御内談もあり。御手間は取らさねば、私方まで即刻御出を待つとの口上、名刺を見れば陸軍歩兵中尉何の某と立派に記したり。這は覺えある姓名、金助に迷ひて通ひつむる客なれど。未だ見知らぬ此人の尋ねて來べき理は無し。然ては金助が呼出の才覺。天晴僞たりと横手も拍たず。眞面目に領きて、今は慎への遠慮も無く、のさのさと座敷を起ちて、其使に蹤いて行けば、辨天通の唯有旅店の奥に睡島田の少し亂れて。黑縮緬の羽織着たる背後に、懷しき橙色も見えて、寂しげに火鉢控へたる金助は。男の入來るを見るより。物をも言はず衝と立ちて。小腕に引抱くばかりにして褥の上に引据ゑ。額打目成りて。好うまあと言ふより外に語は有間無かりけり。一昨日の御別餘に本意無く。寐ても寤めても。戀しさの胸に痞へて一日の思に身は瘦するかと。怺へかねて是まで慕ひ參りしは。改めて濟ぬ御別の盃がしたさにと。此に三時間翼重ねて返すがへすもをしの契。旋て浮寐の夢さめて。日も暮近きに驚き。今日其方に別れても十日の波の上は。之に慰められて。と閨衣の下より白紙の添書を取り出し。女に見せて。我も見て、推戴きに納むれば。女も紙入より男の寫眞を少し見せて。私も之に陰膳据ゑて十七日の御旅立は。苦いが結句嬉しうございすと。涙の中にも微笑を含みて、門を出づれば又悲しく。宿を歸りてはいとゞ味氣無く眺むる空の北は時雨れて。君が涙の雨ふるか。

八

日は凄じう暮れけるに。夜は朗に人々明日の天氣を喜びの通り。明れば一天晴れて小春風の海靜に、餘に微動もおもしろく。遙のオセアニック號に漕寄せたり。鐵梯子を登りて中等室に閉籠めらるゝ謹一郎は。獄に繫がるゝ想して。此時ばかりは女の面影も眼を去りて。父の顔、知遇の姿や今や消行く心細さに。差含む涙抑へかねて。臥床の上に打俯せしが。馴染める聲の御機嫌好うも耳に殘りて。未だ人々は船の中にか。と這出づる下層甲板の彼方には。海漫々と浮ぶ艀の中より。三つ四つ手巾の飃るを見れば。はや故郷の人の漕行くなり。土の業平も水には俊寛の憂思。鐵欄に縋りて身を揉めば。人の見つゝ過行くを羞しく。又室の内に駈入りて、餞別の葡萄酒をば喇叭飲の無理醉して。そのまゝ臥床に仆れて眠り

しが。目覺むれば船はやゝ走りて。一秒每に日本を離るゝなり。いとゞ堪られぬ瞳に有形無形。又酒に紛らして軈て夜となり。明くれば一望蒼渺として天地の斷無く。雲は高く波は青く。行世の品とては我船の行くのみ。徒然なるまゝ物思は募りて身を搾りても死にたき一日を。有繁に昨日と忍び。今日と怺へて。戀しきながら。斷念も付く七日餘になりけるが。肌身に添うる金助が有樣も。表ばかりは見飽きたり。文言は又幾許誠の籠るらむ。と封推切りて讀めば。誠は誠なれど。我身への心中にはあらで。伯母婿の須[illegible]と云ひしは嘘の皮にて。文句の表。舌[illegible]くも吉原からの情人らしく。添書と云ふは何處から[illegible]。假にも我身の上を頼むとは。筆次手にも書かずして。おのれが恨と戀しさばかりを。讀むも頭痛のするほどに。書いて書いて書のめして。[illegible]ぐる時は其丈六尺。末に一言幸便にまかせとは何事ぞや。今が今まで色男とこそ思ひしが。[illegible]使とは[illegible]使とは。道は物も言はれず[illegible]なりて。[illegible]ふ[illegible]念の[illegible]の内に。文は寸斷々々に引裂かれぬ。[illegible]湯も[illegible]まれぬ此反古。今は[illegible]だに[illegible]にしと。此[illegible]と共に太平洋の中央に[illegible]れば。心の[illegible]は[illegible]を[illegible]れて。今更勿體無くも嬉しきは十六人の[illegible]。無にした[illegible]は彼地から何[illegible]ろう。と僕に思案[illegible]變へて[illegible]同室の亞米利加人に其地の[illegible]るなど。左右に女ならでは夜明けぬ國の人。[illegible]い鼻毛は大洋へ綱を引いたとさ。

湯の花

化物ら[illegible]の[illegible]に野[illegible]洗ふ七湯の繁昌。夏は避暑といひ。寒中は冬籠。然もなき時は轉地療養と。四時浴客の絶間無く。四谷に都を立てゝ。山中に不自由を知らず。凡そ集るものに金錢の[illegible]するものなければ。人心自ら不[illegible]にして。食ふ事。[illegible]ぶ事の外に[illegible]無く。冬の[illegible]さへ[illegible]間に。[illegible]世と[illegible]る[illegible]なる[illegible]本を指して下る[illegible]の[illegible]車。二頭の馬の[illegible]を緩めて[illegible]と[illegible]して、來れば遊戲れたりし里の子ども。道の傍に寄[illegible]りて。口々にあれは小田原の[illegible]と小聲に[illegible]しぬ。實に此の邊に知らぬ者無しとはおろかなり。今日本の天下に政を[illegible]りたまひて。威名[illegible]に隠無き御大身にてありける小田原[illegible]に[illegible]を[illegible]へたまひ。[illegible]の折々るさくなりたまへば。[illegible]に忍びて憂を[illegible]したまひ。[illegible]思のまゝに。御湯をと思[illegible]ちては。[illegible]に[illegible]して[illegible]下の[illegible]までもならせらるゝなりけり。いつもは車の内も左右に[illegible]を侍らせ。御酒などの用意もありて。[illegible]ながら口開きたまへば。盃も肴も自から寄來る仕掛なり。今日は如何にしたまひけむ。胡麻[illegible]頭の幇打一人御同乘して。もじりもじりと對坐に[illegible]れり。[illegible]など[illegible]しさせたまふ氣色にて。窓の外を打[illegible]めたまひけるが。橋を渡りて。[illegible]工の[illegible]立續きたる[illegible]の人力車宿の[illegible]に。二十ばかりの女房二歳ほどの子を抱きて佇めり。[illegible]を[illegible]ひて。[illegible]の[illegible]披き。左の乳房を露して。夕顏の實を並へたる如く。[illegible]に[illegible]の[illegible]を見かかに[illegible]くして。[illegible]に[illegible]を踏きたり。此姿見るより[illegible]の[illegible]色[illegible]りて。懐しげに見入り[illegible]ふを。老夫見付けて。さてこそ源氏の病、此[illegible]例ならぬ好色におはしませば。行所に御[illegible]の品を變へて。[illegible]も[illegible]れば餅の皮となり。今錢盡にては成らぬとあるものほど御念を懸けられ。三保の松原行けば天人を戀ひ。須磨の浦に腰蓑の[illegible]など[illegible]せたまはむずる御物好とかねて知れゝば。[illegible]必定彼女に御目留りて。今にも好きに[illegible]の[illegible]あるか。迷惑至極南無[illegible]根大權現[illegible]け[illegible]給へ。その御浮気を[illegible]めさせたまへと心中に[illegible]しつゝ。片隅に[illegible]の[illegible]して

縮みける間に。馬車は早くも半町ばかり来りぬ。御機嫌のほどは如何が。とやら〳〵鶴に候ひけるに。殿は黙然と頭を俛れて。ほろ〳〵と涙をさへ零したまへり。有繋に人目悪しとや思したまひけむ。鼻啜りつゝ面を擧げたまひけれど。力無げに後に靠れ。諸手を組みて。目を塞ぎてぞゐたまひける。餘の怪さに老夫恐る恐る訊ねまゐらせれば。強ひて打笑ひたまひて。無常の世なるよとばかり。外には仰せらるゝ事も無くて。館に歸りても其夜は浮きたまはざりけり。老夫は益〻其意を得ず。之を御者に語りて。彼女の素性を探らせけるに。十五六の昔塔澤の某湯に奉公せしものなり。其折殿の宿りたまひて。例の好心と徒然なる餘とに。過分の御言ありけるを。主驚き。親許に掛合ひ。金五十圓申受けて。御心のまゝにせし事ありしが。それより女身持亂れて男の數に會ひ。擧句は車夫に語ひ。年明けてそれの女房になりけると知れて。丈夫非無涙しほらしと云ふもあれば。やがて立身すべきぞと夫を嗾すもあり。然れど其後何の沙汰も無ければ。人人此女の不運を齒痒がりて。だめの輿のおひろと仇名せり。

はやりの紋

いかに蘭丸。あの物音は正しく數多の軍兵寄すると覺えたり。物見せよと仰せらるゝ間一丸そのまゝ走出で。高欄に足踏みかけて延上り。まだ夜深ながら雲透に見れば。桔梗の九本旗。驚破ござんなれ。光秀め。とは寝惚眼にも過れ見たる哉。凡そ大丈夫の心掛無骨一遍を旨とすと雖も。さりとては無下の無頓着。今時は是にても御奉公に妨無し。げに難有き御代に藍萬筋の裕裾みじかに。米琉の羽織を折目高に着做して。年の頃廿七八と見えて。髮は刈りつめて砲捕の如く。狸の隈。虎の髭。肩眞角に小山の撼ぎ出でたるやうなる足取。廣き額を日燒の半染にしたるこそ。鐵形打つたも同じことの軍人と。牛込寺町通の呉服店の主恭しく罷出でゝ。御用の品を伺へば。紋付の羽織一領誂へたきの由。お地合は絹。木綿の品々。御意は絹とならば。紬。縑紬。奉書。一樂。絲織。乃至は羽二重。魚子織。その魚子ぢやと白地の種々取出せば。染上價十圓と極りて。さて御紋はと帳付くる手を控ふれば。客はちつとも怯めず。近頃は如何やらなるが行るぞと。さても〳〵開闢以来無い圖のお誂に。主は頻に捻れる腹の皮を懸硯の角に擦付けて。御紋には流行と申してはござりませぬにござりまする。お家々に御定紋とて定れる外に。換紋と申するがござりますれど。殿方の御召料には嫌ひまする習。旦那樣の御定紋ござあるべし。それをこそと言へば。權輿も無い顔してそんなもの曾て持たずと。人違ひなどされたるやうの挨拶。主氣轉利して。さらば御姓名はと聞きも果てぬに。やあ慮外の一言。紋無くとも姓無き者やある。佐々木と言ふぢやと睨めつくるを。さてこそ四ツ目は宇治川の先陣。御定紋わかりましたでござりまする。

末黒の薄

今は昔あるやごとなき方の歐羅巴巡回し給へりしほどの事かとよ。巴黎の朧月をかしく。不夜城の繁華目前なるに旅としも思はれず。三笠の山もそちのけにして誰そある遊覽の案内せよと召させらるゝに。造船學修行として留學せる古岡某巴黎通の名ありければ。人人推薦して。御供には彼をこそと申すに。大儀ながらとの御言懸り辭しかねて。某御案内と

出づれば。まづすペラとかいふもの見せよと御意ある。畏みて然るべき方に御供申せしに。一幕御覽じて。直に那の役者こそ意に稱ひたれ。はや〳〵召寄せて身が旅鬱を慰め得させよと仰せらるゝなりけり。御媒仕るは易けれど。ここに在する君を日本に貴き御方と知られなば。不法に貪りて其一笑に公使館をも傾くるばかりの直を吹くべくも測り難し。とかくは某が舌頭の働。九年が麵包食ひし効も此時と。穴知り顏に取廻して。お敵に亙り。首尾好く納得させ。唯有る珈琲店の奥なる貸座敷に御方を忍ばせ。そこに彼女役者を作ひ。媒人は店の口に珈琲取寄せて待つこと久しかりしに出でさせ給はず。如何にし給ひけむと古岡は取越苦勞して。起つ居つ待侘びたりしほどこそあれ。扉慌忙しく蹴開き。御姿も四途亂に驅れ出でたる御方は。古岡後事を賴むぞ　たのむ〳〵の雁がねは花を見捨てゝ急ぐ御歸去。呼べど外を指して驅出でたまひけり。さては事こそと追掛け。委細承らばやと問ひしが。われ引受けて連れたる人を置き。置去の汚名など受くるに於ては國辱たるべしと。身を躱して一間に入れば。花は夜嵐に遇へる姿となりて。美人の泣伏したるに驚きさて優しう慰めて。有りける事ども訊ねけるに。女は悲劇に用ゐる涙の種を擧げて。これ見給へと指せる黄金なす額髮は。武將にしては龍頭の前立。雞には雞冠。牛に角。馬には鬣。之無くては媚を成さずとて。此社會には身に換へても重んずるものなるを。如何なる麁相か三分の一ばかり末黑の薄と燒焦げて。實に淺ましの。之を悲むよと。古岡は交際上手の諂を巧に。世にも賴もしく聞えさすれば。女は憂きが中にも嬉しく。夕の星の如き目を輝かして。聞いて給やと居直るを。如何なることや言出づらむと。古岡は胸轟しつゝ椅子を進むれば。女は焦げし前髮を搔撫でゝ。方樣も知りたまふべし。我等が身に取りては黄金の縷よりも遙か貴き此髮を。はづかはしき儺事せむとて。無殘にも焚きたまひし人の怨めしさよ。それとても惡作劇に似て惡作劇ならぬ手過失の事々しう咎めまゐらすべきにあらねど。それに赦させたまへと種々に申すを御聽分無く。手燭把らせたまひつゝ無躰の御戲の餘にと。又潸々と泣くにぞありける。其の御戲とはと段々聽けば。腹の捩れるほどの然りとは御位の手前も如何あるべき御剽輕と。あなたの可笑きほど女の氣の毒。頓に慰むべき言も無くて。當惑の手を揉みたりしに。女はなほも歔欷て。惜しとても二無き寶を失ひしと謂ふにあらず。時經たば昔に復る髮の毛に。恁く執着の涙灑ぐを。さぞや物々しと思召のほども苦しけれど。われらが額髮は天女の翼。かくては明日より舞臺の勤克はず。何とか爲べき。敎へたまへと。それのみの心細さに搔口說けば。愁眉の柳重きに堪へずして悲雨亂落つる頻なり。古岡は漸く思案して一々の理。我等も日本帝國の紳士なり。必ず疎には計ふまじ。然れど謂はゞ双方の災難。舞臺を退きて髮生ふまでの手宛はなり難ければ。鬘なりと被て勤めよ。其料拂ふにて堪忍せよかしと。事を分けて賴みけるに。女も心善きものなりけむ。表立てなば多分の仕合あるべきに。泣く〳〵承引きたりければ。勤の外に鬘代二百フランを即座に取らせて。愁傷の姿見るに忍びず迯歸れば。ホテルに待侘びたる人々口を揃へて。御方はと問ふ。こは心得ず。彼處を飛んで出られしより。彼是捫擇に二時間は暇取りしに。今に御歸來のあらざるはと。小首を捻るを人々は承知せず。御身をと見立てられし案内が大事の君を見失ひ參らせ。ぬけ〳〵と獨り歸る方やある。尋ね參らせて御供せぬ内は夜明くるとも此内には入れじと責むる　それに無理はあ

らねど。此方にはそれに勝したる道理あり。それを言はゞ御方の恥辱。言けねば此方の落度となれど。情は人の爲ならずと罪を身に被て。御行方これより尋ねに。情々門の出合頭。こちは古岡。如何にせし。樣子は何とちや聞かせよ。慌てゝ飛出せしが道を失ひ。あれより今までの難儀。其方の迷惑は又格別。然ぞ取られたであらうのと。故郷の色には絲目を付けぬ。濶達豪放の御氣も。さすがに傷むは。勝手知らぬ文明國の萬の大袈裟にぞありける。漸く談じて償代二百フランと申せば。天を仰ぎて笑はせ給ひ。後々までを仇名を又行くの大臣とは。此時の御言に。翌ン晩又行くど。

正月八景

（二十八年十月）

夜雨

淑氣先づ回りて曙光未だ放たず、屋簷參差樹影依稀たり、誰家の美人か海棠睡り未だ足らず、曉起霜を踏みつゝ井の下に立つ、轆轤聲ありて、桶に盈つるの若水、琳々として玉を碎くが如し、何ぞ枕頭夜雨の響に似たるや。

晴嵐

春の光と共に長閑なるは、娘の遣羽子の遊びなり。双子の新衣にメレンス友禪の帶したるが、町巷の軒に飛ばす影にも、麗なる景色の見えて嬉し。門飾りに日本めでたき松立てゝ、鮮かなる日の丸の下、振り袖の十五を頭にして、一人來な二人來な、四人ばかりが興酣なる折しも、羽子は逸れて夕日陰き軒端に落ちぬ。春風無情紅顰み綠泣く。

歸帆

飛龍天に在り旭旗空に舞ふ、勇ましの凧の姿は、嬉々たる兒童の手に依りて畫かれぬ。春風一絲、紫陌の色を搖かして、太郎は大に誇り、次郎は高きを爭ふ。若し夫れ擧香千里白帆空を行くの處、情景多趣、風引の聲は欸乃なるか。

秋月

楪葉は片々の雲、橙實を明星の光として、輪飾の輪の秋の月にも似たるかな。何に由く飾りわら春の門田の稻葉かな、穰々として美はしき瑞穗の秋に縁めるやも貴し。

暮雪

主人詐つて旅行と稱し、書齋の奥深く屠蘇の香に眠る、門砌清く掃うて玄關に蒔繪の盆靜かなり。車轔々走つて門前に止まるものは同僚の紳士にして、歩遲々來つて躊躇するものはお出入の小身なり。皆一樣に名刺を懐に探り盆に投じて去る。中に狡奴あり異なる所のもの數葉を投じ、首を縮め舌を吐き倉皇顧みずして走る。我其何の故たるを知らず、暮るゝ比ひ主人宿に出てゝ盆を檢すれば、白皚々として堆を爲す、莞爾として笑つて曰く、我德何ぞ恁の如く大なる。

晩鐘

銅頭鐵額眼光電の如し、凛々たる其貌何ぞ雄なる。鑠々たる其脊何ぞ豪なる。一たび吼ゆれば天地震ひ、一たび起てば百獸懾く、妖を防ぎ邪を除く、威德並び具はるもの、吾實に獅子汝に於て之を見る。而して市井の兒、汝の德を假りて汝の形を舞はし、傀頭躍身歌ふ踊み節を趁ふこと妓女の如く、然り、吾恐る汝の心に在らざらんことを。依患行き過くして舞態漸く倦む處、露次日暮れ裏町風寒し、時に笛に和して太鼓の鼕々を聞く、蓋し春の哀聲なり。

落雁

健脚韋馱天の如く、新調の法被股引車背よりも黑し。長安の大道輪々として走り、周王の王荷燕々として鳴る。嗚は靭た超えて隨ひ、足は錢に依つて疾し。試に車後より之を見れば黑鴨仕立の足並、暮雲新雁の秋に横る的。

夕照

賑はしき聲も、庭の築山より暮れ初むれば、奥の八疊には銀燭限なく輝きて、娘子供の骨牌遊び、花の讀みのいつ果つべくとも覺えず。勝ちたるは蜜柑煎餅の戰利品山の如く、負けたるは滿面の負傷墨痕淋漓たり。誰か三章を約しけん、昨夜迎へし花嫁の「王女技」に負けて、燒芋のお使と、窓に照添ふ夕日の景色も長閑なり。

風づくし

家の風

門並べく譯にもあらず、たうとくも由々しき風なり。故に三十一文字にも詠みて、エヘン、久方の月の桂を折るばかり家の風をも吹せてし哉、と拾遺に出て居るほどなり、今俗に家風といふ。嫁げる女はとかく此風にあふを苦とす、然らざれば忽ち離縁になる憂あり、又御家風とも云ふ、上つ方を吹く風にて甚だ仰嚴なるものなり。

松の風

あゝでもない、と四十年、濤の懸るより音も無く、と、こゝに、それ、身上の、譜を聞かせるところなり。又松風とも云へば口ざむしき折には煎餅と聞え、喉が乾けば茶の音かと過たるゝを、さすがに時の面目、宣旨の御使をも受くるほどの仲國なれば、想夫憐なるぞ嬉しきと尋ねあてたるものなり。

秋の風

又秋風とも。古扇より立つもあり、金氣肅殺の懐より動くもあり、茶屋場の愛想盡しより起るもありて、方円は定らざれど、大方は増す花の開くを季として吹くなり。此風怒り爆ければ、いづれ後には血腥くなると云ふ。一說に此風の鋭きこと剃刀の刃に異らず、一夜にして美女の黒髪を削りしと。事は平家物語に出でたり云々。

歸り風

此風は必ず立つといふが習なり、歸ることをお立ちと云ふも立たずには歸られぬ故か。語の出處は大概其邊なるべし。是が吹出しては矢も楯も耐らぬとなり。時は春夏秋冬を論ぜず、向は東西南北を別たず、家の外とあれば何處にも吹くを常とす。諸事口傳抄に春雁の羽風を云ふとあれど、變なるに似たり。地方歸省臺の報告に據れば、一瞬間にして九萬里の遠きに達すとあれば、汽車も電信も之に較れば蟻の側を歸る如きものなるべし。然れば口傳抄に春風といふは風の謬歟。

はやり風

恐るべき者風にて、之に當る者は忽ち倒れ、一人僵るゝ者あれば、一家内立どころに犯ひて苦悩し、一家内挟へば數日を出でずして一町内患者ならざるなし、此の不思議有るも理にて、世間息災の爲に醫者不繁昌を極むれば、四百四病の病魔王を强慾秘密の心中に勸請して、食ふや食はずの丹精を抽で、藥瓶を叩き立て、青息を噴いて此風を祈るなりとぞ。故に醫家にては之を、ふくの神とて信仰する事なり。

どうした風

の吹廻しと續けて用ゐる。風の道神を吹く風にて、思も寄らず氣紛れたやうに出る風を云ふ。異名を一別以來、淡葉以來と云ふは古風なり。秋風の中に交りて吹けば色を含むと知るべし。大方は喜ばるれど、出て來ずともと氣障がるゝ折もあり。

赤い風

專ら冬の夜吹くなり、此風吹けば江戸の花開く。阿蘭陀語にニーデヤントクルと云ふ。

どうした風（再出）

吹廻しといふのゝ誤なりとの說あれども、强ち然にもあらず、輕薄なる語遣なれば、

用ゐざるを可とす。戀に用ゐれば怨言となる。
意外なる義なり。

太刀風

鋭きものなり。人に因りてはあしらひかぬるもあれど、勇士は背後より吹れにも關然と體を交すと云ふ。當世は滅多に吹く事無し。

お多福風

一時吹頻りて人を慴せし風なり。之に吹るれば頬面起りてお多福の面の如くなるゆゑ此名あり。醫者の祈る風なり。

戀風

御存じのゾッと身に浸む奴なり。巫山の雲を迯り、楚臺の雨を催す。

警八風

警視廳令第八號の略なり。之を風といふは閑の隙を潰るゆゑとぞ。あす有りとおもふ心の仇櫻、など丶女將のそ丶のかし。

空吹く風

意見山の麓に吹く。漢土に馬耳風と呼ぶ。細き煙緖となりて此風の中を旅行する事あり。此風吹く時は世間の親たちの頭痛となる。時雨て雨となりては、家の潰る丶嵐となる。

そよとの風

無しといふの丶覆詞なり。

わるい風

これは天氣の挨拶に用ゐる。老實な人は向兩隣へも水を撒く。

臆病風

木の葉の如く大勢逍ぐる時吹くなり。之に誘はるれば必ず落足になる。褌を緊と締るを奇驗とす。

谷風

仙臺より吹來りし風也。一名を「□□□」（缺字）と云ふ。至って力強く。之に觸るれば皆倒されしとぞ。

天津風

十八年目に吹けば、裾野を騒し、血の雨を降す。五節の舞姫を見て僧正の祈りし風なり。

むべ山風

此風吹けば種々波動と座中對る丶騒にて。手は傷き、歯は裂け、燭臺を仆し、悲鳴を揚げ、いや、然し僕は眠で好うございます。

松の風（再出）

あ丶でもないと四疊半、湯の沸るより音もなく、と、こ丶が攻上の謡いところだなど丶、あれ聞かしやんせ。

秋風（再出）

古屋に立つなり。それぢや、おめえ済むめえがな。と後はいつれ血腥くなるもあるべし。

神風

伊勢の國より吹出して、日本國中到らぬ隈もなし。願くは碧血をして日本刀に衄らさしめざりしをと。山陽は勤王家さ。

南風

女護島に吹くは奇特あり。内地にては鰯の眼病となる。

鼻風

此風に限りて吹くと云はず引くと云ふは、越後訛のフたつと云ふべきをヒたつと云ふ類か。何處からか氷柱の下るには□（不明るの外無し。此風病の根となること有り。恐るべし、愼むべし。

隙泄る風

浮名を吹散す風なり。常は襟許に浸みて甚だ寒し。

言語屋（言利借りたる家に出入しりて諸口の言葉を預りて口錢を取る。實は甘省の異述なり。）

書　翰

小栗半左衛門氏へ（二十八年十月五日）

御遣しの爲換本日到着致候早速磯夫氏へも申渡し候御家内に御不幸有之候段御愁傷察入候その際とも存ぜずよからぬ事共御聞きに入れ今更恐縮の至に不堪候御書面にて御思召の程も相わかり候へば今は何も申すべき事も無之候へども夫に付ては向後の事少々申入候磯夫氏と當方ものゝ關係うまく取扱はざる時は反對に出て言ふ事を聞かぬたちなれば大方は大目に見てかれの爲すまゝにまかせおく方かへりてよろしかるべく今迄は知らず今後は小生預りきつと監督致し候へばいかなる我儘も出來ることにはあらず[illegible]以來はまことに眞面目に勉強致し居候故一人前になる迄の身の上は何卒小生の心に御任せなされたく必ず〳〵惡きやうには計らひ申間敷候三年の内にはきつと一人前の人間に相成小栗家の面目にもなるやうに相致し申可候間御安心相成度彼も今修行半にて歸國などの念は少しも無き折なれば無理に歸國を強ふるは甚だよろしからぬ事に有之候出京致居候とて御迷惑の掛（此度の病氣は格別）るにもあらねば今少しの間勉強させるが當人の爲に有之彼も年若にて了簡定らずとはいへ親たちの見るほど子供にてはござなく屹としたる精神有之その覺悟は親たりとも左右することかなはぬわけのものなれば御手許に置きておさへつけたりともかへつて其効無きのみかふてらして放埒無慚の人間にならむとも限らねば當分は捨てた氣にて小生にお預け被下度と申す仔細は彼も近來隨分上達致し末頼もしき見込もつき候ゆゑまことに今田舍へやるは殘念にてどうか一本立に仕立てゝ見たきものと思ひ候。右の如く小生にまかせよとてどこまでも親は親なれば子にするだけの事はして下さらずば他人にて世話する私が迷惑致し候へば彼の身の上につき私より申出候事は何とか御心配有之やう今後の所を願ひ候くはしくは後便にて　早々不悉

十月五日　　尾崎

小栗様

小栗風葉氏へ（三十三年十一月廿八日夜）

然者去二十六日目出度婚式被濟候趣大慶の至に存候右樣の大事を通知被致候にははがきを用ゐる事不可然たとひ短文のものなりとも封書を用ゐ丁寧の意を可致今後に注意有之度候

扨改めて申候迄はなけれど今迄とは違ひ候身の上に候へば尤も品行を大事に家庭の事無きやう留意肝要に候酒狂は固よりの儀に候へども其他交友の間目下に臨む上長上に對する心得等より一切世間に處して其名を惜ましめ

ざる心掛則ち文學者としての品位を保ち人間としての道を立つる事朝夕念頭に放たず精勵可有やう希望に不堪候

世間には妻持ちて老る人有之候　さるは尤も嘲ふべく又恥づべきの極に候へども餘り略度に失して眼中に家無きやうの振舞有るも亦一對の愚たるべく青年の活氣を有し老成の了簡を持候事身上持の第一條に候　世間に名を成し人々に敬るには身持と心持とが大事に候へば此點は十分御考可被成青年時代のわるさも今が年貢のをさめ時にて向後を謹み面目を一新し人を率る器量を揚げ候やう懇々賴入候　申度事數々候へども來月より小說を書かねばならず候に四五日來長女熱病にて醫者三人迄立合ひ候始末家内と二人にて晝夜の看護心中亂れ居り候ゆゑ餘は略し候　只今も其枕許にて筆執り認め申候　午前二時半

人の祝儀可申入節に苦言を聞かせ候は甚だ無遠慮のやうに候へども區々たる婆心の止み難くて此に及び候のもなれば別して深く御聽取被下度又來月に入候はゞ可成用事を早々片附け早々歸京可有いろ／＼話も有り此際又々遊びほゝけて失錯あらざらんやう用心被成度

子ども目覺し候へばこゝに筆止め申候　早々

二十八日夜　　　　　德太郎

磯夫殿

杉野亰莉氏へ（三十五年十二月廿一日）

先頃は御書面被下難有早速御返事可差出の處新聞の撰句が有る人の送別が續く文藝界が出る芝居を見る鄙邊に不幸が有る晩鐘會が有る奉額の事が有るなどにて連日忙殺せられ葉書一枚書くも物憂くて今日迄は無沙汰に打過ぎ何とも申譯無之候　扨先頃中は泉柳川の兩生一方ならぬ御世話に相成候趣　兩生より段々噂樣承り實に御懇情の次第驚入候御兩家の御夫婦協心戮力の御歡迎に預りかゝる事又世に有るまじくと彼等の感荷は非常にて今だに參り候節は當時の物語致居候　さては小生に於ても面目を施し候事一方ならず遠い親類より近い他人と申候諺有るにこの遠い他人なる御方にかやうの御深切を受け候事いかなる宿世の因緣にやとひそかに打怪まるゝばかりに御座候

かの兩名は御覽の如く書生あがりの粗才わがまゝ者に候へば定めて無禮の廉も多かりけんと存候へども猶末長く御交り被下候やう偏に願上候

昨日思案子來訪の際鏡花來合せ例の物語に相成候處入道殿いたく打驚きたまひそは由々しきもてなしかな先生出馬ありとてもいかでその上の歡待や候べき兩家の奮發想ふべしと舌を卷き居られ候　御禮と申すもをこの至なれど鏡花寒窓を捧り候て何か龜品を呈し聊か微意を表し度由申來り候に付御珍しうは無之候へども淺草海苔一箱差出し候間御風味被下度候　猶昨年中御惠贈被下候一閑張湯呑は今度滿枝を勸め候米坡の樂屋づかひとして取らせ候處大悅喜にて人々に示しながら貫一の一諾を得たる想（だかどうだか）にて翌日より舞臺の半衿に同じ模樣付け

たるを賜るなど大愛に御座候折角御心に掛けられ候物を他に遣し候は御好意に悖るに似たれど貫一のすげなきを慰むる料にも相成候事故御容し被下度候

本年は降雪少き上にはや何をも過ぎ候事なれば海苔の味よろしからず極薄手のを撰び候へども今は皆肉厚く相成り味劣り残念に御座候へども日々三枚を缺かざる海苔好の小生故人さまも好きならんと存じわざ／＼室町迄[illegible]を遣し烈風中に求めさせ候ものなれば其志を御味ひ被下度候

金色夜叉續々の稿は四月一日より紙上に掲載の事に相成候が本年は大いに筆を揮ひ候覺悟にて文界も大分色めきて候模様有之候へば此際一奮發致し候心願にて先頃染五郎に會ひ候處青年の優人たちも近來感ずる所有りて新作を演じ度存念の由申居候に付候本座にて文學的の物をそろ／＼演じ候事に相成可申小生も書物を一つ書いて見[illegible]是は[illegible]郎[illegible]可申

と存候

其後胃部の御模様如何や御全癒のやうに承知致し珍重の義に存候小生も變りたる事は無けれど風丰老いたりと人々に申され候は兩三年の胃患の故にやと存候いかにも筆取るが懶く候て困入候へども前陳の如く本年は勇を鼓して机に臨み一面には養生法を講じ可申用意致居候へども夜を更し候と食事の不規則運動の不足等は一朝にして改善難致身上の都合とも可申か思うて此に到れば捨つべきものは弓矢なりけりの感無くんばあらず候然し本年は何か見るべき物一作致すべく候間御覽被下度候昨日より四男夏彦インフリユエンザの氣味にて臥り申候新聞俳句明日の原稿無之大いそぎにて披閲致し唯今二時半の深夜ノ、に御座候之よりもう四五千句見んとて只今申入の茶を喫し[illegible]棒をかじりロオヤルメイルをふかして此文認め申候室内の寒暖計華氏四十九度大分あたゝかに相成申候へども餘寒不測の折から御家内の御衛生大事に存候令閨にも宜しく御傳へ被下度和達家にも御傳聲頼入候

草々不盡

尾崎德

二月廿日夜

杉野[illegible]兒

座下

病骨録

退院前五日

上

三月十日

入院後は日として[illegible]より來訪者の跡を絶つと云ふ事なかりしに、此日の午前に限つては、一客も來さりしゆゑ、予は心靜に讀書した。午後二時頃であつた、興を[illegible]めて、書を拋らんとする時、[illegible]の主の[illegible]を聞いてから、上燈の比までに入替り立替り十二客が相踵いだ。曰く霞亭君、曰く文鏡君、曰く瀬沼君、曰く田村君、曰く風葉生、曰く春陽堂、曰く鏡花生、曰く春葉生、曰く柳村君夫妻、曰く岡田君、夜に入りて、紅汀生。見舞の品々は、曰く蕉實支那蜜柑、曰く理久せんべい、曰く味附海苔、曰くエーフワア、曰く鷄卵。

今朝の體重は四四一〇〇グラム（十一貫七百三十目六分）一昨日よりは、幾分か減じたるにも關らず、食氣もあり、納れた物も收り、又頗る元氣も有つたから、極て快活に應對し、能く十客に接して、毫も疲るゝ所は無かつたのである。

此の客間の中に、入澤博士の回診が有つたのが四時半。

最後に見えたのが岡田虚心君、其前が上田柳村君夫妻で、白鉢に菫の咲初めたのを贈られた。晩に來た紅汀生は、紫雲英と菫との寄花を枕上の花筒に挿して行つた。虚心君の還られた後、食前卅分に用ゐる散薬を服して、直に晩餐の膳立を始めた。

先づミルク一合を沸煮して、少量の砂糖を投じ、之を茶碗に移して其の土鍋で玉子の半熟三箇を作る。

是が出來ると、パンを截り、バタトオストを作るので、火の忙しいのも夥しいが、且飲み、且料り、且食ふのも、亦三面六臂の働である。

ミルクの煮え立つ折から、看護婦が來て、長澤氏の回診があると告げて、直に四下の狼藉を片附るので、予も食事を中止して待つほどに、學士は入來つた。

胸部背部の打診聽診を了へ、更に患部を按ずること例の如くあつて、診後二三の閑話を交ふるを常とする其の口吻を以て、氏は此病に就いて如何に自身に於て思つて居るかと問はるゝ、此問たるや、實に今日の午後風葉、鏡花に向つて、予の説く所の者であつた。

彼等は予の最も慣れざる病院生活の孤寂に堪へざるべきを思ひて、幾ど隔日に來訪ふ。予は其意を諒とするのではあるが、有樣を云へば、來訪者の頻繁に慣さるゝの際、寧ろ其煩に堪へぬのであつたから、予は決して無聊には苦まぬ。願くは、今少し靜思し、讀書し、散歩する暇を欲するのであるから、明日からは決して見舞うてくれるには及ばぬ、勝手の時には呼ぶから、然したら何は措いても來てくれるやうに、と言渡したのであるが、要するに、彼等は予が平生の神經質を知るのであるから、孤寂の餘に病を案じ過して、如何ばかり憂悶して居るであらう、と其を察して、如此く慰問に來るのであつた。

上の二

予は憂悶すべきである。抑も此の病疾は、始に輕ぜし如きものではなくつて、目下研究中の

ドクトルは未だ何等の診斷をも下さぬけれど、左に右にも、胃腑に或種の瘤腫を發し、又其の病勢が近來卒に増進の歩を取りつゝあるのは、今は疑ふべからざる事實として、予の自らも認る所である。

胃の腫物！　而も其の病勢の増進！　誰か危み懼れざる者あらん。殊に其の平生事毎に杞憂を抱く人に在つては、必ず晝は愁ひ、夜は寢ねざるべきを思ひて、彼等は予の爲に感々安ぜざる者あるのであらう。

然るに如何なる故乎、予は入院後一たびも此事を念頭に懸けもせねば、夜は十時か十一時に寢て、一睡直に天明に至るのである。予は固より此病の輕症ならざるは自覺して居たものゝ、又決して之が爲に斃るゝ事は無いと自信して居た。

[illegible]、[illegible]一にも離れるやうな事が有つたら奈何か——それまで也、と單純に考へたばかりで、其以上には思及さぬのであつた。

昨年の四月末に、此の幽門部の硬結を發見して、長與ドクトルの診を請ひて、首を傾げられし時、予は幾度も此病に就いて懼れも感ひもして、其の夜の[illegible]を重ねた事も有つた、其後病[illegible]の命ずる[illegible]に、[illegible]たる胃壁の[illegible]なんどに過ぎざるべきをと獨合點して、攝生も弛み、所に寒氣が來て、病勢の頓に増した爲に、入澤博士の再診を經て、病症を判定するの目的を以て、入院の勸告を受けて今日あるを致したのである。

予は寧ろ其の重症に進みつゝある今日よりは、長與ドクトルの診察後に於て多く心を傷め、思をも勞したので、服藥、養生、節食、靜養、運動、曰く何、曰く何と、養生大不得意の予をして、命一つぐらゐの爲に恁くまで意思を拘束さるゝよりは、デキルの望むに任せて、この一命の如きは拋ち去らんと思ふ迄に、殆ど一年間苦められた。之が爲に予は自ら病苦に慣れ、病感に慣れ、病愁に慣れたのである。

如此く予は半信半疑の間に、稍一ケ年間懸けられて居たのである、此の「長く慣さるゝ」と云ふ事が無かつたならば、予の此度の憂悶は、其の憂悶のみにして一夜一千グラムの體重を削るも易からうと思ふ。幸に些の憂悶も無かりし爲に、單に消化不良に苦むに止つて居たのは、予の此上無き幸として、深く喜ぶ所である。

長澤氏に答ふるにも此の事を以てした。氏は又予の爲に頗る之を慶ばれた。

知らず、氏は何の要有つて今此事を問はるゝのであらう。此例の閑話に過ぎぬのである乎。予は無論然うと考へた。

上の三

然るに、長澤氏は態度を改めて、此の病症の宣告が如何に與へらるゝ乎は、未だ試驗中の事ゆゑ知り難いが、若し其が悲むべき者であると爲るならば、足下の豫期せらるゝ處置は如何にとの質問。

萬一手術を要するとならば、（要せざれば論無し）一先退院して、空氣の清く、境の幽靜なる邊に轉地して、爲し得る限り保攝療養して、とにもかくにも暫く病と闘つて、愈よ破るゝと見て後、更に痛處に一刀を請はんの覺悟と答へた。

人は女々しくも、姑息にも思ふであらうが、予は一家六口の主宰者であつて、予が命は予が命にして、而も予が命にあらず。若し手術效を奏せずして、そのまゝ殪るゝならば、予の殪るゝにあらずして、予が妻と四人の子と老祖父と、猶算し來らば、兩三の僕も併せて殪るゝ者有るのである。此等の事實上予に殉せざるべからさる者に一言の謝るなくして、自ら殪れ、彼等を殪すは、情として忍びざる所、又自とても

決して惜からぬ命にもあらねば、さすがに臆を剖くの危きを思へば、余命を存して、天佑を徼幸するも苟も安きに就かんことを冀ふのであつた。此故に予の決心は一たび病と闘はんと云ふのである

なれども、醫師としての長澤氏は、予に同情を表せぬのであつた。否、寧ろ予が目前的分別を憐ばぬらしい氣色で、

言はるゝ所は尤もであるが、それは畢竟兒女の情で、捨置けば病勢は募るばかり、今現に進みつゝあるのは、足下も能く自ら認められて居る。—で、募り募つた結果は殪るゝより外は無い。然らば、十分とは行かぬ迄も、七八分の活路ある手術を試みられぬと云ふ法は無い。重大の手術であるから、萬全を期する譯には行かぬ、或は不結果の爲に死期を速めらるる虞は無いと限らぬ。故に死を賭して手術臺に上る覺悟を持たれたい。けれども、突然として死の到るを待つ愚に勝ることは幾等であらう。醫術の進歩した今日ではあり、又いざと云ふ日には、十分精査の上、出來る限り愼重に施術するのであるから、不時の殃はとにかく、人爲としては、一の失措なく盡すのである。此の微弱なる力の前に、覺悟と信頼とを以て横るの御決心は有りたい。足下の爲に計るに之より道は無いのである。

然し、未だ其と斷定された運命でもなし、殊に病氣に就て此度多惑的でないといふ事は、實に可喜しい事で、目下の急務は、體力保養の一點である。施術するにしても、第一に體力の强からんことを欲するのであれば、どの道攝生して營養を盛にする必要が有る。近來食氣の有ると云ふのは、何より重疊であれば、出來るだけ滋養を取らるゝやうに努められたい。肉類も然う不消化では困るが、消化し能ふ限は用ゐらるゝが宜い。葡萄酒の薄いのなども、少許は用ゐらるべし。どうぞお大事に、と氏はアデュウを告げて去つた。

時は八時半過る頃、予は直ちに火鉢の前に坐つて、彼の牛乳を作らんと、火を吹いた。

下

噫予は死の宣告を受けたのではあるまい乎！切開を遁れば、病の爲に早晩殪れねばあらぬ、進んで手術臺上に身を置けば、命を賭さねばあらぬのである。氏は病名を告げず、猶試驗中であると云はれたが、予の胃部の隆起は、切開乃至切除を要すべき一種の腫物たるや疑無い。それは何等の疼痛をも感ぜず、唯消化が障げ、を作すのみである爲に、自身は然して重くも考へて居らぬけれども、其實決して輕からぬ者なのであらう。

此の病に就ては、其の平生に似ず多惑的でないと揚言した一分時間の後の予は、今其の胸裏に波の涌くが如き多惑を禁ぜざるのである。

予は茫然として、冷めて味の無い一合のミルクを啜つた。啜りつゝ思に沈むのであつた。土鍋の湯は沸いて、四個の雞子を投じたのは覺えて居たが、何分を經たか記憶するのを忘れた。四分間を適度とするのであるが、五分以上を經たと思はるゝので、蓋を切つて見ると、湯は沸騰して居らぬので、又少し措いて、取出した。

殻を裂いて見れば、蛋白は人肌の如く固つて、蛋黄は金柑のやうに成つて了つて居る。再び作る力も抜けて、其の柔かさうな處を抉り食つて、大半は棄てゝ了つた。

三片のパンはバタ　トオストにする積で、バタを布いては炙り、炙つては布きするのであるが、大方は是も焦して了つた。

食氣の有るにも關らず、劣い〳〵晩餐を了へたのは、九時少し前。看護婦は入つて來て、予を慰めんとした。

儻し是が予の平生を識れる者であつたら、孤燈の下に悄然と獨り坐して、冷きミルクと二片のパンとの前に死の宣告を受けたる己の、如何に慘たる者の様なるかを思ひて、一掬の涙を灑がずんば止むまい。

予は左にも右にも決心を爲ねば成らぬのである。其の決心を得んが爲に、予は燈下に首を俛れて居る。若し一たび決心せん乎、人は又相應の勇氣を得るのである。

予は今決心に進むのである。此の瞬間の如く人の一弱き一時は有るまい。白壁に映へる影も、必ず薄く微に、憐むべき者であつたらう。看護婦は忙々しく膳の取散せるを片附けて、出て行つた。

予は何の言を以て之を家人に告げん！

予は旋て覺束なくも決心を得た。

此の決心は、或は家人の決心、又は友人の勸告の爲に移さるゝ事が有る予知れぬが、予が今の決心なる決心を得た。而して始て魂の搖ぐを止め得るのであつた。如此にして、死の宣告を受けざる前の安穩なる神氣に囘るを得たのである。

然るに、今夜を如何にして過さん乎の疑問は、直に胸を衝いて起つた。死の宣告を受けたる其夜！ 多感ならざる人も決して眠り得ざるべき其夜を！

“The night, oh, night is a weariness to me! All lie down to sleep,
I too lie down, it is well with all of them, but I lie as in my grave.”

予が胸は卒に轟いた。

予は時として、或事に就いて甚しい杞憂を抱く癖が有つて、其が爲に寐ぬ夜が幾許も有る。予が三盃上戸にも關らず、ウヰスキーを飲み、ブランディを飲み、其他の烈酒を銜んで日本酒家を驚かせし習慣は、蓋し其夜を眠らん爲に養ひ得たので、又其が爲に甚しく胃を害しも爲たのである。

予は件の決心の力を以て、今夜は寐なんと思はざるにあらねど、又有繋に不安の念は一面に鼓動して、已まぬ、醫の許したを幸に、今夜は葡萄酒の醉を籍る必要有りと信じたので、折から寒からず、朧めかしき薄月を窓より望みて、散歩がてら本郷通迄それを買ひに行かんと、忽ち起つてドアの外に出た。

看護婦に斷り置くべきであるが、そこらに見當らぬので、直に歸るものと玄關を出た。

花時はいかばかり遠しからんと思遣らるゝ櫻林の、高き梢の上に方つて、薄雲に掠めらるる月影を仰ぎながら、やゝ春めかしい夜風に吹れて、雪駄ちやら／＼と出た時は、孤燈の下の愁思は忽ち銷して、一句有りたいなどゝ暢氣に構内の運動場側まで來ると、後から人の追來る氣勢がしたと思ふと、何やら聲を掛けた。

わが事かと見返れば、白衣の影の走り來るのである。

「尾崎さん、あなた那裏へ被行るので御座います。」

櫻井看護婦は息を切つて近いた。

「いや、貴方でしたか、葡萄酒を買ひに。」

「あゝ、そんなら宜うございますが、又貴方那裏へか被入しつて了つて、今夜お歸りが無いのではないかと思ひまして。」

彼は死の宣告を受けたりし予の、何地にか其死を遁れんとするにあらずやとの疑を以て、予を追ひ來たのであるらしい。

天下何處にか斯死を遁れん！

「直に歸りますよ。」

「十時の門限で御座いますから、それまでには。」

「買物すれば直に歸るのです。」

「はあ、そんなら行つていらつしやいまし。」

又案々と、薄月の下に白衣の裾を飜して引返した。
元富士町の門を出る頃、小腹に微痛を感じたが、堪へかぬる底の者ではなかつた。郵便局に入つて、然る方に病況を報ずる一通を投じた。
此狀は今日の午前に認めた者で、中に記す所は、病症の決して憂ふるに足らざるのであるから、數日の後には一先退院して、其後轉地療養をすると云ふのである。今と成つては僞の言分であるが、今日の午前には實に其通りに信じて居たのである。それが出し後れて居た爲に、如此き虛僞の報知をせねばならぬ事に成つた。實は其も快からぬゆゑ、書改めやうとも思つたけれど、此身を案ずる方に不祥の事を聞かせるのも氣の毒なり、一日なりと安慰を與ふるが其の好意に對する報酬とも考へたので、颯と投じて去つた。
本鄕の四辻に出て、右へ曲つて、青木堂の店に入つた。サンテステフと云ふのを擇んで、其の一瓶を買つて、直に出た。
小腹は仍微痛を續けて居るのである。古本の店の前に立つて眴すと、素丸の句集が寫本で出て居た。
買つて見やうかとも思つたが、讀む書物は有るものを、と、立去らんとして見ると、予より先に居た大學生が洞房語園の直を附けて居た。
警察署を曲ると、捲起る風にやゝ寒さを感じた。空も往よりは曇つて、灰色に成つた處處に黑い斷雲が出て、月を蔽つて了つた。恰も是(Grey hopelessness covers my sky.)
玄關の燈は黯淡として見え初めた。死の門！ はや九時半も過ぎつらん、窓々のカアテンは皆垂れて、病室の燈火は外を照す力も無い。其の寂しい木の下路を過ぎて、予は死の門を入つた。一直線の長廊下を照すラムプは黯く點つて、雜使婦と看護婦との疲れつゝ往來ふ影が、其の薄くらがりを破つて動くのであつた。尤も明かなるは予の病室で、內に人の居るが如く火點りたる九號室！ 予は尤も燈の細きを忌むのであるから、眩きばかり常に點火する習である。病室の燈暗きに堪へらるゝものであらうか。予は纔に此の明なる燈火に邀へられて、戶のノッブを捻つた。室內の溫氣は氤氳として面を撲つた。枕上のチャブ臺に置いた菫の鉢に、看護婦が彼の剪綵花を挿したのが、眞の花と見紛ふやうに、其が先づ目に入つた。
予を雪駄の音に知れる看護婦は、二階のメエトルグラスを携へて、今宵寢前の尿と明朝睡起のとを試驗用にと要求した。彼が先に予を追ひしは、此事の有る爲であつた。
葡萄酒のコルクを拔かしめて、予は日記に着筆した。而して十一時を過る迄、殆ど手をも休めず今夜の顚末を書いたのである。
己が己の事を書きながら、此の筆の走る間は、予は全く愁を忘れて居た。
未だ睡氣は來らざれども、倦みたる爲に筆を止めて睡を試みんとして、まづ二盃の赤酒を擧げた。盃に觸れざるのは一日であつたらう。三千里外故人に逢へらんやうの想がした。三盃も四盃も五盃も吃し得らるやうに覺えたが、祟を恐れて二盃にして罷めた。同時に輕い醉が催して、何となく愉快を感ずるのである。
ベッドに上つたのは十一時半過。睡は待設けたやうには來ぬのである。良有つて看護婦は入つて來て。何も用は無いかと聞く。
彼等は十時に退くのが規定である。予の覺めて居る爲に退かで居たのであらうか。ベケットに水を求めた。何に爲るかと問ひ。醉うた故に頭を冷すと答へた、が、有樣は、寐られぬ故に冷すのであつた。

彼の愉快なる微醉は睡を呼ばずして、甚しく興奮を來した。其が幸にも愉快に興奮されたので、無論宥の宣告に就ての空想を逞くするのではあつたが、其の空想が徹頭徹尾悲觀的の者ではなくて、予は如何にして予の死を最も快く迎へん乎と計るのであつた。水を求めし看護婦は氷嚢を齎して、白布に裹んだのを鉢卷させて、辷り出た。それさへうろ覺であつたくらゐ、予は其の空想に耽つて居た。

頭は冷されたけれども、興奮はなか／＼息むのではない。

予は實に爰に書き列ぬるのを憚るほど、愚しい事にまで想到して、幾と聲を放たぬばかりに獨笑した。予は疑うた。自分は心痛の餘りに發狂したのではあるまいかと、然らざれば、此の危急の――人間の最大事たる死に面せざるべからざる如き場合に、人として決して如此く暢氣に在り得べきものではない。泣くべきに予は今笑ひ、憂ふべきに予は今勇むのである。彼の笑ふ怯者と泣ける勇士といふ語を想うた。予は狂者にあらざれば彼の怯者なる者乎。

予は確に自身の知覺を失うて居らぬのを認めた。然らば、怯者であるのであらう、恐くは其の儘であらう。予の此の場合に於て、如此く樂むが如き空想を抱く事の餘りに非人間的なるを想ふのである。自ら然う思ふほどに樂み且勇むのであつた。

怯者の幸なる哉。予は此夕如此く怯者たりし幸を祝して已まぬのである。

十二時過に夜番の看護婦が來て、予の氷嚢を撫して、一時過に再び來て氷を易ふべき旨を告げて去らんとして、ラムプの餘に明かなるを見て心を引入れんとした。予は多く引入れぬやうに注意した。

一時過に彼は來たのであらう。全く覺えなかつた。二時といふ頃に惷い氷嚢をかなぐり捨てゝ、起回つて喫煙した。三時、四時前まで夢とも現とも無く前の空想を續けて、而も何等の心を傷ましむる事も無く、寧ろ樂しく、死の前に爲すべき事を一々設計して、其の企圖の通り事々に成功するのを空想して、死の宣告に酬ゆるほどの他の滿足を得つゝ、眈むともなく睡り去つた。

六時！　看護婦は牀側に近いて、例の體溫器を予に差出した。予は爲に目覺めたが、脈搏、呼吸、體溫を檢する後、予は平生の如く何等の思ふ所も無く、春眠の饜かざるを再び貪りて、又うつら／＼と無何有の郷に入るのであつた。

看護婦は室内を掃除する氣勢、と思ひつゝ漸く目覺むれば、はや人も居ず、時計を取つて見れば七時を過ぎた。

室の眞中には、バケットに水を湛へて、予が朝々の冷水摩浴の支度は出來て居る。

又長く煙を噴いて白壁に映ずる春日の澹蕩たるを打囑りつゝ、予は全く好睡を得て、夜前の愁無き人に覺めたのである。

越えて三日、十四日の午前九時半、入澤博士は自ら來つて、其の斷症試驗の結果を告げ、而して去るに臨んで、

「私の誤診であることを希望するのです。」

著作年表

標題	掲載書目	發行起稿年月
*貝屏風	我樂多文庫 自第一號	一八年五月
*怒氣鉢卷	我樂多文庫 第八號	一九年五月
*娘博士	我樂多文庫 第十四號	二〇年一〇月
*Yes And No	我樂多文庫 第十四號附錄	二一年一月
風流京人形	我樂多文庫 自第一號至第十八號	二一年五月
紅子戲語	我樂多文庫 自第十號	二一年一〇月
二人比丘尼 色懺悔	新著百種 第一號	二二年一月
やまと昭君	文庫 自第十九號至第二十三號	二二年 三月起稿 七月脫稿
南無阿彌陀佛	前百花園	
同上	後紅葉叢書	二二年四月
風雅娘	新著百種 第三號 附錄	二二年五月
江戸水	文庫 自第二十四號至第二十六號	二二年七月
うかれ鳥	百千鳥 第一號	二二年九月
文盲手引草	文庫 自第二十六號	二二年九月
戀山賤	文庫第二十七號	二二年一〇月
關東五郎	小文學	二二年一一月
裸美人	讀賣新聞	二二年一一月
初時雨	小說群芳 第一	二二年一二月
紅懷紙	讀賣新聞	二二年一二月
飾海老	同	二三年一月
拈華微笑	國民之友 第六十九號 新年附錄	二三年一月
京鹿子、紅懷紙	小說群芳 第二	二三年二月
猿枕	讀賣新聞	二三年二月
新色懺悔	同	二三年二月
浮藏士	閨秀新誌、文庫	二三年三月
おぼろ舟	讀賣新聞	二三年三月
夏痩	同	二三年五月
わかれ蚊帳	江戸紫	二三年六月
戀の蛻	都の花（自第五十號至五十八號） 文藝俱樂部第三卷第三編	二三年七月脫稿
伽羅枕	讀賣新聞	二三年七月
文ながし	江戸紫	二三年一〇月
鬼桃太郎	幼年文學	二三年
此ぬし	新作十二番	二三年九月
紅鹿子		二三年一〇月
[illegible]東五郎[illegible]		
巴波川	江戸紫 新著百種號外	二三年一二月
新色懺悔	前 後 紅葉叢書 第一卷 第十編	二四年一月
[illegible]かれ[illegible]		
むき玉子	讀賣新聞	二四年一月
二十七夜 命の安賣	文學世界 第一	二四年三月

二人椋助	少年文學第二編	二四年三月
焼繼茶碗（袖時雨ト改ム）	讀賣新聞	二四年五月
二人女房	都の花（自第六十四號至第六十七號）太陽第三卷第十二號	二四年八月
伽羅枕	讀賣新聞	△二四年一〇月
二人女	同	△二五年二月
紙きぬた（[illegible]）	同	△二五年五月
夏小袖（[illegible]）	同	△二五年八月
三人妻（禁止）		△二五年一二月
三筋の髪	同	二六年一月
戀の病		二六年五月
侠黒兒	少年文學第十九編	二六年六月
男ごゝろ	讀賣新聞	△二六年三月 二六年十月起稿
袖時雨	同	△二七年一月
片響	同	二七年二月
心の闇	同	△二七年五月
西鶴全集上	帝國文庫第二十三編	二七年五月
冷熱		二七年五月起稿
西鶴全集下	帝國文庫第二十四編	二七年六月
隣の女	讀賣新聞	△二七年六月
草紅葉	小說百家選	二七年七月
裸美人	明治小說文庫第十五編	二七年八月
むらさき	讀賣新聞	二七年一月起稿
不言不語	同	二八年一月起稿
取舵	太陽第一卷第一號	二八年一月
なにがし	讀賣新聞	二八年四月
豫備兵	同	二八年
義血俠血	同	二八年
笛吹川	同	二八年五月
四の緒		二八年七月
名曲クレーツエロフ	國民之友（自第二三九號至第二七三號）	二八年八—一二月
鷹料理	四の緒	二八年
三箇條	同	二八年
青葡萄	讀賣・新聞	二八年九月
多情多恨	同	二九年二月起稿
浮木丸	同	△二九年九月
俳諧名家選		二九年一〇月
斷片	青年文	二九年
青葡萄		二九年一〇月
金色夜叉前編	讀賣新聞	三〇年一月
はじ包		三〇年一月
安知歇貌林	新小說第二年第一卷	三〇年一月
千箱の玉章	世界之日本第十一號	三〇年一月

金色夜叉後編	讀賣新聞	三〇年九月
銀	新小說第二年第九卷	三〇年九月
西洋娘氣質	春陽文庫第六編	三〇年四月起稿
手引の糸	新小說第三年第一卷	三一年一月
續金色夜叉	讀賣新聞	三一年一月
油柄杓	新小說	三一年五、六月
八重襷	讀賣新聞	三一年六月起稿
心中船	新小說第三年第九卷	三一年八月
新油柄杓	新小說自第三年第一〇卷	三一年一〇月・三二年八月
金色夜叉續々編	讀賣新聞	三二年一月
煙霞療養	同	三二年九月・三二年一一月
雲のゆくへ		三二年
讀賣百人一首		三三年一月
佐渡ぶり	新小說第五年第一、二卷	三三年一、二月
東西短慮の刄	讀賣新聞	三三年一月
寒牡丹	同	三三年一月起稿
月下の決鬪	同	三三年一月
續佐渡ぶり	新小說第五年	三三年五、六、七月
茶椀割	新小說臨時增刊第五年第六卷春雷	三三年五月
月下園	夏模樣	三三年六月
作書類題句集	俳文第二十一、第二十二編	三三年一一、一二月
仇浪		三四年六月

偽金	新小說第七年第一卷	三五年一月
和蘭陀芹	太陽第四卷第二號	三五年一月
をさな心	新小說第七年第三號	三五年三月
ツルゲネフ小說	新小說第七年第三號	三五年三月
投書家	新小說第七年第四號	三五年四月
石	同	同
神の宴	同	同
鐵臭	同	同
火中の花	同	同
三女相行	同	同
をんな	同	三五年九月
アンナカレーニナ	文藝第一號	三五年九月
金色夜叉新續編	新小說自第八年第一卷	三六年一月
令夫人	花ころも	三六年一月
芝肴		三六年一月
西鶴文粋上卷		三六年二月
西鶴文粋中卷		三六年五月
娘節用	名著之文庫第四卷	三六年五月
非常報知	新小說第八年第七號	三六年六月
月と人	新小說第八年第九號	三六年八月
俳諧新潮		三六年九月
寫眞帖	新小說第八年第十一號	三六年一〇月

草紅葉		三六年一一月
世間娘氣質	名家之文章一五	三六年一一月
病骨錄		三七年三月
蕉門十哲句選		三七年一〇月
續新潮		三八年一月
西鶴文粹下卷		
紅葉書翰抄		三九年一月
和製ベンジャミン		
鐘樓守		
十千萬堂百句		
十千萬堂日錄		四一年一〇月
紅葉遺文		四三年一月
草分衣	二六新報	
犬枕	讀賣新聞	

*印は、同人回覽雜誌にのみ掲載せられ、未だ印刷公刊されたるものにあらず。

△印の年月に限り、單行本として發行せられし時を示すものとす。

昭和六年二月二十三日印刷
昭和六年二月二十八日發行

現代日本文學全集　第六篇



著者　尾崎紅葉

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ三

發兌
東京市芝區愛宕下町
四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)
一一二一番
一一二二番
一一二三番
一一二四番

株式會社秀英舍印刷

改造社